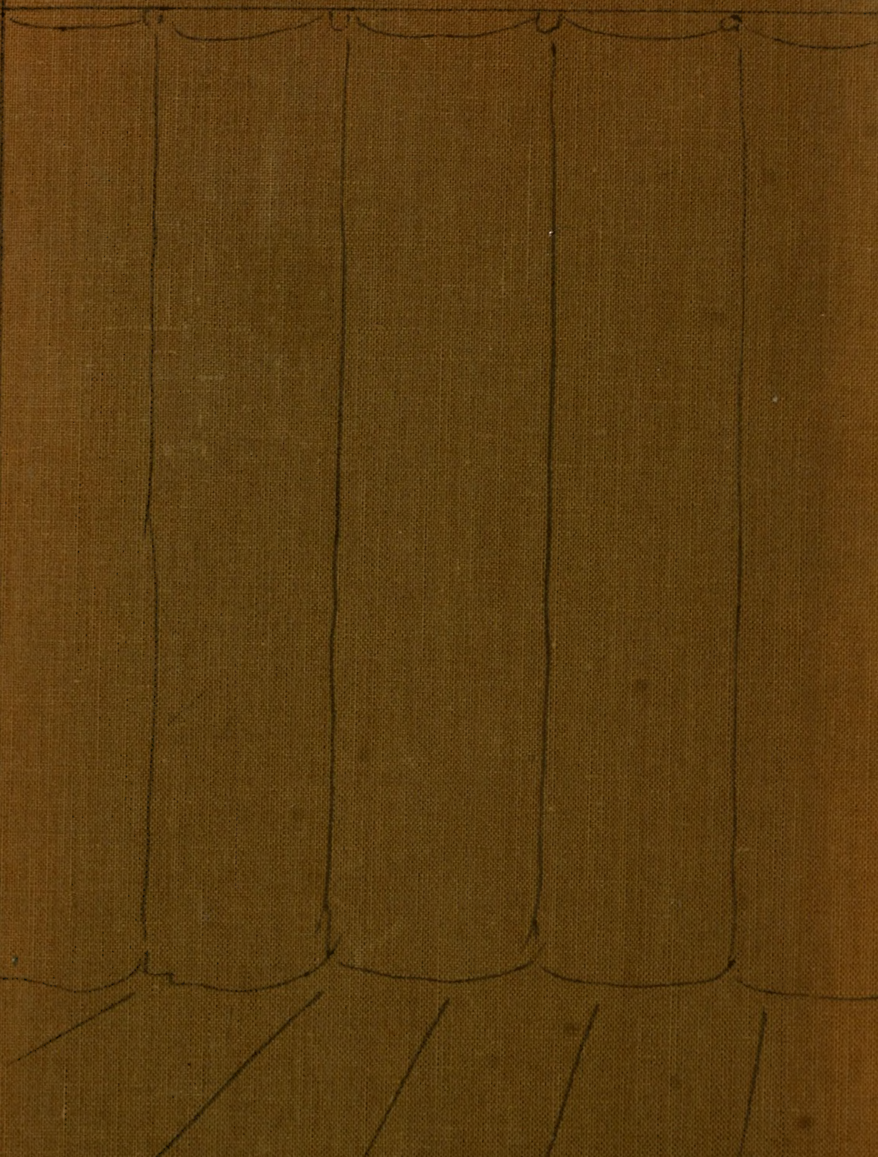


日本戯曲全集
第三十三巻

坪内逍遙

現代篇第一輯

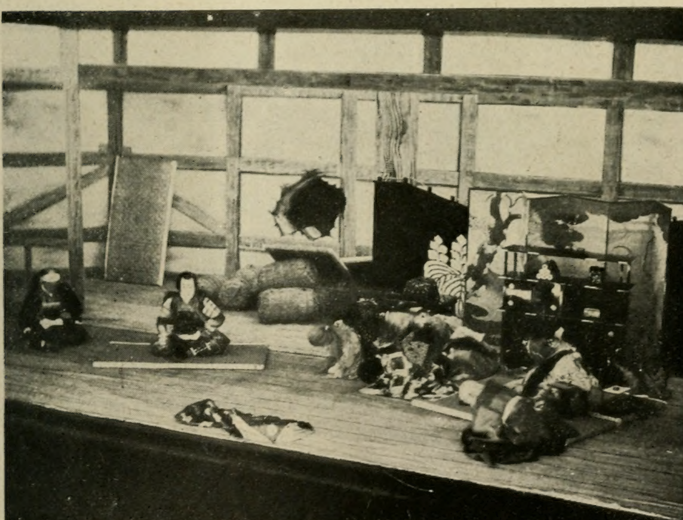
東京
春陽堂版



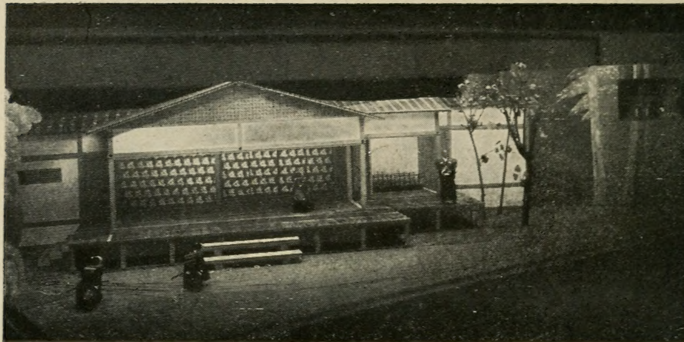
「沓手鳥孤城落月」片岡仁左衞門の片桐



「沓手鳥孤城落月」
淀君・中村歌右衛門
秀頼・市川羽左衛門



「沓手鳥孤城落月」舞臺面



「桐一葉」舞臺面



「桐一葉」舞臺面



「桐一葉」女馬士・中村福助



「桐一葉」中村福助の蜻蛉



「お夏狂亂」 尾上梅幸



「杉の方」中村歌右衛門・市川左團次



「杉の方」舞臺面



「役の行者」西ヶ谷・舞臺面



坪 内 逍 遙

日本戲曲全集　第三十三卷　目次

坪內逍遙篇

新曲浦島……二
新曲赫映姫……五一
鉢かつぎ姫……八九
俄仙人……九八
金毛狐……一〇三
一休禪師……一一七
お夏狂亂……一二一
初夢……一三〇

小袖物狂……一三八
寒山拾得……一四五
お七吉三……一四八
歌麿と北斎……一五〇
和歌の浦……一五五
墮天女……一五九
常闇……一七三
聖德太子と惡魔……一八五
桐一葉（六幕六場）……二〇九
沓手鳥孤城落月（三幕六場）……二五四
牧の方（五幕十三場）……三二七
名殘の星月夜（四幕十場）……三九九

義時の最後（三幕十場）……四五八
役の行者（三幕六場）……五三一
法難（五幕八場）……五八一
大いに笑ふ淀君（三場）……六三〇
靈驗（三幕三場）……六五〇
解說（伊達豐）……六八五

寫眞撮影及編輯（村岡欽亮）
裝幀（木村莊八）
表紙文字執筆（三村竹靑）
箱文字執筆（恩地孝四郎）

坪内逍遙篇

新曲浦島

凡例

一、詞章を分ちて曲と白との二となせり。

二、曲とは器楽に合せて謡ふものをいふ。曲に二大別を立てたり。幕外の曲は本筋に關係なし、前曲と名づけたるもの是れなり。幕内の曲は本曲なり、劇中人物の情懐を抒する詞なり。二者共に場合々々によりて曲節を殊にし、或ひは謡曲、一中、長唄等に、或ひは竹本、常磐津、清元等に、或ひは俚歌、流行歌等に准ずべきものとす。されども在來の格法に拘らふことなし。

三、曲の白に異なる點は概して激切なる情感を表する點にあり、然らざれば口に言ふ能はざる又は言ふまじき等の心中の苦悶、悲喜、瞑想等を暗示す場合又は深く感じて景を賞し、物を詠じ、事を敍する場合などに用ふ。

四、曲人は優人と全く別なり。優人は舞臺にて科白し、曲人は舞臺外に在りて演奏す。

五、曲に作ふ器楽は三絃を主とす。折々他の楽器を併用することあるも曲詞を聽分くるに妨げなき限りに於てす。合の手の長きものは此の格に拘らず。

六、白にも二大別あり、常の白と曲白となり。曲白は常の白と抑揚に多少の差あり。曲の白は白と曲との雜調とす。

七、本曲には之れに作ふ思入れと振とあり。白にも之れに應ずる思入れと科介とあり。曲中には優人は曲白を口にすることあるのみ、曲を自らすることは極めて稀れなりとす。

八、振は表情を主とし、拍子と風姿とを客とす。從來の如く比喩、形容の語義に泥みて聯絡なき物眞似をなし、無意義の嬌態を主とすることを忌む。滑稽の爲にするものは格別なり。

九、男性は男子をして、女性は女子（又は場合によりて、老女は老いたる男子をして、少女は二十歳前後の男子）をして扮せしむべきものとす。

十、舞臺及び觀者席の構造は特に新に工夫すべきものとす。

序之幕　澄の江の浦
中之幕　前　海底
中　海神殿
後　海底
詰之幕　前　網野神社境内
後　澄の江の浦

序之幕

澄の江の浦

前曲

幕あくと正面一ぱいに美麗なる織り物の垂幕を垂れ、其の前に曲人、樂人一同居並び居り、直に曲になる。

ウタヒ
〽寄せ返る神代ながらの浪の音、塵の世遠き調べかな。

大ザツマ
〽夫れ渤海の東幾億萬里に、際涯も知らぬ壑あるを、名づけて歸墟といふとかや。

八紘九野の水盡し、空に溢るゝ天の河、流れの限り注げども、無増無減と唐土の、至人が寓言今こゝに、見る目はるけき和田の原。

一中
〽北を望めば渺々と、水や空なる沖つ波、煙る碧りの蒼茫と
〽霞むを見れば三つ五つ、溶けて消えゆく片帆影。

長唄
〽それかあらぬか帆影にあらぬ、沖の鷗のむら／＼ぱっと

一中
〽立つ水煙り

長唄
〽寄せては返る

一中
〽浪がしら。其の八重潮のをちかたや、實

にも不老の神人の、棲むてふ三つの島根かも。

長唄
〽さて西岸は名にし負ふ、夕日が浦に秋寂びて、磯邊に寄するとゞろ浪。岩に砕けて裂けて散る、水の行くへの悠々と旦に洗ふ高麗の岸、夕陽も其處に夜の殿。

清元
〽錦繡の、帳暮れ行く中空に、誰が釣り舟の玻璃のともしび白々と
裾の紫、色あせて、又染めかはる容模樣。あれ、何時の間に一つ星、雲の眞袖の綻び見せて

常磐津
〽斑雲り。變るは秋の空の癖、しづ心なき風雲や。

コトバ
ヘオーイ　かわせだせえ。オ、サ　やめろうよ。

〽蜑の小舟のとり〴〵に、歸りを急ぐ櫓拍子に

オヒワケ
〽雨よ降れ〳〵。風なら吹くな。家の親爺は舟乘りぢや。
〽風が物いや言づてしよもの、風は諸國を吹き廻る。
〽船歌絡るかりがねの、聲も亂れて浦の門に、岩波騷ぐ夕あらし。

大ザツマ
〽すさまじかりける風情なり。

唄切るゝと浪の音。曲人、樂人左右へ分れて入ると同時に奥にて遠く船歌。

オヒワケ
〽船頭かあいや音頭の瀨戸で、一丈五尺の櫓が撓る。

これに松風の聲、浪の音を冠せて、垂幕を徐ろに捲き上ぐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

（明治三十七年十一月刊行の初版に載せたる前曲は左

の如し。)

曲(長唄ガカリ)

〽夫れ渤海の東方に、底ひも知らぬ壑あるを、名づけて歸墟といふとかや。八紘九野の水盡し、空に溢るゝ天の河、流れの限り注げども、無増無減と唐土の、至人が寓言今こゝに、見る目はるけき大海原。北を望めば蒼茫と、八重の潮路は霞籠め、蓬が島にや通ふらん。西を見やれば千里の波、浩蕩として窮りなく、旦に洗ふ高麗の岸、夕陽も其處に夜の殿。錦繡の帳暮行けば、紫匂ふ空の色、何に驚く早紅葉の頻りに墜ちて癯する山。秋老けぬれば欸乃を、絡りて渡る雁がねに、氣も澄の江の浦の波、幾代の調べや疊むらん

(「船頭かあいや」のオヒワケを此の次ぎに添へたり。)

＊　＊　＊　＊　＊　＊

第一段

漁夫甲　同乙　同丙

舞臺上手へ寄せて段々に奥へ重なりあふやうに生えたる大小二三株の磯馴松、いづれも年老いて委寂びたるが、腹這ふやうに大枝を差出したる、その邊より下手へかけて一面の眞砂路。ずっと下手、波打際のこゝろ。爰に漁船二隻、半分引揚げてあり。ほゞ中央、松に間近く、干網幾張りか。下手、船の彼方波打際に大なる岩二つ三つ。ずっと奥は上手より下手へ奥深く一面に大海原の遠見。

總て丹後の國、竹野郡、澄の江の浦。今の網野村近傍の海岸、即ち夕日が浦の邊より西方に向つて日本海を見たる景色。

秋も稍〻末つ方の夕陽は既に西の海に沒したれど、地平線に殘る夕照(正面奥上手に寄り)微かに赤く、八日ばかりの弓張月西南の空(奥下手)に懸りながら、穩かならぬ雲忙しげに走りて、月影忽ち昏く又明く、松風の聲、浪の音、共に氣色ばみたり。

垂幕を捲き上げると同時に船歌は局に切れんとす。舞臺にては「えいや／＼」と掛け聲して、年罷の漁夫甲、乙、丙の三人、漁船を松の根かたへ引揚ぐる。前の船歌切るゝと直に、同じく遠く奥の方にて、別の聲にて第二の船歌。

オヒワケ
〽別れの風だよあきらめしゃんせ。帆影見るさへ氣にかゝる。

此の歌の切るゝまでに船を揚げ、漁具、船具を片附け、やがて干網を取下す。（此の間折々浪の音。）

甲　白
〽はてさて、今日は、むざとしたことの。

乙　白
〽したが、あれ、見さしめ、いかう雲行きがあしうなつたわ。

丙　白
〽此の樣な軽い魚籃を提げて戻るならば、また女どもが腹を立て、人を芥、藻屑のやうに言はう。

甲　白
〽さればい。とかく沖には事なかれぢや。家内の浪風が騒ぐわ。

〽乙　白
家内の浪風といへば、浦島の爺の一人子が氣が觸れたとは實か。

〽甲　白
なか／＼。愚者がしたのでがなあらう。職は怠る、そこ／＼と漂泊き歩く。親たちが叱れば腹を立て、情強に爭ふ。たゞ釣りにばかり心を入れて、明けても釣り、暮れても釣り、いかな日も小舟に乗つて沖つ邊をぬらめかぬ折はない。此の中も打續けて七日餘り面見せもせぬ。

〽丙　白
さて何を釣るぞいやい。

〽甲　白
されば、何を釣るぞと問へども、ふつに明さぬ。人傳手に聞けば、銀の鱗に眞珠の眼球、尾鰭共に黄金色したる腹紅の魚を得うずるとも、あるは人魚ちふものを釣るぞともいふ。剰へ斷に餌を用はぬ。何と稀有なことではないか。

〽乙　白
ふつに餌を用はぬ。さて／＼稀有なことぢや。

丙　白
〽人魚を得うとする。さて／＼稀有なことぢや。

乙　白
〽すればこそよ。あの我強い尉が此の中は鰥のやうに痩せた。
甲　白
〽男親は未しもぢや。女親が可憐しい。夜も寢ぬげの面持して、昨宵も甚う更るまで、此邊に立迷うてゐたわさて。
丙　白
〽や。噂をすれば影ぢや。あれ。あしこへ。其の姥がわせた。
此のうち網を方附け了る。
甲　白
〽なに。わせた。面を合はするも笑止ぢや。
乙　白
〽今の間に遁すまいか。
甲　白
〽なか〳〵。急いで遁さしめ。急いで。
一同揃つて下手へ入る。

第二段

浦島の姥　同尉

殘る照全く消え、月も雲に掩はれて昏くなる。

浪の音、松の風一しきり。下の曲よきほどに浦島が母の姥出づる。六十以上、賤しからぬ人柄、やゝ有福なる農家の妻の服裝。人尋ね貌の思入れ。

曲（常盤津）
〽秋風に、小萩の下枝亂れては、脆き日あぶなき露の玉。つらぬきとめん手縁さへ、涙に曇る我がこゝろ、闇になれとや顰む月。

曲に作れて、際立たぬ程の振ありて
姥　白
〽我強い尉どのゝ目を忍び、夜毎に行方をば尋ぬれども、そよとの音信もおりないは、氣がかりなことでおじやる。

此の時又松風の聲、浪の音。第三の船歌、前々のよりも遠く稍かに哀れに

カヒワケ
〽親は程經りや、不具な子なりや、人でなしなりや尚ほ更に。

此の歌のうちに浦島の父の尉出づる。七十近き老體、

卑しからぬ服裝、裕かなる農家の主翁、杖はつけども腰附尙ほ矍鑠なり。姥は此の歌の間、それに障らぬやうに、ちぎれ〳〵に左の獨白を言ひてあちこちと步く。

姥　白

〽生得……くわっとなり易い吾子でおりゃるを……憑物がした、憑物がしたと……人皆の言はしまする此の頃……身を棄てうとも爲かねまい。……さて〳〵氣がかりな……さて〳〵……

此のうち歌切るゝ。月雲間を洩れ出づる。尉は松蔭に樣子を窺ふ。姥は中央へ戾り

姥　白

〽此の上は神力を賴むより他はおりない。何とぞ吾子を護らせられて下されい。何とぞ吾子を……

と四方を拜むこと、此のうち尉その傍へ立寄り

尉　白

〽姥どの。これの。姥どのてや。

と大きく呼ぶ。

姥　白

〽や。

と見返り

白

〽尉どのか。

と面無げに蹲て

白

〽面目もおりない、面目もおりない。

と袖にて面を掩ふ。尉徐かに船緣に腰を掛けて

尉　白

〽あのやうな人非人は、子と思はぬによつて、和女も子を育つたとばし思はしますなと、繰り返いて吩咐けて置いたではないか。魂ひを入れ換へずば家內へは入れぬというた、其の舌のまだ乾かぬに、こちから折れて出て何となるものでおじゃるぞ。今にもあれ、あの橫着者が戾り來て、此の體を見ようならば、一段と親を蔑しろにせう。まこと可愛いと思さば、子を有つたるをば忘れ、一先づ我等と共に歸らしめ。

姥　白

〽なに。子を有つたるをば

曲

白

〽忘れいとやなう。

と泣く。

曲（常盤津）

〽わが年波の寄るをさへ、憂き世が掛くる
搾木をも、子には忘るゝ折もあれ。

白 〽子を有つたるをば

曲 白 〽忘れいとやなう。

と泣く。

曲 白 〽有り餘る、子寶さへも取り〳〵の、眞玉と愛しむ親ごころ。まして老い木の一つ果は

曲 白 〽吹くな夜あらし、夢の間も

曲 〽忘らりよものか。夢の世に、只是れのみぞ現なる。

と際立たぬ程の振ありて

姥 白 〽曲もござらぬわいなう。

と泣きおとす。

尉 白 〽その甘やかしの毒が利いて、親を親臭いとも思はぬげの、あの自儘者が跋扈つたわい、蔓物は摘め、徒物は間引け、

曲 白 〽みな行末を

曲（竹本） 〽思ひ子は、別けて打てよの教へ草。

白 〽言葉が茂れば、身の恥が嵩むのみでおりやる。

と立上り

白 〽もはや何事も言はいで、思ひたえて歸らしめ。

此の時まで俯きゐたる姥遽かに貌をあげて

姥 白 〽尉どの。

尉 白 〽何でおじやるぞ。

姥 白 〽打叩くが慈悲と言はしますが、逆上いて本性もなうおじやつてもか。矯め過ぐれば、鞭も折れうぞよ。

尉 白 〽や。

〽姥　白
〽轡が利き過ぐれば、悍馬は、火中、水中へも駈けう
そよ。
〽尉　白
〽ない。
姥曲（常盤津）
〽互ひの意地を張弓の、返らぬ歎きあるこ
とを。
〽白
〽覚悟しておじゃるかいの。
〽尉　白
〽はて、さばかりの覚悟せいでや。
〽姥　白
〽實正か。
〽尉　白
〽なか〱。
〽姥　白
〽誓文か。
〽尉　白
〽おんでもないこと。
〽姥　白
〽いや〱、我強うなおっしゃっそ。生の無い器調度で
もあることか。一時の我に代へて

曲　白
〽棄てらるゝ子寶かいなう。
曲（常盤津）
〽鏡だに、手馴しぬれば棄てかぬる。磨き
あぐもと、劈割れて、影歪もとも可しや
よし、我がのにやあらぬ。曇ろとも　手
持わろさに曇ろもの。さりとては情けあ
さかヾみ。
と此の間尉往かうとする。姥留めて徐かに絡み、泣き
口説く模様の振ありて収まる。
姥　白
〽せめて今一度、説き諭いてくれさしませい。
此の間船縁に倚りて默然たりし尉、ちっと思入れあつ
て
尉　白
〽また面見ようとも思はなんだが、さまでにおしゃる
からは、
と海の方を見返り、西に傾ける夕月の影を指ざし
尉曲白
〽あの夕月の

曲(竹本)〽ほのめく影の殘るうち、歸らば爰に俟ちうけて

姥曲(常盤津)〽ともかくも今一度

尉曲白〽諭いて見る目に花咲くか。

姥曲白〽只憂き見るか。

尉曲白〽假の世は

二人曲(竹本)〽親子のえにし薄明り。

と姥は尉の袂に縋りて愁の振あり。とゞ姥は海の方を見て

姥　白〽あれ、微見ゆる

曲　白〽あの舟は。

尉曲白〽どれ。

と奥を見て領き

曲〽歸り來るをば、いざ松蔭に

此のうち姥は耐へかねて走り行かんとするを、尉留めて

尉　曲〽暫し憂き身を忍ばまし。

と此の曲一ぱいに、尉は姥を和めて松蔭へ誘ひ入る。

第三段

浦島　尉　姥

此の時、又風の音一陣して、雲走ること急に、月は將に落ちんとして昏くなり又明くなる。浪の音。下の曲のうち浦島奥より出づる。齢二十三四、眉目秀麗にして人品氣高く、服裝も賤しからぬながら、鬢髪亂れ、顏色悲みを帶び、形容やゝ衰へたり。肩には釣竿、手には網を納れたる畚を携へ、快々として出づ。

浦曲（ウタヒ）

〽黄金の炎ほ身に浴びて、黄金の炎ほ身に浴びて、銹くる玉とならばや。

曲（一中）

〽視れども倏忽として見るに由なく、聽けども惝恍として、聞かん緣も浪枕、幾夜か經つる釣り小舟。うつゝなの我がこころ。

此の曲よきほどに、船の在る邊（中央正面）へ來り、さて更に下の曲に作れて徐かなる振あり。

浦曲

〽幻影は何處へ消ぬる。釣綸の、雫の玉に髣髴きし、靈し幻影を見ざりせば、斯ばかりに世を厭はじを。あら。うたてある現世や。

と歎き悶ゆる思入れありて、肩にせる釣竿を取り直し、かなしげに詠むることありて

白

〽只一すぢ殘つたる賴みの綸も

曲白

〽切れはてたり。

と情けなげに釣竿を抛つ。

曲

〽身をも世をも、救はん綱も鈎も、今は仇なれ。鱗族に

と哀げなる思入れ。此の振のうちに、手に持てる笭を地に抛つことあり。

曲

〽身は對へども無何有の鄉に、心たゞよふ捨小舟。あゝ、風荒かずも、あれや我が身は毀れ舟。

「風荒かずもあれ」より、狂ひ悶ゆる介。あちこち狂氣のやうに歩くことありて

浦白

〽眞情の通ふをこそ近親と謂はめ、心千里と隔ち、さらでも寄邊なさに惱める胸に、浪風立たするが親の情けか。あら、つれなの人ごころや。

と上手に向ひて立ちながら罵り且つ泣く。松蔭に樣子を窺へる尉姥へかれて走り出でんとするを、姥の留む

ろことあり。

浦　白

〽廣き天が下に

と空を仰ぎ憤る思入れ。

白

〽只ひとりだに

曲　白

〽我が心を

と歎く思入れ。

曲

〽知るべなき、現世なれば花も憂し。鳥も厭はし。禁ゆるを、友呼び交す、見れば憂き世を、思ひの種ぞ。うたてやな。

と悶え歎く。此の時雲少しく切れて、落ちかたの夕月俯ける浦島の背を照らす。浦島は我が影の地に映ゝるに、ふと心づきたる思入れ。坐したるまゝ海の方を見返り、ぢっと思入れありて

曲　白

〽たゞ月のみは

曲

〽たゞ月のみは、虧くると言ふも影の所爲、曇るも雲の科なれば、慕しくぞある。さりながら、餘り微妙じき影見れば、そゞろまた彼の幻影の、思ひ出さるゝ苦しさよ。

此の曲のうちに又起ちて振あり。とゞ狂氣のやうになりて悶え伏す。月落ちかゝり、浪の音すさまじく、空模様あらしだつ。

此の以前、尉先きに、姥も續いて松蔭を出で、浦島の傍へ寄り

尉　白

〽やい。こゝな。面あげい。

浦　白

〽や。父御か。

曲　白

〽母御前もか。

と起ち

浦曲(一巾)

〽面を見れば我が心、異しう轟き

と我れにもあらず逃げんとする、

尉曲(竹本)

〽やい。待つた。……さすが汝れの眼にも

父よ母よと映し世の

浦曲(一中)
〽縁の網手に繋がれて

と尉は浦島を引戻し、又引廻して意見模樣の振になる。此の時月は全く落ちて、海鳴き、あらし烈しくなる。やがて尉は腹立てたる思入れ、浦島を折檻せんとする。姥割つて入りて泣きながら止め、

姥曲(常盤津)
〽網子に引かれて、引かれて網子に、碇沈めの繩くるし。

と三人巴に絡みて

尉曲(竹本)
〽幾たび憂きを掛け繩の

浦曲(一中)
〽長き契りも

尉曲(竹本)
〽もつれて

姥曲(常盤津)
〽つれて

尉、姥曲(常盤津)
〽絶たまくをしき千筋繩。

と尉は怒り、姥は泣きて、浦島を意見する模樣の振ありて收まる。あらしも少し靜かになる。

尉　白
〽やい。のめ〳〵と戻つたる其の面にも言分あれど、差當つて聞きたいは、今ぬかいた幻しとやらは何ぢや。

曲(竹本)
〽それこそは、親子の中に水さす曲者。

尉　白
〽幻しとは、そも何處の誰れぢやぞ。

姥曲(常盤津)
〽とりなしは母がせう。

白
〽そと言はしませ。

尉　白
〽ちやくと言へ。

姥　白
〽何との。

尉　白
〽何とぢや。

浦島五月蠅げに

浦　白

〽あゝ。

曲　白

〽何ともなや。

と尉と姥とを左右へ押退けて起ち上り

浦曲（一中）

〽幻しは只幻しぞ、凡人の、其の靈妙相えやは見る。えやは見る靈妙相に

と惝怳として目に幻しを追ふやうの思入れにて、下手へ恍惚として歩く。浪風また激しくなる。此のうち尉耐へかねて

尉曲（竹本）

〽なに。凡人のえやは見る。ぬかいたり其の頬桁を。

と尉浦島を引き戻し、胸づくしを取りなどする。姥また割つて入りて

姥曲白

〽これ。

曲（常盤津）

〽現なの亂れ心ぞ。よしや

と浦島ふら〳〵と蹌踉く。尉又打たんとする。姥止むる。

尉曲

〽よし、此の海　野田と干るとても、親とは宜らじ。放し舟。

と、とゞ浦島を突き倒す。姥とりさへかねて

尉曲

〽は

浦曲

〽な

姥曲

〽れ

尉、姥曲（常盤津）

〽ばなれの

三人曲（常盤津）

〽是非もなや。

と宜しくありて姥泣き伏すこと。あらし尚ほ未だ歇まず。

尉　白

〽やい。そこな。親子の縁を切つたからは、我が家の

屏に
曲　白
〽影でも射すな。
曲（竹本）
〽返らぬ昔し悔む日を、やがても思ひ知りぬべし。
白
〽姥どの、おじゃれ。
と去りかぬる姥を促して強ひて去らんとする。姥耐へかねて
姥曲白
〽もし是れが
と浦島の方へ駈戻らんとする。尉留めて
尉曲白
〽これ。
此の時浦島も偶と貌を上げて尉、姥を見返る。三人目を合せ、おの／＼宜しく思入れ、科介。
尉曲（竹本）
〽此の世は夢の假りごろも。

姥曲（常盤津）
〽裾に千引きの岩枕。
二人曲（竹本）
〽引戻さるゝ思ひなり。
と、尉は思ひ切つて姥を引立てゝ入る。

第四段

浦島　少女（乙姫）

これより先き、尉の白の初めより、あらし次第に衰へ、此の時全くしづまり、遠く沖の方に餘波の浪の音聞ゆる。第四の船歌前々のよりも更に遠く、更に哀れに聞え來る。
オヒワケ
〽親も知らねば妾ゃ來しかたも、行方しら浪、捨小舟。
悄然と俯きゐたる浦島、次第に此の歌に聞き惚るゝ體にて、徐ろに頭をあげて思入れあり。歌切るゝと
浦　白
〽神は荒怱として反らず、毀る形も
曲　白
〽枯れはてゝ。

曲(一中)
〽往きぬる者は消ぬる泡。來らん者は遊絲の、暫し髣髴く水の影。
〽げに何者を父母に。いづち往くらん。何爲んと、生死の海に長き夜を、いつまで夢に漂泊兒。あゝ。おぞましの人の子ら。

と此の曲うたふほどに起ち上りて悅然として浪打ち際へ進む。舞臺徐かに半分廻りて、漁船、磯馴松など何時しか遠くなり、薄暗の中に朧々となる。舞臺一面に眞砂路のこゝろ。中央に大なる巖二つ三つ。奥は一帶に大海原の遠見。沖の方に浪の音遠く聞ゆる。浦島海に向ひ惚れ〴〵と詠むる思入れありて

浦　白
〽和には薄板に嬰兒眠り、あらしには蒼空の星も驚擾く。

曲
〽際涯も知らぬ蒼海は自然なる墓所。

白
〽人畜は言ふもおろか、河といふ河、山といふ山、流れての末

曲　白
〽崩れての末

曲
〽見る物なべて汝が胸に、融けてや解けん不斷の謎。

白
〽靈妙しき死の都よ。如何に。此の

曲　白
〽一滴をも

曲
〽汝が懷ろに。

と、ふら〳〵と海に歩み入らんとして、ふと心附きたる思入れにて淋しげに打笑み

白
〽あら、おぞまし。我れ海邊に生ひたち、鱗族にも等しき身なるを、いかでかは

曲　白
〽水中に

曲
〽死ぬことを得ん。何とせん。

と思ひ惑ふ思入れ。やがて

曲 白　〽おゝ。

曲　〽思ひ出でたり利き刃物。

と徐かに立上り、上手に投げ出されたる畚の裡より小さき刃物を取出すことあり。

曲　〽尙ほ有繫に幻影の、有るかと見えて目に見えぬ、坩堝に今ぞ返す魂。

と此の曲のうちに刃物を携へて、徐かに元の位置へ復り、宜しく科介ありて、徐かに喉笛を掻き切らんとする。此の途端、大巖の蔭より衣裳は稍ゝ舊びて賤女かとも見えながら、容顏は玉のやうなる一個の少女、齡は十七位ゐなるが、忽然と走りいで、驅け寄りて、刃物をもてる浦島が手に縋り止む。髮は竹髻のやうに束ね、質素なる飾櫛唯一つ挿し、其の髮毛のみだりがはしくなれるを、長き袂と共に浦風に吹き靡し、横さまに身を寄せて、浦島が貌を仰ぎ見たる。沈みし月が、萬里の清波に浴して今圓かになりて、また新たに澄み昇りたるが如く、あたりの闇の明るくなるほどなり。

浦島駭きて

浦 白　〽や。おことは。

少女、浦島の手を抑へながら

少 白　〽喃。けしうはない者ぞや。沖の暴風に船覆りて、危かりしを助けられ、此の濱邊へは

曲 白　〽着いたれども

曲（長唄）　〽浪蔭に月の面わの埋もれて、たゞ烏婆玉の夜の色。心細さの闇閉ぢて方向あやなき胸のうち。

と少女よきころに浦島の傍を離れて立上る。浦島は尙ほ手に刃物を持ちたるまゝ、さながら醉ひたる人の如く、恍惚として少女の面に見とれ、いつしか刃物を取落し、目もて其の立舞ふ姿を追ひゆく。

浦曲（一中）　〽あら。うつゝなや。幻影の復も眼を遮る

か。

と、まきほどに立上りて少女に絡む。此の時少女が上に着たる衣裳一重飜然と脱げ落ちて、一段華麗なる着附けとなり、曲節もまた一變す。

少曲（長唄）

〽誰れを寄邊と爲んかた浪の

浦島恍惚として立舞ふ少女に立添ひつゝ

浦曲（一中）

〽夢を見るかや。うつゝかや。

少曲

〽浪の彼方の小島が崎に、別れ程經て懷かし戀し、父も居りそろ。母そばの、母も荒磯に我れ松風の、吹くにも胸の騷ぐらん。

と浦島は夢を見る如き思入れにて、うつら〳〵と絡む。とゞ

少白

〽案内してたべ、故郷へ。

浦白

〽なに。故郷へ

曲白

〽案内せよとや。

と浦島ほれ〴〵と少女の貌を打まもり

浦曲（長唄）

〽君見れば厭ひ果てぬる我が生さへ、鴛鴦の思ひ羽思ひぞ増さる。翼交して

少曲（長唄）

〽交して翼、番ひ離れぬ其の中々も、晴れて逢ふ瀬の涙川とて

浦曲

〽よしや浮き寐を重ぬと儘よ。などか厭はん君ゆゑならば

二人曲

〽替へぬ契りの幾世をかけて、離れがたなき夫婦鳥。

と美しき色合の振ありて收まる。

浦白

〽して、指す方は何處ぞや。

少白

〽その指す方は

浦　白　〽その指す方は

少　白　〽海の底

浦　白　〽なに。

曲　〽白　海の底とは。

と驚く。此の時少女端然となりて

少　曲　白　〽我れは實は人間に

と言ひさして徐ろに退ちたり

少　曲(ウタヒ)　〽あらうなばらの底に住む海神の女さふらふなり。

と緩かに舞うて廻る。

浦　白　〽なに。海神の

曲　〽白　女とや。

と彌〻驚く介。少女は過去を憶ふげの思入れありて

少　曲(長唄)　〽春和に詠め涯無く瑠璃澄みて、八千尋透る朝ぼらけ。龍の宮居の軒端にも、映る大空の影麗かに、目も彩雲の漂へる、見れば心の憧れそめて。人界を、愛づれば搖曳ぐ玉藻花、秋立つ頃よ海神の、父の許しも浪の上に、浮ぶや龜の姿して。

と此の物語の振のうち、少女の衣裳いつとなく脫げ落ちて、次ぎの曲の切るゝ時分には全く燦爛たる白衣姿となる。衣裳は薄羅にて、ところ〴〵金絲、銀絲にて玉藻の縫ひ模樣あり。紅き色さへも主として飾帶のみに用ひたり、其の他の色は只淡しきを聊か用ひたるのみ。頭髮に挿したる飾櫛、此の時忽然と金光を放つ。加之、瑪瑙、眞珠、玳瑁の類ひ、胸、手首の邊に輝き出で、丈なる黑髮は鑠然として解けて亂れ、垂れて地を拂ひ、白玉を延べたる如き胸、腕、の邊は、西洋の女神などのやうに輕羅透きとほり、白地又は赤地の金襴の飾帶めくもの幾片となく翩々と翩き、すべて白き魚に金銀の鱗、尾、鰭あるものかとも思はるゝ水中の物らしき裝ひ、凉しく淨らかに、麗しく神々しく、而

も何となく潤ひ濕りたるやうの風情あり。かくて少女は龜となりて、陸近く浮びて、空の景色、山川の有樣などを打詠むる模樣の振にかゝる。

少曲 〽折から西に金色の、眞玉燃えたち見るうちに、玳瑁流れ銀融けて、黄金に漬る雲の袖。裾むらさきに暮れ行くを、神もゆらゝに見惚るれば

と宜しく形容の振。此の曲の中程に浦島も立ちて時々物になる。

浦曲(長唄) 〽眠れる龜を捕り〳〵に、罵り呼ばふ海夫の子ら。

と少女に絡み、次ぎの曲に移るまでの間。やゝ長き合の手に合せて龜の危難を救ふに擬へたる振あり。とゞ

少曲 〽嬉しやな。まぬかれて、又立歸る八重の隈、千尋の恩いつの世か

浦、少(一しょに曲) 〽忘れぬ（影を現にて見るぞ／君に恙なく逢ふぞ）嬉しき。嬉しさに神昏めく。うつゝなや。

浦曲 〽あら、現なや。これはそも

曲白 〽夢にあらじか。

少曲白 〽夢ならぬ

曲 〽契り結ばん。蓬萊邊へ、來させたまへ諸共に

と二人纏綿して、喜び狂じて立舞ふこと宜しく

浦曲 〽幻しは現となりぬ。君と我れ、二人かも將た一人かも。

と此の途端、浦島が着たる衣裳忽然として脱げ落ちて、少女の着たるものに同じき燦然たる白衣と變り、頭髮も忽然と解けて纏り、額上には細き金環に寶玉の飾り

附いたるもの現れ、少女と共に、譬へば二羽の奇なる蝶、鳥か若しくは翼ある靈しき魚などの如く、彼此相分ちがたきほどに彩影髣髴として連繋りあうて舞ふ。此の以前舞臺は更に一段朦朧となりて、海上に異しき光りあり、或ひは青く電の如く、或ひは白く月光の如し。

少曲 君と我れとは雄雌の波、雌波雄波と分けては呼べど、寄せて返して返して寄せて、此の世盡くとも分れじやはか。

浦曲 げにや我れさへ分けかねつも。

少曲 いつか離れん。蓬萊邊へ

浦曲 いざ作はせ。あら、樂し。

少曲 あら、あら、樂し。嬉しやな。

浦曲 あら、あら、嬉し。うつゝとも、夢とも分かず君ぞとも

二人曲 我れとも分かぬ嬉しさの、際涯知られぬ大海も、二人が中の嬉しさを、容れて溢れん。八重潮の、溢れて空を涵すらん。溢れて空をや涵すらん。

と此の綢繆たる曲に伴れて、二人は蹁々躚々と縺れあひて段々奥深く舞ひ行く。それに伴れて舞臺も廻ること宜しく、よきほどに、朦朧たる正面奥の方の海上へ、髣髴として幻影の如く、隱約として夢の如く、龍宮城外郭の遠景らしきもの現はるゝ。

此の模樣よろしく垂幕おのづからの如く下ろ。後響く洋々喨々たる音樂（雅樂）に和して、いと靜かなる浪の音。

中之幕

前　海底
中　海神殿
後　海底

第一段

赤魚　鱸　鱚

雅楽に静かなる浪の音を冠せて幕を開くる。

一面の平舞臺は大海原千尋の底の體。見る限り海水盈ちて洋々たるこゝろ。中央（迫り上げに障る部面）を除くの他は、四方あちこち、遙かに奥のかたにも種々雜多の海樹、海草、蔓々鬖々として風情面白く生ひ出で、葉も枝も幹も根も弱々と輕く顫かに靡き漂ひ、流るゝ旗の如く、漂ふ帯の如く、又は亂るゝ絲の如し。其の色は或ひは碧瑠璃の如く、或ひは紅褐色の天鵞絨の如し。又花の如く實の如き物あり、其等は枝葉もろとも銀の如く、白玉の如く、水晶の如く、殆ど一々には名状すべからず。又そこゝに形圓く滑かに凸凹をなして、海苔に掩はれては青み、貝に附かれては輝ける黒き岩ども。さて是等の草樹の參差として生ひ茂れる間を潜りて、千狀萬態の美しき鱗族洋々として、或ひは奥深く游ぎ入り、或ひは高く／＼游ぎ浮び、始終（幕開いて閉づるまで、初めは繁く、中、後は只折折ながら全幕を通して）かゆきかゝゆきす、恰も羽族が春林の樹間を飛び交ふが如し。すべて晶々蒼々として沈々漫々たり。

幕あくと、件の魚ども、浮きたる三絃樂に伴れて上手より、下手より、奥より、群りて游ぎ出づ。すぐ曲になり、赤魚先づ下手より出づ。

赤魚曲（長唄）

〽ぱくり。ぱっくり。つういつい。海帯へおじゃらせ。海蘊へせ。ひょっくり。ぱっくり。

と此の唄に伴れて赤魚群る魚に絡みてなかしみの振。

曲

〽おもしろや。

と宜しく收まる。よきところに鱸（男）鱘（女）上手より出づ。三人とも頭に當の魚の形したる帽を戴き、着附の色も當の魚の色を用ふ。

赤魚曲

〽ても、さってもゝ素敵な玉ものを、いつ靡き藻と垂藻の、離れ堅海藻か見る目もあるを、手に手をとっさか甘海苔中は、むかつく海苔ではないかいな。

鱘曲

と道化模様にて鱘にかゝる。

〽今は浮海松、和布の昔、悔みこそすれ。餘所目ぢやてゝも、餘り海藻根が利かぬぞえ。

赤魚曲

〽それ〳〵。それが曲者よ。口でけなして心ですくも。深藻どころであろぞいな。うらやまし。

と宜しくある。此のうち海底（奈落）にて洋々たる音樂（雅樂）聞え、例の魚ども八方より群り游ぎ入ると見るうちに、又ぱっと八方へ游ぎ去る。鱸は二人が間へ割つて入りて

鱸　曲

〽開いた〳〵。そこ退かせ。殿さ媛さの御出御ぢや。吾等は暫し藻がくれて。

と三人宜しく縺れて入る。

第二段

浦島　乙姫　女童二人

とかくするうちに瀏亮たる音樂（雅樂）に作れて

徐ろに龍宮城の正殿を迫り上ぐる。半球形（圓頂）式とも謂ふべき樓臺、全體が正圓形にて、屋根の或部の他は總て稜立ちたる趣きなき構造、例の山門式の殿堂に似たるよりは寧ろ泰西の伽藍などに似たり。柱は皆珊瑚なり。コリンス式に擬ふ柱の飾りは玳瑁、瑪瑙、硨磲其の他種々の貝を用ひて物したり。

周壁の處々には窓に似たる口ありて、そこに彩絲に美しき藻草を涼しげに縫ひ取り、更に金絲、銀絲をも加へて美しき貝の色々をも縫ひ取りたる薄き織り物の御戸帳を垂れてあり。浪はその窓を自在に行き通ふ心にて、例の魚ども游ぎ入り、又游ぎ出づ。殿の正面にも同じ樣の御戸帳を備へたれど、皆捲げ又は絞りてあり。層樓は始終帳を下したるまゝなり、されど例の魚どもは往來すること屢々なり。尙ほ此の圓殿を繞りて築かれたる廻廊やうのものは、悉く皆美しき白き貝にて敷き詰め、珊瑚を臺にして貝の粧飾を施したる欄干を打廻らし、さて其の正面は略々九尺ほどを開いて、こゝに同じく白き貝類にて疊みあげたる三段の幅廣き階子を取附けてあり。

さてまた此の圓殿を迫り上ぐると同時にあちこちに生ひ出でたる草木は流るゝ如く左右へ開いて漂ひ去り、殿の周圍溷濁然となる。兼れて正面奥の海面へも圓殿と同じ式に成れるらしき幾多の樓臺及び其の間を聯絡したる綿連たる廻廊を迫り上ぐる。金碧熒煌、光彩陸離、幽々窈々たる靈境の光景。

此の圓殿の中央、やゝ上手寄りに、浦島曲彔やうの物に倚りて坐し、少しく俯きて、輕く額に左手を加へ、悵然と物思はしげなり。頭には小やかなる金龍の飾り附きたる寶冠を戴き、服は長袖なれども其の形は東洋在來のに似ずして此の圖の如く斜形なり。



裳裾も地を拂ふほどに長し。曲彔は珊瑚臺にして七寶を鏤めたり。

浦島の傍ら、只少し奥へ下りて下手に、乙姫立ちて、右手を輕く浦島の曲彔に觸れ、只心ばかり頭を傾けて浦島が貌を差窺きたる。髪は角髻擬ひに束ねて、飾櫛などの在るべき邊に同じく小やかなる金龍をいたゞき、なほ珠玉金銀を綴からぬまでに髪飾にも、腕、胸、手首等の飾りにも用ひたり。(衣裳の仕立、染色、模樣等好みあり、色及び模樣は前幕と突かぬやう、且つ總じて能衣裳を參酌して、沈みたる色を用ふべし。)

姫の坐すべき曲彔は殿の下手、奥の方の窓際に据ゑてあり。魚形の幡を戴ける可憐なる女童二人、その邊に侍す、これも低き小さき曲彔やうのものに坐せり。

迫りとまると樂聲は嫋々と微かになる。浦島貌をあげ、姿を整へて、先づ座に着きたまへと姫へ科介。姫浦島が傍りを離るゝ。女童走り進みて曲彔をまゐらする。姫は中央下手寄り、浦島よりは二歩ほど奥へ下りて坐ふ。

乙姫白

〽いやとよ。さなのたまはせそ。きのふけふと日を重ねて、御ン面持のいよゝ例ならず見えたまふはいかに。常樂の此の臺には、只一つの願ひの他は、かりにも入來んよすがなし。さては人間の世を戀ひ慕ひたまふにこそ。

と宜しく思入れありて言ふ。此の間浦島思入れあり。

浦　白

〽繋られつる上からは、何をか韜み申すべき。我れ御ン身と契りを結び、此の寶闕に住してより、既に三歳を經つれども、歡樂長へに圓かにして雜念いさゝめにも動きしことなし、朝には金丹、石髓を服し、夕べには玉渭、瓊漿を味ふ。杯の花は凋まずして、身は窈然の仙となり、心の悦びは現なれども、我が境涯は神に似たり。厭ひ棄てぬる人の世をば、夢にも思ひいださゞりしが、御ン身と同心一體の、其の悦樂の餘さを、深くも悟りし

と慘憺たる思入れありて、遙かに天の一方を望み

曲　白

〽其の頃より

浦曲（ウタヒ）

〽月晴れ渡る夜々に、不思議や千尋と隔てたる、八千重の波の彼方より、微かに聞ゆる海人の歌。

曲（一中）

〽轟く浪に咽びては、怨咽として怨むが如く、遠のく波を潛りては、悠々として憧がるゝ、淒慘たる肉の聲。斷え〲なりや　腸も。

と、よきころに悵然と立上りて振になる。

曲（一中）

〽今ぞ初めて哀れさの、身を知る雨の故山邊、頻りに戀し近親人。いや懷かしき父母を忍ぶに餘る思ひなり。

と思慕纏綿の振宜しくありて收まり

浦　白

〽いかで我れ一人のみ此の歡樂を貪らんや。せめても父母を伴ひ來ん。暫し暇をたびたまへ。

と科ありて言ふ。此の間、目を閉ぢ默然たりし乙姫徐かに目を開きて

姫　白

〽理も無きことを仰せられさふらふものかな。そもそも遠く塵の世を離れませばこそ此淨樂。かりにも浮世の土を踏み、塵を肌へに觸れたまはゞ、あれ、あの碧瑠璃の草樹も忽ち枯れ、水晶、白銀の花どもも立地に凋み、此の寶闕も、仙閣も、消えて水泡と跡無からん。君さへも得歸りたまふまじきぞ。なぞ

て親族人をや。

と優しく柔かに、いと／＼痛ましげなる思入れありていふ。

浦　白

〽いや／＼。去年花着けし枝は今年も亦た咲き候ふぞかし。曾て經ぬる途を再び踏むことの何どて難き。

さて又我が親戚は、よしや將て來んこと

曲　白

〽能はずとも

浦曲（長唄）

〽我れ立踊り讃頌に、淨樂界の眞相を綴りて琴に奏でなば、さすが臭穢に馴れし身の、垢も膩も滌はれて、やがてぞ澄まん秋の月。

と次第に熱し、感募りて立ちて舞ふ。それを止むるやうにして乙姫も立上り

姫曲（長唄）

〽澄むとも、哀れ叢雲の、又立掩ふ迷ひとて、君さへも曇らんを、曇れる耳に君の歌、君の琴の音やは聽かん。何事も、只專念にあるべけれ。左右に追はゞ小魚だに、ただ藻がくれて效ぞなき。

と徐ろに、氣高く美しく浦島に絡みて、諫め摸樣の振ありて、二人ともに座に戻る。

姫　白

〽よしなき御念をな催させたまひそとよ。あれ／＼。君を慰めまゐらせんとて、あしこへ魚どもの許多舞ひいで候ふをば見そなはせや。

と宜しく科。浦島も思入れありて起つ。姫も起ち上る。女童二人ながら走り進みて曲を稍〻殿の奧へ移す。

第三段

浦島　乙姫　女童二人

舞踊大勢　尉　姥

此のうち又新たに音樂（雅樂）瀏亮として起り、下の朗詠がカリの曲に伴れて、雌雄の鱗族、男女、壯幼、およそ五六十頭、舞ひつゝ出で來る。服色は濃き色、淡き色、取り交ぜ、二人づつ一色にて、都てにては虹の七彩などを思ひ起さしむるやうなる舞ひ衣裳を着たり。いづれも當の

魚の色に因める色彩したり。さて上手より、又下手より、同じさまに袂を連れて逶迤として舞ひ出て、正面に來りて入れかはり、更に舞班を整へて蹁躚として舞ひ始む。

曲

〽三壺雲浮七萬里之程分レ浪。五城霞峙十二樓之構插レ天。

此の朗詠終り、器樂のみとなれるころ、其の器樂の旋律に伴れて舞班一同二人竝びに列を整へて緩く上手より下手へ練つて、圓殿の背へ舞ひながら廻り入る。後列未だ下手に在るに前列は早く既に上手へ廻り出で來る。やがて第二の朗詠がかりに入る。

曲

〽謬入仙家一雖レ爲二半日之客一、恐歸二舊里一纔逢二七世之孫一。

此の朗詠に伴れて舞班三たび圓殿の背を一周し、三たび器樂に伴れて將に上手より練り出んとする時しもあれ、迢かに天の一方に當つて、遠く〳〵、殆ど何事を歌ふとも聞分けがたきほど微かに哀絶凄絶なる欸乃の聲聞え來る。舞班は少しく歩調を緩め、器樂に隨うて下手へ舞ひ進む。欸乃の漸く近く、漸く著るしくなり來るに伴れて、雅樂の調は彌〻緩く彌〻低く、舞班の列いつしかに一重竝びとなり、華かなる濃き色の服着たる舞手は著るしく減じ、歩調將た次第に力なく、且つ次第に緩かになりゆく。浦島怪しみて耳を欹つる思入れ。乙姫は端然たり。已にして舞班の前列は三たび圓殿の背に廻り入る。欸乃遠く、されど此回は頗る明かに聞え來る。

オヒワケ

〽親は子と言うて尋ねもすれど、親を尋ぬる子は稀れな。

此の歌の半ばに舞班は四たび上手へ廻り出で來る。但し其の服色は更に淡しき物計りとなり、後の方なるは殆ど白色に近く、且つ其の歩調は更に一段緩く、人數も更に一段疎らとなり、手振將た更に一段生氣を失ひ、さながら最愛の人を失ひたる葬儀の行列などの如く、見るからに痛ましげなり。已にして四たび下手へ舞ひ進む。これよりさき四面次第に薄暗くなり、浪は騷がざれど海かすかに轟き、怪光時々に電の如く閃き、舞班の最終列に忽然として加はれる一個の人影あり。白き衣裳を裳裾のあたり朦朧と着し下たる白髮の一老女

かなしげに頭を垂れて兩袖にて面を掩ひ、舞班の最後の列に隨ひて悄然として行く。浦島愕然と駭きて色を失し、覺えず曲彔を離れて起ち、圓殿の背へ廻り去る其の後ろ影を見送るうち、前の欸乃(ふなうた)は切れ、疎らなる舞班の最前列は五たび上手より練り出で來る。時に怪しき舞は歇みて、暗淡たりし舞臺また少しく明るくなる。浦島は怪夢を見たりし人などの如く、恍惚として前後左右を顧盼す。忽ちにして第二の欸乃(ふなうた)聞え來る。

オヒワケ

〽親は程經りゃ、　不具(かたわ)な子なりゃ……

此の歌と共に殆ど白色に近き色の服のみを着けたる疎らなる舞班は悄然として緩かに下手へ練り行く。四面また昏くなり、海底とゞろき電ひらめく。浦島慄然として、以前の老女や隨ひ來ると目を敧てゝ目迎す。欸乃(ふなうた)突として中絶し、舞班もまた突として途切れ、續き來る者なし。浦島も呆然として舞班の最終列が將に圓殿の背に隱れ去らんとするを見送る。その途端突如として

オヒワケ

〽……人でなしなりゃ尙ほ更に。

と前の欸乃(ふなうた)の殘りの句、骨に沁み入るが如く聞え來ると同時に、突如として以前の老女、今浦島が階段の方へ歩を進めて舞班を見送れる目前へ、影の如く、幻の如く、其の悄然たる背影を現す。浦島の之れに目を注ぐ其の刹那に忽然として現るゝ一個の白頭翁、衰羸極まりながら尙ほさすがに氣高きを鶴の尾羽の如く、是れ亦た白衣、白裳、龍鍾と頭を垂れ、手を拱き、老女の背に附添ひて、愴然として行く。浦島おぼえず聲を放つて絕叫す。翁も老女も、身を翻して浦島が方を見返る。老女は階段の方へ驅け寄らんとする、翁は强ひて之れを引留む。此の刹那に於ける二人の顏色、態度、科介、宛然として序幕第三段末のと相同じ。老女は限りなきの思慕と慈愛と哀傷と苦痛とを、翁は悔恨と惻隱と哀傷と就中今なほ胸中に鬪へる一種言ふべからざる煩悶の爲に强ひて愛情を抛たんとする斷腸の苦痛とを忍ぶものゝ如し。

浦島は殆ど我れを忘れて階段の端まで轉ぶが如く走り進みて

浦白

〽母御前(はゝごぜ)か。父御(てゝご)も……

と叫びもあへず、覺えず蹌踉(よろめ)き、けしとびて、忽ち階

下へ轉び落つ。翁、倏忽焉として消えて跡なし。舞班亦た驚きて四散し、樂も歌も悉く歇む。舞臺いつしか明るくなり、怪しき響も止み、怪しき光りも消ゆ、乙姫は侍女、女童と共に階を下り、左右前後群り寄りて浦島を介抱し、粛々として殿上へ扶け入るゝと同時に、圓殿の帳悉く下る。

旣にして清く寂しく哀れなる雅樂（器樂ばかり）啾々として起る。諫むるが如く、止むるが如く、憐むが如く、愁ふるが如し。かくあること霎時にして圓殿は遠見の樓臺、廻廊と共に徐かに自ら迫り下る。

第四段

浦島　乙姫　女童二人

樂聲漸く絶えなんとし、圓殿の屋根將に沒し去らんとす。第三の欸乃鳴々として聞え來る。

オヒワケ
〽いとし可愛子に旅させ親よ。憂いも辛いも旅で知る。

此の歌の切れんとすると同時に、以前の海樹、海草ども又左右より漂ひ入りて滿目蒼然、屋根悉く沒し去る。途端に其の屋根の中央より、さながら浮び出づるやうに、姫は立身、浦島は膝まづき、女童（一人）は姫の後へに侍して迫りたる。

舞臺は元の通り一面に平舞臺、只の蒼々漫々たる千尋の海の底となる。浦島は序幕の服裝となり、肩には釣竿を荷ひたり。迫り止ると、浦島起つ。乙姫は輕く浦島の袂を控へる。と浦島輕く袂を拂ひて前へ進む。姫も徐かに立ちて隨ふ。

浦　白
〽別れては又逢はんこと難かるべしとや。わが心迷ひ傷んで、さながら二段にも裂けなんとす。されども故郷を慕ふ心は、今は先刻にも百倍せり、いかでかは

曲　白
〽止まることを得ん。

曲（一中）
〽君が切なる眞情を、嬉しむからに最ど尚ほ、近親が面偲ばれて。

と輕く姫に絡みて

浦　白
〽まげて一たび故郷へ、立歸ることを許したまへ。

姫は黯然たりし面をあげ

姫曲（長唄）

〽是非もなや。今更に、留めんことも中々に、長き別れとなるとても、蓬萊の契り永久に、我が影忘れたまふなよ。げに恩愛は人の世を、繋ぐ玉の緒。よればうみ、合はねばくるし。かにかくに、結ぼれ解けぬ亂れ絲、そも何時の日か絕つべき。

と嘆く思入れあり。徐かに浦島に絡みて振あり。始終人間の情に脆きを憐み思ふ靈物の氣高さを想像せしむるに足る風趣あるべし。やがて思ひ返したる體にて、浦島に離れ

姫曲

〽大方は、想ひやらるゝ其の折の、縺れ解さん玉くしげ。

と女童へ科。女童玉匣を浦島に捧ぐること。

姫白

〽此の匣の裡にこそ、我が影は籠りたれ。御情渝らずば、あはれ、此の匣をな開きたまひそ、たゞ身に添へて持ちたまへ。ゆめ〳〵開きたまふなよ。

曲

〽開かずば、君の御齡八千代經て、又花咲かん玉椿。つら〳〵椿色かへぬ、契りを忘れたまふなよ。

浦島玉匣を押戴き、

浦曲（長唄）

〽かたじけなしや形見ぐさ。蓬萊を永久に思ひ出の、君をば焉で忘るべき。

と徐ろに纏綿して舞ふ。やゝ長き合の手に合せて女童も絡み、神と人との別離の情を微示する高尙なる振あり。とゞ

浦曲

〽我妹子と、言ふも畏き神媛に、愛しまる我れ。

姫曲

〽別れても又逢はん

浦曲

〽といふ此の別れ。

姫　曲　〽嬉しきか。そも

浦　曲　〽悲しとも

姫　曲　〽え分かねてそは妙にして。

と宜しくありて

浦　曲　〽名殘りは盡きじ。さらばなり。うつくし人よ。また歸り來ん。

と三人宜しくありて、浦島は同じ位置に在りて上手へ、姫と女童とは次第に奧へ、互ひに見返り／＼舞ひ隔たる。此のうち舞臺は次第に薄暗くなりて、浪の音漸く高く轟き來り、例の魚ども四方より紛々然として游ぎ入り、浦島と姫主從との中を隔つ。青き靈しき光又時時に閃きて浪を照らす。さて姫と女童とは段々遠くなりて、姫は女童ほどに、女童は偶人ほどに小さくなると同時に、正面奧の方へ龍宮城の外郭らしき遠景模糊として浮ぶ。

浦　曲　〽さらばぞ。さらば。いざさらば。

と此の曲一ぱいに舞臺彌〻朦朧となりて、龍宮も姫も女童も見えずなり、浪の音のみ寥々と響き垂幕徐ろに下る。

詰之幕

前　綱野神社境内
後　澄の江の浦

前曲

中之幕より詰之幕の間は音樂にて繫ぐ。初めは只寥々たる浪の音。やがて際立たぬやうに、いつとなく西洋器樂を加へて名家の作に係る海の曲を奏し、かくて次第に陽氣なる洋式器樂に移り、最後に半西洋式、半日本式とも謂ふべき陽旋律に變じ、これには三絃をも加へ、やがて幕のうちにて左の唄を歌ひ、舞踏の足音をも聞かす。

曲　〽忍ぶ夜毎に六つの苦がそろ。雨に霰に露に芝垣。犬の仇吠月は尙ほ。ナヨ月は尙ほ。

此の唄の切れぬうちに幕をあくる。

第一段

村人甲　同乙　同丙
其の他大勢

舞臺は一面の平舞臺。處は丹後の國竹野郡網野村網野神社の境内。時は天長二年春三月十五日、夜半過ぎ。近村一圓の男女、結婚したると結婚せざるとの別なく、四十歳以下なるは擧りて、幼きも幾人か、白髪の老婆も只ひとりは交りて、けふを晴れと着飾り、群れつどひ、社日の夜を徹夜に宴みて、遊び戲れ、歌ひ舞へり。

正面中央には三抱もあるべき山櫻の老樹、爛漫として花の咲亂れたる枝は四方八面に擴り、彌生半ばの朧月に照らされ、折々駘蕩たる春風に搖曳き靡く景、さながら淡紅の八百重雲が大地近く降來て杜の頭に漂へるかとも見え、さなくば巨大なる天然の花天蓋かとも見えたり。此の老櫻樹の周邊には方幾十間もあるべく見渡さるる潤然としたる芝生。又其の上手、下手、正面奥共に、處々に常盤木に交りて僅に幾株かの櫻木。蒼穹は花の枝にて殆ど見えねばかりなれど、下手奥へ斜に一帶花の洞の如く開いたる部面は阪口にして、こゝより人々往來す、又こゝより奥の方遙かに日本海の遠見。黑みたる白帆の影なども折々微見え、海面蒼茫と煙り、十五日の朧月はや西天に傾きたり。されど花の色いと鮮かなれば、あたり曙のやうに微明と明るし。

老櫻樹よりは幾歩か奥へ退りて、やゝ上手に、古風なる自然石をそのまゝに組み上げたるかとも見ゆる巨大なる石の華表。その華表越しに上手に、石の磴　櫻花の間に隱見し、それより次第に高くなりゆく勾配のこゝろ、樹木參差として重疊し、亭々として空を摩する老杉古檜の間、蒸すが如き花の雲の切れ間に如何にも神さびたる神社の屋背。そのうしろ、近き山遠き山、いづれも花の雲、緑の木々の間に隱約たり。幕あくと、男女二人づゝ手をとりあひ、およそ五組ほど、下の曲に伴れて老櫻樹を周りて舞踏す。(曲は西洋樂に擬ふ陽旋律にして、舞踏にも何となく西洋舞踏の面影あり)舞踏者の他は、櫻の根がたに、芝生に、不行儀に休らひ、酒飲むもあり、遊び戲るゝもあり。

曲
〽いつの何時見そめてそめて、我れが身は
只磯邊の千鳥。啼かぬ間もなや君ゆゑに。
ナヨ君ゆゑに。

曲
〽面白いぞや今咲く花は。蝶も來て舞ふ小
鳥も來啼く。後の散りばは知らねども。
ナヨ知らねども。

曲
〽飲みやれ歌やれ先きの世は闇よ。春は二
度無い笑ふ時や稀れぞ。今が半ばの花盛
り。ナヨ花ざかり。

舞踏三回にして收まると音頭取りらしき生醉ひの男(三十以上)中央よきところに定りて

甲　白
〽ハ、、、、、さて〳〵面白いことがあつたぞ。先づ
休ましめ。休ましめ。

と、これにて一同思ひ〳〵に或ひは木の根、捨て石に腰をかけ、或ひは芝生へ横になる。

甲　白
〽いや、なう〳〵。例年のことであれど、此の春のやうな樂しい祖神祭はおりない。去年の豐年といひ、今年の大漁といひ、此のやうな目出たいことは無からうによつて、徹夜して舞ひ歌ふことでおりやるが、たゞ編みつれて舞ふばかりでも面白うない。何か奇特な案じは無いかぢやまでい。

同じく稍〻酒に醉ひたる三十ばかりの男乙

乙　白
〽はてさて、よいところへ心附かしやれた。いかさま同じことでは面白うない。さて何が面白かろの。

大勢一どに首を傾ける。

大勢白
〽何が好うあろの。

乙　白
〽かうつと。

大勢白
〽かうつと。

甲　白
〽や。思ひついた。かうもあろか。

大勢白
〽はて、どうもおりやる。

甲　白
〽されば、先づ、かうでおりやる。昔から此の祭りは
男と女と編みつれて舞ふが恒例であるによつて、既
に古へ人の歌にも
と物體ぶることありて
甲　白
〽行き集ひ、嬥ふ嬥ひに、
曲　白
〽他妻に
曲（清元）
〽うらも交らん。うらがのに、他も物いへ。
此の山の、祖神さあも今日のみは、見て
も見ぬふり。粋ぢやまで。
と道化模様の振ありて收まる。
大勢白
〽やんや〳〵。
甲　白
〽するからに、今宵の祭りに立ち交はらぬと言ふとは
有るまいとでおりやるに、皆もよう知らるゝ濱詰の
郎子と間人の郎女とのみは、來る〳〵と言うて只今
までも面見せをせぬ。何がさて、此の中一つになつた
ばかりなれば、物恥ぢをするのでおなあらう。何と、
あの初々しい今夫婦に、早う來なんだ償ひぢやと言
うて、馴れそめの物語をさせたらば、どうあらうぞ。
大勢白
〽これは一段と面白からう。
乙　白
〽したが、たゞ物語をせい、物語をせいと言うても、
定めし羞んでゐて、埒があくまいによつて、來と見
たらば、囃子物をして、歌へ舞へ、舞へ歌へと責め
うでは無いか。
甲　白
〽これは又一段の案じぢや。早う其の準備をせしめ。
乙　白
〽なか〳〵。早う其の準備をせう。
此のうち二三人阪口より下手を見下すことあり。
丙　白
〽や。とかういふうちに、あれ、あしこへ、其の今夫
婦がわせたさうな。
甲　白
〽なに、わせた。

乙　白
〽そしたら、早う呼ばはしめ。
丙　白
〽さらば呼ばはらう。
と阪口より下手を見下し
丙　白
〽ほうい〳〵。

第二段

村人甲、乙、丙　濱詰の郎子
聞人の郎女　村童數人
其の他

此のうち、前の舞踏の旋律（但し器樂ばかり）に伴れて、阪口より濱詰の郎子先きに聞人の郎女附き添ひて登り來る。郎子は齡二十一二、郎女は十六ばかり。二人ながら容顏、風丰衆に勝れ、とりわけ世馴れぬうちに天眞流露の美しさ見ゆる取做し。やゝ人に重んぜらるゝ分際の男女らしく、服裝も鄙ながら都びたり。器樂歇むと皆々二人を迎へて

大勢白
〽やん〳〵。

と囃す。二人は無言にて皆々に會釋する。甲は進み出て
甲　白
〽いや、なう〳〵。足下達の來やうが遲いによつて、皆が甚う腹立ちでおりゃる。償ひをせねばなるまいぞよ。
郎子白
〽これはまた迷惑なことでおりゃる。したが遲う參つた不祥なれば、われらに似合うたことならば、何なりとおっしゃりませい。
甲　白
〽外でもない、足下達の馴れそめの物語が聞きたい。
郎女白
〽はれま。戲言を言はします。
郎子白
〽そのやうなことは、何とぞ赦させられて下されい。
乙　白
〽物語をさしゃらずば、歌なりと歌はしませい。
郎子白
〽それは一段と迷惑でおりゃる。
丙　白
〽したら舞はしませい。

郎子白
〽それは何に迷惑な。
乙　白
〽いや〳〵。是非に歌はしめ。
郎女白
〽すればと言うて。
丙　白
〽さらば舞はしめ。
郎子、郎女白
〽さ、それは。

と、これにて甲は左右へ目くばせすることあり。

甲　白
〽さて〳〵、情剛な人たちでおりやる。此の上は、皆が寄りたかりて囃したて、何かさしゃるまでは止むることでは無いぞ。それ。囃さしめ。一、二、三、一、二、三。

と、これより躁急なる旋律の西洋器樂に伴れて、醉ひたる甲乙音頭取りとなり、他の者も交りて、櫻の枝などを持つ者も有りて、神樂囃子樣の手振にて、逃げまはる二人を中に取りこめ、踊り廻ること二三回。とゞ二人は手もて四方の人々を制し。

郎女白
〽まあ〳〵、待つてくれさしませ。
郎子白
〽此の上は是非がない。浮いたる戀で無い證明に、日來思うこゝろまゝを。
郎女曲白
〽すれば此處にて
郎子曲白
〽語らうず。

と宜しく介。大勢頷きあうて退る。

郎子曲（清元）
〽誰が蒔き置きて戀ひ草の、人の心に萌えそめし、春ともなれば我れ知らぬ間に、野邊に御園に若草の、初花匂ふ染めごろも。袂に餘る歎ちぐさ。
郎女曲（清元）
〽色も香りもえならねど、實は何を戀ひぐさと、問へど音なき鼓草。

二人曲

〽やがて、心づくしや、命をも棄てゝ世に菫(すみれ)草、彌や眞情(まごころ)の深見草。なに如(し)かめやも。

囃子曲

〽永久(とは)の眞理(まこと)を知る草を、いづこの誰れが戲(たは)れ草(ぐさ)、やれ浮き草よ色草(いろぐさ)と、仇口々(あだくち〴〵)に誇りぐさ。穢(きたな)まれては我れからも、汚(よご)れがちなる草の床。

二人曲

〽此の花の香(か)に牽かれ來て、愛(め)づる千種(ちぐさ)の花の色。

と二人纏綿して優婉なる振ありて收まる。

皆々白

〽やんや〳〵。

甲　白

〽さて〳〵、興がることであつた。まづ一つ飲ましめ。

と、これにて若き女どもに、只ひとり白髪(しらが)の、腰の曲りたる老女も交りて、二人へ酒盃(さかづき)を勸むることなどあり。よき頃に下手（奈落）にて村の童らの叫(わめ)く聲々聞ゆる。やがて村の童ら三四人阪口より馳せ登り來る。

童甲白

〽今あしこへ、知らぬ國の人のやうな、けぶな小爺が來(く)るぞや。

童乙白

〽着る物も破れて、氣ちがひのやうぢや。

そのうちの一人阪下を見下し

童丙白

〽あれ〳〵。こちらへ來(く)るわ。

皆々の方へ向ひ

童丙白

〽皆も來て見さいやい。

これにて大人(おとな)どもゝ幾たりか阪口へ集(たか)る。

童甲白

〽そらこそ腹を立てた。

童乙白

〽釣竿を振上げたわ。

童丙白

〽早う逃い。早う逃い。

童ら上手へ逃ぐる。大人(おとな)どもゝ左右へ開くと、下の曲に作(つ)れて、よき頃に浦島いづる。

第三段

浦島　村人甲、乙、丙　郎子　郎女
村嫗　村女　村童　其の他

浦島は序幕の扮裝のまゝながら、衣裳ところどころ綻びて、下着は上着の綻び目より露れたり。（但し斯くして下着の金襴が上着のやゝ淡しき染色と照りあふやうに物するなり。）頭髮も元結ひちぎれ、鬢の毛美しく紊れて肩に懸り、上髭も下髭も美しく生ひ延びて蒼白なる顏色と照りあへり。左手には玉匣を抱へ、右手には折れたる釣竿を携へたり、阪口を登りつゝも左右を訝しげに夢心地にて打眺むることあり。

浦曲（長唄）
〽山ざくら、誰がいつ植ゑて花の雲。晝かと見れば夜半にして、夢かと見れど夢ならぬ。あら、おぼつかな。蓬萊山に、在りし三歳歟歸り來し、今歟いづれか夢現、分け惑はるゝ人の山。など知る顏を見ぬやらん。

と宜しくありて、正面中央に定るまでの間、群る男女氣味わるげに立離れて取卷き、目引き袖引きして笑ふもあり、眉を顰むるものあり、さすがに賑かなりし春の山暫し秋さびて森閑たり。浦島左右を顧りて思入れあり。

浦　白
〽なう〳〵。そこなる里人たちに物問ひまゐらせうず。浦島の尉が宿は何處許にて候ひつるぞや。

甲　白
〽なに。浦島の尉とや。聞いたることもなし。

乙　白
〽その尉とやらは近う爰許に移らしやれた人か。

浦　白
〽いや〳〵。曾祖父が世よりも古く、此の里に住み馴れておりやる。

甲は左右を見返り

甲　白
〽足下達は聞いたることがあるか。

丙　白
〽聞いたることもなし。

大勢聲を揃へて

大勢白
〽聞いたることもなし。
浦島小首をかたぶけ
浦　白
〽おみたちは近う爰許に移らしましたか。
甲　白
〽はれ。むざとしたことをいはるゝ。曾祖父の世より
も古く、爰許に住み馴れておりやるを。
浦　白
〽はれ。足下こそむざとした。浦島の尉を知らいで曾
祖父の世より古く……はゝゝゝゝ。浦島の尉こそは
曾祖父の世よりも古く……
甲　白
〽いや／＼。我等の父ぢゃ者こそは……
甲ちよっと氣込むを丙止めて
丙　白
〽なう／＼。言葉論するは益ないことでおりやる。そ
の男は氣ちがひさうなに。それ／＼、子たちよ。女
たちよ。うかとして怪我はしさしますな。
これにて女子供立騒ぐ。浦島けしきばみて
浦　白
〽なに。それがしを氣ちがひとや。

丙　白
〽えい。何を腹を立つことがあるもので、まづ其の姿
を見さしめ。
浦島初めて我が姿に心附きし思入れ。
浦　白
〽やゝ。此の姿は。
童甲白
〽その釣竿を見い。
浦　白
〽やゝ。いつの間に折れたるか。
此の時大勢聲を揃へて
大勢白
〽それ／＼。その髪を。その髭を。
浦島駭きておのが頭を捜り、鬚髯を撫て、袖を見、裾
を見、竿を検し、玉匣を眺め、驚き呆るゝ科介いろい
ろありて
浦　白
〽やゝゝゝゝゝ。
驚きて其處に跪づくこと。大勢聲を揃へて笑ふ。
大勢白
〽はゝゝゝゝ。はゝゝゝゝ。

童ら手を拍ち、踊りまはりて囃す。

童　白

〽氣ちがひよ〱。のさやい〱。

女共はさすがに氣の毒がる。

女共白

〽笑止や〱。

浦島は尙ほ夢を見る心地にて皆々に向ひ

浦　白

〽さらば此の夥しい人々のうちに、只ひとりだに

曲　白

〽尉をも姥をも

と思入れありて

浦　曲

〽浦島と、ゆふ潮波(じほなみ)や寄邊(よるべ)なき、我が身の上の訝しや。

と立上りて怪しみ訝る模樣の振ある。童ら之れに絡みて嘲弄する模樣の振あり。とゞ浦島は童らに突倒されて蹌踉倒(よろめきたふ)るゝ。童ら囃す。

童　白

〽のさやい〱。

大勢笑ふ。

大勢白

〽はゝゝゝ。

女共白

〽いとほしや〱。

此の時白髮の老女、腰を叩き〱浦島の傍へ進む。

老女白

〽いや、なう〱。たんだ今やう〱のことで思ひだいたことがおりやる。浦島とやらがことは妾(わらは)が幼(をさな)い折に祖母(ばゞ)ぢゃ者から聞いことがおりやる。

浦　白

〽や。聞かしましたとか。さても〱耳よりな。早う語らしませ。聞かしてくれさしませい。

老女白

〽何と。聞かしますか。

浦　白

〽なか〱。

老女白

〽さらば語らう。

と思入れ。下の曲に伴れて、よきほどに立上る。

老女曲（常盤津）

〽婆(はゝ)が目は、霞めるからに水の江の、里ち

ふとこに其の往時、とつと昔に澄の江の
と、これにて右に丙の男を、左に若き女一人を招き、
下の曲のうち、男を浦島に、女を少女に擬へて絡ます
ることあり。

老女曲

〽浦島の子が鰹魚釣り、鯛釣り飄兮七日まで、家にゃ戻らず幻しの、怪な女子と乳繰りあうて、親と爭ひ激論みあひ、後の歎きも白波分けて、漕いで去にゃびっくり。親たちゃ哭くやら、叫くやら。こけて轉んで足摺りしても、復と歸らぬ世をうらしまの、子を戀ひ死の物語り。

と宜しくありて收まる。此の間浦島は斷腸の悲みに得堪へぬ思入れ。

甲　白

〽して〳〵、それは何時頃の事ぢゃ。

老女白

〽さればいの、祖母ぢやが語られた折が、かうであつたによつてと……おゝ、さうぢゃ。今より凡そ三百年。

浦島更に愕き呆れて

浦　白

〽なに、當時より今日までに、三百年を經たりとや。

老女白

〽なか〳〵。

浦　白

〽やゝゝゝゝ。

と空を見つめ驚く介。童ら其の貌を見て囃す。

童　白

〽氣ちがひよ〳〵。

浦　白

〽さては只ひとりの由緣の者だに、此の世には無いかぢゃまでい。

此の時までに老櫻樹の根かたに退きて始終の問答を聽き默然たりし郞子と郞女、笑止氣の思入れありて進みいで

郞子白

〽いや、なう、そこなるお人。そも〳〵御ン身は如何なる人にておはするぞ。

郞女白

〽浦島どのとやらに由緣のお人か。

浦島二人を左視右視て
浦　白
〽なう。嬉しうも問うて賜はり候ひつれ。我れこそは
　其の往昔の浦島が子なる者にて候ふよ。
大勢聲を揃へて
大勢白
〽なに、浦島が子な者とは。
老女白
〽すれば、あの、三百年も往昔の
郎子、郎女白
〽浦島どの丶
皆々白
〽子なりとか。
浦島左右前後を見返り
浦　白
〽なか／＼。
甲　白
〽はれ。むごとした。
乙　白
〽はれ。すぢもない。
甲、乙、丙白
〽は丶丶丶丶。

大勢聲を揃へて
大勢白
〽は丶丶丶。
浦島遂に耐へかねて泣き伏す。
丙　白
〽一定くやつは氣ちがひでおぢや。
童ら聲を揃へ
童　白
〽きちがひよ／＼。のさやい／＼。
大人も聲を合せ。
大勢白
〽きちがひよ／＼。
此の叫び聲いつとなく拍子づき、微かに西洋器樂に合はすること兩三回にして浦島愁然たる貌をあぐる。西洋器樂歇み、徐かに曲になる。
浦曲（長唄）
〽悲しやな。父母の、世に亡き魂は代々を
經て、呼べども答へあら海の
器樂又微かに起る。
童曲（陽旋律）
〽きちがひよ／＼。

浦曲 〽神女が誠へ今ぞ知る。

器樂漸く調子高になる。

童曲 〽きちがひよ〳〵。

浦曲 〽童の我れを狂人と嘲るも道理や。幾百歳を經たりとは夢にあらじか。

器樂に伴れて大勢の聲々。

大勢曲（陽旋律）〽きちがひよ。

浦曲 〽現にてあるか。これはそも我が身なるかも。他人か。

童曲 〽きちがひよ〳〵。

浦曲 〽誰ぞ教へてよ。これなるは他か。我が身か。

大勢曲 〽きちがひよ。

浦曲 〽我が身か、他か。

女ども覺えず聲を揃へて、三絃に合せて

女曲（長唄）〽いとほしや。

浦曲 〽あら。おぼつかなの亂れ心や。

女曲 〽いとほしや。

童曲 〽きちがひよ〳〵。

大勢曲 〽きちがひよ〳〵。

と西洋器樂次第に調子高になりて、「きちがひよ」と「いとほしや」と交代となり、綯ひ交となり、とゞ西洋樂は全く三絃の曲調を溺らす。是れより先き浦島は釣竿を放り出し、袖袂を引裂くことなどもあり、只玉匣のみを抱いてあちこちと狂ふ如く走り廻る。童らを先

きに大人も交りて、西洋器樂に伴れて逐ひ廻し、とゞ浦島を下手へ追ひ込む。童ら先きに大勢ついて入る。女共ばかり殘る。郎子と郎女とを音頭取にして、女ども一同浦島の行きし方を見やりて聲を揃へて曲。（優人自ら謠ふ。）

一同曲（長唄）

〽あら。いとほしの旅人や。翼は傷み脚折れて、歸る古巣に只一羽。只一羽

郎子曲

〽音のみ啼く。音のみ啼く友無し千鳥啼き啼きて、狂ひや死なん物ぐるひ。いたましや。

一同曲

〽あとを尾うていで／＼後を。いざや救はん尾うて後を。

と郎子、郎女は宜しく振ありて二人にて浦島の後を尾ひ行くといふ思入れ。皆々へ科介。これにて垂幕をおろし、又浪の音、松風の音にて繋ぐ。

第四段

浦島　郎子　郎女　乙姫

やがて幕のうちにて、下の欸乃に浪の音を通して、同じ聲にて次第に遠く微かになるやうに、同じ歌を三度歌ふ。

オヒワケ

〽むかし思へば恨めしゅござる。なぜに昔は今無いか。

三度目のを歌ひ切ると垂幕を捲上ぐる。

舞臺は一面の平舞臺、序之幕第一段と殆ど同じなり。中央の磯馴松のみは序之幕のよりも太く、幹は折れ、枝振も多少變り、根は高く上りて蟠屈れり。月は既に沈みて、黎明の近づける體。下手波打際へ折々浪打寄することあり。すぐにカケリになる。

浦曲（ウタヒ）

〽我れや他他や我れとも白雲の、いつまで空に迷ふらん。

と此の曲と共に浦島前の場の服裝ながら、上着は殆ど綻び盡して、やゝ綺羅やかなる下着の著しく現れたる扮裝、倚には玉匣のみは大切げに搔抱き、一さんに上手

より走りて出て來り、下手波打際まで行くと浪打寄すろ、おぼえず逡巡となりて三四歩後ろへ戻りて定り、きっと思入れ。

曲(長唄)

〽思ひ知る。父の怒りの言の葉を、今こそ思ひ當りたれ。返らぬ昔し悔めども、せんかた浪に七代經て、同じ浦邊に漂ふ浮標の、いつまで斯くて世を經べき。あぢきなや。

此のうち悔恨惆悵の振宜しくありて、とゞ打伏して泣き、やがて又思ひ返したる思入れ。

曲

〽など斯ばかりに我が心、弱りもしつる蓬萊邊の、神女の契りあるものを。

と起ちて又浪打際へ歩みゆき、神女を慕ふ模樣の振あり。

曲

〽とは言ひながら何とせん。たづきもなしや八重の隈、

と海に向ひて絕望の振ありて又坐り、愁ひの介。こゝへ忙しき合の手に伴れて郎子と郎女後を尾うて出づる。

郎女曲(長唄)

〽あれこそ先きの物ぐるひ。

郎子曲(長唄)

〽いで〳〵慰諭め將てゆかん。

郎女曲

〽なう。返らぬを徒らに歎きたまふな旅人よ。

と二人愁然たる浦島の左右に立寄りて慰め和睦むる模樣の振あり。されども浦島はそれには少しも耳を傾けぬげの思入れにて又振。

浦曲(長唄)

〽山ならば、可し其の山の、雲井の峯も何あらん。川ならば、可し瀨を速み、岩に碎けん我が心。堪へぬ惱みを嗚呼如何にして、蜃氣樓邊の懷かしや。

と又起ちて波打際へ狂ほしげにかけよる。二人あわてて取抑へながら

郎子曲 〽あら。いたはしや。何ごとも、耳には入らずさふらふよ。

郎女曲 〽なう。その持つたる玉匣は、何せん料にてあるやらん。

と、これに浦島はじめて我が抱ける玉匣に心附く思入れ。

浦曲 〽なに。此の持つたる匣をば、如何なる料にするぞとか。今こそ思ひ出したれ。

と懐かしげに玉匣を打かへし〳〵打眺めつゝ

浦曲 〽あら。なつかしの海媛やな。此の匣だに有つならば、逢はんと言ひし日は何時ならん。逢ふべくば今をこそ。胸の悶えに我が腸も、ちぎれ〳〵の今こそ今よ。今ならで、いつ逢はんといふ。つれもなや。

と匣を枷に煩悶と戀慕とを現す振ありて

浦曲 〽面影の宿ると言ひし此の匣、ゆめ開くなの誓約も、今は早や何かせん。

と彌〻狂ほしくなりて、紐を解く〳〵、既に蓋を取らんとする。二人留めて

二人曲 〽なう。さる由緒ある箱を、粗忽に開きたまふなとよ。

と、これより稍〻長き合ひの手。開かんとする、開かすまじと止むる。三絃に西洋器樂を交ふ、折々和し折々和せざる箇所あり。とゞ浦島蓋を取る。白氣朦々として匣の裡より立昇り、老いたる磯馴松の梢を横ぎりて煙りの如く白雲の如くに棚引く。浦島は卒然として眩暈き、高く持上りたる松が根の彼方へ仰向けに倒れ伏す。郎子と郎女とは驚き怪しみて仰ぎ見る。中空高く漂へる白氣のうちに、此の時髣髴として現るゝ海津少女。

乙姫曲(東遊) 〽野麻騰毘登可是布企阿禮天久毛美駝禮

所企遠理等母與和遠和須良須奈

郎子と郎女とに對ひて「我が影を忘るな」といふ意の、簡古として清淡なる、如何にも神々しき科介ありて、白氣と共に暫し中空に漂ひ、やがて見えずなりゆく。二人は只惘然として見送りゐる。やゝありて我れに歸りて

郎子、郎女曲（長唄）
〽ふしぎやな。人かと見えて神かとも、拜まれたまふ面影を

郎子曲（長唄）
〽何に喩へん。彌生山、花爛漫たる萬木の、精靈や凝れる女性神。

郎女曲（長唄）
〽星に見ざめて八千草の、花にや天降る月少女。

郎子曲
〽稀有に尊き影向の

二人曲
〽まぶし。いつくし。ありがたや。いつの世か忘れん。

と渇仰模樣の振宜しくありて、神女の消えゆきし方の空を、二人は跪て伏拜むことあり。これより先き松が根に倒れ伏したりし浦島いつとなく影を隱す。二人此の時心附きて

郎子曲白
〽あら。忘れたりや。物狂ひの、訝しや影も無し。

と二人立上りそこゝを尋ね求めんとする途端、上手にて曲。

浦曲（ウタヒ）
〽夢は覺めたり長永に。夢は覺めたり長永に。殘るは骸なるらん。

と此の曲の中ばに、浦島悉く白頭、白鬚髯、瘦え皺みたる老翁となり、衣裳も上着の悉く脫げ落ちたるため自ら扮裝の一變したるやうになりて、徐ろに能がカリにて舞ひ出づる。

浦曲（長唄）
〽わが盛り何方行きけん白雪の、積るもよしや老いの阪、なに來しかたを歎かん。

と高古莊重の振ありて二人に向ひ

浦曲 〽なう〳〵。それなる青年よ。我れ或時は影を追ひ、又或時は形のみ、老いぼれにけり片輪車の、足弱車時勢にもおくれし癡愚の我れに

と慚愧して將に覺悟の觀念に入らんとする模樣の沈痛の振。二人は之れを介抱り慰むる模樣に立添ひて

二人曲 〽われらも同じ幻しの、影を不思議に神鏡の、實にも眩き其の面影を、神と尊崇み我が姿、日に照らさん友かゞみ。

浦曲 〽をろの鏡の來しかたを、寫すや老の古鏡。

二人曲 〽よし曇るとも眞光の、磨かば竟に眞澄かがみ、千代を照らさん月の影。

と浦島の老い衰へたるを介抱り、その來しかたを悔い歎くを慰め、「われ〳〵介抱しまゐらせん」といふ意を彩爲かす振よろしくありて、浦島を松が根へいざなひ、そこに憩はしむ。かくて又やゝ長き合の手となる。此の合の手は三絃と西洋器樂との連奏、旋律も愉快なる陽旋律なり、郎子と郎女と相纏綿して舞ふ。(ところどころ微かにバレーの面影あるべし。)すべて前途望み海の如き青年の快活と意氣と天眞爛漫の美とを仄めかす振あるべし。とゞ又長唄がかりに戻ると浦島松が根を離れ

浦曲(長唄) 〽あら、頼もしの青年やな。蓬萊の相うつつ世に、見ん折も遠からじ。うれしさよ。

と典雅なる振ありて收まる、と又しばし合の手。(半西洋式、半日本式の器樂、三絃と西洋樂器との連奏。)これに伴れて二人は浦島を介抱り帮けて舞ふ。(此の振また半西洋式、半日本式なり。)とゞ又長唄がかり。

浦曲 〽見よ〳〵、やがて東方に、見よ〳〵、やがて東方に、豐阪昇る朝日影。闇吹き晴れて四方の山。四方の山

二人曲 〽朝づく日隈なく照らし、洽く惠む。朝づ

く日醜き忌まず、穢き舍てず。心は大空。
餘光は地を

三人曲
〽離れず永久に。永久に離れず射す日影。
あはれ、あはれ、今こそ悟れ現世を、忌まで蓬萊に渇仰るゝ、忌まで蓬萊に渇仰るゝ、私し心無き民ぞ、蓬萊移さん現世に。移さん蓬萊いつか此の世に。

耶子、耶女の曲は稍〻純粹なる西洋式の陽旋律に物して西洋樂器を三絃に合するを、最後の三人一しよのは和洋折衷の陽旋律を取りまぜ、三人連彈にて宜しく幕。此の曲の初めより奧の方の空に朝日影の反映する心にて一帶の薔薇色を見せ、其の末に近づくに隨うて上手へ近き山、遠き山の模糊たる書景を繰りいだし、海原の遠見の段々下手へ隱れゆくに連れて、とゞ東山に曈曈たる旭日の差昇り、金光を八方に射出するさまを見すること。

新曲赫映姫

序

本篇は予が所謂新樂劇の第二の圖案なり。用意の『浦島』と同じからざるは、主として題材の然らしめし所なれど、また多少『新樂劇論』以外に出でて試摸し、以て其の不備を補はんと欲せしにも原けり。されば、彼れにては舞踊を本位と立てたるに、是れにては謠唱大分を占め、彼れは俗曲を髓腦となしたるに、是れは寧ろ能樂を根幹と做せり。但し構想、措辭、旋律、樂器等、一切舊格に泥むことなし。

明治卅八年十月中旬

人物

竹取の翁
竹取の僕
阿倍の御主人　同小童
車持の皇子　同舍人　同小童　同雜人甲乙
工の司漢部内麿　同工人甲、乙、丙
帝　大臣　官人、小童、雜人等大勢
六衞の司　武夫大勢
竹取の嫗
内侍中臣の房子　女官六人
赫映姫　同侍女甲、乙

處

前後とも竹取が家　畿内

時

前は彌生、後は中秋　奈良朝時代

前之幕

第一段

竹取の翁と嫗と場に上る。

二人　〽千引き石根は移すとも、千引き石根は移すとも、心根をいかで移さむ。

嫗 〽なう〳〵。わが夫に申し候ふ。凡人には似たまはぬ姫なり、帝の召させたまふをも畏しとは思はずとこそ宣へ。強ちに責めたまはゞ、げにやがて消え失せたまひなむ。この上は如何に勸めたまふとも、其の效あるまじく候ふ。

翁 〽あはれ。それこそは、多くの貴人を悶えさせて、身をも誤らせつる心ばえの言はするなれ。有集に帝の勅とあらば、懐かしき答もするやと頼みつるに

翁 〽心あても虚ろとなりぬ。呉竹の、節節に生りし君なれば

嫗 〽たゞ一筋に眞直にて、剛くもありけり、節ある性の

二人 〽こちなくぞあるや此の君に

嫗 〽もはや二度の御ン使ひの、御ン入りあらうずる刻限にて候ふ。

翁 〽今さらに是非もなし、よし御ン咎めを下されむとも、只ありのまゝに申さむとこそ思へ。いで〳〵、これにて迎へまゐらせう。

翁と嫗と徐ろに好きところに坐ふ。

第二段

勅使、内侍中臣の房子、女官六人をゐて場に上る。

内侍 〽思ひの狹霧立つときは、天つ日だにも翳るなり。誰れかは闇に迷はぬ。

〽誰れか言つし、人生れて婦人の身となる勿れと。あはれ。百年の苦樂もおのれが力に由るといふこと、天下幾人の身の上ぞ。

一同 〽容顏瓊の如くにして、人を移すの粧ひあれば、葎が宿に生ひぬるも、やがて雲井の御ン詠め。

内侍

〽星の光りを氣劣りて

一同

〽み園生に匂ふ八千草の、花にも更に色ぞなき。あら〳〵目覺しの榮えやな。

と竹取が家の門に立停りて、内侍は女官の一人に向ひて

内侍

〽かけまくも畏き君の、再の御ン使ひとして、内侍中臣の房子が、まうできぬる由を申したまへ。

女官

〽心得申して候ふ。

と門内に向ひて

女官

〽いかに、讃岐の造麿はあるか。かけまくも畏き君の、再の御ン使ひとして、内侍の君の御ン入りにてあるぞ。とう〳〵迎へまつり候へ。

これを聞きて翁と嫗とは周章つる體あり。

嫗

〽み聲を聞けば今更に

翁

〽こゝろ怕れて日に向ふ

嫗

〽むぐらならなくに身ぞ顫ふ

二人

〽なぞもかく心怕るゝ

此の間に勅使一同は徐ろに進み入りて上座に坐ひ、翁と嫗とは、入りかけりて下座に坐ひて會釋す。

内侍

〽いかに。造麿、いぬる日立歸り、御ン返りごとを奏し奉りつれば、帝以ての外のみけしきにて、此の國に住まむ者の我が命令に背く、奇怪なり。よし嫗は何といふとも、翁の手に養育てたらむものを、などか心に任せざらむ。もし姫を奉りなむには、翁に冠りを賜ぶべしとこそ。逆鱗にあはゞあしかりぬべきぞ。とう〳〵姫に勸めて仕うまつらせ候へ。

翁と嫗とは恐れ畏みたる思入れにて

二人

〽いとも〳〵畏しとも畏しや

翁
〽いかで勤りを等閑には致り候ふべき。きのふもけふも、夫婦共に舌を爛かいて、彼の女童を說き諭いて候へども、諾とも申さばこそ。强ひて宮仕へに出だしたて候ひなば、消え失せなむと申す。

翁
〽この翁が手にて生せたるにても候はず、むかし山にて見つけたんなれば、心ばせも人には似ず候ふ。

翁
〽この上は是非もなし。老いたる奴をば罪なはせたまひて、彼の女童をば赦させられ候へかし。

翁も嫗も悄然として思入りたる體なり。

內侍
〽あはれ。是非もなき御答さぶらふよ。かぐや姫とやらむは、げにも凡人にては在さざんめり。さらぬだに情けの道は、諍ひをもて强ひたまふべきにあらざるをや。

內侍
〽東風暖を生じて、草木おのづから光りを浮ぶ。

一同
〽呵噓して花を促さば、瓶裡の牡丹發くとも、あたら傷まむ花の色。

內
〽いろ絲巻きを繰り返し

一同
〽たゞ小手卷の穩かに、とき諭したまへや。

と宜しく、嫗翁を諭す科介あり。

翁
〽あら。有り難き御ン情け。さはさりながら世に越えて

嫗
〽こはくもありける下心の

翁、嫗
〽なほ靡かずば如何にせむ。

內
〽げに珊瑚は碎くべうして、其の色を奪ふべからず。

翁 〽伽羅は燔くべしと雖も

三人 〽のこる香りを如何にせむ。

と三人思ひ惱む思入あり。やゝありて

内 〽思ひいでたり。此の家の、山本近かんなるぞ幸ひなる。

内 〽み狩の御幸したまはむやうにて、ふと帝の立寄らせたまはむはいかに。

内 〽愛憎大かたは眼に在り。見みゆる卽て言ひ知らず

嫗 〽くしき思ひの通ふてふ。

三人 〽ふしぎの驗し無からめや。

翁 〽なにごころもなくて候はむに、ふと御幸して御覽せられ候へとよ。

内 〽うれしやな。かくとだに

一同 〽なのりて歸る一つらは、霞む雲井の春の音づれ、如何ばかり、叡慮慰みたまふらむ。立歸り、いざや百敷に、聞え上げてむ。

と一同下手へ向ふ。翁と嫗とは入りかはりて上手へ廻る。

翁、嫗 〽奴等は、御幸を待たむ。心して、君が御幸を待ちてむ。

と勅使を送り出づ。勅使場を退く。

第三段

翁と嫗とは元の座に坐ひて奥に向ひ赫映姫を呼び出だす。

翁 〽なう〳〵。あが姫やおはする。語らひ申すべき事の

あり。とう此のところへ御ン渡り候へ。

輿にて

姫 〽なにごとにて候ふやらむ。やがて御ン前に参るべう候ふ。

と依然輿にて

姫 〽など狂ふ。地なる影に世人皆、光りは空にありし世の、其の來し方ぞ戀しき。

〽われ勝妙の資を享けて、嘗て、青瑠璃の殿に在り。頭に七寶の瓔珞あつて、胸に纖塵の業欲無う。行住一へに任す輿の來去に。たゞ折々の奉仕とて、月の桂の花咲けば、黒衣白衣の天少女、玉を砂の庭も狭に、翻すや舞ひの袖袂。其の羽衣を着るからに、無量光明具足して、飛行も自在なりけるが、不思議に得つる懈慢の咎め是非なくも、暫く下土に謫へて、現身となれるうたてさよ。現身の今ぞうたてき。

嫗 〽なう〳〵。翁の待ちわびたまひて候ふ。

姫 〽何事にて候ふぞ。

と姫よきところに坐ふ。

翁 〽またも帝の御ン使ひの參らせられ候うて、勅命に背かば罪なはせられむとあるぞ。尚ほやは仕うまつりたまはぬ。

姫 〽なに。帝の勅命に背かば罪なはせられむずとや。それを怖ろしともおもほえず候ふものを。

嫗 〽いや。若し宮仕へつかうまつりたまはゞ、翁には冠りをも賜はらむとなり。

姫 〽もはらさやうの宮仕へはつかうまつらじと思ふを、強ひて仕うまつらせたまはゞ、其の冠りつかうまつりて死ぬばかりぞ。只しかせよとだに宣給はせ候へ。

やがても消え失せなむず。

翁 〽な、な爲たまひそよ。官冠りも我が子を見奉らでは何にかせむ。さりながら、などて宮仕へを厭ひたまふぞ。死たまふやうはあるべき。

姫 〽さては尙ほ我が言を

姫 〽そゞろごとゝや聽きたまふ。三人の人に契りつる、其の約束もあるものを、帝の勅なればとて、など空にせむ。高貴なるに、心移すと浮世人の、思はむことの便なさよ。

嫗 〽げに道理と覺え候ふ。さりながら、大宮仕へをも厭ひたまふを、若し彼の三人の人のうちにて、阿女が望みたまへる品を、眞に取り得て來まさばいかに。

姫 〽誓詞は破るべうもあらず。切なる心の證し見する品を、實に持て來む人のあらば、從はむも是非なしとこそ。さはれ大かたの人心は

姫 〽世をいつはりの石作り

姫 〽天竺に二つなき、御佛の鉢といふは

翁 〽とほ山寺の賓頭盧が、前に年經し煤け鉢。

姫 〽露の光りを宿さぬを、それぞとは淺き底だくみ。

三人 〽われ淺ければ世人皆、淺しとや思ふしれものゝ、あはれ、世に許多ありけり。あさましや。

翁 〽かの大伴の大納言は、さすがに許る心は無し。

姫 〽蛟の顋に在りといふ珠をば賜べといひけ

れば

翁　〽げに武夫の早りかに

嫗　〽あさましや。咎なき妻をも去りたまひて

三人　〽さながらの手負猪の、たゞ勇みあらば足らむとや、無二無三に遠近の、山邊を獵り、谷に降りて

姫　〽蛟には逢はず

翁　〽蝮に嚙まれ

姫　〽たまをば取らず

嫗　〽蜂に螫されて

翁　〽手を空しうして歸られけるが

姫　〽やまうどのやうになつて

三人　〽やまうどのやうになつて、蝮に嚙まれてだに斯うぞかし。蛟に逢はゞ命あらじを。怖ろしの姫のやつが、人を殺さむとするぞとよ。と宣給ひけることをかしけれ。

と謠ひをさむる途端に

第四段

此の家の僕高らかに笑ひつゝ駈け來る。

僕　〽ハ、、、、。吉祥。きっしよ。きっしよ。祝はしめ。喜ばしめ。天が下の吉祥。

僕　〽あめが下のきっしよ。天が下のきっしよ。石の上の麿が、燕らめの巣から、てんころりと落ちた。子安貝が無うての、心安うおじやるの。おぞの麿よ。あはれ。燕

らめの巣から、てんころりと落ちた。天が下のきっしよ。

と拍子にかゝつて自ら謠ひつゝ、果しなく舞ひ踊る。

翁

〽やよ。何と申すぞ。石上の中納言のぬしが、あやまちしたまひつとは實か。

僕

〽なか〳〵。

嫗

〽さては燕らめの子安貝は、得求めたまはざりけるよなう。

僕

〽さん候ふ。いでや、燕らめのつまンびらかに、始終を語り申さう。

と悪見得をして座を構ふることあり。さて左の俗曲につれて振事になる。(曲は陰にて唱ふ。)

僕

〽さても其の後氣は逆上り、心はいとゞいその上、ふるき軒端に燕らめの、すはこそ子を産むござめれと、子安貝をぞ覘はれける。

〽折から一疋親つばめ、尻尾をおつたて、おつたて尻尾を、すん巣のまはりをひんらひら。ひんらひら〳〵。ひんらひら。時分は宵の間、それや引いた。

〽ふごの綱引きや、綱引きや恭の、中の大臣が巣を探す。占めたり。何やら、へらつく、ひらつく。物こそ握つた。早おろせ。といふ間にぼつつり頭顛倒。脊骨を打つやら腰の骨。あいた。あいた。あいた誰れに逢ひた。姫ぎに逢ひた。さて何を握つた。燕らの糞を握つた。

〽もの笑ひとぞなりにける。

と踊りをさむる少し前かたより彼方にて陽氣なる器樂の聞ゆることあり。嫗耳を立つる思入れありて

嫗

〽あれ〳〵。何人かまうで來と見えて候ふ。やよや、

外にいでて見て參り候へ。

僕 〽かしこまつて候ふ。

と門外に出で、向うを眺むることありて

僕 〽はゝあ。あれこそは、火鼠の裘とやらん、火にくべても焚けぬものを、持來うと受けあうた有福の愚人ぢや。ちやくと此のよしを申さう。

と門内へ戻り

僕 〽なう／＼。やんがて參りまするは、火鼠の裘とやらん、火にくべても焚けぬものを、持來うと受けあうた有福の愚人でおりやる。

翁 〽さては阿倍の御主人のぬしか。

僕 〽みうしとやら、あめうしとやら、いづれ鈍くさいをのこでおりやる。

翁 〽ともかくも爰にゐて、彼の人を迎へ申さう。

と一同居ずまひを改むること。

第五段

此のうち下の浮きたる俗曲につれて、右大臣阿部の御主人、小童一人をゐて、之れに火鼠の裘を入れたる箱をもたせ「かぎりなき思ひに燒けぬ裘たもと乾きてけふこそは着め」といふ歌を麗しき短册に書いたるを花の枝に着け、自ら肩にし、醉ひ浮かれたる體にて踊りつゝ場に登る。小童は始終かせになる。（曲は陰にて唱ふ。）

御 〽かぎりなき、思ひに燒けぬ皮ごろも、袂乾きてけふこそは、君に逢ふとて身は爰許に、魂はふは／＼蛻の唐の、船が媒つ、なう、妹脊中。何の五十兩、とち萬兩も、君の爲なら、何をしどりの、番ひ離れぬ、のほんのほん、ほゝんのほん、中ぢやえ。

と踊りながら竹取の家の門に着き、俄かに眞面目になり、容體を作ることありて

御 〽これは、右大臣阿倍の御主人が、王卿といふ唐土人

して、天竺より世にも稀れなる火鼠の裘を、買ひ取りて持参りて候ふ。はや〳〵受取らせられ候へ。

物體ぶりて言ふ。

翁

〽まづ〳〵御ン通り候へ。

このうち御主人は通りながら、小童に指圖して、裘の箱を翁の前へ直さす。

御

〽いや。先づ其の箱を御覽候へ。くさ〴〵の麗しき瑠璃を、いろ〳〵に彩りて、珍かに作りてあり。又取出だいて裘をも御覽候へ。金青の色して、毛の末には黄金の光り

御

〽かゞやきたり。あな。畏こ。五十兩といふ、錢にも代へし寶ぞや。

と得意の體なり。此の間翁、嫗打寄りて裘を取出し、さま〴〵に見ることあり。

翁

〽げに〳〵、寶と見えて候ふ。

嫗

〽あな。めでたし。火に燒けぬことよりも、淸麗らなること比ひなし。

と翁裘を捧げ持ちて起ち上り

二人

〽あな。かしこ。あな。かしこ。げに〳〵姫の、好もしがりたまふにこそありけれ。

と恭しく姫の前に直す。姫は只一目見て

姫

〽げに麗しき皮にこそ侍れ、わきて實の皮ならむとも知らず。火に燒かむに、燒けずばこそ

姫

〽人の言にも從はめ。なほ燒きて、試さむ。

翁

〽それよ。さも言はれたりや。

と裘を捧げ持ちて元の座に戻り、御主人に向ひ

翁

〽いかに。申し候ふ。燒きて見むことはざふらふ。

御

〽この皮は唐土にもなかりけるを、辛うじて求め得たるなり。

御

〽なに疑ひのあらなくに。いざ、火に懸け

て、見たまへ。

と此のうち翁は僕をさしまねき裘を渡すことあり。僕は受取りて好きところに立出て

僕　〽さらば、それがしが火に懸けて見う。燃えぬとは稀有なものぢや。どれ、先づ、かざいて見う。

と火にかざす介。忽ちめら／＼と燃ゆる體。皆々驚く。

僕　〽やゝ。これはどうぢや。

御主人は色を失ひ、頭をかゝへ俯きてゐる。

姫　〽さればこそ異物の

翁　〽皮にてやありし。

姫　〽のこりなく

御　〽燃ゆと知りせば皮ごろも……

姫　〽火にやは堪へむ微風にも、堪へじとぞ見ゆる人心の、うたてやな、しかすがに、戀には神に似るなるを……

御　〽人にも似ぬか、我れはもや。錢を頼みて、此の日ごろ、用はねば、あはれ、智慧鈍り、騙られけるか。おぞの我れ。

姫　〽われ得がたきを求めしに、あるひは詐り

翁　〽あるひは又、直力に得むと急り

姫　〽あるひは他し力草を、たゞ頼むこそ果無けれ。

御　〽げに錢をのみ頼みける、報いに智慧の金錆びて、騙られけるか。悲しやな。錢積めば智慧も錆ぶるよの。金澤に魂も腐蝕るよやの。

と萎れかへりて竊々と場を退く。小童も從いて入る。翁と嫗とは呆れたる思入れにて見送る。

第六段

こゝへ御主人と入りちがへて車持の皇子に使ふる舍人旅装のまゝにて急ぎ足に出で來り、門邊に停りて

舍　〽いかに、申し候ふ。やがて此のところへ、車持の皇子の君の御ン渡りに候ふ程に、豫め其のよしを傳へ申せよとの御ン事にて候ふ。

翁　〽なに、車持の皇子の君が長き御ン旅路より立歸らせたまひぬとや。

舍　〽なか／＼。蓬萊山といふところにて、不思議なる玉の枝を得て、千餘日を經て歸りたまひつ。御ン家へも寄りたまはずして、此方へ眞ッ直に おはしまし候ふ。あれ／＼。もはや渡らせられて候ふ。

と此のうち車持の皇子旅装のまゝ先きに立ち、玉の枝を入れたる長櫃を從者二人に荷はせ、小童に古びたる笠一つ持たせ、疲れたる體にて場に登り、門べ近くなりて

皇　〽いたづらに、身はなしつとも玉の枝を、手折らで更に歸らじ。

と謠ひ／＼竹取が家に進み入りて上座にすまひて

皇　〽いかに。翁。命を捨てゝ玉の枝を、はる／＼と持來たりてあるぞ。とう赫映姫に見せ奉り候へ。

とすべて大へいなるこなしなり。此の間赫映姫思入れありて

姫　〽おぼつかな。三四年は、たゞ思ふにだに經べかるを。さりとては疾しや人業。

と訝しむ思入れ。此のうち皇子指圖して舍人をして玉の枝を櫃より取出して翁に渡さしむ。翁は嫗と共に之れを見ろことありて

翁　〽げに是れこそは玉の枝。

翁、嫗　〽げに是れこそは玉の枝。枝は白がね。

皇
〽實は白玉。

翁、媼
〽こがねの莖の目も文に、怪しきところ更
に無し。

姫
〽人ざまも好き皇子ぞ。

翁、姫
〽はや／＼仕うまつりたまへ。

と翁夫婦は起ち上り、玉の枝を捧げ持ちて姫の前へ直
すこと。姫は其の枝を手にも取らず、徐ら皇子に向ひ
て

姫 〽そも何處にて此の玉の枝を得たまひけむ。先づそれ
を語らせられ候へ。

皇 〽やすき御ン事。いで其の頃は前一昨年、難波の浦よ
り船出して、行かむずる方も知らざりしが

皇
〽思ふことならでは生きて何かせむ。なら
では生きて何かせむと。御國の春を見す
てつゝ、行方いづこと白浪に、風のまに
まに漂へば

皇 〽ある時は浪荒れて、海の底にも入りぬべく

舍 〽ある時は風につけて、知らぬ國に吹き寄せられ、鬼
のやうなるもの出で來て、殺さむとせしこともあり。

皇 〽ある時は貝を取りて命をつぎ

舍 〽ある時は種々の病ひをうけて、死ぬるにも倍す苦み
をす。

皇 〽かくて船のまに／＼漂ひて、即ても死ぬるよと思ふ
うちに、五百日といふ日の早旦に

皇
〽神の惠みや厚かりけむ。不思議や遙かの
海原に、前つ世の夢かとも、仄かに浮ぶ
山見えたり。風は和ぎ、浪は笑みて、目

に見えぬ雨の絲の、濺ぐもよしや朝日影の、鈍(にぶ)めるもまた風情(ふぜい)あり。

皇 〽これこそ求むる山ならむと

合 〽船を岸邊(きしべ)へ寄せぬれば

と之れより皇子(みこ)主從は徐ろに起ちて舞の介になる。從者(ずさ)一同辭を合せて謡ふ。

皇 〽紫翠漸く遠ざかり

一同 〽紫翠漸く遠ざかり、烟霏(えんび)溟濛(めいもう)として、山影(さんえい)更に朧ろなり。登らむとすれど道見えず。たゞ遠近(をちこち)に微かなる

皇 〽くすしき鳥の囀り。

一同 〽迦陵頻伽の聲やらむ。

合 〽さて崖面(そはづら)を經(へ)廻(めぐ)れば、苔は天鵞絨(びろうど)ふくよかに

皇 〽めぐし少女(をとめ)の柔肌(にぎはだ)、

一同 〽なめらにて溫(ぬく)よか。撫づる手も融(とろ)くよ。さながらなりや綾錦(あやにしき)を、剪(きざ)みて懸くる草の花。

皇 〽美香(みきやう) 人(ひと)を睡らしむ。

一同 〽うらめづらしや、箜篌(くご)の音の、幾緒(いくを)か切れてほのめくは、岩が根辷る眞清水(ましみづ)、碧瑠璃(へきるり)の淵、譬へにあらなく、流るゝ水は水精(すゐしやう)の

皇 〽むすべば凝結(こゞ)る

舍　〽溶けたるなり。

一同　〽時しもや谷蔭に、輝き出づる木々の枝。幹も梢も白銀にて

皇　〽莖は黄金。

舍　〽實は白玉。

一同　〽見る目も眩むばかりなり。

皇　〽これこそは赫映姫の、ゆかしがりたまふ玉樹よと。

舍　〽からうじて船を寄せ、身を捨てゝ攀ぢ登り

一同　〽その一枝を手折りつゝ、後をも見ずして

漕ぎ返る、八重の潮路の浮き沈み。憂き涙にしをたれて、生きむ心もなかりしが

皇　〽大願の力にや、藻屑ともならで見ゆる嬉しさを思ひやりたまへ。人々。

と宜しくなさまゐる。翁、媼は深く感じ入りたる思入れ。

翁　〽くれ竹のよゝの竹取、野山にも

媼　〽さやはわびしき節を見し。

皇　〽そのわびしさも忘られて、今日こそ乾け我が袂、つゝむに餘る嬉しさよ。

翁、媼、皇子を姫の傍らへ請ずる、其の間、姫はやゝ思ひくしたる色あり。

姫　〽いかにせむ。心に著き譎詐も、色には何と明すべき。あら。術なの現身やな。

翁は媼の袂を引きて

翁
〽この上は左右申すべきこともなし。
姫
〽はや〳〵奥に入らせられ候へ。
二人して早起ちたまへと促す。皇子も起ちて姫に寄りそひ
皇
〽いまさら何をたゆたひたまふぞ。
皇
〽あら。心いられや。
と姫の手を取る。姫は漸く思ひくしたる體なり。

第七段

此の途端、騒がしき俗調子の器樂につれて作り物所の司の工人漢部の内麿といふ五十歳ばかりの男を先きに、若き工人甲、乙、丙、三人「そこぢや、そこぢや、そこぢや」といふ捨白をいひ〳〵場に上り、内麿は右手に奉り文を挾みたる青竹を捧げながら門口に駈寄りて
内
〽こゝぢや〳〵。
と一同は門内を窺き見て
工甲
〽さればこそゐたわ。
一同
〽ゐたわ。ゐたわ。ゐたわ。
皇子の舍人は目早くもこれを見つけて、從者らと目を見合せて思入れあり。
舍
〽や。わるい奴が來をつた。
從
〽わるい奴が來をりました。
困つたといふ思入れ。此のうち内麿らはつか〳〵と門内に入らむとす。竹取の僕走りいでて押し戻し
僕
〽どこへ〳〵。案内もせいで人の家へ、躍り込むといふことがあるものか。おたい、わぬしたちは何者ぢや。
内
〽は。は。は。ゆるさしめ〳〵。願事でおりゃる。願事でおりゃる。

僕
〽ねぎであらうと、神子であらうと、今は珍客かわせられたによつて、通すことはならぬ。
内
〽その珍客とやらに、用がおりやるによつて お通しやれ。
僕
〽ならぬ。
内
〽おとほしやれ。
此のうち皇子も内麿を見つけて驚く思入れあり。
皇
〽あら。折わろや。如何にせむ。身の上の大事とこそはなりにけれ。
此の間、僕と内麿は捨白にて押問答数回あり。皇子の従者二人は之れを機に工人らを追ひ返さむと思附きたる體にて、同じく門外に出で、僕と立ち並びて「いゝや、ならぬ」といふ。若き工人ら其れと見知りて腹を立て「そこが知つたことか。お通しやれ」と突き返す。僕これを見て腹を立て「おれがならぬといふわ」と工人らを突き戻す。

工一同
〽いゝや。お通しやれ。
僕、従
〽いゝや。ならぬ。ならぬ〳〵。
と器楽に合せて入り亂れて掴みあふ。
翁
〽あら。かしがまし。何事にてあるぞ。
内麿は尚ほ器楽につれて従者の一人と掴みあひながら奉り文を高く捧げて
内
〽きこしめせ〳〵。これは大切なる願事でおりやる。玉の枝についての奉り文でおりやる。
翁
〽なに。玉の枝についての奉り文といふか。
内
〽なか〳〵。……あいた〳〵。
翁
〽ともかくも其の奉り文を、此方へ渡し候へ。
これにて皇子は絶望の思入れありて
皇
〽事の破れとなりにけり。

と此の間なほ器楽に合せてをかしき立廻りありて、内麿は辛うじて奉り文を翁に渡す。姫は思入れありて

姫
〽それにて讀ませられ候へ。

翁
〽心得て候ふ。なに〳〵。車持の皇子の君、前一昨年より賤しき工匠らと諸共に同じ所に隱れゐたまひて、貴き玉の枝を作らせたまひて、官を賜はらむと仰せ給ひければ、奴等心を碎き、力を盡して、千餘日を經て玉の枝を作りて仕うまつりつるに、祿いまだ賜はらず。あはれ、願はくは、けふたむ賜はせ、分ちて家子に賜はせむとす。あな、かしこ。あな、かしこ。

翁が此の奉り文を讀む間、遠く狩の小角の聲聞え、次第に近くなること。皇子は進退谷まりたる思入れにて

皇
〽ゐるも起つも、はしたなりけり。

皇、翁、姫
〽あさましや。

姫
〽たゞ言の葉を飾りたる、玉の枝なれば眞情の

翁、姫
〽根もなかりけり。いざさらば

姫
〽返したまへや。

翁、姫
〽返すべし。

と玉の枝を皇子の前へ直す。と皇子は面をそむけつゝ之れを請けて

皇
〽返すことばも泣きつらの

と起ち上る。舍人をはじめ從者、小童も起ち上り、一同聲を合せて

一同
〽はぢこそ隱せ夕まぐれ。小暗きぞ便りなる。暗きぞ便りなりける。

と皇子は小童が持ちたる古笠を取りて面をかくし、悄

然として門外に出づる。舍人ら皆從ふ。此の時まで茫然と控へゐたりし内麿之れを見て心附き門外にて追ひ縋る。

内

〽どこへ〱。どこへゆかします。官を賜ぶか。代を賜ぶか。

と舍人の袖を控へる。皇子頤にて「打て」と指圖する。舍人心得て

舍

〽こゝな奴が。思ひ知れ。これを賜ぶわ。

と拳を固めて内麿の頰を打つ。内麿仰け樣に倒れて

内

〽あいた〱〱。

此のうち皇子の一行は急ぎ足にて場を退く。工人ら一同出て來りて介抱す。内麿やう〱起き上り、恠しげに向うを見込みて

内

〽おどれ。逃してなるものか。逃すことではないぞ。皆もつゞけ。あいた〱。やるまいぞ。あいた〱。やるまいぞ〱。

と工人ら一同去る。是れより先き皇子主從と入りちがへて帝、大臣一人、其の他の官人大勢、小童、雜人らをゐて徐かに場に登り、好きところに立停りて、竹取親子を垣間見たまふ。御狩の歸るさに立寄らせたまへる體なり。雜人らは獵の獲物などを荷ひたり。工人らの去ると共に帝の一行は步みを進めて門に近づく。

帝

〽神かそも。人とは見えず。天地の

大

〽きよらなるもの丶萃つて、凝つてや人と現れたる。

帝

〽あら。微妙じの玉人やな。

これにて官人ら一同聲を合せて

一同

〽あら。微妙じの玉人やな。耀く君の目を見れば、天に暐曄の星見えず。衣透る君の膚見れば、皎潔と淸らにして、嬋娟と、四下に照り滿ち、透き徹つて、今たそがる丶春の花の戸　月あらなくに、下界に

降りゐる、玉兎の影かや、餘んの光り。櫻が下枝に白銀照り、軒端の竹にも玉の光り、門邊に老いぬる松の葉も、金砂を篩つて燦けり。

帝 〽あはれ。玉人の容顔に比ぶれば

一同 〽人擧つて屍の、醜つ世に、女人の相をかりそめに、常住の命の影向して、開くや〳〵空華の帳り、猛火の燭を掲げつつ、無明の夢をや醒すらむ。滓濁の酒の醉ひ心地、闌なりけり世人の眠り、醒すや〳〵羸陋の眠りを。半死の夢をや醒すらむ。

帝 〽ふしぎやな。眺むれば

大 〽あらぶる心も和ぎて

帝 〽けがれたるは

大 〽きよまり

帝 〽地上這ふ者もいつとなく

一同 〽地上這ふ者もいつとなく、妙なる光りに誘はれて、心に翼や生ひぬらむ、我れにもあらで大空に、念ひを馳するぞ不思議なる。念ひを馳するぞ不思議なりける。

謠ひ了る、と帝は大臣に向ひて

帝

〽はや〳〵姫を伴ひ候へ。

大

〽かしこまり奉りて候ふ。

と大臣は徐かに數人の官人を率ゐて竹取が家に入り、姫の傍らへ進む。帝も他の官人を從へて續いて入りたまふ。皆々驚く思入れあり。

姫
〽これはいかに。何と遊ばされ候ふぞ。

此の時帝正面に進みいでたまひて

帝
〽けしうはあらぬ者なり。此の國のあるじぞ。餘りに比ひなく可愛しうおはすれば、吾が家へ將てゆきなむとす。

姫
〽うつくしと思せばとて、將てゆかせたまはむはざふらふ。春の花も眺めてこそ。

姫
〽たをりたまふは風雅なし。彼の仲秋の明月も、人は只、影をこそ夜もすがら。

と立離れむとするを帝とゞめて

帝
〽いな〳〵。愛でて、やは欲しと思はぬ。領ぜむと思ふをこそ、切なる戀の誠といはめ。

帝
〽ゆるさじな。ゐてゆかな。

と袂を捉へたまふ。

姫
〽この國に生れて侍らばこそ。

姫
〽ゐておはしがたくや候はむ。

と徐かに捉られたる袂を拂ふこと。

帝
〽などさることのあるべきや。……

と再び捉らへむとしたまふ途端に忽然として姫の姿見えずなる。皆皆驚く。

官一同
〽こは〳〵いかに。

翁、嫗、僕
〽こはいかに。

一同
〽げに凡人にはあらざりけり。

と一同呆れたる科介。

帝
〽いでさらば、ゐてはゆかじとよ。もとの御容になりたまひね。

帝 〽あかなくに、まだきも月の隠るゝや。さしも妙なる影をだに、眺めて秋を慰めむ。影をだに現じおはしませ。

と殘り惜しげの御有樣なり。

されど姫は尙ほ形を現さず。只いづこともなく聲ありて

姫 〽いな〳〵。月は戶外にいでて、見るべきものぞ。春の夜の

此の時、大臣徐かに帝の傍らに進み寄りて

大 〽はや更けそめぬ。

翁、姫も恭しく進みいでて

翁、姫 〽ともかくも

官人一同大臣の後へに從ひて

官一同 〽こよひばかりは九重に

と還御を勸め奉る介宜しくある、帝聽き容れたまはぬ

ヿ、入れにて

帝 〽などか歸らむ。戀の山、あなた面に隱ろひし、君をとゞめて歸らむは、魂とゞめたる心地して、物うくぞあるや。幾たびも

と皆々に促されて一たびは歸らむとしたまひながら、又立ちもとほりたまふ。一同聲を合せて

一同 〽また幾たびも行き返り、背向きて停まる、姫ゆゑに。……

と此の途端、姫の容ほのかに彼方に現れたる心。帝目早くみそなはして

帝 〽あら。なづかしの面影やな。……

と走り戾らむとしたまふを皆々とゞめ奉りて

大 〽こは現なの御ン風情。

官一同 〽ありとも見えぬ幻影を、我れからや見い

でたまふらむ。よし在りとても玉の橋の、水に映らふ影なれば、渡らば絶えむ中空に、浮べる只の花の城、たゞちには誰れか上らむ。時も術もあるべきを、御心鎮めおはしませ。

と皆々なだめ奉る。

翁、媼

〽げに時こそは靈しきもの。やがても術の候はむ。かしこけれども今は只、

一同

〽只其の影を御土產に、こよひは還御あらせたまへ。九重に還御あらせたまへや。

と諫めつゝ送りいだし奉る。

帝いと殘り惜しげに見返りがちに出てたまふ。

後之幕

第一段

赫映姫の侍女甲、乙二人場に登る。

甲

〽さればよ、闇には物をも思はぬげの御氣色して在らせらるれど、月の程となれば、甚じう悲しげに見えさせらるゝ。

乙

〽さりよの。姫君が月を御覽じて、物思はしさうに見えさせられたは、此の春の初めよりでおりゃる。月の影を見るは、忌むことぢゃとあつて、人々が制めさせられたなれど、ともすれば、人間には、月を見て泣かせらるゝ。げに是れは只事ではあるまい。ともかくも、此のよしを改めて刀自の君に申さう。

甲

〽よいところへ心附かせられておりゃる。とりわけて今宵の望の月をば、堪へがたげに眺めさせらるゝ。早う家刀自に申して、心得させ申したがようおりゃらう。

乙

〽なか〳〵。それがようおりゃる。さらば、早う申さう。おりゃれ〳〵。

侍女二人共場を退く。赫映姫愁ひに沈める思入れにて徐ろに登場す。

第二段

姫　〽かひなしと思ふ涙に昏されて、朧ろに見ゆる月の影、うつし身ごころぞ理なき。

と舞臺正面の好きところまで來て停る。

姫　〽罪の限りの果てぬれば、罪の限りの果てぬれば、今宵を秋の名殘りにて、復た立還る月の宮。げに人間百たびの春秋は、天上の幾時ぞや。あはれ。无量妙光を具足して、眼裡に妍媸無う、念頭に是非を斷じ、來去無礙にして、飛行自在とならむ身の、よし嬉しさはありとても、痛ましや、老人の、瑞歯ぐむなる今さらに、最愛兒に棄てられて、生死苦樂の塵塚に、埋れ留まる憫れさよ。我れ未だ現身の、結縛の惱み歴然に、思ひやられて堪へがたやな。

と蹲坐きて打歎く科介あり。

第三段

翁と嫗と湯に登る。歎きゐる姫の傍らにゐよりて

翁　〽こは何事にて候ふぞ。いぬる日も申しゝ如く、御心に任せぬ事もあらば、打明けて語りたまへとこそ。

嫗　〽なう。あが佛、御覽せよや。翁は片時の間に、斯うも老いたまひけるぞや。髮も白う、腰もかゞまり、目も爛れにたり。

姫　〽是れみな姫の御ゝ上を

翁、嫗　〽思ひ煩ふ餘りぞとよ。

と愁ひの科介あり。姫は徐かに面をあげて

姫　〽さき〴〵も申さむとは思ひしかど、必ず心惑はし給はむずらむと思ひて、今までは過し侍るなり。

姫
〽さのみやはとて打出づる。ゆめ〲驚きたまふなよ。我が身は此國の人ならぬ、月の都の天少女。往昔の契りあるにより、暫く人界に假の親と、馴らひ聞えて候ひしが

姫
〽今は歸るべきになりにければ、今宵故の國より、迎への人々の參うで來むず。さらず去りぬべければ、おぼし歎かむ悲しさに

姫
〽不老常樂の彼の國へ、去らむずるもいみじからず、春よりも歎き候ふなり。

と打歎く介あり。

翁
〽こはなでふことを宣給ふぞや。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きさおはせしを、我が丈立竝ふまで養ひ奉りたる我が子なるを、何人か迎へ聞えむずらむ。いかでか許し候ふべき。

姫
〽さりとても彼方には、眞の父母の候ふものをや。

翁
〽よしや眞の父母ありとも、年來の恩顧をば、よも忘れたまふまじとよ。

翁
〽人に取らるゝ程ならば、我れ先づ死なめ。渡さむや。

と氣色ばみて姫に向ひ

翁
〽あの塗籠に姫を入らせ、其の戸をば鎖固め、母屋には僕どもを番にすゑて守らせ、なほ御門に奏しまつりて、武人の人々を賜はりつゝ

翁
〽月の都の人し來ば、捕へさせてむ。心せよ。

と座を起つ。嫗は姫を促して諸共に起ち上りながら

姫
〽いざさらば我が嫗を

と翁先きに、姫次ぎに、嫗後に引添うて

三人　へあの塗籠(ねりごめ)に鎖籠(さしこ)めて、あの塗籠(ねりごめ)に鎖籠(さしこ)めて、守り戰ふ準備(したくみ)も

と次第に奥へ向ふ。

姫　へかひこそなけれ。風ならば

翁　へとざしても防げ。

姫　へかたちあらば

姫　へ矢しても射め。

姫　へ魂幸(たまちは)ふ、神の迎へを如何にせむ。生死(いきしに)も無き久堅(ひさかた)の、天(あめ)なる人を如何にせむ。人力を頼みたまふなよ。

と翁、嫗は姫を守護する體にて奥に入る。

第四段

前の幕に出でたる僕(しもべ)酒に醉ひたる體にて高笑ひをしつつ蹣跚(よろめき)／＼場に登る。侍女甲從いて出る。

僕　へハ、、、、。何ぢゃ。天人が姫君を取りに來る。あるべいことかいやい、あるべいことかいやい。ハ、ハ、、。

女　へなう／＼。笑ひ事ではおりない。酒の醉ひを醒まいて聞かしめ。

これにて僕(しもべ)むつとしたる思入れ。

僕　へこよひは翁(おきな)の祝ひぢやによつて、酒をたうべたが何としたぞ。いはむすべも、せむすべもたう貴(たふと)いものは酒にしある、と宣給はせられたではないか。

女　へ酒をたうべたをあしいとはいはぬ。醉ひを醒まいて聞かしめといふことぢや。

僕　へ何を聞くのぢや。

女　へはて、天人が姫君を取りに來るによつて、母屋(おもや)にゐて、きつと番をせいといふ命令(おほせ)ぢやわいの。

〽僕
〽天人が取りに來るによつて、母屋にゐて、きつと番をせい。ハ、、、、。わつけもないことをいふ。さて何として番をするぞ。

〽女
〽戸を悉に鎖固めて番をせいとある。

〽僕
〽何ぢや。悉に戸を鎖せ。悉に戸を鎖いておけば取らるまいといふことか。

〽女
〽なか〳〵

〽僕
〽そのやうなことは、とかく酒飮まぬ人が、さかしげに言ふことぢや。あた醜く。賢ぶりをすと酒飮まぬ、人をよく見れば猿にかも似る。猿にかも似る。ハ、ハ、、。して、おぬしは其の天人とやらを見たことがあるか。

〽女
〽なんの、あらうぞいの。

〽僕
〽ないものが、何として來といふことを知つた。

〽女
〽あるじの君が然おほせられた。

〽僕
〽して、それは、どのやうな形の物ぢや。

〽女
〽さればいの。翼が有るものとも、無いものとも、また見る者の心々に見ゆるものともおほせられた。

〽僕
〽ハ、、、、。そのやうなものならば、何の、戸を鎖すに及ばう。疾う降りて來。目に物を見せう。

〽女
〽すりや天人が怖うはないか。

〽僕
〽ハ、、、、。何の天人とやらが怖からうぞ。
と何ほ醉ひたる介にて、下の俗曲に合せて振事になる。時々侍女を無理やりに引出して相にすることあり。（曲は陰にて唱ふ。）

〽僕
〽酒五句、飮んで浮世に怖いもの、何のてんぽの梨の皮、酸いも甘いも苦いのも、とんと忘れた其の味が、なぢよにも、か

ぢよにも、かぢよにも、なぢよにも、忘られ、られぬを何とすべい。

〽人に生れて憂き見むよりは、壺になりたや、酒壺に。香りに〳〵。酒の香りに浸みたやの。此の世樂しく暮さばまゝよ、來む世は鳥でも、けものでも、鳥でも〳〵、蟲になろとも、何のその。

〽雌ならおじゃれ。雄でもおじゃれ。さっても〳〵。面白天女の、舞ひの羽袖は、てんと面白かむがらす。雄天はしやッ面、引ッ掻き毟つて、しやッ羽根ひっぱぎ、しやッ骨たゝいて、寢酒の下物に、下物に寢酒の味もよや。

〽おもしろや。

と浮れ踊るうち、女は偶と四下を見て驚き騷ぐ思入れあり。

女

〽やゝ。これは何としたことであらう。四下が凄じう明るうなつた。

僕もやう〳〵心附きて

僕

〽何さま。いかう明るうなつたわ。

女は空を見あげて驚きたる思入れ。

女

〽や。お月が、いつもよりも、いかう大きう見ゆるではないか。

僕

〽何さま。大きう見ゆる。

女

〽やゝ。二かさも大きい。

僕

〽や。見る〳〵大きうなる。や。例よりも五倍ほどになつた。や。十倍にも……

と慄へだして

僕

〽これは只事ではおりないぞ。

と怖るゝ科。

女

〽やれ。怖ろしや〳〵。こゝにゐたら照り殺されうも知れぬ。早う逃げう。

僕

〽いかにも。早う逃げう。

二人

〽やれ。おそろしや〳〵。

と可笑味の器樂に合せて仆けつ轉びつして場を退く。

第五段

此の時はるか彼方に勇壯なる器樂の調べ聞えて、六衛の司菜（二千人の）武裝せる武人を率ゐて驅け付け來る。司には古風なる烏帽子を戴き、身には鎧を着て、弓箭を携へ、眞ッ先きに立ち、武人、凡そ六人は同じく弓箭、又六人は矛、又六人は拔き放ちたる劍を提げたり。勅命を受けて、天人を防ぎ捕へむ爲に寄せたるなり。

一同

〽大君の勅かしこみ、山は裂け、海はあすとも、怒猪の　かへりみせじな、益荒我れ。

と舞臺正面に來りて一同大空を見上ぐる介ありて

司

〽あれを見よ。不思議やな。

一同

〽あれを見よ。不思議やな。折しも今宵仲秋の、望の月の輪見るうちに、十ばかりも合せたる、爛銀盤の光りとなつて、耀き輝く眞晝の光り。遠近の、草の葉、木の葉の、葉色も、葉並も、透き徹つて、驚き飛び交ふ羽蟻の、翅の文理も掲焉たり。

此の時いづこともなく神々しき器樂の調べ聞ゆること。一同耳を欹つる思入れありて

司

〽ふしぎやな。天地爛然として、今まで在りつる大月見えず。

一同

〽いづこともなく妙音聞えて、彩雲流るゝ天の一方。見よ、煌星のやうなるもの、

群り、燦き、列を作つて、見よ〳〵、髣髴降り來る金龍の次第に近づく妙音樂の、調べも今や闌に、靈香薫じ、花降りかかつて、あれ〳〵、間近く屋のむねに、怪しきもの丶降り立つたり。

と一同たぢ〳〵となりて左右へ分れて退くことあり。司は尚ほ空を見上げて

司　飛ぶ車には七寶耀き

一同　飛ぶ車には七寶耀き、翳せる羅蓋は萬華の彩り、ひらめく羽袖は透く金銀の、ただよふ裳裾は棚びく白炎。面は宛然明星の、見むとすれども、眼眩むで、瞬く間に、天地山川、只爛銀と化してんげり。

と皆々目眩く思入れ、尻居にどうとなる。そのうち六衛の司は奮然として起ち上り、弓に箭を番ふ。全軍また武者ぶるひして奮ひ起つ。

司　すはや妖怪ござんなれと

一同　すはや妖怪ござんなれと、弓に箭つがひ、矛劍を、振りかざいて立つことも、あら、何とせむ、手に力も、萎えかゞまることこそ不思議なれ。

と一同又たぢ〳〵となりて或ひは弓箭をおとし、矛、劍を心にもあらで抛ちて尻居にゐる。司ひとり無念の思入れにて突立ちあがり、空を睨みて

司　などてか得射ぬことあらむと、射れども射れども、皆外ざまに

と、又弓を引絞りて幾たびか箭を放つ科。皆逸るゝ心。

一同　それて正しく現ながら、魘るゝやうにぞ、立縮むことの怪しさよ。

と皆々呆れたる科。尻居にどうとなりて、動かれぬ思入れ。

第六段

此の時、いづこともはく神々しき器楽の調べ聞えて、其の調べの仄かに成りゆけるころ、高きところに、只聲ばかりありて

一人 〽造麿。みやつこまろ。

と呼ぶ聲す。奥より翁、夢見る心地にて、我れにもあらず出で来る。

翁 〽夢に夢見る心地なり。誰人の我れを召したまふ。

と好きところへ来て、空を仰ぎつゝ蹲坐く。又前の神々しき器楽の音色聞ゆると共に、同じく高きところに聲ばかりして

一人 〽いまし、をさなき人。宿世の縁故あるによつて、絶えて人の世には在すまじきを、片時の程とて降しゝを

一同 〽おほしたてつる功あれば、そこらの年ごろ、そこらの幸を賜はつて、身をし換へたる今さらに、何をか歎く。彼の君を、はや／＼返し奉れ。

器楽やむと、翁はやう／＼に面を上げ、おそる／＼空に向ひていふ。

翁 〽その昔は、人としも見えたまはざりしを、皆人のあこがるゝ、美妙しの御相に、養育てまゐらせぬるは、一へに老生が功力なり。二十年餘りにもなりぬれば、生みたるにもひとしからむを、ゐて歸りたまはむこと、理ならうこそ候へ。

と喞言がましく言ふ。これには何の答へもなくて、又しばし前の妙音楽聞え、高きところの聲は奥の方に向ひて

一人 〽いざや、いざ。

一同 〽いざや、いざ。穢きところに何時までか、

かくて在せむ。いざや、いざ。大空へ還りたまへや。

妙音楽の調べ、やゝ近う、やゝ急調となりて、霊香薫じ、花頻りに降りかゝる心。一同又更に驚く思入れ。

翁

〽こはいかに。こはいかに。降りくる花の薄がすみ、立て籠めにたる塗籠も

一同

〽たゞ開きに開き、篇子なんども、人あらなくに、只開きに、明けゆく山の端の、雲切れて、朝媛神ぞ出でたまふ。

と奥より赫映姫、前の段の装束のまゝにて、徐々と立出づる。

第七段

と其の後より嫗を先きに、侍女甲、乙、呆れ驚き、後追ふ心にて従いて出る。

姫

〽あれよ／＼。何とせむ。

嫗、女

〽あれよ／＼。何とせむ。あら／＼。悲し、何とせむ。

姫好きところに停る。嫗、侍女らは翁の傍らに寄ふ

翁は姫に向ひて打歎く思入れにて

翁

〽われらをば

姫、翁、女

〽われらをば、いかにせよとて振棄てゝ、天には登りたまふらむ。具してゐておはしませ。伴ひてゐておはしませ。

と姫のかたへ居ざりよりて、縈の科あり。姫もこれを憫れと思ふ思入れありて

姫

〽おん上は申すもおろかになむ。さらぬ人をも、かゝる折に伴ひてゆかまほしさに、得かたきをも覓めつれど、人心のあさましう、空頼めとなりぬることの、返す／＼も本意なくこそおぼえ侍れ。

此の間に何處よりともなく雪のやうに白き色したる羅衣舞ひ下る。

それな姫の手に取ることありて

姫 〽今はとて天の羽衣着る折ぞ、人の世いとど哀れなる。假の縁の薄ごろも、脱ぎすてゝ去る空よりも、まろび墜ちなむ思ひなり。

と泣く科。翁、嫗も涙にむせびて

翁 〽つらからば只一むきにつらからで

嫗 〽なげの情けのなか〳〵に、住みうかりける空し世を

二人 〽君の妙相見えずならば、いかでかは命永からむ。あら。淺ましの別離や。あさましの別離よやな。

と左右より姫の袂にすがりて歎く。姫辛うじて袂を拂ふ。

翁と嫗とは左右についゐて泣く。

第八段

姫は侍女をして羽衣を我が身に着せかけしめむとす。此の途端に彼方に勅使、内侍中臣の房子の聲して

内 〽なう。しばらく。その御衣しばらく控へさせたまへとこそ。

と莊重優婉なる器樂の調べにつれて、内侍中臣の房子、女官數人をゐて出で來り、好きところに停りて

内 〽大内よりの御ン勅使にて候ふ。しばらく止まらせられ候へ。

姫 〽なに。御ン勅使とござふらふや。承るほどもなし。とどめたまふとも效なきなり。

内 〽いやとよ。永く止めさせたまはむとにはあらず。せめて御ン別れに、此の御裝を御覽ぜられよとの御ン事にて候ふ。

と恭しく短册を女官をして姫に渡さしむ。

姫 〽おん名殘りの御ン歌とや。

と短冊を受取らむとするとき、空中に人ありて、姫に何事か語ることあるもの丶如し。姫空中の人に向ひたる思入れにて

姫 〽いやとよ。

姫 〽人間別離の幾時は、天上の只、刹那なるものを、さのみな急かせたまひそ。

と女官が手より短冊を受取り

姫 〽羽衣を着るときは、心殊なるなれば、

と此の時 一種言ひがたき寂しき悲しき器樂の調べ聞ゆ。姫御製を讀む。

姫 〽うつゝ身ながら、讀まばや。

姫 〽月影の入りぬる後に思ふかな。迷はむ闇の行く末の空。

と讀み了りて短冊を翁に渡す。翁受けとりて

翁 〽月影の入りぬる後に思ふかな

姫も媼も聲を合せて

三人 〽迷はむ闇の行く末と

姫徐ろに上手へ立離る。

内侍 〽叡慮かしこき御ン歎き、思ひやり奉るだにも恐れあり。いでや勅諚を傳へむ。

と是れにて女官一同も容を正し、聲を合せて

一同 〽夫れ一天下の人主の心は、水に喩ふ黎民の樂土にして、山野に渡る四時の風。吹きのまに／＼青人草の、萌えいでて靡き、又枯るゝ、其の源の眞光りの、曇らば闇の末如何に。

こゝに至りて武人一同恭しく容を正し、列を整へて女官等に聲を合せて唱ふ。翁、媼らは默してをり。

一同

〽曇らば闇の末如何に。あかで止みぬる月の影を、せめては心に現さむ。又來む世世の紀念を、遺したまへや。行く末も、御ン面影を思ひいでて、さやけかりきと語らむに、遺したまへや紀念。

と此の長き同唱の間に赫映姫は霧藻の奥の方に退き、侍女ら介添となりて、徐ろに被たる花やかなる上衣を脱ぐことあり。さて同唱の終らんとするころ、一人の侍女をして脱ぎたる衣を、他の一人をして羽衣を捧げ持たしめ、さて又自らは奇なる形の小き瓶を右手に携へて、元の居どころに立戻り、同唱終ると徐ろに一同に向ひ

姫

〽入りぬるも最後ならず、盈ちぬるも又虧くるなる、月の輪ぞ我がたゞずまひ、今はしも脱ぎおく衣を形見とも、滿ちぬる月の秋の夜は、必ず見おこしたまへやとよ。

と侍女をして脱ぎたる衣を女官に渡さしむれば、内侍女官をしてそれを受けをさめしむることあり。姫は更に翁、嫗の方をかへり見て

姫

〽おぼろ夜の、只影にのみ憧るゝ、徒人も多き世に、二十年の其の間、あが子と憐み、うるはしの、人ともならしめたまひつる、功德の報い、賜ぶぞ今、千年も死なぬ靈藥。有爲の世の稀れ事と、稱へられたまへ老い人よ。假の世の父母よ。いで、さらば、現世。

と携へ持てる小き瓶を翁に渡すことあり。やがて侍女は羽衣を捧げて進みて姫に着せかくる。翁、嫗は忍びかれたる思入れにて

翁、嫗

〽逢ふことも涙に浮ぶ我が身には、死なぬ藥も何かせむと

と藥の瓶を傍らに棄てておきて

翁、媼
〽我れにもあらで走りより、これこそは怨みなれど、御ゝ羽衣を取らむとすれば、

と翁、媼、姫の傍らへおざりよりて羽衣の袂を捉ふると、女官も武官も一同驚きたる思入れにて空を仰ぎ

同
〽また降り頻る花吹雪。靈香四邊に滿ち滿ちて、心耳に徹る妙音樂は、頑の心をも蕩して、骸は地に、たましひは、虛空に彩雲の棚引きて、はや舞ひ上る媛神の、白雲の袖ぞ妙なる。

と此のうち姫は羽衣を着了りて、徐ろに舞がかりになる。皆々左右へ開いて驚き眺むる思入れ、科介あり。かくて神々しき器樂の調べにつれて姫舞ふことよろしく、さて好きほどに舞ひ進みて

姫
〽滿ちぬる月の夜々は、我れを見おこせ、浮世人。

と是れより下の曲の間始終立舞ふこと。

一同
〽圓滿美妙の御相。

内侍
〽あるひは山河草木に影を寓し

翁、媼等
〽又は人間に照臨し

武人等
〽餘んの光りは宇宙を含む

一同
〽たへなり〱。彩雲の、棚引く空に、燦めき、ひらめく天の羽衣。靡くも返すも光りの眞袖。

内侍等
〽月見れば、千々に悲しき故よしを

一同
〽ちゞに悲しき故よしを、今こそ悟れ、月見れば、醜の世いとゞ醜くけれ。三五夜中の影は又、滿願眞如と開くからに、倘ほあこがるゝ人心の、遣る瀨なきこそ有

理なれ。

翁、媼等 〽見るうちに、見るうちに

一同 〽ふる花吹雪、彩雲も、薄れに薄れ、妙音楽の、調べも遠く、遠くなつて、天の羽衣、燦然に、閃く羽袖も微かになつて、やがて繊塵も中空に、たゞ明月ぞ殘りける。明月ばかりぞ殘りける。

姫舞ひをさむると、一同よろしく立ちかゝりて空を見あげ、随喜渇仰の思入れ、科介。すべて活人書模様。

――幕――

鉢かつぎ姫

舞臺の上下ところ〴〵に稍〻黄ばみそめたる蘆の造りもの。上手前よきところに畫心に大小二三の丸石。

下手奥より上手前のかた蘆のうしろへかけて澤水淺く斜に、緩くうねりて流れたる體。よき所に「忘れ澤」と彫りたる石の榜示。正面奥は蘆洲ごしに入江つゞきの澤水。山鼻のなだらかにさしいでたる遠見。

陰暦九月の半ば、月はまだ昇らぬ空に浮き雲のまだらに漂へる體。こゝに中央に、山蔭の中納言の御曹子、宰相、齡二十三四、風流やかなる狩衣を着て、烏帽子は被らず、指貫の裾を高く括りて鉢かつぎ姫を脊負ひ、今しも澤水をこなたへ渡りかゝりたる體にて立身。姫は齡十六ばかり、垂髪の上へ、譬へば大きやかなる植木鉢を伏せたるやうに、薄き青銅の鉢をいたゞき、摺箔したる振袖、かつぎはなし、帶は元祿好み。

幕あくと、すぐに曲になる。よきところに水を渡りかへて、舞臺の前へ進み、姫を脊よりおろす。

宰　曲　〽白玉か何ぞと人の問ひもせば、露と答へん仇し身は、假のこゝろもよ重ね着の、狩衣すがた何せんに、烏帽子の紐の紫も、人の心の朱奪ふ、浮世のほだし解きすてて、けふを始めの旅まくら

宰相は姫を棚に文句通り振あり、姫諾ひかねる振。

姫　曲　〽とても見はてぬ夢ならば、結ぶもつらし根なし草、都の春に咲く花の、やごとなき身を片葉草、みなしご草の我れゆゑに、世を埋れ草

宰　〽よしそれとても、我れは厭はじ

姫　〽さりとても、野澤の茅原秋ふけて、君が夜行く徒歩はだし

宰 〽ふたりの袖の萎るゝは、露や屢おく

姫 〽萎るゝは、君が名惜む我が涙

とよろしく愁ひの振。姫は宰相に縋りて泣く。

姫 〽とにもかくにも我れあらば、御ン身の仇となりぬべし、月もいざよふ宵ながら、我れは急がん西の國、いとまを賜へ

と姫は水ある方へ行かんとする。

宰 〽いかでかは

と宰相これを引きとゞめて

〽君に別れて世をふる澤の、藻屑とならば我れもともと

と宰相先きだちて水ある方へ行かんとすれば、姫縋りてとゞむる。

〽はなて

姫 〽はなたじ

といろ／＼ありて

姫 〽はなたじ

宰 〽はなて

二人 〽狂ひみだるゝ我がこゝろ

と引き戻しつ引き戻されつするうちに姫は伏しまろぶ。其のはずみに戴く鉢はかつぱと前へおつる。と仕掛にて二つに割れ、中より綾、錦の巻き物、銀の枝に金の橘の生りたるやうに作りたる細工物、珊瑚の枝に硨磲、水精などの生りたるやうに作りたる細工物、外に十二單衣、緋の袴などみだりがはしく現れいづる。と入江のかなたに月さしのぼる

宰　白

〽やゝ。これは。

姫　白

〽この寶は。

宰相姫の顔を見あげて

宰　〽いたゞく鉢は。

姫もはじめて心附きて

姫　〽おちて砕けて水かゞみ

と水を見込む。宰相も共に見ること。

宰　〽うつるは空の月ならず

姫　〽君の御面の影にもあらぬ

二人　〽月の影

宰　〽水にも一つ

姫　〽みそらにも

宰　〽そこにも一つわぎも子の、月はづかしき
花の顔

とよろしくありて姫つく〴〵と水を見入りて

姫　〽さては我が身の面影か、嬉し

宰　〽あてやか

と互ひに手に手をとりかはす。

姫　〽夢ならば

二人　〽醒むるな夢、いつまでも、斯くてあら
ばや、うつゝなや

と我れを忘れたるやうに互ひに喜びあふ振よろしくありて、姫は寶をおしいたゞき

姫　〽これこそは母とじの、初瀬の觀世音を　信じたまひし御ン利生。

と手を合せて拜むこと、此の間に宰相は徐かにいろいろの寶を取りあげ、衣裳と共に手に捧げて

宰　〽かほどの果報ましますからは、今は何方へも行くべ

きたらず。いざもろともに立歸り、嫁くらべの座敷にいでう。此の上は用意召しませ。

と立上る時、左右兩花道の向うにて

〽宰相どのよなう。ほうい。

〽鉢かつぎやアい。ほうい。

と呼ぶ聲聞ゆる。二人ながら聞耳を立つる思入れ。

宰 〽あの

二人 〽聲々は。

二人 〽おぼつかな、我が名を誰れか呼子鳥、なほ呼びかへせあか月を、待たで歸らん身じたくに、暫し姿を隠れ澤

と向うへ思入れありて上手蘆間に身を忍ぶ。と月また雲にかくるゝ。とたんに東西兩花道の向うにて

太郎 〽宰相どのよなう。ほうい。

次郎 〽鉢かつぎやアい。ほうい。

と呼ぶことありて、次ぎの曲につれて、太郎冠者は左、次郎冠者は右より、狂言衣裳にて細き松明をもつて出て、文句の通り振あり、

太、次 〽どことあてどもなん梨の實を、暗に礫の探しもの、もんのゝもんのゝ、もんのゝ文目も、水の出端や戀の闇、こひの闇路の迷子やい

太 〽宰相どのよなう。

次 〽鉢かつぎやアい。

太、次 〽さつても縁はいなものゝ、あぢなものごし爪はづれ、口から下の花娘、鼻から上は水鉢を、かぶりゃ戀路の目なし鳥、ねぐらに迷ふ身の果を、若しやと思へばぞつとして、氣がつく目前に忘れ澤

と花道つけぎは近く來て、ふと氣がつきて、ぞつとす

る思入れあり。此の振のうちに二人とも誤つて松明を消すこと。

太
〽これはいかなこと。もつけた所へ來たぞよ。

次
〽これはいかなこと。ぶきみな所へ出たぞよ。

太
〽はて、氣味のわるいことぢや。

次
〽はて、心もとないことぢや。

と雙方互ひに透し見ることありて

太
〽や。もしや、こゝは

次
〽このあひだ山だちが出たといふ

太
〽もしや

次
〽忘れ澤では

太
〽ないか知らぬ。

太、次
〽いや。これは疑ひもない忘れ澤ぢや。

次
〽や。何やらゐるぞよ。

太
〽や。何かわめいたぞよ。

と互ひに臆病のこなしありて

太、次
〽南無三寳。こりゃこちへ來るわ。あゝく。ゆるいて下され。命ばかりは助けて下され。

太、次
〽こりゃたまらぬと逃げ腰も、何方から來たやら南から、來たやら西やら東やら、やらぬと摑んだ頸もと、あしさへ脚さへ、こりゃどうぢゃ、二進も三進もまゝならぬ。

と二人あわてゝ方角を見失ひたる思入れ。太郎は上手へ、次郎は下手へ逃げんとして突き當り、夢中になりて摑みあふ。すべて道戲たる振よろしくあり。このうち月また冴ゆる。二人顏を見あはす。

太
〽次郎冠者ではないか。
次
〽さうおしゃるは太郎冠者ではないか。
太
〽すれば山だちかと思うたは
次
〽太郎冠者、おぬしであつたか。
太
〽次郎冠者、わごりょであつたか。
太、次
〽ほい。これはしたり。
太、次
〽互ひにそれと氣がつけば、月にてれたる顔と顔
太
〽時におぬしは鉢かつぎに逢うたか。
次
〽いや、われらよりも、わごりょ宰相どのにお逢やつたか。

太
〽うんにゃ、あはぬ。
次
〽おれもあはぬ。
太、次
〽はて、合點のゆかぬ。
太、次
〽もしや若氣のつきつめて、浮世の義理も忘れ澤、身を棄て鉢や鉢の碎片
とよろしくありて、太郎冠者ふと碎けたる鉢につまづきて心づき、拾ひあげて見ることありて
太
〽こりやこれ正しく鉢かつぎが
次
〽日ごろ頭に
太、次
〽いたゞく鉢の
太、次
〽こゝらあたりに落ち散るは、さてこそ案の定不定、南無阿彌だぶつた彌陀ぶつた、

なみだ片手に記念(かたみ)ぐさ、拾うて立ちし後ろ影、秋の哀れを我れながら、鳥羽繪に畫(か)いた風情(ふぜい)なり。

と二人愁ひのこなし宜しくありて、鉢の碎片を拾ひあつめて悄然として下手へ行きかくる。此の時浮雲名殘なく散りて月冴え渡る。

と蘆間より宰相、元の狩衣、さしぬきの姿ながら立烏帽子を被り、沓を穿き、手には姫の元の小袖に寶のくさ〲を包みたるを捧げて先きに、つゞいて姫は十二單衣(ひとへ)、緋の袴、檜扇をもちて徐かに立出で、二人を呼びとむること。

宰 〽なう〳〵、二人(ふたり)の者しばらく待て。

姫 〽われらが身には

宰、姫 〽つゝがなし。

この白(せりふ)の間に二人は立止り、先づ宰相を見て驚き喜ぶ思入れ。白終ると、左の文句につれてノリがかかりになる。

太 〽さては嬉しや御ン曹子

次 〽つゝがもまさぬ御ンすがた

太、次 〽して〳〵、それなる姫君は

宰相も輕くノリて

宰 〽これこそすなはち鉢かつぎ、處は河内片(かはちかた)野(の)なる、峰高(みねたか)どのゝ姫御前(ひめごぜん)

とをさまると

姫 〽末定めなき、うき雲(ぐも)の、名殘(なごり)も消えて中空に

宰 〽今宵(こよひ)まばゆき月の顏

と姫、宰相よろしくある。と陽氣なる合の手につれて太郎、次郎浮れたちて踊りがかりになる。

太、次 〽げにもまばゆき月の顏、げにもさあり、

げにもさうよの

宰 〽おちて碎けし鉢よりは

姫 〽二つかけごの下よりも

宰、姫 〽こがね白がね、硨磲、珊瑚

太郎、次郎包みのうちなる種々の寶などとりあげて驚きながむることあり。とゞ兩手にさゝげもちて踊る。

太、次 〽こがね白がね、硨磲、さんご、げにもさあり、げにもさうよの

宰、姫 〽十二ひとへや緋の袴

太郎、次郎は姫のそばへ立寄り、驚きながむることありて

太、次 〽十二ひとへや緋の袴、げにもさあり、げにもさうよの、さらば我等が御案内、みたから捧げお館へ、いざおん供の祝ひうた

姫と宰相とは丸石に腰うちかけて休らふ。太郎、次郎手を揃へて踊る。

太、次 〽やんれめでたや、こんなえにしが唐にもあろか、これは唐綾、から錦、こがね白がね、硨磲さんご、おん寶、それは目に見るお寶

〽やんれめでたや、こんなえにしが唐にもあろか、むかし男や、光る君、小町衣通、かぐや姫、おん風情、それはものかはお姿

〽おとしが若うて仲ようて、けふから登る位山、名も高砂や

と踊りをさむると宰相も姫も立上り

一同 〽松の常磐の萬歳と、祝ひをさめて年ごろの、憂き忘れ澤さらばとて、袖をつらね

る歸り花、盡きせぬ春をぞ迎へける

とよろしく振ありて一ぱいに活人畫模樣にきまる。

――幕――

俄仙人

正面鏡板にまがへて松を畫いたる道具幕。シテは下手の奥より登場。

謠

〽塵の浮世にあきつ蟲の、ちりの浮世にあきつ蟲の、その翼をだに借らばや。

シテ

〽これは久米のなにがしと申す都方の俄か仙人です。ふつ浮世が忍びがたう厭になつてござるによつて、ふつに人慾の去り、俄かに仙人修行の致いて、已に一かどの飛行力を得たことでござる。はゝア。かうして雲の上より見れば、一段と下界に住まふ者がおとましう見ゆるわ。この淸い心安い境界を知らざればこそあれ、ようもあのやうな處にゐたものでござる。ほう。いつの間にやら甚う高う昇つたることかな。雲雀もはるか下のはうで鳴くげにござる。はア、有り難や。こりゃ身も心もそのまゝにあの蒼い〳〵大空の中へ溶け込うでしまふやうにござる。や。聞きなれぬ物の音がする。あれは何であらうぞ。

聞き耳たつる思入れ。このうち樂座にて左の曲を奏す。

曲

〽秋が來たとてなぜ苦におしゃる、ことしゃ世がようて穗に穗がさいて、けふも刈りそろ、あすもまた、日がな刈るとも刈りきれぬ、ほんにえ

シテ

〽はてさて、都方では、かつて聞いたこともない歌聲でござる。もしや迦陵頻伽とやらの聲ではないか。すれば此邊は、はや極樂とやらではないか知らぬまでい。いや、もすこし近う下つて聞かう。

シテ上手の奥へはひる。と道具幕を切つて落す。正面一ぱいに野路の玉川の遠見、遠く斜めに川水、遠山、白雲。薄、萩咲き亂れたる中に、うら〳〵と晴れたる秋の日の景。前のと同じ旋律に下の曲を奏す。それにつれて、よき頃に年若きさらし男、さらし女、雙方一組づつ、一方は杵、一方は槌を持ちて、兩花道より走りいで、振になる。

曲

〽秋が來たとてなぜ苦におしやる、樣の心が常磐木ならば、いつも春そろ雪霜が、日毎降るとも春でそろ、ほんにえ

〽ほれ、道艸で日がたけた、早うおじやれと急ぎける

舞臺へ來り、雙方入代ると、本花道のさらし男「さアさア例の通り、はじめた／＼」といふ。これにて一組は臼を、一組は碪を据ゑ、次ぎの曲につれ、手を揃へて踊る。中頃より布を使ふ。

曲

〽果はありける其の白露の、玉を名に負ふ六玉川、萩が花づま色なる波の、うつや碪をとり／＼に、氣も合ひ杵の拍子よく

〽苦い世鹽はこちや白波に、さらす白布しらぬの雪の、色は白布、年經つとても、變らぬ中ではないかいな

收まると、男脫け、女ばかりになりて、次ぎの曲につれて踊る。

曲

〽こなた思へばナア野づらも山も、藪も林も、知らで行く

〽山家々々とナアあしげにいやる、色香よい花、山に咲く

本花道の男浮かれいでて

曲

〽せどの畠に、畠に脊戸の、見やれ、南瓜が　がいによう出來て、もとの一番生りや臼ほどでかい、婆さま　お寺さアへ遣るべいちや、そかなう、そかなう、おいさて　そんれはようかんべい、ふとりで持つたら重かんべい、なぢよにもかぢよにも、ひよつくり／＼、ひよつくりもつくり、しよんがえ

一同一しよに立上りて手を揃へて踊る。

曲

〽花が咲くころわが村へござれ、花にあら

しは附きものなれど、そよりそよ〳〵、それ〳〵花を、散らさぬ風が、こちゃ嬉し

〽雪がふるころわが村へござれ、雪に涙はつきものなれど、ちらりちら〳〵、それこれ雪の、積らぬほどが　こちゃ嬉し

〽雪と花との色くらべ

よろしく活人畫模樣に收まる。このとたん雲を踏みはづしたる心にてシテころげいづる。

シテ

〽あいた。あいた。あいた。

皆々驚き立寄りて介抱する。

女

〽何となされました。何となされました。

シテ

〽あまりにわごりょたちの境界が羨しうなつて、ふと雲を踏みはづいておちた。

皆

〽何ぢゃ。雲を踏みはづいておちた。

シテ

〽なか〳〵。

假男

〽さて〳〵、むざとした。そのやうなことがあるべいことか。

シテ

〽おんでもないこと。それがしが現の證據人ではない證據仙人ぢや。したが雲住居にはふつに懲り果てゝござる。何と、今から、わごりょたちの仲間に入れてはおくりゃるまいか。

本男

〽入れまいものでもなうおじゃるが、地體、そなさまは何處の人ぢゃ。

女

〽何で仙人とやらにはならしゃりました。物語りをさしませ。

シテ

〽はアて、面目なうはござれども、懺悔には罪も滅ぶるとやら。語らうずに聞いておくりゃれ。

皆々よろしくすまふ。次ぎの曲につれ、シテ振になる。よきころに、さらし女、さらし男を引出し、カセにし

ていろ／＼あり。

曲

〽われも昔は男山、そのひろ前の初冠り、世におほ内の花の宴、朧月夜のかいまみに、衛士の焚く火の晝さへ燃えて、引いた人づま　人中で、まっかな恥を墻の本

〽つらの皮沓　はきかへて、晴れの節會を面晴と、習ふ蹴鞠のぽんぽこぽん、すべつて轉んで、ぽんぽこぽん、蹴るな蹴ん鞠　ぽんぽこぽん、ぽんと蹴つたる外れん鞠、横枝も垂りもあらばこそ、飛んだ粗そうのはぢ紅葉、かさね／＼の秋風に、憂き世を思ひきりかすみ

〽吸へばこそ　木の葉ごろもの身も輕く、西へふうはり　東へふはり、ふはりふはふはいかのぼり、やれさて、これはさて、雁めはかり／＼、烏はかア／＼、鳶はとつちてとろ／＼／＼、やれさて、これはさて、目がまふ／＼、まふも歌ふも　のりごころ

〽浮世離れの脚下は、琢かで光る玉河原、瀨々の濁りも白布に、見とれて雲を踏み外し、天から下界へ寺屋入り、けふをはじめの賤が業、をしへてたべとぞ賴みける

文句の通り、いろ／＼ありて收まる。

本　男

〽さて／＼氣の毒なことぢゃ。望みとあれば敎へまいものでもないが、見事習はしますか。

シ　テ

〽なか／＼。

男

〽すれば我れらが物する通りにお學びゃれ。拍子ごとにしてをしへう。

シ　テ

〽心得た。

これにて一同身じたくする。おの／＼布を携へて一齊にすゝみ、次ぎの曲につれて踊る。はじめのうちはシテ布をあつかひかねて、いろ／＼をかしみの振あり。

曲　〽霧立てば霧立てば、淺瀨深瀨も波の音
波の音
〽白波の、ひたと寄すれば、ひたと寄すれば、ひた／＼／＼と、風にさかまく瀨々（せゞ）の白布（しらゆふ）やるせなや、面白や
〽高き低きも一つらに、はやたそがるゝ秋の山、いざもろともに打つれて、しづけき宿（やど）に歸らばや。

とゞ拍子よく揃うて

―― 幕 ――

（明治四十年三月「早稻田文學」所載）

金毛狐

第一景

平舞臺は那須野の原、假屋の一室。中央に二段にしつらひたる白木の祭壇、これに新菰を掛け、上段には錦の切れを背飾にし、白絹を下敷きにして寶鏡を白木の臺の上に安置し、其の左右に白木の燈臺。下段には大いなる三方に二個の瓶子すゑてある。祭壇の前、上手に上總介廣常、齢四十五六歳、黄丹色の狩衣に侍ひ烏帽子、白銀製りの太刀。下手に三浦介義澄、齢二十五六歳、花田色の狩衣に同じく侍ひ烏帽子、赤銅製りの太刀。兩人とも傍らに白幣を置き、祈念疲れの體にて居眠つてゐる。上手、下手は兩介の定紋附の幕にて見切る。

風の音一しきりして鎭まると管絃。それが切れぬうちに徐かに垂幕を卷きあげる。

平家 〽歸命頂禮、天照らす太神、春日大明神、八幡太神宮、あはれ願はくは應護の御ン力を添へさせたまひて、世にも怖ろしき妖獸を、あす一日がうちに狩り取らせたびたまへ 〽世は季に及ぶと雖も、日月未だ地に落ちず

と、よきほどに唄がかりになり、舞臺だん／＼暗くなる。次ぎの唄のうちに二人目を醒ます。

唄 〽たとひ如何なる妖魔とて、わが日の本は、千早振　神知ろしめす 〽神ながら、妙なる道は日の本の

と此の唄のうちに二人とも立上り、なほ夢心地の思入れにて振になる。

唄 〽あゝ、たえ／＼の道芝を

と此のうち舞臺又一段暗くなると、景色變る。同時に寶鏡をすゑたる壇を消す。

第二景

平舞臺は那須ケ嶽の麓の心にて、一面の杉木立。少し

く上手へ寄せて木の間ごしに山神廟と書いたる幌を掛けたる古き祠見える。上手同じく木立ごしに三日月の落ちかゝりたる體。下手に苔蒸したる石の井桁。舞臺また明るくなる。

上總は手に松明を、懐中には寶鏡を錦の嚢に包みて携へ、三浦も同じく錦の嚢に包みたる雲切丸を懐中にし、同じく松明を持ち、共に夢心地にてさまよひあるく思入れ。次ぎの唄につれて振ありて、とど顔を見合せる。

唄 〽おぼつかなくも分けゆけば、またはらはらと我が袖に、袖に露の　こぼるゝ

三　白 〽ゆくりなし、上總介どの。

上　白 〽おゝ、三浦どのよな。

淨 〽むら立つ杉の木がくれに、心細しや三日月の

上 〽いかに三浦どの、今、天下に弓取りも多き中にて、我々兩人選り出され、それがしは此の寶鏡

三 〽また、それがしは雲切丸をば、上よりあづかり奉り、希有の宣旨を蒙ること

上 〽まことに面々が家門の面目。とはいひながら今ン日までに

三 〽はや百餘日を空しく過し、數千の軍兵いたづらに

上 〽今なほ野干を狩り得ぬこと

淨 〽永き弓矢の恥辱ぞと、心はやれど目に見ゆる、敵ならねばせんかたも

上 〽進退こゝに

二　人 〽谷まつたり。

三 〽この上は是非もなし、ひとへに神力を頼み奉り、まづ四方の山林に火を放つて匿家を絶ち、八方より原

を取巻き、無二無三に燒き立てなば

上 〽神通不思議の妖狐たりとも

三 〽狩りえんことは治定なり。

上 〽只それがために周邊の農家

三 〽神社佛閣にも飛び火なし

淨 〽罪なき許多の人畜を、害ふ咎め、よしそれとても　御國のため

上 〽南北八里

三 〽東西は

淨 〽二十七里の茅と共、身は黒焦げとならばなれ、二手に分れて

と文句につれてよろしくあり、とゞ息込みて駈行かう

とする。と大ドロ〳〵、舞臺また少しく暗くなり、山神の祠より白き光を放つ。

淨 〽こは〳〵如何に、我れと我が、足もしどろに目くるめき

と引戻しになり、文句の通りあり。

淨 〽さてこそ變化　と帶んだる太刀に、かゝる例は　あら無念や

と二人松明を抛げ棄て、佩刀を拔かうとして拔けぬ思入れ。

淨 〽呆れ果てゝぞ立つたりける

と二人尻居にどうとなる。なほ薄ドロ。

鼓唄 〽古き道芝枯れぬとも、尙ほし悟りおそらずして、迷ふ心のおろかさよ

此のうち山神廟の帳をかゝげて山猿、實は妖狐、金銀の箔おいたる古風なる白衣、白袴、小さき金の冠を戴き、徐かに祠を出て、二人の前へ來る。

ウタヒ〽そも／＼玉藻の御ン方は、彌生ひいづる若草の

と二人心附き太刀を抜き、切つてかゝる、切りかねる思入れ。

唄〽往にし例は現し世に

一寸立廻り

唄〽あら人神と知らざるや

と二人またどうとなる。三浦は氣を失ふ。

唄〽二荒山に千歳經し、我れ山媛もけふよりぞ、君にまつろふ事はじめ

このうち上總又立つて切つてかゝる、山媛これをあしらふことありて、上總太刀を落し、又尻居になる。

山〽凡夫の惑ひを晴らさんため、語り聞かせん、よつくきけかし。

淨〽そも／＼玉藻神の靈威といつぱ、一たびまつろひ仕ふる者、天上天下現世後世、一心の外に主なく、春は彼岸の花に耽つて、忉利天の快樂目のあたり、秋は名利の實りに飽いて、現在の欣樂遂げざることなし、まつろふ證據は其の鏡、はやはや淵に沈めよと

と山媛文句につれて、説き諭し勸め誘ふ振ある。

唄〽春積む雪の底よりも、誘はれそむる夢ごころ

上〽すりや彼の神を祀りなば、武門の名利、心のまゝとな。

唄〽あゝ、名利とは事小さし

山〽汝靈ある人と生れて、などて脊屈まり、這ひ歩りく

ぞ。

浄 〽念力凝らし祈つて見よ、汝が即身たちどころに、攝關の榮華を極めん

上 〽なに、たちどころに　攝關の

浄 〽榮華はおろか日の本の、あるじとならんも心一つ、三千世界を方寸に、領ぜんこ とも難からず

山 〽なほ疑はゞ眼前に、證を見せん、之れを見よ。

浄 〽月をちこちの木下闇

と山媛は杉木立の方へ向きなほりて白衣の袂を翻す。

と一種凄味ある西洋樂器の音色を合ひ方にかぶせ、舞臺又昏くなり、前の杉の立ち木は元のまゝに殘りて、遠景の杉木立見えずなり、奥一面にぱつと明るくなる。

ウタヒ 〽驚電虚空を裂くよと見えし　浄 〽金光四邊に照徹して、現れ燦めく九寶殿、内外七珍　殊妙の莊嚴、勤行不息の眼力も眩みたぢろぐばかりなり

と木立ごしに金銀珠玉を以て莊嚴したる九棟の宮殿が幻燈模樣に現れる。此の間始終遠く微かに前の如く神怪なる西洋樂器の音色が聞える。上總介は我れ知らず膝まづきて禮拜する。

上 〽あら、かたじけなや、ありがたや。今よりまつろふ其のしるし、まッこの通り。

浄 〽われにもあらで立上れば

と上總介懐中より寶鏡を取出し、古井の傍らへ立寄る。

とたんに三浦介心附きたる思入れ。

浄 〽驚き覺めて　遮る義澄

と文句の通り、此のうち西洋樂なほ聞える。幻影薄くなる。

浄 〽妨げすなと廣常が、井の底深く寶鏡を、

既に斯うよと三浦が早業

と文句の通り、山媛も絡まりて、ちよつと暗闘めく立廻りあり。此のうち木立ごしの幻影全く消えて、舞臺薄暗くなり、上總介は鏡を取落す。

浄〽拾ひ取つてさし翳す

と文句の通り三浦介鏡を拾ひとつてさしむけると、山媛おそれるこなし。大ドロ／＼。

浄〽鏡の光り、劒の光り、天地俄かに震動して、四際を掩ふ黑雲の

と山媛、髮逆立ち、憤怒の形相。

上、三

ヘさてこそ化生。

浄〽闇はあやなし、現なき

と三人一寸立廻り、ドロ／＼にて山媛は奥へ退ろ、と舞臺全く暗くなる。あとつゞいて大ドロ／＼。

第三景

ドロ／＼次第に薄くなると、遠く微かに陽氣なる合ひ方聞え、それが近くなると、次ぎの田舎唄のうちに舞臺だん／＼明るくなる。と舞臺一面の秋の野。野菊、尾花など咲き亂れたる景色。

唄〽いとし娘の目元のしほに、神ぞ心もとろとろと

唄切れると縣主の女某、實は妖狐、花やかなる被衣をかぶり、合ひ方につれて、舞臺まん中へ突然と出る。

浄〽とけそめし、其の謎々の神代より、賢愚無差別一樣に、女子ならでは釋けかねる、それはいづこも變りなき、男心は淺沼水の、おろの鏡を色の係蹄唄〽かゝれとてしも照り降りの、名殘りに曇る月の笠、われもかつぎの濡れ色見せて〽こゝに懸けよかの人釣り罠を、こん／＼こんな惡性な〽餘所目はづかし風俗も

文句の通りの振ありて、とゞ向うへ思入れ。

淨 〽亂れ咲くなる蘭菊や、尾花が蔭の小手招き

と招く振ありて物蔭へかくれる。

唄 〽こちで招けば

淨 〽あちらでも

唄 〽つい風次第 氣まぐれに

淨 〽ふはりふは〳〵奴凧

これにて薄ドロになり、眠つたいやうな合ひ方につれて、勢子甲、乙、丙三人、割竹を肩にして眠りながら向うより出る。(始終目は開きながら眠つてゐる思入れ。)

唄 〽のびた鼻毛の 糸目が切れる、れる〳〵絲目が、鼻毛が切れる、あゝあゝ、れるれる、れゝゝゝ、るゝゝゝ

文句一ぱいに本舞臺へ來る。と以前の娘又前へ出る。

甲 〽いよう、命取りめが。何ぢや、最前から待つてゐた。その上、持ち合はいた其の吸ひ筒で酌をする。これは近頃ありがたい。いや、ありがたいではなうて、蟻で鯛とは如何ぢや。ハ、、、。

乙 〽何ぢや。鯛ぢや。どれ、おれも釣らう。

丙 〽えゝ、まんがちな。釣つてよくば、おれが釣るわい。

甲 〽いや、おれが釣る。

乙 〽いや、おれが

唄 〽釣ろよ

三人 〽どつこい。

唄 〽釣ろよ

三人　〽そつこい。

唄　〽釣ろよ〳〵、蟻で鯛を釣ろよ

文句につれて、道戯たる振あり。とゞ娘は野菊の蔭へ消える。

と縫ひぐるみの子狐二疋出て、勢子三人を騙かす振ありて、次ぎの唄の間をかしみの手踊。

唄　〽とかく浮世は賭、色、酒よ、やめざ首を取ろとおしやつたとても、賭は止めもしよが、色氣はやまぬ、色氣や止めもしよが、こんこの氣持は、そんれよ〳〵、おれだかわれだか、われだかおれだか、こんこの氣持は、そんれよ〳〵、こんこな猪首にやかへられない、そんれよ〳〵

浄　〽始終を窺ふ三浦介、さてこそ變化と一

と前の場の三浦介、腹巻の上に、赤き狩衣を着、侍ひ烏帽子、大斑の行縢、すべて狩装束、矢を負ひ、弓を携へ、バタ〳〵にて下手より驅け入る。と舞臺又一段昏くなり、大ドロ〳〵。勢子、子狐上下へ散つて消える。

三浦介驚きたる思入れにて、上下を見廻す。

第四景

〽走り入り江の磯波に、流れ漂ふ一葉の、もろこし船の苫のうち

此の唄のうちに、前の秋の野の景消えると、正面に三四株の磯馴松現れ、其の後ろ上手は岬及び岩を見せたる海原の景色。下手の磯馴松の蔭は入江の心。こゝに麗しき綾羅の日蓋ひしたる唐船一艘流れ寄つてゐる。唄切れると、船のうちにて女の泣き聲が聞える。

三　〽やゝ、あの聲は

浄　〽はて心得ず何者と、駈け寄つて介抱なし

と三浦介不審の思入れ。唐船に近づき、日蓋ひを取ると、内より周の幽王の侍嬪靑英、(*blue flower*) 實は妖

狐、打萎れつゝ立ち出づる。三浦介などさめいたはる振よろしく、手を取りて此方へ誘ひ、次ぎの文句のうちに二人ともよろしく住まふ。

浄 〽心づくしの浦わたり

三 〽そも御ン方は何人なれば

唄 〽此の荒磯に只ひとり

三 〽仔細を語りたまへかし。

浄 〽問はれて暫し返答も、涙に濕る花の袖

と文句の通りあって

青 〽名を青英と召されつゝ、唐土周の幽王に、仕へまつりし宮嬪

三 〽なに、傳へ聞く幽王の

浄 〽侍嬪とあるが實ならば、周室滅びし顛末を、語りたまへと夕汐の、寄するや鬨の聲ならん

とよろしくある。と浪の音。青英思入れあって立上り、物語の振になる。

唄 〽思ひいづるも恨めしやな、一たび笑みて皇城も、傾きそめし月の眉、褒皇后と聞えしは、季の世人の頑なを、和み釋さん御風姿、されば入内の初めより、御寵愛九重の 〽朝政おこたらせ、牡丹あだめく御遊には 春日短き雌雄の蝶、みふねあそびの夏の夜は 睡蓮匂ふ池波に、明る間をしの御ン契り 〽人の嫉みのすさまじく

と文句につれてよろしくある。

浄 〽寄する西夷の攻め鼓

遠寄せの鳴り物に浪の音をあしらふ。此のうち三浦介、

物語に感じて、次第に引入れられたる思入れにて、青英に絡む。

浄 〽すはや大事と　こゝかして、一度に揚ぐる烽火（のろしび）の

これより青英は城方に、三浦介は寄手方になりて振。

唄 〽甲斐こそなけれ犬戎（けんじう）は、はや城内に亂れ入り

浄 〽こゝの高樓（たかどの）、かしこの臺（うてな）

唄 〽放つ火の手や　旗の手の

此の時奥の海上に、白き、赤き、青き、色々の不知火（しらぬひ）一めんに現れて、目ざましく入り亂れる。

唄 〽散りて亂れて　をちこちに、轟きどよむ雄叫（をたけ）びや

と文句につれていろ〳〵ある。このうち不知火（しらぬひ）次第に消える。

浄 〽幽王驪山（りざん）に崩（かく）れまし、后（きさき）も共に消えたまふ

と青英愁ひの振ありて、

浄 〽枯れ殘りたる宮園（みそのふ）の、青花草（あをはなぐさ）の一莖（ひとくき）を、憐みたまへとばかりにて、俯首（うなだ）れ萎（しを）る花の顔

と青英は三浦介の膝に縋り、泣く。

唄 〽さすが義勇に氷做（こほりな）す、堅き心も融（と）けそめて

と三浦介は青英を憐れに思ふ思入れ。やがて思ひ返して立上らうとする、縋りてとめる。

唄 〽四方（よも）の景色（けしき）もおのづから　春だち熱（ほめ）く花いきれ

色めいたる合ひ方につれ、口說き模樣の振あり、とゞ三浦介恍惚（うつとり）となりて青英を抱く。

と薄ドロ〻。鉦鼙又々薄昏くなり、西洋樂器の仇めいた
る音色微かに聞えはじめる。

第五景

奧の海原の景色消えて、前なる磯馴松も消えて、奧は一ぱいに熱帶地方の花園。(天竺天羅國斑足太子が王宮の庭。)燃え立つ如き芥子の花、深紅、淺紅、緋など、今を盛りと咲き亂れてゐる。

此のうち妖艶なる西洋樂器の間奏段々急ぜはしくなる。と三浦介うつらうつらとなる。靑英きっと思入れあつて、起つと、西洋樂器の間奏彌々急ぜはしくなる。三浦介はっと心附いて目を開く。靑英見返るとたんに、上着を引拔くと、天竺の美人の服裝、胸、腕は露はに、藤紫色の輕羅越しに肌透いて見える。(華陽夫人の面影。)すぐ次ぎの歌に合せてバレー式に媚びを呈し、笑みを湛へ、身をそらせつゝ、廣く丸く蛛が巣をかけるやうに三浦介の周圍を廻つて踊る。そのうちに三浦介またうつら〳〵となる。西洋樂盛んになる。(女聲合唱。)

歌

〽またとは咲かじな　人の世花、
色香のあせぬ間　樂しますや。
さらでもあらしの　早に來るを、
あゝ、其の苦艱　芽食む蟲か。
若き世束の間　夢と經たん。
またなき甘戀　今し覺めよ。
〽招かで老いらく　卽ても來ば、
血汐も凍りて　力脫けん。
一たび老いては　悔いの千たび、
生身の世味を　知らで逝くか。
若き世束の間　夢と經たん、
あゝ、此の柔肌　觸れて見ずや。

返しのカヽリより三浦介全く正氣を失ひたる體。妖狐は踊りながらきっと思入れ。西洋樂次第に盛んになり、同時にドロ〳〵はげしくなる。妖狐は三浦介の傍へ覘ひ寄りて、あはや飛びかゝらうとする。此の時上手奧にて

上

〽やあ〳〵、油斷あるな三浦介、それなる怪しの女こそ魔性の者に疑ひなし。

淨

〽おどろき見返る目先へ、飛び來る白羽は

電光石火

と三浦介はっと目を醒す。妖狐も驚き退る。西洋樂微かになり、ドロ／＼薄くなる。とたんに白羽の箭妖狐の面前へ飛び來る、右手に摑む、間もなく第二箭、それを左の手に取る。このうち三浦介起たうとして起てぬ思入れ。妖狐は箭を抛げすて、三浦に躍りかゝる。バタ／＼にて上手より上總介扈常、三浦介同樣の狩裝束、重籐の弓を持つて驅せ來り、弓にて妖狐をさゝへる。大ドロ／＼。三浦介も立上り、三人立廻り。

淨 〽きらりと拔いたる　雲切丸

三浦介寶劍を拔く。これにて妖狐ひるむ。

淨 〽劍の偉徳にたぢ／＼／＼、姿はたちまち時ならぬ　〽霧にかくれて稍〻しばし

と文句の通り、立廻りのうち、舞臺は一面に白霧におほはれ、三人の姿見えずなる。あと大ドロ／＼。

第六景

白霧消えると、舞臺一面の枯野原。奥深く中央に五尺餘りの怪石。ドロ／＼止むと、すぐ一聲。

ウタヒ 〽いぶかしや　曾て見慣れぬ怪石の、忽然として原頭に

と是れより鳴物入りになり勇ましき合ひ方、大薩摩がかり

唄 〽たつか弓矢の名を殘す、手柄を今と兩介が、魁け競ふ武者振は、勇ましかりける次第なり

と向うより、上總介、三浦介、前の場と同じ裝束にて弓を持ち、一さんに驅けいで、花道にて先きを爭ふ振あつて、唄一ぱいに本舞臺へ來り、石に目をつけ、きつと思入れ。

上 〽怪しきは此の石塊

三 〽いでそれがしが

と三浦介弓を抛げすて、氣込みて石に近づくと、又大ドロ／＼。

唄

〽寄らんとすれば、あら怪しや、忽ち一天冥曚と、黒雲おほつて裂決し、天魔の姿現れたり

と舞臺又昏くなり、石二つに割れる。と中より白き光を放ち、妖狐玉藻の前の服裝にて現れる。金銀の箔おいたる白地の表衣、裳は金絲の縫ひ模樣、九つの襞一つ／＼に分れ、袴は薄紅。垂髪亂れ、前髪逆立ちたる凄じき形相。大ドロ／＼。

上

〽さてこそ／＼、汝醜き變化生、一時か程こそあれ、天下いづれの處にか久しく汝を居らしむべき。

三

〽いざ疾く虚假の粧を脱し、穢き獸の面をあらはせ。何と。

淨

〽つめよれば、あざけり笑ひ

妖

〽おろかなり、しれものども。我れ汝らの不靈を憫み、引接あまた〻びに及びつれども、あさましや習氣骨を腐らかし、我慢自矜し、虚僞詔曲して自ら欺き、却つて我れを魔性と罵り、剩さへ小ざかしくも仇せんとや。

淨

〽今一天下に棲める者、わが眷屬にあらぬはなし、我れ一たび指麾かば、大千世界を基礎より、覆さんもかたからず

此の間両介左右より迫り、つけ廻しになり、とゞ一度に切つてかゝる。宜しく立廻り。

淨

〽悔い改めずばたちどころに、山河もろとも汝等を、無底の泥利に蹴落さん

唄

〽いかに／＼と聲の下、いかづち碎けて凄じし

と大ドロ／＼。二人幾たびも引廻され、倒れて又起ち、又立廻つて、叶はず、どうとなる。電光。雷の音。

上

〽やあ、舌長し。わがともがら、生を末世に享けたれ

ども、汝　野干づれの悲引によつて　安きを偸まん
未練無し。

三
〽況んや汝が威嚇に乗り、祟りを怖れて逡巡なさんや。
かくなる上はもはや叶はぬ。

上
〽正體あらはし　誅に伏せよ。

と三浦は寶劒を抜き、上總は寶鏡をさしむけ、左右一度に妖狐に切つてかゝる。

淨
〽電光射返す寶鏡の、光りも眩き雲切丸

と電光雷鳴はげしくなる。妖狐引きぬきて身輕になる。

唄
〽こらへず妖狐は二たびまで、虚空に向つて飛んだりしが、又おち降つて怪鳥の如く、前にあらはれ、後ろにかくれ、暫しが程こそ

と文句の通り激しき立廻りありて、とゞ、きつと見え。

淨
〽あらびぬる、あらしもいつか鎮まれば、無念々々と唸く聲、おどろが下に細りつつ、仇を那須野の石のみぞ末の世がたりに殘りける。

と又一くさり立廻り、とゞ活人畫模様にきまる、と又大ドロ〳〵。舞臺薄暗くなる。

――幕――

妖狐の白面は白晳人種、九尾は歐米九大國、靑英はロマンチシズム、要は本能滿足主義の生噛と惡個人主義と時代錯誤のロマンチシズムとの汎濫を諷刺し規誡すると同時に、當時泡鳴ら一派によつて鼓吹されつゝありし新體詩を揶揄せんと試みたる作なり。

一休禪師

正面は金地に滿開の櫻樹を畫いたる大襖、やゝ上手へ寄せて蒔繪の衣架、これに地獄變相の圖を刺繍したる裲襠を掛けてあり。幕あくとウタヒがかり。

ウタヒ

〽水中に物あり、ゑがきし畫工もこれを知らず、その持主も〽讃をする我れは尚ほさら　何ぞとも

此の文句切れると、合ひ方につれ、地獄太夫（元祿好み）緋の僧衣を頭よりかぶりて曲彔にかゝり、手には拂子を持ち、女達磨の畫面の見え、これを眞ン中にして右には一休禪師、墨染の僧衣、手には小さき髑髏を貫きたる竹杖を持ちたるまゝ酒に醉ひて寢入りたる體。左には幼き禿（切禿、衣裳元祿好み）臺に載せたる香爐を前においたるまゝ居眠つてゐる。此の見え宜しく舞臺まん中へセリ上げる。

〽知らぬ佛の涅槃像、ねみだれ姿さま〲に

と此のうち一休と禿先づ目をさまし、太夫も目を開き、次ぎの文句にかゝりて一同宜しく立ちあがり、からみて振になる。

〽さめて知る嘘方便は皆眞實、來世も過去もあら樂や、虚空を家と住みなれて、舞ふも謡ふも法の聲、杉葉立てたる亦六が、門邊に近き極樂の、走り使ひや小振袖

と禿は禪師の袖をひかへて、なまめく。

一休〽かぶろ〱と名ばかりかぶろ、馴染むお客に千話する目元、それでかぶろといはれうものか、それさ〱

禿〽坊さま〱と名ばかり坊さま、ころもいや〱、女郎樂とねたし、それで坊さまといはれうものか、それさ〱

此のうち地獄太夫緋のころもをぬぎて、衣架にかけたる裲襠を著て、禪師と禿の中へ入り

地〽ゐしに焦れて、こがれてゐしに、苦界(くがい)十年花ごろも、何(なん)の九年を石の上(うへ)、さっても初心な達摩(うま)どの

と宜しくある。

一休〽聞きしより見て懐かしき地獄かな　地〽活(いき)来る人の落ちざらめやは

と一休と地獄と問答の振あり。合ひ方かはると一休一人にて戯(たは)逃けたる振になる。

〽佛(ほとけ)来むりゃ佛に迷ふ。佛果菩提も夢路の花よ、萎んで咲いていろ〳〵に、散りて跡なき根に返る

なさまる、と太夫絡みて又問答の振になる。

地〽心とは如何(いか)なるものをいふやらん　一休〽さら〳〵さっと一筆(ひとふで)に、書いてのけたる松の音(おと)　地〽名残りの聲は　一休〽大ぞらに、

墨繪の風の、さっても、さっても涼しやな、繪の風

と是れにて太夫は裲襠(うちかけ)をぬぎ、一しほあだめいたる姿となり

〽ほんにお前は水上(すいじやう)に打(だ)した胡盧子(ふくべ)のひょつこりこ、ひょつこり〳〵、ちっともそっとも、やまぬ浮氣の憎らしや

と、なまめいたる合ひ方につれ、振ありて

地〽いかに、一休禪師さま、迷悟不二(ふに)とや煩惱は、卽(そく)菩提なる醉ひ心地、恁麼(いんも)の時はそも何(なん)と

と坐(すわ)れる禪師の肩を、なまめかしく背ろより搔き抱く。

地〽ぬくいかえ

一休〽ぬくいとも〳〵

地〽かはゆいかえ

一休
〽かはゆいとも〳〵
地
〽おゝ、うれし
と宜しくありて、とゞ一休は太夫に離れて立上り、禿を相手に浮れて踊る。

〽春が來りゃ枯れた柳も芽ぐみ申そゞ、ましてわれらは木の端ながら、神ぞ命も君なら〳〵 〽佛にもなりかたまるはいらぬもの、石佛らを見るにつけ、われらは元の土佛、かけて碎けていつしかに、一切空のわざくれ

これより三人手を揃へて踊る。

〽なしというたらなしとや思ふ、答へもぞする山ん彦、それえ、その山ん彦

〽すいたらしいと一目でほれた、本來坊さまの立ち姿、それえ、その立ち姿

踊りをさめると、禪師は竹杖を揮つて太夫の頭を打つ。と仰向けに倒れる。返す杖にて禿を打つ、これも仰向けに轉ぶ。と合ひ方かはり、次ぎの文句にかゝるうちに二人とも起き上る。面は髑髏、衣裳も枯れ薄などを染出したるものと變る。正面の襖も一時にあふつて枯野原を畫いたる襖になる。禪師は二人を相手にして踊る。

〽地體佛の道てふものは、鍋の月代石の髭、屏風の竹のともずれの、聲を聞いたか、聞いたか聲を、さうとも〳〵、おじゃれ一念、さうともさうとも、おじゃらざ三祇、さうとも〳〵、千枚起請はまだなことだよ、八萬四千の經文陀羅尼に、手れん手くだの種蒔き申した、さつても悟い釋迦どの、鬼といふは釋迦どの

と禪師は竹杖を以、おのれの頭を打つ。と、とんぼ返り、起きあがる拍子に面は髑髏になる。それより一休が先きに立ちて三人一しよに踊りつゞける。

〽目なしどち〳〵 〽聲についておじゃれ、音についてましませ 〽はんれやれ、目

なしどちの長たび

と陰氣な合ひ方につれ、目かくし遊びになぞらへたる

飄逸なる振一くさりありて

〽狂ひ浮れて五十年、賢愚無差別、さめて

又眠つてさめて又もとの、浮世の夢に

返る手枕

と三人ともかぶりたる髑髏の面を取り、はじめの通り

の面を現はし、宜しく畫面の見えにきまりて

——幕——

お夏狂亂

お夏の狂亂を材としたるもの古く近松の名作『歌念佛』あり近くは富本の『最迫戀身容』に其の面影を傳へたれども、本曲はそれらに負ふ所鮮し。筋も近松の作に見えたるを取らずして西鶴が『五人女』に因ませて、彼の「何事も知らぬが佛、お夏清十郎がそうなくなりしとは知らず、とやかく物思ふ折ふし、里の童子の袖引連れて、清十郎殺さばお夏も殺せと歌ひける、聞けば心に懸りてお夏そだてし乳母に尋ねければ、返事しかねて涙をこぼす、さてはと狂亂になつて、生きて思ひをさしょよりもと、子供の中にまじはり音頭とつて歌ひける、皆々是れを悲しく、さまぐ\とめても止みがたく、間もなく涙あめふりて、向ひ通るは清十郎でないか、笠がよく似た菅笠が、やはんはゝのけらく\笑ひ、うるはしき姿いつとなく取亂して狂ひ出でける」とあるを根據とせり。

第一景

風の音と共に鳴る子の音を聞かせて幕をあける。太き立ち木の幹にて上手を見切り、其の前に稻塚、枯れかかりたる穂薄の生えたる草土堤。やゝ上手寄りに若薄して缺け損じたる石地藏、新しき稻塚、其の背後田の畔の心、下手へかけて一帶の草土堤、あちこち枯れかかりたる穂薄。

此の土堤を界に其の奥は一段低き田圃、つい四五日前に晩手を刈り取つたらしく、刈株の作りもの。其の中央よき處に破れ菅笠に古單衣を被せたる案山子、あちこち張り渡したる縄は大概切れて、鳴る子は只一つだけ落ち殘りたる體。

すべて此の書景は廣重風の寫實でなく、光琳風に、半分は模樣といふ趣きに成るべく無駄を省きて、端手に品よく畫くこと。花道より本舞臺へかけて近江路邊の本海道の松並木の心。それが上手へもつゞいてゐる心。

幕あくと直ぐに淨るりになる。

淨

〽行く秋の名殘りをとゞめおく手田の、刈り跡黑む一しぐれ、晴れて西日のあかあかと、雲を彩る夕映に、しょんぼり立つ

や破れ案山子、一つ殘りてからころり、鳴る子の音に思ひ出の、紅葉もけふは散りぬらん

淨るりお切れる、と長唄の合ひ方。

唄〽何が何やらよしあしも、白絲そだち山そだち、いたづら盛りの面白や

此の唄よき程に、十一二歳を頭に、里の童甲、乙、丙、丁あい〳〵赤く熟したる柿を枝のまゝ襟にさし、烏瓜の蔓を帶にゆはへつけて前の三人を馬に見立て、最後の一人がそれを束ねて手に持つて馬追ひの眞似をして、向うより駈けて出る。

唄〽おさんが紅さいた、父様に言うてやろ、ちんがらもんがらちんがらこ

〽鳥の首ゃ長いか、鷺の首ゃ長いか、鷺の首ゃ長い、何として長い、ひだるうて長い、ひだるうて長くば　田打て〳〵

〽田打ちのをんばさ、餅買うてたもれ、風買うてたもれ、買うてたもらにゃ糞んばば、鬼ばゞ、目腐れおばゞの鼻ぴっぴ

と花道にていろ〳〵振ありて

唄〽加茂の競馬の膝栗毛

と合ひ方になり、童ら競馬の眞似事をして一さんに本舞臺の正面へ來る。

唄〽あかやい〳〵まっかいな、眞紅の手綱に障泥を打つて、ぽんぱかしったん、ぽんしったん、お馬が二疋で、はいどう〳〵、大手下馬先き櫻の馬場に

と此の間加茂の競馬に擬する子供遊び

唄〽お池の中までざんぶりこ、乘ったりゃ〳〵えん〳〵わい〳〵、勇む春駒面白や

唄〽遊びほゝけていたづらども

甲は向うを見て

甲　白

〽みんな見い〳〵。いつもの笠の狂人が、あれ、向うから

皆　々

〽来る〳〵。

唄

〽きのふのやうに今日もまた、菅笠かぶつた人見れば、顔見たがつて泣かうなら、泣かせて遊ぼと小うなづき、何やら小智慧わるあがき、さゝやきひそめく杜蔭に、初てがらしや一しきり

と甲と丙は田圃に下りて案山子を引き倒し、笠と單衣を剝ぎ取り、鳴る子繩をも、鳴る子の附いたるまゝ引きずりて戻り、うなづきあうて上手へかくれる。と風の音。一しきり木の葉を降らせる。

第二景

唄

〽向ひ通るは清十郎ぢゃないか、笠がよう似た菅笠が、よう似た笠が、笠がよう似た菅笠が

とお夏、齢は十六七、根の崩れたる元祿島田、元祿好みの振袖、(婚禮服といふ心) お百度の數取りを澤山に帶に挿み、納め手拭を結へ附けた細い竹を引きずりながら、向うより走つて出て花道にて一くさりありて本舞臺へ来り

〽笠よ笠、梅の花笠その花笠を、縫ひやわづらふ藪鶯の、ほけきよ〳〵と身をさかさまに、泣いて殿御に逢はるゝならば、なんな七夜も、(ト泣きおとし) 泣きあかそもの、我れは此の世に後れてひとり、染むる間もなき晩紅葉

と愁ひの振。やがて陽氣な合ひ方になると

唄

〽風に散りそろ、紅葉が風に、ひらりひらひら散るもみぢ葉を、染めて小袖の晴れ模様

と此の文句につれてお夏陽氣に狂ふ。とゞ、俄かに嫉ましさうな思入れ。

お夏白

〽何ぢや。嫁入りぢや。フム、すりや見事な介添が附いて、釣臺が七つり、簞笥、長持が九荷して其の花嫁御の名は。

と急に嫉ましさうなる思入れ。

浮 〽たわいも浪の浮寢鳥、夫に離れて晝夜を、狂ひ渡るぞ便なけれ

此の文句いろ〳〵振あり、とゞ、狂ひ踊ることあつてベタリとなる。と合ひ方かはつて

浮 〽わんぱくどもは手を揃へ

と以前の童、甲、乙、丙、丁が上手より走りいて、お夏を取卷き、手拍子打ちて踊る。

唄 〽通つた〳〵、今こゝを通つた、色が白うて幹が中ぜいで、齢は二十四五、ひんなり男、菅の小笠を着て通つた。

浮 〽逢ひたか逢はそと、そやされて

お夏

〽なに、菅笠が。どれ〳〵。

浮 〽行かんとすれば、口々に

甲

〽うんにや、いつもの唄うたうて

乙

〽踊らぬうちは

二人

〽をしへぬ〳〵。

唄 〽なに、いつものを　歌へいとや

お夏

〽おゝ〳〵、歌はうとも〳〵。

と是れにて田舍歌の合ひ方になり、お夏文句につれて踊る。

唄 〽わしとナアお母さと絲とつてゐたれば、

東窓から艶書ノウ投げる、わしにゃ中ら
でお母さに中る、お母さわしょ見る、わ
しゃお母さ見る、取るにゃ取られぬ水の
月、しょんがえ

とをさまる、と童ども首をふり

甲

〽うんにゃ、それではない。お夏の歌ぢゃ。

乙、丙、丁

〽さうぢゃ〱。お夏の歌ぢゃ。

お　夏

〽なんぢゃ。お夏の歌ぢゃ。

と思入れあつて、だん〱泣き落し、やがて次ぎの唄につれて振。

唄

〽清十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思ひを
さしょよりも、思ひを生きて〱思ひを
さしょよりも……

と此の踊のをさまらぬうちに、童らのうち、一人は案山子の單衣を被て、頭には菅笠をいたゞき、藪や稻塚の蔭に半身をあらはす。他の童らいろ〱にお夏をだます。

甲

〽あれ〱、あそこへ

乙

〽清十郎が來たぞや。

甲、乙

〽來たぞや〱。

お　夏

〽えゝ。どれ、どこへ。

とお夏きょとつく。

唄

〽これ〱、そこへ菅笠が

お夏菅笠を見つけて上手又は下手へ駈け行かうとする。其の都度童らはいろ〱邪魔をする。笠かぶりたる童はすばやくかくれる。

唄

〽ほんにすげない浮世とは、知れど若しや
に　牽かれてけふも

とお夏探しあるく。此のうち日は暮れかゝる。童らはお夏の背後へ忍びよりて帶へ鳴る子を結び附ける。

淨 〽はやたそがるゝ初木枯に

と此のうち一旦かくれたる笠かぶりたる童が又形を現す。お夏見つけて駈け寄らうとすると、他の童ら鳴る子繩をうしろから引く。お夏倒れる。

皆

〽ワァイ〳〵。

と囃す。此のとたんに風の音。又木の葉を降らせる。

唄 〽木々の木の葉のはんらはら、泣きつつ

と、お夏泣きながら起きて笠の童の方へ行かうとすると、他の童が繩を引く。お夏またよろめく。童ら又囃す。

皆

〽ワァイ〳〵。

淨 〽怒りつ

とお夏腹を立て、帯に附けたる繩を引きちぎりて童らへ擲げ返す、と童ら又囃す。

皆

〽ワァイ〳〵。

唄 〽しどけなく

童ら四人とも立ちかゝりていろ〳〵にお夏をいぢめる。

淨 〽亂れ狂ふぞ無慚なる

とお夏鳴る子の附いてゐる竹を拾ひ上げて、わらべらを打たうとする。童ら上手へ逃げる。お夏追うて入る。あと塒に返る鴉の聲。しづまると馬士唄。

第三景

唄 〽むすめサアなによする行燈の蔭で、かはいサア男のナア　帯よ絎けるヨウ

淨 〽男なりゃこそ此の霜容に、裸百貫負目の代に、遣るにゃ遣られず何もかも

と向うより馬士、齢は三十五六、腹掛けに古襦袢を着て、頬冠り、生酔ひのこなし、腰に一升徳利をぶらさげ、千鳥足にて出る。

浄 〽ほつきあげくの共の果が、身上棒にふる襦袢、ふるへ忘るゝどぶろくに、浮れ小唄の一ふしは、腰の徳利の口うつし、手綱取る手のぶさたげに、ぶらりひょろりと來りける

と折々酒おくびして、轉びかけるのを踏みこたへ、口うつしに酒を飲む。田圃の蛙が頻りになく。

馬 〽エ、ップウ。あゝ、えい氣持ぢゃ。ハ、、、、（蛙の聲に聞き耳を立てゝ）何ぢゃ、裸體ぢゃ。はアて、だんないわいやい。

馬士唄 〽まんがサアわるうて裸になろと、酒をサア飲もならナア冬知らぬヨウ

と始終醉うたる介。石地藏に目をつける。

浄 〽や、そこにゐるのは誰れぢゃい、ウ、イ、誰れかと思うたら、ぬしゃ地藏どんぢゃないかい、エ、ップウ、常住さうして、ちんとしてごんしたら尻が冷うぞい、一つ飲まんせんかいな、いやかいの、したら酌をして、くだんせいの、ハ、、、、、こりゃ何を言うても畫にかいた木戸で、あかんわい、これが正眞正銘の

唄 〽石部金吉かなつんぼ、金には地體緣薄なれど、馬方冥利宿々の

と振になる。

第四景

以前のお夏上着の片袖をぬぎ、しどけなき姿となり、以前の破れ菅笠を手にもちて、上手より戻り來り、馬士に突き當る。

馬 〽よう。こりゃどうぢゃ。

浄 〽わいたか、降つたか、天人の零落か、さ

ってもえらい　美しい

唄 〽をなごにゃ果報ありやうは、けふもおてきが心中立の、一升どっくり二升かけて、替はるまいぞの約束も、寒さ淩いで喉元を、すぎりゃ浮氣の小あたりに

と、じゃれかゝる。お夏振り拂ひ、行かうとする。

夏 〽いえ〳〵、ひとりで渡るわいの。オヽ〳〵、てもま、仰山な

唄 〽螢がり

夏 〽皆さおさりや。(と十二三歲の少女になりし思入れ、こなし。)さア〳〵。

唄 〽こゝやかしこと手を引き連れて、螢來い來い甘い水やろに、そちもかはいや夜すから身をば、焦す　水にも消えぬ火に

此の間始終馬士絡みて道戯たる振。唄切れると、合ひ方俄かにけたゝましくなる。

淨 〽あら、怖ろしや焦熱の、苛責の杖此の世から、愛くるぞよ人の、あさましや、助けてたべの悲しやと、彼方へ走り、此方へ迷ひ、狂ひ亂るゝ有様に

とお夏ふと清十郎が拷問さるゝ幻影を見る思入れにて氣を揉み、文句の通り、馬士を突きのけて、上、下へ走り廻り、身を揉みあせる。馬士はおひ〳〵に醉ひの醒めかゝりたる思入れ。

淨 〽あったら笑止や氣ちがひどの、かゝりあうては迷惑と

お夏馬士に縋りて泣き、とゞ腹を立て、こづきまはす。馬士迷惑のこなし。

淨 〽醉の醒め際興さめ顏、すがるを突きのけ振り拂ひ、わが里さして走り行く

と馬士お夏を突き離し、上手へ逃げて入る。お夏泣き倒れる。本釣鐘。

第五景

浄　〽次第に迫る烏婆玉の、無明を破る鉦の聲

と向う揚げ幕にて鉦の音。それと共に巡禮唄。

唄　〽ふだらくや岸打つ浪は三熊野の

と農らしき老人夫婦、式の如く菅笠をかぶり、笈摺を被て鉦を鳴らし、向うより徐かに出る。

浄　〽那智のお山も　いつしか後に　ふる里を

と花道にて振ありて、又巡禮唄。

唄　〽はる〲こゝに紀三井寺

と本舞臺へかゝる。

浄　〽都の春も程近く

と此の時泣き伏しゐたるお夏顔をあげて、向うを見、菅笠に目をつけて起上り、巡禮の前へ出る。老人夫婦それをよける。お夏それを追ひかけて笠のうちを覗き込む。老人夫婦またよける。いろ〱ありて、とゞ、お夏は老人夫婦の菅笠に手をかける。

浄　〽はしなく流れあふみ路や、一樹の下の行きあひも、他生の縁や菩提の縁、げに大慈悲の御佛の、堅き誓ひぞ頼もしき

と巡禮驚きて遠く避ける。お夏追ひすがり、いろ〱あり、とゞ活人畫模様にきまりて

——幕——

（明治四十一年二月「早稲田文學」所載）

初夢

鼓の音、謡の聲にて幕あく。正面一間半は武家好みの床の間、「故人入我夢、明我長相憶」と大書したる軸を掛け、巨大なる鏡餅を式の如く三方に載せて少しく右へ寄せて据ゑ、其の床の左右は地袋、違ひ棚、相應したる飾り附けよろしく、餘れるは壁、襖にて見切り、なほ上手、下手とも同じ上品なる模様の襖にて見切る。時節は一月二日。

こゝへ、此家の隱居、年齢七十位ゐ、前から見れば坊主頭かと見えるほど禿げて薄くなれる散髪の白髪かづら肩衣、長袴、式の通りの狂言衣裳、摺り足にて下手の襖口より出て、舞臺眞ン中へ來て止る。と太郎冠者、年齢二十五六、五分刈りかづら、是れは狂言社杯にて尾いて出て、後見座に控へる。後見、大羽子板を二枚持ちいでて、太郎冠者の傍らに置く。

隱

〽これは此家の隱居です。倅どもはとかく灰殼とやら申して、卷き煙草臭いことばかり好みまするが、我等はちと思ふ仔細のござつて、古しい習はしをも棄てかねまする。とりわけ、狂言は大の好物でござるによつて、假初の指圖應待にも其のまねびを致すことでござる。まづ、太郎冠者を呼び出いて、例年の通り申し附けうと存ずる。やい〳〵、太郎冠者居るかやい。

太

〽はゝあ。お前にをりまする。

隱

〽念なう早かつた。ハ、、、、。さながらの太郎冠者ぢや。ハ、、、、。萬事其の呼吸合ひで挨拶せしめ。さて、早速ながら、我等事としも吉例に任せ、面白めでたい初夢の見うと存ずるによつて、豫て申し附けおいたる通り、大黒天と夷三郎どのへ神酒の供へ、まつた是れなる床の間へは大羽子板を飾りたてておくりやれ。

太

〽かしこまつてござる。なれども其の吉例とやらおほせられまするは何樣なお夢でござりまする。

隱

〽されば、昨年の一月は二日の事であつたが、女ども

が強請むによつて大羽子板の買め、これなる床の間に飾りおいたるところ、不思議や、其の夜の夢に、件の羽子板の押繪どもが悉く拔けいだいて、殊の外面白う舞ひ狂ひ、剩さへ大黑どの、夷どのをはじめ、御ン使はしめの白鼠までが一つになつて舞ひ踊り、家運繁昌を賀ぎ祝うたと見たことぢや。ことしも又そのやうな夢を見うと存ずる。まづ彼の羽子板をば持參せしめ。

太

〽心得ました。

太郎退りて後見座より羽子板を持ちいづる。隱居受取りて見ることありて

隱

〽はゝあ。ても見事に造りすまいたることかな。八重垣姬に勝賴。藤娘に仙臺座頭。いや、見るからが歌舞伎役者其の儘の容形ぢや。ハ、、、、。何と、これが舞ひ狂うたなら、定めし面白いことであらうぞ。

太

〽なか〱。面白いことでござりませう。

隱

〽すれば我等は奧へ往て神酒供への用意させう。羽子板の事は汝に賴むぞ。

太

〽心得ました。

隱居入り代りて下手へ向ひながら

隱

〽賴んだぞよ。

太

〽心得ました。

隱居下手奧へ入りながら

隱

〽賴んだぞ〱。

太

〽心得ました〱。

太郎殘り、落してゐた腰を延しながら

太

〽やれ〱、七くどいお人ぢや。どうやら腰の骨が痛うなつた。ちやくと斯う此のあたりへ据ゑておいて、此方も早う奧へ往て、吉例のお神酒になとありつかう。

太郎冠者は大羽子板を床の間へ運び、軸の左手に立て掛けておいて入る。舞臺少しく暗くなる。と上手の襖

を打返す。そこに長唄連中ゐならびをり、すぐ鼓唄になる。

〽思ひにや焦れて燃ゆる小夜ふけて、野邊の狐火われもまた、同じ思ひにあこがれいでて、はかなき繪をばかりそめに、面影見する立ち姿

と此の唄が切れると薄ドロになり、立て掛けたる羽子板仕掛けにて前の方へ動きいてやがて平伏りて床の前の切り穴へ落ち込む。とドロ〳〵につれて、書面の通り、八重垣姫は右の手に法性の兜を捧げ、勝頼は刀を携へたる天地の見得のまゝにて、床の前へセリ上げる。すぐに唄になる。

〽あだし名のあだならなくに年來を、着なれて馴れし戀衣、その振袖の深染も、逢はぬ涙に濃さ增さる

と八重垣姫は兜を持ちたるまゝにてクドキ模樣の振。此の唄のうちに勝頼も立上る。

〽我れも思へばいもねられぬを、夜は夜すがら日は日がな、夢まぼろしに面影の

ウタヒがかりになり

〽おぼめくな夢に見えけん宵々の、其の人影ぞ夫戀ふる、わが思ひ寢の小夜枕

と是れより賑かなる鳴物になりて手踊模樣になる。

〽君が心と一つにいつか、融けて一つにわが心、さりとは嬉しき此の逢瀨、ゆられゆられてわれか忘るゝ浮き心、さても樂しき夢ごころ、ゆめごころ、あはれ、このまゝ消なば消め、春日に遊ぶかげろふの、春風よ吹け、融けうよ

浮れ狂ふ振ありて

〽うつゝなげにも見えにける

と又薄ドロにて、元の切り穴へ消える。下手の裏を打返すと、そこに常盤津連中ゐならび居り、合ひ方につれて花道スッポンより書面の通りの拵へにて藤娘出る。以下長唄と常盤津の掛け合ひ。

〽人目せき笠その塗り笠の、内ぞゆかしき

ゆかりの枝の、花も羞げたる色娘〽たれを待つとて此の黄昏に、思ひ有馬の松とは誰れを〽たれを雄松と纏れて末は〽終のゆかりの羨まし

と花道の附け際に休む。とやがて道戯たる合ひ方につれて、同じくスッポンより仙臺座頭頭巾をかぶり、短き袴を穿き、高足駄に杖をつき三味線を袋に入れて背負ひたる打扮にて出る。

〽ひょっくり〳〵、ひょっくりひょんな道づれは、出あひがしらのざっとの坊、ほろゑひ機嫌の鼻歌も

と生酔ひのこなし。

〽風邪をひいたかハックシャミ、づう國訛りの甲高な、高い足駄や足もとに、オットあぶない石っころ

〽ひょっくりざっくり〽ざっくりひょっくり

〽よれつ〽もつれつ〽もつれ〽よれつ〽あとや〽さ〽きがたお座敷で、ちっと過ぎたか御馳走の、酒にもこちは目なし鳥

と座頭は始終酔ひたるこなし。藤娘に絡む。

〽おぼろ月夜の影二つ〽よその見る目のなまめかし〽足もとあぶなく來りける

此の文句一ぱいに本舞臺へ來る。藤娘笠をぬぎて一人にて振。

〽よしや憂きことと今降る雪と、いやが上にも積らば積れ、積る思ひの其の術なさを、逢うて一言聽かせもしたら〽もしも逢はずば、ニヽ何としょぞ、どうせうぞいな

〽にくや雁金また鳴きつれて、なぜにわが身をつれてはゆかぬ、つれてゆこなら殿御にあうて、わしが心の底打明けて〽見すてられたら、エヽ何としょぞ、どうせ

うぞいな
〽戀に心の亂れ髪、正體なげきの其の中へ
と藤娘愁ひの振ありて泣き倒れる。次ぎの淨瑠璃につれて座頭は下駄や頭巾をぬぎ、やはり醉うたるこなしにて出る。
〽これさもし、これさ、お身さ切に泣かしやるだあから、折角飲んだ酒さ覺め申すによ、てもさっても　目あきさ　氣の毒なものだあな、もし
〽生中に見れば思ひの種ぞかし
〽わしハア目かいは見え申さないが、酒さ飲べさせておくりやり申せば、錢金さ欲しうはおじやらぬ、はて、官もさ、女子もさ、何に眞のこんだ、七里結界だがな、うんにゃ　噓いつはりは吐き申さない、はあて　酒の氣さなくなり申さないならば、此の世の中は只だハア

〽ゐながらにして七寶の、光り輝く極樂界、おもしろ狸の腹鼓だもし
と道戯たる振ありて
〽とはいひながら一人身の、醉ひの覺めたる折々は
と情然となると、沈んだ合ひ方になり
〽花の三月　月見の夜毎、こぼれぬすさよ、わが涙
と情けなげな唄につれて淋しき振あり。
〽浮れ座頭もたちまちに、打つてかはりし泣き上戸　〽なぐさめかねし風情なり
と座頭すゝりあげて泣くこと。藤娘これをいたはる振ありて、とゞ又薄ドロにつれて次第に床の前へ後退ると、知らせにつき黑幕を振落す。
これにて長唄連中を消し、すぐ常盤津の陽氣な合ひ方にへれて、白鼠（〻ひぐるみの）二疋おの〳〵以前の大鏡餅を大きなる裏白に載せ、其の葉柄を背負ひて引いて出る。

〽引かばおなびきゃれ、えいさらにさよえ、
引くは田の水　おく手も早稲も、今年ゃ
豊年　世がようござる、えいとな　〽や
んれ、引け〳〵、引く手は夥多、中の此
の身は此の身はどちへ、どちへ此の身は
なびこやら

文句につれて浮れ、戯れ、やがて合ひ方につれて、めい〳〵鏡餅を、或ひは玉乗りの球に、或ひは自轉車に擬して振あり。

〽自動車、自轉車、汽車、電車　〽めぐる
月日は盡き瀬なき　樂しき春の初遊び

と收まる。黒幕を切つて落す。

正面三間の間は大欄間より清らかなる新菰を簾の如く並べて垂れ、其の前よき所に同じく幾枚かの新菰を敷きて、そこに高さ三尺ばかりなる白木の宮一對、一つは大黒、一つに夷三郎を祀れるものを据ゑ、白木の三方二臺、おの〳〵瓶子を載せて供へてあり。正面の餘れる部分は總て金襖にて見切り、上手、下手なる以前の襖も總て打返して同じ模樣の金襖に縫る。

幕が落ちると、鼠どもは瓶子に目をつけし思入れ、雙方うなづきあうて餅をすて、合ひ方につれてちよろちよろと宮に近づき、雙方一度に二つの瓶子に手をかける。と宮の中より合ひ方に合せてシッ〳〵といふ。鼠ども手をはなして逃げのく。やがて又合ひ方につれて近づき、手をかけると、又シッ〳〵といふ。又逃げのく。やがて三度目に三方ごと引ッさらつて前へ逃げる。と雙方の宮の扉が一度に開けて、大黒と夷と出で、大黒は槌を、夷は釣竿を揮りて鼠を追ふ。鼠ども駭きて上下へ逃げて入る。

あとを見送りて、大黒と夷は顏を見合せて

〽ハヽヽヽヽ。

と笑ひ、やがて合ひ方につれて、互ひに「瓶子の酒を飲まう」といふ思入れ、こなしありて、雙方一度に瓶子を取上げて飲み、いろ〳〵ありておひ〳〵醉ひのまはる思入れ。次ぎの浄瑠璃につれて大黒まづ浮れはじめる。

〽さてもめでたい年のはじめに、さらば一
さし祝ひ申すべいよ、いや、どっこいと
な、どゞどっこいさ、はて、まづ吉例に

さ、につこり／＼にこ／＼ともさ、お笑ひめされとさ〽福の神ぢやとこちや思へど、人が見たらば、しつかい／＼、しつかい在所の庄屋どのだんべい。

夷も生酔ひのこなしにて

〽えびす、よい／＼、さぶどのは、釣竿をかたげて、烏帽子狩衣しやんと被て、神酒に酔うて よろ／＼、足元はよろ／＼、よろ／＼／＼と船漕ぎいでて 釣を垂るれば

と此のうち以前の鼠いつの間にか宮のうしろより走りいでてじやれかゝる。次ぎの文句の間に夷は是れを使つていろ／＼あり。

〽あら面白や、ひくは／＼、ひいてしやくる所を つゝとあげて見たれば、さてこそでつかい、佳い おめでたいぢやよの。

大黒また浮れて出る。鼠どもこれにも絡む。

〽大黒どののわいな、よい／＼、寶くらべの白鼠、肩の上でちよこ／＼、袋のなかでごそ／＼、打手の小槌に鈴の音、しやんこ／＼／＼、しやんと堅めた家くら繁昌、家内事なく むつまじく

と夷も又立ちまじり

〽壽福名祿みちたらふ、春を祝ひの浮れ舞ひ

と總踊になりて、文句一ぱいに収まると、唐突に樂座にけたゝましくポルカを奏しはじめる。大黒も夷もおどろき怖れるこなしにて、あわてゝ宮へ逃げ入り、內より扉を閉ぢる。鼠どもゝ宮のうしろへかくれる。一くさりしてポルカ止む。

と大黒も夷もそつと扉を半びらきにして頭だけ出して覗く。鼠どもも宮の屋根の上へ首だけ出して此方を窺ふ。又だしぬけにポルカを奏し出す。大黒も夷も鼠もあわてゝ首を引込める。

とたんに宮は仕掛けにて居所にて碎け、大黒は突と引き拔いて沙翁劇のロミオに、夷はジユリエットに變り、前へ踊り出る。同時に鼠は二疋とも縫ひぐるみを引き拔いて全裸體(肉メリヤス)のキユーピットとなり、お

の〳〵小さき弓を持つて、これも左右一度にトンボを切つて前へ飛び出す。

これと同時に正面三間の菰垂は落ちて、大欄間は前なるも奥なるも悉く撥ね上げると、仕掛ありて前後に開き、接合りて西洋間の天井となり、上手、下手の金襖は悉く引いて取り、後は西洋風の窓飾り又は壁、扉口、舞臺は奥まで使ひ、高く廣く深き洋式舞踏室の遠見。こゝかしこ花瓦斯、電燈などよろしく。すぐポルカに合せて、ロミオとジュリエットとダンスをはじめる。と上手の奥より前の場の勝頼と八重垣姫、下手奥より座頭と藤娘、おなじくポルカにつれて手をとりあひ、踊りにくさうに踊りながら出で來る。

此の間キューピッドは逆立、肩車、蛙飛び、中返りなど、いろ〳〵身輕に跳ね廻ることありて、折々弓に矢を番ひて射かける。踊子らは代る代る中りたるこなし、其のたびに相手を取違へ、座頭と八重垣姫、勝頼とジュリエット、ロミオと藤娘、又は座頭とジュリエット、ロミオと八重垣などの如く釣り合はぬ組合せとなりて踊るをかしみあり。かくて勝頼が長袴に足をとられ、座頭が杖を失うてうろたふるをかしみなどのうちに、木なしに

――幕――

小袖物狂

『蘆屋道満大内鑑』は竹田出雲が名作の随一にして、歌舞伎に用ひられて年已に久しく、中に就いて二の切なる小袖物ぐるひの件は着想も優美に、詞章將た此の種の文中稀に見る所の傑品たり。されば此のくだりのみを切離して夙に一の所作物となしたりしこと「小袖物ぐるひ」といふ曲章の前に傳はれるによりて知らる。然るに如何なる故にか、此の本文の方はいつしか廢れて、辭意ともに遙かに劣りたる清元の保名のみ廣く世に行はる。按ふに、狹斜趣味全盛時代には此の方却つて時好に適ひたるに因るならんか。意味よりいへば、清元の詞章は鄙俚無稽の甚だしきものにて、到底將來の翫賞に價ひすべしとも思はれねば、このたび原作に遡りて多少脚色を按排し、一の新舞踊劇を作り試みたり。靈狐と庄司夫婦とを省きたる淨瑠璃劇に伴ふ繁縟と散文派とを刈り除きて、振事本位の目的に副はしめんの意に出づ。

平舞臺は信田の杜、大鳥居前。石の階段。上手寄りに古風なる掛け茶屋、主人は居ず、床几一脚よせかけてある。遲櫻あちこちに咲いてゐる。

淨 〽年ふりて塵にまじはる宮柱、和光の影も長閑なる　彌生の春の神垣や、信田の庄司が深窓に　ひとゝなりたる祕藏娘、葛の葉姫がきのふけふ、心に深き立願の、徒歩路拾うて神詣、千早振袖うちかけも、鄙には稀な品かたち、花も色にや恥ぢぬらん

と此の文句よき程に向うより葛の葉先きに腰元甲、乙、女童一人、何れも元祿好みの服裝、主從共に笠をかぶり、文句一ぱいに本舞臺へ來る。と腰元共掛け茶屋の床几を拂ひて姫を休ませ、めい／＼よろしく住まふ。

淨 〽外めづらしき腰元ども

腰 〽姫さまのお侶にて、わたくし共まで好い氣晴らし、それはさうと、今日のお神まうでは何のおため

浄 〽と、ほのめけば

姫 〽おゝ、語らねば知らぬはもつとも。このごろは毎夜毎夜、血筋に離るゝといふ心懸りな夢見るゆゑ、都にまします姉上、緋の前さまのお身の上に、悲しいことでもあるまいかと、それゆゑの神まうで。皆もとも/\願懸してたもいなう。

腰 〽お氣づかひ遊ばしますな、それはきつと御逆夢。萬が一にも定ならば、殿樣の甥の殿、あなたが日ごろお嫌ひ遊ばす、あの憎てらしい石川惡右衛門樣と、御縁が切れる知らせでがな。

姫 〽おゝ、よう祝ひ直してたもつたなぁ。あの人に思ひ切らるゝは

浄 〽げに上もなき喜びの、空だのめとならぬやう、此の御社に願事の、かいぞへ頼む腰元ども、日たけぬうちにと寶前へ、主從打つれ入りにける

と姫先きに一同石段を登り入る。

狂言小歌 〽戀よ戀、われ中空になすな戀、戀風が來ては袂に搔纏れ、思ふ中をば吹き分くる

〽あら、心なの嵐につれて、裏吹き返す記念の小袖、見るに思ひの增す故にこそ狂はすれ、狂ふはたそや、我れはそも、安部の保名が安からぬ胸に迫りし數々より、何處をさして和泉路や、寄邊の水のうたかたに漂ふ姿、みだれ髮、素襖、袴をふみしだき、浮れありくぞうつゝなき

と此の文句のうちに向うより式の通りの扮裝にて保名はしりいで、よろしく振ありて本舞臺へ來り

保 〽これ/\、物問はう。もしそのあたりへ十八九の娘の、かいどり褄で、しやなら/\と行かぬか。何ぢや、知らぬ。おゝ、その尋ぬる人こそ

〽芙蓉の花のかんばせに、姿は物か及びなき、芳野初瀬の花紅葉、更科越路の月雪も、眺めは遙か下照、衣通、神のえにしの榊とは、我が戀人の他し名か、他な契りの言の葉を、思ひやるさへ悲しけれと、ちよつと愁ひの思入れ。

小歌〽ふけゆく鐘、別れの鳥も、ひとり寐る夜はさはらぬものを、柳の絲の亂れ心、いつ〳〵忘れうぞ、いつの春か思ひそめけん

保〽こぞの何月幾日やら。おゝ、それよ。

小歌〽花の宴や花の宴、寺々の鐘撞く奴めは憎やな、戀ひ〳〵て稀れに逢ふ夜は、日の出るまでも寐ようとすれど、まだ夜深きに、ごん〳〵〳〵、ごん〳〵〳〵、と撞くに、また寐られず、寐ぬ夜恨みの旅の空

と是れにて原作通り二上りになり

〽夜さの泊りはどこが泊りぞ、草を敷寐の肱枕々々、獨り明すぞ悲しけれ悲しけれ、葉越の〳〵幕のうち、むかし戀しき面影や、移り香や

淨〽その面影に露ほども、似た人あらば敎へてたべ、遠近人に物問はん、おゝい、おゝい、おおい、と招けば招く與勘平、やう〳〵に走りつき

と文句の通り保名あちこちと走り廻りて狂亂の振よろしく、此のうち向うより奴與勘平、原作通りの伊達奴の扮裝、保名の後おうて來り、とりさへることよろしく

與〽これは〳〵正體もなき旦那の有樣、人の見る目も恥ぢたまひ、さアお歸り

浄〽と諫めすかして曳く手を拂ひ、かなたに茂る榊の枝に、記念（かたみ）の小袖打掛けて

と文句の通り

保〽あれ〳〵。

浄〽あそこに戀しき我が妻が、と縋れば枝のほつきりと、折れて大地に落ちまろび、せんかた涙に伏し沈む

與〽情けない御ン有樣、心なき草木（さうもく）に、焦れたまふも迷ひの空目（そらめ）。

保〽なに、空目とは

浄〽こともをかしや、心あればこそ時をたがへず、それ、そこに

與〽どれ、どこに

三下り、歌〽眞實、君に逢ひたくば、信田（しのだ）なる社（やしろ）に歩みを運び、なん〳〵七日（なぬか）、なん〳〵七夜（なゝよ）さ籠らば、御利生正しくあらたかに、戀しき人に逢ひも見もせめ〽中にも殊更（ことさら）榊の枝に、記念（かたみ）の小袖着せぬれば、紛（まが）ふかたなき榊の前

保〽おゝ、榊の前か、なつかしや〳〵。

浄〽記念（かたみ）の小袖身に副へて、泣いつ笑ひつ現（うつゝ）なき

とすべて文句の通り

浄〽折から下向の主從が、賤しからざる都人（みやこびと）、なにゆゑかゝる亂れ心と、そゞろ見る目のいたはしく、傍らへ近づけば

と葛の葉主従石境を降りて近寄る。

保 〽や、椿の前か。

淨 〽姫を見るより狂人の、抱きつかんと立ち寄るを

腰元 〽あ、これ〱。そさうせまい、めつさうな氣ちがひどの。それとめさつしやれ、奴どの。

奥 〽いや、とめてをりまする。お氣づかひなされまするな。語るも主人の恥なれども、一通り聽いて下さりませ。手前が旦那は情人におくれたまひ、それより正氣を取亂し、御覽の如き爲體、其の戀人にあなたがとんと生寫し、直な目でさへ見違ふるに、亂心では尤もと御料簡、重々甘えたお願ひなれども、其の人に似た姫君から優しいお詞賜はりませ。染み易きは人心、自然狂氣もしづまらば、此の上もなき御ン功德。お傍の女中衆、おとりなし〱

淨 〽と餘儀なく頼めど、葛の葉は、まだうら若き心より、應へなければ腰元ども

腰 〽姫君のお詞で狂つた心が直るなら、それこそ偉い御善根。なアもし、ちやつと姫君樣。

淨 〽と勸められて少女氣の、戀ゆゑと聞けばいぢらしく、恥かしながら立寄つて

姫 〽戀しうおぼしめす御ン方の、お果てなされたとはおいたはしい。世にはまた忘れ草もあるならひ、お心を取直し、もはやお歸り遊ばしませ。

淨 〽といふ顏つく〲心をしづめ、よく〱見れば我が妻に、似たりと思ふ執着に、つれていつしか正氣となり、面目なげにさしうつむき、暫し答へもなかりしが、やう〱に顏をあげ

保 〽面目もなき此の有樣、さては我れ妻を失ひし其の悲みに取上せ、我れかを忘れ果けるよな。

浄
〽といへば奴は勇みたち

與
〽さてはお心がつきましたか。やれ〳〵、嬉しや、かたじけなや。そのお狂氣が直りしは、全く以てあの姫樣のお庇。まづ改めて御挨拶。

浄
〽主從容を改むれば、葛の葉姫は面はゆげに、會釋返すも口のうち、腰元は心得て

と葛の葉は腰元に耳うちする。と腰元進み出て保名に向ひ

腰
〽憚りながら、ちとお尋ね申したいは、そのお小袖、こなたに見覺えのある縫ひ模樣。もしやあなたの御ン方は、加茂の保憲樣の御ン娘。

保
〽おゝ、其の女の榊姫こそ、それがしが世に亡き妻。

姫
〽やゝ、そんならば姉上さまは

保
〽すりゃ聞き及ぶ信田の御息女葛の葉どのか。

浄
〽これは〳〵と驚きしが

保
〽それがしこそは安倍の保名。

浄
〽と聞くに今さら胸せまり

姫
〽このごろうちの凶夢が

浄
〽さては實となつたるか、と忍びかねて泣き入る姫、保名をはじめ腰元ども、立寄りいたはる折しもあれ、貝、鐘の音、勢子鼓、森のかなたにかまびすし。

とすべて文句の通り。

浄
〽こは何事と主從が、驚き見やる程もなく、領主の威光をかりくらに、人夫引き連れまっしぐら、馳け來る石川惡右衞門

と向うより石川惡右衞門勢子大勢引連れて來り、保名

を見てぎしみかゝる。

惡

へさてこそ〳〵。案にたがはぬ安倍の保名。都たけではあかきたらいで、此の界隈までほつきあるき、榊の緣ある葛の葉姫をば、おのれ、うま〳〵物せうでな。やい者共、姑殺しの疑ひかゝつた其の曲者、白狐めを取逃いた腹いせ。それ、ひつくゝれ。

浄

へと立ちかゝれば、與勘平立ちふさがり

與

へやい、ぬかいたり無道人、詮義立てせば此方にこそ、言ひ分は百萬たら。こゝは奴が引受けました。お旦那には、姫樣もろとも、こゝかまはずに、ちつとも早う。

浄

へ心得たりと姫主從、促し伴ふ安部の保名、のがさじやらじと惡右衛門、家來を下知し無二無三、一度にどつと寄する浪、びつくともせぬ荒磯岩に

と保名は姫をかばひ、ちよつと立廻つて上手へ行かうとする、惡右衛門やらじと遮る。與勘平それをさゝへ、大勢を相手に働く。保名姫主從を促して立退く。

唄

へよせりや碎けて、コリヤドッコイ、碎けてやがてアリヤ〳〵　へ花と散りゆく浪がしら

と所作立よろしくありて

浄

へ折から聞ゆる御社の　神樂拍子のおもしろや

と神樂囃子につれて立廻り

浄

へもう此の上はと一同が、拔きつれかゝるを飛びちがへ、さしつたりと拔き合せ、縱横無盡に切り立て追つ立て、祕術を盡す奴が早業、目覺しかりける次第なり

と活人畫模樣にきまりて

―幕―

寒山拾得

雪舟（又は元信）の筆意

舞臺正面は二間の床の間、それに相應した大幅の掛物は雪舟（又は元信）筆に擬したる墨畫の寒山拾得と見せて背景だけが畫、立方は寒山拾得に扮装して活人畫式に背景に接近して立つ。二人とも鼠がかりたる服に古びたる墨染めの腰衣、一人は巻き物を、一人は箒を携へてゐる。はじめ謠曲がかり、中頃より長唄。

〽こゝに寒巖に居して、既に經たる幾ばく年、棲遲して觀自在なり、時に歌曲を口ずさんで、世の憂きふしは白雲の、寂々たるたゝずまひ。

此のうち本行がかりの振ありて、寒山拾得静かに舞臺の中央へ出る。

〽石を枕に芝草を、いつも敷き寢のつれづれは、古き佛の書を友、

〽暦なけれど花に知る、春は籃に早蕨を、秋は果實をとりどりの、此の山間の樂みよ、我が身ながらに羨まし。

二人宜しくありて、拾得は胡坐し、寒山獨り徐かに舞ふ。

〽聞けよ君、泉が撫づる伯が琴、子期ならなくに我れならで、誰れ辨へん此の調べ〽面白の樂の音や。

拾得立上りて畫中の松ヶ枝に掛かりたる造り物の瓢を取り下し、二人一しよに舞ふ。

〽いざ酌まん、泉に湧ける甘き酒、瓢に酌みて飲まうよ。

寒山胡坐し、拾得ひとり舞ふ。

〽大海の、水に邊りは無きものを、寄り來る魚の千萬が、同じ餌食に打群れて、相食啖す癡肉團〽さとらねばこそ妄執の、雲間にかすむ月の影。

合ひ方俄かに賑かになる、と寒山踊つて出る。

〽出たわ〳〵、お月どのが出たわ。

これより狂言がかり、禪家の問答模樣。拍子にかゝりてセリフを言ひ、合ひ方につれて踊り廻る。

拾 〽萬年むかしの山々は

寒 〽今も見る山々。

拾 〽萬年むかしの溪々(たに〴〵)は

寒 〽今も見る溪々。

拾 〽萬年むかしの月影は

寒 〽今も見る月影。

二人貌を見合せて

二人 〽ハ、、、、。

寒 〽お婆(ばゝ)おのしは何處(どこ)からこゝへ？　父(とゝ)は何者、母(はゝ)は誰れ？

拾 〽父(とゝ)は鎌、母(かゝ)はかっちり燧石(ひうちいし)、飛んだ火花が

寒 〽ぬしか？

拾 〽おれぢゃ。

寒 〽おれぢゃ。

拾 〽ぬしぢゃ。

二人顔を見合せて

二人 〽ハ、、、、。

拾 〽お爺(ぢゞ)、おのしは幾つになりゃる？

寒 〽おれは虚空(こくう)と同い(おない)年(どし)、なんの虚空は死にやろとまゝよ、山河大地(さんがだいぢ)を我が子に持て

ば、こちは變らでいつまでも。

拾〽浄躶々、赤洒々、

寒〽浄躶々、赤洒々。

「浄躶々、赤洒々」を三四度くりかへす。よきころより空也念佛の振になる。

〽山深く月澄みて、颯々たる松の風、水音清き岩蔭に、鶴の翼を休めける。

元の通りの畫面にをさまりて

――幕――

踊り手の都合によりては此の間始終假面をかぶりなり、居處にて引抜き、寒山は次ぎの畫面のお七に變り、拾得は一たん引込みて吉三に變りて出るもよし。若し踊り手が、二曲別々ならば、假面を用ふるに及ばず。

お七吉三

師宣（又は春信）の筆意

正面に七尺の六曲金屏風、これに師宣又は春信筆の浮世繪に擬して寺院の一室より庭を見たる景、上部に紅葉の枝、障子、緣側及び廂等をも畫心に畫き、緣先きには秋草。幕あくとシンミリしたる長唄。本堂の方に葬式ある心にて、折々鉦、鐃鉢の音など聞ゆ。お七誂への黒羽二重の小袖を抱いて後ろ向きに立身、唄につれて徐かに振になる。

〽けふぞ知る、世のうきことをうばたまの、黒羽二重や並べ紋、うき世を思ひ桐銀杏、いづこいかなる上﨟の、肌振袖の紅うらを、戀の山ぶみ山道の、裾わけらしき仕立ばえ。

と小袖を使ひて宜しくある。

〽そらだきの、殘る形見のいとゞなほ、つらしとてしも此の寺に、あがりものかと年頃の、身につまさるゝ秋の風。

とお七無常を感じたる思入れにて、ションボリとなる。

〽げにも思へば一睡の、夢の間なれや花の貌、只後世こそは眞實なれ。南無阿彌陀佛、阿彌陀佛、我れをも救はせたびたまへ。

お七懐中より珠數を取り出し、文句の通り宜しくある。此の間にも本堂の鉦、鐃鉢など聞ゆ。奥にて

吉 〽なう〳〵、それなるお娘御、慮外ながらお頼みあり。

七 〽えゝ。

吉三誂への服装にて手に銀の鑷子を持ちて奥より出る。お七見とれたる振。

七 〽目の鹽の、其の底知らぬわだつみに、われはおぼろの月や君。

吉　〽花こそ君が振袖を、吹く春風のなまめかし。

二人なまめきたる振ありて吉三鑷子をお七に渡し、指先きのトゲを抜いてくれと頼むこなし。とゞ、お七寄り添ひてトゲを抜くこと。

七　〽何となる、末しろがねの鑷子こそ、ふたりが縁のはしとはし、別れてゐても、つい末に、逢ふとは嬉し戀の謎。

此のクドキ模様の間、吉三は始終坐つたまゝ、此の振の末近くなりて頭をうなだれ、思案にくるゝ思入れ。お七もどかしがる思入れありて、次ぎの唄につれて蓮葉に踊る。

七　〽時を待てとは、そりや氣が長い、人の心もしらがの媼と、みともないまでこちや生きうより、盛り一時眞夏の晝を、燃ゆる緋罌粟と散ろずもの。

此の中吉三だん／＼心の動く思入れ。とゞ、お七に引出されて、共に浮かれて踊る。手踊り模様になる。

〽我れを君とも。君われぞとも、分かぬ今すぐ死なりよなら。

〽天も地もなきや、親はらからも、なんで涙が落ちるやら。

踊りをはると二人抱きあうて泣く。風の音。紅葉がはら／＼と二人の脊中へ散りかゝる。二人驚きて離れて起つ。

〽寝ぬくもる、間あらしだつ明け方や、風に谷中の鐘ちか／＼と。

此の間、長く間をおきて二度ほど本鐘。又紅葉が散りかゝる。

〽あかぬ別れに餘る戀、さりとては狹き世の中、常夜の國もがな。

宜しくありて師宣（又は春信）の畫面にをさまると

――幕――

歌麿と北齋

（開幕劇「骨董熱」参照。）

人間ではない化け物

歌麿ゑがく極彩色の藤娘。
北齋ゑがく淡彩の鍾馗。
同　親鬼。
同　子鬼。

新古美術品即賣會場にあてた圖の如き形に間取られた



一室、ずっと奥になつてゐるAは一間半の床と床脇であり、Bは壁である。其他は總て襖で、自由に往來が出來る。

床の間には歌麿極彩色肉筆の藤娘（殆ど等身大）が古びた表装をして掛けてある、非常な大幅なので、軸の地が床の上に溢れてゐる。其の前を離れ、ずっと下手寄に古風な蒔繪の衣架、それに元祿好みの遊女の小袖が大小二枚掛けてある。それからBの壁一ぱいに、長押上から北齋筆の五月幟、淡彩で鍾馗と鬼二頭とを畫いたのが、見た目のよいやうに釣下げてある、目覺しい大きな幟である。すぐ其の前ぐっと上手へ寄せて、古い鎧櫃。其の他、上手下手、邪魔にならぬ所に種々の骨董（何れも曲中に用あるやうなの）が並べてある。幕の上つた當座は、室内一面に朦朧としてゐる。三絃の音につれて軸が動搖しはじめる。畫が前へ靡いたなと見るうちに、極彩色の少女はちょろちょろと前の方へ走つて出た。

〽人目せき笠塗笠しゃんと、
ふりかたげたる一枝は、
紫深き水道の水に、
染めて嬉しきゆかりの色の、
いとしと書いて藤の花。
エヽ、しょんがいな！
裾もほら〳〵しどけなく。

畫中の美人はたうとう活きた娘となつてしまつた。どこからか縮緬の手拭を取出して來て品をやる。

〽男ごころの憎いのは、
外の女子に神かけて

心やばせのかこちごと。

* * * * *

曲調が民謠式に一變した。少女は扇を翳し、輕い柔い曲線の波瀾を盡して嬌態嫵媚をほしいまゝにする。所謂「潮來出島」の五曲である。

〽潮來出島の眞菰の中で、
あやめ咲くとはしほらしい。

一曲終る毎に間奏がはさまる。それに伴ふ舞踊の手振が面白い。

* * * * *

〽花を一本忘れて來たが、
あとで咲くやら咲かぬやら

曲節がまた一變した。

〽松を植よなら有馬の里へ
植ゑさんせ、何時までも
變らぬ契りかいどりづまで、
* * * *
わしが小枕、お手枕。

娘が一たん退つたかと思ふと、撥音がせはしくなつて

〽空も霞の夕照に、
名殘りを惜み歸るかりがね。

と憧憬氣味に空を見上げた立姿にをさまる途端に、四方が俄かに眞暗になつてしまふ。

* * * *

大分明るくなつたと思ふと、室內の飾り附けの位置が少しく變つたのが目に附く。藤娘の軸は其の以前鐘馗が掛かつてゐたBの壁へ掛けられた。さうして鐘馗が床の間へ移された。鎧櫃も大分變つた處に据ゑてあつて、其の上には緋絨の鎧や兜が飾つてある。其の他は別段の違ひもない。

常盤津としては極めて莊嚴な一種の置き淨瑠璃がはじまる。

〽夫れ妙莊嚴王本事品に
淨藏、淨眼の御同胞
菩薩所行の道成つて
神通福德　圓滿に、
大地を拔くこと七多羅樹
虛空に浮んで行住し、

火焰を發ち、水を履み、
神變不思議を現ずとかや。
例をこゝに目ざまし〳〵！

此の淨瑠璃の中頃から、一種物凄い非音樂的な物音が聞えはじめる。すると、畫中の鬼、大小ともに、鍾馗の手元、足元から拔け出して前の方へ走り出で「まんまと首尾よく拔け出したぞ」といふ思入れをして二十五座式の仕草をなし、あちこちと跳ね廻る。

〽煩惱すなはち菩提なり。

此のうち物凄い音は段々激しくなる。鍾馗が眼を働かせはじめた。手足を動かしはじめた。

われ執心の飜し、
大誓願の效あつて、
不退轉の利劍の光り……

物凄い音は彌〻はげしく、室内に鳴り渡る。

凍れる月華と冷じく……

鍾馗奮然として床の間を蹶つて前の方へ躍り出でたかと思ふと、大きな幅廣の劍を揮つて鬼共と激しい格鬪をはじめた。

枯葉を拂ふ木枯の、惡鬼は亂れて逃げ惑ふ。

鬼ども敵しかねて上、下へ逃げ入る。鍾馗は强ひても追はず、さもこそといふ思入れをして、手近の鎧櫃へ立寄り、飾つてある鎧、兜を押し落して、櫃の上へ腰を掛ける。

曲調が一變する。鍾馗は疲れたと見えて、居眠りをはじめる。

〽目に見ゆる、其の山賊は破るとも、見えぬ心のわるもの扮裝。

鬼ども上、下よりそろり〳〵と窺ひ出る。有りあふ黑縮緬の古巾で頰冠りをして、鍾馗の傍へ忍び寄る。

〽げに衞る人の隙間洩る、風に氣を置く忍び足。

先づ鍾馗の持つたる劍を奪つて隱し、互ひにうなづきあつて、鍾馗に催眠術をかけようといふ科介。次ぎの小唄につれて、いろ〳〵仕草をしながら、鍾馗の周圍を廻る。次ぎの唄は眠くなるやうな緩い節で唄ふ。

〽目からせうかの？　鼻からしょかの？

耳がよかろか？　口から　とかく
地獄街道へ抜け道が！

鐘馗ふいと大きな目を開く。鬼ども吃驚して飛び退く。

〽どつこい、あぶない！
おつかない〳〵誘いて見たれば、
まんざらでもない顏附ぢや。

鐘馗またうと〳〵と眠りはじめる。大鬼は大股に威張つて其の傍へ詰め寄る。

大

〽何だ、金輪奈落心を動かさぬ。はて、さう觀念が固定しちや困るよ。おい、それがそれ、コンベンションに囚はれてゐるといふものだ。

小鬼も同じやうに威張つて傍へ寄り

小

〽だめだよ、君。よしたまへ。

鐘馗次第に深い眠りに落ちる。鬼ども頻りに暗示を與へる。

〽變るが天地天然の、
原理なりやこそ昔から、
諸行無常のお定まり。
神も佛もありやせぬ世には、
造化といふも、進化といふも、
のつぺらぼうの出來心、
浮氣は情の自然主義、
本能主義の現代に、
さつても野暮な修三昧。

此のうち段々暗示が利いて、鐘馗おびきだされ、鬼共と一緒になつて踊りはじめる。

〽浮世はたかゞ五十年、
百二十五として見ても、
つまりは一分、三分五厘。
　エヽ、まけさんせ〳〵！
刹那々々が生ぢやもの！

曲調が俄かに變つて、越後の角兵衛獅子を連想させるやうな鳴り物になつたと思ふと、鬼共は逆立をやるやら、とんぼを切るやら、角兵衛獅子の眞似をして跳ね廻り、とゞ、下手奥へ走り込んでしまふ。取殘された

鍾馗は踊りくたびれて、尻餅をつき、足を投げ出し、固く目を塞いてゐたが、次ぎの文句につれて次第に浮れはじめる。最初はぢっと目をつぶつたまゝで踊つてゐる。

〽しばた五萬石は荒そとまゝよ、
新潟通ひがやめらりょか！
とかく悪性が浮世にゃ徳で、
寝まり地蔵に色の願、
跣足参りの土ふまず。
　家の嬶どの癇癪おさへて
夜間も晝間も三度栗。
さのせ／＼！　さのせっせっせっせ！
せったら　きなこの稗團子！
搗いて欲し。

鍾馗が踊りくたびれて、倒れると、鬼共いつの間にか衣架に掛けてあつた元祿遊女の小袖を被て、面だけ美しい女に化けて、ひらり帽子か何かで角を隱して、しゃなら／＼と出て來て、また鍾馗を引張り出して、なまめく。

〽骸骨が
上を粧うて花見とは、
出來ぬ奴めの負け惜み、
われとわが身を小理窟で
縛つて春を垂れ籠めて
三日見ぬ間に櫻の花が
〽はんれ　散りそろ、あったら花が！
春が暮れそろ、あったら春が！
くれそろ！

鬼共は頻りに色仕掛けで誘惑する。鍾馗しばらくは大デレにデレてしまつて、一しょに浮れて踊つてゐたが、ふつと我れに復つて

〽さてこそ悪鬼と　勇猛力、
打揮り打揮る　利劍の威德。
皆ずた／＼に切り離されて、
魔障の姿は消えにけり。

と曲調の都合上、首尾よく鬼を退治することになつてはゐるが、この鍾馗どのゝ手際では、はて、覺束ないものだと思ふうちに

——幕——

和歌の浦

管絃（尺八と箏とを併せ用ふる新式）にて幕明くと――
平舞臺、奥は一面の海原。上手に遠く天の橋立を小さくしたるやうなる白沙靑松。ずっと奥へ下げて大きなる巖、其の前上手寄に振面白き磯馴松。舞臺附け際其の他あちこちに、黄ばみそめたる蘆。夕陽のまだ殘りたる景色。

朗詠

〽俗に狎れて今に到りぬれども、霄を思ふ心常に存れり。

朗詠切れると、正面の大岩二つに割れて、長唄の合ひ方につれて男女の兩ジテを押出す。岩は直に元の通りになる。男は衣冠、束帶、笏、舞樂式の長き裾を牽く。女は五つ衣、緋の袴、唐衣、裳、額櫛など、總て式の通り、手には袙扇を持つ。

唄

〽染まぬ塵寰の色衣、ぬぎかへて秋を幾返り、わが世もわかの浦わたり。

と本行のやうの振ありてウタヒガカリになる。

ウタヒ

〽面白や、ありし昔の蓬萊島をこゝぞとも、降りゐて翻す舞の袖。

とこれより舞樂模樣の管絃になり、尺八と箏とを使ひ、およそ三四分間舞樂の舞をつゞける。いつとなく長唄の合ひ方に變ると

唄

〽住めば實に、都心も忘られて、つい移り氣な遠あさり。

と次第に陽氣なる合ひ方になり

〽春日よし、月夜なつかし磯馴松も、沖を行くなる白帆もよしや、あしに立つ浪、濱千鳥、なにを騷ぐぞいたいけに群れて來よ、遊ばん。

と兩ジテ樂しげに舞ひ踊ること宜しく、とゞ向うへ思入れ、「こちらへ來い」といふ科介ありて、正面の岩蔭へ退る。と、ずっと碎けた賑かな幼稚い合ひ方になり、

それにつれて子カタ四人向うより走つて出る。いづれも漁家の子供といふ古風なる扮裝、實は千鳥、着附の模樣にてそれな表徴する。年長の子供は釣竿、小さき方は手に魚籃を提げて出る。

子供唄 〽あの舟見いだ、その舟見いだ。ほがいにそがいに、がいに取れた大漁、誰いが棄てた河豚、ひこずってせゝくって、無上に食うてごねた。出額ちゃあ、ませちゃあ、遊ばんかあ。

〽やんちゃどうしが連れ以て、騷り、饒舌り、磯遊び。

と子供ら本舞臺へ來る。下の唄につれて、簡樸なる手踊。始終あげて來る大浪を千鳥が馬鹿にしてからかつてゐる心。「ホリヤ〳〵」にて高浪が寄せて來たのを避け、揃つて逃げる科介。

〽浪よ どえらい浪、こゝまで來いだ。〽うらが膝頭……ホリヤ〳〵 ホリヤ……背めろ やんれ。

〽浪よ、どえらい浪。なじょ來ぬ わんら。〽ぐづ鰍あほ浪……ホリヤホリヤ〳〵……逃げろ やんれ。(「わんら」は「汝等」、「あほ」は「阿呆」。)

此のうち以前の兩ジテ岩蔭にて子供らの遊ぶのを面白さうに見てをり、我れ知らず釣込まれたといふ思入れにて前へ進む。途端に引拔くと、男女とも古風なる歌舞伎式の衣裳、男は田舍男、女は田舍娘といつた樣な打扮になり、次ぎの唄の間子供らと一所になりて踊る。

〽浪よ、づんづく浪、あほった浪よ。ちんこ〳〵……ホリヤ〳〵 ホリヤ……逃げろ やんれ。(「あほつた浪」は「阿呆浪」、「ちんこ〳〵」は「ちん〳〵もが〳〵」。)

唄切れて合ひ方になると、唐突に奥にて遠く西洋の狩角がけたゝましく聞える。これにて兩ジテをはじめ一同驚き、シテは岩蔭に、子カタは上下へ消える。と常盤津めいたる賑かな合ひ方になり、次ぎの文句のうちに下手より男大勢、女大勢、いづれも漁人、(實は西洋

鷄、イタリー種のレグホーンだの、イギリス種のハンバーグだの、フランス種のウーダンだの、アメリカ種のドミニックだの、プリマスロックだの〻擬人）大漁祝ひの祭の揃衣の心にて友禪模様の端手な單衣を着て、醉ひ浮かれたる體。揃の花笠。着附の模様と花笠の意匠とて西洋鷄であることを表徵する。振にも「鷄」といふ心あるべし。

〽とれてそろ、しびや　くちびや　たいれふの、祝ひ浮かれて濱訛り

と次ぎの漁人唄につれて八人手を揃へて踊る。

〽案じやんすなえ、汐さへよォけりや、千兩萬兩は朝のォうちよォ。サアノオエ。千兩、コレワイドウチャイ、　萬兩は朝のォうちよォ。ドッサリクッサリ、ドッサリクッサリ。

これにて皆々休む。海上だん〴〵昏くなる。男一人笠を脱ぎて前へ出て、次ぎの唄につれて道戯たる振事、中ごろより女二人絡む。

〽よんべ北ん濱のべてづき兵が、（生利男）五合酒に醉ひちびれてな、一張らいを汚いた。ホイタラドウチャイ。〽きるもんばかいならえいけども、〽おはう（下婢）が袖引いてなげられて、〽ごさん（主婦）に徵宵吹えられた。〽しよんがえ。

此の間に、西洋樂聞えて來る。初めは微かに、おひ〳〵明かになり、遂に合ひ方だけは全くの西洋拍子になると、一同が手を揃へて踊る。とゞ、それがバレー式になる。このうち以前の子方四人上下より戻り來り、羨ましげに見て居り、とゞ釣込まれて一しよになる。と純然たる西洋樂になる。此の途端大人連一同引拔く、と筒袖（アツシまがひ）の漁人服、膝ぎりの裾に金絲の裏裝、それがバネ仕掛けにて捲れ上げられる。子方も同斷。此の一段は純粹の西洋式の舞臺のダンス。およそ五分間も踊りて、一同踊りながら上手へ入る。あと暫く西洋器樂。それが次第に遠くなりて止む、と舞臺が寂となる。

遠音にいかにも哀しげなる尺八を聞かせ、正面海上へ電氣の非常に大きな月を昇らせる。尺八吹き息む、と鼓唄。

〽吾れは本蓬萊の鶴、偶〻扶桑のまろうどに、伴ひ移る浦安の

と此の唄のうちに以前の兩ジテ悄然として岩蔭を廻つて出る。男女とも着附は多少舞樂に似た併しあの如くにしやちこばらぬ白地に銀の箔模様にて羽翼を表徵したるもの、頭には長き嘴と鷄冠を利かせたる一種の冠をかぶる。（仕立方にはいろ〳〵譌へあるべし。）次ぎの唄につれて名殘りを惜しむ思入れ。

〽馴れし浦わもさびれつゝ、浪の音をあらみ住みがてに　〽とは思へども、名殘り惜しの月影や。

これよりウタヒがかり

〽孤音いづれの處にか、聞かんと問はゞ秋の空、その盤旋の氅毹

唄

〽いさ白雲の飛ぶかたに、わが片影を見よや人、さらば〳〵と聲のみぞ

と主として尺八の吹音をあしらひ、

〽雲井の餘所に殘す老い鶴。

と唄一ぱいに活人畫模樣にきまりて

——幕——

（明治四十二年二月「新小說」所載）

墮天女

第一場

一種陰森なる、されど人間離れのしたるたゞ何となく滑稽にも聞かるゝ幻怪なる音樂、最初は遠く微かに、石泉の迸り落つる如く、旣にして次第に近く、遂には全く近く、山津波の寄するが如く、舞臺一ぱいに響き渡ると同時に幕が開く。

丹後の國丹波郡比治山の中腹、上手は山巓へ通ふ險しき路、處々に巉岩聳え立ち、千年以上を經たりと見ゆる樟、欅、雷火に擊たれて短くなれる喬松など、何れも奇怪なる形に生長び、陰曆五月中旬の新綠のおのづからなる靑地の錦を懸く。白き赤き躑躅が浮き模樣のやうにあちこちに點綴す。下手にも處々奇岩峙ち、怪樹生ひ繁れり。中央の打開いたる部分は、半ばは深き溪に臨み、半ばは麓へ通ふ路の心にて、こゝより人物の出入あり。正面の奥には、間近き山々の山巓手に取るやうに見ゆ。十五夜の闌けたる月、奇怪なる形に亂れ渦卷ける黑雲の中に隱れて、四面暗憺たる體。

幕の開きたる時、一群の妖精、人とも猿とも犬とも猫とも名狀しがたき容貌したる半裸體の怪物、身長五尺程を最大とす、小さきは三尺にも足らぬがあり、幕開きの幻怪なる音樂につれて狂舞してゐる。やがて舞ひとゞまると、妖精の長らしき巨魔、獨り前へ進みいでて唱ふ。他の妖精らも時々これに和して唱ふ。

妖長 〽あゝ、此の山巓に
底知らぬ淵做す淸泉
天つ女ら我が物とす、
月圓く光る夜每。
あゝ、銀の淸泉！

妖合 〽あゝ、銀の淸泉!!

妖長 〽あゝ、此の山麓に
涯知らず波打つ稻穗、
人の子ら我が物とす、

年々に殖え蔓延り。
あゝ、金の稻穗！

妖合　あゝ、金の稻穗!!

妖長　空高く、海遠きも、
日出づれば我が世狹し。
舞へ、踊れ、夜ぞ今は。
あゝ、たゞ夜ぞ我が世！

妖合　あゝ、たゞ夜ぞ我が世!!

これは急しき間奏、それにつれて妖群おもひ／＼に狂ひ廻ること一巡、樂調一變して稍〻緩く徐かになると、其の陰森なる音樂につれて、妖群手をとりあひ、合唱しつゝ、緩く環形に舞ふ。

妖合　高きは低まり、明きは昏め。
甘きは苦みて、清きは濁れ。
いみじきもの皆滅びはてよ。
翼ある人たる天女は墮ちよ。
毛の無き獸類と人をば呪へ。
いみじきもの皆滅びはてよ。

此のうち遠く山麓の方にて笛の聲聞ゆ。月雲間にあらはる。妖群これを聽きて驚き怖るゝ介。

妖合　聞けよ！　聞けよ！
あの聲！　あの聲！

妖精らあわてゝ上下へ逃げ入る。
一種悲涼清婉なる笛の音、次第に近く又高く瀏亮として聞え來ると共に、麓の方より一美少年、奈良の帝に仕へたりし年若き伶人、都雅なる服裝して、手に一管の玉笛を携へて登り來る。

少年　あやし、我が笛の音に、
雲破れ、月躍りいで、
あたり晝より明し。
げにこそ靈しき此の山！

四邊を見廻し

〽われ此地(ここ)に漂浪(さすら)うてより、
都にあこがれぬ日なし。
聞く此の山のいたゞきに、
永遠(えいゑん)の淵なす湧泉(いづみ)、
月光明鏡を沈むる夜、
天女あまくだり沐浴す、
其の姿知られず見れば、
願ひごと一つは叶ふ、
祟りあれど。……

天の一方を望みて物にあこがるゝ思入れ。

〽あゝ、まだ消えぬ幻影(まぼろし)、
なつかしき夢の都!
あこがれて迷ひ登れば、
怪し! 月隱れ、行く手は闇(やみ)。
是非なく岩に坐し、吹く笛の音(ね)に
ふしぎや、月出でて、あたり見ゆる。

上手の方を仰ぎ見て

〽あれこそ目ざす嶺(みね)よ! 登り行かん。

少年玉笛を吹き鳴らしつゝ、徐かに上手の路を辿りて、山嶺の方へ登り行く。笛の音次第に遠くなる。以前の幻怪なる音樂又聞えて、妖精群あちこちより走り出で、或ひは二頭、或ひは三頭、寄りこぞり、上手の方を指ざして相語る介(こなし)。

妖合　〽人なれど彼(あ)の物の音(ね)。
神に近し、近寄られず。
待て機(をり)を。しばらく待て。

此の途端、妖精の長は、ふと麓の方を見下す介(こなし)ありて、けたゝましく

妖長　〽又も、又も!
人こそ、人こそ!

これにて妖精どもあわてゝ上下の木蔭へ逃入る。野趣を帯びて率直なる、されど殆ど無規律かと思ふほど放縱なる音樂、次第に近く聞え來ると共に、農家の青年らしき、されど顏の色は寧ろ蒼白く、逞しき骨格には似ず身心共に疲れ弱りたりと見ゆる男、人目を憚るが如く左右前後を見返りながら麓より登り來る。

青年　〽あら、嬉し！　人に知られず
今宵(こよひ)こそ登り來れり、
頑固(かたくな)の父を出しぬき。……
あゝ！　父か？　あらず。仇敵(かたき)！
貪慾に凍る心！
いぢわるく我が戀妨ぐ。……
あゝ、戀よ！　命の美酒(うまざけ)！
戀ならで何に生くる我れ？……
天女見ば其の戀叶ふ。
行きて見ばや疾く天女を。

ふと麓の方を見て驚く介。

〽あら、悲し！　父こそ來つれ。
何とせん？　目(かひ)にかゝらば
天女を見るも效なし。
あゝ、わが戀のさまたげ！

以前の幻怪なる音樂又聞えて、妖群あちこちより躍り出て、青年の背後を跳ね廻りながら合唱す。

妖合　〽げに〳〵、戀のさまたげ

青年　〽うらめし！　こよひもまた
いぢわるく我が戀妨ぐ。
あゝ！　父か？　あらず。仇敵(かたき)！

妖合　〽げに〳〵、父にあらず、仇敵(かたき)！

青年煩悶する思入れ。

青年　〽何とせん？　目(かひ)にかゝらば
天女を見るも效なし。……
あゝ、わが戀のさまたげ！

妖群周圍を跳ね廻りて

妖合　〽げに〳〵、戀のさまたげ！

青年前後左右を見廻すことありて

青年　〽人はあらず……そと殺さば……

妖群狂舞して

妖合　〽人はあらず、そと殺せや!!

同じ曲を二三回折り返す。樂調殺氣を帶ぶ。青年殺意を抱いて木蔭へ忍ぶ。妖群も上下に別れて隱る。野趣を帶びたる、されど何となく躓きがちになる樂調、次第に近く聞え來る。既にして農家の主翁らしき一老爺、麓より人を求むる樣にて登り來る。

老爺　〽まさしく我が子!……
教誨(いけん)曾て聽かず、
日ごろ放蕩つくす上に、
今宵(こよひ)先きへ廻り、
親の願望(のぞみ)さまたぐ。
おのれ恩知らずめ!……
何とせん? 目(め)にかゝらば
天女を見るも效(かひ)なし。……
あゝ、我が願(ぐわん)のさまたげ!

以前の幻怪なる音樂又起る。妖群上下より躍りいでて

妖合　〽げに〳〵、願(ぐわん)のさまたげ!

老爺　〽すておかば家のわざはひ……

妖群老爺のほとり近く跳ねまはりて

妖合　〽げに〳〵、家のわざはひ!!

此の曲もまた二三回折返す、と以前の青年太き枯木の枝を提げて木蔭より窺ひ出る。樂調一段の淒味を加ふ。月雲間に隱る。青年木の枝を振つて老爺の背後に近づく。妖群狂舞して煽動するが如き介をなす。殺氣を帶びたる幻怪樂につれて青年老爺を一撃の下に打殺さんとす。老爺危く引きすかして、同じ音樂につれて立廻る。此の間妖群二派に別れて、一は青年に後援し、一は老爺に後援するが如き科介して狂舞す。とゞ青年は誤つて老爺の爲に枝を奪はれ、其のはずみに足を踏外して深き溪に落ち入る。

妖群狂舞。

老爺よろめき倒れ、しばらく茫然たる體、やがて半狂亂の體にてよろめきよろめき山巓の方へ登り行く。

野趣を帶びたる、されど躓きがちなる音樂の次第に遠

くなりゆくと同時に、以前の幻怪樂は一段の狂味を加へ來りて妖群狂舞す。逆立して歩するものあり、とんぼ返りするものあり。此のうち舞臺次第に暗くなりて、遂に眞の闇となる。

第二場

幻怪樂の殆ど全く消えんとすると同時に一種微妙なる天樂の聲聞え來る。其の聲の近くなるにつれて舞臺次第に明るく、遂に皎然たる月夜の景となる。

此高山の絶巓、其の形狀奇特なり。譬へば富士山の頂上の如く、中央は凹み、其の周邊の巉岩は蓮の花の滿開せる如くに開き亂れ、其の凹みたる處の一角より水晶をさながらに溶解したるやうなる清泉長永に湧き出で、年々歳々水量を加ふるゆゑに、此の清泉の溜れる凹みは、常に一小湖の形をなし、其の底は透明りて手に取る如くに見ゆれど、其の深さは測り知られず。正面の一部巉岩の著しく低くなれる處に清泉の一面見ゆ。上手に小山の如き巨大なる巉岩、其の他猶ほ上手にも下手にも夥多の怪巖高くまた低く峙ち、老樟、古槐、蔦蔓の纒へる巨松など其の上に掩ひかぶさる。あちこちに白き赤き躑躅、見なれぬ高山植物の花など。上手の巨大なる巉岩の頂、腰、裾、其の他ところ〲に玉の如き肌膚の透きて見ゆる白き羽衣を輕く緩くはおりたる七體の天女、今がた天より降りたる體にて、或ひは立ち、或ひは臥し、或ひは腰かけ、或ひは寄りかゝりなりて合唱す。（三人と四人とに分れて、交互に合唱す。）

甲群

〽高きを離れて低きに遊ぶ。
高きときには虚空の際涯、
低かるときには底ひも知らず。

全群

〽おもしろ！　おもしろ！

これにて全群巖を離れ、平たき處に降り、微妙なる樂につれ、手を取りあうて緩く舞ひ廻る。

乙群

〽高きを離れて低きに遊ぶ。
低きに居れども清き眞清水、
高きを望まば輕き羽ごろも。

全群

〽おもしろ！　おもしろ！

間奏次第に急調となる。それにつれて樂しげに舞ひ廻

ろうち、一人づゝ手早く羽衣を脱ぎ、巨巖のあちこちに懸けおきて、裸體となりて、そこゝの巖頭より正面の泉の中へ飛び下る。かくて水浴しつゝ唱ふ心にて、岩の間の水上に、樂しげに泳ぎ浴する七天女の、黑髪をたゞよはしたる頭、肩、手など交る〴〵見ゆ。

甲群
〽高きを離れて低きに遊ぶ。
高きときには虚空(こくう)のきはみ、
低かるときには底ひも知らず。

全群
〽おもしろ！　おもしろ！

この以前より（上手奥の方より）の前場の悲凉清婉なる笛の聲再び瀏亮として聞え來る。微妙なる天樂かすかになりて第一の天女先づ唱ふ。（天女の姿は巖蔭にかくれて見えず。）

一天
〽あやしや、あの物の音(ね)！

全群
〽あやしや。あの物の音(ね)！

二天
〽迦毗陵(かびりよう)の聲にも似ず。

三天
〽天樂の音(ね)にもあらず。

四天
〽生れし聲か？

全群
〽あらず。

五天
〽作りし聲か？

全群
〽あらず。

六天
〽心耳(しんに)に徹(とほ)る甘露！

七天
〽荒ぶる自然も和(な)ぐ。

全群
〽あやしきあの物の音(ね)!!

七天女おの〳〵正面巖の間より半身をあらはして笛の

音に聽き惚れたる體、

此のうち前の場の躓くやうなる野調の樂聞え來る。此のうち第一、第二の天女ふと下手を見て驚く思入れ。樂調俄かに亂れてけたゝましくなる。

一、二　〽あはれ！　あはれ！
　　　　穢きもの

三、四　〽物かげより
　　　　此方を見る！

これにて一より六までの天女はあわてゝ水を出で

合唱　〽かづけ　ころも
　　　　疾く　羽ごろも！

皆々巨巖へ驅けよりて脱ぎおきたる羽ごろもを被り、泉の方を見下して第七の天女を呼ぶ、

一、二　〽あはれ！　あはれ！
　　　　など來まさぬ？

三、四　〽穢きもの
　　　　のぞき窺ふ。

合唱　〽かづけ　ころも。
　　　　疾く　羽ごろも！

此の時野調の樂近く且つ高くなる、と前の場の老翁下手より窺ひいづる。六天女けたゝましき叫び聲を發す。

合唱　〽あはれ！　あはれ！
　　　　遲し　最早!!

六天女おの／＼羽衣を引掛け／＼、舞ひ上る介して、上手巖かげへ消える。老翁這ふやうにして窺ひ寄り、巖上に殘しある第七の天女の羽衣を取らんとす。此の間始終他の音樂を縫うて以前の笛の音が瀏亮として聞ゆる。

六天女羽衣をひろげつゝ、中天高く舞ひ上りながら泉の方を見下し、手を振り、袂をなびかして唱ふ。

合唱　〽あはれ！　あはれ！

遅し　最早!!

此の時まで少しも動かず、石にて刻める裸體像のやうに、中央なる或岩かげに後向に上半身をあらはして憩へる第七の天女、笛の音に聽惚れたる體、此の時はじめて頸垂れたる顔をあげて獨唱す。

七天

あはれ、一滴に千歳を醒めぬ
天の靈漿に我が酔へるにあらず。
心　雲を離れ、地をも離る。
人と天と地と融け合ふか　今!
あはれ、あの物の音!　あの物の音!

笛の音忽然として止む。野調また盛んに起る。羽衣を不審げに打返し打返し眺めゐたりし老爺喜色を満面にあらはして獨唱す。

老爺

うれし!　うれし!　天女を見つ。
うれし!　うれし!　羽衣得つ。
願ひごとは必ず成らん。
うれし!　うれし!　疾く家路へ。

と麓の方へ去らんとす。微妙なる天樂かすかに聞えて、遠く高く六天女の聲にて

合唱

あな、あさまし其の羽衣を!!

第七の天女此の時はじめて心附き愕然として起つ。

七天

あら、悲し、我が羽衣を!
羽衣を奪ひ去られぬ!
あら、悲し、我が羽衣を!!

合唱

あな、あさまし、其の羽衣を!!

第七の天女巖上に立ちて此方に向ふ。聊かも裸體を恥づる色なし。

七天

なう、其の羽衣　返せ我れに!

老爺天女の神々しき姿を見て我れを忘れたる體。しばらく無言。此の間かすかに天樂の響。

老爺

あゝ!……
こはいかに眼昏む。

星の目よ！　玉の肌膚！
美の力　けふぞ知りぬ。
我れ知らず　心牽かる！

手に持ちたる羽衣を取りおとし、磁氣などに牽かるゝ様に、二足三足天女の方へ近づく。

〽七天　なう、其の羽衣　返せ我れに！

老爺はなほ恍惚として天女に見惚れてゐる。

〽老爺　美の力　けふぞ知りぬ。
戀か是れ？　若きが迷ふ……
あゝ、我が子！　戀の奴！
あゝ、我が子！　世にあらぬ子！

〽七天　なう、其の羽衣　返せ我れに！

老爺はじめて我れに返りたる思入れ。

〽老爺　いや〳〵……
年ごろの望み遂ぐる
質草の此の羽衣、
返されず　遂げぬうちは。

〽七天　いで、其の望み　今叶へん。
まづ羽衣を　返せ我れに。

〽老爺　そは詐りて逃げん方便。……

〽七天　あさましや　其の疑ひ！
虚詐は人のならひ。
天上に無きためし。

〽老爺　さらば先づ靈驗見せよ

〽七天　語れ汝が望むことを。

これにて老爺思ひ惑へる體。

〽老爺　あゝ、其の望み……其の望み！
たゞ一つのみ叶ふ望み！

天女うなづきて

七天　たゞ一つのみ叶ふ望み！

老翁ます／＼思ひ惑へる體。

老翁　あゝ！
財貨(たから)をのみ欲りせし我れ、
美を知りし今日(けふ)　願望(のぞみ)増しぬ。
あゝ、逢はまほし又の春にも！
人の愉樂(たのしみ)戀に如かず。……
あゝ、戀の奴(やつこ)、死にし我が子！

七天　語れ疾く望むことを。

老翁なほ思ひ惑へる體。

老翁　されど、されど……財貨(たから)も欲し。
あゝ、財貨(たから)！……
ありとあるものを買ひ得る力！
名をも榮えをも友をも世間をも！
あゝ、財貨(たから)！　力の本源(みなもと)！

七天　語れ疾く望むことを。

老翁　あゝ、又の春！　若き盛り！
人の愉樂(たのしみ)春に如かず。
輕き心、敏捷(はしこ)き手足、
見聞くもの皆新たに、
憂きは忘れ、物に怖ぢず、
戀に夢に日ねもす醉ふ……
あゝ、又の春！　若き盛り！
人の愉樂(たのしみ)戀に如かず。……
あゝ、戀の奴(やつこ)、死にし我が子！

此の時　上手岩石の間より　前の場の　美少年　うかゞひ出で、長き枯れ枝をさしのべて老翁が取落したる羽衣を掻き寄せて取る。

七天　語れ疾く望むことを！

老翁はなほ思ひ惑へる體。

老翁　〽あゝ、血を分けし我が生みの子！
貧人の　上無き寶！
あやまちて殺しゝ我が子、
あゝ、生かさばや身に易へても。……
されど、されど……財貨も欲し！
あゝ、財貨！　力の本源！

此のうち美少年は羽衣を取得て上手の小高き巖上に突立ち

少年　〽よきもの得たり！　これだにあらば！

と二度繰り返し歌ひて上手へ去る。第七の天女かくと見て驚き叫ぶ。

七天　〽あはれ！　我が羽衣をば！

老翁もはじめて心附きて驚く。

老翁　〽やゝ、わが得つるものをば！

七天　〽あら、悲し！　わが羽衣！

老翁　〽あら、悔し！　得つるものを！

天女地上に臥しまろびて號泣す。

七天　〽あはれ！　あはれ！　翼無き身。
空へ翔べず。人ならぬ身。
こゝに長く留まりがたし。
あゝ、あさまし、我が身の果！

上手奥の中空にて六天女の聲々。

合唱　〽あゝ、あさまし、その身の果!!

此のうち老翁思入れありて

老翁　〽賺して伴れてゆかばや、
奪られし物の代りに。

七天　〽あゝ、あさまし、わが身の果！

合唱　〽あゝ、あさまし、その身の果!!

老翁第七の天女の傍によりて親切げにいたはることありて

老翁　〽ともかくも山を下り　里へ來ませ、
やがて我れ探してん羽衣をば。

第七の天女はこれに耳を假さず、天を仰ぎ地に臥しまろびて悶え歎く科介。

七天　〽あゝ、悲し！　昨日までは
千里の外　見たりし目
睫さへ見る能はず。
行住如意の羽翼もなし。
地に生りし身ならねば
人に劣る天の兒！
あはれ、我れ　無きにひとし。
進退たゞ世人のまゝ！

老翁いたはり慰めて

老翁　〽ともかくも山を下り　里へ來ませ。

天女餘儀なげに起ちあがりて、老翁に手を引かれ、下手へ向ひながら

七天　〽あゝ、悲し！　あゝ、あさまし！

二三度折り返し歌ひつゝ歎きながら降りゆく。

天樂聲かすかに、一種言ひがたく凄慘なる悲哀の調を帶び來る。それにつれて、六天女の合唱天の一方に聞ゆる。

合唱　〽あゝ、悲し！　あゝ、あさまし！
羽翼無き天つをとめ！
際涯なき空を離れ
底知らぬ淵に沈む。
あゝ、悲し！　あゝ、あさまし！

此の途端、以前の幻怪樂騒然として起り、上手、下手より前の場の妖精群狂舞して入來り縱横無盡に跳ね廻る。

妖合　〽毛の無き獸類と人こそなりぬ。
翼無き人たる天女を見よや！

世界は　今ぞ我が有！

合唱し了りて一齊に大笑し、更に手を取りあうて狂舞す。其の間を縫うて、次第に遠く微かに、六天女の哀弔の合唱聞ゆ。

天合

あゝ、悲し！　あゝ、あさまし！
羽翼無き天つをとめ！
際涯無き空を離れ
底知らぬ淵に沈む。
あゝ、悲し！　あゝ、あさまし!!

天女の合唱の遠く微かになりゆくにつれて妖群の狂舞はます／＼激しくなる。

妖合

毛の無き獸類と人こそなりぬ。
翼なき人たる天女を見よや！
世界は　今ぞ我が有。

謳ひ了りて又一齊に大笑し、更に手を取りあうて狂舞す。此の大雜踏、大噪音のうちに幕しづかに下る。六天女の哀弔の合唱微かに／＼聞ゆ。それを縫うて妖群の笑ひ聲。

――終――

常闇

前の幕

國つ陰山(かげやま)　麓(ふもと)の場

哀れに寂しく、物すごく情なげなる器樂一しきりありて、山颪、川瀬の音に擬したる噪音と共に幕あく。舞臺は一面の平舞臺。上手に遠く嵯峨たる山麓を見せて、こゝかしこ疎らに枯れたる立木を配置し、正面は草茫茫たる平原、下手に遠く斜に大河見ゆ。（舞臺の電氣を消したれば、これらの景は只朦朧と見ゆるのみ。）中央に老若男女の神、凡そ十二人參々伍々不行儀に、或ひは蹲踞し、或ひは胡坐して悵然(ちやうぜん)なり。うめくやうに同音に唱ふ。

皆

〽あはれ！　あはれ！
天が下(あめがした)　常闇(とこやみ)と　昏く、
晝夜(ひるよる)の　分別(さだめ)も　知らず！
あはれ！　幾日(いくか)　經つる？　知らず！
青山も　枯山(からやま)なす　枯れはて、
海河も　濁り、腐り、とゞろぎ、
あらぶる　神の音ない　狹蠅(さばへ)なす　い涌きて、
よろづの　物の禍ひ　蜂のごと　おこりぬ。
あはれ！　いづち往かむ？　いづち？
やがて　世や滅ぶ？　世やも！

〽あはれ！　あはれ！
天つ霧(あまつきり)　時じくも　降(ふ)りて
海陸(うみくが)の　區別(けぢめ)だも　見えず！
あはれ！　いく夜　經つる？　知らず！
たなつもの　つぎ〳〵にも　萎れて、
生けるもの　こと〳〵にも　盡きなむ。

あふげど、見えず　御光り！　螢なす
光りも！
呼ばへど、賜ばず　御救ひ！　卒なす
救ひも！
あはれ！　いづち往かむ？　いづち？
やがて　世や滅ぶ？　世やも！

と歌ひ終りて一同うめき歎く。やがて此の群中の長と見ゆる鬚髯の黒く立派なる神、阿樂思、牟禰氣ノ命、貌をあげて向うを見ることありて、思入れあり、起ち上りて一同に向ひ、向うを指さし

牟
〽見よ！　あれを。あれを見よ！
螢なす　寄りくる　光り！

とこれにて一同も起ち上り、向うを見て聲を合せ

皆
〽げにや　げに！　寄りくる光り！
あな！　嬉し！　あな！　嬉し！
あはれ！　道しるべ　得てむ。

と此のうち寂しき器樂につれて、向うより國津道屋ノ命、白頭の老翁、頭髯は長うして臍に及べり。右手に松明を捧げもちて先きに立ち、其のうしろより老若男女の神、都合六人、覺束なげに隨ひ來る。いづれも衰へ疲れ若しくは恐れ悲しめる色あり、折々躓き仆れむとする者あるを相扶けて辛うじて歩む。次ぎ／＼の白はいづれも間延びに單調子に休み／＼言ふと心得べし。既にして花道の半ばまで來る。器樂やむ。（始終、平坦なる道を嶮岨と思ひ誤りなる心なり。）

道
〽吾れに隨きて來。只、吾れに隨きて來。あやふきこともなし。あやふきこともなし。

丙
〽さりとても　三愿前も　見えぬを。あ！　胸騒ぐ！
おそろし！　おそろし！

道屋ノ命は松明を手の屆く限りさしのばし揮り照らして

道
〽それや！　それや！　かうばかりも　明に見ゆるを。
それや！　それや！

と頻りに松明をふりかざして皆々を勵す。この途端、幼き神、丁、横さまに倒れて

丁

〽あいた！　あいた！　蛇に足を噛はれつ。あいた！　あいた！

母らしき女神、丁を扶け起す。此の時、中年ながら痩せ萎れたる神、甲、ふと心附きたるが如く、聞き耳たてゝ歩をとゞめ

甲

〽や！　待ちね。待ちね。いづこにてか　潺流の聞ゆるげなり。や！　このもにも　かのもにも　聞ゆれ！　や！

とあちこちと窺ふことありて

甲

〽や！　や！　や！　崖ぞ！　崖ぞ！　此の面も　彼の面も　二尋、三尋先きは　八千尋なす　谷ぞも！　黄泉に通ふ　谷ぞよ！

と是れにて一同愕くこなし。

皆

〽あに？　崖とや？　八千尋なす　谷とや！　黄泉に通ふ谷とや！　いで。いで。

と皆々こゞみて左右をうかゞふ。道屋ノ命ばかりは、突立つたるまゝにて、右へ松明を揮り照らす。

皆

〽うべも！　うべも！　うべも！　げにも潺流の聞ゆるげなり。げにも　水の音の　聞ゆるげなり。

乙

〽あはれ！　あが胸は　ほと／＼す！

丙

〽あはれ！　あが胸も　ほと／＼す！

皆

〽あはれ！　あはれ！
あれらが胸も　ほと／＼す！
あな！　おそろし！　あな！　おそろし！
若し崖ならば　何とせむ。
崖ならば　何とせむ。

と是れにて道屋ノ命さへも、覺えず愕然として、一たびは尻込みせしが、さすがに心を鎮めたる體にて、皆を制し

道

〽手まどひすな。手まどひすな。此の火あるからは危きことなし。右も左も　吾れに隨きて來。右も左も　あしこまでゆけ。いざ。いざ。

と先きに立てど、衆皆おぢけづきて尻込みす。此のうち最前より花道の方を見つめ、遙かに此の問答に耳を傾けゐたりし舞臺の一群、此の時やう／＼聞きわけたる體にて、牟禰氣ノ命を初め一同聲を合せ

皆　〽あら！　嬉し！　炬火なりけり！　神の
氣す。
あら！　嬉し！　こゝだの神の　聲すなり。
いで　い迎へて　あの炬火
え分ちて　道を　照らさむ。

と此の間花道にては、物は言はれど、「縋きて來」、「いなゆかじ」といふ思入れにて爭うてゐる。舞臺の牟禰氣ノ命手早くあたりの枯枝を拾ひ集め、束ねて携へ、花道へ進み

牟　〽なづかし！　あがはらから！
ともしび　分ちてたべ。

道屋ノ命進み迎へて

道　〽なづかし！　あがはらから！
とう／＼　分ちて取れ。

と是れにて牟禰氣ノ命は道屋ノ命より火を分ちとりて、先きに立ち、道を照らす。舞臺なるも、花道なるも、皆々蘇りたるやうになりて喜び勇む。

一同　〽あら！　嬉し！　あら！　嬉し！
道は見えつ。道は見えつ。
いでや　いで　一つところに　集はむ。

と花道の一群舞臺に來る。途端に山颪はげしくして松明消えむとす。一同うろたへ騷ぎ、袖垣して防がむとするもあり。

一同　〽あら！　何とせむ！　何とせむ！
ともし　消えなば　何とせむ！

道屋ノ命と牟禰氣ノ命は我が持てる松明に風をあてじと身を以て防ぎながら、あちこちと走りめぐりて

道　〽など　各々　枯枝だに持て來て　火を移さむとはせ

ぬぞ？

牟 〽あはや！ あはや！ 此の火は消えなむ！

道 〽など うつさぬ？ とう移せ。

牟 〽とう移しね。とう。とう。

と此のうち道屋ノ命の火先づ消ゆ。命いよ〳〵氣を揉みあせりて

道 〽など 衆皆みづから取らぬぞ？ など取らぬ？
など取らぬ？

と此のうちに又一陣の山颪して牟禰氣ノ命の松明も消え、又もとの如き眞の暗となる。

一同 〽あら！ 悲し！ 何とせむ！
又も世は 常闇!!!

と皆々途方にくれたる思入れ、こなし。道屋ノ命やうやう我れに返りたる思入れ、手に持てる松明を揮り試みて

道 〽しかすがに しかすがに
螢なす 火の氣残れり。
此の火種 香山にて得つ。
ゐすくまり 空に死なむや！
這ひ〳〵も 往きて又得む。

牟 〽げにや げに。
息の緒に 思へるあれらを、
千萬の ためを思へるを
大神の やはか幸はぬ？

道、牟 〽おもむろに つゞけ 神々。

一同をひきゐて燼しの松を揮り立てつゝ先きにたつ。皆々慨然に萎れて、力なげに隨ふ。又も哀しく寂しき器樂一しきり。山颪、濁浪の岸を洗ふ噪音にて

——幕——

後の幕

虚の大峽の場

浮きたる陽氣なる器樂にて幕あく。本舞臺一面の平舞

臺。上手立枯れしたる大木の立木の隙間に山坂道の岩組を見せたる暗淡たる山間の景。奥も下手も處々に叢枯れしたる老木、若木、其の下枝は大かた折り取りて上梢ばかり殘れり。すべて天の香山木につゞける山峽の體。よき處にくさ／″＼の服裝したる大勢の神、みだりがはしく集ひて酒を飲みゐる。既に醉ひじれたる體なり。中央に書にかける天の宇受賣ノ命のやうにしどけなき姿したる少女神、凡そ八人、醉へる神らの同音に唱ふ戲歌につれて緩く輪がたに廻りて舞ふ。次ぎ次ぎの歌の意味によりて舞ふといふよりも踊るといふに近き振をなすこともあり。ざれ歌の一くさり果つる毎に、醉へる神らは手を拍ちて、諸聲に樂しげに笑ぐ。舞臺前の方、上手と中央と下手、三ヶ所に篝火焚きてあり、酒宴に加はらぬ三人の神ありて之れを守る。怒る神と歎く神と物言はぬ神となり。怒る神は醉へる群れの方を苦々しげに睨みて「高つ神の災ひなど擊たぬくやつらを？　高つ鳥の災ひ！　など裂かぬ醜のつら？」と折々罵り歌ひつゝ、上手の山坂より降り來て枯枝を上手なる篝火に投じ、さて苦々しげに醉へる一群を睨めまはしつゝ又山坂を登り去るを例とす。物言はぬ神は只默然として中央の篝火を守り、只折々あちこちと探りあるき、一枝二枝の枯木を拾ひ集めて、一へに火勢を衰へしめざらむことを力む。歎く神は始終下手に在り。初めは枯れたる老木の下枝、中枝を、或ひは延び上り、或ひは攀ぢ登りて折り取り來て下手の篝火に投じ、其の都度あまたゝび歎息して「あはれ！　世や亡ぶ？　世やも！」と悲しげに歌ひつゝ、あたりに枯枝の漸う乏しうなるに及びて物言はぬ神と一二度同じ枯枝を奪ひあひ、あはや叩きあふにやと見ゆることなどもあり。すべて是等の言動は醉へる神らの次ぎ次ぎに歌ふ戲歌の間々に挿まるものと知るべし。幕あくと醉へる神ら醉をあはせて笑ぎ／＼歌ふ。

醉　同

〽や！　眞山の小葛！　や！　繰れ、繰れ
小葛！
や！　鷺の頸取ろむと。や！　いとはた
長うて、
や！　胼胝踏むな　後なる子。や！　我
れも目はあり　先なる子。

此の時怒る神山より下り來りて

怒

〽高つ神の災ひ！

など撃たぬ　くやつらを？

酔 同 〳〵や！　ゆすりあげよ。そゝりあげむ。や！
そゝりあげよ。ゆすりあげむ。

歎く神は此の時あまたゝび歎息して

歎 〳〵あはれ　世や亡ぶ？　世やも！

酔 同 〳〵や！　あぶり戸（ど）や　ひわり戸（ど）！　や！
ひわり戸（ど）や　あぶり戸（ど）！

怒 〳〵高つ鳥の災ひ！
など裂かぬ　醜（しこ）のつら？

酔 同 〳〵や！　谷から往かば　岡から往かむ。や！
岡から往かば　谷から往かむ。
や！　これから往かば　彼れから往かむ。
や！
かれから往かば　これから往かむ。

此の歌につれて少女らをかしき介して舞ひ踊る。舞ひ了ると、酔へる神ら一同手を拍ちて、樂しげに笑ぐ。

酔 〵やよや！　やよや！　ハ、、、、！　ハ、、、、！

怒 〳〵高つ神の災ひ！
など撃たぬ　くやつらを？
高つ鳥の災ひ！
など裂かぬ　醜（しこ）のつら？

歎 〳〵あはれ！　世や亡ぶ？　世やも！

かくて怒る神は罵りながら山坂を登り去り、歎く神も中つ枝を折らんとて大きなる木を攀ぢ登る。酔へる神ら又歌ふ。少女ら又舞ひはじむ。

酔 同 〳〵うそらが崎に　鯛釣る漁人（あま）も！　鯛釣る！
鯛釣る！
吾妹子（わぎもこ）がためと　鯛釣る漁人（あま）も！　鯛釣る漁人も！

舞ひ了ると、一同又手を拍ちて、樂しげに笑ぐ。

醉　〽やよや！　やよや！　ハヽヽヽ！　ハヽヽヽ！

怒る神は、此の時、山より踊り來り、歎く神も地に下り立つ。

怒　〽高つ神の災ひ！
など撃たぬ　くやつらを？

歎　〽あはれ！　世や亡ぶ？　世やも！

醉へる神ら又歌ひはじむ。少女ら又舞ふ。

醉同　〽だぶ〳〵の　だぶの河原べや。御稻舂く、女の美さゝや！　それもがも！　彼れもがも　從妹中の　いとこせにせむ！

こゝに至りて怒る神堪へかねたる思入れ、奮然とたちあがりて醉へる神らに近づき、目を怒らして一きは聲高く歌ふ。

怒　〽高つ神の災ひ！
おちかゝれ　くやつらに！
高つ鳥の災ひ！
裂き破れ　醜のつら！

されども醉へる神らは之れにかゝはらず、尙ほ笑ぎ歌ふ。

醉同　〽葦原田の稻舂盤のや、おのれさへ美女を得ずとてや、おろしては捧げや。かひなげをするや！……

と歌ひ進み、舞ひ進むにつれて狂態ます〳〵甚だし。

怒る神もはや堪へかねたる思入れにて「しこめ〳〵しこめ！」と罵り叫びながら、大いなる火の燃えつきたるまゝの枯枝をふりかぶりつゝ宴の中央へ躍り入る。少女ら愕き怖れて左右へ散る。醉へる神ら、よろめきながら氣色ばみ、身がまへして

醉同　〽おのれ！　おのれ！　しれもの！

と罵りおらびて、怒る神を八方より取り圍み、やがて亂脈の格鬪となり、とゞ五人六人して怒る神の持てる燃ゆる枝を叩きおとし、打倒し、引かつぎて下手へ入

る。殘れる皆々勝ち誇りて笑ぐ。

醉

〽をこのしれものよ！　をこのしれものよ！　ハ、、

ハ、！

ハ、、、、！　ハ、、、、！

歎く神之れを見て彌〻悲しみ

歎

〽あはれ！　世や亡ぶ？　世やも！

と悲しげに歌ふ。此のうち怒る神をかつぎゆきし神ら歸り來り、又寄り集ひ、酒を飲み、少女らに戯るゝことなどあり。浮きたる猥りがはしき器樂一しきり。拍子詞の樣に神々の笑ぐ聲其の切れ目〳〵に挿まる。之れより先き、無言にて枯枝を集め居たりし神は、漸う疲れ果てたる體にて、よろめき〳〵いづこへか退出去る。今は篝を守るに努力するものは歎く神只ひとりのみ。怒る神が焚きおきし篝は此の時殆ど全く消えんとし、物言はぬ神のも次第々々に火勢衰ふ。歎く神ひとり氣をいらつ思入れ、こなし。

歎

〽あはれ！　あはれ！

篝　消えむ。

百枝杜樹。湯津かつら、

五百枝の槻も　眞榊も、

下枝　中つ枝も　盡きぬ！

あはれ！　世や亡ぶ？　世やも！

此の時醉へる神ら總立に立上りて、男女入りまじりて、自ら歌ひつゝ舞ひ踊る。猥りがはしき浮きたる器樂又盛んに起る。

醉　同

〽千歲！　せんざい！　せんざいや！

千とせの千歲や！　なほ千歲！

歎

〽あはれ！　世や亡ぶ！　世やも！

醉　同

〽萬ざい！　まんざい！　萬歲や！

よろづの萬歲や！　なほ萬ざい！

歎

〽あはれ！　世や亡ぶ？　世やも！

此の時に至りて怒る神の篝と物言はぬ神の篝とは全く消え果て、歎く神のも火の勢ひ漸く衰ふ。此の途端、前の場の幕開に聞えしと同じき哀れに寂しく、物すご

く、情なきやうなる器樂の音次第に近く聞え、やがて前の場の一群道屋ノ命と牟禰氣ノ命とに導かれて花道を探るやうにして本舞臺に近づき、篝火の衰へて今將に消えむとするを見て驚き、舞臺なる歎く神に聲を合せて

一同

あはれ！ あはれ！
篝 消えむ。
あはれ！ あはれ！ 世や亡ぶ？
あはれ！ 世や亡ぶ？ 世やも！

醉へる神らは之れを聞きつけぬものゝ如く、以前の「萬歳！ まんざい！ 萬歳！」を反復して歌ひつゝ踊り狂ふ。されど歎き醉の次第に甚だしくなるにつれて、漸く其の興を妨げられたる體にて大いに怒り、其のうちの一人、よろめき〳〵群を離れて、歎く群の方へ進み向ひて、目を怒らし

醉

あな！ がまや！ あな！ がま！
なに おらぶ？ しれもの！

此の時道屋ノ命徐かに進みいでて睨まへ

道

あさましや！ しれもの！
なが睫(まつげ) え見ずや？
世の亡ぶ 汝(な)が罪！

歎一同

げに 世の亡ぶ 汝が罪!!

これを聞きて醉へる神ら一同大いに激したる色あり、よろめきながら一齊に進み向ひて

醉一同

あはれ！ しれものゝ しれものと呼ぶぞ
につくしや あれらを！

歎一同

夢に醉ふ しれもの！

醉

につくしや！ こらさむ。

歎

うらめしや！ こらさむ。

酔　〽にっくしや！　こらさむ。

兩群亂れ進む。悲しく寂しき樂と浮きたる猥りがはしき樂と雜然として錯綜し、神もまた陰陽の兩群入り亂れて、あはや激しき格鬪ともならむとも見えたる途端、俄然として山鳴り震動して、向ひより天の手力男ノ命、見上ぐるばかりの巨いなる神、岩が根を沫雪なし蹴散らかして、嚴の男叫び踏みたけびて、猛然と馳せ出で來る。手には八尋瓊矛を提げて、すぐに本舞臺へ來る。其の間、始終山鳴り震動す。命は近寄りて

手　〽しこめ！　おれ！　をこのしれもの！

と罵る。兩群共に疾風の前なる枯葉のごとくに左右へ辟易す。手力男、上手に瓊矛を突きて小山の如く突立ち、下手なる群衆をにらまへ

手　〽高ひかる　日の神　かくろひまして、
螢做す　光りも　照らさずなりて、
谷蟆の　狹度る極み、
潮沫の　留まる限り、

世を擧り　傷めるなかに
あに、おとゝ　たゝかふか？　おぞ！
しこめ！　おれ！　をこのしれもの！

とこれにて一同怖れ畏みて拜伏す。

手　〽聞くや　汝等？
さかし神たち
神ぱかり　はかりまして、
安の河原に
　神つどひ　つどひまして
靈し祝ひごとをもちて
日の神の　御怒りをば
ことほぎて鎭めむとす。
汝等も　とうまゐ來て
ねぎごとに　言ぞへしね。
　やをれ！　來むや？　來じや？
　來むや？　來じや？　否や？　諾？

これにて一同平ばり拜して

皆
〽う。う。う。う。う。

といふ。時に篝火殆ど消えむとす。歎く神けたゝましく聲を放ちて

歎
〽あはれ！　あはれ！
篝　消えむ。
あはれ！　あはれ！

一同も驚き聲を合せて

一同
〽あはれ！　あはれ！
篝　消えむ！

と悲しげに叫ぶ。手力男きッと思入れありて、つかつかと下手なる枯れたる松に近づき、二つ三つゆりうごかし、「や」と聲かけて難なく根こじとなし、つと逆まにして其の枯れたる上梢を篝火の中に突入る。皆々驚く。

一同
〽すさまじ！　すさまじ！
すさまじ！　靈業(くしわざ)!!

火、松の梢に燃えうつりて、ぱつと一時に火勢揚る。手力男たゞちにそれをもたげ起して、高くかざし

手
〽しるべせむ。つゞけ　神々！

と根こじの松を大炬とし先きに立つ。又も山鳴り震動す。

一同
〽あら！　嬉し！　あら！　嬉し！
道は見えつ。道は見えつ。
いでや　いで　後(しり)へにつきて　辿らむ。

宜しく活人畫模様にて

——幕——

（文藝協會第一回公演用に綴れるもの、明治三十九年二月「早稻田文學」所載）

聖德太子と惡魔

第壹場　仁王門前

舞臺裝置は一體に象徵式で、故實にも實際にも拘はらない。舞臺の正面は仁王門を象徵した極めて華やかな平面的の張り物で見切る。但し中央が空いてゐて、そこから出入するのだから、其奥にも境内の景色を象徵したと見える第二の張り物で見切る必要がある だらう。尚ほ、上手と下手とは一種の象徵模樣を銀箔で捺した黑幕で見切る。幕のあく前に、西洋樂の前奏があつて、次ぎに暫くの間、梵鐘の音を聞かせる。幕があくと、オラトリオ風の西洋樂につれて、門の内から一老僧を先きに、僧徒の扮裝をした者が十六人續つて出て、やがて老僧を眞中にして、八人づつ左右に、やゝ斜に、よろしく立並ぶ。と老僧の詞になる。此詞は、ほゞ「能」のコトバのやうにいふがよい。以下「候ふ」を用ひた詞は、すべて之れに準ずる。やゝ砕けた詞は、「狂言」のコトバに準ずるがよい。

老僧
〽夫れ惟るに、
天竺國にての
遠つ昔の事とよ。
構へを東川の岸に結んで
そこに福基を設け、
遂に淨業を新る。
偏滿三千界。
往事一千年、
苦海の舟航を建て
信仰の枝幹を爲す。
仰げば則ち菩提心を發し、
眺むれば便ち歸ることを忘る。
衆善たちどころに花咲き、
樂福たちどころに實る。
故に名づけて伽藍といふ。
伽藍とは「聖園」の謂ひたり。

と上手、下手の僧徒ら、聲を合せて唱ふ。

合唱
〽仰げや！　仰げ！
この新御寺。

わが日の本の
最初の伽藍！

唱ひ終ると、一同居どこにて膝まづき、一齊に數珠を押揉んで

〽七寶堂塔巍々無量。
　上下莊嚴殊妙華香。

と誦し、又立上りて唱ふ。

上の組
〽鳳の翅や　反りたる檐端、
雌雄の鴛鴦　ならべる瓦。

下の組
〽壁には描きたり　いろ〳〵像、
地には敷きたり　玳瑁　珊瑚。

と又前の如く膝まづいて

〽供養一切諸如來、
　三禮漸々積功德。

と又立上つて

上の組
〽今より輝く
御法の灯、

下の組
〽魔障のひそまん
隈だにあらず。

上
〽たふとし！　たふと！

下
〽たふとし！　たふと！

合唱
〽仰げや！　仰げ！
この新御寺。
わが日の本の
最初の伽藍！

唱ひ終ると

老僧詞

〽いかに、衆徒たちに申し候ふ。佛日西天の雲に隱れて、慈尊の出世いつぞとも期しかねて候ひつる處に、忝くもわが攝政の宮の尊よ。あはれ、御佛の化現にてもや在さうずらん、深くも三寶に歸依まし〳〵、

之れを四生の終歸、萬化の極宗といやまひたまふ。もとより聰明睿智におはし、仁愛の御心深く、貴賤、怨親を隔てたまはず、聖澤禽獸にだに及ぶの故に、世の人舉りて「法の王」と崇め申す。しかるに、往時、逆臣守屋の亂には、御手づから劍戟を執らせて、たちどころに逆徒らを滅したまふ。即ち、戰ひによつて戰ひをとゞめんの御本願とこそ承り候へ。されば、このたびの御造營は其砌り、護世四天王に對しての御誓ひにもとづくとは申せ、兼ねては、上下和親、永劫靜謐の御祈りをも籠めさせたまふ。おの〳〵も　確と此御旨を心得候へ。

上組長

〽かしこまつて候ふ。げに有りがたきは攝政の君の御仁愛にて候ふ。最には逆臣守屋がうからやから、男、女、二百七十餘人の罪を赦して、只今は、此新御寺に仕へしめたまふ。名こそは奴婢なれども、良民にも劣るまじき身の果報にて候ふ。

下組長

〽まつた世の賤民をも、乞食、非人をだに、一視同仁にいつくしませ、貧、病、老、孤をいたはり、ゆたかに財物を賜ひ、けふまた此御供養會にも參ぜしめたまふ。

上組長

〽あまつさへ、近頃もろこしより渡り來ぬる――われらだにも見しことなき――貴き珍らしき舞樂をさへ、彼等賤民らに觀しめられうずるにて候ふとよ。

と是れにて老僧が先づ唱ふ。

老僧唱

〽あアはれ！
食福も
ゆたかに賜び、

上、下組長

〽快樂をも
ゆたかに賜ぶ。

合唱

〽あアはれ！
幸おほき
今の
貧しきものよ！
ありがたき

御子のおほん仁愛や！

と上の組の長

上組長

〽あれ〳〵！　もはや成らせられて候ふ。

と揚幕の方へこなし。と雅楽になる。やがて一同出迎へのため、雅楽につれて、順序たゞしく下手へ廻りて、列を作る。

と雅楽につれて、聖徳太子、（二十歳位ゐ）例の帝室の御物、阿佐太子筆と傳ふる御影のまゝの扮装にて、後の二王子に髣髴たる二侍童を左右に随へ、侍臣十餘人を後へに續かせて、おもむろに花道を練つて、舞臺へ來て、二侍童をうしろに、門の前、中央よきところに住ふ。侍臣は其上下に宜しく立並ぶ。僧徒らは下手に膝まづいて敬禮する。

老僧

〽つゝしみて啓し候ふ。御供養會も、けふはや御結願にて候ふほどに、かねて仰せ附けられつる如く、賤民らを召しつどへおきて候ふ。たゞちに御賜物を頒ちとらせ候ふべうもや？　聖慮を仰ぎ奉り候ふ。

太子

〽布施物はたゞちに與せよ。さて、舞楽の支度はいかに？

老僧

〽されば候ふ。そもまた仰せに随ひ、正に昨日までに異なることなく、貴人たちの覽すそのまゝの舞楽を奏せさすべく候ふ。

太子

〽むゝ。いしくも物しつるかな。さらば、われは、改めて、今日の結願の禮をなさん。

とまた雅楽になり、太子は仁王門の方へ向き直る。二侍童及び侍臣一同も向き直る。雅楽につれて、しづかに門内へ練つて入る。

此以前、老僧は、上の組と下の組との長に何事か囁く。これにて、上の組の長は上の組に、下の組の長は下の組に、こなしにて何か命ずることあつて、ふた組の僧の半分即ち八人だけは太子の列の後へに續いて門内へ入る。

老僧と上の組の四人、下の組の四人、都合九人だけ殘る。

老僧

〽賤民らを呼びつどへ候へ。

兩人

〽かしこまつて候ふ。

と音樂になり、上の組も、下の組も、おの〳〵兩花道の附け際まで進みいてゝ唱ふ。

上、下合唱

〽生き佛の
太子の尊、
今いましらに
御布施をたぶ。
とく來！　とく來！
とく來！　とく來！　とく來！

と此うちに、先きに門内に入りたる上、下二組の偕ら、種々の布施物を持ちて出で來る。主として穀類、衣類なれど、そのうちに、幾分かは、すぐに食ふことの出來る物もある。

と作奏が騷がしくなる。騷音に近い、多少滑稽味を帶んだ、下品な調べになる。とそれにつれて、兩花道から、おの〳〵十數人の賤民、老、若、男、女、いとをさなき者もまじりて、ひよこすかと躍り跳ねつゝ出で來る。（特に此振に工夫がして貰ひたい。）舞臺へ來ると、跪き又うづくまる。

老僧

〽生き佛の皇子の尊の賜物。ありがたくいたゞき候へ。

上組長

〽かたじけなくいたゞき候へ、

下組長

〽ありがたくいたゞき候へ。

と火勢にて賤民のひとり〳〵に、いろ〳〵の物を頒ち與へる。此間音樂。その音樂につれて、賤民ら、次ぎの如く合唱し、やがて唱ひつゝ踊る。

賤合唱

〽うれしや！　たのし！
たのしや！　うれし！
けふはさらなり
明日も明後日も。
居ながら食はるゝ。
寢てゐて食はるゝ。

と唱ひながら、今貰つたる物のうちのすぐに食はるゝものを口に入れながら

〽汝も食へ、予も食ほ。

あな、旨！　あな、旨！

と食ひつゝ、又てんでに布施物をさしかざしつゝ喜びて踊る。

〽うれしや！　たのし！
たのしや！　うれし！
雪は降るとも
此衣きれば、
寒さは知らじな。
さはいへこれもて
酒買ほ、酒飲も。
肉食ほ、魚食ほ。
うれし！　たのし！
　たのし！　うれし！　たのし！

と狂人のやうになつて、唱ひつゝ踊る。老僧はよき頃に之れを制して

老　僧

〽なう〳〵！　攝政の君の御めぐみは、まだし斯ばかりではおりないぞよ。雲の上の貴人達ならでは、見ることのならぬ、唐土の、舞樂てふいみじい舞ひをさへも、けふ、いましらに觀しめられうとある。なんと、ありがたいか？　嬉しいか？

賤民の長

〽や、なにと？　それはまことの事でおざり申すか？

老　僧

〽まことゝも〳〵。

賤　長

〽さて〳〵、かたじけないことかな。口果報の足つたるうへに、耳法樂とはよ！　目法樂とはよ！……なんと、皆の者、うれしいか？

皆　々

〽おゝ！　うれしいとも〳〵！　はやう見たい！　はやう見たい！

老　僧

〽さらば、ま、斯う、從いておぢやれ。

と老僧先きに立ち、上の組、下の組の僧徒ら門内に入る。この間音樂。賤民ら一同も列を作つて、ついて入る。

と、音樂の調べが俄かに凄味を加へて來る。舞臺がだんだん暗くなる。あやしい光りが稲妻のやうに閃く。

と裸體の惡魔、（茶褐、淡黑、暗黄、淡藍のタイツを穿

つてゐる）都合八頭の悪魔が、――或ひは般若のやうな顔、或ひは牛頭、馬頭のやうな、或ひは常の鬼のやうな、或ひは龍のやうな面附をした悪魔が、――いづれも眞黑なかつぎをすつぽりかぶつて、上手、下手から、おの／＼四頭づつ、ばら／＼と駈けて出て、凄味の音樂につれて、跳ね廻りつゝ唱ふ。

上手四頭 〽富みたるは　驕り、たかぶり
まづしきは　猜み、呪ふ。
世を擧り　濁り、腐りて

下手四頭 〽人はまた　猿猴じものよ、
其昔の　毛物になりて、
牙を立て　爪磨ぎ、猛り、
搔き、むしり　咬み合ふすがた

上、下合唱 〽おもしろと　嚎ぎをりしを

上 〽よしなしや　えせひじり、
えせわざの　慈悲三昧！

下 〽にッくしや　えせひじり、
たまじひの　濟度沙汰や！

上 〽いでや！　いで！
眷屬を　呼びつどへて、
おのがじし　人に化けて
園内へ　紛れ入らん。

下 〽愚民らを　そゝのかして

上 〽怒らせ

下 〽猛らせ

合唱 〽あらびさせん！
えせ功德を　根こじとなさん！

と囃き合ふこと宜しくあつて、あちこちと躍りまはり

て、とゞ正面（揚幕の方）に向つて

詞

〽フィー！　フォー！　フィー！　フォー！

と呼ぶと、正面（兩花道の向う）にて同じく大勢の聲にて

詞

〽フィー！　フォー！　フィー！　フォー！

と應答する。これにて前の四頭は跳躍しつゝ門内へ入る。

と兩花道よりおの〳〵六頭づつ、前のと同じ姿したる茶褐、淡黒、暗黄、淡藍の悪魔が一さんに駈けて來て、舞臺にて宜しくあつて、同じく門内に入る。

と此間、始終、凄味の音樂。あやしき電光の如き光りは絶えず閃いてゐること。

ダーク・チェンヂになる。その間に凄味の音樂が次第に優美な雅樂にかはる。

第二場　金堂前

明るくなると、舞臺の前の方には、間口三間、奥行き約一間半の、低い欄干と階子の附いた舞樂壇が据ゑてある。さうして其奥に、約三尺ほどの間隔を明けて、それから奥へは、順々に高く、雛壇を飾つたやうに、段々を設けた象徵式の裝置。例へば、「假名手本忠臣藏」の大序、鶴が岡の石段といふ風に、次第に上つぼみに奥へ高く、所謂漏斗形に飾り、都合五段に組み上げてある。もとより、古代の建築様式の故實なぞには、少しも拘はらない。それから、上手と下手とは、前の場に用ひたやうな象徵式の模様の附いた黒幕で程よく見切る。

右の五段の組上げ裝置の、各一段の高さは約一尺、その奥行き（幅）は約一尺二寸。但し最上段だけは、ずっと廣く、その奥行き約一間ぐらゐ。その實、是れは奥行きが二間あるのだが、ちやうど、一間のところに張り物が建てゝあつて、奥を見切つてゐる。この張り物は、金堂の眞正面を見せた心で、金碧燦爛に塗りたて、さうしてそこに開閉することが出來る四つの扉が取り附けてある。金堂の間口——即ち此五段裝置の最下部の間口は約六間ぐらゐ。この正面の張り物は、後に全部引いて取る仕掛け。すると、その跡が間口約三四間、奥行き二間の高二重になり、そこで自由に舞ふことの出來る裝置。金堂の張り物を引いて取つた後の奥の遠見は、蒼空に白雲の漂つてゐる書割。

ところで、その金堂正面の張り物の前の最上段には、聖徳太子が第一の場の扮装のまゝで、——いはゞ鶴か

岡の足利直義といふ見得で、中央に華やかな唐椅子に掛かつてをり、その上手には、少し退つて二人の侍童が小さい唐椅子か腰掛けやうの物かに腰をかけ、また下手のよき處には例の老僧が、太子の椅子よりはやゝ低めな朱塗りの曲彔に掛かつてゐる。

それから、上から第二の段は空位のまゝで、第三の段には、――前にいふことを忘れたが、この五段裝置の中央に、その幅約一間の上り段（階子）が設けてあつて、それには左右に金の擬寶珠附きの欄干を取り附けてある。この階段は勿論、總體が隋唐好みの金碧塗りである上に、いろ／＼の禽獸花鳥を彫刻し、おまけに金銀、珠玉を鏤めた七彩陸離の結構ずくめを象徴的に暗示したものでありたい。

さて第三の段には、右の中央の上り段を隔てゝ、上手と下手とに、前の場に出た二組の僧徒らが、左右八人づつ腰を掛けてゐる。それから、第四の段はまた空位としておき、第五の段すなはち最下の段には、太子の侍臣らが、同じく中央の上り段を隔てゝ、上手と下手とに、シンメトリカルに腰を掛けてゐる。

と雅樂は倘ほつゞいてをつて、伶人が今しきりに舞樂（吳樂）を演奏してゐる。此舞樂はわが國へ渡つた最古の物に擬したいから、その假面も例の法隆寺の寶物の、味摩之が將來したといふ伎樂面の中の、成るべく特徴のあるのを擬作して使ひたい。東大寺のでもよい。場面が變つてから、少くも三四分間は此伎樂を舞はせておきたい。と向うの方（揚幕の方）が俄かに騷がしくなる。騷音に近い西洋樂を雅樂へかぶせる。それでも、倘ほ伶人は舞ひつゞける。

と向うにて「あな、面白からず！」とか、「をかしからず！」とか、「とくやめよ！」とか、「さかしら人よ！」とか、「えせひじりよ！」とか、「あしけ人よ！」とか、「よこしま人よ！」とか罵り呼ばはる聲々がだん／＼激しくなる。

舞臺の者一同けしきばむ。太子もやゝ不安げに、唐椅子に掛けたまゝにて唱ふ。

太子　〽なにごとぞ
民どもの
罵り騷ぐは？
まて、しばし！
やめよ舞樂を。

と、これにて伶人は舞ひをやめて控へる。雅樂もやむ。

西洋樂續く。
と兩花道より警護の司、甲、乙、二人、おの〳〵鉾を持つて、同時に驅け出て、舞臺へ來て、其上手と下手とに跪いて

甲
〽啓し候ふ。

乙
〽啓し候ふ。

甲、乙
〽事の起りて候ふ。

と太子の侍臣のうち頭分の者、丙、丁、二人、同時に立上つて、甲、乙の司に應對する。此次ぎ〳〵の問答の間、前の罵り騷ぐ聲々は尙ほ續いてなり、西洋樂も、問答の邪魔にならぬやうに續いてゐる。

丙
〽事とは

丁
〽何事にて

丙、丁
〽候ふぞ？

甲
〽されば候ふ、只今までは、かれら賤民ども、今日の御恩みを、ひたすら有りがたがり候ひぬと見え候ひつる處に、いかに仕り候ひけん、俄かに

といひかける時、西洋樂急に騷音のやうになり、又も罵り怒る聲々が一きは激しく聞える。

甲
〽怒り　猛り

乙
〽荒び　狂ひ

甲
〽いかに制し候へども、聽かばこそ

乙
〽あれ〳〵！（と向うを見て）もはや此處へ

甲
〽あれ〳〵！

甲、乙
〽亂入に及び候ふ。あれよ〳〵！

とこれにて僧徒らも覺えず立上る。侍臣らは一同劍を按じて席を離れて身構へする。
と間もなく、向う兩花道より鉾を以て止め支へんとする警護の役人らを突きとばし、押しのけつゝ、老、壯の賤民ども、手々に棒ちぎり木などを威嚇的に揮りひ

らめかし、わめき叫びつゝ出て來る。例の茶褐、黒、黄、藍の惡魔ら六頭は、それ〴〵賤民に化けて、各二頭は先導となつて、眞先きに進み、他の六頭は、三頭づつ左右の兩群中に打混つてゐる。惡魔は、上半身は人間に化けてゐるが、足だけは、元のまゝに、その持前の獸の色を見せてをり、鋭い爪さへもあらはである。

左群

さかしら人よ！
えせひじり！
みくにの敵よ！
よこしま人よ！

右群

邪教に醉うたる
大臣にくみし
忠臣守屋を、
勝海を殺す。

合唱

みくにの敵よ！
よこしま人よ！

うてや！　懲らせや！
懲らせや！　うてや！
　うてや！　うてや！　うてや！
　　うてや！　うてや！

と舞臺際まで來る。西洋樂は彼のスタッカトのやうな斷續的な、多少滑稽味を帯んだ、しかも何處となく不穏な氣分の現はれるのであつて欲しい。賤民らの科介は、すべて此音樂に伴ひ、多少踊の振のやうになることを要する。寫實になつてはいけない。

と前の詞は勿論、侍臣ら一同劍を拔いて、擬勢をして立向はうとする。これらの科介も、歌舞伎式であるよりも能樂式に近いものでありたい。

と太子が椅子に坐したまゝで唱ふ。

太子

やよや　待て！
人々よ！
民ら　いかに
あらぶとも、
なあらがひそ、

嗔を絶て。
無忤こそは
わがいましめ！

と、おもむろに起ちあがりて

詞

〽いかに、民らよ！　汝らは、などてわれをよこしま人とは罵る？　あまつさへ、國かたきとはいかに？　その故をかたれ。汝らのいふことたゞしからば、われたちどころに、攝政の職を撤めん。

と、これにて暴民らやうやくしづまる。音樂もやむ。侍臣らも劍を收めて、それ〴〵に宜しく住ふ。太子、その他もすべて元の位置に戻る。暴民らは――惡覺も其うちにまじりて――上手と下手とに集ふ。

太子

〽いざとく、其故をかたれ。などてわれをよこしまとは呼ぶぞ？

と先導となつたる惡覺二頭、上手、下手より暴民らの代表者となりて進み出る。上手を「壹」とし、下手を「貳」とする。

壹

〽たに故とはしら〴〵しうおぢゃる。異國のあしいをしへの佛法にほうけて、御國の神ながらの道を捨て、もはら其あしいをしへをのみ廣めうとぞせらるゝ。なんと、これは、けやけきよこしまではおりないか？

太子

〽あな、おろかなりや！　佛法は、この國、かの國と、一つ處に限つたるをしへにはあらぬぞとよ。

と又オラトリオ式の音樂になり

太子

〽此世をこぞり
苦海と見、
また穢土と見る。
いづこに執する
こともなし。
すなはち心の法にして
形には拘はらず。

詞

〽神道は道の根本なれども、始道なり。佛教は道の枝幹にして、また華實なれば、是れやがて終道なり。佛教と神道とは始終、水波の別あるのみ。いはゞ、二つにして一つなるぞよ。……いかに？……いかに？

と「壹」の悪魔二の句を繼ぎかねる。「貳」の悪魔進む。

貳
〽いや、その事は、ともかうもあれ。あの蘇我の馬子の大臣にくみして、私の榮利を圖り、神ながらの道の爲に軍せし忠臣の守屋の運を、また中臣の運を、無慚にも攻め殺されたではおりないか？　……なんと、それはひがごとでおりないか？

と衆民一同聲を揃へて唱ふ。音樂また騒がしくなる。

曉合唱
〽げに〳〵！　それよ！
などてか　彼れら
いのちを　絶たれ
むなしくなりし？
たゞしき彼れら！

と騒ぎ立つ。太子しづかに

太子
〽わりなしや　人々よ。
守屋を、勝海を
忠臣とは
何をあかしに？

詞
〽守屋は、其以前に人の皇子を弑し奉りし逆臣なるぞよ。まった穴穗部の皇子をそゝのかして、天位を傾けんと企てつることを知らずや？　中臣の勝海も同じき罪人なり。かくても彼れらを正しといふや？　神道の爲なんどいへるは、もとより彼れらが、口實なり、しからば、彼れらの忠臣たる、其あかし、いづこにありや？

と「貳」の悪魔「む！」と詰まる。

太子
〽もし彼れらにして正しからば、多かる氏族、百官のうち、彼れらと事を共にせん者、なほ幾たりかはありつべきに、たゞ二人の外に、一人の加擔者をなかつしこと、逆臣のあかしならずや？　かくても彼れらを正しといふや？

と「貳」の悪魔いよ〳〵詰まる。

と群衆中より「參」の悪魔がつか〳〵と出る。

參
〽いや〳〵。その事は、ともかうもあれ。今の政治にはひがごとが多いぞよ。例へば、われらの嘆き訴ふることは、日ごと、月ごとに夥しいことでおぢゃる

に、其訟へを聽く司人らは、どやつも〱、慾のみ深うて、ゆたけく賄ひすれば、非分をも理分とすれど、賄ひをせぬときは、理分をも非分とする。されば、われら貧しい者は、いつも〱非分に落され、つらい、あさましい目をのみ見る。今の世の司人は、膽のよい強盗でおぢゃる。かくても政治か？　かくても命は、まさしい攝政をしておぢゃるか？

と騒がしき音樂につれて、衆民一齊に競ひ立つ。

賤合唱

〽げに〱　それよ！
なげけど、呼べど、
石面に　投ぐる
水にも　ひとし。
かひなき　なげき
あさまし　われら

太子

〽その歎きはことわりなり。われ將た常にそれを憂ひぬ。さればこそ、こたび新たに、國の掟十七條を作り、遍く天が下に敷き行ふ。さらば、汝らが訟へは、水面に石を投ぐるが如けん。……いかに？　なほも

他にふつくむことありや？　何事をいきどほるぞ？

惡魔ら答へかねて尻込みする。

と惡魔てない賤民中の一人、この時進みいでて、次ぎの如く唱ふ。

賤一人

〽今こそ、思ひいだしたれ。
世にありがたき　ひじりの皇子、
食ふものたまひ、着るものたぶ。
不足は　つゆもなかりつれど、
たゞ一つ　今觀し舞ひよ！
あの舞ひは　何ちふものか？
倦み果てつ。おもしろからず。

と是れにて賤民ら一同聲を合せて

賤合唱

〽げに〱！　それよ！
おもしろからず。
こゝろは倦みつ。
腹さへ立ちぬ。
それのみ、それぞ

われらが　不平！

と太子思ひ入れありて

太子

〽まことや　大聲は
俚耳に入らず。
陽春、白雪は
和するすくなし。
好みは　人皆に
ことなるべきを、
おろかや　わりなくも
好みを强ひぬ。
　あゝ！　これのみは
　　わがあやまち！

と、歎息の體。と太子の此體を見たる惡魔ら大きに勇み立ちて、互ひに何か囁き合ひ、うなづき合ひて、更に群民をそゝのかす科介よろしくある。やがて惡魔ら八頭ことごとく立ちて、たけりたちて唱ふ。

惡合唱

〽それぞよ！　それぞ

われらが　不平！
などてか　騙す！
まさなし　ひじり。
われらに　適ふ
伎藝　見せよ！
　見せよ！　見せよ！　見せよ！

と唱ひ終つて、更にまた群民を煽動する。よりて、この同じ句を群民一同にて騒がしく合唱し、太子を威嚇するかの如く、手々に得物を打揮りつゝ、舞臺の上手、下手をあちこちと荒び廻る。侍臣らも制しかねる。

と向う揚幕にて、大勢の若き女の聲にて

菩薩群

〽あゝ、しばし！
しばしよ！　しばし！
賤人の　たしなむ歌を、
下人の　好める舞ひを
奏してん　賤のわらはら。

と歌ひ終ると共に、賤のをとめと化現したる歌舞の菩薩十六體、太子の急難を救はんとて、天降り、およそ

四種の、うつくしき服色の衣裳を着て、走りて出て來る。この十六體の中の八人だけは唱歌班であるから、手々に種々の古風なる樂器を持つてゐる。花道よき處に跪いて、見得よく並ぶ。

太子
〽はからずも　賤のをとめら、
いみじうも　まゐ來つるかな。
いかなるを　歌ひ舞ふにや？
なんぢらは　いづこの者ぞ？

菩薩群
〽わらはらは　築紫潟ゆ
まゐ來ぬる　鄙のをとめ。
めづらしき　麥取る舞ひを
舞ひかなで　見せまをさん。
みゆるしを　たばせ大君。

と賤民らは彼れらの容姿の美なるを見て喜びどよめく。

唆令唱
〽あな、めぐし！
斯かる　をとめ子
あまさかる
鄙にも有るか！
あな、めぐし！
なづかしをとめ！
とう見たし
その鄙の舞ひ。

と、どよめく。

太子
〽いで　さらば
舞へや　その
麥取る　舞ひを！

と是れにて菩薩女の一群は本舞臺へ來て、やうやく舞樂壇に登つて、歌ひ且つ舞ふべき支度にかゝる。

と假花道の向うにて、再び大勢の女の聲にて

魔女群
〽あゝ、しばし！
その舞ひ　しばし！
それなるは　穢しきをみな。

その舞ひは　穢しき技ぞ。
舞はせなば　祟あるべし。

と唱ひ終ると、前の美女群と見紛ふばかりの、十六人の若き女群が走つて出る。やはり八人だけは樂器を持つてゐる。

これは惡魔の眷屬どもが、菩薩群の仕事を妨げんとて、僞かに美女に化けて來たのである。衣裳は、菩薩群のそれよりも華美である。但し裳裾の間から時々足先きが見えるが、それは例の茶、黑、黃、藍の肌のまゝで、鋭い爪さへもあらはに見える。花道の中ほどまで來ると、順よく跪き並ぶ。

太子

〽紛はしの　賤のをとめら！
なんぢらは　いかなる者ぞ？
管、つゞみ　携へつるは
なんぢらも　歌舞ひするや？

魔女群

〽わらはらは　駿河の國ゆ
まゐ來ぬる　鄙の齋女。
常世てふ　たゝふとき神に

この日ごろ　仕へまつりて
めづらしき　歌舞ひすなり。
その舞ひは　淸らに樂し。
わらはらに　みゆるしたばせ。

と菩薩群へこなしありて

〽それなるは　穢しきをみな！

と群又は魔女群のあだめかしく美なるを見て、又言ひどよめく。

賤合唱

〽あな、めぐし！
許多　たをやめ！
先きなるも
うつくしけれど、
これはまた
いとどめぐしや！
とう見たし
その神舞ひ！

と菩薩群は、なほ壇上に立ちたるまゝにて

菩薩群

〽あな、正(まさ)な！

いつはりごと！

彼れらこそ　穢(けが)しきやから、

あざむかれ　たまふなよ、ゆめ。

と魔女群に立ちあがりて、此時つか／＼と舞樂壇近く進んで、立ちならび

魔女群

〽あな、正(まさ)な！

いつはりごと！

彼れらこそ　穢(けが)しきやから、

あざむかれ　たまふなよ、ゆめ。

と太子をはじめ、老僧も、僧徒も、侍臣らも、群民も、雙方を見比べつゝ、いづれを正しとも見定めかねたる思入れ。

太子

〽いづらをば　いづらとせまし？

紛(まが)はしの　二群(ふたむら)をとめ。

こも／＼に　舞ひ歌はせば

おのづから　よしあし見えん。

眞先(まさき)なる、先づ舞ひいでよ。

と是れにて菩薩女群、うや／＼しく太子に向つて一拜し、改めて舞ひの支度にかゝる。

此間に魔女群は舞樂壇の前を通りて、下手へ廻り、賤民らの前に、體裁よく居並ぶ。

菩薩群のうち、八人は、舞樂壇の一隅のよき處に居並びて、歌を唱ふ。樂器をもそれ／″＼奏するらしき眞似をすれど、その實、樂はオーケストラで奏するのである。其オーケストラの樂につれて、八人の菩薩、次ぎの、神樂か催馬樂かを現代化したやうな旋律の歌に隨つて、鄙びた併し何となく古雅な趣きに富んだ振をまじへて舞ふ。（舞ひといふよりも踊りに近い振を附けて貰ひたい。民衆藝術の趣味を本位とすることが必要である。）

唄

〽や！　小麥の出來(でき)秋(あき)！

や！　穗に穗が咲きぬる。

や！　麥の穗が長うて、

や！　尺(しやく)ほど長うて。

や！　腕に巻かな。　腰巻かな。
や！　一粒　萬倍！　二萬倍！
や！　疾う持て來　唐棹！
や！　唐棹よ！　から棹！
や！　うてや！　うてや！　箕とく持て
來。
や！　ゆすりあげよ。吹き散らさん。

といろ／＼鄙びたる面白き振あつて收まる。

此間、群民らは、その振の鄙々びたると女らの風姿のうつくしいのに喜び興じて、折々「やよや／＼！」など叫びつゝ、拍手喝采することある。

舞ひ終ると、群民らは、更にまた手を拍ちてほめる。と魔女群は菩薩群の舞ひ終るを待ちかねたる體にて、急ぎ立ちあがり、彼等を追ひ退くるやうにして壇に登り、やはり、八人は樂器を執りて歌ひ、八人は立ちて舞ふ。

彼等は菩薩群の歌舞を嘲弄せんとするかの如くに、わざと樂譜は、全く同じのを適用して、歌詞をも性慾的なものに擬作つて、歌ひ舞ふ。勿論、振も其文句につれて、いちじるしくあだめいたものになる。時々淫靡な振がまじる。

唄

や！　春こそ來りぬ！
や！　櫻ぞ咲きぬる。
や！　鳥の聲　たのしく
や！　千草も　萌え出る。
あ！　わが兄よ　疾く來！　今ぞ今！
あ！　今ぞわが春！　又とは來ず。
あ！　とく來ませ！　とく來て
あ！　なづかしき　くちづけ！
あ！　燃ゆる　燃ゆる　熱き思ひ！
あ！　飛びて往かな！　搔き抱かな！

舞ひ振が淫靡で、所作が活潑なので、群民らは、始終、騷々しいほどに喝采したり、拍手したりする。が、太子や老僧は、舞ひの進むにつれて、眉を顰めて、やうやく魔女群を怖しいものと思ひはじめたる思入れ。けれども、その他の者は、僧徒らさへも、其年の若い者

らは、次第に群民らに同感して來たらしく、われ知らず拍手するものなどもある。
菩薩女群は、この態を見て、心安からず思ふらしく、覺女群の舞ひの終るを待ち〻、再び急ぎ舞樂壇に登らんとする。と覺女群は、再び他の舞ひを舞はんとしてこれを沮む。一寸兩群の立廻りになる。

菩薩群
〽いな／＼！
われらこそ
こたびは！

覺女群
〽いな／＼！
われらこそ
こたびは！

と爭ふ。太子之れを制して

太子
〽かたみがはりに
舞へや　をとめら。

と覺女群不請ぶしやうに控へる。菩薩群また壇に登る。
と樂調が全く一變して、徳川初期の民謠調となる。

唄
〽早苗とらばや　とらばや早苗。
見やれ青空　さみだれ晴れて、
綿か　白雲　四つ五つ六つ。
立てや彌處女　苗代小田に
早苗！　早苗！　早苗！
連れて　着つれて　菅笠を、
紐は　茜の　菅笠を。
とれ／＼　早苗。とれ／＼　早苗。

と前の舞ひに比べると、ずつと近代的な趣味に富んだ、何となく性的な匂ひをも帶んだ情調を發揮して歌ひもし踊りもするので、群民らは、其艶な風姿に見惚れ、頻りに喝采し拍手する。
と覺女群は大きに焦ち、菩薩群が踊り終るのを待ちもあへず、又逐ひ退けるやうにして壇に登り、やはり、同一の樂譜を適用して、翻作の歌詞を即興的にこしらへ、おそろしく猥りがはしい振をして踊る。殊に「早苗！　早苗！」もしくは「とれ／＼早苗」といふ拍子言葉（囃子）の件になると、それを幾たびも反復して、極めて肉的な、みだりがはしい振をする。

唄

〽おちよぼ　ちよぼ〳〵、
ちよぼ〳〵　おちよぼ！
おちよぼ　お聞きやれ、
おぬしに　焦れ、
忍ぶ夜さりの　苦が五つ六つ。
　つらや！　つらや！　つらや！
雨に雪、風、茨の垣根。
犬の高吠え。月はなほ。
面を見知らす　月はなほ。
　やれさて辛や！　やれさて辛や！

この肉的な踊りの間に、舞臺がだん〳〵薄昏くなり、物凄い、怪しい光りが舞臺に閃き渡る。舞ひ振はいよいよ猥りがはしくなる。群衆は喜び浮かれ、まるで醉つた者のやうになつて、拍手喝采する。いつの間にか唄は切れて、恐ろしく猥りがはしい西洋音樂になる。と太子と二侍童と老僧及び僧徒中の半數ほどは、うつら〳〵と眠りはじめる。と魔女は上半身は、いさゝかの飾りだけを殘して、乳白な裸體となり、下部半身も次第に裳を脱落させて、例の茶、黒、黄、藍の脚をあらはし、彼の鋭い銀色の爪をあらはに見せて高く脚を擧げて、いよ〳〵ます〳〵猥りがはしい振をして踊り廻る。之れを觀る群民は勿論、僧徒も侍臣も、われ知らず、浮かれて、そゞろに席を離れ、醉つた者のやうに魔女群の手振足附を眞似つゝ、影の如く、彼等のうしろに附き添つて狂ひ廻る。

怪しい光りは、或ひは青く、或ひは赤く、それにいつこともなく雷のやうなすさまじい響きが鳴り渡る。

菩薩群はこらへかねて、齊々に唱ふ。

菩薩群

〽ぼけたる人らよ、
おのれに歸れ！
眠れる人々、
とく〳〵醒めよ！
惡魔ら　今こそ
障碍を　はじむ。
醒めよや！　起きよ！
起きよや！　醒めよ！

と唱ひつゝ走り廻り、或ひは踊る僧徒や侍臣らを押し

とゞめ、或ひは眠れる者をゆりさまさうとする。
この途端、悪魔の甲、乙、丙、丁は全身、その持前の肌色の木體となり、おそろしき鬼面を現し、飛ぶが如くに最上段まで驅け登つていつて、ちやうど此時目を醒ました太子と二侍童と老僧とを、めい／＼に一人づつ、その襟たを摑んで引ッ立てつゝ、すぐに階下へ引きおろさうとする。老僧や侍童はおの／＼力の限り、太子を擁護しつゝ、抵抗する。
菩薩群は之れを見て、再び唱ふ。

菩薩群
〽ぼけたる人らよ、
おのれに歸れ！
眠れる人々、
とく／＼醒めよ！
悪魔ら　今こそ
障碍を　はじむ。
さめよや！　起きよ！
起きよや！　醒めよ！

と是れにて僧徒も侍臣も漸くわれに歸り、侍臣らは劍を拔き、僧徒らは珠數を押し揉む。

此時には魔女は殘りなく、赤、黒、黄、藍の鬼形となる。
侍臣ら一同之れを劍にて斬り拂はんとするが、迚も叶はない。とゞ、みんな上手、下手へ追ひ込まれてしまふ。
僧徒らは、此間、しきりに珠數を揉み立て／＼して、祈り伏せようとする。

僧徒ら
〽東方降三世明王！
南方軍荼利夜叉明王！
西方大威徳明王！
北方金剛夜叉明王！
中央大日大聖不動明王！
曩謨三曼多嚩日羅南。
施多摩訶嚕遮那、
娑婆多那吽多羅吒干鋡！
聽我說者　得大智慧、
知我身者　即身成佛

と此間に、悪魔の甲、乙、丙、丁は太子、二侍童、老

僧を階下へ引きずりおろす。菩薩群は之れを救はうとするが、惡魔の他の者共が妨げるので、如何ともしがたい。之れより以前、祈つてゐた僧徒らは、悉く惡魔の爲に、上手、下手へ追ひ込まれてしまふ。

惡魔の一部分は彼等を追つて上下へ入つたので、跡には惡魔も只八頭だけ、其他は菩薩群と太子と老僧と二侍童とだけ殘る。

舞臺はます／＼暗くなり、雷のやうな凄い物音、稻妻のやうな怪しい光りがます／＼激しくなる。

惡魔の甲、乙、丙、丁は、左右二組に分れて、一方の二頭は太子と一侍童とを、他の二頭は老僧と他の一侍童とを引ッ立てゝ、兩花道の附け際まで行く。菩薩群は二手に分れて、之れを救はうとするが、他の四頭の惡魔の爲に支へられて、どうすることも出來ないので、悲しげに唱ふ。

菩薩群

あゝ！　國を護り、法を護りたまふ四天王よ。
いづこに在す？　いづこに在す？
おゝ！　持國天王（ドルタラーシュトラ）！
おゝ！　增長天王（ヴルードハカ）！
おゝ！　多門天王（ダイシュラワナ）！
おゝ！　廣目天王（ヴルーパクシャ）！
とく／＼來ませ！　おゝ！　とく來ませ！
あやふし皇子の！　おゝ！　おゝ！　おゝ！

と最上段の背後の金碧燦爛たる金堂の四ヶ所の扉が、同時に、一齊に、颯と開く。と其中から一道の白光が電光のやうに射出して、探海燈を差向けたやうに全體の闇を突ん裂く。

と持國、增長、多門、廣目の四天王が、式の通りの像をして、忽然として出現し、疾風の如くに階下へ駈けおりて來て「これは」と駭いて立向はうとする最初の四惡魔を、一寸立廻るかと見るうちに、忽ち見事に取つて投げ退け、すぐに二手に分れて、もう既に兩花道の中途まで往つてゐる甲、乙、丙、丁の四惡魔に追ひ附き、そこにても又ちよつと立廻り、難なく太子や老僧やを救ひ、本舞臺の方へ逃がしておいて、激しく惡魔らを懲らし、更にこれを追ッ立てゝ本舞臺へ戻つて來る。

と此間に、菩薩群は太子らを迎へて、いろ／＼と介抱することなどある。

その間に、四天王は、本舞臺にて更に又ひとしきり八惡魔を相手に立廻り、とゞ、めい／＼が惡魔の一頭を足下にふんまへ、又他の一頭の手を高々と捻ち上げて、きっと彫像よろしくの見得にきまる。この途端に、騷がしかつた樂調が全然一變して、いかにも神聖らしく聞かれる天樂的情調の物となり、舞臺も一面に眞晝の如く明るくなる。と異香が馥郁と薫じ渡つて、菩薩群は、いつの間にか、半裸體の歌舞の天女と現じて、一齊に最上段へ駈け登つていって、そこにて、嬉しげに且つ華やかに舞ひ遊ぶ。

金堂の張り物は、とうに、いつの間にか取り去られて、最上段は、奥行き二間、間口五間の、いと廣々とした一の空中舞樂境となつてゐる。さうして其奥には白雲を漂はせた青空が廣々と見えてゐる。天樂と天舞がます／＼妙境に入る。曼陀羅華が舞臺一面に降りしきる。太子と二侍童と老僧とは、觀衆に其脊を見せて、舞臺の中央に宜しく佇ひ、合掌禮拜してゐる。

四天王は、其上手、下手のよき處に、彫像然たるポスチューアのまゝて、八惡魔を挫ぎつゝ突ッ立つてゐる。天樂の尙ほ瀏亮とつゞいてゐるうちに徐かに

―― 幕 ――

（大正十年七月上旬）

桐一葉　(實演用)　(六幕十六場)

第一幕
第一場　大阪城內奧殿
第二場　奧庭茶室
第二幕
第一場　吉野山櫻狩
第二場　畜生塚怨靈
第三場　淀君寢所密訴
第三幕
第一場　城內溜りの間
第二場　黑書院內評議
第三場　片桐邸上使
第四幕
第一場　豐國神社鳥居前
第二場　隨身門前
第五幕
第一場　渡邊內藏ノ介邸
第二場　饗庭の局部屋
第三場　奧殿長廊下乳母自害
第四場　淀君寢所珍柏橫死
第六幕
第一場　片桐邸奧書院
第二場　長柄堤訣別

第一幕

第一場　大阪城內奧殿

舞臺一面の平舞臺は大阪城內奧殿の心にて、高麗縁の薄縁を敷き、正面より上手下手へ折廻して桃山式大襖、其眞中四枚は初めから開けてあり。ずつと下手のよき處に柱。それより下手は長廊下の心。よき處に極彩色の衝立。正面襖の向うには入側及び廣縁。其向うに中坪及び鍵の手に折れて廣縁附の家體見え、其一間々々の襖、障子とも開けはなしありて、中見ゆる。時は舊暦九月初旬の早朝。

こゝに腰元、紅葉、初葉、桔梗、花野、錦木、いづれも前髮を取り、鬢髷を出した下げ髮、襷がけ、あちこちを掃除してゐる。幕あくと、錦木先づ襷をはづす。

錦木　オヽしんど、オヽしんど。お目ざめにはまだ間があ

る。皆さん、ちッと休まうではござんせぬか。

皆々　アイ〳〵。さうしませう〳〵。

皆々稟ぜりふにて、時候はづれに暑いといふ思入にて、或ひは扇に、或ひは袖にて風をいれながら、衝立の邊に寄りこぞる。

桔梗　ほんに此頃はお目ざめの遲い事なア。日がな一日あのやうにチンとしてお出で遊ばしても、おからだが疲れるものかいな。

初葉　さいな、けふびは大野さまのオホヽ、御忠勤とやらのせいでもあるまいし。

錦木　アコレ粗忽な、聞えますぞえ。皆さんも知つての通り、大佛様のお鐘のことから、徳川様の御難題。片桐様は其お申し譯なされう爲、關東へお下り。それからといふものは、御前さまには、夜もおち〳〵御寢ならず。ときたまお鎮まり遊ばすと、それはそれは、氣味のわるいおうなり聲。

花野　エ、そんならやッぱれ噂の通り、アノ畜生關白様や御臺所様の幽靈とやらが出るのかいな。

桔梗｝
初葉｝アレマア、氣味のわるいことを。

紅葉　氣味のわるいのは、それはかりぢやござんせぬぞえ。それ、此間は、お天守へ奇怪な狼煙。

錦木　今に何事か變事が起るとおつしやつた圓觀上人様のお言葉といひ……

花野　秋も既う末の月ぢやに、此氣味のわるい蒸し暑さ。どうやら地震でもありさうな。

桔梗　何か變事があるといふのは、マどんなことであらうなア。

初葉　大風でもあらうか。

花野　大火事ではなからうか。

紅葉　もしや、大地震では無いか知らん。

錦木　何にせい、氣味のわるいことで……

皆々　ござんすなア。

ト此内、腰元椋鳥、入側より出て來り、襖の蔭にて問答を聞いて居り、此時急に襖を叩き、衝立をゆすぶりて、ガタ〳〵と音をさせる。腰元ら驚きて立ち、左右へ逃げにかゝる。椋鳥は肚をかゝへて笑ふ。

椋鳥　おほゝゝゝ。あはゝゝゝ。

紅葉　ほんまに地震かと思うたら、またしても椋鳥さん、ほんにびッくり……

皆々　しましたわいなア。

椋鳥　（肚をかゝへて笑ひながら）あんまり怖がつてゐやしやんす故、まさかの時の御用心に、一寸試してあげた

わいな。おほゝゝゝ。あはゝゝゝ。
錦木　エヽ、憎い椋鳥どの。覺えてゐやしやんせ。
椋鳥　ビヽビー。
花野　よいわいな。この仕返しには、ナソレこの間の事を。
初草　ほんに、それ〳〵。渡邊様の弟御、アノ銀之丞様と……
桔梗　お長廊下の薄くらがり……
椋鳥　（あわてゝ）アヽコレ〳〵、根も葉もないそのよな事、うつかり言はれてならうかいな。
紅草　いえ〳〵、根も葉もないとは言はれまいぞえ。では、あの折に立聞した一部始終を……
初草　今こゝで……
皆々　いはうかいな。
椋鳥　それ言はれてならうかいな。
桔梗　そんなら、こゝへ兩手をついて……
初草　今の詫びをしやしやんすか。
椋鳥　おやというて。
初草　いはうか。
椋鳥　サア、それは。
桔梗　エヽ、もどかしい。いつそのくされ、こそぐつて詫びさすまいか。
花野　ほんに、それがよう……
皆々　ござんすわいなア。
ト五人椋鳥に立ちかゝり、くすぐる。
椋鳥　アヽ、こそばゆ。おほゝゝゝ。あはゝゝゝ。もう堪忍して下さんせ。
ト椋鳥は五人をつきのけ〳〵、入側づたひに上手へ逃げて入る。腰元らは笑ひながら追うて入る。
ト下手の襖をあけて奥女中小車、打掛、[illegible]、[illegible]を出した下げ髪、同じく梶の葉、同じ拵へにて出る。
これと同時に、上手の襖を開けて茶道野利呂珍柏、着流し、十徳の拵へにて出る。
小車　珍柏どのか。
珍柏　これは〳〵、小車さま、梶の葉さま。（ト會釋して、前後を見廻し、聲をひそめて）まづ〳〵首尾ようお三方を、氣どられぬやうに内々にて、お數寄屋へ御案内致しましてござりまする。
梶の葉　シテ、大野入道さまは。
珍柏　程なく御參入にござりませう。
小車　御大儀々々。（ト梶の葉と共に座に着きて）幸ひなは、アノ氣ぶつさい[illegible]とのは、けふは御代參りのお役目とて、外出の用意に取込み中ゆゑ、まづは安心といふもの。
梶の葉　只心懸りは、この頃の上様の御不機嫌、此様な事

にもお腹立、疑ひ深いお氣質とて、又一しほのお僻み、困つた事でござりまするなア。

小車　サア、それもこれも、元はといへば、アノ腹黒な德川樣の御難題から、お鐘の銘を言ひがかりに御當家を亡ぼさんわるだくみ。忠臣と思うた片桐どのまで、關東へ裏切とは、ほんに頼まれぬは人の心。

梶の葉　それにつけても、お茶堂のお密談、たが立聞くまいものでもない。珍柏どのには萬事に心を附けて下され。

珍柏　心得ましてござりまする。

ト此途端、渡邊銀之丞、十八歳、若衆かつら、着附、袴、阿呆らしきこなしにて、入側よりつか／＼と出て

銀之丞　ヤ、珍柏、こゝにおぢやつたの。

三人一寸おどろくこなしよろしく

珍柏　オヽ、たれかと思うたら、銀之丞樣。

小車　ほんにびッくり……

梶の葉　しましたわいの。

銀之丞　何のびッくりする事があらう。おれやワッとも何ともいやせなんだぞや。

ト珍柏をよき處まで引張つて行き

コレ珍柏、おれが先達てから頼んでおいた事を、なぜ返事をせぬのぢや。けふまで返事せぬのは、おのしはおれを阿呆にするのぢやな。

ト摑みかゝりさうにする。珍柏その手を抑へて

珍柏　はゝゝゝ。阿呆にするがよく出來た。（ト笑ひながら）何の阿呆にしませうぞいな。

銀之丞　いや／＼、阿呆にするのぢや。第一笑ふとは何ぢやい。人が腹を立てゝゐるに、笑ふとは何ぢやい。

銀之丞刀の欛に手をかける。

小車　アコレ／＼、何ぞといふと刀の欛。お前はマア氣が短い。

梶の葉　（笑ひながら）ほんに何やらほど怖いものはない。どういふ頼み事かは知らぬけれど、棄てゝおいたはお茶道の不束、早う詫びをしたがよからうぞや。

珍柏　いかさま、かつたいに棒打とやら、これは愚老が誤りました。シタガその頼みの一條を、銀之丞樣、こゝでいうても大事ござりませぬか。

銀之丞　ウヽ、大事ない／＼。この間おのしがいうた首尾とやらは出來たかいの。

珍柏　ハレヤレ、さう無遠慮では、とつとも痛み入る。（ト後ろを見返り）モシお二人樣、なぜ人間は、皆こんな風に生れては來なんだか。此方が手取早くて、ずんとましでござりますわい。ナモシ、のろまも十八、この道ばかりはでござりまする。（ト笑ふ）

小車　おほゝゝゝ、銀之丞どのや、一體その頼みとはどん

な事ぢやぞいな。

銀之丞　さいの、聞いて下され。わしはナア、あの片桐市ノ正どのゝ女の蜻蛉がナア、好きで〳〵ならぬによつて、どうぞ妹分にして下されと母者人に頼んだらナア……

梶の葉　では、お前はアノ蜻蛉を戀ひ慕うてゐやるのかいな。おほゝゝゝ。（三人顔を見合せて笑ふ）

銀之丞　いつその事、女房に貰うてやらうといはつしやつたゆゑ、おれや嬉しうて〳〵、樂しみにして待つてゐたのに、

ト愁ひのこなし。

市ノ正がウンというてくれぬゆゑ、母者人が腹を立て、とう〳〵止めになつてしまうたわいの。

ト泣く。

小車　ヤレ〳〵、それは氣の毒な。

銀之丞　それからは前とはちがひ、御殿で毎日のやうに蜻蛉に逢うても、物もいはず、つれないそぶりばかり、おれや悲しうてならぬ故、この間もお長廊下で泣いてゐたら、珍柏が來て、いろ〳〵とやさしういうて、かう〳〵いふ藥がある、それを使うて、きつと首尾といふ事をしてやる代り……

珍柏　アコレ〳〵、その後はいはぬものぢや。見るに見かねて首尾をしてあげうというたは……イヤハヤ何やらに附ける藥はない。

銀之丞　サア、その藥の代とやらに、おれやあれ程に小判をやつたに。

珍柏　サヽ、ぢやによつて其藥を……

ト急に下手を見て

オヽ〳〵噂をすれば影とやら。アレ〳〵あそこへ蜻蛉どのが。

銀之丞　エヽ、どこへ。

珍柏　ソレ〳〵、あそこへ。（ト下手を指す）

銀之丞　どれ、どこへ。

トうろ〳〵する。

小車　（笑ひながら）成程。これはいかい難病。お茶道のもてあましたも尤も。

梶の葉　コレ、銀之丞どのや、お前の其頼みは戀といふものぢや。戀は人傳では叶はぬ事。自身で言うたが最も早いぞや。

銀之丞　でも、何ぞ言はうとすると、蜻蛉はついと立つて去にやるもの。

珍柏　それはこなたが下手なからぢや。かまはず袂なり手なりとつかまへて、さうしておいて口説かうものなら、遁す筈はありやせぬがた。

銀之丞　そりや、ほんまか。

珍柏　ほんまもほんま、戀の奥の手ぢや。それでも聽かなんだら、羽がひじめにするまでぢや。

銀之丞　エ、羽がひじめにするとは。

小車　アコレ〳〵、よい加減にしたがよい。あんまりおだてると、どんな事でも仕兼ねはせぬぞや。

梶の葉　ヤ、こんどこそは、ほんまに、あそこへ蜻蛉が……

ト下手へこなし。

珍柏　これが世にいふ嘘から出た實。こいつは、うッかりこゝにゐて、掛かり合ひになつてはたまらぬ。……モシ、お二人さま。

小車　ほんに、御用を忘れてゐた。

梶の葉　どれ、お奥へ參りませう。

珍柏　どれ、わたくしもお數寄屋へ。

銀之丞　ア、コレ、珍柏、待つてくれ。まだ聞きたい事がある。

ト葉ぜりふにて珍柏の袖をひかへるを拂つて、小車、梶の葉は入側の下手へ、珍柏は上手の襖の内へ、はひる。

銀之丞　ヤ、皆な往んでしまうた。……かうしておれが立つて居たら、またアノ蜻蛉が、ついと往んでしまふであらう……さうぢや、かくれて待つて居よう。

ト銀之丞下手へこなし。衝立のうしろへ隱れる。下手揚廊下より片桐の娘蜻蛉、十七歳、前髮を取りて髮を出した下げ髮、好みの拵へ、思案に暮れた思入にて出る。これと同時に上手入側より以前の錦木急ぎ足にて出る。

錦木　オヽ、蜻蛉さん。

蜻蛉　オヽ、錦木さん、よい處で逢うたわいなア。

錦木　ま、何といふ蒼い顏。お前、あの事で苦勞してゐやしやんすのぢやな。

蜻蛉　サア、昨晩あのことを聞いてからは、わたしや束の間も寢られればこそ、天地がひつくり返らうとも、父上に限り、ふた心のあらう筈はなけれども、時も時、あゝした噂の最中に、正榮尼さまや大藏さまが、父よりも先きに、急にお歸りなされたには、何か容易ならぬ仔細があらう。お前、何か今朝になつて、聞かしやんした事はないかえ。

錦木　さういへば、この朝まだきから、大野修理さまと渡邊、石川のお二方が、アノ奧庭のお數寄屋で、お人拂ひで何やら密々。

蜻蛉　エヽ。……聞く事毎が心がゝり。わたしや胸騷ぎがしてならぬ。ま、どうしたらよからうなア。

ト心配のこなし。

錦木　わたしらの智慧には及ばぬ。幸ひ奧庭のお局さまが、まだ大奧にござる筈。打明けて談合したがようござんす。

わたしは今急ぎの御用、やがて又逢ひませう。

ト立上り、棄ぜりふにて「早く饗庭の局に相談せよ」といひ〳〵下手へ入る。

蜻蛉　（じつと向うへ思入あつて）斯ういふ時の後ろ楯に、頼まう筈の、なつかしいお方はあつても、まゝならぬ奥とお表。……ア、、何としたらよからうなア。

トしよんぼりと思入、やがて力なげに立上りて上手へ往かうとする。

ト銀之丞つか〳〵と出て、蜻蛉の袂をとらへてこなし。

ヤ、お前は銀さま、こりや何となされまする。

銀之丞　たんと〳〵話したい事がある。ま、下にゐて下されい。

蜻蛉　エ、マ、そこ離して下さりませ。

銀之丞　離せなら離すけれど、ツイ立つてゆくまいぞや。

蜻蛉　用があらば聞きます程に、ずうッと離れてゐて下さりませ。

ト下にゐる。銀之丞と向ひ合ふ。

サ、何の用でござんす。

トつんけんと言ふ。

銀之丞　サ、その用はナア。

蜻蛉　サ、其の用はえ。

銀之丞　おれやそもじと、朝から晩まで一しよにゐたい。

蜻蛉　エ、モウ、好かぬ。わたしや其やうな事知りませぬわいなア。

トつゝと立つて往かうとする。

銀之丞　マ、、まつてたも〳〵。そのやうにつれなう言やると。おれや悲しうてならぬわいの。コレ拜む。またたんと言ひたいことがある。コレ、きいてたも〳〵。

ト又袂を引張りて無理に引戻す。

この時上手入側の奥にて

椋鳥　蜻蛉さん、めします。蜻蛉さん〳〵。

トこれをしほに、蜻蛉は上手の入側へ逃げて入る。入違へて椋鳥出る。

椋鳥　（追ひすがる銀之丞を突戻しながら）銀之丞さま。お前はナア、お前はナア、ようマアこの間は、そんな事知らぬ〳〵とお言ひやつた癖に、ほんに〳〵今のしだら、ようわしを騙さしやつたなア。

銀之丞　おれやだました覺えはない。

椋鳥　無いことがあらうかいな。エ、モ、くやしい、くやしいわいなう。

ト我れを忘れ胸づくしを取る。銀之丞立腹のこなし有りて椋鳥を突離し

銀之丞　エ、、何しをる、慮外者。斬つてしまふぞ。

ト刀を抜きかける。この時上手襖の内より珍柏大きな

　　聲にて

珍柏　ソレ、お上のお渡りぢや、お渡りぢや。お目に附くと曲事々々。ちやつと迯げた。早う隠れた。迯げた〳〵。

　ト　いひ〳〵出る。兩人びツくりして棕鳥は入側の上手へ、銀之丞は下手長廊下の方へ入る。珍柏思入ありて

ハレヤレ、阿呆には困り切る。シタが阿呆でも、うつけでも、あの道ばかりは一人前、ハテ爭はれぬもの。トいへば、爭はれぬは金の威光。この野呂利珍柏老、きのふまでは饗庭のお局の懐ろ小刀。けふからは案を立て直し、御褒美が大野様のお身方。之を思へば片桐様が關東方へ附句。ハテ、さうもありさうなこと。處であの饗庭のお局は、片桐様と親句の中、うツかり脇へ附いてゐたら、ツイ同類と思はれて、果は首切り。ヤ禁句々々。そこを察して愚老が頓智。ハテ我が身ながら名案たわえ。

　ト　この以前、衝立のうしろの入側へ饗庭の局、三十七八、前髪を取り、鬢を出した下げ髪、外出代參の拵へにて出かゝりかゝり、珍柏の獨語を聞き、だしぬけに

饗庭　お茶道。

　ト　呼ぶ。珍柏びツくりして

珍柏　エヽ。ヤ、あなたは饗庭のお局さま。……まだ、おおゝゝゝお出かけではござりませぬか。

饗庭　ハテ、仰山た驚きやう。(ト笑ひながら)御代參の伴廻り、仕度がよくば今から直さま。

珍柏　へイ〳〵、申し附けるでござりませう。

　ト　珍柏行きかける。饗庭思入ありて

饗庭　今がた聞いた噂といひ……

珍柏　エヽ。(ト驚く)

饗庭　ハテ、申附けて下さりませ。

珍柏　へイ。

　ト　兩人、氣味合、わざと間を拔いて木の頭、この道具廻す。

第二場　奥庭茶室

舞臺正面の建物(二重)は城内奥庭の茶室の心にて、土緣、土庇、沓ぬぎ等、すべて桃山好みの結構。飛石、燈籠、庭木、秋草等よろしく。うしろは一面の低き瓦屋根の土塀。上手下手は植込。下手奥よき處に猿戸附の露路門。

庭の中央に𧘕𧘔姿の石川伊豆(三十歳位)大刀を提げて立身。上手に大野修理ノ亮(四十歳位)下手に渡邊内藏ノ介(三十歳位)共に𧘕𧘔姿、一本ざし、同じく立身にて露路門の方へ行かうとする石川を留めてゐる。此見得、風の音にて道具止る。

渡邊　アイヤ、伊豆ノ守どの、お家にかゝはる一大事の密

談に、自儘の中座、緩怠でござらう。

石川　緩怠とは何が緩怠。君命ならば知らぬ事、身不肖なれども石川貞政、御邊らのおとがひで指圖を受くるいはれはござらぬ。

修理亮　マ、しばらく。只今我々が申せし事、御異存とあらばそれまで。只あの片桐市ノ正、ふた心の證據は明白。此儘にいたしおかば、お家の滅亡は目のあたり。そこを存じての只今の御相談。

渡邊　然るにろくへ聞きも終らず、退席に及ぶ、それのみか、我々の誠意を疑ふ今の一言。近頃以て無禮でござらう。

石川　ヤア、無禮とは御邊らこそ。若し片桐に二心あらば、先づ我君に言上して、お指圖を乞ふべき筈。然るに、我君は御ォ弱たの、御母公はお偏み勝ち、速見はなまくら、木村長門は若輩だのと、自分らのみを賢人顔の惡口雜言、忠臣の言葉でない。察する所、市ノ正を逆心とは、たとひ讒言でないまでも、日頃の不和を根に持つた邪推か偏みに相違ないわい。

渡邊　ヤア、邪推とは御邊の事だ。片桐を贔屓の餘り、我我の誠意を疑ひ、又しても其暴言。聞棄てには相成らんぞ。

　　トきつとなる。

石川　それは、此方で申すことだ。片桐を贔屓とは何を證據に。

修理亮　まゝ、御兩所とも。しばらくへ。

石川　いや、聞棄てには相成らん。返答によつては手は見せ申さぬぞ。

　　ト石川、刀の欛に手をかける。

渡邊　何を。

　　ト雙方氣込む。修理ノ亮捨ぜりふにて割つて入り、引分けようとする。此以前、露路門の猿戸より大野入道（六十餘歳）出で來り、石燈籠の蔭にて始終を聞いて居ることよろしく有りて、此時出て來り

道軒　アイヤ。豆州、暫くへ。

　　ト修理ノ亮と内藏ノ介とに目まぜにて命ずることあり。修理と内藏とは下手に控へる。眞中に石川殘る。道軒は上手茶室前へ進む。

石川　何人かと存じたら、貴殿は大野の御老體。何ぞ御用ばしござるかな。

　　トまだ怒氣の收まらぬ思入。道軒は徐かに茶室に上りながら

道軒　されば、極密にて御用談。お手間は取らせぬ。マ、、これへへ。……イヤナニ、倅、先刻よりお召の御模樣。其の方はお表へ。また内藏どのには、四下へ。

修理亮　心得ました。

　トよろしくこなし。

内藏介　かしこまりました。

　ト修理ノ亮先に、内藏ノ介其あとにつきて、二人共露路門から出て行く。此うち石川も茶室に上りて座に着く。

道軒　お呼びとめ申せし慮外、御用捨下されい。只今圖らず彼方にて承つたが、倅は勿論、内藏ノ介が不所存、御立腹は御尤も千萬、シタガ彼等とても、畢竟はお家を思ふの餘り。入道代つてお詫び申す。何とぞ御遺恨殘らぬやう。

石川　改まつたる御挨拶、痛み入つてござる。某とても短慮の口論、只今と相成り……

道軒　ナンノ／＼、日頃正直の其許ゆゑ、金鐵にひとしき速見、木村をさへも疑ひし彼等の廻り氣を、氣にさへられしは尤も至極。併しながら、城内の人心互ひに疑惑を抱き、心に關を設くるに至つたるは、畢竟は太閤殿下の御餘光の薄う成つたる證據と、不覺の涙をたゝへ申す。

　ト涙をぬぐふこなし。

石川　御述懷お察し申す。さて早速ながら、承はりたいは、市ノ正か一條。修理とのに承はれば、彼れは本多佐渡と心を合せ、まづ御母公を人質として關東へ下し參らせ、追つて當城を手に入れ、果は我君も押込め奉らん魂膽とか。萬一まことならば由々しき御ン大事でござれども、伊豆未だ半信半疑。此儀に付いて御老體の御所存は如何でござるな。

道軒　されば、市ノ正の一條。ナニガ助作の昔より故殿下の御厚恩を蒙り、加賀侯逝去の後は、執權職をも承り、君を補佐し奉る市ノ正、さやうのさもしき心底毛頭あらう筈もなし。察する所、是れ全く關東方の反間苦肉の計略……

石川　げに／＼、さもあらうと存じ申した。

道軒　と初手ほどは存じたれど、圖りがたきは老後の慾念、我れ人共に血氣盛りはひたすら名を惜み、一命を兎の毛とも輕んずれど、功成り名遂げ、だん／＼先きがつまるにつれ、死慾といふ執着が萌し申す。さて／＼見苦しからぬもの。駿府より昨夜立歸りし愚妻及び正榮尼の直話を聞き、餘りの事に驚き入つてござるてや。

　トよろしく思入。

石川　とは又、如何なる儀でござるな。

　トせき込んで尋ねる。

道軒　さ、其儀は。

　ト四邊へ思入あつて膝を進め、しばらく何事かさゝやく。其間石川次第に駭く思入。

石川　すりや、大御所の媒介にて……

道軒　ひそかに／＼。驚くはそれのみならず。

　ト又さゝやく。

石川　フム、すりや、初めより其心にて。

道軒　日頃當城内の內證、善惡共に筒ぬけは合點ゆかずと存じをりしが、皆彼の獅子身中の蟲のしわざ。お氣に召さぬ千姫どのを呼び迎へしも、二條城へ我君を誘ひ出しまゐらせしも、近くば大佛殿の供養停止も、鐘の銘の難題も、皆關東と打合せてのからくり。尤も、斯く露顯に及ぶ上は、強ち恐るゝには足らざれども、さしあたつたる難儀は、御人質の一條。これも關東の古狸とあの古狐めが馴れ合ひのわるだくみ。どう返答いたしたものか。彼奴城內に在る間は、何事もあちらへ筒ぬけ。こゝが思案の瀬戸でござるテ。

　ト苦心の思入。

石川　驚き入つたる彼れが奸策。にッくきは德川の古狸。此上は速に逆賊市ノ正の素ッ首を刎ねさせられ、御親文を以て諸大名を招き、關東征伐仰せ出ださるゝの外はござらぬ。

道軒　サ、戰ひは第二の手配り。邪は正に勝たず、況や當城は無雙の要害。いざとなれば勝利は治定。なれば戰ひは急ぐに及ばず。只心懸りは獅子身中の蟲。

石川　仰せではござれども、たかゞ老いぼれの市ノ正、歸城次第ひッとらへ、罪狀逐一お糺しの上、誅戮あらん分の事。

道軒　イヤ／＼、理不盡にひッ捕へ、首刎ねたらば知らず、一たび口を開かすれば鷺を烏は彼れが得手物。助作の昔より故太閤にしたがひ、戰場の手柄こそ多からざれ、敵國へ使者となつては中々の曲者。疑ひ深き御母公の弱味へ附入り、又御幼少より我君をまるめ附けし舌先にて、理を非に曲げて誠らしく、上の心を迷はす時は、毛を吹いて疵のしッぺい返し。我々疑ひを懐るは勿論、關東へ機密一切洩れ、軍の手配ならぬうちに、逆寄せゝられたら一大事。

石川　では、入道の御所存はナ。

道軒　されば、明日にも歸府いたさば、まづさりげなく出仕させ、御母公も御出座にて、此たびの件に附き、きつと御糺明は勿論の事。さて言ひくろめ退席するか、或は御不興蒙るか、いづれにもせよ、其儘放ち返さんは手負ひ虎を放つも同然。おやによつて、愚老が憂慮。

　トいひかけて、思案の思入。

石川　いかさま。……此上は只一策。下城を待ち受け、只一刀に……

道軒　いや、それもまだ萬全ならず。

石川　スリヤ、いかゞせん御所存ナ。
道軒　豆州には、君のお爲に一命をなげうち、御奉公仕らん所存なるか。
石川　おんでもない事。
道軒　しかとさやうか。
石川　御念には及び申さぬ。
道軒　ホ、あつぱれ。其御心底を承はる上は。
ト石川の耳に口。
ナ、ナ。
石川　スリヤ、殿中にて彼奴を怒らせ……
ト氣込むを制して
道軒　コーリヤ。
ト押へて、兩人氣味合、風の音にて

——幕——

第二幕

第一場　吉野山櫻狩

本舞臺はすべて吉野の山奥の心にて、桐の紋の附いたる幔幕を書いたる道具幕。幕あくと直ぐに常盤津淨瑠璃になる。

淨へ假の世を夢幻とみよしのや、盛りや春に春添ふる、御遊の庭に花揃ひ、假屋々々の風流陣に、悋氣まじりの魂膽を、引渡したる幔幕は、目もあや錦、いろ／＼緞子、花爛漫たる枝々に、吊るす黄金の鈴千萬、春風渡つてから紅ゐの、組み糸なびく有樣は、內ぞゆかしき花の花

ト是れにて道具幕を切つて落す。正面一ぱいの櫻山は、吉野山の心にて、中央より上手へかけて芝生の小高き山、其下手奥の方は谷間の心にて、滿開の櫻の梢見え、尚其奥一面に間近き櫻山の書き割。處々に大きな櫻の立木、枝より枝に紅の紐を張り渡し、之れに黄金の鈴を夥しく吊るし、又上手下手共によき處にいろ／＼緞子の幔幕を張り、尚小高き山の上にも同じ幕を張廻らす。又遠見の櫻の間々には、それと異つた幔幕見ゆる。奥の遠景中よき處に電氣の月。

こゝに淀君（二十歳位）古代歌舞伎風の下げ髮、花かんざし、松の丸（同上）正榮尼（四十以上）古風な切髮姿、大藏卿（四十位）古代歌舞伎風の下げ髮、いづれも毛氈の上に住ひ、其のうしろに切り禿の女童二人、腰元大勢居ならび、よろしく道具納まる。

淨へ淀の君にこやかに
ト管絃になり

淀君　松の丸どのを初め正榮尼、大藏卿、皆の衆の骨折にて、思ひしに増す萬の手筈。今にもあれ、我君こゝへおこしあらば、御褒美のお詞は治定ぞや。これといふのも畢竟は、自らを思うてたもる人々の眞心。忘れはおかぬ、嬉しいぞや。

淨へあふるゝばかりの御愛嬌、松の丸どの鼻たか〳〵

ト淀君三人にかけていふ。松の丸こなしあつて

松の丸　黄金の鈴にから紅ゐの、いと目ざましいと申さうか、うつくしいといはうか。ほんに又と天が下に、たぐひない窖のお思ひ附き、早う我君に見せましたい。常から端手をお好みゆゑ、嘸かしお悦びでござりませう。

淨へいふ尾に附き人、正榮尼が分別顏、

正榮尼　今日、朝鮮征伐御勝利のお祝ひとて、ためしない無禮講の御ゝ催し、御寛濶の上様、定めし何ぞあらち様にも、御趣向ばしござりませう。こゝにちんとしてお成り待つ間、斯うばかりも智慧がない。なう大藏卿、なんぞ才覺がありそなもの。

大藏卿　さればいな。夫美濃ノ守が口癖の話。諸葛孔明とやら、張良とやら、敵大勢寄せし時、櫓に登りて琴を彈き、門を開いておいたゆゑ、敵兵はあつけに取られ、智慧まけして逃げたとやら。それとは變はれど、わざと幕の内を空洞にして、一同はあの櫻の蔭……

正榮尼　ほゝゝゝ。隱れてゐて、バアとばしいはうでの。

大藏卿　ヤア何と、正榮どの、半分いはさず、なめすぎた其差出口。たが其やうな子供だまし。なんぼお前様が御發明ぢやてゝ、あんまり人を見くびるまい。

正榮尼　ホイ、これはしたり、マ興がる。いつわたくしが發明顏。

大藏卿　それ〳〵、その顏が發明顏。

淨へ角たつ角もじ女もじ、如才なかとる淀の方

淀君　ア、これ〳〵、ふたりとも何ぞいの。大藏が趣向の底、どうやら面白さうなれど、もし間違うて我君が仲達とやらのやうに、お逃げ遊ばしたらひよんなもの。シタガ幕の内を空にして、不意打とはよう出來た。孔明が琴にならひ、腰元共はアノ櫻のかげで、琴、蛇皮線、笛、胡弓。松の丸どのは其お指圖。又大藏と正榮とは、みづからが相談相手。さりながら總じて計略は密なるを吉野山、身方にも言はぬが花、はなしの仔細はあちへ往て。

淨へ口合さへもふつくらと、風雅かなる御ゝ物ごし、皆皆打連れ入り玉ふ。

ト管絃になり、淀君先きに正榮尼、大藏卿は上手の幕かげへ、松の丸は腰元と共に二重を下りて平舞臺上手の幕かげへ入る。

是れより長唄と淨瑠璃との掛合ひになる。

唄へあと滿山の花の色、とりのこされて時めくや、豐太閤殿下、武威明國を震駭し、天が下知る、情け知る、風流韻者の御ン物ずき

淨へ增田右衞門ノ尉長盛、小西攝津ノ守行長、おもひおもひの伊達裃、きらびやかなり花のかげ

ト是れより音樂になり、向うより石田三成（三十位）唐裝束、金冠、沓にて、唐劍を腰にさげ、太閤の跡へにて出る。其前後に煙草盆、茶器等を携へたる美しき童小姓三人、花やかなる姿、裃にて附添ひて出る。そのあとより增田右衞門ノ尉（四十位）小西行長（三十五六歲）端手なる裃姿、尙其あとにも同じ拵への近臣四人附いて出て、花道よき處にすまふ。

石田　いかに面々。朧月夜もわが威勢、日ッ本晴れの此明月。あれ見よ、其明月の光りを奪ふ數千萬の金鈴、風に鳴る音色のみかは、いづくともなく心憎き琴の音、ほのかなる笛、胡弓、なまめかしき蛇皮線は、ムヽ、さては淀めがだしぬきをつたな。何にもせよ、櫻が枝に黃金の鈴、月に照り榮えさゝ鳴るは、ハテ面白き風情ぢやなア。

增田　何はしかれ、最前より、嘸かし御ン方のお待ち兼。

小西　我君には、イザ先づあれへ

皆々　わたらせられませう。

石田　右衞門、攝津、皆の者、參れ〳〵。

唄へ折からかなづる音樂の、音色につれてねり行くやへ太閤席に着きたまふ。

ト此內皆々舞臺へ來り、太閤と小姓とは丘の上（二重）幕張の中によろしく住ふ。

增田　げに朝鮮軍御勝利の、其御ン祝ひにふさはしき、端手やかなる此御趣向。山の名も幸先きのよしの山、星にもまさる黃金の鈴、一足ごとに月影を、ふませらるゝ御全盛、とりも直さず居ながらに、天上界の御遊の樣。

小西　詞に右衞門の申す如く、月の都の莊嚴も、この景色にはいかで〳〵、及びもなき淀の御ン方の御趣向、恐れ入つたる御發明。外大明の御ンあるじと仰がれたまふ我君は、文字のまゝに大日輪、內を照したまふ賢婦人の御ン方は、月の都の御ンあるじ、嫦娥にまさる御ン粧ひ、まことに是れ萬歲の御祝儀。

淨へさすが小西の小文才、耳學問も韓仕立。程もあらせず右手の方

ト此時向う（揚幕）にて

腰元共　さがりや〳〵。

唄へ淺黃頭巾に能面、尻ひッからげ一本ざし、腰に印籠伊達やつこ。

ト此うち甲の奴（實は佐々成政）武惡の假面をかぶり、淺黃の頭巾其他、文句の通りの拵へにて向うの幕かげより走つて出る。トそれを取卷きて大勢の腰元、櫻の枝を手に持ち、追ッかけて出て、一寸立廻つて（花道よき所にて）取卷き

腰元共　さかりや〳〵。

甲奴　イヤ、ちくとんべいさうやすうはさがるまい。天下晴れた無禮講、推參はけふの祝儀。音に響いた淀の方、淀の川瀨の、川瀨の〳〵、契りをかはせの、ハテ酒盃くれろさ、飲みますべい。サア酌だ〳〵。

淨〽あたりかまはぬ傍若無人

腰元○　テモ大それた慮外もの、

同△　あんまり圖ない無禮講、

同□　御前間近が……

皆々　目に見えぬか。

淨〽其面綱がんと女ども

ト腰元一同又立ちかゝる。

石田　イヤ〳〵、まて〳〵。苦しうないわ。身が面前をも憚らず、淀の御所望とは不敵なやつ。其膽玉氣に入つた。たれかある。酒盃とらせい。

ト此時上手（平舞臺）幕の内にて

正榮尼 大藏卿　ハ、ア。

唄〽ハッと仰せを奥の方、かねて用意の銚子酒盃、腰元共がとり〳〵に

ト此内正榮尼、大藏卿はじめ腰元共、銚子と大酒盃とを持つて出て來る。

正榮尼　冥加に叶うた奴どの。

大藏卿　有難いお酒盃。

兩人　サア、いたゞきや。

淨〽オットきたりと會釋もなく、酒盃に手をかくれば

ト大藏卿大盃を奴の前へ持つて行く。奴大盃を取らんとする。此時下手（平舞臺幕）の内にて

乙奴　まつた〳〵。奴冥加の報謝酒、正客は爰に〳〵。

唄〽正客爰にとつんでるは、對の衣裳、對の面

ト此うち下手の幕をかゝげて乙の奴（實は太閤）甲の奴と同じ拵へにて出で來り、兩人顏を見合せ

甲奴　ヤ、こりや……

乙奴　どうぢや。

甲奴　おれがわれか。

乙奴　われがおれか。

甲奴　頭巾から着るもの。

乙奴　印籠から一腰。

甲奴　うぬが面、
乙奴　われが面、
甲奴　よう似せたな。
乙奴　よう眞似たな。
甲奴　こいつうさん、贋ひもの。
乙奴　いで一詮議。
淨へうぬ、ござんなれと腕まくり　へかなたの幕のかげよりも
ト此時上手（平舞臺）幕かげにて
女馬子　なう、待たしやんせ、其目きゝは、わたしに任せて下さんせいなア。
唄へはしり出づるをんな馬子、廣ふり袖や頬冠り
ト此うち年若き女馬子（實は淀君）好みの拵へにて鞭を持ち、つか／＼と出て來る。
増田　ヤア、御前近、無禮者。
小西　すさりをらう。
石田　いや、叱るまい／＼。賤には惜しきつまはづれ。ヤイ、女、見事、その二匹、馬か、鹿か、目きゝ／＼。
女馬子　ハイ／＼、殿さん、御免なりませ。總じて伯勞のならはし。鼻見る。目を見る、足を見る。
唄へさりながら是れは人。殊には目ンない。鼻とても隱れかんじやう。見ようにも足ばかり。ぢやによつてわたしが工夫は（ト甲の奴に向ひ）コレ、こちの奴どの。
甲奴　ナイ、
女馬子　そちの。
乙奴　ナイ。
女馬子　うたぐられた面晴れに、ナふらんせ。
甲奴　ふれとは……
乙奴　槍か。
女馬子　知れたこといなア。ふつたら出よう、骰子の目きき。マアそんなものぢやないかいなア。
淨へさばいてのけし利發もの
石田　ホヽ面白し／＼。ソレ、たれかある。囃子々々。
淨へと鶴の聲。雀踊りや鑓をどり
ト此うち腰元二人下手より鳥毛附の長き鑓二本持ち出で、甲乙の奴に渡す。
甲奴　ヤレしよことがない。ヤイ、贋ひもの、うぬが五體持ちだせろ。
乙奴　オヽサ、僞奴われも出をろさ。
甲奴　出をろさ。
乙奴　出をろさ。
甲奴　まッかせ、
乙奴　どッこい。
唄へ振出すや、とつかけべい。先きのけろ。おなべが買

ひ餅、ねれたらもてこい。合點だ。

淨へ昨夜も三百はり込んだ。裸で道中がなるものか。

ト面白き鑓踊り。甲は始終丘の上の太閤を覘ふこなし。乙は之を邪魔するこなし。此うちに女馬子も二人の間に割つて入りて絡む。

唄へ男女と名はかはれども、戀にゃ姿は使はれものよ、寒の師走も日の六月も、様にこがれて夜も日も通ふ

淨へ様にこがれて

唄へこがれて様に

甲奴
乙奴｝どッこい。アリャコリャ。してこいな。

唄へどッこい、ふれ／＼、ふりこめさ。

淨へふりこむ鑓先き、御座先き、

ト此うち三人よろしく振あり。トゞ甲の奴はつか／＼と丘に近づき、三成の太閤へ突掛けようとする。女馬子とめて

女馬子　オヽ、あぶな。

唄へ馬やろ／＼、戻り馬やろ、待たしやんせ。へのけろさ

甲奴　のけろさ。

女馬子　のらんせ。

甲奴　のけ／＼。

女馬子　のらんせ／＼。とかく浮世は色酒の

淨へのみゃれ、

唄へうたやれ、

淨へ先きの世は闇よ、

唄へ今はなかばの

淨、唄へ花ざかり。

ト此うち三人よろしくありて、トゞ甲の奴不意に丘に近づきて鑓にて三成を突く。三成倒れる。

小西
増田｝ヤヽヽヽ。

淨へすは狼藉と右左り、逃げ散る男女、以前の奴

是れにて一同騒ぎ立ち、女馬子も乙の奴も正榮尼、大藏卿はじめ腰元ら、皆々下手上手へ逃げ入る。

甲奴　日頃の遺恨、今本望。猿冠者思ひ知つたるか。ウハハヽヽヽ。

小西
増田｝さこそ曲者。ソレ、かた／＼。

これにて小西、増田はじめ近臣一同腰刀を抜き連れて甲の奴にかゝる。甲の奴鑓にて立廻つてきつと見得。

甲奴　シヤ小ざかしき網裡の魚。これを見よ。

淨へ腰の印籠、大地へ轟然合圖の狼烟。俄に陣鉦、攻め太鼓

ト甲の奴印籠を取つて地に打付ける。すさまじき物音にて遠寄せになり、八方に鬨の聲聞ゆる。甲の奴不審のこなしあつて

ア、ラ怪しや、貝かねの、音色がちがつた。コリヤどうぢや。

淨〽呆るゝ奴。なきがらむッくと豐太閤。

ト是れにて石田起き上り

石田　ヤア、おろか／＼佐々成政。かくあらんと存ぜし故、御ン身代りの石田三成。大明王の倒れしは、朝鮮軍の幸先きよし。コレ、この通り。

淨〽トつくり髯、袍も冠も、かなぐり／＼

ト此うち三成つくり鬚、唐裝束、冠等を取棄て、二重を駈けおりて、落ちたる鎗を取り上げ、きつとなりて

かねて謀りしはびきの鎗尖、受けて見よ。

唄〽突き出す鹽首、むんづと取り

ト三成甲の奴に突掛かるを鎗の鹽首をつかみて

甲奴　はかる／＼と思ひしに、却つてうぬらに、チエヽ無念な。此上は死物狂ひ。

淨〽猿冠者いづこと瞋恚の勢ひ。縱横無盡に戰うたり

〽以前にかはる威儀どう／＼、淀君もろとも豐太閤。

ト此うち甲の奴面、頭巾をかなぐりすて、引抜くと大白四天姿の佐々成政になり、又立廻り、二重に駈け登りてきつと見得。途端に上手幕かげより、烏帽子、狩衣の太閤を先きに、淀君、正榮尼、大藏卿、腰元共、いづれも甲斐々々しきいでたちにて出る。淀君は薙刀を持ち、太閤は手に乙の奴の頭巾と面とを提げてゐる。

太閤　めづらしや、佐々成政。淀が智略にをちこちは、汝を取卷く廿重十重、

淀君　もはや叶はぬ。觀念々々。

淨〽つめよりたまふ御ンよそほひ、けだかうもまた勇ましゝ。

成政　ムヽ。

淨〽無念々々と佐々成政、白刃を肚に引きまはす、だんだら幕はなきがらを、かく速にをさまりし

ト此うち太閤はじめ一同成政を取卷く。是れにて成政は叶はぬといふこなしあつて、刀を立ちながら肚へ突立て、二重にて尻居に倒れる。それにかまはず太閤は淀君其他をひきゐて、二重に上りよろしく住ふ。次ぎの問答の間にいつとなく成政の死骸を消す。太閤悦ばしき思入あつて

太閤　是れ皆淀が才智のいさほし。ホヽ出かしたり。あッぱれ／＼。

石田　まことに君の仰せの如く、今いにしへに例なき賢婦人の御ン方さま。かゝる御內助ましますよは、大明は申

すもおろか、やがて程なく、しやむ、るすん、南蠻國をも御ン手の内。

増田 / 小西　臣等一同……

大藏卿 / 正榮尼　數たりませぬ私共も共々に……

皆々　お祝ひ申し上げまする。

淨へ萬歳祝ふ聲々に、みよしのゆするばかりなり　へ其中にひとりしよんぼり淀の方、力なみだの御ン風情、殿下不審のみけしきにて

ト此うち淀君愁ひのこなし。

太閤　これはいかに。何わびたまふ。此めでたさも樂しさも、皆そもじがいさをしと一同の祝ひ、大明國取りしより、嬉しいと思ふ此秀吉。なう、淀、心地でもわるいか。氣にそまぬことでもあるか。何事をむづかりたまふぞ。

ト太閤席を離れ、淀君のそばへ寄り、子供をあやなすやうに脊を撫でさすることあり。淀君に甘きこなし。

淀君　物體ない御しんもじの御ンなさけ、受けまゐらする此身、此上に何不足。

トよろしくこなしありて太閤を元の座に直らせる。

唄へ世にたぐひなき豐臣の榮華につるゝかたじけなさ、嬉しいと思ふにつけ、なまなか此和子があるゆゑに

ト此うち大藏卿いつの間にか抱いてゐた秀賴（當歳）を淀君へ渡す。淀君それを受取りて抱き

お家を思ふ眞心も

唄へねたみそねみの讒言と、かの方ざまの御ンまはり氣

いつその事に此和子を

唄へなきものにして御訴訟と、幾たび思ひ定めても、つらや絶たれぬ恩愛の、絆は鐵か、黑金かいなう。

淨へかつぱと伏してなきたまふ。

ト此間一寸振りありて、トゞ泣伏す。正榮尼、大藏卿立寄りて介抱する。此時秀賴しきりに哭く。

オゝたがよ〳〵。いとほしや〳〵。

ト淀君、秀賴を抱きてあやしながら、愁のこなし。

さりながらいつまで未練、執着もけふ限り。南無阿彌陀佛。

ト懷刀を拔き、秀賴を刺さうとする。太閤目早く見て

太閤　それ、止めい。秀賴のけい。淀には狂氣いたせしか。何故あつて秀賴をば。

淀君　只今も申せし通り、なまなか此の子が枉へ綱。さる御ン方の御放埒、聞えまゐらせん由なきゆゑ。

太閤　すりや、秀次めは蛇の如く、亂行日々に募ると申すか、

石田　關白殿下の御暴虐は、最早天下に普き取沙汰。夏の

社稷は桀に亡び、殷のいしずゑは、紂が無道に崩れしためし。
増田　それにも優る彼の方ざまの御ン振舞ひ、親子の女を右左りに、おしならべて寵したまひ、酒池肉林の御ン遊び。剰へ、故なくして、專ら殺生を嗜ませたまふ。
小西　是れ京童が口々に、殺生關白と譏りのはじめ。
正榮尼　今は恐れて人皆が、聚樂の御所には鬼棲むと……
大藏卿　夕日斜の頃よりは、往來稀なる御惡行。
淨へかはる／＼御ン訴訟。秀吉公は默然と、御思案ふかき夜半の月。
唄へおどろ／＼と鳴る鐘は、蜂か、鵺か、物すごく
トすべて文句の通り。此うち鐘の聲聞ゆる。
淀君　さては倚ほしも御ンうたがひ、此上は是非もなし。秀頼、こちへ。
淨へ抱き取らんとしたまへば、あら不思議やな、おどろおどろ、月はいつしか雲がくれ。
ト此うち淀君再び大藏の手より秀頼を抱き取らんとする。ト四邊だん／＼暗くなる。其うちに太閤先づ髪だけな亂して顔から垂れ、秀次の亡靈になり
秀次　わが實の子の秀頼を、世に立てんとてその如く、しふねく謀りし讒言に、われ太閤の憎しみ受け
淨へと言ふは殿下に、あらぬば玉の、あたりはいつか眞の闇。
ト是れにて次ぎのセリフの間に四下だん／＼暗くなり、トゞ眞闇になる。秀次は白裝束となる。
年頃積みし惡業の、報いは廻り紀伊の國、高野山の木の下露と、はかなく消えし榮華の夢、自得の咎め身を責めて、修羅の苛責のおそろしく、畜生塚に妄執の、晴るゝ間もなき御臺、簾中、いとし我子は五人までも浮ばぬ鬼、是れ皆汝が嫉妬の毒舌。いつか晴るべき此怨み、やがてぞ思ひ知らすべきぞ。
唄へいふかと思へば前後ろ、一度にぱつと鬼火の光り。
花爛漫たるみよしのゝ、山と見えしは枯尾花
淨へ土饅頭にあり／＼と、畜生塚のあら石ぶみ
ト是れにて四下だん／＼薄明るくなる。

第二場　畜生塚怨靈

ト平舞臺と二重との裝置は元のまゝ、上下の見切の樹木も大抵元のまゝなれど、花はなく、皆枯れ枝。二重よき處に土饅頭、其上に大きな五輪、おちこちに枯れ薄、元の谷間はヤハリ凹地にて、一面に枯れ薄。遠景には遠山。よき所に半輪の月。ドロ／＼にて道具納まる。
ト此以前、舞臺の皆々の中、男四人、女十八、子供五

人ほど、それ〳〵引拔きて、髪を亂し、秀次の御臺所其他の亡靈と變はり、いづれも枯れ薄のかげに俯伏してゐる。秀次の靈は五輪の前に立身。明るくなると、秀頼の積りにて亡靈の赤子を抱き、失心したる體にて俯向きゐる淀君、ふと面をあげて秀次の靈と目を見合せ、仰天のこなし。

淀君　アレー。

ト思はず聲を出だして下手へ逃げようとする、秀次こなしにて引戻す。淀君うしろ髪を引かれてよろめきながら

石田どのいなう。

ト呼んで上手へ行かうとする。

石田　こゝに。

ト男の幽靈面を上げる。驚きて又下手へ逃げながら

淀君　小西どのいなう。

ト呼ぶ。

小西　こゝに。

ト下手の薄のかげより同じく男の幽靈面を上げる。

淀君　正榮尼なう。……大藏いなう。

ト狂氣の如く、あちこち逃げ廻る。其たびに、二重及び平舞臺の薄のかげより、男女老若の幽靈面をあげる。

淨〽こゝに〳〵と、すつくと立つは、あらおそろしや秀次が御臺、若君、近習の面々。

唄〽わが掻き抱く和子さへも

ト淀君逃げ廻りながら、ふと抱ける赤子の面を見て

淀君　アレー。

トはふり出す。

淨〽逃げんとすれど足すくみ、叫ばんとすれど聲出でず

唄〽まろぶあし元、頭(かしら)の上、右と左り、前うしろ

ト此うち亡靈共きそひかゝる。トゞ淀君懐刀を拔放して切拂ふ。

淨〽三十七の怨靈が、笑ふ聲のみこだまして

唄〽あやし、おそろし

ト四邊眞闇になる。ト亡靈共物すごき聲にて一度にどつと笑ふ。其聲だん〳〵遠くなつて消える。

第三場　淀君寢所密訴

舞臺は一面の平舞臺。正面三間は金地の桃山式の大襖、山百合を實物大に一面に畫き、上手はやゝ斜に淀君寢所のすぐ次ぎの間の心、簾を垂れ、一段高くしつらひ、蝋塗の框などよろしく、下手へ折廻して襖。舞臺一面に高麗縁りの疊の心。御簾内に几帳、黒棚、薄暗くなれる行燈。平舞臺の襖際には火の消えたる行燈。やゝ中央よき所に大きな火鉢、その傍に腰元三人居眠つて

ゐる。どろ〳〵にて道具納まる。

ト淀君（三十五六歳）しどけなき寝衣姿にて黒髪を振亂し、懐刀を揮ひつゝ簾の中より半身をあらはす。途端に腰元共目を覺し、之を見て驚き、アレーと叫びながら逃げる。淀君夢心地の思入にてそれを追ひ廻す。ト正面の襖をあけて饗庭の局、雪洞（ぼんぼり）を持ちて急ぎ入り來り、これを見て駈け寄り、二三度やりちがはせて抱きとめ、淀君の懐刀を持つてゐる手をおさへる。

饗庭局　ア、申し、おあぶない。御前（ごぜん）さま〳〵。お心をおしづめ遊ばしませ。

淀君　オヽ、そなたは……

饗庭局　モシお心が附きましたか。饗庭でござりまする。

淀君　そんなら今のは。

饗庭局　エヽ。……コレ、腰元衆、何をうろ〳〵。早うお藥湯を。

ト腰元一人下手へ入る。

お風ばしめしまするな。ソレ、腰元衆。

こし元 二人　畏まりました。

ト腰元二人立上り、一人は二重の御簾を捲き上げ、一人は茵、脇息、等をよき處に据ゑる。其うちに饗庭は淀君を介抱して二重へ住まはせ、腰元の一人は褥を着せかける。此時下手より以前の腰元藥湯を持ち出でゝ淀君に飲ます。ト饗庭は腰元共に次ぎへ立てとこなし。是れにて腰元は會釋しておの〳〵下手へ入る。淀君は茵に住ひ、漸く我れに歸りたる體。

淀君　夢は五臟の疲れといへど、まざ〳〵と見た畜生塚。

饗庭局　エヽ。

淀君　サ、畜生やら、變化（へんげ）やら、何とも知れぬ化生（けしやう）の者が、群り來つると覺えしまゝ、我れを忘れて懐ろ刀、拔き放ちしは現（うつゝ）であつたか。……かんまへて侍女（をんな）どもに口どめ。他言は無用。

饗庭局　何のマア其お吩咐なくばとて、お家の行末とやかくと、お氣遣ひのけふ此頃。御ン夢心の安からぬも、御尤もでござりまする。とはいへ、夢は逆（さか）さまとやら、必ずお案じ遊ばしまするな。

ト脊をなでさすること。折しも時計の音。

淀君　もうよい〳〵。

ト饗庭をとゞめ

今鳴るは亥（よつ）刻の時計。なりゃもう兩女（ふたり）が……

饗庭局　エ。

淀君　イヤナウ、二時（ふたとき）ほどもツイうと〳〵、宵寝せしゆゑ、夜の深けたのをば忘れてゐました。そなたは嘸かし草臥れてもゐやらうに、早うさがつて休んだがよい。

饗庭局　勿體ない其仰せ。私はともかくも、秋の夜風の身にしみ〳〵。サ御寢所へおこし遊ばせ。どれ、御案內。

ト立ちかゝるをとゞめて

淀君　みづからには氣遣ひ無用。早う退りや。

饗庭局　それではあんまり。

淀君（ムッとせし思入にて）ハテ、かまやんなといふに。

ト强くいふ。

饗庭局　ハヽア。

ト一寸不審なといふ思入あつて下手へ入る。

入違へて下手より以前の腰元出て來り

こし元　ハツ、申し上げまする。今朝ほど申し上げおかれましたる密事につき、只今正榮尼、大藏卿の局、參入いたされましてござりまする。

淀君　これへ通しや。

こし元　ハア。

ト又下手へ入る。淀君だん〳〵心が落着きたる體にて、襖の畫に目をつけ

淀君　咲き亂れたる山百合の、あの縮寫を見るにつけ、思ひぞいづる過來しかた。處も加賀の白山なる、千蛇が池の名蹟と、世に聞えたる黑百合の、其花くらべが原となり、北の政所の憎しみ受け、はかなく滅びし佐々成政。（ト幻影を空中に見るらしき思入あつて）いで其頃はみづからが、盛りの花や春深き、聚樂殿の榮華の夢。われ一たび笑むときは、布衣より出でゝ天が下、六十餘州を掌握ありしアノ太閤とて何の英雄。榮えときめく諸大名も、皆みづからを憚りの、關とざゝねど豐臣の、世は泰平よと思ひの外、さんぬる三年の秋の風、賴みに思ひし治部少輔も、小西も共に木枯しの、荒れすさびゆく木の下かげ。（ト愁ひのこなし、ヒステリー風に泣くことあつて）にッくきは德川家康、御遺言を反古となし、秀賴が幼稚を幸ひ、みづからを女と侮り、大佛殿建立を停止とは……（ト泣き）其分疎をせよとは何事。……世が世なら家の子同然の陪臣に……（ト又泣き）エ、武運も末となつたるか。ひきつゞく不祥といひ、今まざ〳〵と見たる夢……もしや無慚に世を去りし……

ト言ひかけてゾッとせし思入、うしろを見返りてホット息をつき

心にかゝることぢやなア。

ト此時下手の襖をあけて正榮尼（六十以上）雪洞を持ちて先きに、大藏卿（五十七八）出て來る。

オ、待ちかねしぞ二人の者。今朝方は人目の憚り、聞き洩せし關東のおとづれ。一大事の訴訟とは心がゝりぢや。早う仔細を聞かせてたも。

トこれにて二人はずつと二重の前まで進み、あたりへ

思入あつて

正榮尼　恐れながら、當御城内に、徳川家へ内通なし、ふた心を抱く獅子身中の蟲がござりまする。

淀君　ナニ、内通の者ありとや。シテ其者は。

大藏卿　お家の執事片桐市ノ正にござりまする。

淀君　何といやる。

正榮尼　御ン驚きはお道理至極、日頃當城の柱石とも思し召す市ノ正、かゝる企てあるべしとは、心許さぬ私共さへ、神ならぬ身の夢いさゝか。げに測られぬは人の心の裏おもて、申し上ぐるも淺ましい、腹黒きたくみの本末。

大藏卿　口上にて申し上げなば、萬一の他聞の憚り。すなはち此のたびの密事一切、阿茶の局が問はず語り、市ノ正が濱松にて私共へ返答のかど／＼。まツた恐れながら御前さまをば、將軍家の御難題と申し拵へ、人質として江戸表へ、下しまゐらせんたくみの條々、認めおきましたる此一通。憚りながら御前様、何とぞ御覽下されませう。

淀君　聞くたび每に驚かるゝ言葉のはし／＼。何にもせよ、ともしびこれへ。

ト一通を受取り、封を切る。正榮尼雪洞を差出し、淀君くり返して、暫く讀むことありて

ナニ、（ト讀みながら）片桐市ノ正が（ト二人に向ひて）アノ自らをば、江戸表へ、人質として下すべしと、誓紙血判までなしたりとや。

正榮尼　さやうにござりまする。其證據の明細は……

大藏卿　尙ほその末文に、認めおきましてござりまする。

淀君　（讀みながら）ナニ／＼三ケ條の難題とは（ト文章を讀む口調にて）「秀頼どの要害の地に居城あるゆゑ、世上の雜說止む時なく、天下動亂のもとゐとなれば、暫く大阪をお開きあつて、大和ノ國郡山か、又は其他の望みの處へ……」（ト讀みさして、嚇となつたる思入）エ、秀頼を所替へとは慮外千萬。（ト又讀む思入）「さなくば諸大名同樣に、年々將軍家へ參勤あるか。」……エヽ、參勤とは。……（ト怒りの思入）「たゞしは御母公、人質として、江戸表へお下りあるか。」……ナニ／＼、「此うち一ケ條たりとも否まるゝに於ては、直ちに大軍を驅り催し、大阪城を一戰に……。」

ト讀みさして、身をふるはし、泣き怒ることありて、又少しく默讀する。

ナニ市ノ正がそもじらに「御母公さへ御下向あらば、事ゆゑなく濟み、天下も靜謐」……所替へ參勤にも及ぶまいから……そのやうに立歸つて勸めいと申したか。

二人　さやうにござります。

淀君　エヽ、おのれ、たがいひつけて其沙汰、下として上

を詐る無禮者めが。

ト向うを睨みて怒りの思入。

正榮尼　其お腹立ちは御尤もでござりまする。忝くも右大臣家の御ン母君を、囚人同然の人質などとは、無念の涙がこぼれまする。

大藏卿　まことしからぬ事なれども、私共駿府に滯在中、聞くともなしに承れば、淀さま御下向遊ばせば、片桐どのゝお取持にて、大御所さまのお手かけに、ならせらるるなどと慮外の取沙汰。

淀君　申すことにも事をかき、家康づれが手かけとは。

ト憤激の思入。

我父は淺井備前ノ守長政にて、母は贈正三位織田右大臣信長の妹なるをば知りをらぬか。……時世とはいひながら、日本六十餘州を切り從へ、威を大明までも振はれし太閤どのに見えしすら、くちをしいと思うたに、エ、無念、腹立たしや。

ト怒り歎きて、トヾ取亂して泣くこと。正榮尼、大藏卿も共に泣くことよろしく。

此時下手の襖をあけて大野修理ノ亮（三十七八）入り來り、ずつと下手に住ひて

修理亮　ハツ、大切なる火急の言上、推參平に御ンゆるし（トいひかけて心附き）ヤ、御ン方をはじめ御一同の此體は。

淀君　オ、修理ノ亮か。心外ぢやわいなう。

ト取亂したる姿のまゝにて哀訴するやうに言ふ。

修理亮　とはまた、如何なる御ン事あつてか。そも何故の御愁歎。

トずつと二重の前まで摺り寄る。馴々しきこなし。

淀君　なう、不忠不義の市ノ正が、自らをば人質に、關東へ渡さうとするといなう。

ト泣きながらいふ。

修理亮　スリャ市ノ正が不忠の段々、母大藏よりお聞取遊ばしましたか。（トいつて心附きやゝ形を改めて）正榮尼より言上ありしか。サ、御尤もでござりまする。お道理でござりまする。さりながら、彼れが二心露顯の上は、最早御誅戮あらんまでの事。決してお氣遣ひ遊ばされまするな。

大藏卿　修理ノ亮、あわたゞしげなる參入は心がゝり。火急のお知らせとは何事ぢや。

修理亮　（淀君へ思入あつて）かゝる折ふし申し上ぐるもいかゞなれど、只今京都より早打の知らせ。二條城の板倉伊賀、何か市ノ正と諜し合せ、一軍を引率なし、近々いづこへか出陣の手筈と間者の口上。御用意なくては叶ふべからず。

大藏卿　すはこそ御家大事でござりまする。此上は片時も早う軍の手配り。

正榮尼　アヽコレ、あわてまい大藏卿。（ト修理に向ひ）合點のゆかぬ其お知らせ。今軍騷ぎせうほどなら、とかう議論はいらぬ筈。いふまでもない、それは雜說。立騷ぐには及びませぬ。火急のお知らせ、何事かと思うたら、折も折、修理ノ亮どの、ちとお氣をお附けなされませい。

是れにて大藏ムッとせし思入。

大藏卿　又しても正榮尼どのゝ落着き顏。そもじさまの見通しも、あんまり當にはなりませぬ。市ノ正は忠臣無二と、つい此間まで誰やらの口癖。其大忠臣が不忠のたくみ。もし明日にもあれ、敵の大軍……

トいひかけるをとめて

正榮尼　アヽコレ、又してもげふ〳〵しい。コレ（ト泣伏してゐる淀君へ思入あつて）御前さまのアノお機嫌を……

トいひかけるを

大藏卿　イエ〳〵、たとひ御不例の折ぢやとて、一大事は一大事、お家の安危にかゝはる上は、言ふは忠義、いはぬは不忠、おのが心に引きくらべ、男まさりの御前さまをば、只の女子にしてのけまい。

ト是れにて正榮尼もムッとした體にて膝を進めようとする。

修理亮　アヽコレ、母上、暫く〳〵。何事も御家方さまの御意次第、只今申し上げし義は假に雜說とも虚說ともいたせ、市ノ正は不敵の曲者、歸城匆々召し出され、篤と御糺明は勿論なれども、生中ひまどり、日數たゝば、虚說も遂に實となるべく、こゝが一大事の瀨戸でござる。萬全の計りごとは、すぐさま七組に御諚あつて、お召捕りあるべきにや。御賢慮いかゞにござりまする。

ト淀君の氣色を窺ひながらいふ。此以前、淀君だんだんおちつき、威儀を整ふることあり。

淀君　正榮尼が申す如く、たかゞ且元一人、何程の事があらうぞ。手配りなどせば却つて騷動。不斷の通り登城させ、きつと糺明の上、處分なさん。

修理亮　仰せではござりますれど、奸智にたけたる彼れが辯才、出仕をお許しあらば、いかなる富婁那のいひまはし、右大臣さまの御心とらかし……

大藏卿　日頃同腹の織田樣はじめ、徒黨の者と謀し合せ、何篇出たさんもはかられませぬ。

修理亮　私共の愚存によれば、只速かにお召捕り、其上にて御糺明遊ばすこそ萬全かと存じまする。

淀君　たとへ富婁那の辯舌を以て秀頼どのを欺くとも、み

づからは欺かれぬ。其懸念は無用であらうぞ。
大藏卿　ではござりますれど、萬に一つ、市ノ正が申し條、右府さまのお氣にめさば……
淀君　エヽくどい。……秀頼はみづからの子ぢや。
　トきつといふ。此模樣よろしく

——幕——

第三幕

第一場　城内溜りの間

舞臺は一面の平舞臺。正面は墨畫の襖、上手下手へ折廻して同じく襖。すべて城内溜りの體。爰に上手に諸士甲、乙、丙、丁、いづれも三十歳前後、住ひ、茶道珍柏は下手に住ふ。此見得にて幕あく。時は舊暦九月初旬。

甲　さて珍柏老、お黒書院の御模樣はいかゞでござるな。
乙　片桐殿御糺明の御模樣はいかゞでござるな。
丙　貴老は定めし御承知でござらう。いよく噂の通りでござるか。
丁　謀叛人と定まりましたか。
甲　何とぞ内々にてお聞かせ下され。
皆々　お願ひでござる。お願ひでござる。
　ト捨ぜりふにて珍柏に頼むこと。
珍柏　さればでござります。これは極密の儀でござりますが、外ならぬ貴所樣方ゆゑ、極内々にてお話し申しまする。白氣八幡、御他言は御無用でござりまするぞ。（ト膝を進めて）例の一條、だんく御糺明の處、何がさて、當城の蘇秦張儀、三寸の舌をふるなの辯舌。御下書三十三ヶ條、其儀はかやう、此儀はさやうと、ヤモ立板に水さらく。申し開き難なく相濟むかと見えましたる處、さすがは大野樣の御眼力。
甲　ほヽ、何と申されたな。
　ト是れにて珍柏、入道の假聲にて
珍柏　ヤア、さほどの忠臣が、なぜ一應の伺ひもなく、御ン人質の一大事を承諾なせしぞ。剰へ品川表に淀さま御下向の御ン邸地、四丁四方の地面までも、一料簡にて定めしは、近頃以て奇怪至極。此申し開きあるや如何に。
……と斯やうに仰せられました。
乙　シテ片桐殿は、何と申された。
　是れにて珍柏また片桐の口眞似にて
珍柏　サヽ、其儀こそは、愚臣肝膽の碎きし所。しかし只今口外いたさば、他聞の恐れもござりますれば、いづれ密々にてお上へ言上。
丙　うまく逃げをつたな。

丁　それから如何(いかゞ)いたした。

珍柏　こいつ皆いと淀さまの御明察。（ト淀君の假聲にて）ヤア無用なる其氣遣ひ。こゝに出仕の面々は、いづれも當家譜代の重臣。何の遠慮、はや申せ。……と理の當然に流石のふるなも、青菜にしほ／＼絶句の有樣。其後は如何に相成りましたか、退座せし故存じませぬ。

甲　扨こそは御ン大事、忠臣と存ぜし市ノ正。

ト皆々顏を見合せ

乙　逆臣とは……

甲　イヤ驚き入つたことでござる。

ト歎息の思入。折しも時計の音。

乙　雜談に餘程のひまいり。

珍柏　オヽ、愚老も御用を。

丙　どりや、いづれも參りませう。

ト四人先きに珍柏も附いて下手襖の内に入る。やがて上手ずつと手前の出入口より石川伊豆ノ守、怒氣を含みたる思入にてつか／＼と出て、一寸上手へ思入ありて、下手の襖の内に入る。ト上手の襖を開きて片桐市ノ正（五十八九）社杯姿、思案に暮れたる體にて出て來り、下手へ行きかける。程なく其あとより織田入道常眞（六十以上）道服。長袴につゞいて出で來り

常眞　ナウ市ノ正、暫く。

市ノ正　これは／＼。何か御用でござりましたか。心附きませず、慮外御免下されませう。

常眞　マヽ、お席に。

ト是れにて兩人向ひあひて座に着く。

さて法外なる今日の糺明。そこもとの心中、常眞深くお察し申すぞ。

市ノ正　ありがたき御懇(ねんごろ)のお言葉。身不肖にして存じよらぬお疑ひを蒙り、當惑いたしをりまする。

常眞　さもあらん／＼。此たびの苦心のだん／＼、かげながら推量致し、今ン日の申し開き、一々尤もと感じ入る。さりながら先入主となつたる御母公の疑ひ、道軒が例の僻み。殊に若人らが盲蛇(めくらへび)の血氣にはやり、關東方の模樣は存じもせで、ふた言目には軍々と、疊の上の陣立なし、其許にふた心なきを存じの者まで、卑怯臆病と種々雜言(ざうごん)。甚だ以て氣の毒至極。

ト同情の思入。やがて四邊へ思入あつて

畢竟此たびの疑ひは、大野親子が其許を猜みての誣ひごと。まツた二老女がさかしら。ア、叢蘭茂らんとすれば、秋風之を敗るの金言、今更に思ひ當る。……イヤナニ、市ノ正、御母公をば人質の仔細、最前押し切つて包まれたには、一定深い御用心もあらうずなれど、總じて疑ひは暗中の人影、なまなかに明さぬ時は、ます／＼邪推(わるずゐ)の

募る道理。苦しからずば、仔細打明けておくりやるまいか。われら力及ばん程は、秀頼どの親子へ執りなし、無實の濡衣乾させ申さん。

市ノ正　ハヽ、有難き御懇情(ごこんせい)。さりながら、彼の人質の一條は、全く當座のがれの儀、先刻申し上げし外には何の仔細とてもござりませぬ。

常眞　スリャ、かほどに申しても。

ト思入。市ノ正だまつてゐる。常眞是非がないといふ思入。

此上は歸宅の途中を、必ず共に油斷なきやう。

ト暗打ちの用心をせよといふ思入。

市ノ正　かたじけなく存じまする。

ト常眞は上手の襖の內へ入る。市ノ正徐かに立上りて下手へ行きかける。此時石川伊ノ豆、下手の襖をさつと開き、つか〳〵と出て、行きかける市ノ正の前へドッカとすわりて

石川　市ノ正どの、暫くお待ち下されい。お家の安危にかゝはる儀につき、貞政御意(ぎよい)得たい事がござる。マヽ、お席につかせられい。

と是れにて市ノ正少し戻りて座に着く。

外ではござらぬ。貴殿の胸中が承りたい。

市ノ正　これはまた異なおたづね。身共の胸中とは。

石川　お上へ一應の伺ひもなく、品川表に四丁四方、何ゆゑ御下向地を定められしぞ。

市ノ正　何事かと存じたら、御前でさへ申さぬ密議を、何故あつて御邊に對して。

石川　何と、口外は出來まいがな。大奸は忠に似たり。詞だくみに君を欺き、一寸延びの逃げ口上。言ひ開きなきに於ては、そこ一寸も立たせ申さぬ。

市ノ正　是れは又迷惑千萬。何とて我君を欺き申さん。

石川　いはれな且元。貴殿德川家に內通なし、體よく御母公を關東へ下し、おのれ當城の威權を握り、彼の古狸に媚び諂ひ、榮利を計ると專ら風說。

市ノ正　存じもよらぬ其の疑ひ。ふた心とは何を證據に。

石川　もし二心(ふたごころ)なくば何故に、人質の儀を承諾せられた。下として上を計る、かくてもふた心の證據でないか。但しは言ひ開きの詞があるか。コリャ執事、イヤサ且元。まこと他聞を憚る儀ならば、まッ此の如く金打いたす。(ト金打して) 正八幡、他言は致さぬ。內々にて身共にお明し下され。サ、其仔細承りたい。サ、其仔細。……ムヽ、おしだまつておゐやるは。……返答なくば。

ト石川、刀の欛に手をかける。是れにて且元こなしあつて

市ノ正　マヽ、豆州、マヽ暫く。此上は是非に及ばぬ。有

り證にお話し申す。マ、暫く。

ト宜しくありて

御邊に語るも面目ないが、此たび大御所の激しきみけしき、彼の三ヶ條の難題の内、何れか一ヶ條を承引せざれば、すぐさま大軍にて寄せんず結構。それ故、只一時を延ばさん爲の當座のがれに、承諾の旨申し殘し、さて立歸り、篤とかた〲とも談合の上、何とか思案せん所存なりしに、此儀先達つて二女より洩れ、御母公のはげしきお怒り。進退きはまり、せん方なさに、深い仔細があるやうに申したは、當座のがれに過ぎ申さぬ。

石川（案に相違したる思入）スリャ何もかも當座のがれか。關東に對し、承諾したのも當座のがれか。我君に對し、深い仔細と申したのも當座のがれか。

且元だまつて俯向いてゐる。

言語道斷。かほどのうつけ武士とは存ぜなんだ。

ト石川拍子拔けのしたる思入。

市ノ正　さげすまるゝは尤も至極。其言譯はこよひを過さず……

石川　フム。切腹なして相果つるか。

市ノ正　イヤ〱、委細のお詫びを書き認めて、剃髮なし、世を棄てる所存でござる。

石川　ヤア、剃髮とは女子の振舞。なぜ潔く切腹なさらぬ。朋友のよしみ、貞政これにて介錯いたす。サ、覺悟めされ。

ト刀の欛に手をかける。

市ノ正　サヽ、御邊の氣質では、さういはるゝも尤もなれど、士の重んずるは死後の名。たとへ死におくれ、卑怯者といはるゝとも、身に覺えなき謀叛の濡衣、はしあへぬくちをしさ。今此儘に相果てなば、さてこそ逆心の言ひわけなく、自殺せしと世の口の端。一通り明り立つまで、棄てかぬる此命。義に勇む伊豆ノ守どの、此ごましは首、今暫くあづけて下され。なにとぞ〱。

ト且元兩手を突いてわび入る。石川切らうとして切りかね、トゞ此の上は喧嘩仕掛の外はなしと云ふ思入あつて

石川　見下げ果てたる腐れ武士。……これでも恥を知りをらぬか。

ト足を擧げて且元の肩先を蹴る。且元横に倒れてそのまゝてゐる。石川之を見ていよ〱拍子拔けのした思入。

ごましは頭の腰拔け達磨、ころがつても無言の行。ハテ、念の入つたうつけ者。……エ、ふッ放さんも刀の穢れだ。

ト席を蹴立てゝつか〱と元の上手の出入口へ入つてしまふ。やゝあつて且元は起き上り、しづかに塵を拂

ひ、下手へ入る。

ト上手の襖をあけて大野修理ノ亮を先きに、渡邊内藏ノ介出で來り、内藏ノ介氣込みて、且元の後を追はうとするを修理の止めるを道具替りの知らせ。内藏ノ介は殘念げに且元を見送る。此模様にて道具廻る。

第二場　黑書院内評議

舞臺三間の間は常足の上段、うしろ桃山式の金襖、左右後へ下げて、同じく金襖、舞臺は一面に高麗縁りの疊の心、すべて城内黑書院の體。上段の眞中に秀頼（十八九歳）茵の上に住ひ、うしろに童小姓二人控へ、其下手に常眞、平舞臺の上手には道軒住ひ、此見得にて道具納まる。

秀頼　只今常眞がいはれし趣き、だん／＼に打開く所、これも又道理ある歟。市ノ正が今度の振舞、成程一應は不審なれど、さりとてふた心に相違なしと、明白なる證據あるでもなし。まッた母上を人質の一條、其言ひ開きせぬといふも、常眞のいはるゝ通り、仔細あつての事かも知れず。然らば、再應の吟味にも及ばずして、粗忽に成敗せば後悔あらん。とはいへ、母上のはげしきお怒り。此まゝにも濟されまじ。何としたものであらう。

道軒　ハヽ、恐れ入つたる大度の御上意。此入道市ノ正ならんには、斯く承るばかりにても、君恩心根に徹すべきに、物體なや、其大度を幸ひ、密議ゆゑに申し憚るなどとは、申すまでもなく彼れがたくみ。常眞公の御懸念も一理あれど、畢竟かゝる疑惑の中に、關東と手筈を整へ、事を擧げん底意は明白。只速かなる御處分をこそ願はしう存じまする。

常眞　イヤナウ、大野入道の詞ながら、罪の疑はしき其刑を輕うせよとある。今日の御糺明數ヶ條のうち、彼の人質の一條の外は、皆明白の申し開き、我れ人共に疑念の殘さず。然るに只一ヶ條のみ内々にて申さんと願ひ出でしを、取糺しもせで成敗あらんは、政道平かならぬに似たり。

道軒　イヤ／＼、其一ヶ條が最も不審。奸智にたけたる曲者なれば、御成敗ひまどるときは、何しいださんも圖りがたし。それゆゑ、先刻念の爲に、倅と内藏ノ介とに申し含め、彼れが下城の模樣をば窺はせおきましたが、今以て知らせなきは。

ト道軒懸念のこなし。此時下手の襖の内にて

修理亮　アイヤ、其御返事……

渡邊　只今言上仕りまする。

ト修理先きに渡邊内藏ノ介出で來り、よろしく下手に住ひ

修理亮　市ノ正が下城の擧動心元なく、ひそかにお溜りまで參りしところ、

渡邊　存じよらぬ間違ひ出來。

道軒　ナニ、間違ひとは心懸り。シテ何が起つたりしぞ。

修理亮　たれとも知らず高聲に、市ノ正と爭論するは、合點ゆかずと立ちとゞまり、內藏どの諸共立聞くところ、

渡邊　一人は即ち石川伊豆、例の荒者烈火と怒り、市ノ正が不忠の條々、數へ立てゝ詰問なし、仕儀によつては立ち所に、切つて棄てんず勢ひに、

修理亮　辟易なしてか市ノ正、最前御前にて申せし事は、全く一時の拔け口上、仔細ありとは僞りなりと、只ひたわびにわびまするを、伊豆ノ守なほ詰め寄り、此上は其申し譯に切腹せよ、この場に於て介錯なさんと無二無三。

渡邊　あはやと見えしが利口の曲者、とやかくと云ひ拔け、足蹴にされても手向ひ致さず、遂に下城致してござりまする。

道軒　ナニ、下城した。（ト殘念げなる思入）エ、見すく知れた當座のがれを。

ト苦々しげにいひかけて氣を變へ、秀賴に向ひ

彼れみづから御ン人質の申し譯云々の儀を、拔け口上なりと申す上は、常眞公の御念は無用。御評議は是れにて落着。すぐさま七組を召出され、御諚意あつて然るべうぞんじまする。

秀賴決しかねてゐる。

常眞　イヤ、評議落着とは申しがたし。若年ながらお附き人、木村長門ノ守重成、病中とは承れど、日頃思慮深き若者、此大事一決に先だち、一應お呼び寄せ……

トいひかけるを道軒かぶせて

道軒　若輩ものゝ木村長門、彼れ式が何を存じて。寸陰も安危のわかれ目。尙ほも御異存ござらば承らん。御異存あるか。

常眞　サアそれは。

道軒　いかゞでござる。

トきつと云ふ。常眞も秀賴も默つて俯向いてゐる。

ヤイ倅、此上は我君の御諚をいたゞき、早速七組へ申し附けてよからう。

修理亮　ハ、ア。

ト修理ノ亮すぐに立たうとする。此時下手の襖をあけて木村長門ノ守（二十歲）社袴姿、病後長髮の體、しづかに出で來り

木村　アイヤ、暫くお待ち下されませう。

ト末座に控へ、秀賴はじめへ會釋をする。

常眞　オヽ、よい處へ長門ノ守、只今丁度其許の噂。病中と承つたが、いたつきは怠りしか。

道軒　慮外なり長門ノ守。大切なる御評議最中、奏者も待たず、粗忽の推參。見れば病後尾籠の風體。緩怠だ。控へめされ。

木村　ハヽ、病中の推參恐れ入り奉りますれど、今日執事市ノ正、京表より歸着の間もなく、即刻の御糺明と聞く驚き、さてこそ當城の一大事と、細謹顧みるに遑なく、取るものも取りあへず、登城いたしましたるところ、市ノ正は既に御不興蒙り、なほ御内評議と承り、かねて御評議に與ろべき御許し承りをりましたるを幸ひ、推參仕つてござりまする。

常眞　若年ながら、故常陸ノ助が嫡男、一段の思慮も候はん。何とぞ列席許されたし。

秀頼　苦しうない。進め〳〵。

木村　ハ、ッ。

道軒　寸陰を爭ふ火急の大事、申し上ぐることあらば、サ、速かに言上めされ。

木村　イヤ、先づ以て承りたきは大野御老體の御存意。市ノ正逆心とは、何を以てお極めありしぞ。

道軒　ハテサテ、餘事はともあれ、關東へ御母公をば引渡さうとしたのが證據の第一。

木村　スリャ市ノ正がさやう白狀いたしましたか。

道軒　何を。……白狀せざればこそ兎角の評定。

木村　なれば、お疑ひと申すぢやまで。

道軒　アイヤ、疑ひにも品々あり。申し譯の立たざるは白狀同然。

木村　然らば申し譯相立つに於ては、逆心の證據は滅する道理。

道軒　エヽ、ぬらりくらり、何を馬鹿な。……和殿の異議とはそれッきりか。

木村　アイヤ、市ノ正の逆心、もし只お疑ひに止まらば、正邪いまだ明白ならず。二心ありとは定めかたし。然るに討手とは粗忽の御評議。

修理亮　ヤア、粗忽とは慮外なり。二心なしとおいやるには、何ぞたしかなる證據があるか。

木村　日ごろふた心なしと申すの外、別に證據は候はねど、

渡邊　ヤア證據なくば水掛け論。

木村　イヤさにあらず。有りといはんにこそ證據もあれ、無しと申さんに何の證據。若し口さがなき雀あつて大野親子、渡邊内藏は日ごろ市ノ正と心よからず、さてこそ曖昧の證據を言ひ立て讒言なせしといひふらさば……（トいひかける、修理、渡邊氣込む。）サ、これは譬へ、さりながら、然る折に、覺えなき證據ありやと詰られたら、御邊らは何と答へめさる。今無しといへばあくまでなし。然るに疑はしき證據によつて、お家の柱石を御誅

戮とは御粗忽千萬。

修理亮　イヤ、御誅戮を急がせらるゝは、彼奴(かやつ)が逆意の裏を掻き、腹黒き大御所の、根深き底だくみを破らんためなり。

木村　サヽ、其大御所に、根深き底だくみありと存ずればこそ、かやうな御成敗を粗忽とは申せ。御譜代の御老臣をば、何等明白の證據もなくて、誅戮あらん乎、關東方は是れ幸ひと、上を桀紂の如くに云ひ觸らし、先づ諸大名の心を離反させ、當家の孤立を俟ち、兵を動かさんと計るべければ、只今こそは大事の折柄。

道軒　迂濶なり、長門ノ守。只今すぐに誅戮あるこそ、敵の出鼻を挫くといふもの。關東は、既に市ノ正、板倉らと諜じ合せて軍の手配り、近々押寄すると專ら風說。

木村　いや、其風說は信ぜられませぬ。關東猥りに兵を動かし、當家をくつがへさん存念ならば、何條まはりくどき鐘銘の沙汰、まッた人質など求めませうや。畢竟名分を立てゝ後と、例の大御所が底深き工(たく)み、察するところ、此たびの儀も、恐らく關東の張子房、本多佐渡が苦肉の計略、楚の范増を陷し入れし同じ轍(わだち)の反間と、そこに御(み)心附(こゝろづ)かせられず、今、且元を誅戮あらば、見すノ＼敵の計りごとに乘り、剩へ兩家の戰端を早むる道理。

渡邊　やア長門ノ守には何故に、さほどに戰爭を恐れめさるぞ。

木村　イヤ戰爭は恐れませぬが、名分未だ全からず。まッた大御所の名望といひ、天下の形勢といひ、何事も皆身方に利ならず。篤と此儀をおぼしめされ、假令御誅戮あるまでも、今一度上使を差立てられ、巨細お取糺しあらんこと、當然の御沙汰かと存じまする。

ト思ひ入つて言ふ。

常眞　義理分明なる長門が辯論。此上はまづ一應上使を遣はされてお糺しあるか、又は改めてお召あるか、兩樣のうち何れとも、御裁許あつて然るべし。

秀頼　いかにも長門が申し條、予も尤もと會得いたした。然らば改めて登城させ、予れみづから問ひ糺さん。此旨市ノ正に申し傳へよ。

ト此時正面の襖のうちにて

淀君　イヤ、それは叶ひますまい。

修理亮　オヽ、あのお聲は……

渡邊　御母公さま。

ト正面の襖を開き、女童二人褥を持ち出て、よろしく二重上手へ敷く。つゞいて淀君怒氣を含みて出て、其上に住ふ。

淀君　イヤナウ秀頼どの、最前より洩れ聞く所、常眞どのを始め市ノ正贔屓の面々、言ひ開きの、證據のと、口か

しましう申さるゝが、わらはを江戸表へ引渡さんと約束せしは、彼れが口づから申せし事にて、疑ひはあるべからず。然るに彼れを又召し寄せ、其仔細糾せし上、處分せんと仰せあるは、其言ひ開きの次第により、母をば關東へ送らん所存か。イヤナウ、此母を牲にしても、御ン身は徳川に隨ふ心か。（ト急にヒステリー風の泣聲になりて）親の心を子は知らずとやら。太閤どの他界の後は手の裏を返す人心。油斷をねらふ虎狼、片時に心がゆるされねば、鏡に映る我影をたそやとまでにやつれ果て……（トいひかけて言葉とぎれ、暫く啜り泣きしてゐて）これほどに思ふ母を（ト急に怒り聲になつて）人質とは何事ぢや。……臣下の分際を以て、みづからをないがしろにせし無禮者、……その科によつて成敗するのが、なぜ不道理ぢや。ヤイ長門、これでも名分が立たぬと申すか。

木村　ハヽ、恐れ入り奉りますれど、こはいさゝかお聞きたがへ。再び市ノ正を召しされ、上御自身にてお糺しあるは、逆心か、さもなきかを御裁斷遊ばすため。御ン人質の儀とは格別。何とぞ此儀聞こしめし分けさせられ、今暫くの御猶豫を下しおかれたう存じまする。

淀君　イヽヤ、再應の取調べには及ばぬことぢや。みづからをないがしろにせし罪によつて、すぐさま切腹を申しつけい。

木村　お言葉返すは恐れ入り奉りますれど、且元何とて御ン方さまをないがしろに致し奉りませうや。御ン人質の一條は、恐らく關東を欺くための、一時の方便と存じますれば……

　トいひかけるを淀君かぶせて

淀君　方便にもせよ、計略にもせよ、みづからの事をさまざまあしざまに、阿茶の局などに申せし由、告ぐる者あつて證據は明白。是れ全くみづからをば、太閤の正室ならずと、侮るより起る無禮、不忠。コレ、秀頼どの、これほどまでに母に恥を見せ、尚ほ市ノ正を庇やるか。（ト又泣き聲になり）母よりも市ノ正が大切なら、いつそみづからを……みづからを……殺したがよいわいなう。

　ト泣くこと。一同暫くだまつてゐる。

道軒　御尤もなる其お怒り。只今長門が申し上げしは、全く若輩の淺見。我君の御採用あらんとせしも、又是れ一旦のお心迷ひ。

修理亮　市ノ正の再度のお召は、父道軒をはじめ我々共、あくまでもお止め申すべければ……

渡邊　何とぞ御ン怒りを鎮めさせられ、御安心遊ばしませやう……

三人　偏に願ひ奉りまする。

ト道軒、秀頼に向ひ

道軒　此上は最前申し上げし如く、速かに七組へ御諚あつて、お討手差向けられて然るべう存じまする。

木村　アイヤ暫く。よし御誅戮遊ばさるゝにもせよ、たかの知れたる且元主從、お討手騷ぎに及びませうや。彌々お召寄せ叶はずんば、せめて斯く申す重成に、何とぞ此お使ひ仰せ付けられ下されたし。自然市ノ正に逆意あらば、立ち所に差違へ、誓つて後難を拂ひ申すべく、まツた御母公に對し奉り、慮外の申し譯相立たずば、彼れに迫り腹切らせ、其首ひツ提げて歸參いたし候ふべし。何とぞ此儀重成に、仰せ付けられ下さるやう、ひたすら願ひ奉りまする。

ト一語々々に力を入れ、涙を呑みつゝ言ふ。道軒こなしあつて

道軒　御母公樣へ申し上げ奉る。只今重成が申す所、一理ありと存じますれば、何卒みゆるしの下されたし。さもあれ、市ノ正は利口の曲者。（と思入あつて）イヤナニ長門ノ守、發明なる和殿ゆゑ、申すまでもござらねども、萬一あやふやなる言ひ開きを、そのまゝ復命いたされなば、お咎めは和殿に及ぶ。其邊如才ござるまいな。

木村　仰せにや及ぶべき。其儀はお心安かるべし。

修理亮　たとへ申し開き立つと云ふとも、いまだお疑ひの解けぬからは、よも空手では歸へられますまい。且元が一子出雲ノ守は、此度關東方と緣組云々の嫌疑もあれば、かたがた、彼れをば人質として、相具し歸城あるが當然ならん。

木村　こは思ひがけぬお詞。申し譯立たずもあらば、さやうの用心も仕らん。さなきに人質とは理なき難題。

道軒　アイヤ、且元まことに二心なくば、人質差出だすに異議はない筈。

修理亮　それぞ即ち御ン方さまの、お心安んずる一つの方便。

渡邊　いかさま、是れはよい御思案。萬全の御用心と存じ申す。

ト此三人は木村を使者に立て、あはよくば木村をも共に死地におとしいれたいといふ思入。常眞、木村の迷惑を察して

常眞　アイヤ、市ノ正が人質は、已に大奥に召捕りあり。即ち彼れが後妻腹、最も鍾愛と承る蜻蛉といふ四十兒。淀どの腰元に使はるれば、之れに增す人質なし。何はしかれ、長門が願ひ、何とぞ御許容これありたし。コリヤ長門ノ守、秀頼公にはとくより御承知。な、御母公へお願ひ申せ。よも御母公にも、使ひの儀は……

ト淀君へ思入。淀君ヒステリーやゝ收まりて、少し氣

がぬけたやうの思入。わざと顔を背けて居る。
ソレ御異存ない。早う／＼。
ト秀頼もそれと察して
秀頼　重成許す。はや參れ。
木村　ハ、、御免。
ト重成勇みて秀頼に辭儀をなし、急ぎ立ちあがるを木の頭。此模樣にて幕。風の音にてつなぎ、道具出來次第引返す。

第三場　片桐邸上使

舞臺中央に四間の中足二重、本緣、本庇附。正面よりも上手に一間の床の間、軸、花瓶に時の花。つゞいて一間は違ひ棚、同じく二間銀地の襖、墨繪の山水。下手奥へさげて九尺は白壁、むさう窓、やはり本緣、本庇。此棲に造り戸の出入り。平舞臺上手よき處に手水鉢、燈籠、植込、袖垣、こゝに人の隱れることあり。うしろ泉水と庭の書き割り。深夜の體。
二重に且元、前の拵へのまゝにて、燭臺に近く坐し、澤山の帳面を傍らに置き、十露盤を机の上に載せて算勘の體。此體よろしく、風の音、蟲の聲にて幕あく。
市ノ正　此莫大の御ン入目に、軍用も已に半は盡きたり。其ア、、これとても、あの大御所が怖ろしき遠謀深略。其計りごとの裏を掻き、せめてもお家の社稷ほどはと、枕をくだきし甲斐もなく……（トいひかけて歎息し、暫く無言にて十露盤をはじく。やがて又手をとゞめて）われ若し當城にあらずならば、彼の一策すら行ひがたく、お家の滅亡は目のあたり。ハテ何とぞして、此難場を……
ト思案の體。此うち奥より奥方一葉（四十位）前髮を取り、鬢差を出した下げ髮、襠姿、亂れ箱に着替を入れて持ち、出て來り、よろしくこなしありて
一葉　わがつまには、お召替へも遊ばさで、小夜中のお調べごと。嘸かしお疲れでござりませう。お手すきなら、ちよとお召替へ遊ばしませ。
市ノ正　ア、イヤ、打棄てゝおきめされ。公務殊の外に多忙。まッた程なく、御上使下されんも計られず。さすれば此儘にお出向ひ。此儘々々。
トいひながら又算用にかゝる
一葉　（思入あって）最前、お下りの折から、お黒書院の御模樣を、くどうもおたづね申したいと存じましたが、御休息遊ばす暇もなく、いろ／＼さま／＼のお調べ事。いづれ何事か御ン大事が起りしならんと、不審の折から、驚かるゝ知らせ。思ひもよらぬ讒言にて、お覺えもなきお疑ひ、御勘氣をお受け遊ばしたと、聞いた時のびッくり。すぐにも其仔細を、また二つにはお覺悟をも聞きま

したいは山々なれど、御多用の御模様ゆゑ、つい只今まで差控へてをりましたが、お疑ひの第一は、御ン人質の一條とやら。もしお言ひ開き立たぬ時は、どうなる事かと心がゝり。今にもあれ、御上使あらば、何とお答へ遊ばすにや。又取急ぎ大佛殿御建立の御ン入目お取調べは、何故にござりますぞ。仔細をお聞かせ下さりませ。

市ノ正　其心つかひ、さこそ／＼。が何事も約束事。申し譯立たぬ場合には、是非に及ばず、いさぎよくお暇願ひ、退身せん所存なれば、後日市ノ正に私慾の計らひありしなんど、あらぬ譏りなからんため、大佛殿の入目は勿論、予が一身にかゝる事ども、取急ぎ調べを附け、上使參らば、退身の執り成し賴むの外、これといふ思案もないわえ。

一葉　スリヤ、さしかゝつたる御ン大事を、あなたは餘所に遊ばして……（と思入あつて）イエ／＼、そりや御本心ぢやござりますまい。モシ、わがつま、お隱し遊ばすはお情けない。まことは御上使を待ちうけて、お切腹遊ばすお覺悟でござりませう。

市ノ正　ア、コレ、粗忽を申されまい。上より自殺せよと御諚あらば迯ろゝに術なけれど、死を急ぐのみが忠臣の道にあらず。予はあくまでも退身の存念。

一葉　イ、エ、さやうではござりますまい。實を語らば、取亂して歎かうかと、おぼしめしての御遠慮でござりませう。聞きますれば、今ン日お溜りにて、伊豆ノ守が無禮の雜言、……（トいひかけて泣きながら）足蹴に掛けたとやら下々までも取沙汰。それを其まゝお見のがし遊ばしたは、深い御所存あつての事か。老耄よ、卑怯よと、口ぎたなう嘲さるゝが、くちをしうござりまする。

ト泣くこと。

市ノ正　はしたなし。聲高し、御ン大事の前には、一身の恥辱はいふに足らず。今死なば犬死同然。切腹の所存なぞは毛頭ないわい。

ト平然として十露盤をはじいてゐる。

一葉　イエ／＼、それは御本心とは思はれませぬ。まことのことを、どうぞおつしやつて下さりませ。

市ノ正　エ、くどい。國家の大事は、女共の知ることでない。あちへ／＼。

ト此間奥にて犬の吠ゆる聲する。此時下手遣り戸口より侍士一人出て、本緣に住ひ

侍　申し上げます、御上使として木村長門ノ守さま御入來にござりまする。

市ノ正　（思入あつて）これへ御案内申せ。

侍　ハツ。

ト引返して入る。犬の聲尙ほつゞく。

市ノ正　そもじは奥へ。……何をうぢ〳〵。……エ、行けといふに。
一葉　ハ、ア。
　且元へこなしあつて一葉奥へ入る。
市ノ正　病中と聞きし長門ノ守、上使承り參りしは、……
ヘテ、何にもせよ、不慮の仕合せ。
　ト思入。此時上手奥の植込の蔭より石川伊豆、覆面、黒扮装、大小ざしにて忍び出て、上手廻り椽へ足を踏みかける。ト下手遣戸口より前の場の長門ノ守、侍士に案内せられて出て來る。これにて石川は急ぎ身をすさり、袖垣の蔭へかくれる。此うち且元はよろしく木村を出迎へ
上使のお役目、御苦勞千萬。長門どのには、まづ〳〵。
木村　然らば許しめされ。
　ト是れにて木村上手へ通り、座に着く。且元こなしあつて
市ノ正　夜中といひ、俄かの御上使、一しほかしこまり奉る。恐れながら、早速にも、上意仰せ聞けられ下されたし。
木村　上意條の儀にあらず。上御不審の條々の内、御ン人質の一條は、とりわけ御不審あらせらるるところ、市ノ正が今日の申し開き、甚だ奇怪なりと逆鱗あり。察する所、所謂三ヶ條の難題は、悉皆市ノ正が發意にして、關東と馴れ合ひ、當家を滅さんず底意ならん。然らずんば、何を憚り、申し譯濁るに及ぶ。今一應糺問の上、言ひ開き明白ならずば、即座に切腹を申し附けよ。と斯くの如くの上意でござる。
市ノ正　ハ、、嚴命恐れ入り奉る。此たびの一部始終、改めて申し開き、御上使何とぞお聞き下され。……そも〳〵此たびの事の起りは、鐘の銘の一條とは申せ、合點行かぬ關東の振舞。それがし駿府に罷り下り、已に三旬に及ぶと雖も、大御所は不例と言ひなし、對面の沙汰もなくて、遷延なす。さていよ〳〵伺候すれば、思ひがけぬ種々の難問。近ごろ右大臣家、多人數の浪人を召抱へられ、武具の調べ、兵糧のたくはへ、太平の今日に何の用意ぞ。頃聘禮を缺かれながら、加藤、福島をはじめ、諸侯に慇懃を通せらるゝは如何なる儀か。是れ二つ。まッた千姫君をば疎んじ申さるゝ宿意はいかに、などゝ、鐘の銘の儀は枝葉となり、思ひもよらぬ種々の詰問。一々證據まで擧げられたる、當座のかすがひ拔きさしならず。如何はせんと存じたるが、辛うじて言ひぬけたれど、尙ほ中心は穩かならず、落着いかにと、相待つうち、爰に圖らざる行違ひこそ起りたれ。

木村　ム丶。

市ノ正　げに毛穴よりも氣は洩るゝと、大藏、正榮二女の下向は、今度の大事を破るのはじめ。大御所が手に操られて、女心の淺墓にも、みづから落つるおとしあな。是れ某が身の上に、御不審蒙りし發端なり。かくてのち某を召出だされ、本多、成瀨、安藤を以て、改めて三ヶ條の申し出で。まことに是れ前虎後狼。此事此方へ伺ひ出でなば、君側には大野親子、血氣無謀の若殿原。事破るゝは地を打つ槌。かなたよりは火の附く催促。進退爰に谷まつたり。たとへ僭上の罪は得るとも、御ン大事には代へがたし。御ン詫びは成就の上、此白髪首只一つと、所存の臍は固めたれど、三ヶ條いづれもいづれ、人質の儀を除くの外は、所詮行はれん望みなし。人質は前例なきにもあらず。まッた聊か所存もあれば、ひそかに上へ聞え奉り、かやう／＼と自問自答。御母公御下向の一條をば、御ン受けのよし申せし所、大御所至極の滿足にて、乃ちくさ／＼の賜り物。

木村　すりやお疑ひの元となりし、本多家との縁組も……

市ノ正　まッた德川家の御紋服をいたゞきしも、のッぴきならぬ其場の仕儀。長門どの、お察し下され。

ト是れにて木村思入あつて

木村　上使の役目は、はや是れ迄。

ト下手へ來りよろしく住ふ。此以前より又も犬の聲頻りに聞える。蟲の聲も倘ほつゞいてゐる。

思ふに違はぬ苦忠のだん／＼。さもあらんとこそ存じたれ。とはいへ、差當る御嫌疑を解かずんば、忽ちに貴殿の身の上。已に先刻も君前に於て、大野親子が理不盡の評定。織田どのゝお扱ひなかりせば、すぐにも討手を下されんず危急の場合に參り合せ、辛うじて此お使ひ。所詮は御母公のお僻みに外ならねば、貴殿が苦忠の段々を、密かに君へ聞えあげ、君より御母公へお執り成しあらば、とにかく寸隙を得る道理。何とぞ其密事をば重成に御口外下さるまいか。……正八幡も照覧あれ、重成が一命かけ……

トいひかけるを且元かぶせて

市ノ正　アイヤ、誓言には及び申さぬ。此方よりこそ望む所。（トこなしあつて、重成を近く招き）此たび且元が一存にて、御下向の儀を承諾なし、御ン屋敷地までも定めし仔細は、そも品川の地質といつぱ、土砂卑濕の惡地なれば、こゝに四丁四方といへば、只地形をならすだにも、粗一年餘を費すべく、さて御殿を築くとなり、遠く大阪表より材木竹石を下す時は、又一年を逾るに足る。かくて造營終りて後も、御母公所勞と申し立てなば、更に幾月かを延ばすを得べし。こは是れ姑息の策に似たれ

ど、大御所已に七十歳、餘命三四年を過ぐべからず。彼の老公だに他界あらば、世上に變有らんは必定、必ず乘ずる機會もあらんと、さてこそは承諾いたせしものゝ、……まッた其他にも尙ほ一策あれど、……それも、これも、御母公おはさん間は、たやすく行はるべき事にあらず。（ト歎息して）所詮當家の衰運は、其由つて來るところ遠く深し。禍ひの根は內に存す。豐國さまの御遺案を、長く守護し奉らんことは覺束なしと、かねて覺悟は極めをりしが、かく速かに齟齬せんとは……

　ト半分いひさして溜息を吐き、慷慨の思入。此以前蟲の聲ピタリと止む。

木村　承つて感じ入る。さるにても目前の私情に眼くらみ、お家百年の後を思はぬ道軒らが無智淺見、まッた是非もなき御母公のお僻み。いかに女性の習ひとはいひながら……

　トこれも半分いひさして愁ひの思入。此時吹颪す風の音して燭臺消え、舞臺暗くなる。ト上手袖垣の蔭より石川伊豆、つか〳〵と走り出で、大小を拋げ出し、すぐに小刀を拔く。途端に片桐の家來本村淸藏（二十五六）同じく袖垣の蔭より走り出で、石川に組み附く。石川は之と揉みあひながら

石川　大忠臣を見違へしどんぐり眼、進上申す。腐つた腸は添へ進物。

　トいひつゝ自ら其片眼をゑぐり取り、木村清藏をねぢ倒し、地上に坐して腹を切らんとする。

市ノ正　ヤアたれかある、ともしび〳〵。

　トこれより先き奥方一葉、下手遣り戸口より雪洞を持ちて竊に出で來り、先刻よりの密談を立聞き居り、此時此騷ぎを知りて、すぐに出ようか、出まいかと迷ふ思入あり、トゞつか〳〵と走り進みて袖にて隱し居りし雪洞を差出す。同時に重成二重より驅けおりて淸藏に助力し、トゞ石川をおさへつける、淸藏は石川の兩刀を取り上げる。皆々はじめて顏を見合せる。

市ノ正　たれかと思へば伊豆ノ守どの、思ひがけなき此場の仕儀。

木村　夜中といひ、此いでたち、此前栽に忍び居られ、剰へ此振舞は、何共以て合點ゆかず。

木村　あまりにかしましき犬の啼き聲を不審に存じ、お庭を見廻り、先刻已に怪しき人影をば認めましたが、仔細あらんとさしひかへ、只今まで、樣子を窺ひをりました。

一葉　みづからもまた、犬の聲の、けたゝましいのが心に懸り、參るともなく最前から、……イエアノ、つい今がた廊下口へ。……まことにあなたは石川樣、思ひがけなき此體は。

ト皆々不審の思入。木村、石川を介抱せんとする。石川こなしにて之を排け、目より流るゝ血を拭ひもせず俯向いてゐる。

市ノ正　察するところ、伊豆ノ守には、此且元をば殺さん爲に、お忍びあつたでござらうがな。

ト是れにて、石川顏をあげる。此間に一葉は消えたる燭臺に火を點す。

石川　いかにも御推量、その通り。此上は懺悔の白狀。武士の情け長門ノ守。貞政が口を開く前に、刀を貸せい、ヤイ重成。

木村　ヤア、血迷はれしか、伊豆ノ守。お家の前途危急の折から、私の恥辱に自殺などゝは、日頃に似ざる不覺の振舞。執事に對する慚愧ならば、なぜ其人の言葉を待たず、其上にて覺悟めされぬ。一旦の恥に死を急ぐは、女わらべの所爲でござるぞ。

ト是れにて石川落涙のこなし。

石川　市ノ正どの、生面下げて貞政が、貴殿に詫びん詞もなし。某眼ありながら、大野、渡邊の罠にかゝり、一國に貴殿を不忠と思ひ、今ン日お溜りにて無禮過言。剩へ誠忠無二の其胸を足蹴にかけし物體なさ。それさへあるに、此刻又、道軒が種々の內談。且元卑怯を粧ふは彌〻以て根深き企み。雷を怕れしなにがしが故智と知らぬか、淺墓なり、お家の大事旦夕と、恥かしめられて前後の思慮なく、此上はこよひを過さず、忍び入つて只一打ち、禍ひの根を絶たんものと、思ひしには似ぬ密談を、聞けば聞くほど忠心、義心。此身の不覺今更に、腸をきるゝ後悔の、くるしみをこらへかね。思はずも口ばしり、死におくれたる恥の上塗り。武運にも、弓矢神にも、見はなされたか。ヘッ、はづかしうござるわい。

ト男泣に泣く。

市ノ正　アヽ、あやうかりし。濟藏庭內に居合はさずば、あたら勇士をむざ／＼と、非命に失ふべかりし所。……それがしを疑はれしは、尤も千萬。疑ふも疑はるゝも、共にお家を思へばこそ。仇もなし、怨みもなし。願はくは、其忠烈をひるがへさず、ます／＼君の爲にお盡しあれ。ソレ手傷の手あてを。

ト是にて清藏は緣端に進みて、手水鉢を取りおろし、其水にて石川の目を洗はせる。一葉は手拭掛けの新しき手拭を取り外して清藏に渡す。これにて目に繃帶することなどあり。

木村　いかに伊豆ノ守どの、其慚愧は道理ながら、今は細節を論ずべき時にあらず。只最も懸念なは、市ノ正どののお身の安危。是れ取りも直さず、お家の存亡。某はこれより直さま立歸り、只今承つたる苦忠の段々、まッた極

内の一條を、密かに上聞に達し、君のお言葉を借り奉つて、御母公のお疑ひを解き、執事の御勘氣をなだめん所存。自然そこもとの助勢を得ば、此事成就の便宜多し。今棄つべき命存へ、死を以て御母公を諫められなば、執事に對する信義も立ち、お家に取りても大忠節。今死するに增す忠烈ならずや。いかゞでござる、伊豆ノ守どの。

石川 （思入あつて） いかさま、死を急ぎしは拙者があやまり。只今執事にさゝぐべき此一命を、暫く借り受け立歸り、忠良をさへぎり、君を惑はすアノ三奸を只一刀に、禍ひの根を相絶ち申さん。

ト奮然として氣込んでいふ。

市ノ正 粗忽なり、伊豆ノ守どの。御城内に血をあやし、騷動を厭はざらん程ならば、まつた其如き手だてを以てお家を救ふに足るべくんば、身不肖ながら且元。かくまで心を勞しませうや。必ず共にさやうな麁忽を……

トいひかけるを木村かぶせて

木村 イヤそのお氣遣ひは御無用でござる。重成、伊豆どのと心を合せ、必ず穩便に取計らひ、上のみこゝろ和ぐやうに。其吉左右はあしたを過さず。

ト且元思入つて

市ノ正 とはいへ大厦の覆るは、一木の以て支へがたし。衰ふる勢ひは、水の低きに……

ト獨語のやうにいふ。皆々覺えず

皆々。エ。

ト且元の方を見かへる。ト且元氣をかへて

市ノ正 いや、何事も天命でござるわい。

トわざと輕く言ふ。此模樣よろしく、靜かなる合方にて

―― 幕 ――

第四幕

第一場 豐國神社鳥居前

舞臺は一面の平舞臺、城内なる豐國神社鳥居前の體。上手に畫心に華表、正面にも上手下手にも玉垣。石燈籠澤山。華表の近邊に老杉の立木、うしろ樹木のカキワリ。華表の上手、奧深く玉垣折れ廻り居りて、後に舞臺半廻しになると隨身門の前になるやうの裝置。こゝによき處に毛氈を掛けた竹床几一脚。時は舊暦九月初旬午前。此日は例祭日の心にて道路に新藁が敷いてある。

上手より茶道珍柏、下手より大藏卿の局襠姿にて、椋鳥其他腰元二人をつれて出て來る。

珍柏　これは〳〵、よい處で早速にお目にかゝりました。實は最前からあなた樣をおさがし申してをりました。

大藏卿　オヽみづからも、けふのお影祭りの御趣向やら何やかや、談合したいことがあつて、そなたを尋ねてをりました。(トいひかけて腰元らを見返り) 先刻お表から銀之丞どのが、お供へ物をば御持參なされ、既にお廣前へおこしなされた。わしもやがて往くほどに、そなた達は先きへ行て、其お供へのお手つだひ。お掃除萬端、手落ちのないやうに頼みまするぞ。

ト是れにて椋鳥はじめ腰元等、會釋して、鳥居の內へ入る。大藏卿床几に掛け

さぞ待遠と思うたれど、イヤモ忙しさ、せはしなさ。(ト四邊へ思入あつて聲をひそめ) かね〴〵頼んでおいた事は、萬事首尾よう運びましたか。

珍柏　ヘイ〳〵、如才はござりませぬ。何がさて、遠くて近いは何とやらと申しまする。ましてアノ美男子の長門ノ　さま。おぼこさうに見えても、水の出ばなの蜻蛉どの。それに、內々許嫁の仲でもござりますとやら。此お二人の間の橋わたしなら、何もやゝこしいことはござりませぬ。必ず御安心遊ばされませ。

大藏卿　いやなう、それよりも、ソレアノ、市ノ正をば、改めてお召出しの事、まッた不意打の御詮の事、

トいひかけるをかぶせて

珍柏　それも如才はござりませぬ。木村長門さまのお執り成しで、明日お召出しになるげなと、先づ腰元の初章に申し含め、誠しやかに言ひ觸らさせておきましたゆゑ、必ず當人の耳にも、入つたに相違ござりませぬ。

大藏卿　さう聞いて安堵しました。そんなら又、いづれ後程。

ト大藏卿は床几を離れる。

珍柏　さ、お入り遊ばされませ。

大藏卿鳥居の內へ入る。珍柏四邊へ思入あつて

いかさま、國亂れて功名手柄。ひよんな行違ひが元となつて、大頭の角づきあひ。二疋の虎が嚙み合ふは獵師のほまちとやら。あちらでも珍柏、こちらでも珍柏と引ッ張り凧、うまい〳〵。

と傍らの床几へ腰をかけ、尙ほ何か考へ込んでゐる。此とき下手より蜻蛉好みの拵へにて、思案にくれたる思入にて、しよんぼりとして出で其まゝ鳥居へ入らうとする。珍柏ふと心附きて顏を上げ、蜻蛉を呼び止める。

珍柏　アモシ〳〵。蜻蛉どの〳〵。

トこれにて蜻蛉ふりかへり

蜻蛉　オヽ、珍柏とのでござりましたか。

ト會釋する。

珍柏　ア、よいところであひました、内々でこなたに知らせましたいことがあつて、先刻からこゝに待つてをりました。(ト蜻蛉の顔を見て)　さて〳〵わるい顔色。こりや何ぢやな、父御の御勘氣を苦勞にしてござるのぢやな。ハレヤレ、お氣の毒な。

蜻蛉　かたじけなうござりまする。此間から其事ばかりが氣になつて、夜もおち〳〵眠ませぬゆゑ、氣が遠うなつて、物體ないが上樣のお詞さへも聞えぬことがござりまする。シタガ喜んで下さりませ。木村長門さまのお執り成しで、明日は改めて、お召出し、お二方の御前にて再度のお調べがあるとやら聞きました。御前へさへ出るならば、もとより覺えなき身の濡衣、乾かす覺悟は父の心にあることゝ、少しは安心してをりまする。

ト是れにて珍柏わざと氣の毒がる思入あつて

珍柏　そのやうに喜んでござる親孝行のこなたの心を察しると、ア、どうも、いぢらしうてなりませぬわい。

ト横を向きて愁ひの思入。是れにて蜻蛉不審の思入。

蜻蛉　そりや、なぜでござりまする。

珍柏　(四邊へ思入つて、蜻蛉を手招きし、自分と一所に床几に掛けさせ)コレ、あまりこなたがいぢらしいゆゑ、極内で聞かせまする。誓文、必ず共にわしに聞いたといふことはなりませぬぞや。……ソノ明日のお召出しは、父御市ノ正どのゝ命の瀬戸ぢや。

蜻蛉　エ、。(ト驚く)

珍柏　サ、其驚きは、尤もなれど……(ト又四邊へ思入、蜻蛉の耳に口)ナ。……ナ。……長門ノ守樣のお執り成しは成就しても、御母公さまのお疑ひが解けぬからは：：(ト又耳に)ナ。……ナ。：：

蜻蛉　エ、。では父さまの出仕を待ち受け……

トいひかけるを「コレ」とおさへて小聲にて

珍柏　お長廊下で(ト手で切る眞似をして)……やるやう、七組衆へ内々のおいひわたし。何と怖ろしいことではないか。

蜻蛉　えゝ。それは定でござりますか。(珍柏うなづく〳〵)それが定なら、……ア、もしそれが定ならば、父樣の身の一大事。ともかくも此事をば、早う内へ知らせたけれど、此身も共に御嫌疑受け、今は大奧に捕はれ同然、少しも外へは出られぬゆゑ、知らせたうても籠の鳥。……ア、どうしたらよいであらう。……モシ珍柏どの、智慧を借して下さりませ。

トおろ〳〵する。

珍柏　サア、賴まつしやらずとも、どうにかしてあげたいは山々ぢやが、我々しきの力では如何もならぬ御諚意。

一寸一走り知らせる分は易いことぢやが、父御が御出仕なさらねば、お疑ひは募るばかり。おまけに御読意に背く科で必ずお討手、出れば（ト又切る眞似）……出ぬ時は討手が向ふ。どちらにしても命がない。……なれども、たんだ一つの力草は、ソレアノ深切な木村長門ノ守さま。あのお方は、聞けばこなたとは幼い時から許嫁の仲ぢやとやら。（ト是にて蜻蛉一寸はづかしきこなし）サヽ、おやによつて、木村様へこなたから、そつと文して頼ましやつたら、十が九つまでは助かる工夫。シタガ、今の事をわしに聞いたと、決して文には書くまいぞや。冥加の爲に人目を忍び、わしが必ず屆けて進ぜる。

蜻蛉　そんなら何とおつしやります。父上の大難を、助ける頼みの文使ひを、アノお前がして下さるとか、アノ長門さまへ内證で。

珍柏うなづく。此少し前上手奥より渡邊銀之丞出で來り、蜻蛉の居るのを見て思入。杉の木の蔭にかくれて立聞く。

エ、嬉しや、かたじけない。珍柏どの、此御恩は忘れませぬ。かたじけなうござりまする。……とはいふもの、料紙はなし。筆というても（ト思入あつて）此懷中の紅筆ばかり。エ、何としたらよからうなア。

珍柏　急場の用に品好みはいらぬこと。斷りはわしがいふ。紅筆でなとついさら〳〵と。時おくれになつては何にもならぬ。さ、早う〳〵。

ト捨ぜりふにてせき立てる。蜻蛉おど〳〵して、無言にて懷中より紅筆と疊紙とを取出してこなし。

蜻蛉　成程、アノ長門さまに頼んだなら、日頃から親切なお心立……（トいひかけて思入）シタガ此間のお執り成しのお禮やら、あすの難儀の仔細やら、エ、マどのやうに書かうやら。

珍柏　エ、もどかしい。寸善尺魔ぢや。さゝ早う〳〵。

ト是れにて蜻蛉こそ〳〵に書くことよろしく、やがて、一枚を書了はり、二枚目を書き、宛名を書く。銀之丞始終を立聞きて、腹の立つこなし。

蜻蛉　エ、鈍な。ツイ父上樣と書いてしまうた。

珍柏　ホイヤレ。今度は長門ノ守樣を忘れまいぞ。あわてまい〳〵。

ト蜻蛉書き損れたのを引裂き、別に又一枚書き直すことよろしく、此途端銀之丞つゝと走りいで、出しぬけに横合から文と一しよに蜻蛉の持つてゐる全紙全部をひつたくる。蜻蛉驚き、それを取り返さうとする。此少し以前上手奥より椋鳥出かゝりゐり、銀之丞のこなしを見て悋氣のこなしあり。此時同じく走り出で、手早く銀之丞の持つたる文を奪ふ。銀之丞之を取り返さ

うとする時蜻蛉も絡み、三人ごつちやになつて爭ひ、トヾ椋鳥は華表の内に走り入る。蜻蛉それを追ふ。舞臺半廻しになる。銀之丞も追はうとする。珍柏之をとどめ、一寸立廻り銀之丞珍柏を手荒く突倒し、蜻蛉のあとを追ふ。

第二場　隨身門前

一面の平舞臺。上手寄に朱塗彩色の隨身門。上手下手共に玉垣、其奥木立。其前に澤山の石燈籠。下手に奧深く前の場の華表見える。よき處に毛氈を掛けたる竹床几。爰へ蜻蛉に追はれて椋鳥逃げ來る。これより文(ふみ)をカセに、椋鳥、蜻蛉、銀之丞倚ほよろしく立廻ること。ト下手鳥居の奧より、梶の葉、小車先きに立ちて案内し、腰元二人淀君の茵などを携へて附添ひて出る。其のあとより淀君小袿(こうちぎ)、緋の袴、下げ髪禮服、そのあとより正榮尼、饗庭の局等、いづれも參詣の禮服にて腰元大勢をつれて出る。立廻つてゐた三人のうちの椋鳥覺えず梶の葉に突當る。（花道が式の如くならば、揚幕より出るもよし）

梶の葉　控へませう。

小車　御前でござりますぞ。

　ト是れにて三人驚きて、ほぐれ、最初正面奧へさがり、淀君の一行が上手へ進むにつれて、三人共下手へ入り代り、平伏する。文(ふみ)は一枚半だけ椋鳥の手に殘り、二枚目の前半分だけが蜻蛉の手に殘る。蜻蛉は淀君の一行を見て、あわてゝ文(ふみ)のちぎれを呑込むことあり。淀君三人を尻目にかけて立留る。梶の葉氣色を伺ひて、腰元の持參せる茵を床几へ掛ける。淀君それへ腰をかける。此間皆々しばらく無言。正榮尼思入あつて、銀之丞を睨み

正榮尼　ヤイ銀之丞、それへ出い。日頃格別のおぼしめしを以て、みゆるし蒙り、其方(そち)ばかりは大奧へも自由の出入(じゆ)(にふ)。それゆゑ、取りわけて此母が、嚴しう庭訓(ていきん)も致しおいたに、只今の振舞は、何といふ無作法千萬。アノこゝならつけものめが。

　トわざときつくいふ。

銀之丞　さうわしばかりを叱らしやるのはもぎたうおぢや。折角わしがあの文(ふみ)をとつたものを、アノ椋鳥めがひよつこりと出て來をつて、横ばんを切りをつたによつて、それでおれが……

　トいひかけるを正榮尼かぶせて

正榮尼　又しても口答へ。たとへ他人が何をしようと、そちまでが一つになつて、狂人狂へば不狂人も、同類の科はのがれませぬぞ。殊に嚴重な大奧で、文(ふみ)といふ詞閑捨

てにはなりませぬ。文とは何ぢや、きり／＼言や。

銀之丞　サイノ、あの蜻蛉が木村長門ノ守の處へ、何ぢや知らんが、内證の文をやらうとしてゐをつたゆゑ。おれがそれを引ッさらうて、讀まうとすると、アノ椋鳥めが出て來をつて……

椋鳥　イエ／＼、それはこしらへ事でござりまする。銀之丞さまと蜻蛉どのとが、眞赤になつて絡みあうて、文のやりとりしてござつたゆゑ……

銀之丞　いゝや、そりや嘘ぢや。おれや文をやつた覺えはない。

椋鳥　覺えがないといはつしやつても、これ此通り現の證據。（ト持つてゐる文の裂れへ思入）

銀之丞　そりや蜻蛉が書いた文ぢや。

椋鳥　何の、お前が遣らうとしてござつた文ぢや。

銀之丞　嘘をつけ、此鼻赤め、もう一度ぬかしをると、切つてしまふぞ。

ト銀之丞突立ち、脇差の欛へ手を掛ける。正榮尼これを見て

正榮尼　御前ぢや。控へをらぬか。

トきつといひ、よろしくこなし。これにて銀之丞しぶしぶ下にゐる。此間淀君は始終蜻蛉を尻目にかけて思入よろしく

淀君　ハテ、銀之丞の生得は、今更の事ではない。打捨てておいたがよい。……只聞捨てになりがたいは、銀之丞の詞の端。長門ノ守への密書とやら、……蜻蛉、そちやそれを存じてをるか。

ト是れにて蜻蛉もぢ／＼してゐる。饗庭の局よろしく蜻蛉へ思入ありて

饗庭局　御前さまのお尋ねぢやに、何をもぢ／＼。他人の身を思ふも、場所と折とによる事。つい斯う／＼と打明けて、正直に申さぬ時は、却つてお疑ひがかゝりまするぞ。サ、早ういや。……どうしたものぢや。……但しは長門さまへの密書とやらを、……よもやそもじが認めはしやるまいがの。

ト饗庭こなしあつていふ。蜻蛉なほ默つて俯向いてゐる。淀君見て

淀君　只一言の答へもせぬのは……ともかくも證據の文を……正榮尼。

正榮尼　ハ、ア。……コリヤ椋鳥、其文をこれへ。

椋鳥　はい／＼。はい、これでござりまする。あッちこッちとばひあふうち、臺なしにしてのけました。此殘りの半分は、蜻蛉が持つて居ります筈。

ト席を進み、持つてゐる文一枚半の皺を引延しつゝ正榮尼へ渡して退る。正榮尼受取りて尚ほ皺を伸しなが

ら

正榮尼　エヽ「天にもそもじ様より外にすがりまゐらする」（ト讀みさして）此あとの一くだりは臺なしに揉みやられて、字の形がわかりませぬ。……エヽ「何事もく〳〵よるべなき身のはかなさ……不便とおぼしめされ候うて……（ト讀みかけて）又汗でやらにじみまして、文字が朧氣になつてをりまする。……エヽ「人目を忍び……エヽ……申すこともあとゝ先き」……其あとも讀めませぬが、宛名はたしかに木村長門ノ守様とござりまする。……恐れながら御覽もや。

ト正榮尼文を淀君へ渡す。淀君受けとりてつく〴〵見て

淀君　かばかりでは、文の心が、まだ何事とも覺束ない。……饗庭、蜻蛉が持つたる殘りをも、取上げて調べて見や。

饗庭局　ハツ。畏まりました。……コレ蜻蛉、御前樣の再度のおしらべ。日頃そもじが物堅いのを御承知なりやこそ押返してのおたづね。たとへ如何様の密事たりとも、包まぬが其身の爲。サ、文の殘りを爰へ出しや。サ、ここへ。……

ト是れにて蜻蛉じゆつなきこなし。持つてならぬと、こなしにていふ。

ナニ、ない。何の無いことがあるもので。（ト思入）それでは若しや、ばひあふはずみに、風にでも吹き飛ばされたといやるのか。

蜻蛉　イエ〳〵、吹き飛ばしは致しませねど、ついうろたへて嚙みしだき……（ト泣き聲になる）

饗庭局　ナニ、うろたへて、アノそなたが。

蜻蛉　ハイ、……つい呑込んでしまひました。

ト蜻蛉泣伏す。淀君、正榮尼不審の思入。饗庭は取り成しに困りし思入。此時上手にて

大藏卿　其御詮議は御無用。證據はこなたにござりまする。

ト以前の大藏、珍柏を引立てゝ出で來る。

密々にて文使ひの役頼まれしと、これなる珍柏が正しき白狀。長門ノ守と蜻蛉とは兼て内々にて許嫁とやら承はりましたが、とうに懇懃な仲おやとは、只今聞きましたがはじめて。それこれ思ひ合せますれば、長門ノ守が昨今の執り成し三昧には、深い仔細のあることゝ存ぜられまする。

ト是にて蜻蛉はびツくりしたるこなし。覺えず膝を進めて

蜻蛉　ア、申し、お局さま。思ひもよらぬ其言葉。何を證據にそのやうな、御無體なことをおつしやりまする。懇懃とやら、仔細とやら、夢さら覺えのないことをば……

トいひかけるを大藏かぶせて

大藏卿　しら〴〵しい其言ひ譯。現在頼まれぬしの珍柏を、鼻の先きにすゑておいて、ようそのやうな事がいはれたもの。コレ、お茶道、最前白狀した通りを、御前にて申し上げませい。

珍柏　ヘイ〳〵。大藏の局さまの淨玻璃の鏡にかゝり、見顯されましたからは、もう何もかも申し上げまする。ヘイ、アノ蜻蛉どのが、ぜひ一度長門ノ守に逢はせてくれ、もしそれが叶はずば、せめて此文なりと、人知れず屆けてくれいと頼まれまして……

トいひかけるを蜻蛉あわてゝ

蜻蛉　アコレ〳〵、おそろしい嘘いふまい。成程文は頼んだに相違なけれど、いつ逢はせてというたぞいの。

珍柏　サヽ、怨まつしやるは尤もなれど、脊に腹はかへられぬ。こなたも叶はぬ處とあきらめ、お咎めの酷うないやう、コレ、早うお詫びなされ、おわびなされ。

蜻蛉　アレ又してもそんなことを。いつわたしがそんなことを。

珍柏　ハテ、最前お鳥居前で、ソレ、紅筆で疊う紙へ、內證の文を書かつしやつた其前に、久しう逢はぬ故、どうぞして逢ひたいと思へども、儘にならぬ籠の鳥と……

トいひかけるを蜻蛉又かぶせて

蜻蛉　それは父樣の事をいうたのぢや。長門さまの事ではない。（トおろ〳〵聲にていふ）

珍柏　いや、そればかりではない。ほんに長門さまは好い男ぢやと目を細うしていはつしやつた。

蜻蛉　何のわたしがそのやうな……

ト泣く〳〵いひかける。トタンに銀之丞突立ち

銀之丞　いゝや、言うた〳〵。深切なお方ぢやと言ひくさつた。おのれ、どうしてくれう。

銀之丞悋氣のこなし、蜻蛉に掴み掛らうとする。ト椋鳥も同じく悋氣のこなしにて、覺えず立上つて銀之丞にむしやぶりつかうとする。梶の葉は銀之丞を、小車は椋鳥をおさへる。

正榮尼（銀之丞を睨みつけて）又しても〳〵、愚か者めが。そちの出る所でない。控へをらぬか。

ト是れにて淀君思入あつて

淀君　椋鳥、銀之丞が糺明は追つての事。梶の葉、小車。そちたちは兩人を引立てませい。

梶小　ハヽア。

ト梶の葉、小車は銀之丞と椋鳥を引立てゝ下手奥、鳥居の方へ入る。淀君は何にも無言にて蜻蛉の樣子に目を附けてゐる。

饗庭局　恐れながら御前樣、これには何か込入つた深い仔

細がござりませうやうに存ぜられまする。……蜻蛉も不束千萬。善惡共に明白にならぬ時は、親達にも長門殿にも、ます／＼御嫌疑の加はる道理。何事も包みかくさず、サ、有りのまゝに申し上げませい。

トこれにて蜻蛉こなしあつて

蜻蛉　きびしい御法度を存じながら、お表の御ン方へ、内内にて文の便り、今更申しわけはござりませねど、ゆめゆめ不義ではござりませぬ。最前はからずもお鳥居前にて、お茶道から初めて聞きましたお表の御模樣。父且元を明日改めてお召出しは一命にかゝる身の大難。不意にお廊下にてお討取りあらんず手配りと、聞いてびッくり、途方に暮れてをりましたを、お茶道がいろ／＼慰め、長門樣へ頼んだなら、助かるすべもあらうとの事。嬉しさに、前後の思慮もあらばこそ、ついお掟を打ち忘れ……

トいひかけて泣く。

大藏卿　テモマ、つべこべと、しら／＼しい言ひぬけやう。證人は珍柏ばかりか、現在アノうつけの……イヤアノ内氣な銀どのも其證人。第一、市ノ正を不意討ちの御上意などゝは、けしからぬ當推量。珍柏、そちや其樣なことを蜻蛉に申したか。

珍柏　滅相な、どうしてさやうな根もない事をば。

蜻蛉　や。ではこなたは、わしにいつはりをおしやつたのぢやな。

珍柏　ナニ、こなたにいつはりを。さういふこなたこそ言ひがゝり。恩を仇で返さうでの。さうとは知らず、長門樣に焦れてござるのがいぢらしさに、御法度を犯いてまで、首尾してあげうと思うたに。テモマ、顏に似ぬ怖ろしい人ぢやなア。

蜻蛉　エヽ。すりやだましたのぢやな。……だまされたのかいなア。……情けない目にあうたわいなア。

ト泣く。淀君思入あつて

淀君　市ノ正を召出だし、再吟味云々とは、自らさへ聞かぬ噂。まして不意討ちの上意とやら。まことゝは思はれぬ。よし假にまことにもせよ、蜻蛉が言ひ譯はみづからが心に落ちぬ。さほど潔白な心なら、なぜ文のちぎれを呑下し、詮議の手蔓を失はせましたぞ。其返答をば聞きませう。

大藏卿　まことに御前樣の仰せの通り、それが勘文の聞き所でござります。（トいひつゝ淀君に會釋して席を立ち、ずつと蜻蛉の傍へ行きて）サ、なぜ文を呑込みました。サ、それを聞きませう。（蜻蛉だまつてゐる）エヽもどかしい。コレ、なぜ言ひませぬ。……エヽいはぬとあらば。

ト立ちながら蜻蛉の肩に手をかけ、手づよくこづく。

饗庭局見かねて中へ入り、こなしあつて

饗庭局　ア、モシ、暫く。まだ科人といふではなし。殊にはお腰元の女中ながら、執事市ノ正が娘。お折檻は、ちとお短慮でござりませう。

大藏卿　これは又異な御差閙。科人でないとはいはさぬ。最前から幾たびも、アノお茶道が申したことをば、なんぼ御贔屓のお耳にも、よもや聞えなんだとはいはれぬ筈ぢやに。

饗庭局　サア、そのお茶道の白狀とやらが不審の第一。其折其場に居合せしは、天にも地にも銀之丞どのと稼鳥ばかり。そもじ樣は御寶前のおかゝり。いさゝかのお暇さへもなかつた筈。何を手蔓にお茶道の御糺明をなされました。天眼通なら知らぬこと、お手際過ぎてわたくしには、どうも合點がまゐりませぬ。

トきつといふ。大藏卿つまる。

珍柏　イヤ其儀は全く斯樣な次第。……銀之丞どのゝ悪戯によつて、事露顯と存じました故、後悔いたし、わたくしめが白訴いたしたのでございます。

饗庭局　なるほど。（ト冷笑しながら）それにしては最前の問はず語り。大藏のお局の浄玻璃の鏡にかゝり、見顯されたといやつたは。

珍柏　ニ。

饗庭局　ありやお局への追從かいなう。あんまり辻褄がよう合ふので、思はずをかしうなりますわいなう。ホヽヽヽヽ。

トやはらかにいつて輕く笑ふ。大藏卿、珍柏は顏をそむける。淀君思入あつて

淀君　饗庭が詞も一理あれど、蜻蛉が不しだらは、きつと詮議せにやなりませぬ。……此文を見やれ、よし許嫁の内約はありとても、たゝう紙へ紅筆の走り書き、世の常ならぬ仲でなくば、かうした文はやれぬ道理。さなくも掟ををかせし罪。此儘には濟まされませぬ。シタガ、折も折、けふあしたは、豐國明神の御例祭、寶前間近で詮議もいかゞ。ハテ何としたものであらう。（ト思案の思入）

饗庭局　恐れながら、何とぞ蜻蛉をば、わたくしにおあづけなされて下さりませ。いづれとも明白に、必ず白狀いたさせまする。

ト此時、下手より腰元一人出て來り

腰元　ハツ。申し上げまする。お表より大野親子の方々、至急言上の筋ありとて、大奥へ參入にござりまする。いかゞ取計らひませうや。

淀君　おツつけあはうといや。

腰元　ハ、ア。

ト引返して入る。

淀君　饗庭、さらば、蜻蛉は、そちにあづけておきまするぞ。……思はぬことにて暇(ひま)入り。ドレ、參詣をしませうわいの。

ト淀君床几を離れる。正榮尼、大藏卿は蜻蛉を尻目にかける。饗庭局は氣の毒だといふこなし。此模樣よろしく

――幕――

第五幕

第一場　渡邊内藏介邸

舞臺は一面の平舞臺、正面四間銀地墨繪の襖、上下折廻して同じ襖。正面の襖は、後に開けると、そこが玄關の體にて、大きな對立の裏面見ゆる。此對立の下手より出入することあり。時計の音にて幕あく。ト上手の襖を手荒く開きて銀之丞着流し、病中の體にて鬢髮を亂し、手槍を持ち、驅けいで、正面の襖を開きて、玄關へ驅け出さうとする。乳母おとら（五十位）之をとめながら、續いて出る。銀之丞が開ける時、玄關の襖一枚はづれて倒れ、其儘になつてゐる。

銀之丞　いやぢや／＼。

とら　アヽコレ、あぶない／＼。コレサ、あぶない。……マア、またつしやれ。またッしやりませ。

銀之丞　はなせ／＼。おれや珍相を突殺いて、蜻蛉が敵(かたき)を取るのぢや。

とら　サア、尤もぢや／＼。今の話を聞かッしやつては、くわつともなさらう、氣ものぼらうが、今お茶道を殺したとて、お前の願ひが叶ひはせぬ。まだいふことがある程に、マア、またつしやれ。マア、あぶない。

ト捨ぜりふにて、やうやく銀之丞の手槍をもぎとり

エヽモひあいな。わしや胸がでんぐりかへつた。ほんにお武家の血統と云ふものは、怖いものではあるわいの。

銀之丞　乳母(うば)、おれや悲しい／＼。悲しいわいやい。蜻蛉がお死にやるなら、おれも一しよに死んでしまふ、死んでしまふ。

ト足ずりして泣く。

とら　譯もないことをいはッしやりますな。ついわしの口が辷つてひよんなことになつてしまうた。成程、今もいうた通り、蜻蛉どのは無實のお咎めを苦に病んで、きのふけふは、きつう煩らうてござるげなが、かほそうても若い身そら、何の／＼、お死にやりはせぬ。

銀之丞　煩らうては死なぬまでも、珍相めのわるだくみ

で、あゝしたお咎めをお受けやつたからは、蜻蛉は謀叛人のかたわれ。迚も最早一しよにはなれぬ。思ひ切れ思ひ切れ」と、おのし、今いうたではないか。

とら　サア、お前までが病氣になり、ふさいでござるがいぢらしさに、ついうッかり口がすべり、ひよんな仕儀にしてのけたが、それほど思ひ込んでござるなら、きッと乳母が添はせます。何の、きのふけふにお死にやりはせぬ。お茶道のわるだくみも、元を糺せば大藏樣のさし金。木村樣を罪に取つて落さう爲の、根も葉もない拵へ事。なりや、お咎めさへゆりたなら、緣談には故障はない筈。

銀之丞　いや／＼、今おのし何とか言うた。蜻蛉は、アノ長門ノ守と許嫁ぢやと言うた。すれば、お咎めがゆりたとて、おれは迚も一しよにはなれぬ。アヽ、おれやもう最そ死んでしまふ。

ト銀之丞だしぬけに落ちて居る槍を取り上げて自害しようとする。おとら驚いて之をとめて

とら　エヽ、滅相な。あぶない／＼。マヽ、はなさつしやれ。あぶない／＼。

銀之丞　いやぢや／＼。はなせ／＼。

とら　マヽ、はなさつしやれ／＼。（ト槍をもぎとり）わしが附いて居るからは、どうにかして、お前の願ひを叶へまする。大藏樣に楯突くは、御殿中で、こちの後室樣より外にはない。母御樣と片桐樣とは、お前の緣談の事以來、仲違ひしてはござれども、お前の命にはかへられぬ。わしが賴んで母御樣に、片桐樣親子の衆の執り成しさせ、それを恩に再度の緣談。必ずお前に添はせまする。安心してござれ、安心してござれ。

銀之丞　そりやほんまか。騙すのではないかや。

とら　何のわしが騙しませう。きッと請合うた。マア／＼奥へ仕つてござれ。必ず短氣を出さつしやるなよ。

銀之丞　きッとぢやな。嘘いふと、おれや死ぬぞや。

とら　エヽ、又しても死ぬ／＼と、緣起でもない。鶴龜鶴龜。

ト此うち銀之丞上手の元の襖の中へ入る。おとら見送りてホッと息をつき、槍を玄關の方へかたづけながら

とら　ほんに色戀ほど怖いものはない。先殿樣のお情けで、お手討ちになるのを助かり、去年ゆかッしやれた連合ひに、連れ添ふことが出來なんだら、とうに命のなかつた此身。

ト云ひさしつゝ、倒れてゐる襖を元の通りにすることありて

それを思へば和子樣が、水の出ばなの無分別、二言目には死ぬ／＼といはッしやるのも尤も至極。つい此間までは、子供衆ぢやと思うて居たに、もう世心。ほんに月日

は早いものぢやなア。

ト此時下手の襖をあけて正榮尼出る。

お丶後室様。いつお歸りでござりました。

正榮尼　お丶、さがつたは今の先き、最前よりのあらまし、物かげで聞いてゐました。いつも變らぬおのしの眞心、改めて禮をいひますぞや。

とら　物體ないことおつしやりませ。私共がどのやうに氣を揉みましても、上々様は下様とはちがひ、何事にも御遠慮が多いゆゑ、いとほしや和子様が、けふ此頃のおわづらひ。いつそいぢらしうてなりませぬわいなア。

と泣く。

正榮尼　あれほどに焦るゝもの、めをとにさせたいと思ふ氣は、わしとても同じこと。が、まゝならぬは世の成行き。お家にふた心の執事片桐、所詮これは叶はぬ緣。

とら　サア、そのやうにおつしやりますが、若し此御緣が叶はぬ時は、和子様の命はない。ほんに〱思ひつめ、日ましに段々痩せさつしやります。器量なり、品格なり、どこに點の打場もない立派な若様でござらつしやるに、世間ではともすると、足らはぬやうに言ひますげな。それといふのも畢竟は、戀わづらひから起つたこと。ついこんなことが基となり、若死なされう前表かと、思へば悲しうござりまする。モウシ後室さま、どうぞ和子様のお願ひをば、叶へて上げて下さりませ。あなた様のお執り成しで、つい濡衣が乾いたなら、親心は皆一つ、恩義には勝てぬゆゑ、何ぼ我強い執事さまでも、二つ返事で靡かしやりましよ。又二つに御殿中へ阿呆々々と言ひ觸らした大藏様のわるたくみの、邪魔してやりたうござります。モシ後室様、拜みまする。叶へてあげて下さりませ。

トおとら泣きながらくどき、よろしくこなし、此間正榮尼も涙をぬぐふこなし。

正榮尼　身腹いためた親ぢやもの、銀之丞が今日びの素振に、氣が附かいで何としませう。生得愚昧と人にはいへど、まさか是れ程でもなかつたと、思ふたびに愚痴になり、これも誰ゆゑ元はといへば、アノ蜻蛉が事からと、怨めしうもあり、憎うもあれど、我子の命の綱と思へば、嫁にしたい心も山々。なれども謀叛人の娘なりや、所詮出來ぬ此緣談。去るものに日々に疎し。あぢよう騙して萬一にも、ひよんなことのないやうに。

ト此時銀之丞又上手の襖をあけて走り出て、乳母にとりすがりて泣く。わんぱく子のこなし。

銀之丞　蜻蛉と一しよになれずば、おれやどうあつても死ぬる、死ぬる。母さまが成らぬといはッしやるからは、蜻蛉はきッと死にやる。蜻蛉がお死にやるなら、おれも

死ぬ、おれも死ぬ……乳母どうせう。どうせうぞいやい。

とら　マヽ、よい〱、ようござる。わしがあぢよう頼むわいの。必ず短氣を出さつしやりますな。何のまだ、お母様か、成らぬとおつしやつた譯ではない。

銀之丞　いや〱、今聞いてゐたら、否ぢや、成らぬ、と言はッしやつた。どうせう〱。

ト泣く。

とら　ナア申し、後室様、コレ、此通りでござりますぞえ。御遠慮外ながら、身腹痛めたあなた様より、十八年か其間、晝夜さらずお傍にゐる乳母が見た目にちがひはない。去るものは日々に疎しとは、薄情な下世話。一心に思ひ込んでは、忘らるゝものではない。モシ、やがて孫はせうとなと言うてあげて下さりませ。コレ和子、お前もぢかにお母様に、サ、頼まつしやれ頼まつしやれ。

ト銀之丞を、涙に暮れて俯向いてゐる正榮尼の膝へ押し遣る。銀之丞すぐ其膝にすがりて

銀之丞　ナア母様、叶へてくだされ、叶へて下され。……叶はずばおれや死ぬぞや。

ト正榮尼の顔を見あげ、泣きながら其膝をゆすぶり、トヾ駄々ッ子のこなし。此時奥にて

侍　殿さまのお歸りでござりまする。

ト呼ぶ。正榮尼これなしほに

正榮尼　ソレ、内藏殿のおさがりぢや。目に附いて叱られまい。萬事は後ほど。サヽ、奥へ〱。

ト正榮尼おとらへこなし。おとら銀之丞をなだめすかして上手の襖の中へ入る。正榮尼じつと思入。此時玄關より渡邊内藏ノ介入り來る。

内藏介　母上、只今さがりました。

正榮尼　オヽ、内藏殿か。きつう遲うござつたの。シテお表には別條ないか。

内藏介　されば、今ン日下城の途中、仔細あつて木村長門と數刻の密談。彼れが申す所によれば、成程、市ノ正が振舞は、一概にふた心とも存ぜられず。むしろ疑はしきは大野親子が胸中。よく〱思慮を廻らさずば、お家のお爲を存じながら、却つて大事を誤るおそれ。御賢慮如何にござりまするな。

正榮尼　大野親子が心底は、わしもとうから快からず、油斷ならずと思うてゐれども、市ノ正が底意とても、滅多に心はゆるされませぬぞ。長門ノ守は彼の人と取りわけて懇意の中。よし同腹でないまでも、同じ眼鏡で見る黒白。うつかりあてにはなりませぬぞ。

内藏介　仰せまでもござりませぬ。自分もさやう存ぜしゆゑ、數刻に亙る激論にて、ほゞ市ノ正に野心なきをば

トいひかけて

我が家ながら、こゝは端近。

正榮尼　成程、委細の事は奥の一間で……

内藏介　先づお入りなされませう。

ト二人ともに立ちあがる。此見得よろしく、幕。合方にてツナギ、道具出來次第に引返す。

第二場　饗庭の局部屋

舞臺は一面の平舞臺、上手寄りに一間の黒框の床の間、其上に料紙、硯箱、つゞいて一間の違ひ棚、地袋、其次ぎ一間は杉戸、そこより前へ直角に折れて三尺は白壁、一間は例の繧子ばりの障子、出入り有り。其外は長廊下の心にて、欄干の向うに奥庭の書きわり。そこに鐵網行燈、すべて局部屋の體。ずつと上手やゝ斜に二間の間は襖、中央二枚は開けてあり、其中に蜻蛉病氣の體にて六曲屏風を立て、寢衣姿、やつれたる體、敷蒲團を敷きて坐り、夜被は疊み返してあり。よき處に火鉢、鐵瓶かゝり、其側に、盆の上に藥茶碗、藥土瓶など。前の幕（鳥居前）よりは七日ほども經たる心、時刻は今の四時過。上手の襖近くに腰元錦木、花野、病氣見舞に來たる體にてよろしく住ひ、此見得にて幕あく。

錦木　そのやうにくよ／＼と、思ひ過しをしやしやんすと、どうしても體に障る。心だに誠の道に叶うたなら、祈らいでも神や守らんたらいひますわいな。必ずきな／＼思はしやんすな。

花野　ほんにさうでござんす。お前の清淨潔白は、みんなよう知つて、笑止がり、定、これは大藏さまの差し金で、お茶道の仕組んだことゝ、いうてゐぬものはござんせぬ。

錦木　それにつけても、憎體なは大藏さま。陰ではげおげおのやうに惡口いうても、手が出されぬは、上樣のお覺えがめでたいゆゑ。

花野　それに又正榮尼樣の憎てらしさ。つむりばかりは丸うても、意地くねのいがんだ……

ト いひかけるを蜻蛉おさへて

蜻蛉　ア、コレ、粗忽いはしやんすな。聞えまいものでもない。人を怨まうより身を怨めと、日頃父さまの御教訓、思へばみんなわたしが不束。さら／＼人樣に怨みはなけれど、只悲しいは、いつまでも不義密通のお疑ひが、かかりやつながる父さまゝで、また一倍のおにくしみ。わしやそれが悲しうて、いつそ死んでしまひたい。

錦木　アレマ、又しても泣かしやんす。お前はほんの災難ゆゑ、今に饗庭樣のお執り成しで、ツイ濡衣は乾かう程に、安心してゐやしやんせ。オ、うか／＼と長話。丁度大藏さまが上つてぢや。見つけられたらやかましからう。

花野　ほんにさうで有つたもの。蜻蛉さん、折角大事に。
ト捨ぜりふにて錦木、花野障子の外へ出ようとする。途端正榮尼下手より出て來り、障子に近づく。二人は今の噂を聞かれたかと驚きたる思入、會釋もそこ／＼に下手へ逃げて入る。正榮尼、二人を送るとて立上つてゐた蜻蛉と顔を見合せる。蜻蛉ぎよつとした思入。以下始終おど／＼する思入、こなし。
正榮尼　オヽオ、鹽梅がわろいとやら聞きましたが、ほんにちッとの間逢はぬうちに、きつう面やせて、オヽオ、やつれさつしやつたことわいなう。
ト やさしくいふ。
蜻蛉　これは／＼尼御様、ようおいで遊ばしました。折わるうお局はお留守ながら、又此やうに取亂してはをりまするが、まア／＼お入り遊ばしませ。
ト正榮尼を請じ、急ぎ寢床を方附けようとする。正榮尼それをとゞめて
正榮尼　アヽかまやんな／＼。起きてゐては病氣にさはろ。遠慮なう臥床へ／＼。……實は折入つてそもじに話したいことがあつて、それゆゑ、わざと、お局の留守をば承知で來ましたのぢや。
ト上手よき處にすまふ。蜻蛉は下手よき處にすまふ。
蜻蛉　エ。アノそんなら、わたくしに。
正榮尼　オイナウ。（ト一寸思入あつて）いつぞやは不慮の災難、聞きませば、全く覺えのない濡衣さうな。今にお疑ひが釋けぬゆゑ、嘸かし苦勞をしやるのであろ。シタガ、善惡とも、天知る、地知る。人鬼はない世の中。氣づよう思うてゐやるがよいぞや。
蜻蛉　御しんもじの其お言葉。ありがたうござりまする。
ト横を向きて涙をかくすこなし。すべて感じ易くなつてゐるといふ思入。
正榮尼　そもじの心の潔白を、たが察せいでなりましよぞいなう。わしも、當座こそは疑うたれ、仔細あつてツイ今がた、そもじの父御の忠義の入り譯、まッた此間の事の起り、しみ／＼聞いて疑ひ晴れ、どうがなしてそもじ親子の人達を、あぢようお上へ調停して、まるう事が治めたさ。それゆゑわざ／＼來ましたわいなう。
蜻蛉　エヽ、それはマアお嬉しい。ガ、マ、そりやほんの事でござりまするかえ。
正榮尼　此子とした事が、何のマア噓いつはりを言ひませうぞ。父御市ノ正どのは、平生から律儀一偏、正直が過ぎるゆゑ、みづからを侮るかと御母公さまのお僻み。それが元のお憎しみ。今とても我を折つて、事を分けてお詫びせば、釋けるも早い女儀のお心。殊には傍から此尼がよいやうに執り成せば、十に八九は御勘氣御免。とは

思へども、爰に一つの妨げは、例の大野親子。どういふ企みがあつてやら、市ノ正どの出仕あらば、不意討ちにせんお手配りと、根も葉もない事を言ひ觸らし、それが又父御に聞え、其後はまことのお召があつても、所勞といひたて、けふまで出仕の模樣なきゆゑ、ます／＼お疑ひは募るばかり。此儘に日を經なば、そもじたちの不爲ばかりか、お家の爲にも不祥のはじまり。さりとて出仕を吾々から、勸めても疑心暗鬼、あやぶみ疑うて聽かッしやるまい。しんぞ疑はぬは親子の中。そもじの筆で此譯を書きしたゝめ、片時も早う大奥へ、お詫びの爲に出頭あるやう、こま／＼と勸めやつたら、子に引かさるゝ親心、我も偏屈も折れようわいの。それより外にそもじたちを助ける術はない程に、早う其支度をしたがよいぞや。

蜻蛉　かたじけない其おさしづ。なんとお禮を申さうやら、有難うござりまする。父市ノ正の御勘氣ゆり、元の通りになりましたなら、どのやうにもして此御恩に……

　トいひかけるをとめて

正榮尼　ア、コレ、何のいたう。深切は相身たがひ、何の報いに及ばうぞいの。……が、それ程までに喜んでたもるなら、たつた一つ尼が頼み。かういへば、どうやら恩に着せるやうなれど、恥をいはねば理が聞えぬ。次男の銀之丞、三年前からそもじをば、一圖意に思ひ染めて、戀ひ焦れ、夢にも現にも、只そもじの事ばかり。果は氣ぬけのやうになり、阿呆よ、うつけよと世の人に、言はるゝ子より此母が、胸ゑぐらるゝ悲しさ、無念さ。願ひを叶へてやつたなら、少しは心も落ち着こかと、父御市ノ正どのまで言ひ入れし、其緣談の破れてより、日増しに募るあれが病ひ。蜻蛉どのと一しよになれずば、死ぬる死ぬると口癖が、ツイ前表にならうかと、先きを案じる親の愚痴。せめてやんがてめをとにすると、たつた一言聞かせたさ。コレ、蜻蛉どの、魚心あれば水ごゝろ、尼も父御やそもじの爲に、どのやうにも肝煎らう。たつた一言緣談を、得心ぢやというてたも。拜みます。どうぞ唯というて下され。……

　蜻蛉じゆつなきこなし。俯向いて默つてゐる。

コレ蜻蛉どの、どうぢやぞいの。……おしだまつてゐやるのは、不得心でござるかいの。……エヽ、モこれほどまでに事を分け、恥を打明けて頼んでも、返事のないは不承知ぢやナ。

　ト正榮尼ムッとしたる思入。

蜻蛉　ア、モシ、さうではござりませねど……

正榮尼　そんなら聞いてたもるかいの。

蜻蛉　サアそれは。

正榮尼　銀之丞を助けてたもろか。
蜻蛉　サアそれは。
正榮尼　エヽモ、もどかしい。いやならいやでよいわいなう。
　ト腹の立つ思入。
市ノ正とのを執り成せば、大野親子の人達と仲たがひは知れてある。こりや思案せにやなりませぬわい。（ト思入あつて、皮肉に）イヤノウ蜻蛉どの、ひよんな事をツイいひ出し、もし氣にさはつたらば、ゆるしてたもや。今いうた事は皆水々。水に流せば心はもう／＼。……邪魔しました。
　ト正榮尼立上るを蜻蛉あわてゝとめて
蜻蛉　アヽモシ、尼御前さま。マア／＼待つて下さりませ。
正榮尼　待てといやるは、今の事を承知かいの。
蜻蛉　（泣聲にて）アイ。
正榮尼　銀之丞を助けてたもろか。（ト座に戻る）
蜻蛉　（同じく泣聲で）アイ。
正榮尼　なら得心してたもろかいなう。……エヽかたじけない。出來しやつた。コレ、此の通り拜みます。それでこそ天晴れ見上げた。親御の爲にも大孝行。（ト膝を進めて）此上は善は急げ。文したゝめて父御の許へ。尼は一先づ立歸り。此事を銀に聞かせたら嘸よろこび。いや、

明日と言はず、こよひすぐに、淀さまへは執り成しの墨打。尼がうけあうたりや、きツと御勘氣はゆりさせます。必ず共に文の中へ、最前尼がいうたお詫びの事を落すまい。偏屈は淀さまの大敵薬。それから（ト一寸考へて）オヽそれ／＼、不意討ちのたくみ手配りなどゝは、元より根も葉もないよしなし事。それもよう親御へ。
　トいひつゝ立上り、障子をあけて外へ出ようとして立留り
オヽそれ／＼、けふ此尼が來た事も、又此やうにいうた事も、書いたら結句邪推のたね。必ずそれは書かぬ事。よいかや、ようござるか。
　ト外へ出て
ドレ、先づ御前の首尾を。
　トよろしく思入あつて、廊下の奥へ入る。正榮尼を見送つて、蜻蛉はしく／＼泣きながら元の席へ戻り、力なげにすわりながら
蜻蛉　アヽ思ふまい／＼。母さまのようおつしやる前世とやらの約束事。（ト涙を拭ひながら）とはいふものゝ長門さまに比べれば、雪と炭。あんまりのちがひやう。
　ト又泣く。此時鐘の聲。
父さまのお身の上に、何ぞ變事がありはせぬか。御安否のお見舞かた／″＼、尼御様の今のおさしづ。

ト思入ありて、立上り床の間より硯箱を持出す。

エヽ知らぬ間に此くらさ。雨もよひでか日が短い。

トいひつゝ、下手の杉戸をあけて、其中より行燈を取り出し、火をともし、やがて筆を執る。此時饗庭の局、奥の廊下口より出で來り、障子をあけ、ずつと內へ入る。蜻蛉筆をおいて會釋する。

蜻蛉　お歸りなされましたか。

饗庭局　（上手よき處に坐りながら、蜻蛉の顏を見て）火影のせゐでか顏の色が、どうやら今朝よりもわるいやうな。そもじ、どうかおしやつたか。

蜻蛉　イヽエ。

饗庭局　いや〳〵、どうもわるいぞや。シテマア書きかけてゐやる其文はえ。

蜻蛉　アイ、アノこれは、ツイ今がた、正榮尼さまがお見えなされましてなア。

饗庭局　ナニ、正榮尼どのが見えたとは。

ト不審の思入。

蜻蛉　サイナア、わたしが胸をもよう察して、だん〳〵御しんもじのお諭し。御母公さまの御不興も、畢竟は父が偏屈ゆゑ、明日にも大奧へ出頭して、御機嫌うかゞひ、お詫びするやう、父市ノ正へ申してやれ。わしは蔭から執り成しせう。父御が根なし事を眞實と思ひ、所勞といひたて出仕せぬは、重々の不爲であらう。早う勸めて出仕させい。すればお咎めは自然とゆりる。必ず氣つよう思うてゐよと、それは〳〵御しんもじの……

トいひかける。

饗庭局　アコレ〳〵、そんなら尼御がそもじに勸め、アノ文して父御をば呼びにやれというたのおやな。

蜻蛉　アイ。尼御さまのお勸めと、いうては却つて邪推の種。わたしが心づいたやうにして、勸めてやれいとおつしやりました。

饗庭局　エ、さうせいと、アノ尼御が。

蜻蛉　アイナア。

饗庭局　（思入あつて）そんなら滅多に其文は、父御の許へはやられませぬぞや。

蜻蛉　エヽ。そりやまたなぜでござりまする。

饗庭局　さればいなう。（ト一寸表へ思入あつて、聲をひそめ）氣のゆるされぬは人の心。父御とは仲のわるいアノ尼御が、手の裏かへす深切顏、しかも執り成しまでしようとは、不審千萬、もしやそなたを餌にして、子に引かさるとは親の情、子に言はせたら疑ふまいと、父御を釣出さうための、計りごとであるまいものでもない。……

ト饗庭局蜻蛉に小聲にて何事かいふ。聞いて蜻蛉驚く思入あつて

蜻蛉　エ、すりや長門様は、アノわたしゆゑに御不審をお受けなされましたか。

饗庭局　サア、そればかりぢやないわいの。今洩れ聞いた怪しい取沙汰。コレ。

ト又囁く。

蜻蛉　エ、。そんならヤツパリ父さまをば。

饗庭局　ア、コレ。……ぢやによつて今わしが、御用にかこつけ、お表の様子をば探らうと思うてゐれば、先きでもぬからず、テモマ油斷のならぬことではある。……いづれにもせよ、其文は必ず共に遣ること無用。父御は世にすぐれ、思慮深いお人なれど、勝たれぬは親子の恩愛。親の思ひは子の百倍。そもじの可愛さに引かされて、うツかり出仕なさるまいものでもない。めつたに文は遣られませぬぞ。

ト此時下手より腰元一人出で來る。

腰元　堀の葉様が最前からお待ちかねでござりまする。

饗庭局　オ、今すぐに行きますわいの。（ト立上りながら）蜻蛉、たれが何といはうとも、何事もわしが歸るまでは……

トあとは目まぜにいはせて、腰元と共に下手へ入る。此時雨車の音。蜻蛉ひとり殘りて愁ひの思入よろしく

蜻蛉　親の思ひは百倍と、お局様のお詞、わしを助けうばツかりに、父さまが釣出され……（トいひかけてゾッとしたる思入）オ、こはや、おそろしや。……深切らしう人を騙すおそろしいアノ尼御。……とはいへ、嘘とも思はれぬ最前のアノ約束。銀之丞どのとの縁組を、あれほどくどう……いはつしやつたのも……ヤッぱりたくみごとであつたのかいなア。オ、早う知つてよかつたぞ。もし此文を遣つたなら（ト書きかけてゐた文を取りて、二つに引裂くことありて、俄に又ぎよつとしたる思入）イヤ／＼、わしは書かいでも、僞筆といふこともあるげな。アノお茶道のやうなわる者が、どう上手にわしの僞手紙をこしらへて、父様を騙すまいものでもない。……オ、おそろしや／＼。

ト立ちつゐつして、煩悶することよろしく、トヾ聲をあげて泣く。

これといふのも生中に、わしが生きてゐればこそ。……父さまのみか長門さまゝで御勘氣お受けなされたからは、迚も濡衣は乾くまいし……（トいひかけて又泣き、俄におど／＼して）オ、アノ先刻の約束、今にも尼御が戻つてござつて、何故文を出さなんだ、と責められたら何といはう……ア、、どうしたらよからうなア。

ト又立ちつゐつ煩悶し、だん／＼心の亂るゝ思入。トド前に裂きたる手紙を又取りあげて見ることありて

ア、、偽筆。(ト身をふるはして)ア、偽筆。

ト半狂亂のやうになつて、ずた／＼に引裂く。此見得よろしく、雨車に強き風の音をかぶせて道具廻る。

第三場　奥殿長廊下乳母自害

舞臺は一面の平舞臺、城內長廊下の心にて、正面ずつと奥に一間の出入口、渡江の蘆簾を畫いたる杉戸、それより漏斗形に道具を飾り、上手斜に三間の間は、一間毎に柱を立て、其裾は腰掛窓風の小壁にて、開け放し、向うに奥庭の泉水築山、御殿の一端等、夜の雨の中におぼろに見ゆる。杉戸の下手もまたやゝ斜に、ずつと舞臺の手前近くまで白壁、程よく間を置きて澤山の小窓、それに青簾を掛けあり。正面左右に亙つて大欄間。尙ほ上手に襖を畫いたる一間の杉戸。雨車、風の音にて道具納まる。

トすぐに上手より腰元三人出る。

△　つい此間は、あてこで幽靈が出たと聞いたゆゑ、わたしやこはうて／＼。

□　わたしとても同じこと。ア、、こはかつた／＼。

○　わたしやまだあれがこはい。(ト正面の遣戸を指さし)達磨さんの顏が氣味がわるい。

△　アレそのやうなことはいはぬもの。サ、目をつぶつて、早う通りぬけてしまひませう。

ト三人共片袖で顏をおほふことありて、一かたまりになり、急いで正面の杉戸をあけて、奥へ入る。

ト下手より乳母おとら、疊みたる銀之丞の上着を手に持ち、人を尋ぬる思入にて、きよろ／＼と四邊を見廻しつゝ出て來る。

とら　ほんに話くはうにも程のある。マアどこへ行かつしやれたやら、氣の揉めることではある。尋ねうにも、あての附かぬ廣い／＼此御殿、木乃伊取りが木乃伊とやら、和子を追うて來てわしまでが、どうやら迷子になりさうな。マ、これからどちへ往たものであらう。

ト往つたり來りしてゐる。こゝへ正面の杉戸口より腰元椋鳥、雪洞を持ちて、片袖で顏をかくしこは／＼出て來り、覺えずお虎に突きあたり、びッくりして、

椋鳥　アレー。

ト尻居にゐてふるへる。

とら　ハイ／＼、御免下さりませ。お尋ね申しますお人があつて、ついうか／＼とお廊下まで、シタガ、決して怪しい者ではござりませぬ。

ト是れにて、椋鳥やつと安心せし思入。

椋鳥　わたしや怖い／＼と思うてゐたゆゑ。……(ト胸を撫でおろし)一體そもじは、誰れぢや。

とら　ハイ〳〵、私は渡邊様のお邸に御奉公いたしてをりまする乳母の虎と申しまする者。最前和子銀之丞さまが、御殿へお上りなされましたゆゑ、お迎ひに參つたのでござりまする。

椋鳥　（俄に機嫌よげに）それではお前がアノ銀さまの……さうかいな〳〵。ようマアおいでやつたなア。さうしてアノ銀さまには、此中はお氣合ひがわるいと聞いたが、それではもう治つたかいな。

とら　ごしんもじの其お詞、忝うござりまする。お好きな物さへあがらいで、ふさいでばッかりござりましたが、母御さまからの吉左右を、聞かつしやるや否や、氣は晴れ〳〵。浮かれ出しては止どがなく、わたしの知らぬ間にお邸を拔け出し、御殿の方へと聞いてびッくり、あとをば追うて來ましたなれど、御殿へは初めてゆゑ、方角も、行くへも分らず。どうぞお前の御深切で、和子に逢はせて下さりませ。

椋鳥　アヽ、さうかいな〳〵。さういへば、櫻の間で、銀さまによう似た笑ひ聲が、最前ひとしきり聞えてゐた。今すぐに呼んで來よう。シタガ、こちの銀さまに吉左右とは、ほんにマアお嬉しい。何ぞお上から拜領物でもなさるかいな。

とら　いえ〳〵、聞いて下さりませ。遠うて近いは此道とやら、子供のやうに思うてゐたれど、和子はとうから戀わづらひ。

椋鳥　シテその相手は、どこの誰れぢや。

とら　サア、お名は少し言ひにくけれど、仔細あつて其お人は、ひよんな事から無實のお咎め。いよ〳〵緣はないものと、悲しがつてござつたところ、後室様のお肝煎で、其人の色よい返事。只此上はお上の御裁許、お咎めさへゆりたなら、明日明後日にも祝言と、聞かつしやつて飛立つ喜び、踊らつしやるやら、歌はつしやるやら、いつの間にやら邸を拔け出し……

　トいひかける。此うち椋鳥たゞ〳〵腹の立つ思ひ入。

椋鳥　オヽ御用を忘れてゐた。ドレ。

　トついと立つて、上手へ行きかける。

とら　アヽモシ、それではどうぞ銀之丞さまを。

椋鳥　わたしや今は忙しうて、其やうなこと受け合はれぬ。外の人に頼みなさんせ。

　ト又行きかけるを、おとら追ひすがりて袂をひかへ

とら　アヽモシ、お前に見棄てられては、さッぱり方角が分りませぬ。わづらひあげくに薄着のまゝ。折も折、此夜雨。心配でなりませぬ。どうぞお前の情けで、和子のござる處まで案内して下さりませ。

椋鳥　えゝ、知らぬ〳〵。わしや其やうな暇はない。御用

がおそなはる。離して下され。

とら　そこをどうぞ。

椋鳥　えゝ、しつこい。離しやといふに。

ト椋鳥おとらを手荒く突き飛ばして上手へ入る。おとらやがて起上り

とら　アヽコレ、待つて下され。モシ／＼。

トいひながら、同じく上手へ追うて入る。暫らく空舞臺、正面奥にて、腰元共大勢のかしましく笑ふ聲聞える。やがて、正面杉戸口より腰元、花野、紅葦、初葦、桔梗、其他大勢、五六人は雪洞を持ち、銀之丞（肩衣なしの袴姿）の前後に附添ひ、賑やかに笑ひながら出で來り、よきところに住ふ。舞臺、晝のやうに明るくなる。

紅葦　サア／＼、もうよい／＼。大抵大きな聲をしても、こゝでならお奥へは聞えぬ。

花野　サア／＼銀さま、今一つ所望ぢや／＼。今の小歌がけうとうて、わたしやお肚が痛うなつた。オホヽヽヽ。

ト是れにて皆々又賑かに笑ふ。

銀之丞　オヽ所望ぢやといやるなら、もう一つ歌うてこまそか。

初葦　それは嘸面白かろ。ほんに銀さまは、ナア皆さん。器用ではないかいな。

桔梗　蜻蛉とのが焦るゝも、無理はないやうで、尤もで、うけとれぬ今の話。

紅葦　コレ銀さま、そんならいよ／＼蜻蛉とのが、應と得心したのかいな。

銀之丞　うん、應というたによつて、上臈が諾といはッしやれば、明日にも祝言をするのぢやわい。おれや嬉しうてならぬ、ならぬ。

初葦　オヽけなるやの／＼。其お祝ひに、歌よりも、今度はお前の舞ひが見たい。

桔梗　ほんに舞ひはまた見ものであろ。サア／＼銀さま、舞ひが見たい。

銀之丞　では、だれか、歌うてたも。

紅葦　歌はうとも／＼。（ト腰元の一人に）サア、お前歌はしやりませ。サア／＼所望ぢや／＼。

皆々　所望ぢや／＼。

ト是れにて腰元共は上下二組に分れてすまひ、銀之丞は中に立ち身、腰元らは互に笑を忍ぶ思入こなしありて、半分出たらめの心にて、次ぎの唄を歌ひはじめる。最初紅葦と初葦とが扇拍子にて音度を取る。よき頃より下座の長唄に取り、又時々腰元の聲を聞かせる。

初葦・紅葦　〽七つになる子がいたいけなことというた。（ト互に

顏を見合せて笑ひかけながら）嫁御ほしと歌うた。

長唄〽嫁御ほしいと歌うた。〽とかく子供たちやいたいけがよいものぢや。はらゝとほろゝと、

花野　〽ほろゝとはらゝ。

長唄〽目さへ醒むれば、てうち／＼あわゝ。かぶり／＼鹽の目。おつむりてん／＼。ちんがらこちんがらこ。

初葉　ちんがらこ／＼。

長唄〽こゝまでござれ。

紅葉　こゝまでござれ。

長唄〽手車に乘せて　〽ありやこりや　〽おきやがりこぼうし犬張子、お猿が小枝にぶらりと下つて　〽俵ころびに、ころりや／＼……

ト銀之丞たわいもなく踊り狂ふ。腰元ら賑やかに笑ひながら、折々それに絡むことありて、トゞ銀之丞を俵のやうにころがし、キヤッ／＼と笑ふ。その途端早めの合ひ方にて、上手より椋鳥ころげるやうにして驅け出て來り

椋鳥　大變ぢや／＼。大變でござんすぞえ。蜻蛉どのがお死にやつた。じじ自害して、血がだら／＼。皆さん、早う來て下さんせ。大變ぢや／＼。

ト是れにて腰元一同びッくりし、椋鳥に附いて、あわてゝ上手へ入る。舞臺暗くなる。銀之丞ひとり殘り、尙ほ踊つてゐる。やがて人の居ぬのに心づき、うつとりとした思入。雨車、風の音。これより床の淨るり。

ト上手よりおとら出で來りて

淨〽折からこゝへ來かゝる乳母

とら　オヽ和子さま、こゝにござらつしやりましたか。お前も聞いて嘸びッくり。あれほど焦れてござつたものを、無慚や、むごや、蜻蛉どのは、とう／＼非業にお死にやりました。情けないことになりましたわいなう。

ト泣く。

銀之丞　乳母、そんなら蜻蛉には、もう逢ふことは成らぬかいやい。

とら　アイ、自害してお死にやつたからは、もう逢ふことはならぬけれど、必ず短氣を出さつしやりますな。世間に女子はたんと／＼ある程に、必ず／＼泣かッしやるな。

銀之丞　エヽ、そんなら蜻蛉は。

とら　オヽ、お死にやつた、お死にやりました。

是れにて銀之丞立腹のこなし、泣きながら、おとらの襟上を取つて引倒し、馬乘になつて

銀之丞　ヤイおのれ、なぜ死なせた。（トこづく）

とら　尤もぢや／＼。サア尤もぢやが、泣かつしやるな泣かつしやるな。

銀之丞　いやぢや／＼。なぜ死なせた。なぜ殺した。

ト銀之丞オイ〳〵泣きながら、おとらを打擲し、トヾ
突伏して足ずりして泣く。

とら　オヽ尤もぢや、お道理ぢや。あきらめらるゝものならば、わしをどのやうに打つてなりと、あきらめて下さりませ。そのやうに泣かつしやると、體に障る。此眞夜中に其薄着。コレ、風ひかしやるとわるい。これをめせ。これを〳〵。

淨へ脊撫でさすり介抱に、もてあましたる折しもあれ、お長廊下を急ぎ足、子の顔見つくる正榮尼。

トおとら立寄りて、持つてゐる上着を着せかけなどして介抱するを、銀之丞振拂ひ、手荒く突飛ばすことなどあり。こゝへ、正榮尼、正面杉戸口より急ぎ足にて出て來り、之を見て

正榮尼　オヽ、そこにゐるのは乳母ぢやないか。

とら　オヽ、後室様、ひよんなことになりましたわいなア。

正榮尼　わづらひあげくの銀之丞を、何用あつて此の處へ。變事を（ト思入あつて）聞かせては障るわいの。

ト苦々しげにいふ。

とら　サア、その事はたつた今、和子に話して此お歎き。

正榮尼　ナニ、その事を、もう此兒に。

淨へ乳母おしのけて我子のそば。

ト正榮尼驚き、苦々しげにおとらを押しのけて、泣き伏してゐる銀之丞の脊をさすりながら

コレ、銀之丞、蜻蛉は死にやせぬわいの。死んだとは氣もない嘘ぢや。コレ顔をあげやいの。コレサ、銀之丞、どうしたものぢや。母ぢや〳〵。

淨へゆすぶられて、もたぐる顔、見かはすばかり目の色も、寢ざめの如くきよろ〳〵と、言葉なければ正榮尼。

オヽ感心ぢや〳〵。あきらめねば男でない。まだ涙でよごれてゐる。ドレ〳〵、拭いてやりませう。

淨へ鼻紙取り出し、右左り、目のふち拭へど、尙ほきよろ〳〵。

ト銀之丞は、じつと上手柳を畫いたる杉戸の開け放しになつてゐる方を見つめ、やがてそこに蜻蛉の立つてゐるのを見附けたといふ思入よろしくありて、ふらふらと立ち上り

銀之丞　オヽお死にやつたと思うたら、やッぱり生きてゐやつたのかいの。

ト正榮尼はそれに心附かぬ思入。

正榮尼　オヽ〳〵。生きてゐやるぞや。死んだというたのは嘘ぢやわいの。

ト此間銀之丞は杉戸の方にゐる蜻蛉と話をしてゐる思入。

銀之丞　そんなら今から内へ往こ。サアおぢや。

浮べ、たちあがる其袖ひかへ、

ト銀之丞は正榮尼を押しのけるやうにして、ふら〳〵と上手杉戸の方へ行きかける。おとらも正榮尼も驚きて止めること。

正榮尼　コレサ〳〵、銀之丞、そなたは何をいうてゐやる。そこにはたれもゐやせぬいなう。

銀之丞　蜻蛉がおれと一しよに、內へゆことといやるによつて。

正榮尼　エヽ、どこに蜻蛉が。

銀之丞　それ、そこにゐやるわいの。

正榮尼　エヽ、どこに。

銀之丞　ソレ、そこに。

トいひながらあちこちへふら〳〵と行きかける。正榮尼、おとら氣味をわるがる思入。

正榮尼　氣味のわるい。何をいやる。……コレ、銀之丞、どこへ〳〵。……(ト追ひすがりて抱きとめ)コレ氣をたしかに持ちやいなう。

トおとらも手傳ひて元の席へつれ戻ること。此以前銀之丞は、頭にかゝる前に鶴羞を拔きて、正面やゝ奥の方に置くことあり。

銀之丞　いやおや〳〵。蜻蛉が招いてゐやる。おれもあちへ往く。そこ離して。

トこれにておとら泣きながら

とら　エヽ情けない。何とせう。お前は心が狂うたな。コレ尤もぢや、道理ぢや。お道理ちや、尤もぢやが、マヽ、マヽ。

ト銀之丞を下手へ押戻して止める。此うち正榮尼立腹のこなしあつておとらの襟上を取りて引倒し

正榮尼　年甲斐もなくようも〳〵、おのれ、折も折、わづらひあげく、用もないに銀之丞を御殿へ連れ出し、事もあらうに、蜻蛉が變死をあれに聞かすとは、恩を仇の不忠者。サヽ、正氣にして返しをれ。

トこづくこと。此間(このあひだ)に銀之丞は、二人の脇を通り拔けて、ヤハリ幻影にさそはるゝ思入にて、ふら〳〵と上手へ入る。

とら　サヽヽヽ、お道理ではござりまするが、何のわざわざ和子樣をば、こゝへ私が連れ出しませう。これには譯のあること……

トいひかける。此時正榮尼ふと心附きて

正榮尼　ヤヽ、いつの間(ま)にか銀之丞か。……こりやかうしては……

ト立つを止めて

とら　アヽ申し、たつた一言(ひとこと)入り譯を……

正榮尼　エヽ聞くひまない。そこ離しや。

とら　イヽエ、まつて下さりませ。
正榮尼　エヽしつこい。
浄〽と振拂ひ、突き離し、右か左か、奥庭かと、心あくせく走り行く。
ト正榮尼おとらを突き離して上手へ入る。
浄〽、あのとは後に取亂し、正體もなく悔み泣き。
とら　エヽ、濟みませぬ／＼。年甲斐ないとのお怒りも、さら／＼御無理はござりませぬ。わたしの分別が足らはぬゆゑ、あと先き思はず言うたので、氣がさかのぼり血が狂ひ、和子の心が亂れたかいなう。草葉の蔭の大殿さまにどう此とらが言ひ譯を……エヽ、濟みませぬ／＼。お腹の立つはお道理ぢやが、恩を仇で返すかとは、あんまりむごいおつしやりやう。（ト泣き、やがて）イヤ／＼かうしてゐる所でない。命に代へても和子さまを、正氣に戻さでおかうか。
浄〽これも心は半亂の、亂れし姿かいつくろひ、立上がる折りしもあれ
ト此時上手にて腰元大勢の聲。
紅葉　お庭の池へたれやらが
腰葉／大勢　身投げぢや／＼／＼。
浄〽のゝしるこゑ／＼、胸ぎツくり、たじろぐ足につまづく脇差。
トおとらびツくりして、文句の通りありて銀之丞の残して行きし脇差につまづき、取りあげていたゞきながら
とら　折も折とて、和子様の此お脇差につまづいたは、エヽ氣にかゝる……
トいひも終らぬうちに、上手より椋鳥泣きながら走つて來て
椋鳥　オヽ、お前はさツきのお乳母どのか。悲しや／＼。銀様が氣が狂うて、雨あがりのお泉水へ、這うていつて、どんぶらこと、深みへ落ちて死なツしやれた。お前も定めて悲しかろ。わたしも悲しい、悲しいわいなう。
ト取亂して泣く。
とら　エヽ、そんならばアノ和子は、……もう助からぬか。こときれたか。
浄〽はツとばかりに氣も顛倒。
氣の狂はしやつたばツかりでも、言ひ譯のない此身の越度。後室さまのお歎きをお察し申せば、此胸が……
浄〽張り裂くやうな、悲しやと、もだえなげゝば
椋鳥　さうあろ／＼。正榮尼様が今も今とて、かうなつたのは元はといへば、片桐親子のせゐぢやというて、小軍さまへ愚痴たら／＼。嘸お前も悲しかろ。わたしも悲し

い、悲しい／＼。
ト身もだえし、つッ伏して泣く。
とら　それといふのも一つには、此とらめがしたことゝ、さぞ怨まつしやろ、さぞ憎かろ。それを思へばどうあつても……
ト死ぬといふ思入よろしくあつて
幸ひな此お形見。
ト脇差を取上げて思入。
淨〽とつさの決心、脇差を、ぬくより早く乳の下へ、ぐつと突込み七顛八倒。
トおとら脇差を抜きて乳の下を貫く。椋鳥びッくりして
椋鳥　アレー。……たれぞ來て下さりませ。大變ぢや／＼。
ト早腰をぬかし、わめきながら、やがて上手へ入る。しばらくして同じく上手より正榮尼を介抱しつゝ腰元二人出て來る。正榮尼はおとらの樣子を見て驚き
正榮尼　オ、乳母……や、此體は。コレ氣をたしかに。
ト介抱する。おとら顏をあげて
とら　オ、後室さまか。……面目ない／＼。……大切の和子さまをば……
淨〽殺せし越度、此身の罪、ゆるしてたべを言ひ死の、乳母が最期ぞ無慚なる。
トおとら、濟まぬといふこなしいろ／＼あつて落入る。皆々愁の思入。此模樣よろしく道具廻る。

第四場　淀君寢所珍柏横死

舞臺は都て二幕目寄訴の場と同じ道具。二重の御簾は悉く下してあり。平舞臺の行燈は、ずつと下手に、二重の燈火もやゝほの昏き體。眞夜中過。
こゝに淀の方は、二重几帳の前、菌の上に、曲彔に倚りて坐し、大野修理ノ亮は、社杯姿にて其下手に傍近く兩手を突きて俯向いてゐる。此見えにて道具とまる。
淀君　（立腹の思入にて）エ、そらすまい詞巧みに。どのやうに言ひ抜けやつても、確かな證據があるわいの。あの初めての目見えの時、口では貶しても、目の中に情けを含むは、好きごゝろと……
修理亮　あられもなき其お疑ひ。毛頭以てさやうな覺えは……
淀君　いゝや、覺えがないとはいはせませぬ。餘人は知らず、そなたに限つて、かうした心はあるまいと思うてゐたに……ほんにひし／＼と思ひ當る事ばかり。……正榮尼が今の異見。……
修理亮　ナニ、正榮尼か。
ト不審の思入。淀君はそれに心附かぬらしく、尚ほ獨

語のやうに

淀君　市ノ正といひ、長門といひ、……現在我子の秀頼までが、此母を母とも思はず、談合もせで慮外者の、アノ市ノ正が勘當を赦さんなどゝは、……エヽ、どいつもこいつも恩を仇の犬じもの。尾を振るも餌食が欲しさぢや。吠ゆるのもおのが身の怖さゆゑぢや。皆な〳〵身を思ふゆゑの深切ぶり。エヽ、腹が立つ〳〵。

修理亮　サヽ、其お怒りはお道理なれど、さら〳〵此身に覺えなき只今のお疑ひはお情けなし。須彌蒼海の御高恩を、たとへ束の間、夢の間たりとも、何とて忘却仕りませうや。お疑ひの一條は神以て存じもよらず。さりながら、かほどまでに申し上げても、尚ほお疑ひの晴れぬ上は、治長が今生の望みもこれまで。……（トよろしく愁ひの思入あつて、獨語のやうに）御勘氣受けて存命なさば……此世からなる天上界の、其仕合せとは打つて變り、阿鼻焦熱の苦痛は目前。近い例は聚樂御殿、秀次公の御シ身の果。……

ト思入。これにて淀君ゾッとしたる思入。

淀君　エヽ。

トよろしくこなし。此うち修理ノ亮、きつと決心の思入あつて

修理亮　御免下され。

ト急ぎ淀君に會釋し了り、すぐに起ち上らうとする。

淀君　コレ、どこへ。

ト修理ノ亮だまつて御簾をかゝげ、二重をおりかける。淀君あわてゝ止めて

まちや。

修理亮　お離しなされて下さりませ。

淀君　いゝや、まちや。……待ちやといふに。

修理亮　いや〳〵。かくまで申し譯いたしましても、お聽き入れ遊ばされず、あくまで辛く當らせられまするは……（トいひさして、落涙し）恐れながらお心がはり、……何とかして越度を見つけ、それがしを遠ざけたまはん御心底と……

トいひかけて、しきりに落涙する。此うち淀君、心だん〳〵と和らぐ思入。

淀君　何のマア、……さうした譯ではなけれども……

修理亮　いや〳〵。お目ざはりと相成りまするならば、何とて存へ居りませうぞ。……「太閤が此世に在さうなら」と、只今仰せられし御一言は、それがしが骨身には八寸釘。今更に大罪犯せし心地いたし、身も世もあられず。……迚も生きてはをられませぬ。……お離しなされて下さりませ。

淀君　アヽ、コレ、それはそなたの僻みといふもの。何でそ

なたを疎んじませうぞ。そなたの外には、……かういふ事まで打明けて、語る者とてはないゆゑに、つい我れ知らず氣儘になり、言ひ過したのはわるかつた。……勘忍してたも。……わるかつた。ゆるしてたも。

トいろ／＼こなしあつて治長をなだめる。

修理亮　ではお疑ひは晴れましたか。

淀君　晴れたればこそ……此やうに。（トなまめきたるこなし）

修理亮　チエ、……物體なき御ン情け。……（トじつと淀君へこなしありて）如何なる宿世の善因あつてか……

淀君　結ぶえにしの色絲に、賴まれぬ世も繋がれて……

修理亮　御ン面影を見る時は……

淀君　世の憂きことも忘らるゝ。

修理亮　變る習ひの世の中に、形なければ神代より……戀は無常の……

淀君　外かいなう。……

ト二人よろしくこなし

とはいふものゝ男心は……

ト修理ノ亮へ思入。

修理亮　又しても其お疑ひ。かゝる御高恩を蒙りながら、かりにもふた心を抱きますれば、それこそは、……面ばかりが人間にて、心はやがて畜生道の……

ト大きくいふ。淀君ぎよつとして

淀君　エ、。

ト驚く。修理ノ亮それには心づかず、淀君を搔き抱くやうにして

修理亮　盡未來際……

トいひかける。此うち淀君、御簾の外へ思入ありて、何か怪しき物を見附けたらしき思入、こなしありて、急に立上がる。修理ノ亮驚きて

ア、モシ、如何なされました。モシ御ン方さま、何を御覽なされまする。……ア、コレ、申し／＼。……申し……

ト淀君御簾を排ねのけて、つか／＼と二重を下りかけ、きつと正面を睨みつめて

淀君　おのれ、執念くも祟らうでな。一夜のうちに三人までも、非常の最期を遂げさせしは……ム、……さては怨念のしわざであつたか。……たとへ如何ほど障碍をなすとも、みづからが斯うしてゐる間は、……エ、、こざかしい其一言。御ン身が横死は自業自得、おのれと招いたことであるのに。……（トいひかけて、半夢中で懷刀の袋の紐を解きかけながら）サアそれは……サアそれは……さア／＼／＼。

トだん／＼言ひ詰められたらしく、泣き聲になり、身悶えする。

修理亮　こりや何となされました。もうし〳〵。……御ン方さま。……もうし〳〵。……お心たしかに遊ばしませう。もし〳〵。

淀君　アレー。たれぞ來てくれい。……アレー〳〵。

ト平舞臺へおり、逃げ廻る。修理ノ亮も二重より走りおりて、それを取りおさへようとする。此うち淀君懷刀を拔く。途端に下手の襖を開け、珍柏雪洞を持ちて走り出る。出逢ひがしらに淀君に突き當る。淀君今拔いた懷刀にて見事に珍柏の胸元を貫く。珍柏すぐに落入る。淀君は尙ほも懷刀を揮はんとするを、修理辛うじて抱きとめ、取りおさへる。此見えにて

――幕――

第六幕

第一場　片桐邸奧書院

舞臺に五間中足の二重、道具立其他よろしく。緣側に相對して大きな梧桐の木三本、葉はすべて黃ばみて、旣に殘り少なになつてゐる。二重に片桐の家來十河十兵衞（四十以上）、今村三右衞門（同上）控へて居る。此見得、合ひ方、風の音にて幕あく。

時は舊曆九月廿日頃。

十河　何と今村氏、先刻速水甲斐ノ守どの御上使として入來ありしは、一定佞人らが卑怯の策略。噂の如く御主君をば、上意にかこつけそびき出だし、討取らん魂膽と存ぜらるゝに、一應の御思慮もなく、お受けありしは合點ゆかず。

今村　されば〳〵。最前もほのかに承れば、今ン朝未明の頃、大野親子ひそかに數多の浪人共を、西の御番所へ繰り入れしは、いよ〳〵以て不審の至り。

十河　まツた噂によれば、昨夜大奧にて、何かけしからぬ騷動あつて、茶道珍柏を初め、其他一兩人變死との事。

今村　かた〳〵以て油斷ならず。殊には、奧方には、御息女蜻蛉さまの御安泰御祈願の爲、佛神へ御參詣のお留守なれば、此まゝ御登城おさせ申さば、如才のお咎めまぬかれがたし。

十河　此上は、我々兩人、たとへ御不興蒙るとも、面をおかしてお諫め申し、けふの御登城をおとゞめ申さん。

今村　いかにも。さやうござらば、すぐさまお居間へ。

ト二人立上らうとする。此時向う揚幕より奧方一葉、腰元を二人つれて出で、舞臺へ來り、二重へ上る。これにて二人は急ぎ席をさがり、敬禮する。

一葉　（腰元に向ひ）大儀であつた。

ト是れにて腰元共會釋して下手へ入る。

十河　奥さまには、思ひの外に、お早いお歸り。

今村　お出迎ひも仕らず、慮外御免下されませう。

一葉　（よろしく住ひて）影日向なきそなた達の、忠勤を思ふにつけ、嬉しいと悲しいとを、ないまぜにした我家(わがや)の此頃。夫(をつと)はもとより、女(むすめ)までも御勘氣うけ、かりそめの便りさへも叶はぬゆゑ、いろ／＼に案じ過し、邸へ歸り着くまでは、胸さわぎがしてならんだわいなう。

ト此うち十河、今村顏を見合せて思入あつて

十河　其のお言葉を承れば、いよ／＼以て心元なき我君のけふの御出仕。

一葉　ナニ、御出仕とは。

今村　其儀はいまだ御承知なき筈。お留守中に御上使あつて、お城より俄かのお召。何故にやけふに限り、我々へはお沙汰もなく、はやお支度にござりまする。

トこれにて奥方よろしく思入あつて

一葉　エ、恐れ多や、物體なや。さてこそは最前の胸さわぎ。「誤つて深き淵に沈む」とありし御鬮(みくじ)の表も此事をば、神のみつげに疑ひなし。（ト一寸向うを拜むことありて）何にもせよ、けふの登城は、さへぎつて止(とゞ)むるかいぞへ、そち達二人(ふたり)も奥の間(ま)へ。

トいひつゝ、奥方先きに、三人ともに立たんとする。奥にて市ノ正。

市ノ正　イヤ、其心遣ひ無用なるぞ。仔細は只今申し聞かせん。

ト此うち市ノ正𧘕𧘔姿、出仕の身支度にて出る。皆々驚く思入。

一葉　はや其のやうにお支度まで。（トこなしあつて）いかなるお召かは存じませねど、此頃うちから怪しい雜說(ざふせつ)。お家の爲に大切なお命なればこそ、所勞を幸ひ、けふまで御蟄居遊ばしたも、現在我子の難儀をさへ、餘所に見過す御遠慮も、皆行末のお家の爲。其御思慮ぶかい我夫(わがつま)が、けふに限り輕々しう、重役共にもお話なく、又みづからが參詣の、留守中に其御支度は、心得ませぬことでござりまする。

市ノ正　其怨みもことわり。兩人も定めし不審。これを見よ。

ト市ノ正懷中より書狀を取り出し、十河に渡す。十河之を開き、三人にて見ること。

十河　こは恐れ多や、物體なくも……

一葉　御母公樣の御血判。

今村　御違變あるまじとの御起請文(ごきしやうもん)。

市ノ正　上は梵天帝釋より、下は堅牢地神、稻荷、祇園、加茂、春日、大小の神祇に御ン誓を掛けさせられ、此事

聊かも違變あらば、神罰立所に蒙らんとの御起請文。
十河（讀む）「一つ、京大阪さま〴〵雜說申し候へども、親子ながらそもじの事おろそかにも思ひ申さず候ふ。いかやうの事人申し候ふともお聞入れ候ふまじく候ふ。此方も聞入れ申すまじく候ふ事。」
今村「一つ、秀頼さまへそもじ年來の忠勤いつ忘れ候はんや。そもじより外御ン賴み候ふ方も候はず候へば、いよいよ賴み入り候ふ外は候はず候ふ。心中親子ながらゆめ聊か如在には思ひ申さず候ふ事」。
一葉「其方御ン違へなき上は、此方よりはゆめ聊……」

と一人々々、代る〴〵、起請文を手に受け取りて讀むことよろしくあつて

市ノ正　たがへまじとの御誓言。かしこしとも、物體なしとも、申すべき詞なし。又是れなる右大臣樣より、下し賜はりし御ン添へ書。あとにてとくと拜見いたせ。

ト市ノ正又一通を取出して渡す。

かゝる下し文たまはる上は、寸分の躊躇も不忠の至り。今より直に登城なさん。たれかある。馬引け。

ト下手にて

近習　ハ、ア。

ト近習二人上手より馬を引いて出る。市ノ正緣端に進み、馬に乘らんとする。此時向う揚幕にて、市ノ正の弟主膳ノ正貞隆。

主膳　暫く〳〵。

ト社杯姿、ばた〳〵にて出で來る。

市ノ正　たれかと思へば弟貞隆。何ゆゑ出仕を止むるぞ。
主膳　仔細を申されば御不審は御尤も。なれども今ン日の御登城は、羊の虎穴に入らんが如し。いたづらに死を急がんは、誠の忠臣に候ふまじ。御覽ぜよ、此一通。只今お城の門外にて、織田殿より火急の密使。

ト主膳一通を市ノ正に渡す。

市ノ正　ナニ、織田殿よりの密使とな。

ト受取りて讀むことあつて

すりや今ン朝のお起請までが……
主膳　大野、渡邊らが卑怯の魂膽。御不例をよき機に、さま〴〵御母公を說き惑はし、いかに申し勸めまゐらせてか、書かせまつりし御起請文。
一葉　すりや最前の御起請までが、蟲が知らせて案じた通り……
今村　やッぱりうま〳〵御主君をば……
十河　おびき出さんてだてなりしか。

ト皆々驚く思入。

主膳　御ンおどろきはそれのみならず。かたく口どめなし祕しかくせば、まだ御存じはござるまいが、はからず聞

きし昨夜の珍事。

一葉　ナニ、昨夜の珍事とは。お茶道なにがしが横死の由は、最前ちらと聞きましたれど、餘事にまぎれ、心にもとめませなんだが、氣にかゝる今のお詞。シテ〳〵、それはどうした事。いかなることでござりまする。

主膳　サアそれは。

一葉　サ、その仔細は。

主膳　嫂君(あによめ)、必ず驚きたまふな。……蜻蛉は自害して相果てましたぞ。

一葉　エヽ、ナニ蜻蛉が自害とや。そりや定(ぢやう)か。なゝなに故に。

主膳　くはしき事は存ぜねども、昨夜正榮尼、ひそかに饗庭の局方へ訪れ、御勘氣執り成しを言ひ立てに、銀之丞との緣談を申し込みしを、娘氣に否みかね、おどされて心亂れ、思ひ迫りて自害せしと、專ら噂にござりますれど、まことは蜻蛉に文書かせ、それを囮に兄上をば、出仕させん魂膽なりしを、けなげにも蜻蛉が、斯くと悟り自害せしゆゑ、手段(てだて)を改め上(かみ)をすかし、御起請(ごきしやう)を書かせまつりしならんと、饗庭の局より竊かの知らせ。……不便の最期を遂げさせました。

ト主膳ノ正愁ひの思入。

一葉　そんなら女は、エヽヽヽヽ。

ト俄に癪の起りしこなし。十河、今村驚きて介抱する。

市ノ正　ヤア見苦しゝ。性根をすゑい。お家存亡の瀬戸際に、一少女が生死(いきしに)何かあらん。……ソレ、奥へ〳〵。

トこれにて今村、十河は一葉をつれて一旦奥へ入り、すぐ又戻る。市ノ正思入あつて

此上は我心いよ〳〵決せり。貞隆、後事(こうじ)は其方(そのはう)に委ね置くぞよ。さらば。

ト市ノ正馬に乗る。桐の葉二ひら三ひら散る。主膳ノ正驚きて馬前に立ちふさがり

主膳　心得ず、いづれへお出かけなされまするぞ。

市ノ正　此上は、せめて今一度出仕なし、御前に於て微衷を陳じ、諍臣の誠を盡さん所存ぢや。

主膳　でもござりませうが、只今御出仕あるに於ては、見す〳〵彼等の手だてにおちいり……

今村　折角の御誠心(おんまごころ)は上(かみ)へ通せず……

十河　只いたづらに惡名受け、寃の鬼とならせられなば……

今村　城内ますます騒動なし……

主膳　佞人いよ〳〵時を得て、お家を支ふる柱石なく、關東其機に乗じ申さば、當家の行末おぼつかなし。

十河　平に今ン日の御登城は、何とぞおとゞまり下さるべし。

三人　何とぞ〱。

市ノ正　ハテ、無用の諫言立て。さほどに利害を存せざらんや。問答無益。そこのきめされ。……のけ〱。

ト市ノ正は馬を進めんとする。三人は之をとめる。此時バタ〱になり、向う揚幕より木村満藏、小具足でだち、手　にて駈け來り

木村　御注進。

ト云ひながら馬前にひざまづき、息を切つて、あへいでゐる。

市ノ正　何事ぢや、木村満藏。御城内に變事があつたと相見ゆる。早く申せ。

木村　ハ、、吾々仰せを承り、東南の御番所を取りかため罷りありしに、先刻思ひがけなくも、大野の手の者三百人ほど押寄せ來り、且元罪科きはまつたれば、すぐさま御番所をあけ渡せと、理不盡なる談判。ヤア案外なり、御下書なくば、こゝ一寸も退きがたし、證據ありやと押し問答、兩三回に及ぶうち、どつとあげたる鬨の聲、無二無三に亂入なすゆゑ、此上は是非もなしと、一同拔きつれ縱横無盡、必死となつて防ぎましたが、敵は大勢、身方は小勢、無念ながらも切り立てられ、我々共僅か七八人だけ、のがれ歸つてござりまする。

ト息つぎあへず語ること。

市ノ正　ア、、しなしたり、殘念や。かくまで望みの破るゝとは。（ト無念の思入宜しくあつて）此上は登城も無用。（ト馬を下り）さるにても合點ゆかぬは、かくまでに手だてを廻らし、おびきよせんと計りたれば、俄に無謀の振舞なせしは。……仔細こそあらん。（ト不審の思入）程なく討手寄せ來らん、十兵衛、三右は、其旨一同に申し傳へい。満藏も退つて休め。

ト是れにて三人とも下手奥へ入る。

貞隆には密談あり。近う〱。

ト主膳ノ正、市ノ正共に二重に住ふ。市ノ正が馬よりおりる時、桐の葉又はら〱と散る。此時揚幕にて

石川　市ノ正はござあるか。石川貞政推參いたす。

ト此うち石川伊豆、小具足打扮。大童、獨眼、大薙刀を提げ、片桐の家來の支へんとするを押しのけ〱、同じく小具足姿の家來大勢をつれて出て、すぐに舞臺へ來り、仁王立に立ちて市ノ正に向ひ

無念でござる、市ノ正どの。賊臣はびこる時は衆賢ことごとく亡ぶとかや。貴殿が誠忠も甲斐なく、佞人ばらが無慚の振舞、如何にしても堪忍ならず。今ン朝曉を聞くと其儘、大野方へ押しかけ、會釋もなく奥へ踏込み、大音聲に不義を罵り、幸ひ居合せし修理が素首、あはや一刀とすべかりしに、無念やあまたの飛び道具に、只一人

のせん方なく、壘をはねあげ小柄となし、其場は難なく切抜けましたが、當の敵を討洩らせしゆゑ、其無念忘れがたく、討手の來ぬうち、再度彼れが方へ逆寄なし、切死なさんと存ぜし折柄、東南の御門に騒動ありと、家來の注進。シヤ、疑ひもなく貴殿が身の上、しからんには力を合せ、奸賊ばらを誅戮なさんと、すなはち手勢を引具したり。此上は猶豫は無益。城内には織田殿、木村、七組には速見をはじめ、同心のともがら少からず。只今不意に逆寄なさば、内應一定うたがひなし。速かに出陣の用意めされ。さ、早く／＼。

ト此うち市ノ正思入あつて

市ノ正　さてはそれゆゑ大野親子、陰謀露顯せりと思惟せしよな。（ト遺憾の思入あつて）かく成りゆくも天なり、命なり。今更に何をか怨まん。ア、やんぬるかな／＼。

ト歎息の思入。

石川　ヤア言ひ甲斐なし、市ノ正との。命は人にあり、天にあらず。先んずれば敵を制す。猶豫せば自滅のもとゐ。程なく討手押寄せ來らん。エヽ何を斟酌。かういふうちも心がせく。御用意未だ整はずば、われら魁け仕る。貴殿もあとからお續きあれ。

ト石川、家來へこなしあつて、勢ひ込んで花道へ進む。家來つゞく。此時まで俯向きて、ゐたりし市ノ正急に顏をあげて、怒りの聲高く

市ノ正　ヤア粗忽なり、伊豆ノ守、一矢たりともお城に向つて弓引き申さん心あらば、何條且元今ン日まで、空しく肝膽を砕くべきや。物先づ腐つて蠅集る。大野、渡邊は蠅蟲同然。たとへ彼等を捕へばとて、腐爛の源泉を止めずんば、又こそ沸かんお家の災厄。二三の小人を目星となし、太刀鐵砲と立騒ぐは、私憤に君家を忘るゝ振舞。外は關東の侮りを招き、内はお家の滅亡を、急ぐにひとしき無謀の闘諍。たとへ不忠でないまでも、至つて愚昧の振舞ならずや。そこにお心が附きめされぬか。

ト早口に併し手強く云ふ。

石川　ム、。

トはじめて心附きたる思入。拍子抜けのしたるこなし。

市ノ正　（やゝ自制して）伊豆ノ守どの、尚ほ改めて申すことあり。ともかくも、マヽ、しばらく／＼。

ト是れにて石川止むを得ず、元の處へ戻る。家來も附いて戻り、下手にすまふ。石川は薙刀を突きて立身のまゝでゐる。市ノ正やゝ落着きたる調子にて、靜かに

今ン朝お二方より有難き御懇の御上使。あるひは佞人らが差金かとも、一たびは疑ひたれど、假にも斯るお詞賜はり、我面見ようずとあるこそ幸ひ。所詮亡き命、君前に肺肝をさらし、御ン用ひあらせられずば、其場に切腹

と覺悟をきはめ、旣に立出でんとなす折柄、驅け附け來る弟貞隆……つゞいて無念なは家來が注進。……（ト大息つきて）御城内に血を流し上は、謀叛の咎めのがれん由なし。此世の願ひも盡き果てたりと、只今弟に後事を托し、今にも城兵寄せ來らば、邸に火をかけ自裁の決心……（トいひかけて又歎息の思入）只殘念なは最期の際まで、望みいすかと喰ひちがひ、犬死なす歟……

トいひさして、無念の思入。皆々同感し愁ひの思入にて俯向いてゐる。舞臺しばらく寂となる。此以前、石川は「ア丶わるいことをした」と苦悶の思入ありて、力なげに庭上に坐し、愁然として俯向き、竊かに自殺の支度をする。ト此時揚幕の方にて俄にドンチャン。皆々向うを見込む。

主膳　さては大野が討手の者共、はや押寄すると相見えまする。

市ノ正　物見めされ。

主膳　ハッ。御免。

ト主膳ノ正二重をおりる。此うち石川は差添を拔き、腹へ突き立て、こなしあつて

石川　いかなれば、かくまでに、不覺に不覺を重ねたるか。……無念至極。

トこれにて主膳も家來も驚きて、左右より石川の傍に集る。

主膳　ヤ、、何ゆゑに伊豆どのには……

家來　ヤ、御主君には……

皆々　御切腹。

ト家來ら取附きて愁ひのこなし。

石川　（家來らを押しのけながら）旣に先達て此家にて、相果つべかりし貞政が一命、今ン日まで存らへしは、市ノ正どのゝ誠忠に感じ、何とぞ一臂の力を添へんと、其後は夜の目も合はず。いかで奸邪をとりひしぎ、忠臣の念願を遂げさせんと思ひし事も仇となつたか。われ若し今ン朝心はやり、大野が邸へ亂入せずば、せめて、最期の一つの望みを、貴殿に遂げさすべかりしものを。（ト無念の思入）たが誠忠の市ノ正を、むざ／＼犬死さするぞヤイ。仇敵は大野、渡邊ばかりか、身方にもかゝる粗忽者。……かくまで短慮に生みつけし父母が怨めしいわい。……ナウ且元どの。此しやッつらを踏みにじり、せめても遺恨を晴らして下され。無念晴れたの一言が、此貞政には最期の引導。たのむ／＼。

ト此以前、市ノ正二重をおりて、立身のまゝ石川の傍に愁然としてをり、此時手負のすぐそばへこゞみて

市ノ正　過分でござる、伊豆ノ守どの、驅も舌に及ばぬ後悔。由なき愚痴を申せしため、義烈の勇士を失ひしは、

此の市ノ正が一期のあやまち。

ト後悔の思入。

石川　すりや貞政があやまちをば、貴殿は赦し下さるゝか。

市ノ正　赦せとは此且元が、御邊にこそいふべき詞。やがて後より追付き申す。尙ほ詫びごとは冥土にて。

ト市ノ正落淚のこなし。

石川　チエかたじけなし。此上は思ひ殘すことかッ　ふつなし。たつた一言讃きみやげ。愚者にも一得、いまはの忠言。なにとぞ自殺を思ひとゞまり、一先づ此場を落ちのびられよ。今死するは犬死。いづこへか身をかくし、時節をばお待ちなされ。輔弼の大功成りしといふ、土産を冥土で聞くがたのしみ。短慮は貞政がよき戒め。短慮は短慮は。……

ト此うち石川次第に弱りて落ち入る。此以前よりドンチャン次第に近くなること。此時向うより以前の今村、十河、小具足にて走りいで、すぐに舞臺へ來り

十河　大野が討手、惣勢凡そ三四百人、程なく押寄すると相見えまする。

今村　我々防戰仕りますれば、御主君には、ともかくも、一先づ御落去遊ばされませ。

ト此うち伊豆ノ守の家來は泣く／＼石川の死骸を手舁にして下手へ入る。此時市ノ正は此知らせを聞流してしづかに二重に上る。舞臺半廻し。

市ノ正　百計悉く心と齟齬し、死すべき折をさへも失うたり。討手寄せ來るとも、防ぎ矢の用意は無用。家臣一同へは有り合はす用金を分ち與へて落去させよ。貞隆にはお家の後事につき、申し遺すことあり。居間へ。

風の音して、只一二枚殘つてゐたる梧桐の葉落ちる。

市ノ正是へ目をつけ

我が名に因む庭前の、梧桐悉く搖落なし、蕭條たる天地の秋。……アヽ、有情も洩れぬ榮枯盛衰、是非もなき定めぢやなア。

ト此見え、よろしく。

―幕―

第二場　長柄堤訣別

本舞臺一面道具幕、長柄堤の一部の心にて、深き霧を透して、おぼろに大阪城の天守見ゆる體。夜明方。幕あくと、大野の家來白倉權六、鐵砲を携へたる雜兵大勢をつれ、立ちかゝり居る。トばた／＼にて同じく大野の家來神崎治右衞門、向う揚幕より驅け出て來る。

白倉すかして見る。

白倉　神崎氏でござるか。

神崎　白倉氏か。片桐主從は、程なくこれへまゐりまする

ぞ。御油斷めさるな。

白倉　心得申した。昨日彼れが邸を閣み、お討取りあるべきお手筈なりしが、修理ノ亮さまの御智略にて、わざと彼等の英氣を拔き、落行く途中で討取る魂膽。

神崎　覗ひの的は旦元一人。三十餘挺一時に、彼れを目あにて切つて放さば、討洩らすことはよもあるまい。

白倉　者共必ずぬかるまいぞ。

皆々　心得ました。

ト此時鐵砲の音して、神崎に中り、よろしく落入る。これにて一同驚きあわてる。途端に下手より片桐が家來木村らを先きに、家來大勢、何れも陣立にて、拔きつれて出で

木村　かくあらんと豫ての手配り、主君を守護する吾々が

……

皆々　遺恨の太刀先き受けて見よ。

ト切つてかゝる。大野方は、あわて騷ぎ、すぐ逃げて入る。片桐方追うて入る。

ト是れより床の淨るりになる。

淨〽長鷄再び鳴いて殘月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ、はや別れ行く横雲や、殘んの星を一つづゝ、鐘が消し行くいなのめの、長柄堤に秋たけて、一叢蘆に風黑く、ありあけ淒き淀川みづ。

ト よき頃に道具幕を切つて落すと長柄堤の體、本舞臺、道具、背景よろしく。こゝに平舞臺上手よき處に、市ノ正床几に腰をかけ、其うしろに乘馬に馬丁二人附添ひ控へ居り、下手よき所に主膳ノ正つくばひ、其下手うしろに家來大勢ひかへてゐる。

市ノ正　討手來らざれば自裁も叶はず、人々の諫めに從ひ、茨木へ落去とは決せしものゝ、お家の後事を長門ノ守に託しおきたく、先刻ひそかに三右衛門を木村が邸へ走らせたり。われはこれにて返事を待たん。御ゝ身はわれに代り、手勢を差配し、一足先きへ參らるべし。

主膳　仰せではござりますれど、油斷ならざる折柄、只御一人此の處にござあらんは心元なし。

市ノ正　いや、それはいらぬ遠慮。われらが警護は、豫て清藏らに申し含めおいたれば氣づかひなし。……（ト向うを見て）オ、あの人影は。

淨〽詞のうちに、はるかに足音

ト此時今村三右衛門、揚幕より急ぎ足にて出て來り、すぐ本舞臺へ來て

今村　ハッ、申し上げまする。長門さまには、おッつけ是れへ。

市ノ正　大儀々々。然らば弟、御ゝ身は先きへ參られよ。其方も共に。

ト今村へこなし。これにて主膳ノ正は一同へこなしあつて、市ノ正に會釋し、皆々を引きつれ、二重に上りて上手へ入る。

淨へ顔見合せて是非なくも、主膳を先きに一同は、心殘して行き過ぐる。

淨へあとには何か一思案。寂然として駒立つる、長柄堤のありあけがた、見る目もくらしをち方に、朧々とあらはるゝ、名に大阪の四衢八街、悄然として一むね高くそびえしは

ト此文句の間に、市ノ正は馬に跨りて二重に上り、向うを見ることあり。

市ノ正　おゝ、あれこそはお天守ぢやなア。

ト向うを見てよろしく思入。

南山不落と築はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下かくれさせたまひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ〴〵、今にもあれ事起らば、金城湯池も其甲斐なく

淨へいひかけて聲くもらせ、こらへず馬より飛び下り

ト文句の通り。

これ併しながら不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循して大事を誤り、關東の罠にかゝつて、御遺命に戻り奉るけふの仕合せ。不忠とも言甲斐なしとも思し召されん。それを思へば此はらわたは、ちぎるゝばかり。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御ン詫び仕らん。おゆるしなされて下さりませ。

淨へ人目なければやゝ暫し、不覺の涙に暮れけるが、ややあつて心づき

我れながら不覺の至り。大罪の御ン詫よりも、さしかゝるお家の安危。……長門ノ守にはいかにせしか。ハテ心元なき……

トいひつゝ馬を二重上手物かげへ引き行きて繋ぐこと。

淨へすかしながむる折こそあれ、殘霧つんざき一さんに、走せ來る木村長門ノ守

ト向う揚幕より、長門ノ守馬に乘りて驅せ出て來り、本舞臺の方をすかして見て

木村　市ノ正どのに候ふな。

市ノ正　長門どの、待ちかねしぞ。（ト二重をおりる）

淨へいふ間に驅け寄る轡づら、右手におり立ち、顔見合せ、詞はなくてそゞろにも、先づ袖ぬるゝ朝露や。

ト木村馬よりおり立ちながら且元と顔を見合せ、しばらくは無言にて落涙のこなし。やがて下手の柳の木へ馬をつなぎて、舞臺の中央に進み、市ノ正と向ひあふ。

木村　最早豐臣の御ン社稷も、いよ〳〵末と成つたるか。

棟梁と頼む貴殿まで、佞人讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。（ト愁ひの思入ありて、市ノ正は傍らの木の根に、重成はよろしく其下手に踞みて）それがし圖らぬ事よりして、はしなくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の其間（そのひま）に、思ひがけぬ珍變あり、つゞいて貴殿に御ン討手と、昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論湧くが如く、織田入道どの、日頃に似げなく、激論の末席を蹴立て、只今退座ありしとばかり。跡は亂脈無法の評定。御母公の威を笠に着る大野、渡邊らが我意暴慢。此上は彼等を一刀に切つて捨て、腹掻ッ切らんと再びまで、刀の欛に手は懸けしが、貴殿が日頃の敎訓を、思ひ出だして無念を忍び、むじつと知つて忠臣を、救ひ得ざりし言ひ甲斐なさ。

淨へ海むを目元押しなだめ

市ノ正　いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢々申せし如く、お家の大佞（だいねい）は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を捨つるは、大忠臣の所爲にあらじ。大切なるはお家の後事（こうじ）。某退去の事關東に聞えなば、大亂破裂せんは目前なり。此上は只偏へに、籠城の計畫こそ肝要なれ。

木村　して籠城の計畫とは、何を以て先きとすべきか。

市ノ正　されば、今御ン城に兵糧金銀は乏しからず。まッた猛將勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某之れを慮り、萬一の備へをなし置いたり。

木村　して其智謀の將と申すは。

市ノ正　今九度山に隱れ忍ぶ、信州上田前（さき）の城主、眞田安房ノ守が二男、左衞門ノ佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ、智勇兼備の良軍師、先年お身方となし置いたり。合戰の驅け引きは、一切彼の仁に任せられよ。

木村　して又籠城となつたる曉、敵を防がん手配りは。

市ノ正　其儀も豫て地理を考へ、出丸なくては叶ふまじと、先年紀州の山々より、材木あまた切り出させ、お船入りに積み置いたり。まッた湊口の御ン藏には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るといふとも、尙ほ支ふるに餘りあるべし。

木村　是れに加へて故殿下が、府へ置かれし數萬の金銀、近年御ン費用嵩むといへども、猶ほそこばくの餘財あり。

市ノ正　甲冑兵具も乏しからず。

木村　城に名におふ南山不落。

市ノ正　忠臣悉く心を一にし、あの堅城に立籠り、偏へに君家を守護するときんば……

木村　たとへ關東の老奸雄、利をくらはせ、諸大名をなづけ、六十餘州の兵を盡くし、四方八面より攻め寄すとも

……

市ノ正　中々三年、四年が程には、攻落さん事難かるべし。

木村　まッた若年には候へども、彌々軍始まりなば、我れ又一方を承はり、速見、御宿、和久らと共に、忠義を金鐵の堅さに比し、命は元より鴻毛の、吹きひるがへさん旨趣は、眞先佐々木が四つ目結、君臣將士心を一にし、千萬變化の手を盡さば、金石も又透りぬべし。利慾に集る關東勢、何退くるに難かるべきや。此上は仰せに隨ひ、此事君に言上なし、直ちに軍の手配せん。お心安かれ市ノ正どの。

市ノ正　ほゝ、頼母しゝく。只大切は上下の一致、必ず忠勤にはげまれよ。……とは言ひながら往時に照らし、成り行く末をかんがみれば……

木村　御母公の御ン氣質、社鼠に等しき大野、渡邊。

市ノ正　上御聰明に渡らせらるれど……

木村　讒侫之れを覆ふが故……

市ノ正　地の利はあれども、人の和なく……

木村　故太閤が御ン威武に、をのゝき震ひ打伏せし、六十餘州の民草も……

市ノ正　天の時にや大御所の、おのづからなる德風に、いつしかなびく世の有樣。

木村　いかなればかくまでに、御運傾く西天の……

　ト此内あちこちにて鷄の聲。市ノ正落ちかゝつてゐる月を見やりて

市ノ正　有明けの影うすれつゝ……

木村　東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけに……

市ノ正　新日東天に昇るといふ……

木村　世の成行の……

兩人　影なろか。

　淨〽せひもなき世の有樣と、暫しは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〴〵と明けにけり。

　此時鐘の音聞ゆる。夜明けの心。尚ほ處々に鷄の聲。

市ノ正　後事をそこもとに託せし上は、最早思ひ殘すこともなし。

木村　して貴殿には是れよりして……

市ノ正　居城茨木へ一先づ立越え……

木村　と仰せあるは受取り難し。もしもや是れが今生の……
……

市ノ正　ア、イヤ、いさぎよき最期をだに、遂ぐべき機會を失ひし市ノ正が命の拙さ。御ン詫の名こそ立ため、償なひ難き身の大罪。此身一つをとやかくと、千筋に迷ふ心の中。（いひかけて氣をかへ）イヤナニ心許りは此後とても、君の御影に附添ひ參らせ、萬一にも祀變的中なし、大事去りなん其時には……

木村　某とても事破れて、御運の末と成る時は、此世の思ひ出、奉公納め、關東勢が眞中に縱橫無盡の血戰なし、

華々しく討死なさん。

市ノ正　オ、勇ましゝ、いさぎよし。某ながらへ世にあらば、其日ざましき働きをば、餘所ながら見物なさん。猶は再會は黄泉にて。

木村　さやうござらば市ノ正との、

市ノ正　隨分堅固で、……

木村　貴殿にも。……

淨〽をしきが中の生別離、まことや是れに比ぶれば、黄蘗は蜜にも似たるらん。駒引きよせて式退や、見返りがちに乘り移る、秋さび月毛乘る人の、心やいかに片手綱。

ト此うち木村は柳の木に立寄りて馬の紲を解く。市ノ正は鐵扇を開きて二重の上手へ合圖をする。

ト木村滿藏二重の上手より以前の馬を引きて出で、平舞臺へおりる。これにて市ノ正も木村も馬に乘る。

市ノ正　さらば。

木村　さらば。

淨〽と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇るおぼろ／＼、いなゝく駒の聲はして、此世に殘す面影は、又見ぬ影とぞなりにける。

ト此うち市ノ正は二重の上へ、木村は平舞臺の下手へと馬を進め、互ひに見返ることよろしく。

―― 幕 ――

沓手鳥孤城落月　（三幕六場）

事前の事情

沓手の凱歌遠方に消えて、燃えのこる兵火五月の空をこがし、赤色の七日月血汐をあびたる利鎌のごとく天守臺の西に落ちなんとす。南山不落の大阪城も餘命こよひを限りとぞ見えし、後藤、木村、薄田をはじめとして頼みきつたる勇將は先きだつて討死し、渡邊内藏介も重傷を負ひ、夜に入つては天王寺口も悉く敗れ潰え、軍師眞田左衞門佐幸村も命を落し、殘る四天王の隨一人、長曾我部盛親父子、また大野修理亮治長の弟、入道々軒、其の他二三の股肱のやからも、如何さまに思ふ所ありてか、遽かに敗軍の途中より遂電せり。さるほどに敗報櫛の齒を引くが如く、秀頼卿も今は是れまでと思されければ、徐に千疊敷に入らせたまひて、既に御生害の御覺悟ありけるを、毛利勝永、速水守久ら「夜中には敵も攻め詰め候ふまじ、夜明けて後に御覺悟あつてもおそかるまじ」と修理亮もろとも押しとゞめまゐらせければ、君も一たびは思ひとゞまらせたまふ。かくて守久らはそれ〴〵持口を割り渡して外郭を固めさせつつ、尚ほ隈なく指圖して見苦しき物どもを取りをさめ燒きすてなんどする程に、未練臆病のともがらは、竊かに夜に乘じて拔けいで思ひ〴〵に落ち失す。子の時過ぐる程までは城内騷然と濫りがはしかりしが、更けゆくまゝに漸う打ちしめりゆく奧殿物さびしく、女わらべ寄りこぞりて泣き惑ふさま哀れなり。時に元和元年五月七日の夜、豐臣家滅亡の前夜なり。

第一幕

大阪城内の奧殿

正面は左右へ廻して高欄附、廣椽の奧御殿、正面には階段、尚ほ上手奧へ辿つて椽側つゞきの別棟。下手奧にも別棟、築山、泉水と共に遠く見え、前の方にも植込。上手々前は稍〻高き緣代垣。殿上には、燭臺が只二基、上手と下手とに不規則に置いてあるのみで、人影は見えない。雨車。ト向うより腹卷した武士二人宛

にて大將分らしい手負の武士二人を各々擔に載せて擔き荷ひつゝ出で來り、上手網代垣の後へ通り拔けて入る。トすぐ後から婢らしき年配の女と同じく若い女とが甲斐々々しく襷がけにて、白布、蒔繪の手桶などを携へ、急ぎ足にて下手より出て來り、續いて上手へ入る。ト遠寺の鐘。やがて殿上の下手奥から雜仕のたひに侍女初葦、紅葦、錦木、花野、しを／＼と、何れも泣きながら出て來て、不規則に居並ぶ。

初葦　ナア申し、紅葦どの、かうして互ひに話しあふも今宵限りでござんせうぞえ。かうなること〻知つたなら、此正月の宿下りに流行風ひいたを幸ひ、養生せいであのまゝに、母さんの傍にゐつらうもの、情けないことになつたわいなア。

紅葦　お前はまだしもお正月に、お宿下りをさしやんしたゆゑ、諦めも附けば附く。此七月を樂しみに空待した妾の心、推量して下さんせ。

錦木　そりや妾とても同じこと、宿世ぢやと斷念めて、死ぬる覺悟はしてゐれど、成らうことなら、たつた一目、母さんの顏が見て死にたうござんす。

花野　それもなア、如何あつても、所詮助からぬと思ふにこそ、御臺さまにおすがり申し、お命乞ひをなさるれば、上さまはじめ我々も、きつと命に助かるげな。最前も大藏さまや皆さまが、御臺さまを關東へ、御陣にお送りなさるゝやう、御前にお勸めなされたれど……

錦木　さては關東に內通して、姬を逃す心であろ、千姬は一寸も、こゝ離すことならぬ／＼とお腹だち。あられもないお疑ひ。

花野　それといふのも段々と、日ましに募る御不例ゆゑ。

紅葦　其の御不例の源は、淀さまのお譫言で、お果てなされし關白さまのお怨み。

初葦　眞に怖しいもので……(ト皆ぞつとした思入)

皆　ござりますなア。

錦木　とはいへ、此方は知らぬこと、怨靈さまも聞えぬ。どうでも明日は死ぬのかいなう。

初葦　紅葦どの。

紅葦　初葦どの。

花野　錦木どの。

錦木　花野どの。

ト四人互ひに顏を見あはせ、手を取りあひて、一齊に聲をたてゝ、はしたなく泣き伏す。此時奥女中小車の局、雪洞を手にもち、奥より立ちいで

小車局　又してもはしたない。常とはちがひ、お座所が近うござりまするぞえ。見苦しい。たしなみませうぞ。

皆　ハイ／＼、御免なされて下さりませ。

小車局　明日のお心まうけで、幾人あつても手は足らぬ。うッかりしてゐる時かいの。そもじたちもお手つだひ。さゝ、殘らず揃うて、奥へ〳〵。

ト此せりふにて皆々を追立てる。初葉、紅葉、錦木、花野、涙をふき〳〵會釋して、しを〳〵と奥へ入る。小車獨り殘り、皆々を見送り、やがて四邊へ思入ありて、階段の降り口にて

眞田、木村を初めとして、諸將大かたは討死なし、今宵に縮まる當家の運命。四國譜代の歷々さへ、秋をまづ知る一葉の、倒れかゝりし古軒端に、巢まで殘して散りぢりばつ〳〵。只一代の榮耀の花、散つて殘るは身一つの、落日も當家の自業自得。かうあらうと思うたゆゑ、關東へ心を通じ、本多正信との〻内意をうけ、何卒首尾よう千姫さまを誘ひいだしまゐらせんと、此正月の始めよりお端女に住みこみし、本多家の奥女中、常磐木と心を合せ、日毎に油斷を窺へども、淀さまの鵜の目鷹の目、けふまでは空に過したれど、もはや今宵は延ばされぬ。（ト思入）常磐木を呼びいだし、今の間に手筈をせうか……イヤ〳〵それよりもまづ姫君さまを。幸ひ奧は取込最中……今の間に隙を見合せ……さうぢや。

ト上手の奥へ行かうとする。此以前下手築山植込かげより、婢女お松、實は本多佐渡守が家臣某の妻常磐木、赤合羽、竹の子笠にて面をかくし、あたりへこなしあつて忍びいで、此時すかし見て、つか〳〵と階段のほとりへ來て

常磐木　小車さま。

小車局　ヤ、常磐木どのか。

常磐木　アモシ。

ト常磐木四邊へこなし、階段の下に居る。小車は階子の降り口に坐る。常磐木聲を竊めて

常磐木　小車どの、もはや今宵は外されませぬぞ。

小車局　今も今とて其の事。未練の歎きに上下とも、眼くらむ油斷ぞ幸ひ……きつと首尾してお姫さまを、こゝまで程は難けれど……番所々々の目をかすめ、郭をぬけでる手段は何と。

常磐木　オヽ、其のお氣づかひは御無用々々々。妾が手にさへ受けとらば、お姫さまを婢にしたて、御本丸をぬけでる工夫は、お料理番の大住與佐、それから先きは同腹中の佐々孫助が豫ての魂膽……必ず大事ござりませぬ。何はともあれ、片時も早う。

小車局　それ聞いて安堵しました。そんなら此間に。

トゆきかける。

常磐木　アモシ、必ず共に

小車局　合點ぢやわいなア。

ト二人よろしくこなしあつて、小車は急ぎ緣側づたひに上手奧へ入る。常磐木獨り殘り

常磐木　どのやうな明君さまも、子ゆゑの闇にはお目がかすむ。お姬樣が絆となり、いざ落城の間際となつて、御成敗の手が狂はゞ、耕した地面に蒔かぬ草の、種を貽すも同然ゆゑ、其の禍ひの根を絶つため、事にさきだち千姬さまを、伴ひいだしまゐらせよとの嚴命をうけ、夫の指圖に隨うて婢女に姿をやつし、邪推、疑ひ、依怙贔屓、其の同士打を附け目にして、あの小車にまづ取り入り、まんまと奧に住みこみしも、數ふれば早や五月。萬一こよひを過す時は、辛苦の萱も一日の煙り。どうぞ首尾ようお姬さまを、お伴したいものぢやなア。

トこのうち上手別棟の妻戶を開きて、内より以前の小車、小脇に召換の包みを抱き、秀賴公の御臺所千姬君の手を引き、わざと灯を持たず、緣づたひに闇中をさぐり〳〵いて、やがて此方へ近づく。ト俄に足早に走りいづる。すぐ其の後より淀の方、薙刀を小わきに搔いこみ、同じく忍び足にて附けて出る。

小車局　常磐木どの。（ト常磐木、千姬に會釋しようとするを止めて）ア、コレ、お會釋は後に〳〵。めさせかへます暇はない、植込かげで此の召物……

ト常磐木に包みを渡し

かういふうちも心がせく、人目にかゝらぬ其のうちに（ト千姬を促すと、千姬は名殘をしげに見返り）

千姬　そんなら小車、また逢ふぞや。必ず無事で（トいひかけるを止めて）

小車局　アモシ、何にもおつしやりまするな。常磐木どの、片時も早う。

常磐木　さア、かうおこし遊ばしませ。

ト常磐木階段を上り、千姬君の手をとらうとする。此以前、淀の方此方に近づき、緣側の小簾かげに身をひそめて問答をきいてをり、此時つゝと出で

淀君　曲者ッ。

ト三人あなやと驚きふりかへる。小車、淀の方を見て

小車局　ヤ、あなたは……

トあわてゝ下手へ逃げようとしたが、忽ち懷刀を拔いて淀の方へ切つてかゝる。淀の方薙刀にてあしらひ、二三合あつて見事に小車を斬り倒す。小車すぐに息たゆる。常磐木も不意に驚き二足三足階下へあとずつて、急ぎ合羽をぬがうとしてぬげぬ思入、こなし。同時に千姬が怖れて階段を駈け降りんとするを、淀の方すかさず薙刀の柄にて遮り

淀君　曲者が入つたるぞ。出あひませい〳〵。

此うち常磐木は懷刀をぬき、淀の方にかゝる、ト淀の

方千姫が上手へ薙刀にて追ひのけ、一寸立廻る。此途端、奥及び下手より饗庭の局、梶の葉の局、其他女中大勢、駈けいで、饗庭の局にすぐに割つて入り、手早く常磐木を階下へ突落す。梶の葉、其の他助けて、激しき立廻りにて常磐木は懐刀を打落され、遂に梶の葉の為に腕をねぢあげられて、いましめられる。此以前千姫再び階段を駈けおりんとするを淀の方薙刀の柄にてしかと抑へる。

饗庭局　驚き入つたる意外の珍事。御前さまには、どこもお怪我はござりませぬか。（ト千姫を見て）ヤ、あなたは千姫君さま。

梶の葉　（ト小車の死骸を見て）ヤヽ、こりやこれ、小車どのゝ……

皆々　此の體は。

ト皆々驚く。千姫ふるへてゐる。此以前、腰元二人階下に降り、梶の葉から常磐木を受取り、下手の庭木に繋ぎ、番をしてゐる。淀の方は御薙刀の柄にて千姫をおさへたまゝて、一同をジロリと見かへり、わざと始めは靜に

淀君　ヤイ皆の者、目を隙いてよう見やれ。イヤサ、よう主の命まもり、よう用心してたもつたなう。斯うあらうと知つたるゆゑ、千姫どのに氣を附けいと、吩咐けたを鼻であしらひ「何の大事ござりませう、御臺さまは確と私しがあづかります」と口廣う言うた饗庭をはじめ、邪推ひがみと常日頃、後言を言ふ其方たちは、眞に甚い天眼通、テモ頼もしい（ト千姫を手荒く上手奥へ突きやりて薙刀を抛げいだし）不埒者めが。

トきつく言つて、淀の方忿怒の思入。眼尻をつりあげ身をふるはせつゝ、皆々を睨みまはして座につく。饗庭の局は面目なげに手をつき

饗庭局　恐れ入りましてござりまする。何と申しわけ仕りませうやら、恐れ入りましてござりますれど、餘人は知らず小車に、かやうな野心がござりませうとは、夢さら以て存じませず……（トいひかける）

淀君　默りや。口と心とは裏表、人の心は上に見ゆるものでないと、そちや今日となつてはじめて知つたか。イヤサ、そちや何歳ぢや。此大奥に奉公も、數ふればはや二十餘年、二十餘年の其のあひだ、恩をうけ、目をかけた大恩ある主の零落に、ようも／＼、只おのれらの身を思ひ、あの大藏に相槌うち、忠義ごかしに千姫を、おめおめ關東の陣所に送り、降參せい、と勸めたな。それを功におのれらの、命たすかり、あはよくば、榮利を圖る下心と、こちや夙に見ぬいてある。ア、讀めた、その手筈が狂うたゆゑ、わざと油斷し隙を見せ、關東方のまはし

らめに、千姫どのを逃ますのぢやな。

饗庭局　物遠ない、滅相な。何のマアそのやうな。最前申しあげたは、恐れながら御助命の、其のおとりなしを御臺さまに、お縋り遊ばし大御所さまに……（トいひかける）

淀君　默れ。

饗庭局　ハ、。

淀君　何ぢや、縋れ。縋れとは誰れに言ふ。イヤ、みづからは右大臣秀頼が母ぢやぞよ。縋るとは、彼方が尊く、此方が卑く、又は此方に非分があつて、慈悲憐愍を願ふの喩語ぢや。假令のたれ死しようとも、あの義理知らずの徳川に、何で縋つて頼まうぞ。太閤が今おはさば、あの古狸にこそ吠面かゝせ、乞食が物乞ふやうに、此方に縋らせて見せうものを。何で彼奴に縋らうぞい。よし縋らうとも、聽けばとて、彼奴らの言葉が頼みにならうか。現の證據は太閤の（ト涙聲になり）最期の、最期の依頼さへ……反古……同然……

トとぎれ／＼に、いひかけて淀の方噓唏し、言葉がとぎれる。

饗庭局　恐れながら御前さま、そのやうに御意遊ばしまするは、御遠慮過ぎたお心遣ひ。最前も大藏卿が申せし通り、まこと徳川腹黑く、お家に仇をばなされしとも、虎狼さへ手向は弱い者をば庇ふと聞く。ましてや御臺さまは孫姫君、御臺さまのお口から、願はせられなば御助命の、お沙汰に御違背ござりませうや。只今の場事につけ、察せられまするは彼方さまの御心底。恩義を見するは今此時。時おくれては詮ないこと、何とぞ御賢慮遊ばされ、今夜のうちに御臺さまをば……（トいはせも果てず）

淀君　默れ。大それた不埒不覺を、まづ詫びようとも致さいで……仔細らしい諫言ごかし……ア、きこえた、こりや何ぢやな、そちも小車と同腹ぢやな。

饗庭局　まつたく以てさやうな心は……

淀君　さうでなくば何故に、姫を今夜逃さうとすは、彼方の心が察せらるゝ、逃したいと何故言うた。イヤサ受けあうた千姫を、なぜ油斷して逃させましたぞ。

饗庭局　サ、その儀は。

淀君　怪しい女をひきいれて、みづからに手向ひさせ、それでも不忠でないと申すか。

饗庭局　サ、それは。

淀君　疑ひもなく其方は、大藏、小車と心を合せ、當家危急となつたるゆゑ、恩を忘れ、利に迷ひ、徳川に內通なし、千姫を無事に落し、其れを功に命助かり……（トいひかける）

饗庭局　エヽお情けない其の御疑念……(ト泣く)

淀君　イヤ、さうぢや。さうぢや／＼。道軒めが逐電も其の手筈を合はせう爲ぢや。言ひわけあらば返答せい。何とぢや。どうぢや。

ト淀の方ゐだけだかになつてきつといふ。饗庭こらへかねてハラ／＼と落涙し、さしうつむき默つてゐる。

梶の葉の局恐る／＼膝を進め

梶の葉　憚りながら申しあげまする。餘人であらば存ぜぬこと、饗庭の局に限りましては、よもやさやうな不忠な心は……

淀君　ないとはいはさぬ、證據は目前。若しみづからが目ざとく見つけ、あの曲者を成敗せずば、其方たちは何とするぞ。

梶の葉　サ、その儀は。

淀君　怪しい女をひきいれて、手向ひさせたは誰が罪ぢや。

梶の葉　サ、それは。

淀君　主の寢息をうかゞうて寢首を掻かうも知れぬ奴。ヤイ、饗庭、道軒も、大藏も、必定そちと同腹中であらうがの。返答せい。どうぢや。

ト淀の方柳眉を釣りあげ、顏色も蒼くなつて、睨みつめて詰問する。饗庭の局は此間さしうつむき、默然と涙にくれてゐたが、此時面をあげて

饗庭局　おそれ入りましてござりまする。斯かるお疑ひを蒙りまする上は、半時生くれば半時の、御心勞を加ふる道理。また存へても寸分の御奉公を盡す頼みも無し。御前を汚すは恐れ多うござりますれど、不忠不覺の申しわけ(トいひかけて、急に懷刀を取いだし)まつこの通り。

トすぐに拔いて自害しようとする。梶の葉驚き止める。此以前より上手の小簾かげにて樣子を聞いてゐた正榮尼(六十七八)緣側づたひにかけ入り、懷刀を持つ手をおさへて

正榮尼　コレ、血迷うてか、饗庭の局……マ、こゝをおはなしなされ。……如何なる折と心得られるぞ。命一つを棄つればとて、何事の申しわけにもなりませぬぞ。

饗庭局　ぢやと申して、此まゝに……

正榮尼　ハテマア、お離しなされといふに。

ト懷刀をもぎとる。饗庭面目なげにうつむく。正榮尼は恭しく膝をすゝめて

正榮尼　恐れながら、御前さまへ申しあげ奉りまする。誠にはや、御前さまの御賢察に露ばかりもたがひませず、果してかやうな大珍事、圖らずも出來なし、何とお詫びの申しあげやうもござりませぬ。とはいへ、かゝる仕儀に及びましたは、畢竟私共一同の不束、誰れ彼れ一兩人の懈怠不所存でもござりませねば、何卒もちまして此尼

に免させられまして、恐れながら褒庭が御不興、御宥免の下されまするやう（トいひかけて、後を見返り）禔の葉どの、それぞれ、皆も一しよに。……

　これにて禔の葉はじめ腰元らまで膝を進めて

禔の葉　何卒もちまして、褒庭の不埒を、御宥免下されまするやう……

腰元　私どもゝ共々に……

皆　お願ひ申しあげまする。

　ト此以前、淀の方は、正榮尼の言ふ事を善くは聞いてゐぬ思入にて、折々千姫の方を凄い目をして睨みつけてゐたり、此口上が終ると、ふいと立つて階段近くまで歩み出で、階下にいましめられてゐる常磐木に目をつけ、急に正榮尼を見かへり

淀君　正榮尼。

正榮尼　ハ、。

淀君　あの者は竟ぞ見ぬ婢女、通し者に相違ない。引きいだして糺問せい。

正榮尼　ハ、。

　ト正榮尼は不意の命に聊かうろたへた思入、やがて腰元らに指圖して、階段の間近へ常磐木をひきすゑさせる。

正榮尼　オ、此者は、此春このかた御奉公せし婢女。

淀君　面を上げさせい。

正榮尼　ハ、。……ヤイ女、面を上げませい。

常磐木　（しづかに）面を上げまするまでもござりませぬ。關東の内意を受け、大膳にも入り込みしが、事敗れし上からは、とうに覺悟は極めし此の身。サアすつぱりと御成敗遊ばしませい。

淀君　ヤアその覺悟顔が憎い。同類があまたあらう。言はずば苛責して白狀させい。

常磐木　（冷然とおちつきて）その苛責は詮ないこと。同類は天にも地にも小草どの只ひとり。お姫さまに此事をば、知らせましたも今がはじめて。

淀君　イヤ偽りは其奴の目色に見えてある。白狀するまでは折檻しや。

　ト此うち常磐木思入あつて

常磐木　テモマア、最前からのしだらといひ、聞きしにまさる病氣、まはり氣。それが募つてか殘忍非道。豐臣家の滅ぶるも、眞にマア無理は無い。

淀君　何ぢや。殘忍ぢや、非道ぢや。（怒りに身をふるはせながら）今一度言うて見い。

常磐木　エ、言はいでかいなう。（トきつとなり、淀の方をつくづく見上げ）マ、見れば見る程美しい、其容貌には似も附かぬ、怖ろしい内心如夜叉。關白どのを始めとし

て、御寮、若君三十餘人、殺してのけたも皆其口。豐臣家の亡ぶるも、所詮はおことの心から。話に聞いた唐土の、褒似や妲妃にも劣らぬ妖婦。毒婦とはおことのことぢや。

ト手强く言ふ。淀の方憮となつて

淀君　默れ。其頸……同類あるに相違ない……正榮、此懷刀で斬つて〳〵、白狀するまでさいなみませい。

ト懷刀を正榮に渡さうとする。正榮立ちかねる。

エ、何をうぢ〳〵。……ム、、そちや此女を庇ふのぢやな。

正榮尼　イエ、さやうではござりませねど、あまり酷いかと存じまするゆゑ。

淀君　酷い。……すりや、そちも小車と同腹ぢやな。

正榮尼　めつさうな、全くもちまして……

淀君　さうでなくば……エ、きり〳〵と拷問しや。

正榮尼　ハ、ア。

ト此うち常磐木決心の思入、此時みづから階段に頭を打附けて舌を噛み切り、繩つきのまゝにて苦む。

腰元共　ヤ、曲者には。

ト皆々驚き、繩取の腰元共駈け寄り介抱するうち、常磐木落入り倒れる。淀の方之れを見て

淀君　ヤ、大切な手がゝりを。なぜ殺した、生害させた。

エ、大切な手がゝりを。（ト身もだえして殘念がり）おのれ、わざと油斷して自害させたに相違ない。たとへ手がゝりは失ふとも、此惡計の一味同類、さがしいださいでおかうか。

ト忿怒の體。此以前常磐木と淀の方との問答の間に、腰元ら梶の葉の指圖にて小車の死骸を方附くることあり。それが濟むと梶の葉は泣伏してゐる上手の千姫の傍へ行きて、何か囁き慰めてなり、常磐木が自殺の騷ぎを幸ひ、千姫を促しつゝ、奥の方へ竊に退出しようとする。淀の方ふと上手を見て、千姫の居らぬに心附き

ヤ、姫はどこへ……姫……（忽ち見つけて）オ、千姫との。

梶の葉はつと驚きて下手へ退る。淀の方つゝと寄つて千姫の袂をとらへ

コレ、どこへ〳〵……イヤ〳〵、逃げうとて逃がさぬわいの。マ、、こゝへござれ。……ハテこゝへ、ござれといふに。（ト座につき、千姫を引寄せる）

千姫　ハアイ。

ト千姫は顏をあげかね、只うつむいて慄へてゐる。皆々顏を見合せ、支へかねてゐる。

淀君　コレ、千姫どの。いかに義理知らずの家康が孫女ぢ

やとて、夫秀頼の命、旦夕に迫つたる今日こよひ、無仁にも、無情にも、何ぼ命が惜しいとて、ようまアのめのめ振り棄てゝ、落ちようとなされたの。兎の毛ほども義理といふこと、操の辨へがあるならば、とうにも關東のお祖父どのに命がけの意見もあるべき筈を、恥知らず、義理知らず、人情知らずの人狼、人くさ鷹の孫なりやこそ、ようも〳〵人質となつて油斷させ……豐臣の家を亡しましたな。コレ豐臣の家を滅したは、おぬしぢや。そもじぢや。そもじぢや〳〵〳〵。

ト術なげに俯いてゐる千姫をこづきまはして 怒り怨み、トヾ聲をあげて狂人の如く噓唏する。正榮尼見かねてとりさへ

正榮尼　ア、申し、其お怨みもお道理ではござりまするけれど、お察し申し上げまするに、不慮のこよひの大珍事は、全く小車らの思ひたち、申すまでもござりませぬが、御臺さまには露いさゝか、御存じない事でござりませう。……申し、御臺さま、ナアさやうでござりませうがな。

千姫　アイ、そもじのいやる通り、みづからは何にも知らず、小車が卒然と來て、兎も角もそつとこゝへ、と言うたるゆゑ……

淀君　エヽ、だますまい、僞るまい。エヽ、見れば見るほど憎てらしい、其のぼいやりした貌持は（トじつと見つめて）オヽ、古狸の面を其のまゝ。

千姫こらへかねて泣き倒れる。

エヽ、うつむくまい、此方向きやいの。（ト無理に引向けて）最期のきはの枕邊にて……コレ、何と言うた。何と言ひをつた。「某し斯くてあらん限りは、秀頼どのゝ後見なし、豐臣のお家は萬歳、御安心遊ばされい。」（ト悲しげにじつと正面を見つめ、俄に泣聲になり）「コレ淀、德川が斯う斯う言うた、安心せい、氣を揉むな。氣を揉むな……安心せい」（トすゝり泣をしながら）太閤どのの最期の聲音が、まだあり〳〵と殘つてある。（ト又泣き、急に腹立ち聲になつて）其誓言を、ようも〳〵、女わらべと侮つて、反古となし、猫撫で聲で利を食ませ、此方の飼ひ犬をば、ようも〳〵手なづけたな。手なづけをつたな。聚樂で逢うた彼際の、あの空笑顏で手なづけたか。そゝその空涙で、英雄の……太閤まで騙しをつたか。エヽ、面にくや。腹だゝしや。

ト淀の方半狂亂のやうになつて、千姫の襟上をつかみ、横さまに引きたふし、懷刀を鞘のまゝ摑んで打擲しようとする。皆々驚く。正榮尼、饗庭、梶の葉、左右より取縋り押しとゞめて

正榮尼　マヽ、御無體な。こりや何と遊ばしまする。

饗庭局　マア〳〵おまち……

三人　遊ばしませ。
淀君　エヽそちたちが知ることか。ひかへてゐい〳〵。
ト正榮、饗庭、辛うじて千姫を引きわける。饗庭、千姫の手を引きて奥の方へゆかうとする。
淀君　ヤ、落さうでな。
ト梶の葉を突きのけ、追ひかけようとする。正榮尼あわてゝ淀の方をだきとめ
正榮尼　コレ〳〵饗庭、御臺さまはやツぱり其處に。（ト目で知らせて）そこを立つては、わるい〳〵。
淀君　逃がさうなら、逃がして見よ。
ト懐刀をぬかうとする。正榮尼其手をとゞめる。千姫は下手に泣き伏してゐる。饗庭、梶の葉介抱する。此の途端、大野修理ノ亮治長、鎧すがたにて下手より出で來り、此體を見て驚き、階下にて、淀の方に向ひ
修理亮　こは何と遊ばされましたぞ。物體なし〳〵。恐れながら、一大事の折からにござりまするぞ。お心おしづめ遊ばされよ。
正榮尼　オヽよいところへ修理ノ亮どの。只今圖らぬ珍事出來、御前さまの激しきお怒り。
修理亮　ナニ、珍事出來とや。何事かは存じませねど、もはや時刻も寅の一點、東軍寄するも程あるまじ。火急のお覺悟肝要なり。尚お天守にて何かと御評議。何はしかれ、とく〳〵御用意。
ト此時はるかに寄手の陣にて、六つ太鼓を打込む音、鼕々と聞え、つゞいて一番貝を吹く。これにて皆々きつとなる。
修理亮　オヽあれこそは關東勢の、はや押寄する合圖の陣貝、陣太鼓。此上は片時も御猶豫遊ばしがたし、御臺所をはじめまゐらせ、正榮尼どのにも、局がたにも、いざとく御用意。
トこれにて淀の方、つゝと立ち、つか〳〵と階段の降口まで出て向うを見こみ
淀君　スリヤ、豐臣の運命も、けふ一日となつたるかや。エヽ無念や、くちをしや。（ト齒をくひしばり急に身もだえして）無念ぢや〳〵。無念ぢやわいなう。
ト階上にひざまづき、取亂して泣く。
修理亮　其御無念はお道理ながら、計略はいまだ盡きしにあらず。兎も角もお天守臺へ……ツレ。方々、御案内御案内。
トよろしく人々へこなし。正榮尼ら座を起つ。饗庭は千姫の手をとりて行かうとする。淀の方それを見ると、血相を變へ、卒然よつて千姫の袂をとる。千姫驚き
千姫　アレー。
ト叫ぶを、正榮尼おさへて

正榮尼　アモシ、まづ入らせられませう。

トこれにて淀の方は千姫の袂をとりたるまゝ皆々に案內せられてはひる。正榮尼殘り、修理ノ亮と顏見合せ、よろしく思入あり

修理亮　正榮尼どの。シテ珍事とは如何なる儀でござりましたな。

正榮尼　サア、仔細はいまだ分明ならねど、局小車、かねても二心を抱きしにや、あれなる怪しき婢女と手管を合せ、油斷のうちに御臺樣をば、竊かに落しまゐらせんと、伴ひいでしを御ン方さまが、御ン目ざとくも御成敗。それがもとにて一段と、御ンまはり氣やら、お猜疑やら。……方々の御苦心も、かくては彌ゝ水の泡、……情けないことでござりまする。

修理亮　すりやそれゆゑにお腹立ちとな。只今も只今とて、我君にお降參の儀をくれ／＼もお勸め申したれど、君にはお覺悟堅固にして、いッかな御承引のみけしき無し。此上は御母公の仰せをいたゞき、押返して御臺所を禱渡しに、降參勸め奉らんと、存せしことも交喙鳥の嘴、父道軒の逐電より、飽くまで御疑念盛んにして、我々親子の心をすら、危ませらるゝと母の話。

正榮尼　かてゝ加へて只今の珍事に、御疑念はますます募り、德川どのに內通して、御臺さまを落すにやと、只お一圖にひがませたまへば……

修理亮　此儀の成否もおぼつかなし。

正榮尼　修理ノ亮どの。

修理亮　正榮尼どの。

正榮尼　是非もなき儀で……

二人　ござりまするなア。

ト兩人よろしく思入こなし。遠くにて貝鉦の音。

――幕――

幕前の事情

前將軍德川家康公、大御所、七日の夜に入つて御陣を進められ、眞田が陣屋跡なる茶臼山に御本陣を据ゑさせらる。御ン旗下には、東軍の張子房、本多佐渡守正信、德川氏萬歲の謀略を帷幄のうちに運らし、今日の一戰によつて長永に天下の禍根を絕たんとす。大旗、小旗、勝ち軍に傚つて、朝の風に跳躍し、山樹も雷同して鳴りどよめく。時に五月八日、東雲漸く分かれんとして、鷄鳴曉をつぐる時なり。

豐臣家の舊執事、片桐市ノ正且元は、之れより先き、去年御和睦成りし砌突然多く吐血せしが、

それより俄かに重病に罹り、枕をあぐること能はず、病軀を京師に養うて門外に出づることも無かりければ、こたびの御陣には弟主膳ノ正を名代として從軍せさせ、みづからは京表にとゞまり、徒らに日を過すと見えけるものから、豫て去年和信の砌、陰かに君家豐臣氏の爲に、さま／＼に心を摧き大御所に懇請し奉る所あり、大御所も其の苦忠を憫然におぼされ、懇請の件大かたは承引あり、去年和信の講整ひしも、陰かに東西の間に立ちて斡旋せし市ノ正が力に負ふ所多かりしが、之れを知るものは稀なりけり。さて此度の役起るに及びて、憫むべし、市ノ正が經營苦心も殆ど半ばは水泡に歸せんとせしを、大御所流石に前約を重んぜさせられ、落城旦夕に逼るに及び井伊、本多等、二三の腹臣を傍らに召させ「豫て市ノ正に約せし言葉あり、彼れが心中も不便なり、彌ゝとならば使節を遣はし、秀頼母子を助命し、且つかくかく計らはゞやと思ふ。將軍に告げなば事やかましからん、事果てゝ後に申すべし。汝等もしか心得よ」、とひそかに内命ありけるを告げたてまつる者ありて、岡山の陣におはしける將軍秀忠公きこしめし「こは惶けれど御仁恕に過ぎて大義いさゝか足らざる所あるか。恐らくは孫千姫をば御不便がらせての御沙汰ならんが、斯くてはなか／＼に天下再亂の種子を貽すにひとし。我れとても阿姉を不便と思はざるにあらねど、千歳の大計にはかへがたし。眞忠を存じて天下を憂ふる者はよく其心せよ」と仰せられし由。

第二幕

第一場　茶臼山東軍本營

正面は假陣營の俄か建て物、上手、下手、櫓頭とも葵の紋附きたる幕を張り、左右へ廣緣を折廻し、中央はすべて板張、正面に四枚のまゐら戸。庭上、上手には旗、さしもの、馬印、下手には大いなる陣太鼓、其他早朝なれば燃え殘りたる篝火などもあり。太鼓奉行が鼕々と打鳴らす六つ太鼓の響の切るゝと同時に、旗本の士、△、○、□（年齡に老壯の別あり）鎧姿に出で來り、よろしく上下の床几に腰をかける。

△　さてお互ひに恐悅千萬な儀でござる。鬼神とまで評判された眞田幸村が討死いたした上は、たとひ死に物狂ひに惡戰なすとも、高の知れたる殘兵ども、多分日の中に沒落いたして、萬民太平を謳ふでござらう。

○　されば、かやうに速かに落着いたすも、畢竟は戰なうして人を呼ぶ御仁德の致す所でござる。太閤が恩顧の諸大名さへも、當家の御仁風には靡き從ひまする。南山不落などゝ申しても、其君に德がなければ、砂利で築いた城も同然、もろいものでござるてや。

□　大忠臣の噂ありし彼の片桐市ノ正さへも、預顯の御陣には手勢を以てお身方いたし、剰へ淀どのゝ御陣所へ向け、二度までも石火矢を打ちかけたとやら承る。之れを以ても豐臣家の薄德は思ひやられまする。

○　お身方とは申せ、彼奴の如きは不忠不義のしれもの、武士たるものゝかりそめにも同席ゆるしがたき奴でござる。

□　イヤその片桐市ノ正が、昨今しきつて大御所さまに、秀頼どの御母子の爲、お命乞ひ致すとやら申しまする。

○　では先だつて彼れが弟主膳ノ正が當御陣所へまゐつたのも、其儀のお願ひでござるな。

△　さもあるべき儀でござる。が、今更と相成つてお助命を願ふなどゝは、さて／＼市ノ正は、不覺仁でござるなう。

□　貧すれば鈍する。昔は智慧者、落ち目の今はうろたへ者。彼れ如きを柱石と頼んだ大坂城、瓦解に及ぶも理の當然。

△　いや、思ふにましたうつけ者でござるなう。

ト三人顔を見合せて

△○□　ハヽヽヽヽヽ。

此時、高力左近忠房（三十五六）鎧、腹巻、陣羽織にて奥より出る。

高力　アイヤ、おの／＼がた、片桐且元が今日の參入を只不覺とのみ思し召さるゝは、ちと御淺慮でござりませうぞ。

□　これは／＼、高力左近どの、

△　もはやお支度でござるかな。

○　シテ、われ／＼を淺慮だと仰せらるゝは。

高力　（このうち座に附きて）されば、それがし竊に存ずるに、老病重體の市ノ正が今日の參入は、一定命がけの御助命願ひ、叶はぬ時はどちらにしても無き命なれば、大御所に對し奉り、いかなる狼籍に及ぶやも圖り知りがたき彼れが底意。よしさなくとも、大御所御仁慈深く、命乞ひをお許しあらば後日の禍ひ。何れにもせよ、油斷のならぬことでござるぞ。

○　何さま、かやつは聞えたる古狐

△　行きがけの駄賃とやら

□　どんな底だくみがあらうやも知れませぬわい。

高力　仕儀によつては、某合圖を仕る。必ず共にぬかりめ

さるな。

△○□　心得てござる。

ト奥にて三番貝の音きこえる。

ニ　オヽ、もはや御出陣の御用意と相見ゆる。

高力　さ、おこしなされ。

ト高力は奥へ、三人は下手へ入る。やがて奥より本多佐渡ノ守正信、七十以上、鎧腹巻、陣羽織、つゞいて井伊掃部ノ頭直孝、四十歳位、同じく鎧腹巻、陣羽織を着し、兜を手にもち、直に出陣の身仕度にて立ちいて、二人あたりへこなしあつて座に着く。

掃部頭　（側近に）さて、佐渡ノ守どの、密議とは何事でござるな。

佐渡守　（老者に）餘の儀ではござらぬ。豫て大御所より御内意あつた例の御助命の一條でござるが、先夜もお談じ申した通り、此儀については、「何事も一天下の爲を存ぜよ、情誼細節にかゝづらひ、禍根を後世に貽すなよ」と仰せあつた從一位樣の御遠慮こそ、詢に一天下の重きを以て任させられたる御英斷と存ずるゆゑ、たとへ後日大御所より如何なるお咎めを蒙りませうとも、謹んで奉じまする筈でござるが、こゝに一つの難儀は、彼の市ノ正へ秀頼との御助命の御内約は、既にうす／＼外樣諸侯の耳にも入りをることでござれば、今となつて御破約遊ばさるれば、弱きを憫むは人情、定業にて遁るをも醫師の匙加減に脱落があれば、愚痴愛着は之れを奇貨に、非命よ、非業よと言ひ做す例。（此うち直孝ほゞ察してしば／＼うなづく）一旦下されたる恩命の遂げられざるは、民の心を危ぶましめて、其弊、苛刑嚴罰を施すにも勝ることあり。萬一にも之れが爲に、當家の御明德に累ひを釀してはと杞憂の餘り、わざと御諫言は申しあげず、豐島、加賀爪の兩人に、只今大御所の上意を傳へ、程なく秀頼との御助命の上使として、城内へまかり向ふべき筈でござるが。（直孝じれッたがる）。さて、それをそのまゝに打棄ておけば、根を殘して惡木の幹を仆し、蛛の網を惜みて之れを火にしたがら、蛛を憐みて放つも同然。さて、何とかして一擧兩得……

ト いひかける。直孝こらへかねたる思入にて

掃部頭　シテ御助命の上のお待遇は。

佐渡守　されば、一萬石をまゐらすべければ、速かに高野山へお登りあれとの御上意。

掃部頭　いや／＼、高野はさておき、たとへ出家させ、鬼界ヶ島へ流し申すとも、虎を千里に放つの例。必ず後日の禍ひでござるぞ。（一寸膝を進め、小聲になりて）自分存ずるには、かゝる事に一刀兩斷の御處分の外はあるべ

からず。我々共のうち一人、切腹と肚を据ゑ、頭々の際に臨み、一擧に決すれば事すむこと。さて誰れ彼れと人を擇ぶには及び申さぬ。此儀は自分引受け申さん。御懸念は御無用でござる。

　トきつといふ。佐渡ノ守しづかに大きくうなづきて

佐渡守　イヤ、さやう承つて安堵いたした。自分の所存も貴意の通り。……が、同じくば御仁徳を、あまねく内外に知らせて後……（トいひかける）

掃部頭　その儀も必ず御懸念なされな。これよりすぐさま出陣なし、右府いづこに御座あるとも、それがし御座所の前後を取切り、好き時分を見はからひ、首尾よく本意を遂げ申さん。

　ト決心の思入。

佐渡守　其御返答を承つて、佐渡悉く降心いたした。

　トこれにて掃部ノ頭身づくろひして

掃部頭　さやうござれば佐渡ノ守どの。

佐渡守　掃部ノ頭どの。

掃部頭　御免下され。

　ト掃部ノ頭は會釋して階段を降り、向うへはひる。佐渡ノ守只ひとり殘り、其の後ろ影を見送り、よろしく思入ありて

佐渡守　これほどの取計ひも、掃部ならでは得為ぬことぢや。（トやがて、正面を見て）併しながら、有りがたきは當將軍家の御大量ぢや。よくも卑見を容れさせられて、御愛着の御ン絆を斷たせられましたぞ。「千姫は殺しても、かまはぬ。國家の禍ひの根を枯らせよ」とは、よくぞおほせられた。其の御明德に對しても、千姫君を恙なう、救ひいだしまゐらせいでは、此正信の面が立たぬ。（トいつたが、小首を傾けて）それにつけても、常盤木をはじめ、大住、佐々らは如何いたいたか。今以て何等の音信もなきは、心もとないことぢやわい。

　ト心配の思入。此時青侍一人奧よりいでて

侍　御出座にござりまする。

佐渡守　ナニ、御出座とな。

　ト前に正面のまゐら戸を左右に開かせ、大御所、わざと鎧は着せず、裾括りの袴に茶色の羽織といふ扮装にて、奧よりいで、設けの毛皮に宜しく住ふ。佐渡ノ守席を下り、敬禮する。高力左近忠房、△、○、□、其の外幕下の諸士大勢ついて出で、大御所の後ろ又は左右又は階下によろしく居ながれる。

大御所　佐渡、只今片桐市ノ正が早駕籠にてまゐつたと申すことぢや。

佐渡守　久々所勞にて京表に引籠り罷り在ると承りをりましたが、さては自身病ひををかして、推參仕つてござり

ますするか。

大御所　オ、サ、重病の上に、夜通し早駕籠でまゐつたといふから、さぞ疲勞いたしをるであらう。苦しうない、乘り物のまゝこれへ通せ。

佐渡守　ハヽ、かしこまりました。

ト侍士を見かへり

おゆるしでござれば、乘り物のまゝ市ノ正をお庭先きへ。

侍　ハヽ、ツ。

ト侍士下手へはひる。

大御所　佐渡、豐島、加賀爪はもうまゐつたか。

佐渡守　只今支度中にござりまする。

大御所　これへ呼べ。

佐渡守　ハ、

ト佐渡ノ守また侍士に向ひ

豐島刑部、加賀爪甚十郎の兩士を。

侍　ハ、ツ。

ト侍士上手へはひる。やがて上手より、豐島刑部、加賀爪甚十郎、肩衣、袴、上使の身仕度をして立ちいで、上手階下(平舞臺)よき所にて、敬禮し

加賀爪　加賀爪甚十郎。

豐島　豐島刑部。

ト大御所見かへりて

大御所　よし〳〵。控へてをれ。

豐島
加賀爪｝ハヽ。

ト此時下手幕かげより、市ノ正が男出雲ノ守孝利(二十五六)先きに、家臣十河十兵衛(五十位)ら附きそひ、市ノ正且元(六十以上)の乘り物をかきいれ、御前なるを見て乘り物をおろし、一同敬禮する。

大御所　苦しうない、其のまゝ緣先きへかきあげさせい。

佐渡守　おゆるしでござる。其のまゝ緣先きへかきあげめされ。

ト此時乘物の戸を内より開き

市ノ正　アイヤ其儀は……餘りと申せば憚り多い。倅、倅。

ト市ノ正肩衣、袴。薄き頭髮も殆ど悉く白くなれる長髮、重病の體、刀を杖に辛うじて乘り物より立ちいでんとして起ちかれるこなし。大御所これを見て

大御所　ハテ、要らぬ辭儀ぢや。それ。

トおとがひにて指揮する。侍士階下に下りて手傳ひ、乘り物のまゝ緣先きへかきあげる。市ノ正扶けられて駕籠をいでて、廣緣に平伏する。孝利も其後ろにしたがふ。十河十兵衛は階下に控へる。空駕籠には從者一人と共に下手へはひる。

大御所　近う〳〵。

市ノ正　ハ、、。
大御所　予もだいぶ耳が遠うなつた。もちつと近う。
市ノ正　ハ、、。
　ト市ノ正、孝利に扶けられて、ずつと大御所の傍近くへ座をすゝめる。
大御所　市ノ正、さて久しぶりでござるの。どうぢや、所労はちつとは快いか。
市ノ正　ハ、、有りがたき御諚のお言葉……まづ以て御前には御ンかはらせもなく、麗しきみけしき……祝着至極にぞんじたてまつりまする。
大御所　オ、、予も満足ぢや。(トつく／＼見て)ハテ、おやつれやつたなう。鬢髪も悉く白う見ゆるわい。さもあらう。さもあらう。足下の心中、家康よう察しをるぞよ。
市ノ正　忝き御上意、ありがたく存じ奉ります。……憚りながら御懇のお言葉に縋り奉り、相迫つたる儀にござりますれば、取りあへず願ひ上げたてまつりまするは……(トいひかける)
大御所　オ、、秀頼どの母子の儀か。その儀はよう心得をるわい。只今これなる両人を、助命の使節に遣はすところぢや。
市ノ正　アイヤ、恐れながら、秀頼公御母子御助命の儀は、強ての御誓約にござりますれば、其儀は降心いたしをりまする。今ン日御陣所に推参仕りましたは、其儀ゆゑではござりませぬ。
大御所　何とおいひやる。
市ノ正　恐れながら、只一應のお使者を以て御助命おほせいだされまするは、只御助命の名のみござつて、其實は効なき儀かとぞんじまする。
大御所　とはまだ何故にな。
市ノ正　憚り多き申條にはござりますれど、右家秀頼卿は故太閤殿下の御正嫡にござりまするゆゑ、まつた御生得も至つて御高邁にあらせられますれば、いかほど進退谷らせられ、兵刃御頭に臨みませうとも、面を敵軍の嘲りに曝し、おめ／＼面縛の降人の如く、よも歩行はだしにては御出城も叶ふまじく存じまする。(此間、高力左近は屢〻△○□と顔を見合せ、又大御所の氣色を窺ふ)御上使遣はされまするならば、何とぞ相當の御ン禮儀を以て御ン迎へのほど願はしく存じ奉りまする。まツた右御親子お迎ひの役目は、何とぞ此且元に仰せつけられ下されたく、此儀お願ひの爲、推參仕つてござりまする。
　ト決心の思入にていふ。大御所聞き終りて、しばし默してゐる。諸士一同面を見合はせる。中にも高力は、本多正信の方を見やり、又大御所のけしきを窺ひ、此時こらへかねて市ノ正に向ひ

高力　アイヤ市ノ正、老體病中とは申しながら、餘りと申せば過外千萬なお願ひでござるぞ。御助命のみゆるしあるさへ、既に格外の御仁德なれば、只かたじけなく存じ奉り、深く感佩の致さるべき筈なるに、甘きに飽いて酸きを欲し、暖きを得て柔きを思ふ自儘のお願ひ。剰へ御前に於て憚りなくも、秀頼どのゝ德をならべ、征夷大將軍たる御當家の御軍勢をば敵軍などゝは、以ての外なる過言失禮。緩怠でござるぞ。おひかへめされ。

トきつといふ。市ノ正しづかに向き直りて、言葉靜かに

市ノ正　こは心得ませぬお言葉。大御所の御高德は、もとよりかたじけなく、深く感佩いたしをりますれど、秀頼公御母子御助命の儀は、且元、お慈悲とは心得ませぬ。まッた相當の御ン禮儀を盡され、御ン迎へ遊ばされぬに於ては、御ン義理十全とも心得ませぬ。先般仰せいだされましたには、秀頼公は御舊誼深き故太閤殿下の御正嫡、兼ねては將軍家の御ン婿君、大御所にも深くいつくしみおぼしめす。東西干戈をまじへさせらるゝは、一へに政道の止むを得ざるに因るとの台命。大御所はじめ將軍家に於て、義を重んぜさせられまする以上は、秀頼公御母子御助命は勿論のことたるべく、まッた豐臣の社稷の儀は……

トいひかける。高力けしきばみて膝を進めんとする。佐渡、大御所の氣色をうかゞふ。大御所は平然たる體にて、手輕に

大御所　無論々々、其通りぢや。秀頼母子迎ひの儀は、如何やうに致すも苦しうない。其役目は市ノ正に申しつくるぞ。刑部、甚十郎兩人と共に、急ぎ城内に向うてよからう。

市ノ正　ハ、。

高力　すりやアノ市ノ正に……

△○□　お迎への役目を……

大御所　いかにも。

市ノ正改めて大御所に向ひ

市ノ正　つきましては御親子の御輿（おのりもの）、その他一通り、用意いたさせたくぞんじまするが……

大御所　ハテ、よきにはからうたがよい。

市ノ正　ハヽッ。有りがたくぞんじたてまつりまする。

ト市ノ正おぼえず孝利と顔見あはせ、心中に深く悦ぶ思入。

市ノ正　倅、かういふうちも心がせく。急ぎ十兵衞に用意の通り。

ト半分思入にていひ含め、やがて又大御所に向ひて

市ノ正　恐れながら、心せきにござりますれば、これより

すぐさま退出の儀御免下されませう。

大御所　オヽ、遠慮に及ばぬ。早うおゆきゃれ。

市ノ正　ハヽッ。

ト市ノ正急ぎ起たんとしてよろめき、はたと倒れ、病苦に悩むこなし。孝利介抱する。大御所此體を見て

大御所　乗り物〳〵。

トこれにて十河畏りて、急ぎ下手へはひる。次の問答の間に、孝利、市ノ正の腹帯を締め替へさせなどすることある。其以前、加賀爪、豊島は恭しく膝を進め、大御所に敬禮して

加賀爪　さやうござりますれば……

豊島　私共……

二人　兩人は。

大御所　オヽ、市ノ正を介抱いたして、隨分途中怪我のないやう。

二人　心得ましてござりまする。

ト再び敬禮して下手へ通り抜けんとする。

佐渡守　アイヤ御兩所。

ト呼び止める。二人下手に控へる。佐渡ノ守少しく膝を進めて

事すでに危急に相逼つてござるからは、寸分の時後れにて、自他共に何かと思ひ誤り、如何なる間違ひが出來いたすまいものでもござらぬ。萬一の御ン事あらば、折角の御仁惠も畫餅となつて、後悔先きに立ち申さぬ。それゆゑ、御兩所には早馬にて、市ノ正よりも先きに入城なされて、委細の儀を掃部ノ頭とのへ、「必ずお間違へないやうに」と。……市ノ正の介抱警護は、自分うけたまはり、後より直さま追ひつき申す。

トわざとさら〳〵と言ひ聞かせながら、暗に二人に、先きへ廻つて秀頼母子を、掃部ノ頭と打合せて、始末せよと呑込ませる。市ノ正懸念げに聞き耳立つる。大御所は、何氣なげに

大御所　げにそれも尤もぢや。しからば汝等は一足先きへ。

二人　ハヽ。

ト豊島、加賀爪は會釋して急ぎ向うへはひる。このうち十河十兵衛附いて、以前の駕籠を下手よりかゝげいで、遙か下手に控へる。大御所之れを見て

大御所　輿を近う。遠慮には及ばぬ。それ〳〵。

ト聲を掛ける。佐渡ノ守其意を傳へる。十兵衛は孝利のけしきを窺ひ、やがて以前の如く緣近く駕籠をかきあげる。孝利は此時まで瞑目してゐたる市ノ正を掻抱きて、何事かさゝやく。市ノ正つと目を見開き、容を改めて大御所の方に向ひ

市ノ正　慮外御免下されませう。

大御所　吉左右を相俟つをるぞよ。

市ノ正　ハ、。

大御所　おゆきゃれ。

市ノ正　ハ、。

ト急ぎ起ちて縁端へ出ると又よろめく。十兵衛は前より、孝利は後よりだきとめる。大御所之れを見てよろしく思入。

—— 幕 ——

事前の事情

大阪城の運命はけふを限りの血戦あだかも闌なりし時に當りて、豫てより關東に內通してゐたりし庖丁頭大住與左衛門といふ者、佐々孫助といふ者と共謀し、大臺所に白木の膳臺を積みかされて火を放ちけるに、折ふし暴風吹きいでければ炎たちまち八方にひろがり、さしも名城の大厦高樓見る／＼灰燼と延燒し、天守臺さへもほと／＼危く見えにければ、之れより先き淀の御ン方と共に天守に籠られける秀賴卿、速水、大野らに警護せられて、更に月見矢倉といふに移られしが、そこにも火焔及びしかば、またも蘆田曲輪なるしかみ矢倉にぞ移らせたまふ。此の時までも母堂淀の御ン方は左右の附きん／＼をすら危疑せさせ、ひたと御臺所の傍らに附き添ひ、東の間も心をゆるしたまはず、或時はしかと御臺所の袂をひかへて放ちたまはざりしことさへあり。大野母子をはじめ、其他御臺所に賴り奉りて御母子の御ン命乞ひせまはしく思ふともがらの苦心いたづらとなり、あはれ、御臺所も、御高運たぐひなき家康公の孫姬君、此のたびの御ン軍に全勝を收めさせられし當將軍家の御實子に在しながら、空しく城內に閉ぢこめられ、不幸の豐臣家に殉じたまふべうぞ見えたりける。しかるにしかみ矢倉より更にまた所謂山里の糒庫に移らせたまふ其の砌、修理亮が母大藏卿、いさゝかの隙を得て、局梶の葉らに內意を含め、辛くも落しまゐらせけり。御臺所は夢路をたどる御ン心地にて御ン魂も身にそはず梶の葉其他の女ばらにしろべせられて、猛火黑煙のうづまく中をば落ちたまふ。

さるほどに火勢ます／＼熾になりて、城兵はいよ／＼狼狽へ惑ひ、寄手はます／＼勝に乘つて、境を切つたる津浪の如く、一齊に鬨の聲をあげて亂れ入る。苟くも恥を知る城兵らは、死ぬべき時

節刱りぬと、力限り奮戰して、敵の銃彈に命を落し、或はさしちがへ、或は本丸の石垣に枕をならべて割腹す。彼の渡邊内藏介は、往ぬる日天王寺口の戰ひに重傷を負ひて起つこと能はず、此時まで空しく打臥してゐたりけるが、今は斯うと覺悟して母正榮尼に訣別して、潔く切腹して果てゝけり。かゝりしかば殘る烏合の兵卒らは蛛の子を散らす如く亂れ走り、天滿川、長柄川、京橋等、八面へ人なだれを打つて落ちてゆく。其他あまたの女わらべ、老人、病兵など、泣き叫び、あわて走り、燃えおつる椽に擊たれ、煙につゝまれ、火に焼かれ、劍電血雨の下をくゞりて、逃れいでんとあせるものから、或は踏み殺され、或は切り殺され、なめき叫び、うろたへ惑ふさま、無慚といふもおろかなり。かくの如くにして火に焼かれ、堀の水に溺れ、祀らぬ鬼となりしもの、まことに幾何といふ數を知らず。東軍の討取りし首ばかりも無慮一萬四千五百三十三級とぞ聞えし。

第二場　二の丸内の亂戰

やゝ下手奥へ寄せて斜に開放したまゝの城門を内面より見せ、それより上手一面の高石垣、すべて郭内より玉造口を見たる體。小銃亂發の音聞える。卜奥の方にて鯨波がドッとあがる。門外より城兵大勢思ひ〳〵の武器を持ち、さん〴〵に敗れて逃げ來るを、東軍大勢にておつかけ來り、門外にて暫くゴッチャの立廻りあり、卜ゞ城兵叶はず向うへ逃げる。卜東軍一同追うてはひる。卜上手より庖丁頭太住與左衞門(年齡四十五六)武家の料理番の服裝、袴の股立を取り、襷がけ、かひがひしく一刀を腰にさし、あわたゞしく驅け來りて、あちらこちらと人を求むるこなしよろしくありて、一度門外へ走り去り、又すぐ戻り來りて、よきところに立ちどまり、揚幕を見て懸念の思入。

與左衞門　どこへ行きなすつたか。たしかに此方へござらしやつた筈だが……白地に葵の御紋ぢらしの、被衣をめしたお後ろ姿は、てつきり御臺さまに相違ないと、お跡を尾つてかけだしたが、前も後ろもうづまく煙り、人なだれを打つ今の騒ぎで、お後ろ影を見失ひ、とう〳〵はぐれてしまつたが、何をいつても女中の脚、よもや遠くはゆかつしやるまい。……どちらへおこしなされたか。……お怪我ばしさつしやらぬか。……エヽ氣のもめることだわい。

卜行きつ戻りつして氣づかふこなし。この時揚幕にて鬨の聲聞える。

ヤ、あちらからも攻め込んだか。……こりゃかうしてはをられぬわい。

ト下手へ逃げようとする。こゝへ向うより赤裸體の上へ鎧腹卷をした若武者一人長卷を揮つて東兵二三人と激しく立廻りながら門近く駈けて來る。與左衞門あわてゝ石垣の蔭へ隱れる。若武者は目覺しく働きて己れも手を負ふ。途端、又鬨の聲。ト揚幕より手疵を負うたる一群の城兵（大概素裸體に鎧を着し又は全く素肌のまゝ）大勢の東軍と血戰しながら門近くへ來り、又大ゴッチャの立廻りとなる。同時に揚幕より城中の老若男女——茶道坊主、肥つちやうの婢、腰のまがりたる老女、老爺、小童など——大勢、おもひ／＼の服裝にて、こけつまろびつ逃げ來り、此立廻りの間を縫つて落ち行かうとして雜沓する。此間をかしみいろ／＼あるべし。トヾ落人は、半分は門外へ、半分は上手へ散り、城兵は下手へ、東軍も之れを追うて下手へはひり、本舞臺は東軍二人と城兵二人とのみ殘り、尙激しき立廻りあり。此間與左衞門は石垣の蔭に身をひそめて樣子を窺つてゐる。トゞ城兵は血みどろになりて斬り倒される。東軍二人は斬り倒したまゝ血刀をひつさげ、急ぎ足に下手へはひる。トすぐに揚幕より局梶の葉、甲斐々々しき打扮にて一刀を腰にさし、手に薙刀を持ち、白鞘に葵の丸の紋ちらしのかつぎをめしたる千姫君の手を引き、あわたゞしく駈けて出る。すぐつゞいて腰元、花野、同じく錦木、これも甲斐々々しくいでたちて走り出で、一さんに本舞臺へ來り、梶の葉左右へ思入あつて

梶の葉　ソシ、此間に早う。

ト直に門外へ出ようとする。ト此以前石垣の蔭を出たる與左衞門つか／＼と前へ走りいで

與左衞門　ア、モシ、おまち遊ばしませ。梶の葉さまではござりませぬか。（ト蹲踞みながら）私が御案內いたしまする。マ、、おまちなされませ。

トこれにて振返り、皆々立ちどまる。梶の葉は與左衞門を見て

梶の葉　オ、、さういやるは大臺所の……

與左衞門　へイ／＼、與左衞門めでござりまする。そちらへおこしなされましてはお危險うござりまする。こちらを廻つて追手口へ。（トいひかけて、千姫に敬禮し）恐れながら御臺さま、必ず御懸念遊ばしまするな。私めは本多さまの、豫て御內意うけましたるもの。

トいひかける。梶の葉ひッとつて

梶の葉　この男が最前申上げました、本多佐渡ノ守どのゝ吩咐にて、御城內に入込みました大臺所の大住與左衞門

にござりまする。

千姫　そんならそなたが、噂に聞いた、常磐木とやらともろともに……

與左衛門　ヘイ〳〵、さやうでござりまする。大臺所に隙を見て火をかけましたは、手前でござりまする。それと申すもあなたさまを、お救ひ申し上げたいためばつかりでござります。委細のことはいづれ後程……さういふうちも心が急きます。サ、かうおいでなされませ。

ト與左衛門上手へ廻はらうとする。ト少し前に息吹きかへし甦きゐたる手負ひの城兵。よろめきながら突と立つて

城兵　うぬ。

ト血刀を揮つて與左衛門にかゝる。驚きながら二三度やりちがはせ、兩手にて城兵の揮り上げた腕をおさへ

與左衛門　こゝかまはずと、ちつとも早う。

ト腕を押へた手を突と離し、身をひく。ト城兵はよろよろとつんのめり、今一人の手負ひにつまづく。此間に程の葉は御臺所の手をひき、花野、錦木附いて急ぎ上手へ入る。つまづかれた今一人も息を吹き返し、これもよろめきながら、以前の一人と共に半夢中にて與左衛門に切つてかゝる。ひつぱづして一刀を拔き、忽ち一人をしとめ、返す刀に他一人をも斬り倒し、きつと下手へこなし。又ドンチャン、閉の扉。

──幕──

事前の事情

さらぬだに打曇つたる八日の大空、一面に黑煙うづまきはびこり、大厦高樓の燒け落つる爆裂の音すさまじく、人の世もけふに盡くるかと思はれたり。加賀爪甚十郎、豐島刑部の兩人が、大御所の命を承つて城內に入りしころは、已に前にもいへる如く、秀頼卿はし[illegible]様をたちいでられ、御母堂淀の方ともろともに所謂山里の糒庫に移り、こゝにて、一同生害の用意あり。大野修理、毛利豐前、氏家內膳をはじめ、正榮尼、大藏卿、饗庭の局なんど、男女老幼隨從し奉つたる者三十有餘人とぞ聞えし。さる程に豐島、加賀爪の兩使は、井伊掃部頭直孝が兵に警護せられて、件の糒庫に近くまかり向ひ、大御所よりの御ン使ひと名告り、まづ正榮尼、大藏卿の兩老女を召しいだし、使命のあらましを語り「ゆめ〳〵御母子とも、粗忽のことあらせられぬやう力めて諭しまゐらすべし」といひ含め、やがて改めて大野修理亮治長を呼び

いだし、大御所の命を傳へて曰はく「戰爭已に終りぬる上は、秀頼卿御母子に對しては、別に申しいださるることもなし。太閤以來の御舊誼、いかにも忘れがたく思し召さるゝにより、此後御他念なきに於てはお母公淀殿の御隱居料として若干の御知行をも下し賜はらんの恩命なり、謹みて命を奉じ速に當城を出でらるべし」と片桐且元參入の山は只一言も申し添へて、いといかめしくぞ述べたりける。かゝりしかば大野修理亮は、さながらに聞え奉るべうもあらじ、と聊か取りつくろひて復命す。毛利豐前、氏家內膳ら先づ互ひに面を見合せ、秀頼卿の御氣色を窺ひ奉る。秀頼卿のたまふやう「去年以來、我々母子の爲に命を捨てしものは幾何といふ數を知らず、豐臣の社稷重からざるにあらねど、喪家の犬の殘骸に尾を掉る如く、かゝる薄待に取縋りて命を惜まんはいと恥かし。其使者速かに辭し返すべし」と仰せける。修理亮押し返して「ともかくも此儀御母公淀の御方にも御協議ありて然るべし」と申す。初めは御母子とも庫の階上におはしけるが、千姫君を竊かに落しまゐらせけるより、淀殿みこゝろ亂れたるやうにならせられて、女房ら介抱に狼狽し、階上これが爲にみだりがはしかりければ、秀頼卿は此以前、臣下と共に、更に階下に渡らせて、修理の復命を聞かせたまひき。されば修理亮は母大藏を竊かに招き、あらためて使者の口上を傳へ、御母公の御意向をうかゞひたまへといふ。さる程に氏家、毛利は、修理が說に反對し、階下には議論沸騰せり。時に閑の蘭鐵砲の音はしづまりたれど、疾風火の粉を散らして、櫓なんど燒け落つるにやあらん、爆然として鳴り響く物音こゝかしこに屢々聞ゆ。

第三場　城內山里糒庫階上

正面及び上下ともに糒庫の三面を內部より見たる體。こゝかしこに窓あれど、皆閉切りあり。ずッと下手よき處に階子の降口、始終こゝより出入する。其奥下手寄りの壁際には糒俵澤山積上げあり、又疊も二三疊立てかけてあり。降り口より稍々上手前寄りに高麗緣りの疊一片、これは秀頼の御座に充て、尙やゝ上手奥へ下げて高麗緣りの疊幾ひらか揃へて淀殿假の御座に充て、其背後に桃山式の金屛風、金蒔繪の調度二三種、薙刀など。今しも淀殿は手に千姫が脫ぎ棄ての打掛けを掻摘みたるまゝにて癪を起し、激しく反返らうとするを正榮、大藏、饗庭其他總がゝりにて取りおさへる。

途端に大筒、小筒の音。鬨の聲。淀の方激しく笑ふ。やがて其笑ひ聲が泣き聲に變はつてやう〳〵しづまる。

正榮尼　豐臣家の御血統を、繼ぐも繼がぬも此一時といふ、切迫つまつた折も折。

大藏卿　いつもよりも激しいお癪氣。

饗庭局　お合ひ藥の用意もなし。

正榮尼　あゝ困つたことではある。

ト淀の方又うめきて反り返らうとする。

腰元　アレまたお反り遊ばしまする。

皆々　（又立懸りて）御前さま〳〵。

ト此時階下より大野修理ノ亮、鎧姿、黄色の陣羽織を着し、腕に薄手を負ひたる體にて白布にて卷き、大わらはにて上り來り、此の體を見て驚き

修理亮　ヤ、御ン方には……さては又もやお癪氣が起りましたか。

正榮尼　オ、修理ノ亮どの。よいところへ。

大藏卿　オ、治長か。（ト腰元に向ひ）必ず手を離すまいぞ。

修理亮　どう遊ばされたのでござります。もはやお落着き遊ばされましたか。

大藏卿　さ、少しはお落着き遊ばしたやうぢや。

トこれにて大藏卿と正榮尼とは、宜しくやゝ下手の座に戻りて、修理ノ亮と向ひ合ふ。

最前も一寸いうた通り、誂の業に吩咐けて、御臺さまを竊かにお落し申したゆゑ、御ン方さまには烈火のやうにお腹立ち遊ばして「たつた一人の大事の人質を逃しをつたからは、どいつもこいつも關東へ內通に相違ない。心變りぢや、裏切ぢや」とおつしやつて、それはそれは怖ろしいお形相。

正榮尼　御臺樣のお打掛けの、殘つてあつたを、あれ、あのやうに、しつかりとお摑み遊ばし、お守り刀で、生きた人を刺すやうに、刺通し〳〵、「ヤイ家康め〳〵。エ、せめても此奴を弄殺しに、道連れにして、己れの鼻をあかせうと思うたものを。エ、くちをしい〳〵」とおつしやつて……

饗庭局　（ト此時少し膝を進めて）お止め申さうとする私共をば突きのけはねのけ、あッちこッちとかけまはらせられまして、御正體もない御ン有樣、其うちに、例のお癪氣が俄にさしこみ、只今の爲體。

大藏卿　それやこれやで先刻の、お使者の口上なか〳〵に申し上げる暇もなかつた。よし又申し上げたればとて、此みけしきでは、迚も〳〵御降參の事御承引遊ばさうやうもない。……治長、ま、何としたものであらう。

正榮尼　修理ノ亮どの、何としたらようござりませうぞ。

　此間淀の方又反り返らんとするを、饗庭の局及び腰元共よろしく取りおさへる。

修理亮　いかさま……かうした御樣子では、彼の一條を申し上げやうもござりますまい。とはいへ、只今直樣御返答無きに於ては、何分にも亂軍の折柄ゆゑ、如何なる間違ひが出來いたすまいものでもござらぬ。もとより右府さまには、母君の嚴命とあらば是非に及ばぬことなれども、おのが一命を助けん爲には、決して降參の恥辱は受けぬ。豐臣家の今ン日あるは、定まれる運命と思ふ間、其方共、強ひても母君にお覺悟をお勸め申し、使者へは不承諾の旨を返答せよ」との仰せではござれども、一寸延びれば尋延びるの譬へ。ともかくも、一應御降參の事御承引申させたく……

正榮尼　さ、我々とても同じ心、せめてはお上のお命ほどはと、千々に心は碎きますれど……

　ト皆々歎息のこなし。此うち修理ノ亮きつと思ひ定めたる體にて、膝を進め

修理亮　母上、此上は是非に及びませぬ。たとひ御正氣でいらせられませうとも、あくまでも御疑念深き御生來、根深く德川家を怨ませられ、常日ごろも、たとひ死ねばとて家康の面は見ぬとのお言葉なれば、なまなか表だつて申しあげなば、お聞入れなきは必定。此上は……

　トこなし。正榮、大藏心得て膝を進める。修理ノ亮は低聲にて暫時さゝやくこなし。

修理亮　お正氣の無きこそ幸ひ、御ン方さまには御承引と申しこしらへ、ともかくも直さま御出城のことに取計らひませう。

大藏卿　では我君をおだまし申して。

修理亮　たばかり奉るも、一へにお家の爲でござる。(二人うなづく)では早速申し上げませう。御如才はござるまいが、とくと人々にも心得させて、御正氣無きは物怪の幸ひ、後ほど我君よりお尋ねでござりましたら、必ず共にお心をつけられて、其お答へに齟齬のなきやう。

大藏卿　大丈夫でござる。氣づかひ無用。

正榮尼　では時刻の移らぬうちに。

修理亮　心得申した。

　ト修理ノ亮急ぎ階段を下りる。ト淀の方俄に陽氣に激しく笑ひいだし、とゞ泣き聲になる。腰元騷ぎ立つを、老女どもこなしにておし鎭め、淀の方を介抱する。

大藏卿　御前さま。

正榮尼　御方さま。

皆々　もうし〳〵。

　ト此途端、奥の方（窓外）にてどつと鬨の聲、石火矢

の流彈が窓に中り、壁が夥しく壞れ落ち、窓際に積みたる糒俵ころ／＼と轉げ落ち、煙が一ぱいに庫の中へ流れ込む。何が燒落ちるのか、凄じい物音が續く。此一發は餘りに意外、又餘りに耳近であつたので、皆々覺えずびつくりして、抑へてゐた淀の方を手離し、左右へぱつと飛退き、思はず俯伏しになる。ト淀の方きつと身を起し、忽ちつか／＼と前へ駈けいで、正面をきつと睨んで

淀君　ヤ、また來をつたな。

ト突立つてぶる／＼と身をふるはせ

おのれ、どうあつても祟らうでな。

ト懷刀に手をかけ、拔かうとして物に怖えるやうに、たぢ／＼と二足三足退りながら

淀君　祟らうでな／＼。

此うちに皆々はつと心附き、左右前後から駈け寄つて抱き止めようとする。それを突きとばし／＼して身もだえする。

此時豐臣秀頼卿（廿三歲）緋絨の鎧に太刀を穿き、毛沓を穿きたるまゝにて、先きに立ち、氏家内膳（四十位）これも同じく鎧姿、處々に薄手を負ひて、白布にて卷き、附いて上り來る。皆々見て、敬禮しつゝ、淀の方にそれと知らせる。

大藏卿　ア、モシ、お渡りでござりまする。

正榮尼　右大臣さまの、モシ、お渡りでござりまする。

大藏卿　御前さま、お上のお渡りでござりまする。

正榮尼　モシ、お心たしかにお持ち遊ばしませ。

ト淀の方きよろ／＼と左右を見やりて、目尻をつりあげ

淀君　何ぢや、右大臣ぢや。右大臣とは。秀頼殿は日本の武將、征夷大將軍ぢや……征夷……（トいひかけて、いかにもくやしげに、じつと向うを見つめて）エヽ、くちをしや、誰れあらう、征夷大將軍秀頼の母を……

トさめ／＼と泣出す。饗庭介抱しようとして寄るを手荒く突きのけ

おのれ、ようも／＼、（ト急に目に角立てゝ）何ぢや何ぢや。妾ぢや。妾とは何ぢや。今一度いうて見い。も一度いうて見い。……ヤイ、此日本四百餘州は、みづからが化粧箱も同然ぢやぞ。（しばらく無言で睨みつめてゐて）フム、面白い。聞きませう。

ト誰れかの言葉を聽いてゐる思入。やがて又急に氣色ばんで

ヤイ誰れかある。治部少輔を呼びや。治部少輔を……

ト急によろ／＼と立上がり、皆々が驚きて止めようとするを突きのけて、上手へ駈け行かうとする。皆々さ

さへかれる。

饗庭局　マ、、申し、淺ましい。お心おしづめ遊ばしませ。

皆々　もうし〳〵。

ト皆々寄ぜりふにて押なだめる。此時まで憮然と石の像のやうに立つたまゝでゐたる秀頼は之れを見て歎息して

秀頼　淺ましや、母上には、こりやお心が亂れしよな。

ト悵然として下手の設けの座につく。氏家内膳は堪へかねたらしく、淀の方が抱きすくめられて座につきたるすぐ其前へつか〳〵と進んで手をつき、じつと其顏を見あげて

氏家　恐れながら（と言ひかけたが、後をいひかねて男泣きに泣き、やがて顏をふりあげて苦々しげに）テモサテそ、お情けなき御ン有樣御大事の折柄とて、積りに積つたる御心勞の一時に相發し、御本性をばお失ひ遊ばされましたか。イヤ申し、豐臣家の御榮辱は、千百年の後までも、貴方さまのお言葉一つで定まりまするぞ。御孝心深き右大臣さま、唯〻御ン方のお言葉次第で、如何なる御ン恥辱をも忍ばせられまする。併しながら圖りがたきは關東の下心、今ン日御降參遊ばすは、千歳磨しがたき豐臣家の御ン恥辱と存じまするぞ。何卒みこゝろを鎭めさせられ、とくと御ン利害をお考へ遊ばされ、辱を蒙つておめ〳〵御降參遊ばすよりは、潔くお覺悟あるか。……但しは修理への仰せの如く、德川どのに縋らせられ、慈悲憐愍を乞はせらるゝか。……あらためて御返答下されませう。

ト氏家或ひは激し、或ひは泣いてしみ〴〵と説得する。此間淀の方はじつと氏家の顏を見つめてをり、中ごろよりだん〳〵と居ずまひを崩し、氏家の言葉が終ると

淀君　マ、よいわいの〳〵。何のマアそのやうに、氣にかけるには及ばぬ。マ、こゝへ來て……ハテマア、こゝへ……

トなまめかしく手を延ばして氏家の手を取らうとする。氏家驚きて身をすさる。淀君すかさず摺りより

ハテ、何のにげることがあるもので……

ト正榮尼見かねて左手より袖をひかへて止めようとする。淀の方きつと見返りて

誰が指さす。……

ト目に角立てる。正榮尼止めようとした手を控へる。

誰が咎める。……

ト右の方にゐた大藏卿を見返りてきつと睨む。大藏卿も顏をそむける。

みづからは天が下の主も同然。……

ト大きく傲然といひ放つ。皆々うつむく。

何者が見よりとまゝ。（ト又なまめかしく）ハテ大事ないわいなう。

ト しどけなきこなし、又氏家の手を取らうとする。氏家驚きて一二間此方へ飛びすさり、冷汗を流し、秀頼卿の思はくが氣の毒さに、身をふるはせて顏をそむける。

アヽコレ、どこへ／＼。……

ト しどけなき姿にて立上りて追ひすがらうとする。老女連も秀頼卿の心を察して、さしうつむいてゐたが、此時急に立上り、あわてゝ左右より抱きとめる。ト淀の方俄に驚きて面色を變へ、身もだえして、振拂ひ、逃げ廻り、恐怖の思入。

ヤ、みづからを捉へうでな。裏切して關東へ迯らうでな。ヤアたそ無いか。たそないか。……何ぼうでも囚人には……ならぬ／＼。

ト もがき狂ふ。最前より母の有樣を見て、無限無量の苦痛の其面にあらはるゝを禁じかねてゐたる秀頼は、此時こらへかねて、はら／＼と落涙すると同時に、突然佩刀の鞘を拂ひ、突と駈けよつて淀の方の胸元に手をかけ

秀頼　南無阿彌陀佛。

ト いひもあへず直に一突に突かうとする。大藏、正榮、饗庭ら仰天して左右前後より其手にすがり

大藏卿　こりや何と遊ばしまする。

正榮尼　恐れながら上さまにも、みこゝろが……

饗庭局　狂はせられましたか。……まア／＼あぶない。

正榮尼　おあぶなうござります。お手を／＼……

三人　お手をお離し遊ばしませ。

ト 皆々棄ぜりふにて、泣きながらよろしくとめる。

秀頼　退け／＼。離せ／＼。所詮助からぬ母上の御ン命ぢや。此上存へさせまゐらすときは、御ン身の恥辱、家の大辱。秀頼みづから御介錯、返す刃に死出三途の御ン道しるべを仕る。止めるな。離せ。そこ退け。

饗庭局　（泣きながら）サ、そのお歎きもお怒りも、お道理とも、ことわりとも、御尤もとも、當然とも、申し上ぐる言葉とてもござりませねど、何を申すも此のやうに、御本心無き御ン有樣でござります。

正榮尼　たとへ御最期遊はすにもせよ、一旦御本性に復らせられました其上で

大藏卿　御得心の其上で、御生害をお勸め遊ばし……

正榮尼　我々共もとも／＼に……

三人　今一度お言葉かはし、冥途の御ン供つかまつりたうございます。

饗庭局　今に御本心に成らさせまするほどに……

三人　暫く／＼。

トいづれも泣きながら、さま／＼にとめる。此間胸元を取られたる淀の方は、無言にて、いかにも呆れ驚きたる狂人風の思入、こなしありて

淀君　アレ、此人は／＼。どうしやる／＼。

ト秀頼こらへかねて、手に持つたる小刀を擲げいだし、其のまゝそこにドウと坐し、落涙して

秀頼　ヤイ内膳、ゆるしくれよ。女々しと思へど、とゞまらぬ、涙は同じ涙なれど、最前落せし熱湯は、父太閤の偉業をば、此身ゆゑに滅すかと、不肖を悔む慚愧の涙。今ふりしぼる此涙は、愧も忿怒も憾恨も、人の心にありとある、百八煩悩一つとなつて、五臓六腑を骨もろともにしめぎにかけ、しぼりいだす血の涙ぢや。ゆるせ、泣かすにはをられぬわい。

ト身をふるはせ、兩手にて面を掩うて泣く。氏家も同じくこらへかね、無言にて痛歎のこなし。皆々もうつむきて愁ひのこなし。淀の方は二人の貌を見くらべ、氣味わるき聲にて笑ひだし

淀君　ハヽヽヽ。お泣きやる／＼。男ぢやに、此人たちは。……オヽをかし。オヽをかし。ハヽヽヽ。（ト正體なく笑ひこける）

正榮尼　エヽお情けない。淺ましや。現在御ン血を分けさせられし右大臣さまの御ン顔に、お見おぼえさへないかいなう。

ト泣く。饗庭も泣きながら膝を進めて、淀の方の手を取り

饗庭局　モシ、御前さま。御ン方さま。マヽこゝへ、御座あそばせ。（ト秀頼の方を指さし）コレ、あのお方が、あなたのお目には見えませぬか。

ト饗庭局起つて淀の方の手を引きつゝ秀頼の傍へつれゆき、秀頼へこなしあつて

この御ン方を御存じないか。

トよろしく口說く。淀の方しばらく秀頼の貌を見てゐて

淀君　オヽこの人は知つてゐる。わしが子の秀頼ぢやわいなう。（ト手輕に言ふ）

饗庭局　ヤヽすりやお正氣にならせられましたか。

秀頼　ナニ、ようごぞんじとや。（トじつと淀の方を見守りて）さてはお心が落着きましたな。（ト膝を進め）御正氣にならせらるゝ上は、改めて申し上げねばならぬことがござりまする。母上、只今秀頼が申す事を、ようお聞き下されませうぞ。

ト秀頼容をあらためて、淀の方の前に兩手をつきて、言葉しづかに

最前修理ノ亮へお吩咐ありし使者への返答の儀にござりまする。豐臣の血統を繋ぐ爲に、せめて秀頼だけは出城させよとの御慈愛のお言葉は、忝けなうはござりますれど、たとへ大御所の慈悲に縋つて、一旦は母子命助かるとも、つく／＼關東の下心を察しますれば、豐臣の血統は、所詮永うは繋がれませぬぞ。慈悲を施すは大御所が一時の權略に過ぎませぬぞ。生中に生き存へて、他日の恥辱を蒙るよりは、潔く生害いたし、あの世の父上に不肖の御ン詫び……（ト言ひかけて涙をぬぐひ）母上とても最前までは其のみこゝろと、心を安んじ、覺悟いたしをりましたに、只今修理へのお言葉は、日ごろには似ぬ御未練千萬。（トきつく言つたが涙を呑み）これといふも、畢竟は、此身を不便とおぼしめす御恩愛の餘りと思へば……

トいひかけて後をいひかねて泣く。淀の方、其顏を如何にも不審さうにしげ／＼と見てゐて

淀君　オヽ、オヽ、そなたの顏一ぱい、水かけたやうに涙が流れる。オヽ／＼そちらからも流れる。オヽ／＼、オヽ／＼、こちらからも流れる。アレ／＼流れる／＼。オホヽヽヽヽ。

ト皆々驚く。秀頼も驚きて顏をあげ、じつと淀の方の面を見つめてをり、トゞ情けなげに

秀頼　エヽ、たわいもなき御有樣。（ト齒をくひしばりてうつむく）

淀君　（皆々の貌を見くらべて）ハヽヽヽヽ。

ト正體もなく笑ふ。秀頼涙にくれて立上り、元の座に歸る。皆々愁然として言葉無し。此時大野修理ノ亮いそがしく上り來り

修理亮　使者より重ねて嚴しき催促申し參り、返答によつては直にも石火矢を打掛け申さん勢ひを示しましたるゆゑ、改めて上意うけたまはりまする暇もなく、それがし只今罷り向ひ、御母公樣の仰せをいたゞき、ともかくも君御承諾の趣きをば申し傳へてござりまする。

ト氏家內膳之れを聞きて驚きたる思入、忽ち氣色ばみて修理ノ亮に向ひ

氏家　ヤア、案外千萬なる其計らひ。其許は君を辱め奉るを臣下の本意と心得らるゝか。見よ、御母公の御ン方には、まッこの如く御正體もなき御ン有樣。取亂させられた此お姿を、關東の下司輩人の指目に曝し、恐れ多くも豐國さまの、お名まで汚さん所存なるか。

トきつといふ。これにて修理ノ亮もむつとしたる思入されどわざと落附きて

修理亮　ハテお騷ぎめさるな內膳。不肖ではござれども修理治長、君の御ン恥辱と相成るやうなことを、何で取計

らひ申さうや。只今兩使節と種々談判の末、然るべき御輿持參するやう、とくと命じおきましたれば、誓つて御尊容を人目にさらすやうのことはござりませぬ。身共の取計ひを案外なりとお咎めあれど、御降參の儀は御母公樣の御意でござるぞ。さやう申さるゝ其許こそ、君へ對し慮外でござらう。(トきつといふ)

氏家　いや、第一、その御母公の御意といふことが心得がたい。御母公には、先刻以來引續き、斯く御正體もなく渡らせられたと存ぜらるゝ。さすれば、さやうのお差圖遊ばさるべき儀はない筈。……察する所、こりゃおぬしら自身が命惜しさに、御母公の御意なぞと申し拵へ、强ひても御降參をお勸め申さうといたしたのに相違あるまい。

修理亮　だまりめされ、氏家内膳。おのれが心に引きくらべてか、申し拵へたなどゝは、無禮至極の申し條。

氏家　おのれが心に引きくらべてとは、よう申された。日頃から御母公の御贔屓あるを笠に被て、おぬしら親子が目に餘る無禮緩怠。事のこゝに至つたも、元はといへばおぬしたち親子が不所存ゆゑぢや。

修理亮　ナニ、我等親子が不所存ゆゑとは。

氏家　いかにも。

修理亮　その仔細承らう。さ、承らう。

氏家　オヽ申さう。

ト雙方共に刀の欛に手をかけぬばかりにして意氣込む。

秀頼　兩人ひかへい。

兩人　ハヽア。

トひかへる。此途端淀の方あちら向きに打臥したるまま、だしぬけに、二人の爭論を嘲けるやうに

淀君　ハヽヽヽヽヽ。

ト陽氣に笑ふ。ト正榮尼しづかに秀頼の前へ進み、うや〳〵しく手をつきて

正榮尼　恐れながら我君に申しあげ奉ります。御ン母君の御最期のお言葉に背かせられましては、何ぼうにも君御不孝と後の世までも取沙汰。何とぞ一時の御ン恥辱を忍ばせられまして、お家百代の御ン爲に、まげても御出城遊ばしますするやう、恐れながらお諫め申しあげまする。

トいひ終るか終らぬに

淀君　ハヽヽヽヽヽ。

ト又嘲弄するやうに笑ふ。大藏卿もまた泣く〳〵膝を進めて

大藏卿　ことには、あれ〳〵、あのやうに、御正體もなくいらせられまするを、いや應なしに、無慚の御最期させまするは、「どうあつても助けてくれ。死なぬ〳〵」とお

つしやりました其お言葉を思ひ出だせば……
トいひかけて、いひよどみつゝ泣く。修理亮ひッとつて

修理亮　御高恩蒙りし我々ども、助け奉る術なくば兎も角も……

正榮尼　現在お使者が御輿まで用意いたしてまゐるとあれば……

饗庭局　お家のお爲でござります。……

正榮尼　御母公さまのお爲でござりまする。……

大藏卿　何卒みこゝろを曲げさせられまして、ともかくも御出城遊ばしますやう。……

正、大、饗　お願ひ申しあげまする。

腰元、皆々　お願ひ申しあげまする。

ト皆々よろしく手をつきて秀頼に願ふ。淀の方は此以前に起直りて此樣子をじろ〲と見てをり、此時また

淀君　ハ、、、、。

ト嘲るやうに笑ふ。秀頼じつと思入、やがて毅然と一同を見やりて

秀頼　一同の願ひといひ……

トいひかけて淀の方へ思入ありて

あのお姿を見るにつけ「死ぬならば必ず一しよに」と訣別の盃を取りかはして、潔う死なうほどに、必ず欺すなよ、僞つて殺すなよ」と往ぬる夜、御持病募りし折、御邪推が七分の、御怨言の其中にも、三分はまじる御慈愛の、其お心根が目にあり〲……

トいひかけて眼をしばたゝき、うつむきて涙にくるゝ思入。淀の方きよろ〲と皆々の顏を見比べてゐる。

修理亮　すりや一同のお願ひを、君にはお聽入れ遊ばされまするか。

氏家　すればアノ御降參を。

ト意外の思入。皆々は嬉しげに

皆々　アノ御出城遊ばしまするか。

ト此途端、淀の方は、ふと千姫の打掛けの最前のまゝ秀頼の座のこなたに落ち散りあるに目をつけ

淀君　ヤ。千姫……

トつか〲と駈けよりて打掛けを掴まうとしてよろめくを、秀頼押へて、其顏をじつと見て

秀頼　如何なる恥辱も……

ト淀の方をおしすゑながら

母上にはかへられぬわい。

ト落涙のこなし。淀の方は、打掛けをきつと掴みて、悔しげに向うを睨みて立ち上りながら、身をふるはせ

ろ。皆々よろしく愁ひの思入。

―幕―

第三幕

第一場　本丸の高石垣際

正面一體に高石垣。こゝへ向うより井伊掃部ノ頭の臣杉本次郎左衛門、兜をかぶり、鎧姿にて其部下三四名に石火矢一門を舁かせて急ぎ足に出で來り、石垣際へ來ると、差圖して部下を上手へ送り込み、杉本だけ殘る。こゝへ下手より同じく井伊の臣甲、乙、鎧腹卷、おの／＼手槍を提げて出て來る。

杉本　何と、おの／＼がた、末路とは申しながら、さてさて淺ましいものでござるな。かねて無き身と存ぜぬかして、右大臣秀頼ともあらうものが、おめ／＼御憐愍のお沙汰に縋り、然らば出城仕ると、お使者に御返答致せしとやら。

甲　臆病者の大野修理が、お傍に附添ひをるからには、命をしさに恥を忘れ、或ひは左樣の御返答もしかねまじと存じをりしが、さすがに面目が無いと相見え、右大臣御母子の爲に輿下し置かれたしと、刑人の贅澤三昧。

乙　牛は牛づれの片桐且元、豫め大野修理が、かく御返答仕らんと承知致しまかりあつた歟、今ン朝茶臼山の御陣所へ、輿用意し、參着なし、大御所さまのお慈悲に縋り、お迎ひの役目申し乞ひ、入城なすは奇ッ怪至極。

杉本　打棄ておかば取りも直さず、禍根を百年に貽すの道理、まッた臺命にも相そむけば、かやう／＼に取計らへと、我君の御內意うけ、出陣の騷ぎに事よせ、過失にもてなして、燃え殘つたる篝り火にて、彼れが準備の輿二挺、まんまと首尾よく燒きたてたれば……

甲　案にたがはず狼狽なし、再度輿の準備に及び、人を諸方に走らすうち、餘程時刻も移つたりしが……

乙　いまだに入城いたさゞるは、準備が調はぬと相見えまする。

杉本　手詰めの御談判も今一刻。

甲　お使者さへ退出あらば……

乙　一擧に事を決する手筈。

杉本　ハテ、こゝちよい……

三人　ことでござる。

ト此時、下手より本多家の家臣某、兜をかぶり、鎧腹卷、手槍を提げて急ぎ足にて出で來り

某　方々は井伊どのゝ御家來衆ではござらぬか。

杉本　さやう仰せらるゝ其許は、本多どのゝ御重役。

甲　シテ、何事の……
三人　御用でござるな。
　　トこれにて某こなたへ近づき
某　早速ながら、片桐市ノ正且元、程なく此のところへ參着いたせば、御如才はあるまじけれど、かねてのお手筈、必ず共に御油斷なきやう、何とぞ御主人へお傳へ下され。此儀申し通ぜんため、驅け附けまゐつてござりまする。
杉本　すりや片桐市ノ正が……
甲　アノお輿の準備を整へ……
某　アイヤ、其準備は整はざれども、萬一時刻おくれし爲、間違ひあつては一大事と、御輿準備の爲に、家來某を殘し置き、自分は最前の輿にて、子息出雲ノ守孝利もろとも、中を飛ばせて程なく此れへ。御猶豫あらば何かと妨げ、片時も早く御處分あるやう。
杉本　心得申した。しからば直さま我々どもは……
甲　此儀を主人へ……
三人　申し傳へん。
杉本　お役目御苦勞に……
三人　ぞんじ申す。
某　さやうござれば。
皆々　ごめん下され。
　　ト杉本及び甲、乙は上手へ、某は下手へ急ぎ足にてはひる。

第二場　本丸櫻門前

上手奥へ下げて、斜に本丸の城門、門の前、準へに架りたる幅廣き橋の左右は、水滿々たる内堀。門よりずつと奥下手へ斜に高石垣、角櫓などよろしく、天守閣も木立の彼方に餘り遠からず聳えて見える。上下共に、前の方は三四間もあらうといふ巨石を幾つも用ひ、築き上げたる高石垣。既に門内處々に火かゝりたりと見えて一面の黑煙、奥にて砲銃の音。爆發の響き、建物の燒落つる音、鬨の聲。處々に槍、刀散らばり、死骸も二つ三つある。

やがて、向うにて六尺の掛け聲聞ゆると共に、本多家の士二人、鎧姿、急ぎ足にて片桐の輿を警護し、先きに立ちて走りいづる。すぐ其後について、六尺四人にて市ノ正の輿をかき、出雲ノ守孝利其脇にひつそひ、大急ぎにてかけいづる。花道中ほどへ來ると出雲ノ守輿の中をのぞき

出雲守　父上々々。お心たしかにござりまするか。……父上々々。
　　ト懸念の思入にて早口にたづねる。輿、花道の附けぎはまで來る。出雲ノ守、走りながら輿の窓の簾をかゝ

げ、中を見て
ヤヽ、父上には……まて〳〵。輿待て。
トこれにて六尺輿をとゞめる。案内の士もたちどまる。出雲ノ守あわたゞしく輿の戸を開ける。ト市ノ正釣り下げたる布切れにしつかりと縋りたるまゝ氣絶してゐる。出雲ノ守大に驚き、科介にて輿を下せと吩咐ける。六尺輿をおろす。出雲ノ守手早く懐中より準備の藥剤を取りいだし、父の口を押しひらき含ませ、豫て輿の中に備へたる吸筒をとりいだし、水を飲ませ、さまざまに介抱する。此間皆々も手傳ふことあり。
父上、父上、父上。一大事の折柄にござりまするぞ。お心たしかに持たせられませ。……父上さま、父上さま。
ト呼ぶ。これにて且元息を吹きかへし、苦痛を忍ぶ思入ありて
市ノ正　孝利か。お廣前へまゐつたるか。
出雲守　イヤ、まだこゝは櫻御門。今しばしでござりまする。お心たしかに持たせられませ。
市ノ正　ナニ、櫻御門……
ト且元きつとあたりを見て、はつたと怒り
たはけものめが。刹那の遲速もお家の存亡と存じをらぬか。うつけものめが。……とつとと輿……
ト言はうとして苦痛の思入。こらへかれて身悶えし、半身輿の外へ轉びいづるを皆々立ちより介抱する。且元苦痛の間に「輿をやれ」ト命じようとして口のきけぬ思入。科介にて「輿をやれ」と命ずる。出雲守止むを得ず、且元を輿の中へ抱き入れようとする。此途端、又揚幕より、ばた〳〵にて十河十兵衛、立派なる空輿を六尺にかゝせ、其脇にひつそひ、大急ぎにて駈け出で、すぐに本舞臺へ來て
十兵衛　ヤヽ、御主君には、又もや御病苦募らせられしか。
市ノ正　オヽ、まちかねしぞ、十河十兵衛。輿の準備は整ひしか。
十兵衛　ハヽ、仰せにしたがひ處々方々と、手を分つて人を走らせ、尋ね求めてござりますれど、只一挺の其外は、如何にしても手に入り申さず、今村三右衞門を後にとゞめ、なほ尋ねさせてござりますれど、萬一時刻後れしため御用に立たずば詮なきことゝ、お城の御模樣心に掛り、中をとばせて御蹤尾ひ、驅けつけましてござりまする。
ト流るゝ汗を拭ひ〳〵、息つぎあへず言ふ。且元これを聞きて、くわつと眼を見開き
市ノ正　孝利々々。
出雲守　ハヽ。
市ノ正　時刻すでに移つたれば、君の御ン上心元なし。我れに代り、其方、其輿を持參なし「大御所の御許し受

け、片桐市ノ正且元、右大臣さま御母子お迎ひのため參上」と大音に申し入れい。かくいふうちも心懸り、我れもすぐさま後よりゆかん。はや〳〵おゆきやれ。はやく〳〵。

出雲守　心得ました。……十兵衞、父上の介抱賴むぞ。

十兵衞　ハヽ。

出雲守　父上御免。……方々、御案內下されませう。

士　心得申した。

ト出雲ノ守六尺を促して十兵衞が持參せし輿をかきあげさせ、本多家の士に案內せられ、大急ぎにて櫻門より奥へはひる。又も火の粉降り、黑烟あたりに滿つ。

市ノ正　如何に老病とはいひながら、御ン大事の折からなるに、くちをしき我が有樣。……ヤイ、十兵衞。……輿へ〳〵。

十兵衞　ハヽッ。

ト十兵衞、市ノ正を扶けて輿へ抱き入れようとする。ト市ノ正又激しく苦悶し、科介にて十兵衞をとゞめ、辛うじて息をつぎ

市ノ正　コリャ、ヤイ、十兵衞。我れ今輿を急がすときは、お倉前に到らずして、絕命せんこと疑ひなし。油斷ならざる佐渡が胸中、大御所が心の底。我れ未だ死すべきならず。さりとて只今躊躇なし、まッた御ン輿不足せば、例の御母堂のお邪推より、如何なる間ちがひ……心もとなし。慮外なれども我が輿を……孝利の後おつかけさせい。……はやく〳〵。

十兵衞　おほせではござりますれど、此お輿これなきときは、如何にして御病體を……

市ノ正　いらざる馬鹿念。戶板なりと、楯なりと、求めさせい。その輿、片時も早う……

トよろしくこなし。十兵衞心得、同じく科介にて六尺二人に輿を本丸へ急ぎかきゆけと命ずる。六尺心得、輿をかきあげ、一さんに門內へはひる。十兵衞はまた殘れる二人にさゝやき、戶板やうのものを用意し來れ、と命ずる。二人心得て一さんに下手へはひる。此の間、且元は地上に横さまに倒れ、左手を杖にして身を起し苦しげに息をつぎて

市ノ正　心得ず此胸さわぎは。正しく病苦の故にあらず。御助命つひに叶はずしてお家滅ぶる知らせならぬか。折も折とて病苦募り、多年の苦心畫餅となり、千仭の功を一簣に缺く歟、無念至極。（ト胸をおさへて大息つぎ）豐國さまへの申しわけに、せめてもお家の社稷ほどは、いかで百歲の後までもと、東西の間に奔走なし、大御所を說き、速水甲斐、大野修理、其他兩三輩同意させ、和睦の內約整うたりしが、只眼前の勝利を賴む野猪の如き

淺智の輩、まッた二つには御母公御猜疑深く、事破れんとしたりしゆゑ、速水甲斐と申し合せ、物體なくも、淀殿の御座所を目がけ石火矢を、二度までも打ちかけし、其計略圖にあたり、御母公果して怖れたまひ、御ン和議となつたりしは、お家の慶事、と思ふにたがひし再度の役。……和議を勸めまゐらせしも大不忠となつたるか。

（ト苦みながら、急に又十兵衞を顧み）ヤイ十兵衞、如何にしても心懸りぢや。戸板を待つ間もどかしゝ。我れを脊負うて、せめても御門内へ。……と脊負うて、ご、ご、ご御門内へ……

十兵衞　ハ、畏つてござりまする。

ト十兵衞立ちより扶け起し、市ノ正を脊負はうとする。市ノ正十兵衞の肩にすがり、辛うじて起ちあがり、二足三足歩む途端、門内奧の方にて、大砲一發、小銃連發の音すさまじく、鬨の聲どつとあがる。

市ノ正　ヤ、……

十兵衞　あの物音は……

ト市ノ正覺えず肩に掛けたる手を離し、仰ざまに顚倒し、倒れながら直に左手を杖に門の方をきつと見こむ。十兵衞驚き、駈けよりて介抱する。

市ノ正　じゆ、じゆ十兵衞。……樣子をく。

トこなし。十兵衞一さんに門内へかけ入る。市ノ正辛うじて身を起し、じつと門内を見込みて大息つぎ

市ノ正　しなしたり。……手後れとなつたるか。事破れたるに相違なし。……我れ餘りに大事を取り機の熟するに時方ありと、中心竊に戰ひを期しながら、大御所存命の其間は、平和を陽に一時を欺き、徐ろに計りごとを運らさんと、思ふ心の僞りに、爲すことおのづから模稜となり、言行に矛盾の影を現じ、身方も誤つて我れを疑ふ。ましてや眼炬の如き當代無双の大御所をや。……我れ譎詐を以て對ふが故に、彼れまた譎詐を以て之れに應じ、其業因滅せずして、一度ならず二度までも、關東の計略におちいつたるか。……

ト此時天守閣のうしろに當りて、新に火の手盛んに揚り、糒庫燃ゆる體。

ヤ、あの火の手は……あれこそ正しく……

トのびあがるはずみに、思はずもすつくと腰立ち、二三間堀の方へづかく と走り行き

山里の……

トいふ拍子に、よろくとうしろ向きのまゝよろめきつゝ、トヾ尻居に倒れて血を吐く。途端に門内より出雲ノ守孝利一さんに走り來り

出雲守　父上、無念至極にござりまする。

ト市ノ正倒れてゐるのを見て驚き、抱き起し、さまざまに介抱し

出雲守　父上々々。

ト呼ぶ。市ノ正目を開きて

市ノ正　御ン大事去つたるよな。

出雲守　にッくきは井伊直孝、お輿(のりもの)を持參なせしに、直(すぐ)には御座所へ案内せず、かにかくと事むづかしく、問答一兩度に及ぶうち、井伊の指圖か、安藤か、御座所を目がけ無法にも、切つてはなせし石火矢に、大事は破れてござりまする。

ト奥を見込み、無念のこなし。市ノ正苦しき息をつぎ

市ノ正　すりや右大臣さまにも、もはや御生害遊ばされしか。

出雲守　一發はなせし石火矢が、お庫の窓(まど)の戸碎くやいな、あまたの鐵砲を連發なせば、かくと豫めお覺悟ありしか、お庫のうちはしづまりかへり、忽ち四面の窓口より、うづまきいづる黒煙り、閃く火焔(ほのほ)炎々と、見る間(ま)にお庫は炎上なす。申すまでもなく御一同、御生害とぞんじまする。

ト悲歎のこなし。此のうち城内の火の手はます／＼盛んになり、天守閣も焼けはじめる。火の粉はげしく降りて黒煙りまた四邊を掩ふ。ト十河十兵衞、火の粉の下をくゞつて一さんに門内よりかけいで來り、二人の前にどうと坐し

十兵衞　くちをしうござりまする。

ト土にくひつきて泣く。

出雲守　すりやいよ／＼、御生害と定まつたか。

十兵衞　お母公(ふくろ)さまをはじめ奉り、右大臣さま、大野どの、三十餘人の御ン方々殘らず御生害にござりまする。

出雲守　チエ、無念……

十兵衞　若殿さま……

出雲守　十兵衞……

ト兩人顏を見合せ、本丸の方を睨み、こらへかねて男泣に泣く。トヾ出雲ノ守きつとなりて

出雲守　十兵衞、父上の事はそちに頼むぞ。……父上、おさらば。

ト血相をかへて門の方へかけゆかうとする。市ノ正瞑(つぶ)いでゐた目をくわつと開きて

市ノ正　うつけものめ。血相(けつさう)かへて何處(いづこ)へゆく。

出雲守　せめても君の御ン弔ひに、當座の敵(かたき)直孝めを。

市ノ正　たはけものめ。只一二人を敵とねらひ、匹夫の怨みを報いんとならば、この且元、命二三十あるとても、今ン日まで存ふべきか。……まて。……坐われ。

出雲守　ぢやと申して……

市ノ正　ハテまてと申すに。
出雲守　ハ、ア。
ト出雲ノ守餘儀なく下にゐる。市ノ正苦しき息をほつとつきて
市ノ正　ヤイ倅、一人を敵と怨まば、この且元をば、八裂には何故せぬぞ。……お家の滅亡を速ゝせしは、この市ノ正且元。……去年御戰はじまりしまでは、我れ只機を失せし他人の淺慮を悔み、首尾兩端の政策に、お家の滅亡を速ゝせし我が姑息の非を悟らざりしが……わが初め招き集めし諸浪人、偏におのれが功名を欲し、只管匹夫の勇に驕る。彼等代つて政術を執るに至らば、……大御所の威德と孰れ。（ト大息つきて、喘ぎ）たとひ一旦は戰ひ勝つとも、お家の滅亡十年の外に出でじ、と悟りし時の我が心中。（ト又苦しげに息をつぎて）此の上は是非もなし、せめて當家の社稷はどはと、……心を碎きし御ン和睦が、仇となつたるけふの仕合せ。（ト遙に豐國神社の方を拜する思入ありて）「大坂城を落さん手段は調停より外になし」との、豐國さまの仰せを其まゝ（ト出雲ノ守に向ひて）敵に教へし逆臣は、此且元にてありけるぞや。天罰たちまち運り來り、處もかへず殉死なすは（ト天守の方を見かへりて）不忠の臣が無上の面目。……只恨むらくは病ひの爲に、千金の寸陰後れしため……
ト遺恨の思入にて、じつと本丸の方を打見やり苦悶して倒るゝトドタンに、天守の火の手はます／＼熾ンになる。此時、揚幕より大御所家康、馬上にて旗下大勢を引したがへ、高力左近、馬脇につきそひ、門前に近づく。始終、本丸の火の手にのみ目を注ぎたりし大御所、此時ふと市ノ正らを見て馬をとゞめ、侍臣を顧みて何事か命ずる。侍臣走り進みて、樣子を見屆け、又走せ歸りて、馬前にひざまづき
侍　片桐市ノ正主從でござりまする。
ト大御所うなづき、高力左近を見かへり、其意を得させ、馬をとゞめる。片桐出雲ノ守主從は漸く心附き、俯伏してゐたる市ノ正を抱き起さうとする。高力進みちかづき
高力　アイヤ、片桐市ノ正どのとお見受け申す。大御所の御諚でござる。御重體の儀なれば、御遠慮には及びませぬ。其のまゝに御座なされよ。
ト門内より豐島刑部、加賀爪甚十郎、前幕の服裝にて井伊の部下に警護せられて出で來り、大御所と見て走り進み、恭々しく馬前にひざまづく。
大御所　オ、刑部か。甚十郎。シテ秀頼母子は。只今の砲聲心元ない。どうぢや。秀頼は遁れまゐつたか。
豐島　ハ、、恐れながら、遺憾至極に……

二人　ござりまする。
大御所　ヤヽ、すりや手後れと相なつたか。
二人　御意にござりまする。
加賀爪　御諚の通り、我々兩人まかり向ひ、申し入れましてござりますれども……
豐島　かにかくと事むづかしく、御輿の準備なくば、決して此城を出でかたし、と頑固なる御返答。
加賀爪　市ノ正いまだ參られざるゆゑ、據ろなく我々兩人、一先づ其場を引揚げましたを……
豐島　血氣にはやる壯兵ども、お調停破れたりと存じ誤り、とゞむる暇もこれなきうち……
加賀爪　右大臣どのゝ御座所を目がけ、切つてはなせし大砲小銃。
豐島　かなたも豫てお覺悟ありしか、糒庫は忽ち炎上。
加賀爪　右大臣どのをはじめとして、一同御生害に……
二人　ござりまする。
　トかはる／＼言上する。大御所聞き了りて
大御所　親子の者を迎へんとて、わざ／＼これまで出向いたるに・…ハテサテ殘念な事をいたした。
　ト本丸の方を見やりて、遺憾の思入。
　左近。
高力　ハッ。

大御所　市ノ正が心中察し入るわい。ソレ、投藥の用意。
　ト低聲にて吩咐け、やがて左右に指揮して徐かに駕を降り、刑部、甚十郎を隨へて市ノ正主從がそばに歩み寄る。出雲ノ守、十兵衞、息も絶え絶えなる市ノ正を抱き起さうとする。大御所科介にて之れを制め、其傍近く床几をすゑさせて腰を下し
市ノ正、市ノ正。
　ト出雲ノ守、市ノ正の耳に口を寄せて
出雲守　父上、父上。大御所の御前でござりまする。
　トこれにて市ノ正少しく頭を擡げる。高力左近藥劑の用意をして持ち來り
高力　お藥劑をたまはりまする。
出雲守　ハヽ、有難く頂戴つかまつりまする。
　ト出雲ノ守うけいたゞき
出雲守　父上、大御所よりお藥湯を賜はりまする。
　ト十兵衞は後より市ノ正を扶け起す、出雲ノ守は前より扶けて藥劑を服せしめようとする。市ノ正靜かに之れを排け、左右より扶けられて危座し、無言にて敬禮する。大御所つく／＼見やりて
大御所　市ノ正、さて殘念なことであらう。察し入る／＼。此期に及びて言ひ慰むる言葉も無い。（ト歎息して）かかる良臣ありながら、かゝる仕儀と相成るは前世の宿業

と申すものか、是非もなき豐臣家の薄運。……主人の馬前に立つて命を惜まぬ者は間〻ある、勘氣、手打を怖れず諫言を申すものも得がたうなけれど、國を去るも名を潔くはせず、大義を存せぬ輩には不忠者、謀反人よと譏られながら、心中一日も主家の安危を忘れず、まッた二つには天下千歳の爲を存じて、止むを得ずば、せめても無要の軍をとゞめて、永く主家の祀ほどは、世に絶つまいとの心がけ。……あッぱれ良臣のかゞみなるに、如何なれば其志しを遂げさせぬぞ。まことに千歳の遺憾ぢやわい。……我が家幸ひに、此末永く榮えうとも、盛衰は廻り持ち、末路あるは覺悟の前ぢや。子孫に語りつたへて、足下の如き良臣をば……

トいひかける。市ノ正氣力次第に衰へてグタリとなる。大御所床几を離れて、且元のすぐ傍に立ちて見おろしながら

市ノ正、市ノ正。

ト小聲にて呼ぶ。孝利、十兵衛、市ノ正を左右より搔きいだきて

出雲守　父上、父上。

ト呼ぶ。市ノ正かすかに目を開く。出雲ノ守又呼ばうとする。大御所これをとゞめて

大御所　そのまゝ〳〵。

ト小聲にていひつける。市ノ正また目をふさぐ。出雲ノ守、十兵衛、懸念の思入。大御所よろしく思入。

──幕──

改作 牧の方（五幕十三場）

第一幕
第一場　鎌倉の街頭
第二場　名越北條邸中門外
第三場　北條邸の奥の間
第二幕
第一場　新御堂裏手普請小屋
第二場　新御堂内
第三場　南の山下
第三幕
第一場　稻毛邸七夕祭
第二場　腰越旅館中門内
第三場　旅館內重保寢所
第四幕
第一場　北條邸牧の方居間
第二場　由比が濱
第五幕
第一場　名越山附近の杜蔭
第二場　北條邸奧庭

第一幕

第一場　鎌倉の街頭

鎌倉の比企ヶ谷を後ろに間近に見やりたる名越町の街頭、橋の袂の景色。（以上道具幕）。こゝに工匠四郎作（六十位）、商人某、壁塗り某、鍛冶某、檜物師某、染殿某等、めい〳〵今店から飛出して來たといふ風に職業道具を手に持ち、烏帽子、袴にて、向う（揚幕）の方を見込みつゝ、驚いた思入れをして立つてゐる。（合ひ方、水の音）。

建仁三年十月中旬、午前。

壁塗り　あんだツぺい！　あんだツてお侍ひ衆が、目イ圓くして、泡アくつて、あつちこつちを駈けずりまはるだか？

鍛冶　又謀叛人でもあつて、俄かにお召し出しになつたのかも知んねえ。

檜物師　此間中から、地震のでツけえのが續くだから、ろくでもねえこんだと思つてゐたゞよ。

ト此間、手を組んで考へ込んでゐた四郎作、嘆息の思

入ありて

四郎作　つい此間幽閉のお身とお成りなされた前將軍さまのお連累で、比企の判官さまや仁田の四郎さまは、たつた一日二日の間に御滅亡。あゝ〳〵、情けない事ぢやと思うてゐたが、やれ〳〵また軍騒ぎか！……ア、なんまみだぶ〳〵！

商人　ほんにたア、頼まれぬは人の身の上ぢや。新將軍さまは、まだやッとお十二、北條さまが後見してござるから、大丈夫ではあらうけれど、どうかマア、世の中の亂れんやうにしたいものぢや。

ト此内、壁塗りは、急に向うを指ざし

壁塗り　ア、、あれ見さい！　あの人達は鎧着てるだ。……ア、、また後からも來たゞ。

檜物師　どこへ往くだんべい？

鍛冶　あの人達は、あつちイ往くだから、北條さまへ往くのかも知んねえ。

壁塗り　あんにしても、只ごとぢやアねえ。

商人　オ、オ！　裏町の鍛冶の姉御が、大急ぎで戻つて來るわい。

壁塗り　ア、、息イ切つて駈けて來るだ。

四郎作　あの衆に聞いたら、定めて理由が解るであらう。

ト此内、向うより呼び賣りの女商人三人、△と○とは老年と中年、□は少女、いづれも頭の上に荷箱を載せ、足早に駈け出て、すぐに舞臺へ來る。

皆々　どうしたゞ〳〵！……何事が起つたゞね？

△女　大變が起つたゞよ！

○女　今にも軍が始まるちふだ。

皆々　何が起つたゞ？　どうしたゞ？

△女　北條さまのお邸で、とんでもねえことがあつたちふだ。

□女　大きな聲では言はれねえだが、何でもハア尼御臺さまや相模守さまとは生さぬ仲の、アノ牧の方さまが、食べ物の中へ毒ウ仕込んで、新將軍さまを殺さうとさつしやれたのが露れたとかで、將軍さまは俄かに御所へお歸りなされる。それが元で、大騒ぎになつたゞ。

△女　あの界隈はまるで軍場のやうだわな。今にも北條さまへお討手が向ふかも知れねえちふだ。

□女　おらアもう怖くツて、からだ中が顫へてなんねえ。

ト此間皆々駭き呆れる思入よろしく

壁塗り　ぢやア、かうしちやをられましねえ。さ、早く、内のやつらに知らして來べい。

商人　さ、皆、ござれ〳〵。

ト一同あわて騒ぎて、上下へ別れて入る。

（ト道具幕を落す。）

第二場　名越北條邸の中門外

正面やゝ上手寄りに中門。其上手は築地。其前の處には既の軒先き見ゆる。正面より下手へ掛けては一面の築地。築地の奥には建て物、樹木、間近の山々など見ゆる。すべて名越山麓の北條邸中門外の體。

前の場とほゞ同時刻。

こゝに牧の方の甥、牧ノ左源太輝英（二十五六）物の具に身を堅め、郎黨藤吾、藤内を後ろに從へて中門の前に立ちかゝりをり、北條家の郎黨軍平、兵六、同じく鎧姿にて、其下手につくばうてゐる。

左源太　尼御臺が今ン朝のお計らひは、近ごろ以て理不盡千萬。根も葉もなき道路の浮説をお信じあつて、無二無三に新將軍家を、還御させまゐらせられしのみならず、三浦、和田の輩らに御諚あつて、頻りに軍兵を召させらるゝは、老公はじめ御ン方を、飽迄も逆意ありと疑はせられての御ンはからひと、老公御夫婦が烈火のお怒り。或ひはすぐさま兵をひきゐて、御所へ御參入あらんも知れず。おぬしたちは、とく此旨を組下の者へ申し傳へい。

軍平
兵六　かしこまつてござりまする。

左源太　早くいたせ。

軍平
兵六　ハ、ア。

ト二人は下手へ入る。此時向う（揚幕）の方俄かに騷しくなる。

左源太　やゝ、あの人聲は？

ト此内、向うより稻毛重成入道（五十位）、同じく男次郎重政（二十三四）、共に物の具に身を固め、おの／＼得物を携へ、武装したる郎黨大勢をつれて出で、すぐに舞臺へ來て

稻毛　左源太どのでござるか？　思ひかけぬ浮説が原にて、老公御夫婦に御嫌疑かゝり、御所より程なくお討手が參るとは、實でござるか？

重政　眞僞の程は分けかねましたが、何分にも專ら風說。すは御夫婦の御ン大事と、取る物も取りあへず、萬一の場合には防戰を仕らんと、家の子共をば引率なして參つてござる。ともかくもお取次ぎ下されい。

左源太　これは／＼、早速の御參入、祝着千萬。さぞ伯母御が喜ばるゝことでござらう。

稻毛　相州はじめ右衞門ノ佐どのには、已に參着せられましたか？

重政　畠山の重保は參りましたか？

左源太　右衞門ノ佐どのは只今參着。重保はまだ參らず、ま

つた相州とのからもいまだに何の音沙汰もござりませぬ。

稻毛　いまだに音沙汰がないとあれば、一定相州は尼御臺と同腹中。……さすれば、或は噂の如く、お討手が參るやも圖りがたい。先きんずれば他を制す。こりやいつそ、老公御自身御出馬あつて、今よりすぐさま、御所へ逆寄せ、一擧に事を決せらるゝが上分別。

左源太　されば、それがしなどもさやうに存じ、其儀をお勸め申したれど、老公にはたゞ御躊躇。折しもあれ右衞門ノ佐どの參入せられ、只今奥にて御評議最中。

稻毛　しからば、吾々もまた奥へ參つて、すぐさま御評議に與り申さう。

左源太　ではお取次ぎいたす。さ、すぐお出で下されい。

稻毛　心得てござる。

ト　これにて　左源太は　稻毛父子に會釋して　中門內へ入る。

伴、其方は手の者をひきゐて表門の守護をせい。必ずぬかるな。

重政　心得ました。

ト　重政郎黨らをつれて　勢ひ込んで　向うへ行かうとする。途端に向うより畠山重忠の嫡子六郞重保（二十一二）烏帽子、直垂にて出で

重保　しばらく〳〵。

ト　行かうとする主從を押止むる。

重政　なぜお止めなさる？

重保　申すことがござる。まゝ、しばらく〳〵。

ト　ちやうど今中門へ入らうとしてゐたる稻毛入道、此時急に立止まりて、此方を見返り

稻毛　だれかと思へばおぬしは重保。かゝる大珍事の折柄に、のんべんくらりと遲參するばかりでなく、悠長らしい其いでたちは何の態だ？

重保　心得ませぬ其お言葉。不思議の御嫌疑を蒙らせられたるは、當北條家未聞の惡名。まづ第一の御詮議は、讒者の有無を取調べ、御夫婦の濡衣を乾させまゐらすることにてこそあるべきに、かくげう〳〵しく、兵具を携へ駈け着けられしは、道路の匹夫を駭かし、嫌疑を加ふる粗忽の振舞。

稻毛　やア、おしだまつて聞いてゐれば、おのが不覺を棚へあげ、吾々親子をさみする暴言。高木風をまぬかれず、當家を妬む卑劣のともがら、舌刀を研ぐと豫ての風說。讒者のあるなし査ぶるうち、討手理不盡に寄せ來らば、六郞には何とせらるゝ？

重保　たとへお討手寄せたればとて、輕々しくお手向ひ遊ばさるべきには候はず。さらぬだに外戚の威權に傲り、

我意の振舞おはするなんど〻、よからぬ取沙汰の聞ゆる此ごろ。根なし事にもせよ、お疑ひのかゝつたる上は、先づ專ら御謹愼あるべき筈なり。然るを只今にも打つて出でんとするが如くに、門內に兵馬を集へ、不穩の振舞せらるゝに於ては、いよ〳〵以て逆意の疑ひ……

稻毛　だまれ！　逆意とは何事？……我意の振舞おはすなぞとは、前後を存ぜぬ無禮の一言。おぬしの如き粗忽者が、馬鹿正直の偏屈から、兎角いはいでもの內輪沙汰までも口走るによつて、それがやがて讒言の種になるのだ。

重保　やア聞きにくい其一言！　今一たび申されたら、伯母聟なればとて、聞き棄てにはいたしませぬぞ。

稻毛　何だ〳〵？　血相かへて、そりや何だ？　讒者といつたが何と致した？

重保　他人の口から出たらば知らず、便佞讒諛を異名に呼ぶ、似而非入道の其許の口で、讒者呼ばり傍ら痛い。

稻毛　何がどうしたと？

ト此うち重政こらへかねたる思入。

重政　うぬ！

トいひつゝ躍りいでゝ、すぐに刀を拔かうとする。重保さそくに其手を抑へて

重保　何とする、次郎重政？

重政　知れたこと。父を雜言なすおぬしがそッ首……

重保　フム、すりやそれがしを斬らんず心か？

重政　知れたことだ！

重保　何を！

ト重政又拔きかけるを重保突き戾し、左右に別れ、双方刀の欛に手をかけ、きつとなる。此途端、中門內にて、

朝雅　双方共に、まつた〳〵。

ト牧の方の女荻の前の聟、平賀右衞門ノ佐源の朝雅（二十七八）烏帽子、直垂にて、童一人、郞黨二人を隨へて門內より出て、二人の間に割つて入り、よろしくこなし。

かゝる一大事の折柄に、聊かの言葉爭ひの爲に、親族互ひに鬪諍して、何とせらるゝ？　お控へなされ。……入道どの、なにゆゑお止めなされませぬぞ？

トこれにて稻毛入道やゝ恥ぢたる思入。

稻毛　面目なし、右衞門ノ佐どの。無體の過言を申せしゆゑ、つい某まで釣込まれ……ヤイ重政、控へをれ。……エヽ、控へをれと申すに。

トこれにて重保、重政、共に控へる。

朝雅　委細は御承知なれば、繰返して申すに及ばず。さて、さま〳〵と御評議の末、老公御立腹甚しく、既に御出馬とも見えたる處に、今がた裏門口より、相州の奧方與羽の前、夫に代つて參入せられ、相州は申すに及ばず、尼

御臺に於ても、何等御異念なき旨、頻つてお兩方に申しなだめ居らるれども、御ン方の怒り激しければ、如何に落着いたさうやら。さもあれ、それがし存ずるには、先方に伺念なくば、只今事を荒立つるは當家の不利。……何と我々も言葉を添へ、一まづお兩方を申し和めうではござらぬか？

重保　それこそは最も望む所。いでそれがしも……

ト重保心せきたる思入、覺えずつか／＼と門の方へ進むを、稻毛入道つゝと出で、無言にて手荒く押隔てる。これにて重保氣色ばむを、朝雅おさへて

朝雅　稻毛どのには、……先づ／＼。

ト會釋する。稻毛よろしく思入、重保を尻目にかけて、朝雅に會釋し、先に立つ。皆々つゞく。重保無念の思入。風の音。（此道具廻る。）

第三場　北條邸の奥の間

正面五間の間は古風なる大襖、上下へやゝ斜に折廻して同じく襖。一面に高麗緣りの疊を敷き詰めたる心。（すべて平舞臺）。

こゝに執權遠江守時政（六十六歳）薄くなりたる白髮頭、烏帽子、狩衣にて、中央やゝ奥に住ひて、義時より送りたる密書を默讀してなり、其やゝ上手の前に牧の方（四十五六）やゝ額際のぬけ上りたる下げ髮、小袿にて怒氣を帯びて住ひ、下手の前よき處に相模守義時の室晃羽の前（二十六七）下げ髮、小袿にて住ひ、談話なかばの體。牧の方はひどく激したる思入にて

牧の方　イヤ、其言ひ開きは呑み込みませぬ。たとひどのやうな雜說があつたにもせい、時刻にもよれ、あさまだきに、我々へ、何等の沙汰なく、裏門口より還御させまゐらせしそれのみか、すぐさま御所の門を閉堅めて、さながら事ありげに見せびらかし、けしからぬ雜說をば彌增に募らせておきながら「是れ全く浮說の根を絕ち、人心の動搖を鎭めん爲の餘儀なき計らひ」なんどとは、ようマアのめ／＼言へたもの！　そんな通らぬ辯解をば聞く耳は持ちませぬ。

晃羽　さゝ、さう思し召すも御無理ではござりませねど、何分にも夫義時他出中の出來事とて、お傍仕への老女らの不行屆、根無し事をば質しもせず、輕忽千萬な御還御沙汰。何事も濟んだ後にて云々と、傳聞つたる夫の驚き、すぐさま御所へ驅け附けまして……

牧の方　アコレ／＼、根無し事と知つたならば、なぜ先づ當館へ參らうとはせられいで、眞先に御所へは參入めされた？　問ふに落ちず語るに落つる今の一言。それぞ卽ち、わらはをば、將軍家を毒害しさうな大惡人と、疑うてゐ

やるたしかな證據ぢや。

奥羽　アヽモシ、すぐさま御所へ參りましたのは、御所からの火急のお召。それゆゑにこそ據ろなく……

牧の方　エヽ、此上の問答無益。そもじでは分りませぬ。見事いひわけがあるならば、義時どのに面と合うて聞きませう。命に懸けても此明りをば……

トいひかけたが、急に全身をふるはせて、泣き聲になり

此明りをば……立てずにはおきませぬわいのう！

ト取亂して、激しく泣く。此間、時政は密書を默讀しつゝ、折々顏を擧げ、取りさへようとして取りさへかねてゐたりしが、此時密書を傍らにさしおきて、しづかに

時政　畢竟、此たびのけしからぬ雜說は、前將軍頼家殿に心を寄する、例の比企、仁田の殘黨共が、わが一族に同志打させ、其虚に乘じ、事を仕出さん爲の反間の計略から出たことゝは、義時より送り越せし、此密書にて委細明白。……（ト牧の方に向ひ）おことの憤りも道理ながら、只今、かやうな、聊かの間違ひ、聊かの行違ひを根に持つて、同族互ひに軋轢みあはんは、取りも直さず、敵の術中におちいるはじまり。ぢやによつて、心を鎭め、こゝの道理をよう辨へ……

トいひかけるを牧の方聞きもあへず

牧の方　ナニ、聊かの間ちがひとや！　大それた謀反の惡名負はせたのを、「聊か」の間違ひと言はれまするは、わらはの方を非分、不道理とお思ひやつての事でござるか？　わらはにどのやうな不所存、不始末がござつたぞ？……もと〳〵生さぬ中ゆゑに、まはり氣、邪推もある習ひと、（ト泣きながら）此秋このかた當館に預つたアノ千幡どのゝ介抱には、心を摧き、身を惱まし、それは〳〵夜晝共に、苦勞の絕ゆる間とてはなかつたに……何ぼ生さぬ仲ぢやとて、疑ひにも事を缺き、毒害をもくろんだなんぞとは……あんまりな〳〵言ひがゝり……

時政　アヽコレ、其やうに一槪に腹を立てめされずと、ママ予の言ふことをお聞きやれ。何も義時や尼御臺がおことを疑うた譯ではない。言ひがゝりのやうに思やるは、それは畢竟おことの廻り氣……

トいひかけるを牧の方手強く遮り

牧の方　わらはの廻り氣とや？……　成程、廻り氣でもござらうわいの。廻り氣の多いわらはゆゑ、他人にも廻り氣があらうかと、なまなかアノ政範といふ實の子のある故に、現在目下の者にさへ、氣兼ねの絕ゆる間はなく……

ト又激しく取亂して泣きトヾ持病の癪の起りたる思入にて苦しむ。これにて奥羽も時政も驚きて介抱する。

呉羽　ア、モシ、何となされましたぞ？　母上さま、母上さま！

時政　ア、、また持病が起つたのぢや。……やア、誰れぞゐぬか？　老女どもはゐぬか？　藥を持て、いつもの藥を！

トこれにて下手の襖を開け、右衛門ノ佐朝雅、稻毛入道（烏帽子、直垂に着替へて）入來る。朝雅は上手に向ひて

朝雅　女中たち／＼！　早うお藥湯を御持參なされ。

ト此内、老女一人、腰元二人藥湯を携へ、上手の襖をあけて急ぎ入來り、呉羽の前と共に牧の方を介抱し、藥を服させる。牧の方漸く落ち着く。此間に時政、朝雅、稻毛よろしく住ふ。朝雅は時政に向ひて

朝雅　先刻よりの御模樣は、ほゞ彼方にて承はりましたが、御嫌疑の解けたる上は、只何事も穩便のお計らひをこそと存じまする。相州への御返辭は、何とぞ老公より呉羽の方へ。……

といひつゝ、尙ほ老女らに介抱せられゐる牧の方へ思入あつて

姑上の御介抱は、われ／＼へ、何とぞお任せ下されませう。

トこれにて時政うなづき、「萬事よろしく賴む」といふこなしありて、席を立ち、呉羽の前へ「附いて來い」といふ思入。呉羽の前は、無言にて朝雅と稻毛へ會釋し、時政に附いて正面の襖の奥へ入る。

此間に、稻毛は、牧の方の持病の全く治りし體を見屆けて、無言にて、老女らに「席を避けよ」と命ずる。老女と腰元とは、靜かに稻毛と朝雅とに會釋して、上手の襖の内へ入る。後しばらく寂となる。

稻毛しづかに牧の方の傍に寄りて

稻毛　傳聞つて、呆れ果て申したる尼御臺の今日のなされかた。疑ひ深いが、如何に女性の常なればとて、餘りといへば理不盡千萬。御無念の程お察し申す、お察し申す。

トこれにて牧の方顏を擧げ、怨めしげなる思入ありて

牧の方　さほどお察しなされてなら、なぜ此事をば、只穩便にのみ取計らはうとはせられまするぞ？

朝雅　イヤ、それにこそは仔細あれ。只今事を荒立つるは、和子の不爲でござるゆゑ。

牧の方　ナニ、政範の身の不爲とは？

朝雅　されば、尼御臺の御疑念の原は、いふまでもなく政範どの。御夫婦が和子を鍾愛の餘り、其立身を希望ひ、如何なる不思議のお思ひ立あらんやも圖られぬとの御ンまはり氣。然るは、和子の顏ばせと新將軍家の面ざしと

が、血統の爭ひがたく、瓜を二つと似たるゆゑに、尙ほさら自然と思ひ寄せて、あられもなき臆測沙汰。非分はもとより彼方にあり。なれども、今輕々しく事を起されなば、かゝる疑惑が主となつて、諸人去就に迷ふべく、隨つて身方の必勝を期しがたし。……ともかくも先づ穩便にと申せし仔細は斯樣でござる。

稻毛　とは申せ、かゝるよからぬ風說が、旣に一たび鎌倉中に廣がり、諸人の心中に疑惑の種を蒔いたる上は、此行末、いつ〳〵までも、御ゝ方には御心勞、政範どのゝ一身は、何かにつけて、不安千萬。

朝雅　まことに入道のいはるゝ通り、一たび染まつたる白き絲は、また故の色に復るを難んず。

　トこれにて牧の方じつと思入あつて

牧の方　いはるれば、それもことわり。すりや如何にするが我子の身の爲？

　ト稻毛よろしくこなしあつて、聲をひそめ

稻毛　されば……先きんずれば他を制す。遲れば草枕と申す下世話もござる。此上はいつその事に……

　ト更に小聲にて、何事かさゝやく。

牧の方　エヽ！

　ト大きく驚く思入。朝雅無言にて之を制し、稻毛と共に四邊へ思入、こなし。やがて互ひに目を見合せて、又膝を進める。

——幕——

第二幕

第一場　新御堂裏手普請小屋

正面は新藥師堂の境內、樹木の茂りたる岡の裾、中央に石段、其上に新築の鐘樓。中央より上手へかけて、大ぶ大きな掘ッ立の普請小屋。「新御堂普請小屋」と書いたる高札。小屋の內、あちこちに角材を多く積みてあり。遠景は大藏ヶ谷。石段の上にも、小屋の附近にも三つ鱗の紋附きたる幕を張り、爰に大工四郎作（六十位）、同澤の六、同谷の八、同五郎次、其他、何れも烏帽子、袴にて、廣き一寸板を二列に敷き、其上に胡坐かきて向ひあひ、下されの酒を飮んでゐる。四郎作の外は、皆々醉つてゐるこなし。本堂は供養最中の體。前の幕の翌年、元久元年六月下旬午後。

五郎次　どうだ、北條樣の御威光はすばらしいものぢアねえか？　たつた三月の間に、こんな滅法界なお堂が出來た。何でも世の中は威光と金だ。

澤の六　さうとも〳〵。神、佛だつて、こちとらが願つち

ヤア、ねつから駄目だが、北條様の奥方さまの御贔屓だと、二つ返事で御利益だ。
谷の八　ほんのこんだ。牧の方様の御秘藏子なればこそだ。政範さまは、まだやつとお十六だのに、從五位下に御出世なされた其上に、今度、將軍さまの御臺所さまを、京都からお迎へなさる其お使ひ役までお勤めなされ、平賀さまや畠山重保さまよりも上置きにならつしやつたといふは、すてツこちもねえこんだ。こりやアまつたく爰のお藥師さまの御利益たんべい。
澤の六　併しなア、さういふお目でたがあつたりやこそ、かういふお堂が出來上つて、其お悦びで、こちとらまで、たらふく酒が飲めるといふもんだ。
五郎次　さうだ〱。これがほんの、待てば甘露の味と來てやがらア。ハヽヽ！
澤の六　オツトヽ！……有りがてえ〱。
ト互ひに酌をしつゝ頻りに酒を飲むこと。此内五郎次ねぢ上戸の思入。
五郎次　有りがてえといやア、やい、四郎作、なぜおぬしや飲まねえんだ？　なぜ、そんな有りがたくなさゝうな面アしてゐやがるんだい？
トよろしくこなし。四郎作思入あつて
四郎作　さア、知つての通り、わしア酒は生來の不得手だや。それに、けふは前將軍家、頼家卿さまの御命日。御恩になつたことを思や、何で浮々してをられるものか？　アヽ、なんまみだぶ〱！
五郎次　コウ〱〱！　此お目出たい最中に、やい、なんまみだぶつとは何のこツた？　何ぞといふと二言目にや、前將軍さまが何とやらと、奥齒にはさまつた物のいひやうをしやアがる。ぬしア北條さまの御全盛に、ケチを附けようとするんだな！
四郎作　めつさうな、なんでそんな事か。
五郎次　うんにや、さうだ。ぢや、何でなんまみだぶつだ？　其譯をいへ。
ト五郎次立ちかゝる。皆々とめて
澤の六　まゝ！　なんまみだぶつは、四郎作の口癖だアな。
五郎次　其口癖が氣にくはねえ。
谷の八　そんな無理なことをいふもんぢやねえ。
五郎次　ナニ？　何が無理だ？
澤の六　これさ、マア！　いゝてことよ〱。
五郎次　よかねえ〱。
ト總立になり、皆々棄てぜりふにて止める。此時石段の上より牧ノ左源太、郎黨二人をつれて、降りて來て
左源太　やい〱〱！　かしましい！　鎭まりをらぬか？
ト是れにて皆々うろたへて控へる。

皆々　へい〳〵。
左源太　もはや御供養會も相濟んだれば、相州殿をはじめ、左馬ノ介どの、稲毛どの、畠山どの、いづれも程なく御下向なさるゝ。場所柄も辨へぬ不屆者めが！　愼みをらうぞ。
皆々　へい〳〵。
左源太　早く其むさい物を取りかたづけて、きり〳〵と退散いたせ。
皆々　へい〳〵、畏りました。
　ト皆々飲食物を取りかたづけて、そこ〳〵に上手へ入る。左源太これを見送りて
左源太　爲樣のない奴等だ。
　ト此時下手より醫師紀河の宗近（五十位）足早に出で來り、ふと左源太を見て「わるい人がゐる」といふ思入、わざと見ぬ振して・すぐに石段を登りかける。
　ト左源太目早く見て
左源太　ア、コレ〳〵、そこへ行くのは紀河の宗近ではないか？　待つた〳〵。……ちやうど逢ひたいと思うてゐた處ぢや。
宗近　や！　これは〳〵。さて暫く。……まづ以て御健勝で。……豫て今日の御供養會には、御一門樣悉く御參會と承り、定めしお目にかゝるであらうと存じてをりました。それに、稲毛の入道さまに、火急に折入つてお目にかゝらねばならぬことが出來いたしましたので……
左源太　といふのは、例の俺が頼んでおいた一條であらうが。
宗近　へい〳〵。勿論、其事をも兼ねまして……
左源太　其事をも兼ねましてとは何の事だ？　いまだに其やうな事をいつてをるのか？　ハテサテ埒のあかぬ。是非ともけふは、あの照子の前を、おれにくれるか、くれぬかを、きつと談判して取りきめておくりやれ。
　トせき込む。是れにて宗近は困つたといふ思入よろしく
宗近　さゝ、さう早急にはまゐりませぬわい。何分にも、あの御息女には、畠山の重保さまといふ御半約がありまするることゆゑ、機を見て申しませぬ時には、どんなそれが、間違ひの元となるまいものでもござりませぬゆゑ……
……
左源太　いや〳〵、其いひなづけは、たしかに破談になつた筈ぢや。もと〳〵親と親との氣が合はぬ上に、先年、例の騷動の砌り、館の門前にて、親に似て頑固一徹のアノ六郎重保が、稲毛入道どのを惡口雜言。それ以來双方全く往來をせず、隨つて縁談は中止同樣と承はつた。その斟酌は餘計なことぢや。

宗近　いや／＼、親御衆はともかくも、肝腎の御本尊の照子の前様のお氣が知れませぬ。今も今とて、お腰元をば只一人おつれなされ、かつぎまぶかに、此方へとござらつしやるのに逢ひました。たしかに爰へ來て、畠山の重保さまに逢はうためのお忍び。

左源太　え、すりや爰へ照子の前が。

宗近　さ、ぢやによつて、親御の入道さまは、わたくしが口說きまする。御本尊は、こなた爰にお待ち受けなされて、ぢかづけに口說かつしやりませ。それが一ち近道でござりまする。

左源太　いや、そりや叶はぬわい。剛敵には恐れぬそれがしなれども、あの照子に面と逢うては、口がきかれぬ。

宗近　ハテサテ、其やうな臆病なことで、色戀が叶ひませうかい！　幸ひの御法莚ぢや。お好物の酒でもまゐつて、勇氣をば附けさつしやりませ。

左源太　なるほど、それも一工夫ぢや。

宗近　何はしかれ、どうぞ爰へ稻毛の入道さまをば、そつと呼び出して下さりませ。けふは、とつくり談じませうほどに。

左源太　心得た。では、此普請小屋へといはうか？

宗近　さうおつしやつて下さりませ。

ト是れにて左源太、石段を登りて入る。宗近其うしろ影を見送り

黄金造りへ鈍刀！　何ぼ牧の方さまの甥御ぢやとて、此緣談は迚もしつくりと納りさうにもないわえ。……とはいへ、たび／＼の催促、けふは何とか肝焦らずばなるまいかい？

ト いひながら、普請小屋の角材に腰をおろし

しかし、おれが入道さまに逢はうといふのは、中々そんな暢氣なことではない。……一足飛に御典藥に、立身したいばつかりに、入道さまに口說き落され、うつかりあの怖ろしい藥を調劑したが、どう考へても用ひどころが腑に落ちぬ。萬一とんでもない事に使はれた時分には……

ト いひかけて身ぶるひし

あゝ、桑原々々！　こりやどうしても、何とか斯とかいひこしらへて、あの藥を取戻すことにせねばならぬ。

ト腕を組み、思案の思入。此うち向うより稻毛入道の女、照子の前（十八）かつぎなり、腰元折枝（二十七八）つきそひ、主人の塗笠を手に持ち、出で來り、花道にとまり

折枝　御病後のおからだをお急かせ申し、さぞお倦なういらせられましたでござりませう。……あれが新御堂でござります程に、もうほんの一足でござりまする。

照子　どうぞお下向にならぬうちにと、氣ばかり急いても捗らず。そなたこそ、さぞかし氣の揉めたことであらう。……六郎さまにお目にかゝれゝばよいがのう。

折枝　まだ大丈夫でござりませう。さ、早うおいで遊ばしませ。

ト本舞臺へ來り、すぐに石段の方へ行きかけ、奥を見て、思入あつて立止り

ア、モシ、どうやら只今からが、皆さまのお下向さうにござります。お父上さまのお目にとまつては跋がわるい。あれ、あの普請小屋にちつとの間忍んでお出で遊ばしませ。わたくしがちよと首尾を見て參りませうほどに。……さ、こちへおこし遊ばしませ。

ト普請小屋へ入らうとして、宗近と面を見合せる。

宗近　や、これは〳〵、稻毛のお息女さま。最前は失禮仕りました。それ、御覽なされ、やつぱりこゝへ……御參詣ぢやかな。はゝゝゝ！　や、其筈、其筈。……

ト獨り呑込んで輕薄笑ひをする。照子の前ははづかしきこなし。折枝思入あつて、うなづきつゝ

折枝　成程、お察しの通り、仔細あつて、大殿入道さまには、內々の此御參詣。ナアモシ、入道さまへは御內分に。

宗近　いや、さう仰せられずともの事。呑み込んでをりまする。

トいひながら上手奥へ思入あつて

幸ひ愚老ついでもござれば、何ならば、お取次ぎ仕らうかな？　御信心の御本尊へ。ハ、ハ、ヽ、！

ト照子の前ます〳〵はづかしきこなし。

折枝　まア御しんもじな。では、何分よろしうお賴み申しまするわいな。

宗近　心得てござる、心得てござる。

ト石段を登りて入る。照子の前間のわるきこなしあつて

照子　父上の目を忍んだばつかりに、はづかしい目を見ましたわいのう。

折枝　何の、お恥づかしいことがござりませう。……まアまア、これへお掛けなされませ。……當り前でござります。立派なお許嫁のお仲ぢやござりませぬか？　ちやうどよい首尾でござりました。

ト折枝角材の塵を拂ひ、照子の前に掛けさせ、自分も掛ける。

照子　さア、いひなづけの仲とも言へぬ今の身の上。親々の仲たがひばかりでなく、去年の事が元となつて、重保さまのお愛想づかし。覆水は盆に復らぬとのお言傳。とはいへ、せめてたつた一言、親、兄とは一つでないわらはの心が知らせたさ、かうして忍んでは來たものの、……

逢うたら何といはうやら？　あゝ、氣の揉めることではある。

折枝　アレマ、お氣の弱い。今にもお出で遊ばしたら、存分にお怨みをおつしやりませ。親御さまのお氣質がどうあらうと、それは今更の事ではない。おいひなづけは、お祖母さまの大切な御遺言ぢやござりませぬか？　何の、その御遠慮に及びませうぞいな。

トいひつゝ石段の方を見ることありて

ア、モシ、嬉しや、六郎さまが、お伴もなしで、アレ、あそこへ。……幸ひあたりに往來もなし。なア、存分におつしやりませや。

ト折枝下手へ行きかける。

照子　ア、コレ、どこへ？……そなたが爰にゐやらいでは……

折枝　ぢきに返りまする。ツイアノちよつと。

照子　ア、コレ、折枝！

ト追ひすがるを、折枝聞かぬふり、足早に下手へ入る。照子の前あとを追ふ。此うち畠山六郎重保、石段より下りて來り、思はず照子の前と顏を見合せ、よろしくこなし。六郎は無言にて上手へ戻らうとする。

照子　ナウ、待つて下さりませ。

重保　何ぞ御用でござるか？

トわざとすげなく言ふ。照子の前默つて泣いてゐる。

さては某に用事の仁とは……（ト思入あつて）公け向きの御用ならば、只今にも承はらんが、私し事に候はゞ、先日も申し進せし通り。……御用とは何事でござるな？

ト素ツ氣なくたづねる。照子の前なほ默つて泣いてゐる。重保はつか／＼と行かうとする。照子の前追ひすがりて、其袖をひかへる。

馴々し！　おはなしなされ。

照子　六郎さま、そりやあんまりでござりまするわいなアー。親と親とはどうあらうと、わらはとあなたとは、六つ七つまで一所に育ち、大きうなつても北條の、御別邸では顏を合せ、互ひに氣心を知りあうて、行く／＼は二人の力で、親々の仲をも和げ、祖母上さまの御遺言なされた通りに……

トいひかけるをおさへて

重保　やア、祖母上の御遺言を口にする程ならば、なぜ父や兄の不心得を、異見せうとはなされぬぞ？……祖父上時政どのを說き惑し、大恩ある祖母上を押込めまゐらせ、うま／＼北條家の後妻となつたるアノ牧の方におもねり諛ふ不道人の父、兄を、なぜ諫めうとはなされぬぞ？

照子　さア、それにはいろ／＼譯のあること。……

重保　それのみならず、御ゝ身の父の入道に、前將軍家を

遺言なし、伊豆の修善寺に於て、非業の御最期を遂げさせまゐらせし發頭人と、専ら取沙汰。

照子　えゝ！

重保　かばかりの問答すらも、父重忠の誡めに戻るの恐れ。……さらばでござる。

照子　まア待つて下さりませ。思ひもよらぬ今のお言葉。よしやそれがまことであつても、わらはゝ夢にも知らぬこと。なア申し、いろ／＼言ひわけすることがある。どうぞ少しの間こゝにゐて、一通り聞いて下さりませ。

ト此うち重保思入あつて

重保　折角の言葉ながら、父の庭訓厳しければ、従兄妹どしの縁もけふ限り。……父御とは一つでない、たしかな證據見えぬうちは……

照子　え？　すりや其證據さへ見えたなら、亡き祖母さまの遺言通り……

ト思はず寄るを重保隔てゝ

重保　……二度と言葉はかはしませぬぞ。

ト見返りもせず、石段を登つて入る。此以前、牧の左源太、酒に酔ひたる思入にて石段を降りて来り、二人の様子を見て、普請小屋の蔭にかくれること。

重保入ると、其後影を照子の前怨めしさうに見送り

照子　いはうと思うた萬分一も……あんまりすげない……

トいひさして、袖を面にあてゝ立身のまゝにて泣くこと。此うち左源太物蔭より出て、酔ひたる思入にて見とれてをり、だん／＼照子の前の傍へ寄る。ト照子の前心附き、面をあげ、驚き、下手へ足早に行くを左源太追ひすがり

左源太　ア、これ／＼、稲毛の御息女！　まゝ、暫らく暫らく。

照子　どなたかと思うたら左源太さま。何御用かは存じませねど、ちと心せきにござりますれば……

ト行きかける袂をとらへて

左源太　いや、さうもござらうが、實は只今、紀河の宗近を以て、父御入道どのへ折入つて申入れたる儀について、是非とも一通り申しておかなければならぬことがござるによつて……

照子　父におつしやる事ならば、父におつしやつて下さりませ。わらはと父とは……

トいひつゝ手強く袂を拂ひて

一つではござりませぬわいなア！

トつか／＼と下手へ行く。左源太追ひかけ又捉へようとするを突戻す。左源太よろ／＼として尻居に倒れるを木の頭。照子の前は下手へ足早に入る。左源太呆れ面をして見送る。此模様、時の鐘、をかしみの合方に

て拍子。

——幕——

幕を引附けると、最初は賑かな鳴物、後は靜かな鳴物にてつなぎ、道具出來次第引返す。

第二場　新御堂内

正面四間の間に鎌倉時代の藥師堂。高足の二重、本緣、本庇附く。中央の二間は三尺の高さに框を取附けたる佛壇、其上へ藥師如來の像を安置し、香爐、燈明、花瓶、其他供物等よろしく、上下に澤山の松杉の立木。處々に三つ鱗の紋附きたる幕を張り、爰に時政の室牧の方(四十六七歳)、子息左馬ノ介政範(十六歳)稻毛重成入道、息、次郎重政よろしく住ひ、丁度今がた人々大概退出したる體。前の場と同月同日の晩景。(簫の入りたる合方にて幕あく。)

稻毛　法雨を法界に降し、災孽の垢穢を洗はせらるゝは、醫王善逝の御ン威德、梵席に梵風を扇いで、短き命をも延べさせらるゝは、忝くも藥師如來の御本願、尤も妙なりと承る。

重政　世に有りがたき此たびの御建立、我々共は申すに及ばず、結緣の爲に群參なせし愚痴蒙昧の細民まで……

稻毛　信心膽に銘じ……

重政　隨喜の思ひを……

稻毛
重政　いたしましてござりまする。

牧の方　建立の其始めに、かゝる大造を營まんは、前將軍家二品禪室、伊豆にて御他界の間際といひ、まつた近年御賦役かさなり、士民疲勞の折柄ゆゑ、世上のおもはくも如何あらんと、義時、重忠らの異見もありしが、もとよりこれは私し事、病身なる左馬ノ介が、一身安全の宿願ゆゑ、更に下民をわづらはさず、夫時政が自力の營み、如來も御納受ましましてか、滯りなき此たびの落慶。是れといふのも畢竟は、親子の衆の骨折ゆゑ。ほんに嬉しう思ひまするぞや。

稻毛　恐れ入つたる其お詞。滯りなき御落成は、全く以て遠州公の御ン威德、またゝくひまに此大造。

重政　天が下廣しと雖も、北條家の御威光に、並ぶものなき御全盛。當家に比ぶれば、將軍家などは、置き物同然……

トいひかけると政範忽ち聞き耳たてる。牧の方二人に目まぜして言ひ消すやうに

牧の方　オヽ、それはさうと、いつの間にやら日が暮れま

した。ドレ、自らは改めて、誦しかけし御ン經を。……（ト政範に向ひ）今がたもいうた通り、夜半の風の身にさはらん。おことは館へ片時も早う。

ト牧の方こなしあつていふ。

政範　仰せではござりますれど、母上が子の刻まで、お堂にお籠りあるからは、某も子の刻までは。

牧の方　イヤナウ、それは要なき遠慮。相州どのも、右衞門ノ佐も、已に先刻下向せられた。母の身を案じずとも、早う館へ戻りやいのう。

稻毛　あのやうに仰せあるに、御違背あるは却つて御不孝。

牧の方　サヽ、早うお歸り成されませい。

ト政範心殘りの思入あつて牧の方に向ひ

政範　さやうなれば母上樣、お先きへ罷るでござりませう。

ト此時下手幕の蔭にて

藤內
藤吾　うせう〳〵！

ト左源太の郎黨、藤內、藤吾、四郎作を引ッ立て御堂の前へ來る。

稻毛　やア、騷々しい！　何事なるぞ？

藤內　ハッ。稻毛樣へ申し上げます。主人左源太のいひつけにて、御境內に非違なきやう、警固いたしまかりありしに、うさんなるはこれなる老耄。

藤吾　最前暇を遣しましたに、尙ほうろ〳〵と徘徊なし……

藤內　只今もお幕の蔭より、頻りにこなたをさしのぞき、けしからぬ獨りごと。

藤吾　なんまみだぶつとちやんぽんに、お館をさみする口振、此奴胡亂と存ぜしゆゑ……

藤內
藤吾　引ッ立てましてござりまする。

四郎作　なんまみだぶ〳〵！

重政　ナニ、お館をばさみせしとは？

藤吾　左馬ノ介さまがお十六にて、從五位下に御昇進は、法外過分と申せしのみか……

藤內　榮耀には餠の皮、分に過ぎたる御全盛、この行末が懸念など丶……

藤吾　存外なる事を申し散らし、剩へ、前將軍家の御他界をば、當お館の御所行ぢやと、いはぬばかりの奇怪の讒言。

四郎作　なんまみだぶ〳〵！

稻毛　ナニ、前將軍家のお薨去をば、當家の御所爲ぢやうに申せしとな？　容易ならざる其讒言。そやつ恐らくは比企、仁田の餘類ならん。……次郎、詮議いたせ。

四郎作　ア、コレ、待つて下さりませ。お詮議には及びま

せぬ。同類なぞはござりませぬ。……つい思ふことが口へ出て、ア、、なんまみだぶ〳〵！

重政　いかさま、しぶとさうな其老奴。うちこらして白狀させん。

ト重政立上らうとする。左馬ノ介思入あつて

政範　アイヤ、次郎どの、お待ちなされい。

重政　政範どの、何ゆゑにおとめなさるゝ？

政範　其老人の申す所は、いかにも尤もと存じまするゆゑ。

重政　何とおつしやる？

ト此うち牧の方よろしく思入。政範膝をすゝめて

政範　兄上相州義時どのすら、御ン年四十までは小四郎にて、曾て受領のお許しなく、まツた父上時政公は、鎌倉草創の御功臣、君の御ン舅にてましませしかど、君御一代の其間に、一たびも受領のお沙汰はなく、六十歳の御ン時までは、北條四郎と申せし由。其例には似もやらで、寸功もなき若輩が、身分に過ぎたる今度の任官。冥加の程も恐ろしいと、我身ながら思ふもの、其老人が正直の、言葉に科がござりませうや！

稻毛　アイヤ、積善の家には餘慶あり、父祖の德は子孫に報う。父君の御功勞に由る此たびの御任官。其御遠慮に及びませうや！

重政　況んや才智拔群にて、大人も及ばぬ政範どの。御任官に何のひがごと！　それをさみする、それのみか、當家をそしる不屆奴！

ト重政又立ちかける。

政範　イヤ、御折檻は御無用でござる。正直の心面に顯れ、曲者とは思はれませぬ。前將軍家の御他界に、不審を抱くも尤も至極。……ナウ、母上、兄上はじめ重忠どのが、御異見ありしはこゝのこと。この政範が過分の任官、まつた御他界の間もなきに、目ざましい造營供養。人皆口をそばだて、心の內でそしつても、威勢に恐れ、言はぬと聞く。老人の直言は、此方の善き諫め、慮外を赦し、放免あるやう、母上に願ひまする。

ト四郎作これを聞きて淚を流して

四郎作　ア、、有難いお志し！　活き如來さま、活き如來さま！　斯ういふお方があればこそ、どんな業も消滅するのぢや。なんまみだぶ〳〵！

ト牧の方じつと思入あつて

牧の方　成程、おことのいやるもことわり。殊には供養會の折でもある。藥師如來の寶前にて、苛責するもあさましい。そのまゝ放ち遣しませうぞ。

重政　スリヤ、此奴をば此まゝに？

牧の方　いかにも。……これも罪業消除のいとぐち。……ほんに良い放生會ぢやわいのう。

ト稲毛親子合點の行かぬ思入。

重政　ヤイ者共、命冥加の老いぼれめを、ナソレ、きり〳〵と追ッ立てませい。

ト重政二人に四郎作を縛りて郎へ、連れ行けと目まぜで知らせる。政範それと察りて

政範　アイヤ、其老人には、いさゝか問ふべき仔細もあれば、某みづから引ッ立て申さん。

重政　それはあまりに憚り多し。かゝる卑しき下人をば……

……

政範　イヤ、某が勝手でござる。……さやうなれば母上さま。

稲毛　左馬ノ介どのゝお立ちなるぞ。

ト下手より從者及び童大勢出で來る。政範椽より下りて四郎作に「附いて來い」とこなし。四郎作手を合せて拜む。皆々政範に附いて向うへはひる。

牧の方　圖らぬことに思はぬ暇どり。御ン身方も嘸氣づかれ。餘事は左源太が心得居れば、遠慮なう退出して一日の疲れをお休めあれ。どれ、あらためて御ン經を。

ト牧の方經机に向ふ。入道親子顏を見合せ、思入あつて

稲毛　アイヤ、暫らく。……最前より申し上げん〳〵と存じながら、とかく何かと人目の妨げ、差控へ罷りありしが、……（ト近く寄り）先頃竊かに聞こえおきて唐土より傳來の不思議の藥劑……

牧の方　エ、！

稲毛　やう〳〵のことにて手に入れましてござります。

……

ト懷中より、袱紗に包みたる物を取出し、やがてそれを解き、中より口を密封したる錫の小さき藥壺を取出して、牧の方の前に置く。牧の方之を見てぞつとせし思入にて顏をそむける。入道聲をひそめて

さて此藥の效能といつぱ、效驗の如しと雖も、不思議の藥劑ゆゑ、皮膚の色も變らず、外目には只急病と相見ゆれど、忽ちの中に衰弱せしめ、つひには全く命を取る、恐ろしき大毒藥。……

牧の方　エ、！

稲毛　きつた色もなく、香りもなきゆゑ、如何なる物にお加へあるも、決して勘づかるゝ氣遣ひなし。時機は失ふべからず。御臺所御下向以前に、御下手あるが最上策。何はしかれ、又と得難き妙藥。人目にかゝらぬうちに、早速お納め下さるべし。

ト此内幕の蔭より宗近窺ひ出る。上手の立樹の蔭よりは、相模守義時（四十以上）忍び打扮にて立出で、様子を窺ふ。牧の方言ひにくげの思入あつて

牧の方　イヤナウ、重成どの、今更となり、此やうな事を云ふ時は、女子心は言ひ甲斐なしとも思はれんが、榮耀には限りなく、盈つれば虧くるとかや。今更やう／＼心附けば、空怖ろしい身の罪障。宿願叶うて我子の立身。如來の御靈驗の、あらたかなるを見るにつけ、そゞろ懺悔の萠せし折柄、けふ又供養會にて、大導師がいとも有難い御宣說。聞けば聞くほど空怖ろしく、さつぱり心が變りましたわいのう。

稻毛／重政　エ、！

牧の方　いつぞやの談合は、只一時の夢と思ひ、淺ましい其品は、早う取納めて下さりませ。

ト牧の方思入あつていふ。稻毛其傍へ摺り寄つて

稻毛　牧の御ン方、そりや御本心で仰せらるゝか？　イヤサ、御本心で？……ハテナア！……イヤナニ、榮耀には際限なく、盈つれば虧くると仰せあれど、人間わづか五十年、花咲かぬ木も秋來れば、落ち葉に漏れぬ有爲無常。老公はやがて古稀の御ン年。一旦萬一の御ン事あらば、尼御臺は申すに及ばず、相模守殿も苦手なれば、笑止や和子の後ろ楯は、天にも地にもアノ右衛門ノ佐どのばかり。……なりや、たゞ一株の稚櫻、憂きを深山にうづもれて、日蔭の春を、送らにゃならぬお身の上。

重政　心惜しと思し召す、アノ尼御臺が御權柄も、當將軍家の御ン腹ゆゑなり。主客忽ち處を替へ、尼御臺に成り代り、新將軍家の御ン母とかしづかれ給はんも、お心一つ。

稻毛　しかるに二の足を踏ませらるゝは、さては從五位の御任官にて御滿足か？……さすがは女性！……イヤサ從五位下と日ッ本六十餘州の大將軍のお位ゐとでは、天地の違ひではござらぬか？……モシ、年ばへなら、顏ばせなら、新將軍家と瓜を二つの政範どの、並べて置いて、どちらを取るかと申さうなら、誰しも和子を取りまするぞ。

重政　さほどの器量おはしながら、くちをしや、御陪臣のひこばえゆゑ、古株共に蔽はれて、花は咲くとも見えがくれ、埋もれたまはん行末を、御無念とは思し召さぬか？

稻毛　將軍宣下の御拜賀に、アノ千幡君の束帶姿、和子と見ちがへるやうではござらなんだか？

重政　かほどに申しても御合點はなされませぬか？

牧の方じつと俯向いてゐる。

稻毛　尼御臺には惡推せられ、相州殿には邪魔がられ、あぢき無い御老後を、言ひ甲斐なくも、送らせらるゝ御所存か？

牧の方なほ默つてゐる。

稲毛　機會は失ふべからず。此藥劑は天の賜。
重政　片時も早くお用ひなされ。
稲毛　モシ、御ン方！
重政　牧の御ン方！
稲毛　いかゞでござる？
重政　いかゞでござる？
ト兩人つめよる。牧の方じつと思入。俄にはげしき山嵐になり、堂内の灯火一時に消える。
ヤ、、只今の山嵐にて……
稲毛　たそないか？　燈火々々！……何はしかれ、大切なる藥劑を。……伜、先づそれを取り納めい。
重政　慥かに此あたりにござりましたが。……やア、誰かある？　燈火々々！
ト此以前、縁の下へ忍び込みをれる宗近、此時縁の下より急に探り寄りて藥包みを取る。同時に、上手より義時窺ひ出で、すかし見て、つッと藥包みを奪ふ。次郎此間へはひり、探り合ひになり、義時はすばやく元の所へはひる。宗近は一さんに向うへ逃げて行く。
さてこそ曲者！
ト重政追うてはひる。牧の方立上り、向うを見るを木のかしら。左源太、藤内、藤吾、下手の幕の内より松明を持つて出る。（風の音、簫の入りし合方にて道具廻る。）

第三場　南の山下

正面、大藪畑、南の山下の往還。奥の方遠く海を見下し、遠近に杉山。往還の上手に大なる立樹。其他處々に松杉の立樹。前と同じ時刻。（合ひ方、風の音にて道具止る。）
ト向うより四郎作出て（花道）に立留り
四郎作　なんまみだぶ／＼！
ト云ひながら（舞臺へ來り）
若殿樣のお慈悲で、惜しうもない命を拾うたれど、ア、ア、世の中は淺ましい事ばつかり！　御贔屓受けた比企樣はじめ、仁田樣も御滅亡、上つ方から下々まで、瘦せ犬の食爭ひ。ア、、淺ましい／＼！　……なんまみだぶ／＼！
ト向うより紀河の宗近、一さんに逃げ來り、四郎作に突當る。四郎作ころぶ。程もなく稲毛次郎、拔刀にて追ッかけて來る。宗近うろたへ立木の幹へ上らうとして登れぬ思入。トタンに四郎作起き上る。次郎はそれを宗近と思ひて、一刀に斬倒す。宗近これを見て腰の拔けたるこなし、幹に抱き附き、ふるへてゐる。次郎死骸をすかして見て

重政　ツム。　……さてこそ。

ト引き起し、懐中をさぐり、何も見あたらぬ思入あつて

一度ならず二度までも、様子を窺ふ不敵の曲者。心はやり……（ト残念の思入）……正(まさ)しく外に今一人、……詮義の手蔓を失ひしは、我れながら不覚の至り

ト此時下手を見て、松明が見えたる思入あつて、急ぎ血刀をうしろへ隠す。やがて下手より政範、老僕に松明を持たせ、太刀持の童をつれ、潜行の體にて出て来る。次郎松明を叩き落す。老僕尻餅をつく。拍子に四郎作の死骸につまづき、ワツといつて逃げる。此の聲に童も太刀を持つたまゝ、上手へ逃げて入る。政範指添へに手をかけ、キツとなる。次郎はこなしあつて、一さんに向うへはひる。落ちたる松明まだ燃えてゐる。此うち宗近松蔭より這ひ出で、上手へ逃げようとするを政範目早くすかして見て

政範　曲者待て！

ト是れにて宗近また腰を抜かす。政範走り寄つて襟上を取る。宗近顫へながら手を合せる。

合點の行かぬ此場のありさま。オヽ、無慚なる下人のなきがら！……今逃げ去つたる曲者は、必定そちが同類ならん。

宗近　わゝゝわたくしは、どゞ同類ではござりませぬ。御免なされて下さりませ。

ト政範月影に宗近を見て

政範　オヽ、そちは醫師の宗近ではないか？

宗近　エヽ！　さうおつしやる貴下(あなた)さまは？　オヽ、若殿さまでござりましたか？

政範　ヤイ宗近。定めし仔細を存じてをらう。眞ッ直に申さずば、疑ひはそちにかゝるぞ。

ト四郎作の死骸の傍に行き、つくづくと見て

コリヤコレ正しく最前の！……ヤイ宗近、此夜ふけに何用があつて、そちは此あたりを徘徊いたすぞ？

宗近　サア、其儀は。

政範　此老人を殺したは何者ぢや？

宗近　そゝその儀は。

政範　ヤア胡亂(うろん)な！　眞ッ直に申さずば、父上に申し上げて、嚴重に申し附くるぞ。……早く申せ。

宗近　マ、、、、申し上げますすくく。ぢやによつて、わたくしがこゝに居合せました事だけは、何とぞ御慈悲に、御内分に……

政範　ナニ、こゝに居合せた事だけを、内分にしてくれいとは？

宗近　わたくしが、こゝに居合せました事が知れますれば、

此首がござりませぬ。その老人は、わたくしと見違へられ、ツイばつさりとやられましたのでござりまする。アア、おそろしやおそろしや！

政範　なにゆゑこゝに居合せた事をば、包みかくすぞ？

宗近　其儀はどうも……あなた様へは……

政範　いはずば、邸へ引立つるぞ。

ト政範きつといふ。これにて宗近これ迄といふこなしあつて

宗近　アヽ、申します〳〵。ぢやによつて一大事を立聞きました事だけは、どうかあなた様のお慈悲を以て、お包みなされて下さりませ。

政範　エ？　立聞きした一大事とは？

宗近　何をお隠し申しませう。いつぞや稲毛の入道様が、窃かにわたくしをお招きなされ、據ない入用がある故、毒薬を調合仕れと、のつぴきならぬ仰せ。慾に迷うて毒薬を、ツイ調進は致したれど、よく〳〵思へば、心ならず。御供養會に是れ幸ひ、御退出を待ち受けて、どうにかして薬をば取戻さんと、待つ間の退屈、御堂の縁で、聞くともなしにお三方の、世に怖ろしい御相談を……

政範　ナニ、お三方とは？

宗近　稲毛様御ン親子と……

政範　エ？　稲毛親子と……

宗近　御ン母上の牧の御ン方。

政範　エヽ！……シテ、其怖ろしい相談とは？

ト此うち立樹の間より義時以前の拵らへにて窺ひ居る。

宗近　恐れ多くも将軍家へ、わたくしが調進いたせし其恐ろしい毒薬を……

ト云ひかける。義時つゝと出で、いきなり抜打に宗近を斬り倒す。政範驚きキッとこなし。

義時　お騒ぎあるな左馬ノ介。義時なるわ。

ト血刀を拭ひて鞘に納める。

政範　ヤ！　さういふお聲は？……（ト透し見て）オヽあなたは兄上。……此體は？

義時　ホヽ、不審は尤も。まづ〳〵是れへ。

トよろしくあつて、兩人木の根に腰をおろす。

下人は口のさがなきもの。かりそめにも母上の御ン身の上にかゝはる大事。ふびんながらも……ナ。……

ト宗近の死骸へ思入。

政範　スリヤ兄上には、最前よりの顛末を？

義時　如何にも。……まつた御ン身が懸念の種たる、其怖ろしき薬剤も、仔細あつて某が、はからず手に入れ、すなはち是れに。

政範　エヽ！　スリヤ今聞きし一條は、アノ眞實でござり

ますするか？

義時　申すもうたてき事なれども、我れまたいさゝか仔細あつて、圖らずこよひの御密談を……

政範　エ、！　スリヤいよ／＼母上が！

　ト政範驚き、思はず聲を立てる。

義時　聲高し！　人や聞く。……子は親の爲にかくすが孝行。畢竟おことを寵愛の餘り、ふと御心の迷はせられたる爲でがなあらんずらん。とかく世の親心は、子故に迷ひて、子故に悟る、迷ふも悟るも、子を可愛しと思へばこそ。天にも地にもかへじとまで、またなきものに思し召すおことが諫め申されなば、御ン迷ひもやがては晴れん。心靜かに分別なされよ。母上や父上の御ン大事たるばかりでなく、こりや是れ天下の大事なるぞ。

　ト此うち政範じつとこなし。義時懐中より毒藥の壺を袱紗包のまゝに取り出して

この品は御ン身の手元に。御異見申さん其折の、一つの證據ともなるべければ。

　ト政範藥の包を受取り、こなしあつて

政範　御教訓、かたじけなうござりまする……それにつきて尚ほ兄上に……

　トいひかける、此時義時下手へこなしあつて

義時　あの人聲は、まさしく迎ひの……

　ト此時下手より最前逃げ行きし老僕、童ら先に立ちて案内し、義時の家臣多勢、松明を持ち出で來り、兩人を見て

甲　それに渡らせらるゝは……

乙　我君ではござりませぬか？

丙　オ、、左馬ノ介さまにも……

丁　御安泰にて入らせられましたか？

皆々　祝着至極に存じまする。

義時　オ、、汝等は左馬ノ介を警固し、片時も早く上館へ。

皆々　ハ、ア。

政範　さやうなれば、兄上さま。

義時　サ、、おゆきやれ。何事も、あすの日また。

　ト兩人氣味合ひ。政範は皆々をつれて上手へはひる。義時見送りて

まことや女子と小人とは養ひ難しと。機運自から循環して、天北條氏に福ひす。十返り松の榮えは今の間。其機を知らぬ女性の猿智慧。ア、、度し難し／＼。不便ながら政範は、遂には幹を枯すべき、其毒蔦のはびこる原。それとなく謎をかけ、自から枯れよと諭し置いたが、齡にはまして利發なれば、……（ト思入）ム、、心外一物無し。仁義も、骨肉も、觀ずれば皆方便。愚かなるもの此理を覺らず、親疎に執着して親を傷ひ、名に執着して實

を殘ふ。テモ淺はかな人ごゝろぢやなア｜

ト義時あたりへこなし。悠々と花道へゆく。（此もやう宜しく、梟の聲、送り三重やうなる合方にて幕一杯に向うへ入る。跡シヤギリ。）

――幕――

第三幕

第一場　稲毛邸七夕祭

上手へ寄せて、濡緣附きの奥座敷は、稲毛邸、照子の前居間の體。厨子棚、文臺など、飾りつけよろしく、居間の前、秋草の茂りたる前栽、遣り水。ずつと奥に枝折戸。よき處に數脚の白木の臺をすゑ、箏、供物、澤山の五色の絲、筵など。女童甲、乙、供物を運んでゐる。居間の上手には照子の前、机をひかへ、燈臺の下に梶の葉に古歌を書いてゐる。前幕と同じ年の七月七日午後。（ト下座の琴唄に成り）

唄〽一とせに只一夜てふ棚機つめの、契り
　さへこそ羨し、身は捨て小舟梶の葉に

（ト是より竹本に成り）

竹〽こがるゝ思ひかくとだに、誰れかさゝ
　ぎの橋わたし。

ト此うち甲と乙とは供へ物を供へてしまふ。照子の前も梶の葉に歌を書終り

照子　オヽ、ふたりとも大儀であつた。用があらば呼ぶ程に、遠慮なう退つて休みや。やんがて折枝が戻りやつたら、よい褒美をとらせませうぞや。

甲　ありがたうござります。

乙　さやうなればわたくしどもは。

照子　オイノウ。折枝が戻りやつたら、すぐにこちらへと言うてたもや。

甲、乙　畏りました。

竹〽會釋そこ〳〵打つれて、奥の方へぞ入
　りにける。ともしのかげに照子の前、
　しよんぼりと筆さしおき

トこのうち照子の前愁ひの思入有つて

照子　いつぞや藥師の御堂にて、父上に大逆の御所行ありと、重保様のお物語り、よもやとは思うたれど、氣にかかる父上、兄上のけふびのそぶり。せめて今一度重保さまに逢ひたいと思うたれど、御臺所さまをお迎ひのため、

もう已に京都へ、お立ち。……もし、此疑ひが實となつたなら、日頃の願ひはみんな水泡。……あゝ、氣にかゝることではある。…… 幸ひ今宵は七夕とて、身の願ひ一つは叶ふといふ。あの遣り水に祈願を籠め、此梶の葉を當座の歌占。

竹 〽ひとりうなづき前栽に、おりたつ裾の秋の風。

唄 〽千草の虫も音をとめて、弓張月のかたぶくや、空黒々と雨催ひ。

ト このうち照子の前梶の葉を持ち、庭上に降り立ち、遣り水の邊りへ行き、祈願を籠むることありて

わが祈る、事は一つぞ天の川、空に知りても違へざらなん。……表は吉兆、裏は凶兆！

竹 〽祈願を籠めて拋げ入るゝ、折柄さつと落す風、あなやと見る間梶の葉は、行く〳〵白萩夏萩の、下枝がくれに流れゆく

ト 照子の前遣り水へ梶の葉を投込む。（風の音、）葉は急に流れてゆく。

エ、、どんな！……若しや是れも願事の……

竹 〽もしや叶はぬ知らせかと、又女氣の枝折戸口、いきせき歸る腰元折枝。

ト 照子の前遣り水を見て愁ひの思入。此時下手より腰元折枝忙しげに出て來り

折枝　オ、、姫様、是れにお出で成されましたか？　一大事になりましたわいなア！

照子　エ、！　一大事とは心がゝり。

折枝　マア〳〵、あれへ。こゝは端近。

唄 〽誘はるゝも誘ふも、胸轟くや遠鳴りの、神來るらん大空は、黒み渡りて物凄し。

ト このうち二人は二重へあがる。遠く雷の音きこゆる。

照子　シテ、大事とは？　其仔細は？

折枝　アモシ！……大きな聲ではいはれぬこと。（ト聲をひそめて、）大殿様がお留守ゆゑ、心を許してあがつたか、左源太様のけふの泥醉ひ。お邸からの歸り道、しどろもどろの千鳥足、ころぶはずみに落さつしやれた一通を、圖らず拾うて讀んでびつくり。マ、これを御覽じませ。

竹 〽言ひつゝ差出す一通を、顫ふ手に取り、

見るよりびつくり

トこのうら文句の通りあつて

照子　やゝ！　こりや父上から牧の御ン方へ。……

折枝　ア、モシ！

竹〽封も頼みも切れ果てゝ、讀むこと〳〵に胸せまり、わつとばかりに泣伏せしが、すつくと忽ち文巻き納め

トこのうち照子の前審書を讀み、驚き、よろしく愁ひのこなし。やがて文を卷いて懐に納れ、つツと立つて、黒棚に載せておりし袋入りの短刀を取り、そのまゝ奥へ行かうとする。折枝とめ、

折枝　ア、モシ、どこへ？　血相變へて、こりや何と成されまする？

照子　エヽ、とめやんな。そこのいた。父上に逢うて此文を證據に……

折枝　御異見遊ばすお心か？

照子　知れたこと。そこ離しや。

折枝　イヽヤ、滅多には離されませぬ。なんぼお年がゆかねばとて、あなたはお氣でも違うたか？　是れほどまでの深いたくらみ、けふまでも包み成されし御ン惡事を、今さら御異見なされたとて、おいそれと大殿様が、何でお聽きなされませうぞ？　マアく\/、お待ちなされませ。

照子　それぢやというて、此儘には。

折枝　サア、其邊をわたくしも、案じたればこそ此お留いせ。マアく\/下に御座りませい。

竹〽言葉を盡しなだむれば、又はりゆるむ女氣に、涙ばかりぞ先だてり。

折枝　コレ、泣いてござる所でない。此事が露顯すれば、お家は滅亡。焦れてござる重保様に、彌勒の世までも逢はれませぬぞや。ぢやによつて分別どころ。此御ン惡事は、成つても大事、洩れても大事。餘所から露顯せぬうちに、コレ申し、照子の前様、あなたの口から內々で、斯様々々と重保様へ……

照子　エツ！　すりや此事を重保さまへ、訴人せいといやるのか？　親の惡事をどうしてまア！……それにアノ、潔白一圖の重保さま、生中の事爲出ださば、いよく\/以て一家の大事。それよりか今すぐさま、父上に逢うて御異見申し、若し聽かれずば、一命すてゝ……

折枝　ハテマア、お聞き成されませい。……一圖なやうでもお情け深い重保様、たとへ常日頃はどうあらうと、御親類なり、御ン大事なり、たのまれては引かぬ義侠心、

きつとあおよう双方の、破れにならぬそれのみか、親御様とは別々の、あなたの心の明りも立つ。お使ひは命に懸けて、わたくしが勤めまする。承れば重保さまは、平賀さまや政範さまと御一しよに、こよひは腰越にお泊りさうな。幸ひなは、わたしの従兄の瀬平どのが、お伴頭。十が十まで偽おほせます。斯ういふ内も心がせく。ちやつと一筆お書きなされませ。すぐにお屆け申しまする。

照子　いや／＼、それは心元ない。やつぱりぢかに父上に……

折枝　いゝえ、そりやわるい御分別。これほどに根深い魂膽、牧の方さまが本元であるからは、たとへどのやうに御異見あらうと、お聴きなされう筈はない。命をすてうお心なら、重保さまの前でお棄てなされ。迷うてござる所でない。さゝ、早う／＼。

唄〽ひとり氣を焦る眼先へ、ひらめく稲妻、
　　鳴る神に、あなやとすさる後ろにも

竹〽きらり稲妻、刃の光り、あつと魂ぎる
　　鐙の下、ぬつと出でたる稲毛の入道。

ト折枝氣が揉み、文臺の硯箱を取り下す。此時激しき電光。折枝思はずたじろぐ。ト簾の内より稲毛の入道ぬつと出て、一刀に折枝を斬り下げる。折枝縁端に倒れる。照子の前見て

照子　ヤヽ、あなたは父上！……オヽ、こりや、むごたらしう折枝をば！……

竹〽かけよる姫を、手荒く突きのけ

ト稲毛入道折枝を足下に踏みつけて

稲毛　いはうやうなき不忠者め！……ようも／＼娘をばそそのかし、大恩ある主の破滅を圖りをつたな。アノこゝな横道者めが！

竹〽又もや切らんと揮りおろす、其手にす
　　がり照子の前。

照子　アヽ、モシ、父上。……（トきつとなつて）コレ、父上、不忠、横道といふ事を、見事あなたは、知つてかいなア！

稲毛　何と！

照子　今更いふは遅けれども、情けない御ン企て。如何なる天魔が魅入つたぞや！　たとへ非道の御大望が、首尾よう成つてもお年の上、たかゞ十年か廿年の假りの榮華。後の世の報いは愚か、此世でも、大惡人の名を取つて、淺ましい御最期を、もう目の前に見るやうな！……横道者と云ふ事を假りにもおつしやるお心なら、御法體にも

聽き給ひ、コレナウ申し、父上様、御改心なされて下さりませ。

竹 〽言葉をつくし諫むれば、手負ひもやうやう面をあげ

ト折枝苦痛を忍びつゝ

折枝 此折枝が入れ智慧も、所詮はお家を思へばこそ。旗道者とはお情けない。此御ゝ悪事は、御子孫のお爲には、成つても成らず、成らぬ時は、何御存じない姫様まで、かゝりつながる悪縁に、焦れてござる御ゝ方との、えにしの糸が斷れたなら、取りも直さず姫様の、御ゝ玉の緒も切れ果てますぞえ。姫様ふびんと思し召さば、怖ろしい此おたくみを、思ひ止つて下さりませ。

照子 オヽよういうてたもつたぞ。それほどまでに自からを。コレナウ折枝。必ず死ぬまい、死ぬまいぞや。

竹 〽手負ひにひッしと抱き附き、いたはる袖に涙々と、流るゝ血汐の庭たづみ。入道は耳にもかけず。

ト文句の通り。照子折枝を介抱する。

稲毛 ヤア、身勝手なるよまひごと。女わらべの知ることかえ！ 無禮者めが！

竹 〽手負ひをはつたと縁の下、なう無慚やと照子の前、かけ寄る頭にはたゝがみ、抱き起せば事切れて、血汐を洗ふ雨の足、車軸を流す如くなり。

トこのうち入道折枝を縁の下へ蹴落す。照子の前二重より駈けおりて介抱すれど、息絶ゆる。雷の音はげしくなる。

竹 〽折しも奥より駈け出る次郎。

重政 父上、これに御座ありしか？ 一大事と相成りましたぞ。……ヤ、、折枝が此體は！

稲毛 大事を知つたる下司女、剩さへ照子をはてゝのかし、訴人せんといたせし故、たちどころに成敗せり。シテシテ、大事とは何事なるぞ？

重政 密事を察せし紀河の宗近、當夜南の山下にて相州の手にかゝり、空しくなりしと只今知らせ。

稲毛 ヤヽ！ スリヤ義時めが、こなたの密事を……

實政 氣取りしからは、露見は目前。父上には是れより直に、執權邸へお越しあつて、御ゝ方と萬事の御商議。

稲毛 オヽ、先んずれば他を制す。此上は一刀兩斷。時宜によつては義時もろとも。……斯ういふ内も心がゝり。

いで〳〵直に。

竹　〽はや立ち上る緣端に、これなら待つて

　　と照子の前、

　ト文句の通りある。

稻毛　えゝ！　邪魔すんな。

重政　父上には爰かまはずと……

稻毛　オ、合點！

竹　〽奥の間さしてぞ走りゆく。

　ト稻毛奥へはひる。照子の前止めようとするを次郎立ちふさがりて止める。雷雨ちよつと小やみになる。

照子　此上は、オ、さうぢや。

竹　〽懷刀拔く手をしつかと止め

　トこのうち照子の前懷刀の袋の紐を解き、拔き放ち、自害せんとする。重政其手を押へて

重政　ヤア、何故に自害するぞ？

照子　エ、、何故とは聞えぬ兄上！　かくまで根深い惡事をば、知りつゝ御異見はうにこそ、非道をすゝむる不道人！　もう兄上とはいひませぬ。そこ離して下さりませ。

重政　ヤア、兄に向ひ、無法の雜言！　こりやおぬしは狂氣したな。マ、離せ。

照子　イエ〳〵、離さぬ。そこ離して。

竹　〽きやうだい爭ふ其折から、又一しきり

　　降り來る雨、折戸口よりかけ入る郎黨。

　ト雨入よろしくある。下手より籠手田の勘六、蓑笠出立にて出で來り

勘六　大殿さまのおいひつけにて、腰越にござある平賀どのへ、火急のお使ひ。其御書面は、はや御出來でござりまするか？

重政　オ、心得た。今すぐさま。

　ト重政照子の前の持つてゐる懷刀をもぎとつて遠くへ抛げやり

なほ言ひ含むる仔細がある。書院前に相待ちをれ。

勘六　ハッ、畏つてござりまする。

竹　〽はつと答へて引返す。

同前　〽又吹き落す山おろし。庭には千草の逆

　　浪だち、五色の糸のさら〳〵〳〵。

　ト此内照子の前蹂き狂ふを押へながら、重政は糸に目をつけて

重政　ム、……

竹〽これ崛竟(くっきゃう)と五色の小手卷(をだまき)、ひきちぎつてさそくの機轉、氣も半亂の妹の小腕(こがひな)ねぢあげて、泣き入りもがくをいましめ繩。

重政　ふびんながらも暫しの窮屈。

竹〽いふ間(ま)も心は奥の方、足を空にぞ入りにける。

トこのうち雨風雷鳴はげしく、照子又懐刀を拾ひて自害しようとする。重政之を止める此爭ひの間に前裁の供物臺、五色の糸と共に倒れかゝる。重政ふと思ひ附きたる思入、泣き狂ふ照子の前を五色の糸を一束にしてそれにて緣先きの柱に縛りおきて入る。

竹〽無慚なるかな照子の前、姿は亂れ、黒髪は、おどろ〳〵と振り亂す、雷雨が軒にいましめの

唄〽これや五濁(ごぢょく)の身を色糸に、もがく程なほ搦み繩。

ト照子の前宜しくあつて

照子　ナウ、誰れぞ來て、此糸解いてたもいなう！　叶はぬまでも今一度、いうて見たい！　止めて見たい！

竹〽我れを忘れて駈け出だし、あせれば轉(まろ)ぶ軒の端(は)に、ひらめく稲妻、横しぶき、さらでも袖の雨やさめ、骨身もこぼつばかりなり

トこのうち照子の前いろ〳〵こなしあつて

竹〽ふつと目に入る懐中の、以前の密書。オ、折枝が異見を今更に思ひ當つた。成程、今宵(こよひ)は重保樣が、まだ腰越にござるなら、こゝからは僅かの道のり。たとへ百里が千里でも、思ひこんだる女の念力。幸ひ風の昏まぎれ。父、兄と一つでない此身の心を佛神の、あはれみ給はゞ此いましめ、やはか切らいで措かうか！

唄〽南無やみほとけ、神々に、願ひの緣のいましめを

竹〽切らん〳〵と、身をもみあせる目先(まなさき)の、懐刀にきつと目をつけ

オヽ、此身も共に切らば切れ……アノ短刀で……オヽ、さうぢや。

文句の通りよろしくあつて

竹〽刃の上に臥しまろび、もがき狂へば大叫喚、篠突く強雨、燃え立つほのほ。いましめふツつと、氣のつく照子。

トこのうち照子の前、落ちてゐる懐刀に目をつけ、それへ身をすりつけて切らうとする。女の童二人奥より出てゝさゝへる。トタンに激しき電光、すさまじき音して枝折戸の脇の松の木に落雷する。照子倒れる拍子に、短刀の上へ手強くころぶ。これにて手を負ふと共にいましめ切れる。一寸氣絶したが忽ち、息を吹返して

照子　ヤヽ！　切れたか！……チエヽ、嬉しやなア！

竹〽天を拜し、地を拜し、落ちたる懐刀手に取りあげ、腰越さして

ト照子の前、腕に創を負ひながら、縛めの切れたので、天地を拜し悦ぶ事ありて、懐刀を拾ひ取る。女の童息を吹返して又さゝへるを振拂ひ、枝折戸の方へ駈け行く。烈しき雷雨の音。（床の三重にて）

――幕――

幕を引附ける。なほ雷雨。段々それを遠くし、やがて夜廻りの太鼓にてつなぎ、道具出來次第に引返す。

第二場　腰越旅館中門内

腰越驛旅館中門内の體。深夜。風の音。

ト左馬ノ介政範の郎黨△、○、□、松明を持ちて下手より出る。

△　ヤレ〳〵、何の事だ！　藤澤までとのお供觸れが、急に腰越と變はつたゆゑ

○　けふばかりはのんびりと、宵寢の果報と思ひの外

△　ぐつすりよい心持に寢入つた所を

○　きやつといつた女の聲と

□　今の物音とで起されたが

△　何の事だ！　女はおろか鼠一匹

○　立騒いだ體もござらぬ。

三人　ハテサテ、馬鹿々々しい！

ト門外より平賀朝雅の郎黨甲、乙、丙、戸板の上へ蓑笠姿の籠手田の勘六の死骸を載せて出て來り

甲　これは〳〵、北條どのゝ御家來衆。
乙　只今かしこの古木の下にて
丙　うさんな死骸を
三人　見付けてござる。
△　ナニ、うさんな
△○□　死骸とは？
　ト三人立寄る。甲、乙、丙は戸板をおろす。
甲　最前の大雷、一定此あたりへ落雷とぞんじをりしが
乙　御覧なされ、あの折、雷火に撃たれしものにや
丙　まツこの如く、くすぶりかへり
△　いかさま。……甲斐々々しい此打扮。
○　こりや曲者に
三人　相違ござらぬ。
甲　此儘には捨て置きがたい。
丙　めい〳〵主君へ
皆々　申し上げませう。
　ト此時下手にて
政範　アイヤ、参るには及ばぬぞ。
朝雅　それへ参つて検分いたすわい。
　ト小わらはに松明を持たせ、政範、朝雅出て來り
朝雅　委細は只今聞き及んだ。面體は見わかずとも、衣服、身のまはりなどに、見覚えはないか？
政範　懐中をば改め見よ。
△○　ハツ、畏つてござりまする。
　ト△と○、勘六の懐中を改める事ありて、密書を取り出す。
甲　こんなものがござりまする。
　トさし出すを、政範受取りて
政範　さてこそ。……松明を是れへ。
　ト政範密書を繰り開く。朝雅も立寄りて見る。小わらは松明をさし出して紙面を照らすこと。讀むうちに二人とも驚くこなし。
政範　ヤ、、是れは！
　ト朝雅さそくに小わらはの松明を持つてゐる手をおさへる。ト火炎密書に觸れて、すぐに燃えあがる。
朝雅　エ、！　何を粗忽……
　ト小わらはの襟上をとらへるを道具替りの知らせ。
致しをるのだ！
　ト突きとばす。小童はよろめき倒れる。皆々驚く。政範、朝雅双方よろしく思入。

第三場　旅館内重保寢所

同じ腰越の旅館内、重保寢所前の體。窓と下手の妻戸は開いてをり、其他は閉ぢてある。上手は植込み。並

に庭上に照子の前倒れ、氣を失なつて居る。穂積の瀬平（三十二三）これを介抱し。重保は燭火を持ちて立掛り居る。（靜かなる合ひ方、風の音）。

瀬平　ヤ、！　こりや曲者と思ひの外、稻毛さまの御息女でござりまする。

重保　ナニ、稻毛の照子どのとな！

ト重保驚きて近く寄り、顏を見ること。

成程、思ひがけぬ照子どの！　かゝる深夜に只一人。……

瀬平　オヽ！　お召し物は血汐にまみれ、所々に手疵をも負はせられました御様子。

重保　如何なる珍事が起つたるか？　何はしかれ、早く介抱。

瀬平　心得ました。

ト瀬平いろ／＼に介抱することありて

重保　照子どのいなう！

瀬平　御息女さまいなう！

ト兩人にて呼び生ける。照子の前だん／＼心づき、こなしあつて

照子　オヽ、あなたは……重保さまか！

ト重保に取縋らうとして、縋りかね、さめ／＼と泣く。

重保　照子どの、氣が附きましたか？　合點のゆかぬ此有樣。何事が起りましたぞ？　とく／＼仔細をお話しあれ。

照子　ナウ、重保さま、一大事になりましたわいなア！

ト泣く。

重保　一大事とは心がゝり。泣いてござる所でない。シテシテ、仔細は？

照子　サア、其仔細は……此一通。マ、是れを見て下さりませ。

ト照子の前、泣く／＼懷中より前の幕の密書を出し、重保に渡す。重保受取りて、讀みつゝ驚く事あつて

重保　ヤ、！　こりやこれ正しく御身が父の入道より……（ト又少し讀むことありて）ム、、かたうどはアノ朝雅。

ト奥へ思入ありて、又讀むこと。此時政範窓より様子を窺ふ。

驚き入つたる此企て！

照子　はからず折枝が手に入れし其一通の密書にて、はじめて父が惡事を知り、命にかけても異見せんと、語りあうたる其折柄、非道の父に洩れ聞かれ、不便や折枝はあへない最期！

重保　すりや折枝をば入道が……

照子　手打にいたしましたわいなア！

ト泣く。皆々驚く。

照子　それさへあるに父、兄は、惡事露顯と見て取つて、

平賀どのへ、火急の內通！　打捨ておかば我君の御ン大事と、身の締めも、親子の緣も、思ひ切つたる此御訴訟、御ン方はじめ、父、兄にも、あしからぬやう重保さま、此身をふびんとおぼしめし、お執り成しなされて下さりませ。

ト照子愁ひの思入よろしくありて賴む。このうち重保繰返して密書を讀み了りて

重保　思ふにましたる大逆無道！……此文面によるときは、已に恐ろしき毒藥を調進なし、それを以て將軍家を失ひまゐらせん不敵の結構。稻毛親子はいふに及ばす、アノ右衞門ノ佐朝雅も、一味たること明白なり。……やい、瀨平、我れは直さま奧へ參り、此密書を證據に朝雅を糺問なし、仕儀によつては、たゞちに鎌倉へ引返さん。さりながら密書の紛失に心づかば、事露顯と狼狽なし、こよひの中に惡人ばらが、何しいださんも圖りがたし。汝はすぐさま中を飛んで、和田左衞門ノ尉どのに委細を傳へい。只今糺問を終るとすぐさま、此密書をば汝にあづけん。義盛どのにお目にかけよ。

ト これにて照子の前驚くことよろしくありて

照子　スリヤあなたは、此事をば、アノ表沙汰になされうとや？

重保　オ、サ、照子どの、御ン身の心の術なさを察せざるにはあらねども、寸陰を爭ふ御ン大事。我れは此大任を蒙りなれば、自儘に鎌倉には歸りがたく、あやにく父も歸國の折柄。……かくなすより外にせん術なし。是非なき次第と諦められよ。

照子　ハ、ハア！

ト照子驚きて、泣き伏し、暫らくは物をいひ得ないでゐる。

重保　やい、瀨平、速かに支度いたせ。

瀨平　ハ、、畏つてはござりますれど、何とか外に、よい御方便はござりませぬか？……女性の御ン身で當間も恐れず、此腰越まではるぐと、おこしなされた照子の前さま、一つは親御樣のお命をば、どうにかしてお助けなされたさの御訴訟でござりませうのに、このまゝ表沙汰になされましては、そりやあんまり御ふびんでござりまするわい！

重保　やア、いらざる諫言！　それを思ふにいとまなき我が君の御ン大事。かういふうちも心がかり。我れはたゞちに、朝雅を糺問なさん。

ト奧へ行かうとする。

瀨平　ではござりませうが、姫さまとあなた樣とは、お祖母上さまの御遺言によつて、外ならぬお許嫁の御ン中ではござりませぬか？　あまりと申せば、おいたはしい！

何とか、も一つ御工夫を……

重保　え〻くどい！　天は一物の爲に季節を違へず、忠義の前には、私情を顧みる道はないわい！　大逆露顯の上は、牧の方とても容赦はない。ましてや稻毛親子は、此大逆の發頭人。緣者呼はり、汚らはしいわえ！

ト手づよくいふ。このうち泣伏してゐたる照子の前、きつと覺悟を定めたる思入よろしく、窃かに懷刀を拔き放し、咄嗟に乳の下を貫き、苦しむ。瀨平、重保之を見て驚く。

瀨平　やゝ、こりや何と！……早まつたことをなされましたなア！

ト介抱する。

照子　いゝや、早まらぬ〳〵。今さら思へば、わらはの淺はか！　一つには、おのが心の潔白を、知らせたいのが先きに立ち、二つには、子は親の爲に隱すといふ訓へに戻りし不孝の罰！……父、兄が身の果とても、自業自得。ナウ、重保さま、まだしも最期に、只一目でも、あなたに逢うて言葉をかはし「そなたの心も察せぬではなけれども」とおつしやつて下されたを、聞いたのが此世の思ひ出！　冥土にござる祖母さまへ、せめてもそれが一つのいひわけ。……

重保　オヽ、照子どの、御ン身の心察し入る。……まことに是れぞ惡因、惡緣！……言ひ慰むる言葉もなけれど、父、兄と一つでない御ン身が心の潔白は、重保たしかに見屆けましたぞ。まつた一命を犧となし、君の御ン大事を救ひし忠節、重保深く賞め申すぞ。

トやう〳〵弱りゆく照子を抱き、其耳に口をさしよせて言ふ。照子の前之を聞き、重保の手をとらへ

照子　チエヽ、かたじけなうござりまする！

トうれしき思入、だん〳〵におちいる。重保、瀨平、愁ひの思入よろしくありて

重保　オヽ、我れながら不覺の至り。……下人共にさしづなし、この死骸を取り方附け、汝は出立の用意いたせ。

瀨平　畏まつてござりまする。

ト瀨平、照子の前の死骸を抱きあげ、下手の物蔭へ運ぶ。

重保　いで此上は、朝雅を糺問なさん。むゝ。

ト重保身支度をして上手へ行きかける。

朝雅　アイヤ、お出でに及ばぬ。朝雅自からそれへ參り、委細申し開くでござらう。

ト上手の植込みの蔭より右衞門ノ佐朝雅出で來る。

イヤナニ、六郎どの、最前よりのあらましは、ほゞ物蔭にて承つたり。密書を證據に某を、疑はるゝ條道理なれど、それには深き仔細のあること。……

重保　ヤア、しら〳〵し、右衛門ノ佐！　和殿が表裏の心腹は、仔細あつて某とくより疑うたり。言葉だくみに陳ずるとも、此一通が動かぬかすがひ。速かに觀念なし、尋常に白狀あるか？　但しは縄うち、引立て行き、問注所の白洲に於て、きつと糺問仕らうか？

朝雅　逆上せまい、六郎重保！　身不肖なれども此朝雅は、忝くも源家の嫡流、頼義朝臣が六代の末孫にて、故右幕下の猶子でござるぞ。出所不明の密書を證據に、みんごと和殿が一存にて、縄打たるゝなら打つて見られよ。

重保　ヤア舌長し！　え打つまいと思はるゝか？　罪跡既に顯然たるに、不明呼はり慮外でござるぞ。

朝雅　ハテサテ、死人に口なし。誰れを證據に、其一通の出所を明すぞ？　イヤサ、畠山と稲毛とは、人も知つたる多年の確執。僞筆謀書も間々ある習ひだ！

　トこれにて重保意氣込むをおさへて

サ、、曖昧不明の證據を言ひたて、人もあらうに執權の、其執權たる牧の方を、大逆罪に落さんなどゝは、ヘツ、片腹いたい！

重保　ヤア、存外なり、猛々し！　おのが心に引きくらべ、此六郎重保が、執權の威勢に恐れ、おめ〳〵かゝる大逆を、見のがすとばし思はるゝか？　證據不明の咎めあらば、此肚かッさばく分の事。六郎が心は鐵石。今一言用捨はないぞ。

　ト重保刀の柄に手をかける。此以前政範聞いてゐる妻戸口にて始終を窺ひをり、其以前に頓服せる毒藥のために次第に苦悶せる思入こなしよろしく、此時あつと叫びて、縁より落ち、血を吐きて苦しむ。二人はこれを見て驚き、重保は政範を抱き起して介抱する。

これは如何に？……何と成された？

朝雅　俄かの惱亂心得難し。……ヤア、誰かある？……燈火々々！

　ト朝雅人を呼ぶ。政範之を制して

政範　ア、コレ、暫く。……内々にて言ふ事あり。……ナウ、窃かに〳〵。

重保　ナニ、内々にて……

二人　いふことありとは？

政範　右衛門ノ佐どの。六郎どの。世にあぢきない左馬ノ介が、語るもつらい物語り！　一通り聞いて下され。……あさましや、母上には、稲毛の法師が勸めによつて、毒藥を調劑させ、將軍家をば亡き者にせんわるだくみ！元はといへば、此政範がある故と、兄上義時どのに教へられ、初めて知つたる惡因縁。死なうと覺悟は極めても、未練が殘り死にかねて、……（トいひつゝ殘りの毒藥を見せ）肌身はなさぬ此毒藥。こよひ最期の時到り、日頃信

する佛神へ、此身を犠牲の誓願は、母が善心發起の爲！……ナウ、あすをば待たぬ此身をば、不便ぢやと思うてなら、母牧の方の惡事をば、何とぞ内分にして下さりませ。此政範さへないならば、源濁れた濁り江の、末の流れは自つと澄まう。ナウ、聞入れて下されいなう！

ト政範苦痛を忍ぶ思入あつて、兩人に頼むこと。重保愁ひのこなしあつて

重保　けなげに候ふ、左馬ノ介どの。御ン身が切なる心の内、察し入つて候ふぞや。御ン請ひの旨たに絶えたゞば、意趣遺恨は私しこと。……平賀どのゝ所存は如何に？　孝子の心を無にせんこと、武士の本意にあらず。

朝雅　申さるゝこと我が意を得たり。それがし何とて異存あらんや？　只爰に一つの難儀は、左馬ノ介は御臺所お迎ひの正使なるに、思ひがけぬ此珍事にて、勿論上洛は叶ふべからず。さりとてこれより引ッ返さば、恐らくは疑惑を生じ、間違ひ出來の基ゐとならん。

政範　ナウ、それにも思案あり。我れ若し自から毒を飲み、生を早うせしと聞こえなば、母上が泣き悲み、人を怨み、又どのやうな悔み事。……こよひの事は何處迄も秘し隱し、明日死なうとも病氣と云ひたて、方々は上落なされて、死骸は彼方にて煩りとなし、程經て病死と知らせてくだされ！

ト政範苦痛を堪へつゝいふ。重保感心の思入あつて

重保　ア、殘る隈なき心遣ひ！……如何なればかくまでに、器量勝れて生れながら……

朝雅　魁けて咲く此花の、魁けて散る習ひとて……

重保　芳ばしき名を末の世に、傳へん術も情けなや！……

政範　海より深い母樣の、情けを仇と身を悔み、たつた一目御ン顏を、見る事も出來ず死ぬるとは……

重保　今いにしへに類ひなき……

政範　いかなる惡緣……

重保　惡因の……

朝雅　もつれつながる……

重保／朝雅　因果どし！

ト政範うつとりとなる。兩人宜しくいたはりながら

重保　オヽ、すや〳〵と眠るが如く。……テモあやしき……

ト政範は重保の膝を枕に眠るやうに落入る。兩人顏を見合せるを木のかしら。

重保／朝雅　毒のきゝめ！

ト重保愁ひの思入にて政範を抱きしめる。朝雅は立身にてニタリと笑む。此もやう宜しく、明け烏の聲、朝淸めの太鼓にて

——幕——

第　四　幕

第一場　北條邸牧の方居間

一面に高麗縁の疊を敷詰めたる奥殿の一室（平舞臺）。上の方斜に三間の間は襖。正面は入側を隔てゝ濡縁に接してゐる心にて、眞中の三間だけ、小簾を捲きあげ、向うに庭の遠見。上手、下手は、又斜に一面の書襖。よき處に調度。やゝ上手に古風なる鎧櫃を据ゑ、其上に故政範が着用料の鎧を飾り、それに仕立下しの狩衣を被せかけ、なほ兜の上には、政範が從五位下に任官せし時の立烏帽子を載せてある。中央やゝ上手寄りのよき處に茵二枚、これは時政と牧の方との料である。爰に中央よりやゝ奥の下手寄りに平賀朝雅、又それよりは、やゝ前、上手寄りに義時の室呉羽の前住ひ、談話なかばの體。前の幕よりは一月程も後、陰暦八月上旬の午前。

呉羽　さア、其お積氣は、程もなく治まりましたが、其夜はおろか、其あくる日も、次ぎの夜も、泣き暮らし、泣き明かし、三度のお物も參らばこそ、三日四日と經つうちに、見かはすばかりの御衰弱。十日程前までは、どうなる事かと上下とも、心を痛めをりましたが、針灸藥餌の效あらはれ、きのふけふは、めつきりと御快復。折々はお氣晴らしに、緣端へさへもお出ましになりまする。

朝雅　天地にもかへじとまで、御鍾愛ありし政範どのゝ不慮の御逝去、老公御夫婦の御愁歎、嘸かしと推察いたし、昨夜京都より歸ると其まゝ、かく早朝に參候さし次第たるが、さて／＼お痛はしいことでござる。

呉羽　かやうに申してはいかゞながら、政範どのゝ任官このかた、打つて變つてお心和らぎ、お慈悲深うならせられてござりましたに、又ぞろ御病氣の爲にお癇が高ぶり、何かとお氣むづかしく、ともすれば、和子が形見の、アレアノ從五位下の立烏帽子や狩衣をば、生きたる人のやうに抱きしめ／＼「ナウ生き返つてたも！　物いうてたも！　エ、悲しや、なさけなや！　せめて怨む的でもあらば、仇敵を取つてなと腹癒せうもの！　それさへも叶はぬか、叶はぬか？」と、それは／＼すさまじいお歎き。私共は申すに及ばず、夫義時の力にもあまり、慰め申す術もなく、折々は途方に暮れ、只心のみ痛めまする。

朝雅　御心勞お察し申す。さりながらお案じあるな。それがしお目にかゝるに於ては、聊か仔細あつて、必ずお心を慰め申さん。憚りながら、お目が醒めたら、なにとぞお取次ぎ下されたし。

呉羽　心得ましてござりまする。妾はこれより退出ますれ

ば、老女らに申し傳へておきまする。……さやうならば、右衞門ノ佐さま。

朝雅　御免下されい。

トこれにて吳羽の前、會釋して上手へ入る。朝雅一人殘り、思入あつて

政範が非業の最期は、願うてもなき我が仕合せ。實朝はまだほんの子供、將軍の大任に堪へぬは勿論。天が下廣しと雖も、此朝雅を除いては、系圖も器量も兼ね備へた源家の後繼(あとつぎ)は外にはない。これでアノ義時さへ押しのければ、執權夫婦が恩愛を、只一粒(ひとつぶ)の愛女(まなむすめ)、萩の前の戀ひ舉たる此朝雅の身に集めんこと、我が三寸の舌頭次第。……それにつけても機密を氣取(けど)りしアノ畠山重保親子、まづ彼奴(かやつ)らをかたづけずばと、稻毛の法師と談合の上、種々の流言をいひふらし、おびき出す手筈をば定めおきしが、今以て入道の知らせなきは、……ハテ心がゝりな。

ト思入。此時下手の襖をあけて稻毛入道出て來り

稻毛　右衞門ノ佐どの、定めしお待ち久しうござつたらう。

トいひつゝ席に着きて、ずつと傍へ寄り

お悅びあれ、至極の上首尾。

朝雅　ナニ、上首尾とな。スリヤ重忠めは、まんまと此方(このはう)の謀りごとに乘りましたかな？

稻毛　いかにも。……「此たび鎌倉表に謀反人あつて騷動なせば、速かに馳せ向ひ、防戰せよ」との、例の僞御教書(にせみけうしよ)を送りしところ、馬鹿正直の庄司重忠、それをばまことと思ひ、すぐさま一族を驅り催し、昨日既に武藏の國を出發なせしと飛脚の注進。

朝雅　それは重疊。……此上は「天の人を以て言はしめし、其不思議の謀叛人こそ重忠なれ」と、老公夫婦に信じさせ、有無を言はせず、討手を向けさするが肝要でござる。それに附いては……

トいひつゝ耳に口。

ナ、……彼の腰越にての一部始終を……ナ……ナ。……

稻毛　む、む。……心得でござる。……では某は、これよりすぐさま老公に。……御免下され。

ト兩人よろしく氣味合ひの思入あつて、稻毛は正面入り側へ出でゝ上手へ入る。之と同時に、上手の襖の内より、牧の方病中の體、痛くやつれたるこしらへにて、一人の老女と二人の腰元とに介抱せられて、立出でながら、朝雅を怨めしげに尻目にかけて、無言にて座に着く。朝雅席をさがりて會釋し

朝雅　オヽ、思ひしには辨す麗しきを拜し奉り、朝雅、祝着に存じまする。

ト牧の方は之には答へず、老女らを見返りて、思入にて「退れ」と命ずる。これにて老女及び腰元は、朝雅

にも敬禮し、しづかに上手へ入る。

牧の方　朝雅どの、惜しからぬ命なれども、御ン身らに逢うて、只一言女子の愚痴がいひたさに、今ン日まで存へました。

ト皮肉にいふ。

朝雅　其御怨言は御尤も。何とお慰め申さうやら。……御愁歎の程、千萬お察し申してござる。

トこれにて牧の方忽ちハラ／＼と落淚して、はげしく身をふるはし、俄かに狂氣のやうになり

牧の方　コレ、朝雅どの！　如何に子を持たぬ御ン身ぢやとて、あんまりぢや／＼、あんまりでござるわいのう！　なぜ、せめて死骸なりと、一目見せては下さらぬ。あの花のやうな政範をば、むざ／＼と灰にして、……むごたらしう灰にして送るとは！　エヽ、モ、あんまりな人情知らず。たとへ日數經て腐り爛れ、どのやうな穢い、きたない蛆蟲がわいてゐようとまゝ、せめて最期の肌えをば抱きしめて、頰ずりして、此身も共に腐れ死に死にたかつたに！……情けなや、今となつては、只夢に見る幻影か、アレ、あの形見の狩衣と立烏帽子とに、かすかに殘る移り香のそれより外には、つらい、術ない此心を、慰むるものもござらぬわいなう！

ト取亂して泣く。これにて朝雅じつと思入あつて、ずつと牧の方の傍に寄り

朝雅　御ン歎きはさることなれども、免かれ難き定業と、御觀念あつてさへ其の怨み。御愛兒の政範どのが、まことは不思議の仔細あつて、非業の最期を遂げられたりと、御承知あらば、いかばかりか……

トいひかける。

牧の方　エヽ！　何とおいひやる？

ト牧の方びつくり、こなし。朝雅じつと思入あつて

朝雅　一大事に候ふゆゑ、わざと胸に納め、今ン日までは祕し隱して候へども、和子の最期は定業ならず。……サ、サ、其驚きは御尤も。……往ぬる日腰越に宿りし眞夜中、稻毛の女照子の前、豫て重保と私通の取沙汰、如何にしてか手に入れけん、一大事の密書を携へ、雷雨を犯して旅館に驅け着け、仔細あつて落命の、其場に手に入る一通を、恩知らずの六郎重保、すぐさま證據に取つて返し、尼御臺に訴へんと、例の忠義を賣物三昧。斯くと聞くより健氣にも、遮り止むる和子政範「ナウ、待つてたべ、重保どの、此事露顯となる時は、母上さまの御ン身の上！……」

牧の方　オヽ！　オヽ！

朝雅　「內濟頼む穩便に！」と、土に手を突き、淚を流し……

牧の方　エヽ！　スリヤ、あの六郎めに手を突いてか？

朝雅　頼まるれども、嫌はれるども、情け用捨を知らざる
六郎、共に止むる某を、逆臣なりと雑言なし、はや理不
盡に大聲あげ、人を呼ばんと致せしゆゑ、無慙や和子の
分別なく、隠し持つたる毒薬を、止むる間もなく頓服な
し……
牧の方　エヽ！
朝雅　「母上に代る此身の最期。内済頼む、六郎どの！」と
言の終に悩亂の、口よりあふるゝ血は滝津瀬！
牧の方　オヽ！　オヽ！　オヽ！……コレ、朝雅どの、朝
雅どの！　たとへ彼兒の命の綱を、取り止むることは叶
はずとも、なぜ其場で顔をば……なぜすぐに討取らいで、
どの面さげて、ようのめ〳〵……卑怯な〳〵、見下げ果
てた朝雅どの！
　ト取亂して泣く。
朝雅　サ、、其お怒りはお道理ながら、只今も申す如く、
是れには餘儀なき仔細のある事。其場を穏便に繕ひ置き
し其仔細は……
牧の方　エヽ、きかぬ〳〵！……頼みに思ひし現在の、實
の女の聟でさへ！……尼や義時が不孝は其筈。己れそれ、
此上は、誰れ彼れの用捨があらうか！
　ト牧の方居丈高になり、髪を振り亂し、物狂はしき形
相となり、つッと立上り、奥へ行かうとする。
朝雅　コリヤどこへ？……まゝ、暫らく〳〵。
　ト此時入り側の上手より遠江守時政（六十六歳）稲毛入
道を従へて出で、牧の方を止めて
時政　アヽコレ、様子は聞いた。まア〳〵しづかに。
　ト牧の方其まゝ時政に取りすがりてはげしく泣く。
時政　委細の様子は、予も入道からつぶさに聞いた。無念
とも、残念とも……おゝ、尤もぢや尤もぢや！
牧の方　そんなら和子が無慙な横死を……コレ、時政どの、
敵を取つて下されいなう！
時政　オヽ、きづかひめさるな。我子の仇たる重保親子は、
取りも直さず、天下を亂す大逆臣。只今入道の密訴によ
つて、重忠が不忠歴然たり。ヤイ朝雅、只今重政を使ひ
として義時の許に遣はしたれども、今以て歸り參らざる
は、如何にせしか？　大儀ながら、御ン身改めて見て來
ておくりやれ。
　ト此内牧の方俄に癪に苦しむ。これにて稲毛は朝雅と
共に介抱する。よき程に下手より義時、稲毛重政と共
に出て來る。
オヽ、義時か？　待ちかねたわ。仔細は定めて聞いたで
あらう。にツくきは重忠親子。すぐさま御教書を申しな
うて、誅戮する用意いたせ。

義時　ハヽ、是つてはござりまするが、さて／＼思ひかけぬ不思議の御嫌疑。正直の鏡といはるゝ畠山重忠親子が、故禪室の御爲(おんため)に謀反を企つるなんどゝは、曾て存じよらざるところ、いづれにもせよ、一應の御糺明にも及ばずして、御誅戮の御教書(みぎやうしよ)沙汰は、近頃御粗忽かと存じまする。

稻毛　アイヤ、相州のお詞ながら、彼れに逆心ありといふ其證據人は此入道、親族なりと心を許し、密かに送りし一通の密書によつて、彼れが逆意は歴然たり。

義時　それぞ不審の随一條、其以前、故禪室の御叛反を密告ありしもそこもと。日頃重忠と仲惡しゝと、噂の高きもそこもと。

稻毛　やッ！

義時　サヽ、其仲惡しきそこもとの許へ、亂心なさばいざ知らず、故禪室の御爲(おんため)にする謀反の密書を、送りしとは不審千萬。

重政　スリヤ、相州どのには、われ／＼親子が訴訟をば、讒言なりと疑ひめさるか？

義時　イヤ、讒言とは申さねども、そこもとらに嫌疑の懸かる限りは、立派な證據人とは申されまい。

ト これにて稻毛親子詰る。此内牧の方思入ありて

牧の方　イヤ、其問答は無益でござる。逆心の有無はともかくも、重忠親子の者は我家(わがや)の敵(かたき)、政範の仇でござる。コレ義時どの、御身はまだお知りなさるまいが、政範が最期は病死ではなく、横死ぢやといなう！……人でなしの六郎めが、わらはに冤(むじつ)を被せしゆゑ、それゆゑあれが無慙の最期！……なりや其罪をいひたてゝも、お討手は申し乞はるゝ筈。……

義時　お言葉ではござれども、それは一家の私し事ゆゑ、謀叛の證據が未だ明白とならざる限りは……

牧の方　スリヤ、政範なんぞは、打殺しても、毒害しても、罪科(ざいくわ)にはならぬといやるか？

義時　いや、決してさやうではござりませねど……

牧の方　イヤ、さうぢや／＼！　さうでござらう。……後妻(のちぞひ)などの生んだ子は、古沓(ふるぐつ)も同然ゆゑ、死ねば犬死！……誰れひとりそれを哀れとは思はいで、結句よい折に、邪魔物をばかたづけたと言はぬばかりのしこなし。現在知れた仇敵(かたき)をさへも、取ることの叶はぬは、後ぞひの身のあぢきなさ！……一門の手前も耻づかしい！……あさましい！……さなきだに我が子に別れ、覺悟はかねてきはめてゐた。……時政どの、けふを限り、此身の暇を貰ひまするぞよ。

ト 泣きながら、すぐに起ちて、上手へ行かうとしてよろめく。朝雅、稻毛とゞめる。

稲毛／朝雅　ま、暫く／＼。……まづ／＼。

トやつと元の席につかせる。朝雅思入あつて

朝雅　いかに、義時どの。貴殿の御諫言もさる事ながら、重忠親子逆心の儀は、他にも確實なる證據あつて、もはや御疑惑には及ぶべからず。況んや御愛兒政範どのに無實の難題をいひかけ、横死させしも同然のアノ重保、このまゝ打棄てゝはおかれますまい。

ト義時は默つてゐる。此内牧の方聲を立てゝ泣く。時政堪へかねて

時政　ヤア、異論あらば勝手にいたせ。執權遠江守時政が申し附くる。入道はすぐさま手勢を引具し、六郎めを討取り參れ。まつた重忠追討の御教書は、我れ是れより參入なして、千葉、三浦をば討手の先鋒。……それ！

ト時政立ちて既に行きかゝる。義時是非なき思入あつて

義時　マヽ暫らく。……ハテ、是非に及び申さぬ。父上の嚴命、母上の御腹立。御嫌疑かゝりし重忠一門、何とて父母に見替へ申さん？

時政　スリヤ御教書を申し乞うて……

稲毛　今よりすぐさま……

朝雅　出陣めさるか？

義時　いかにも仰せに從ひませう。

時政　オ、滿足。然らば義時我れと共に、これより御所へ。……入道親子には討手の用意。

義時／稲毛　ハ、ア。

時政　右衞門ノ佐には（ト牧の方へ思入あつて）よしなに介抱。

朝雅　ハ、、畏つてござりまする。

ト義時と稲毛親子とは下手襖の内へ、時政は入側の下手へはひる。ト泣伏し居りし牧の方急に起き上りて、朝雅に向ひ

牧の方　オ、忘れたり！　アノ重保めを一思ひに殺しては腹が癒ぬ。八裂きにせにやならぬ我が子の仇！「生け捕りにして連れ歸れ」と、入道のあと追ッかけ、吩咐けて下さりませ。一思ひに殺しては、腹が癒ぬ、腹が癒ぬ！

ト狂氣のやうに泣く。朝雅之を制して

朝雅　重保をお憎しみはお道理ながら、（ト思入あつて、傍へ進み）イヤノウ御ゝ方、和子のまことの仇かたきは、まだ其外にござりまするぞ。

牧の方　ナニ、外にあるとは？

トこれにて朝雅ずつと寄り、牧の方の耳に口を寄せてさゝやく。牧の方聞くうちに、驚き、怒り、顏色次第

に險しくなる。

スリヤ、政範が飮んだる毒は？

朝雅　因果を含めし發頭人（ほつとうにん）は……

ト又さゝやく。牧の方齒をくひしばりて

牧の方　スリヤ、それゆゑに、むごたらしう、アノ義時めが、因果を含めて……おのれやれ、此上は、其計略の裏を搔き、怨み重なる尼、義時！……子を殺さるゝ苦しみを、おのれ、今に！……

トいひかけて、きつと鎧の上の狩衣、烏帽子を見返り

政範が立身を、心で祝うて千幡若と、同じ仕立に製らせしアノ狩衣や立烏帽子。今見れば中々に、したり貌な尼御臺や千幡若が思ひ出されて……

トつツと立ち、かけ寄らうとしてよろめくを朝雅抱きとめる。

朝雅　アモシ！

牧の方　おのれ、此怨みを……（ト烏帽子を摑み）晴さで……

ト牧の方烏帽子をめり／＼と引き裂くを木のかしら。

おかうか！

ト牧の方烏帽子を引き裂きて手荒く疊へ打附け、屹となる。朝雅は旨くいつたといふ思入。此模樣誂らへの鳴物、替つた合方にて道具廻る。

第二場　由比が濱

上手奧には稻村ヶ崎見え、處々よき處に深山の磯馴れ松。闇。總て由比ヶ濱の景。（平舞臺。浪の音にて道具止る。）

ト上手より稻毛重政、烏帽子、腹卷、郎黨大勢をつれて出て來り、向うを窺ふこなしよろしくありて、おのおの松蔭に忍ぶ。

ト鐘の聲。浪の音。向うより畠山重保、烏帽子、腹卷、騎馬にて長卷を携へ、郎黨牛王（十七八歳）其他大勢附いて出て舞臺へ來る。此時寢鳥騷ぐ。重保の馬驚く。

重保　ハテ、今宵（こよひ）に限つて栗毛めが、屢〻物に驚き居るわえ。……（ト正面を見て）「逆臣寄すると專ら風說、早速物見せよ」との嚴命蒙り、取る物も取りあへず參つたるが、ハテナア！

ト重保正面を見渡して不審の思入。此うち重政はじめ稻毛の郎黨つか／＼と出て、だしぬけに切つてかゝる。

一寸立廻つて重保、馬をひかへ

何奴（なにやつ）なれば理不盡に、名乘りもかけず無法の振舞？

重政　何奴とは無禮至極！　逆臣畠山重忠親子を誅戮せよとの嚴命受け、先刻より待ちかねたるわ！

重保　フム。（ト牛王らを見返り）さては彼奴等（かやつら）こそ嚴命

あつたる逆臣ならん。牛王、皆かゝれ……者共、それっ

牛王　心得ました。

ト是にて又一寸立廻り、重保は、郎黨と共に、上手奥へ、重政及び其郎黨らの半分を追うて入る。牛王は殘る半分の敵を相手に、はげしく立廻ることあつて、トゞ下手へ追うて入る。ト穂積の瀬平旅姿にて敵兵大勢に圍まれ手負ひとなりて（東の揚幕より）出で來り、立廻りながら（舞臺へ來り）

瀬平　大殿樣の御一大事をお知らせ申さん其爲に、驅け附け來りし甲斐もなく、討死なすか、殘念やなア！

軍兵　こまことゝなかます……

皆々　くたばつてしまへ。

瀬平　何を！

ト是より又烈しき立廻り、トゞ瀬平危うくなる。上手より重保大わらは、徒歩、血刀を提げ處々矢を折りかけ、手負ひて出で來り、瀬平を見て

重保　ヤ、！　思ひがけなき汝は瀬平！

瀬平　オ、！　若殿樣でござりましたか？

ト重保、瀬平を救ひ、立廻りあつて、トゞ敵兵を追ひ散らし、瀬平を介抱して

重保　ヤイ瀬平、重保なるぞ！　手疵は淺い。氣を慥かに持て。此有樣は何としたのぢや？

瀬平　オ、、若殿樣！　六郎樣！　無念至極にござりまする！

重保　オ、、何事か國元にて起つたるか？

ト瀬平痛手を堪へ、こなしあつて

瀬平　いぬる日御内意承はり、平賀とのゝ一條をば大殿樣へ言上なすため、お國元へ參着の折も折、「鎌倉表に、逆臣あるゆゑ、追討の爲、速かに發向せよ」と北條樣より火急の御内意。……

重保　ナニ、執權よりの内命とや？　シテ〳〵、父上には進發ありしか？

瀬平　遠州樣の御直筆に疑ひなきゆゑ、すぐさま御出發はなされたものゝ、「聊か不審なれば、汝は急ぎ重保の許へ參り、樣子をたゞせ」。「心得ました！」と韋駄天ばしりの、途中で行合ふ討手の大軍！　承はれば、大殿樣には謀反の御嫌疑。其お討手のさして行くへは二股川！

重保　や！　さては讒者の舌頭にて、予ばかりかは父上まで。……チエ、、口惜しや！　無念やなア！

ト重保向うを睨み、無念の思入。此時（東西の揚幕にて）ドンチャン、鬨の聲して向うより稻毛入道、物の具に身を堅め、長卷を携へ、大勢の軍兵を從へ、直に舞臺へ來り、重保を尻目にかけ

稻毛　死にぞこなひの六郎重保、速かに素首渡せ。緣者の

よしみ入道か、最期の引導渡してくれん。

重保　ヤア、よい處へ奸邪の小人！　汝を殺すは最期の忠勤。共に冥土へ行く父に、語る此世の土産となさん。

稻毛　何を小癪な。……者共、ソレ！

ト是より入亂れての立廻り。重保は入道を討取らんと荒れ廻る。入道危くなる。此時下手より重政手勢を引連れて出で來り、入道に加勢をする。稻毛勢は瀬平と立廻り、上手杜蔭へ入る。重保は又烈しく立廻つて入道と軍兵を下手へ追込み、重政と廻る。トゞ重政危くなる。

ト入道取つて返し、重保の後ろへ廻りて足を薙ぐ。是にて重保どうとなる。

ト重政すぐに斬らうとする。トタンに向うにてエイと矢聲して、箭飛び來り入道の肩先を射拔く。入道尻居に倒れる。又一つ飛び來るを重政切つて落し、きつと向うを見て

重政　鎌倉どの〻嚴命受け、討手に向ひし我々親子に、名乘りもかけず無禮の手向ひ。何奴なるぞ？

ト此時向うにて

義時　何奴とはたけ〳〵し！　賊臣稻毛重成親子、鎌倉どの〻嚴命受け、相模守平の義時、只今討手に向うたり。尋常に誅に伏せ。

ト此うち重保足を拋出したま〻ガツクリとなる。稻毛やう〳〵箭を拔く。重政心おくれしこなし。向うより義時烏帽子、腹卷、左手に弓を持ち、馬上。深見三郎・次郎致興（三十五六）髯づらに引添ひ、軍兵大勢附いて出て、花道よき處に止り

義時　忠臣畠山重忠父子を、讒言を以て陷し入れし、罪跡已に顯然たり。もはや陳ずることも及ぶべからず。

深見　まつた二股川の戰場へは、重忠どのを救はんため、結城の七郎朝光どの、只今汗馬を走らせたまふ。

義時　只惜むらくは時刻おくれ、恐らく憤死を救ふに間なし。國家の蠹賊、義士の怨敵！　せめても潔く誅に伏せよ。

稻毛　こはぞんじ寄らぬ無實の御嫌疑。

重政　讒言なぞとは、我々親子、かツふつ以て……

稻毛・重政　何を證據に……

義時　ヤア、卑怯なり、稻毛親子！　證據は汝等が心にあらん。此上は問答無益。ソレ、致興！

深見　ハツ。

ト稻毛入道、重政うろたへる。深見先きに一同、親子と立廻りあつて、親子が逃げ行くを皆々追うてはひる。義時馬より下りて重保の傍に行き、引起し見て、思入

あつて

義時　さては全くこときれしか？　良材ともなるべかりし僕の伜の此若者。……ア、惜むべし惜むべし！……まことや竪子事を誤る。牧の方世に在る限りは、暫時も心を許し難し。……如何なれば小人の、蛾の燭火に赴く如く、只眼前の利祿に急ぎ、却つて自滅を求むる愚かさ。……

ト此時奥にてエイ〳〵オーと勝鬨きこゆる。義時うなづきて

とは云ひながら一擧兩得。害あつて益なき稻毛親子、偏屈者の二郎重忠。……まことに造化の妙配劑！……

トニツタリ思入。此時バツタリと重保の死骸倒れる。義時ギツクリこなし、やがて氣を替へるを木のかしら。

ウフハヽヽヽ！

ト義時冷やかに自ら嘲るやうに笑ふ。引上げの陣鉦太鼓にて

――幕――

第五幕

第一場　名越山附近の杜蔭

一面に樹木生茂りたる杜かげ。（道具幕）。深見三郎次郎、鎧姿にて、雜兵大勢を連れて、下手より出で來る。

前の幕の翌年、元久二年八月中旬の夜。

深見　儀かに其方共を呼び出したは餘の儀でない。こよひ八月望の夜のお月見とあつて、久々にて將軍家には御臺所と御一しよに、老公の御別邸へお成りの處、先刻不思議の注進あり、此お成りを幸ひに、容易ならざる儀を企つる者ありとの事。眞僞は未だ明白ならねど、蔭ながら將軍家を守護し奉れと、早飛脚にて御主君相州公よりの御内命。倘ほ委細は後に申す。月がまだ出ぬこそ幸ひ。人目のかゝらぬやう、山越えに御別邸の裏手まで參つてをれ。

皆々　心得ましてござりまする。

深見　倘ほ二番手の者共に申し附くる仔細もあれば、其の方共は一足先へ。……程なく追ひ附かうわい。

皆々　畏りましてござりまする。

深見　往け〳〵。

皆々　ハヽア。

ト一同上手へ入る。深見ひとり殘り思入ありて

深見　我が君の御謀議、ことごと〳〵く圖に中り、牧の方の淺はかなるわるだくみ。こよひ將軍家をおびきよせて、庭内にて害せん魂膽。其陰謀の裏を掻いて、あの下屋敷の裏手に忍び、成るべくば將軍をかたづけさせ、其上にて牧

の方をば、……ム、。……

ト思入あつて、下手へ入る。(トすぐに道具幕を切つて落す)。

第二場　北條別邸奥庭

中央より下手へかけて、約五間の間は、庭内の小山の心にて、斜に前の方へだら／＼低になつてをり、其上手には、奥へやゝ斜に一間餘の橋架りありて、其奥にも小山の端見ゆる。處々に杉の木。中にも正面中央の三本の杉は、數百年を經たるらしき大木。あちこちに秋草。上手、下手、共に前の見切りは竹藪。ずつと奥の正面は、一面の松山のカキワリ。其裾に板塀。上手奥、橋の向うに、ずつと斜に釣殿見え、御簾を下げあれど、人影透きて見ゆる。(幕あくと)牧の方かつぎを冠り、懐刀を帯にさして秋草の茂みより窺ひ出る。下手藪かげよりは牧の左源太と郎黨軍平、兵六、出る。牧の方かつぎを脱ぎ思入ありて

牧の方　此夏このかた病ひをいひたて、駿河の故里に籠りをりしは、斯うした首尾をば作らうため。わらはが居らぬと思へばこそ、アノ邪推深い尼御臺も、義時も、心を許し、時政どのゝ招きに應じて、將軍家をはじめ御臺所まで、伴廻りもほんの僅かで、泊りがけのけふの入來。思ふ壺とは此事ぢやわいなう。

左源太　まことに折も折、相州どのには伊豆の領地へ下向の留守中。事を行ふには無類の上首尾。尤も、身方とても、平賀どのには、京都に御在勤中でござれども、男まさりの萩の御方、萬一の場合には、右衛門ノ佐どのに成り代つて、すぐにも御出陣あらんずお覺悟。手筈はすべて整ひをりまする。必ず御懸念なされまするな。

牧の方　萩の前を始め、老女共が心得をれば、池逍遙の小舩には、近侍の侍士共は乘らぬ筈。なれども、萬一の用意のため、御ゝ身は今の間に、手の者ひきつれ、釣殿間近く埋伏なし、いざといはゞ、矢庭に引包んで討取りめされ。

左源太　心得ましてござりまする。やい、軍平。其の方は兵六と共にアノ藪蔭に身をひそめて、御ゝ方の合圖を待て。必ずぬかるなよ。

軍平／兵六　はツ。畏つてござりまする。

左源太　さやうなれば、拙者はこれより……

牧の方　お往きやれ。

左源太　御免。

ト左源太上手の橋を渡りて入る。此時、釣殿の方にて琵琶の撥音聞え、簾に琵琶法師の姿透きて見ゆる。や

がて、「平家」先帝入水の條を語る聲、ほのかに聞えはじめ、次々の問答の間、時々高くなり、低くなりして聞ゆる。其文句左の如し。

平家〽新中納言知盛の卿、急ぎ御所の御船へまゐらッさせたまひて、此世の中の有様、さりともとこそ存じゝが、今は斯うにこそ候ふらめ、見ぐるしき物どもそば海へ入れて、船の掃除めされ候へとて、掃き拭ひ、塵ひろひ、ともへに走り廻つて、自から掃除したまひけり。

牧の方　ムウ、襖越て今宵の慰みにとて、荻の前が呼び寄せおきし琵琶弾く法師が「平家」の一曲。あれが果つれば、将軍家は輿に乗らるゝ筈。わらははあれなる三本杉の、木蔭に隠れて様子を窺ひ、時分よしと見るならば、早速に灘の合圖。必ず共に合圖を待ちや。早まつて仕損すまいぞよ。

軍平
兵六　かしこまつてござりまする。

牧の方　忍べ〱。

軍平
兵六　ハ、ッ。

ト二人下手の藪蔭へ入る。

平家〽女房たちはさしつどひて、いかにや新中納言どの、軍のやうはいかにや、いかにと問ひたまへば、たんだ今に珍しき吾妻男をこそ御覽ぜられ候はんずらめとて、から〱と笑はれければ、女房たち、何條たんだ今の戯れぞやとて、聲々にをめき叫びたまひけり。

ト此文句の内、牧の方よろしく思入あつて、三本杉の方へ降りようとする。此時、上手の橋を渡りて遠江守時政、只ひとりにて、心せきたる思入にて出て來り、牧の方を見て

時政　こりお、奥よ。……奥よ。……

ト四邊へこなしあつて

折入つて、急に話さねばならぬことあり。

ト心のせく思入よろしくありて、よき處の捨て石に腰をかける。牧の方は一寸不審の思入ありて、時政のあわてたる體をじろりと見返り、同じく、やゝ低き捨て

石に腰をかける。此次の問答の間、「平家」の文句はとぎれ、撥音だけ聞ゆる。時政よろしく思入ありて
御ン身の歎きを見るに忍びず、切なる勸めによつて、遂に一大事を思ひ立ちしものゝ、けふ久々にて將軍家を迎へ見れば、血すぢの繋の孫とはいへ、世を去りし政範と瓜二つの其貌ばせ。我々夫婦が心中に、おそろしきたくみごと有りしとも知らねばこそ、……將軍といふよりは、只の子供であるかのやうに、……出で迎へしわがほとりへ、（トよろしく思入あつて）なつかしげに走りより、「ナウ、けふばかりは、わざと祖父上と呼び申さうずに、祖父上も、けふばかりは、われを只千幡若とも呼うでたべ。家族やから打群れて、心おきなう交らうてこそ嬉しけれ」と、……いたいけなるあれが口上。（ト泣きながら）きのふけふまでの、心の鬼の角も折れて、只涙のみはふりおつる。……これ、奥よ、どうぞ此くはだては、夢と思うて、さつぱりと思ひ止まつておくりやれ。血で血を洗ふ淺ましさを、今更に思ひ當つたわい！
トよろしく愁ひのこなし。此時又「平家」のつゞき聞えはじめる。以下問答の間々に斷續して聞える。
平家　〽二位どのは日頃思ひ設けたまへることとなれば

ト牧の方、時政の白の間、よろしく思入あつて、聞いて居り、トゞきつと向き直りて
牧の方　フム、すりや將軍家の面ばせが、アノ政範に似てゐるゆゑ、それで心が變りましたか？　イヽエイナ、千幡若と政範とがよう似たといふことは、耳胼胝の出來る程、イヤサくひ入る程聞きふるいた。それに何の不思議がある？……テモマ、あさましい、情けない今の言葉！　後ぞひは、そばめ、召使ひも同然ぢやと思うてか？　見がへにも事を缺き、ようそのやうなことがいはれたもの！
時政　其怨み、其怒りもことわりなれど、マア心をしづめて、ようう思うても見ておくりやれ。……われ既に六十八歲、餘命いくばくもあらざるに、此事いよ／＼成就の曉、萬一義時や尼御臺が倒逆に我れに楯突く時は、餘儀なく彼等をば敵となして、血で血を洗ふ軍をなし……
牧の方　アヽコレ／＼。それを今更にいふことか！　それははじめから覺悟の前の、此企てゞはござらぬかいの？……ア、聞えた。こりや何ぢやな！　尼御臺や義時に、わらはをば見替へるのぢやな！
時政　いや／＼、決してさうではなけれど……
牧の方　いや／＼、さうぢや。……（トきつと思入あつて）此上は、こなたはこなた、わらはゝわらは。……さうぢ

や！

平家 〽われは女なりとも、かたきの手にはかかるまじ。

ト牧の方、三本杉のかなたへ駈け降りようとする。時政とめる。「平家」は又撥音ばかりになる。

時政 ま〻、待ちやれ。……これさ〳〵！

ト此うち牧の方奥の上手をキッと見て

牧の方 や！ アレ〳〵小艇へ、……将軍はじめ御臺所か。……

時政 オ〻、いかさま！……つゞいておりたは呉羽の前。……

牧の方 腰元、わらはの其外には……

時政 艇に乗込む者もなく……

牧の方 アレ、はや、岸べを離る〻艇！……フム。……

ト こなし。牧の方つか〳〵向うへ駈けおりる。時政も続いておりる。しばらく空舞臺。「平家」又聞ゆる。

平家 〽主上こんねんは八歳にぞならせおはします。御ン年の程より遥かにねびさせたまひて、御ンかたちうつくしう、あたりも照り輝くばかんなり。

ト此うち時政腕組をしながら、屈託貌して三本杉の方より登り來り、二重に立止まりて

時政 ア、誤つたり〳〵！……とはいへ今更引くに引かれぬ。……

ト三本杉の方へ思入あつて

彼女が心中も不便！……猶豫すれば事の破れ。三方四方の身の破滅！……ア、是非に及ばぬ。……む〻。

ト決心の思入。急ぎ橋を渡りて上手へ入る。（此間に舞臺靜かに半廻しになる。）

遠景は前とよう似た松山。小山がずつと上手寄りに見え、三本杉の根がたのだら〳〵低になつてゐる水涯が、丁度中央に見え、橋は正面のずつと奥、三本杉の彼方に見え、今までは正面に見えてゐた釣殿が、今度は奥の下手から正面の奥へかけて斜になつて見ゆる。前の方は一面の池。其や〻下手の水面に一艘の小艇、それに實朝（十四歳）立烏帽子、狩衣、指貫、御臺所（十二歳）下げ髮、小袿、太刀持の小わらは、水干、指貫、義時の室呉羽の前、小袿、及び腰元一人乘つてをり、今しもだら〳〵低の水涯をさして、腰元が棹で船を進めてゐる。三本杉の木蔭には、かつぎを冠つた牧の方が、懐刀の目くぎをしめしながら、艇の近寄るのを待つてゐる。

平家 御ッぐし黒うゆら〳〵と、御ッ脊中すぎさせおはします。

此うち艇は岸に着く。皆々上る。實朝と小わらは先づ上る。續いて呉羽の前御臺所の手を取りて上る。腰元は艇を岸の松に繋ぎなどする。此時はじめて明月が上手奥の空に出てゐるのが見える。

平家 主上あきれたる御ッありさまにて

實朝 アヽ、をかしかつた〳〵！ そつと出て、艇に乗つてしまうたによつて、アノ義村の爺でさへ気が附かなんだと見ゆるのう。

ト此うち「平家」止む。

呉羽 上手にお出しぬきなされました。ホヽヽヽ！……アレ〳〵、發音が絶えました。心附いたのでがなござりませう。

實朝 では、早うあちへ行かうぞ。……アヽよい月ぢや。

（ト御臺所に）御覧ぜ、あの月を、あの月を！

御臺 オヽ、よい景色でござりまするなア！

實朝 （だら〳〵坂を登りながら）アヽ、けふは面白かつた。只残念なは、アノ牧の老女に逢うて、祖母前といふて見たかつたになア！

トいひ〳〵、二重に上りて、一同上手奥へと進む。

呉羽 さう仰せられたなら、どんなにマア喜ばれたことでござりませう。

ト棄てぜりふをいひ〳〵、奥の橋の方へと進む。此間牧の方は三本杉の木かげにていろ〳〵思入、こなしあり、はじめは懐刀を抜きかけ、合圖の石を擲げようとすることあり、やがて實朝の姿かたちが我子政範にそつくりだといふ思入よろしく、石を擲げよう〳〵として擲げかね、トヾそれを取落し、坂を登り切つてしまふまで、只忙然と後ろ姿に見とれてゐる。

牧の方 見れば見る程、我が子を其まゝ！……あの狩衣も、立烏帽子も……「祖母前といふて見たかつたなア！」といふた聲音までも！……

ト皆々が橋の近くまで行くのを見送りつゝ、半無意識に坂を上る。ト舞臺が又逆に半廻しになり、元の舞臺面になる。實朝主従は上手へ入つてしまふ。牧の方尚ほうつとりとしてゐる。此時下手の叢かげより軍平、兵六、つか〳〵と出て

兵六 モシ、御ッ方！……

軍平 アモシ、御ッ方！……何故……お合圖をば……

トいひかける。これにて牧の方ふつと夢の醒めたる如き思入。

牧の方 オヽ！……

ト驚き、後悔のこなし。

ソレ、あの後を！……

ト氣込む。

兵六
軍平　ハツ、心得ました。

ト上手に行かうとする。トタンに下手にてドッと大勢の鬨の聲して、物騷しく、これと一しよに上手にても同じく鬨の聲、

ヤヽ、あれは！……

ト皆々驚く。此時下手より深見三郎次郎、軍兵をひきゐて出で

深見　ヤア御不覺なり、牧の御ン方、御謀反既に露見に及び、相州公には汗馬に鞭打ち、中を飛ばし先刻御歸着。八方隈なきお手配り。もはや叶はぬ。いざ尋常にお覺悟あれ。

牧の方　ムヽ、此上は……

ト牧の方きつと思入あつて

そちたちは此處を防げ。

ト軍平、兵六へこなし。懷刀を抜き放ち、上手へ行かうとする。深見之をさヽへる。軍兵らは一寸立廻つて軍平、兵六を追つて下手へ入る。

ト橋の向うより相模守義時、烏帽子、水干にて、武士大勢を引つれ、右手に三寶を捧げて出る。武士の一人は左源太の首級を提げてゐる。

義時　いかに母上、御ン惡事に加擔の輩らは、左源太はじめ既に悉く誅に伏し、將軍家には恙なく、はや御還御と相成つたり。まつた上洛中の朝雅をも即刻誅伐せよとの上の御ン沙汰。かくなる上は是非に及ばず。いざ尋常に御懺悔あれ。御覽ぜよ、父上には、一念既に御發起あつた、まツこの如く御落飾。

ト三寶に載せたる白髪の髻を示す。此間牧の方無念の思入よろしくあり、やがて「もう是迄」といふ思入あつて、手早く懷刀を取り直し、立ちながら乳の下を貫き、どうとなり、苦しむ。義時其そばへ寄り。

義時　アヽ、しなしたり！　お落飾をこそお勸め申せ、御自害には及ばざりしに。

ト介抱する。牧の方、無言にて苦しみつゝ、次第に落入る。深見はひそかに義時の氣色をうかゞひ、うまく行きましたなといふ思入。義時はさあらぬ體にて、合掌する。

――幕――

（大正六年六月）

名殘の星月夜（四幕十場）

（尼公、實朝、公曉の悲劇）

第一幕
第一場　別當院裏手の山上
第二場　別當院公曉の居間
第三場　由比が濱邊
第二幕
第一場　鎌倉御所寢殿
第二場　名越濱御殿
第三幕
第一場　由比が濱
第二場　唐船の甲板
第三場　小壺の沖中
第四幕
第一場　鎌倉御所中門廊
第二場　備中の阿闍梨の坊

第一幕

第一場　別當院裏手の山上

正面（平舞臺）は、むかし鶴が岡別當僧院の在つた今の八正寺谷の北東に起伏してゐる杉山の一部の頂きで、一帶の平地。其上手、下手共に、太い大きな杉の幹が、遠く又近く、並び立つてゐるので見切られ、やゝ上手寄りの、更に小高くなつてゐる處の木蔭には、谷間への降り口がある。正面の奥は谷を隔てたすぐ向うの杉山。其谷間からも澤山の杉の梢ばかりが、或ひは高く或ひは低く見えてゐる。他の樹木は殆ど見えない。別當僧院は此ずつと下手の凹地に在るらしく、下手の、杉の木立の間に登り口があつて、人は總てそこから出入りする。平地のやゝ上手寄りに、二三の大きな石と一二の切り株がある。

時は建保五年七月初旬（陰暦）の午後。幕の開く前に、雨の音や雷鳴が聞える。

幕が開くと、激しい雷光、すぐつゞいて雷鳴。どしやぶりの雨の音。

ト下手の登り口の下の方で、鄙びた節で、左の唄を歌ふ聲が、雨や雷にかぶさつて聞える。

唄〽まことやら七里が濱にはみろく船が着いたとや。艫舳には伊勢と春日の御ン社、中は鹿島の御ン社。

此唄の餘韻が切れると同時に、登り口から黒髪を振亂した眞蒼な顏の十八九の醜からぬ女が半身を現はす。

ト見る間もなく、づぶ濡れの一重衣をしどけなく引摺り、湯立に使ふ幣の附いた大きな笹の枝をかついだ狂女が、如何にも嬉しさうな笑ひ顏をして駈けあがり、轟々と鳴り渡る雷の音を地にして「ハンヤ！　チヤンチヤカ！　チヤンチヤン！　チヤン／＼／＼！」と鉦を叩く口眞似をしながら、次の唄を歌ひ、平地を一ぱいに踊り廻り、トゞ上手の降り口から谷間へと駈けおりてしまふ。

唄〽十八が澤へおりて黄金びしやくで水を汲む。水汲めば袖がぬれそろ。襷よ掛けそろ。さいな十八。

トすぐに下手の登り口から、近い頃關西から呼戻されて鶴が岡の別當に就職した公曉(十七歳)まだ除髪はせぬ童形、これも大分雨に濡れた一重衣に指貫といふ打扮、手に笠を持ち、跣足にてつか／＼と駈けあがり、狂女の後を追はうとするらしく、早足に上手へと進む。途端に、上手一面にくわつと赤照りがしてすさまじい落雷の音。

ト谷間からぼつ／＼と火炎と黒煙りとが立ち昇る。或大木の幹が、今の雷火で裂けて、燃えた體である。公曉は、之が爲めに、目が眩んだらしく、たゞ／＼と五足六足下手へとよろめいたが、忽ち踏みこたへて、きつと上手を見込み、又つか／＼と進む。此うちに、雷も雨もだん／＼と遠くなつて、正面の空が晴れかける。公曉は上手の谷間を見おろし、ちよつと思入あつて、笠を抛げすて、狂女の降りて行つた降口から降りて行く。尙ほ遠くで折々雷光がして雷が鳴る。

ト下手の登り口の下の方で、人聲が聞えはじめる。暫くすると、同宿の所化、寡念(十八九歳)鼠色の服に墨染の腰衣、同淨念(二十五六歳)同上を先きに、公曉の傅、三浦の義村の子にて公曉の傍仕へを勤める駒若(十五歳)一重衣に指貫の童形。いづれも素足にて駈けあがる。

寡念　や！　こゝにはござりませんぞ。

淨念　どこへ行かつしやれたか？

ト三人が三方に分れて、きよろ／＼とあちこちを見廻す。此時、又登り口から、公曉の附人、堀の彌源太兵

衞（六十以上）息を切つて、急ぎ足で登り來り、左の白ないひ〳〵、前の三人に近づく。

彌源太　やれ〳〵、おそろしい雷鳴(かみなり)であつたぞ。相變らずお氣が荒うて、危(あぶな)さ知らずで困つたものぢや。どうかお怪我がなければよいが。

ト此うち專念と駒若とは、上手の谷間を見おろしてゐたが

駒若　やア、あそこぢや〳〵！　や、氣ちがひめがどうかしをつた！

專念　おゝ、顔から血が流れてゐる！

トこれにて淨念も彌源太兵衞も、同じく谷間を見おろし

彌源太　いかさま。しかしまア和子さまが御無事でよかつた。

淨念　あゝ〳〵、氣ちがひめが逃げまはりをる。中々捉(つか)まらぬわい。

駒若　あゝ、早いわ〳〵！　あゝ手も足も血だらけぢや。

專念　禪師(ぜんじ)さまを手傳うて來う。駒どのもござらつしやれ。

ト棄てぜりふにて、專念と駒若とは上手の降り口から降りて行く。

彌源太　やれ〳〵、ひやいなことであつた。氣ちがひ一人(ひとり)を捉まへる爲に、大切なお身に御別條があつた時分には、取返しが附かぬ。いやはや、いつまでもお氣が荒うて困り切る。

淨念　これでもう二度目ぢや。先度も、あの御境内(ごけいだい)へ落ちた時、雷獸の正體を見屆けるとやらいはつしやつて、みんなが雷除(かみなりよけ)の呪文を唱へてゐる最中に、たつた一人(ひとり)軒先へ出て、見張つてござらつしやつた。えらい膽玉ぢやなア！

彌源太　其の膽玉が困りものぢや。此頃は阿闍梨さまの仰ツしやることをさへも聽かつしやらぬ。それにつけても、早う頭(つむり)でも圓めさつしやつたら、おのづと氣持も變らつしやらうずに、つまり尼御臺さまが、いとほしがつて、あゝしておかつしやるがわるい。

淨念　それに、あの腕ぶしの強いこと！　わしらは、迚も、三人かゝつても叶はん。きのふも投げられて、專念めは目を舞はしをつた。

彌源太　剛情や腕立ては、坊さまには餘計なものぢや。

ト苦々しげにいふ。此時淨念は谷間を見おろして

淨念　とう〳〵捉(つか)まつた。

ト彌源太兵衞も下を見おろして

彌源太　成る程なア、氣ちがひめは怪我をしをつたと見える。

ト此内公曉を先きに、專念は狂女の右の手を、駒若は

其左の手をおさへて、谷から上つて來る。狂女は、額口から左の半面へ掛けて怪我をしたらしく、血に染みてをり、肱も膝頭の邊も、同じく血で衣服が汚れてゐる。けれども、先刻同樣に、當人は大元氣で、嬉しさうに目をくる／＼させて、笑ひ顔をして、手には尚ほ幣の附いた笹の枝を持つてゐて、一寸でも隙があれば振離して駈け出さうとする。

公曉　おそろしう骨を折らせをつた。岩石の間に突伏してゐをつたゆゑ、死んでゐるのかと思うて、傍まで行くと、やがて猿のやうに駈け出しをつた。

彌源太　お怪我がなうてようござりました。おあぶないことでござりました。

公曉　（やゝ上手の大きな石に腰をかけながら）一體、此氣ちがひは何處のものぢや？

彌源太　へい、これは昨年から大評判の、陽氣な氣ちがひでござります。何でも戀が窪近在の名ぬしとやらの娘さうにござりますが、其色男が、まだ婚禮もせんうちに、非業に死にをりましたのが原で氣が觸れたげにござります。其男といふのは、たしか村木座邊の、さる商人の一人息子とやらでござりまして……

ト いひかける。此以前より、狂女は、時々とんきよな併し快活な顔をして笑ひながら、おさへられてゐる手を振離さうと踠いてゐたが、此時出しぬけに、又唄を歌ひ出す。

狂女唄へ　鎌倉の御所のお庭で十八小女郎が酌をした。酒よりも肴よりも十八小女郎が目に着いて……

ト急に惠念と駒若とを左右へ手荒く振離し、突きのけて、前へつゝと走つて出て、いかにも愉快さうに笑ひながら

目に着かば連れてござれよ、海の、大海の底までも。

ト歌ひつゞけて踊り廻る。皆々驚きて捉へようとする。公曉は棄てゝおけとこなし。狂女は歌ひ了ると笹の枝をカセに使つて、囃子言葉やら、太鼓の口眞似やら。

ソコヤレ、ソコヤレ！　どつこい／＼！　テンテンテンテン！　テコテン！　テンテンテン！　おゝどつけい！　ハアハア！

ト平地一ぱいに踊り廻る。一同は呆氣に取られて見てゐる。トゞ狂女はケロリ踊り止んで、しきりに一同を睨めまはし

さア／＼／＼！　お月さまが眞圓にならつしやつたら、

きつとおれに隨いて來い。おれにさへ隨いて來れば、いつでも龍宮に行かるゝ。やい、よう聽け。鹿島明神さまのお告げぢやぞ。疑ふな。疑ふな。

ト笹の枝を湯立をするやうに二三度振廻したかと思ふと、又上手の谷間へ駈けおりさうにするゆゑ、專念や淨念や駒若が止めようとする。

トおそろしく腹を立てゝ荒れ廻る。

此騷ぎの最中に、下手の登り口から一人の老女、此狂女の母(五十五六)相應の農家の妻の拵へにて、息を切つて登り來り、此體を見て駈け寄り

母　おゝ、汝、こゝにゐてくれたゞか?(ト狂女の手をおさへて)はれまア! あによしたゞ? 額口から、おゝお、腿ッけたまで……言はんことか、生血だらけでねえかよ!(ト涙聲で言ひかけながら、一同を見返りて、急に腰をかゞめ)へい〳〵、皆さま、御免なはれやせ。……(ト狂女が又振拂つて逃げようとするのを抱きとめつつ)これ、さちよ。これさ〳〵。さちよ〳〵。阿母だよ。そうら、な、阿母だがよ。……これさ、落ち着くだ。落ちつくだちふに。

トこれにて狂女少し靜かになる。

彌源太　では、おぬしがお袋か? すんでの事になう、あぶないところであつたを、こちの禪師さまがお助け遊ばされて下されたのぢや。ようお禮をいはつせいよ。

母　それははア、あてこともねえ恐れ多いことでござりやした。いかいお世話をかけやしてござりやす。どうかまア、氣ちげへの事だから、御容赦して下されやせ。

公曉　(石に腰を掛けたまゝで)氣ちがひにしてもめづらしいわい。嬉しさうに、歌うたり、踊つたりしをる。面白い奴ぢや。

淨念　噂では、緣談の間ちがひが原で、氣がちがつたんだやとやら聞いたが、眞實か?

母　(尙ほ狂女の手を提へたまゝで)へい〳〵、さよでございやす。不思議な緣で、材木座の、さる物持の息子どんに、いかく思ひ附かれやしてなア、それからといふもん、中ア打裂かうとしても裂かれゝばこそ、釣合はねえのは合點で、結納まで貰ひやして、早既來月は嫁入れだちふ去年の八月十五夜の事でござりやす。何とした業因だつたか、釣好きの其息子どんが、ふいと其晩小舟に乘つて、たつた一人で沖ん中さ出られやしたでござりやす。すると、なんぐりしてゐた天氣が俄に變つて、すてッこちもねえお雷雨になりやして、小山のやうな浪が立つて、船も人もそれッきり見えなくなり、三日たち四日たつても歸らばこそ、先きの親たちの泣きの涙よりも、こ

いつめが落膽しやしてなア……（ト泣きながら）それからといふもん、うツぷさいで、寢もせず、物も食はず、しくり／＼泣いてばかりゐやして、物の半月も經つと、氣拔けのやうになつて、うぬが家も、親の顔も、忘れやして……

ト言ふうちに、狂女は又もだしぬけに陽氣に笑つて「チヤンチヤカ！　チヤン／＼！　チヤン／＼チヤン！」と口拍子に合せて踊り出す。老母はそれをやつと取りおさへながら

藥も待呪も願かけも、かつちりとも驗がござりやせんので、はれまア一人娘を打殺いてしまつたかと泣き悲しんでをりやすと、ふいと又樣子が變りやして、浮かれ出いて、あたけ廻つて、「圓島の明神さアの御夢想で、おれ神子さまになつたゞから、今から龍宮さ行くだ。息子どんが彼方で待つてるだ」とあぢやらもねえことべい口癖にして……

トいひかけると

狂女　さうだ／＼。今ン夜も待つてるだよ。今ン夜も。

トいふや否や又駈け出さうとするを、老母はやつとおさへつけて、むりやりに地上に坐らせ

母　ふん縛ツといても、繩アぶつ切りやす。とりわき、お月夜やお夕立の夜となると、どねえに突込めといても、あたけて／＼、戸オぶつさばいて、駈け出しやして、浪打際べい行かう行かうといたしやすだ。此間も眞夜中に拔け出しやして、飯島が崎の深い處へ入りやしたゞ。……だアから、これッぽちも眼が離されやせん。……へいへい、お庇さまで、命べい拾ひやして、おかたじけでござりやした。……さ、起つだ。歩べ。さ、歩べてば。……

ト坐り込んでしまつた狂女を引起しながら

へい／＼、おかたじけでござりやした。……さ、こつち來う、こつち來う。

ト公曉はじめ一同に會釋しつゝ、老女はやつと狂女を引立てゝ下手へおりて行く。

駒若　をかしい氣ちがひぢやなア！

眞念　お袋あは泣いてゐるけれど、當人は大陽氣ぢや。

淨念　あんな陽氣な氣ちがひは、初めて見たわい。

ト此うち彌源太兵衞は、公曉の衣服の汚れてゐるのに目を着けることありて

彌源太　おゝお、お召もぐつしよりなりや、お袴も泥まみれぢや。早う下へござりまして、お召し替へなされませ。

公曉　また俺は此處に用がある。替へるには及ばん。おのじはもう、往け／＼。

彌源太　もう直に夜風になりまする。雨にお濡れなされた

のはお毒でござります。ちよとマアお被替へなされませ、
公曉　うるさい！　無用といふに。
彌源太　ほい。（トばかり口をつぐんだが）では手前がちよと往つて取つて參じませう。
　ト彌源太兵衞は、急いで下手へおりて行く。日はだんだん西に傾くらしく、正面の杉山の彼方の空が夕照の反射で赤く美しく輝いてゐる。
公曉　さア〳〵、爺が去にをつたによつて、始めい、始めい。さ、いつもの通りぢや。三人一しよに掛つて來い。
淨念　今ン日は眞ッ平御免でござります。きのふ酷くお投げなされたので、今ン日は脊骨が痛うてなりませぬ。
專念　わたくしも御免でござります。思ひ出したばかりでも、又目が舞ひさうでござります。
公曉　えゝ、弱蟲めが！……では、けふは手は出さん。さ、かうして組んだまゝでゐる。さ、來い。
淨念
專念　今ン日は御免でござります。御免でござります。
　トいひ〳〵下手の降り口へ逃げかけるを
公曉　おのれ！
　トいつて忽ち追ひつき、左右の手で淨念、專念の襟上を取つて引立てゝ戻り
相手になりをらんと、承知せんぞ！
　トこづき廻す。
淨念
專念　では、成ります〳〵。
　ト二人は據ろなく身支度する。駒若も身づくろひする。これより公曉は、手を組みて、眞中に突立ち三人は左右より組附きよろしく相撲ふこと。トゞ三人共、芋を轉がすやうに、幾度も足がけで見事に倒される。
公曉　弱蟲！　けふは格別、手ごたへがなさ過ぎて、張り合ひがない。……あゝ、腕が鳴つてならんわい！
　ト四邊を見廻し、先刻腰掛けてゐた大石に目をつけ、「よい物があつた」といふ思入。すぐに身づくろひして立寄り、其石に兩手を掛け、徐かに搖りを入れて、うんと引起し、上手の降り口の方へ轉がし始める。淨念、專念、駒若は呆れて見てゐる。いよ〳〵降り口近くまで持つて行くと、一息入れ、更に滿身の力を籠めて、先づ膝頭まで、それから又だん〳〵高くかゝげ上げる。皆々其うしろに立つて見惚れてゐる。此時下手の登り口から以前の彌源太兵衞、着替の衣服を持つて上り來り、此體を見て「又か！」といふ思入。途端に、大石は公曉の頭上を離れて、谷間へ落込む。すさまじい音がする。
公曉　はゝはゝはゝはゝ！

ト愉快げに笑ふ。彌源太兵衛は「困つたものだ」といふ思入にて

彌源太　又でござりますか！　やれ／＼！（ト淨念、專念に向ひ）お同宿たち、今お客來で、阿闍梨さまのお召しでござりましたぞ。早う往かつしやれ、往かつしやれ。……

ト是れにて淨念、專念は、一寸公曉に會釋し、これな好い機に急ぎ下へおりて行く。駒若もつゞいておりる。

和子さまにも……かうして持つて來ましたものゝ…… 下でお召し替へなされませ。只今尼御臺さまからお使ひにとて、村橋の局がわせられましたので、阿闍梨さまが早う呼びまして來いと申されました。さ、早うござらつしやりませ。……

ト公曉は、折角の興を破られたのを憤る思入にて、正面の杉山を見やつたまゝ、背を向けて、返辭もせずに、立つてゐる。彌源太兵衛は思入あつて、其傍に膝まづき

もし、和子、どう遊ばされたものでござります？　きのふ阿闍梨さまの仰せられた事を、何とお聽きなされましたぞ。貴下は御當社の御別當職にならせられたのでござりますぞ。なれば、御定業でなうお果てなされた父御さま、二品禪室さまの御冥福のお爲にも、又源家御一統の御罪障消滅のお爲にも、是非とも貴下様は御戒行を積まつしやつて、慈悲忍辱を第一となさらねばなりませぬのに、又しても／＼、腕立や力わざばかりなされますのは、お心得ちがひでござります。これからはふッつりお止めなされませ。きつとお學問をばお勵みなされませ。……

公曉は振向きもせず、後ろ向きのまゝでゐる。

ともかくも、ま、下へござらつしやりませ。阿闍梨さまのお召しでござります。……もし／＼。

公曉　やかましい。知つてをるわい。

彌源太　又そのやうにずねさつしやります。それではなりませぬ。何ぼうでも、阿闍梨さまの仰せにお背きなされては濟みますまいぞや。

公曉　いんにや、たとひ師の坊のいはれることでも、不道理な事は、聽くには及ばん。

彌源太　えゝ？　では、阿闍梨さまのお言葉をさへ、不道理ぢやとおつしやりますか？

ト是れにて公曉はきつと此方を見返りて

公曉　不道理でなうて何とする？

ト手強く言ひながら傍らの切株に腰をおろし

おれが力わざをしたり、武藝を修めたりするのを、やれ、淺ましいの、無用ぢやのと、見當ちがひの異見立をさつしやるのが、第一の不道理ぢや、あれは、俺を欺して、

毒にも藥にもならん腑拔けにせう爲でなければ、師の御坊が耄けてゐるのぢや。俺は京都にゐた間に、大寺の坊主といふ坊主の振舞は、よう見もし聞きもしたわい。どこに戒行や慈悲や忍辱を專一にしてゐる寺があるぞ？ 四大寺を見い。第一、あの延曆寺を見い、兵力を備へてゐればこそ、佛敎の大本山ぢや。いざといふと、陣立をして、無二無三に、神輿を擔込む。禁廷にさへ憚られるのはあの兵の力ぢや。それが何の忍辱ぢや？ 今の世は、在家も、出家も、所詮は腕ぶしの強い奴が勝ぢやわい。兵力さへあれば無理も通る、非分も勝つ。

ト一氣に勢ひ込んで言つたが、急に何か思ひ出して、無念さうに

父上とても……（ト齒をくひしばつて）若し十分の兵力さへあつたなら、何のむざ／＼、あの修善寺なんぞへ押込められて、無念の最期を……無念の最期を……

トいひかけたが、俄に激しく感動して、後をば言ひかねて、全身をふるはして泣く。彌源太兵衞も、思はず引込まれて、同じく涙に暮れながら

彌源太　さういはつしやれば、そんなもんぢやけれど、互ひに腕づく、力づくで、我を立て、修羅を燃し合うた時分には、いつまでも淺ましい業因の盡きる瀨はござりませぬ。まゝ、諦めさつしやれ、諦めさつしやれ。

ト介抱しようとするのを突き飛ばし

公曉　えゝ、うるさいわい！

ト駄々ッ子のやうに、齒かみをして歎く。此途端、下手の登り口より駒若が又あがつて來る。

駒若　禪師さま。阿闍梨さまがお待ちかねでござります。早……

ト二の句を繼ぎかけたが、二人の樣子を見て、驚き、後をいひかねて突立つてゐる。四邊がだん／＼薄昏くなつて、塒へ急ぐ鴉が、三四羽、向うの杉山を橫切つて、左手から右手へと、啼きながら飛んで行く。

第二場　別當院公曉の居間

正面（平舞臺）は別當所の別棟、これは公曉の居間。本院は下手にあるらしく、長い廊下が下手へ通じてゐる。正面には板緣が見え、庭續きの直ぐの杉山が見えてゐる。障子は開け放し。上手の側面は、蔀格子が悉くおろしてあり、下手の側面は、廊下口の柱の處までは障子、正面の板緣がそこまで折れ廻りになつてゐるらしく、柱から下手に當る奧の方には、やはり庭つゞきの杉山の裾が見渡される。廊下と居間との間の妻戶（緣子張）は、開放したまゝになつてゐる。

此居間の上手には阿闍梨勝圓（七十位）天台宗の僧衣に

て佇ひ、下手には村橋の局（四十以上）下げ髮、小袿を着て、座右に白木の脚附の臺に、公曉に呈する僧服を取揃へて載せたるを置きて佇ひ、談話なかばの體。日は既に山に入つたらしいが、席にはまだ燈火がない。

阿闍梨　いや〳〵、善は急げでござる。尼公にも、そこにお心が附かせられたとあれば、一日も早うお落飾をおさせなさるゝがよい。毎度申し入れた通り、御聰明であらせらるゝ癖に、何ぼう御教訓申しても、經文はおろか、わづか三四句の偈言をすらも誦えうとはしめされず、ともすれば同宿共を相手に、太刀打、力わざ、殺生三昧。いやも、われらの手にも及ばぬ。これといふも、畢竟は、お俗體のまゝでおかせらるゝ爲でござる。はや佛門に入つたりとおぼしめされたなら、よもやあゝもあるまいでござる。

村橋　さぞかしお困りでござりましつらう。お察し申しまする。三浦さまお邸にて、わたくしお附き申し、お育ち遊ばされたまだ四歳、五歳のお幼少い時分から、ほんに玄祖父様、鎭西八郎さまのお血統は爭はれぬもの。お猶が高ぶつてこそおむづかり遊ばしつれ、なみの子のやうに、痛いとか、怖いとかいうて泣かせられたことはござりませなんだ。京都にお上りの後も、三井寺にて御修行の間も、毎日のやうに、木登り、山登り、喧嘩口論、腕立、力わざ。折々は、お行くへが皆くれ分らず、其夕方または其あくる朝になつて、けろりんと鞍馬山または比叡山などからお歸りなされたこともござりましたげな。こちへお戻りの初手ほどには、さすがに御殊勝げに見えさせられましたが、それもやつぱり空頼めでござりましたわいな。成る程、延ばせば延ばすほど、御未練も、お惡戲も募りませうず。けふは、尼公さまの仰せを楯に、否應なうお勸め申しまする。

阿闍梨　それがようござる。寸善にも尺魔ぢや。こよひをお過しなさるな。……では、早速呼びまして參らう。暫時お待ち下され。

ト阿闍梨は下手の廊下を通りて入る。局は一人殘り、思入ありて、傍らの白木の臺を引き寄せ、中なる新調の僧服、白綾の小袖、緋の素絹、金襴の袈裟等を取調べ、一寸愁ひのこなし、此うち前の場の所化鼻念下手より燈火を持ちいで、よき處に据ゑおきて、又下手へ去る。

ト引きちがへて、同じく下手より、公曉、前の場とはちがつた服裝（水干に指貫）にて、腰に小さ刀を帶び、廊下を渡りて出て來り、無言にて室内に入る。局は心附きて振りかへり

村橋　おゝ、和子、お歸りでござりましたか？

ト形を改めると、公曉よろしく上手に住ふ。

いつに變らぬ麗しいお顏持、お嬉しうござります。お祖母さまからも、よしなに申し上げいとのお言葉でござりました。

公曉　（不興氣に）　けふは何しに來たんぢや？

村橋　はい、今ン日は、ちと折入つて申し上げねばなりませぬ事がござりまして……

トいひかけて躊躇するのを、ジロリと見て

公曉　いよ／＼、坊主になれと、勸めに來たんぢやらう。

ト外方を見ながらいふ。

村橋　恐れ入りましでござりまする。御意の通り、尼御臺さまの仰せ附けによりまして、お落飾のお日取其他に就きまして、……

トいひかけるのを冠せて

公曉　祖母上の吩咐ばかりではあるまい。叔父上やあの義時が、やかましくいふのであらうが。

村橋　いえ／＼、將軍家からは、何等のお沙汰もござりませず、また相州殿からも、別段言上の儀とてもござりませねど、既に別當職に就かせられました上は、お俗體のまゝでいらせられまするも異なもの。諸人の思はくもあり、將軍家へのお聞えもいかゞと、とりわけ、尼公さまの御遠慮にござりまする。……

ト傍らの臺を公曉の前へ押し進め

これ、御覽じませ。お飾りおろしの式が濟めば、召させまゐらせまする此品々は、尼公さまのお心づくし。中にも、此金襴のお袈裟に添へさせられたお飾り紐は、お手づからのお細工にござりまする。

公曉　（それには目もくれず）　では、いよ／＼……騙したんぢやな。……うまいことを言うて、俺をば京都から呼寄せておいて、のつぴきさせず、坊主にしてしまふんぢやな。おのれ！

ト憤激の思入。向うを睨みつめて身をふるはせる。

村橋　あゝもし、滅相なことをおつしやりませ。何のマアお騙しなさりませうぞ。最初から、此鶴が岡八幡宮のお別當職にといふお約束、こなたもそれを御合點の上で、お下り遊ばしたではござりませぬかいな？

公曉　俺ゃ別當職といふものは、もつと威のある役目ぢやと思うてゐたんぢや。禰神主や生臭坊主の先達になつて、供養や祈禱の世話をする分なら、爺か、病人か、女か、子供で澤山ぢやわい。……よくも俺を騙しをつた。……こんなことかと思うたによつて、俺は廿歳になるまでは、京都を離るまいと思うてゐたのに、無念なことをしてしまうた。（ト急に臺の物に目を附け）　何ぢや、こんな物！

……

ト手荒く引繰返しながら、

父上に、あの修善寺で、詰め腹切らせをつたと同じ手で、（トいひかけて、歯がくひしばつたが）おのれ俺をも……俺をも……坊主にしてしまひをるんぢやな！

トいふうちに憤激の顔が、だん／＼泣顔になる。

村橋　あゝこれ、滅多なことを！　其やうな大きなお聲で。（ト四邊へこなしあつて）若し悪い者に聞かれたら、それこそお身の上の一大事になりまする。（ト介抱しながら）此お社の別當職といへば、お位こそは將軍家のすぐお次ぎ、萬人が尊敬の的。なればこそお祖母さまのお肝焦り。それを騙されたとおぼしめすは、こなたのお僻みと申すものでござります。

いろ／＼こなし。此うち下手より義時の郎黨深見三郎次郎（四十七八）烏帽子直垂にて出で來り、妻戸の蔭に立ち、はじめは腕組なして、内の問答を聞いてをり、後にはこゞむ。

公曉　いや／＼、騙したんぢや。（トだん／＼歎きよりも怒りが主になつて來る）俺を京師に置いたなら、行く行く謀反でもしやせぬかと、きつとさう疑うて呼び戻しをつたんぢや。あゝ、今思ふと、俺も大阿呆であつたわい。公然に武藝を習うたり、友達を多勢集めて、敵討の軍の眞似をしたり、叔父貴や義時の事を、さん／＼惡口したこともあつたによつて、俺の本心を勘づかれたのぢや。

村橋　えゝ！（ト驚きて）すりや貴下は、將軍家や北條とのを、今でも怨んでござらつしやりますか？

公曉　怨まいでか？……父上二品禪室どのは、あいつらの爲に、無慚な、無念な、淺ましい御最期を遂げなされた。……父上に、何の科があつた？　どんな罪があつた？　横道者の北條一家を滅ぼさうとせられたのが何がわるい？　それぢやのに、逆まに、北條めの爲に殺されなされたは、つまり、あの叔父貴がさせをつた事ぢや。

村橋　あゝもし、又してもそのやうな滅相なことを！　將軍家は、あの頃にはまだやつとお十三、どうしてそのやうなお考へなぞがござりませう。殊には、尼御臺さまが附いておいで遊ばされまするもの。それは貴下も、かねがね聞いて、御存じのことではござりませぬかいな？

公曉　いや／＼、その時はどうあらうと、現在兄の敵のあの義時めを、今以て誅戮しようともせず、ぬく／＼と將軍になつて榮耀をかはいてをらるゝのは、義理も人情も辨へん無道人の證據でないか？　父上ばかりか、兄の一幡をも、弟の千壽をも、みんな慘たらしう殺しをつた！　おのれ！……第一、祖母上が聞えぬわい！　おれまでも、騙して、呼び寄せて、坊主にするとは……（トいつたが俄かに女々しくなつて）坊主にするとは！

ト急に泣き出す。村橋もこらへかねて泣きながら

村橋　御尤もぢや〳〵。其お怨みは御尤もぢや。さ、御尤もぢやけれども、何事も時世、時節、今更それを言うたとても、返らぬことでござります。な、もし、二品さまのお不幸も、つまりは其同じ、お氣の強い、荒いお氣質から起つた事ぢや。かりそめにもそのやうな事を、二度とお口外遊ばしますな。萬一にも御所さまのお耳に入らば、それこそお身の上でござりますぞよ。

公曉　えゝ、かまふものかい！　おのれ、坊主にするなら、して見をれ。今に思ひ知らせてくれるわ！……

ト覺えず腰の小さ刀を摑んで、居丈高になる途端に、妻戸の蔭に居る深見三郎次郎の姿が目に入る。これにて、きつとなつて

だれぢや？　そこにゐるのは？

ト鋭く咎める。これにて、深見はしづかに内に入り、妻戸の締りをなし、やがて恭しく下手に平伏して

深見　失禮の段平に御免下されませう。北條どのよりのお使ひとして、參上仕りましたものにござります。

公曉　（ぎよつとしたる思入）なに、北條の使ひ？

ト村橋は深見を見て

村橋　おゝ、たれかと思うたら深見どのか？……

ト公曉に向ひて

お氣づかひ遊ばしますな。此仁は、わたくしかね〴〵噂いたし、何かの御相談相手とも相成りませうずと申しあげおきましたるわたくしの腹がはりの兄、深見の三郎次郎にござりまする。

公曉　（やゝ落着きて）昔、父上に仕へてゐたといふのは、おのしか？

深見　はッ。御意の通り、若年の砌り、秀若丸と召されて、お父上、前將軍家のお傍去らずを勤めをりましたる者にござります。只今は相州殿に御奉公いたしをりますれども、前將軍家の御高恩は夢の間、束の間も忘却仕りませぬ私、かりそめにもお爲にならぬ儀は、正八幡、毛頭他言は仕りませぬ。必ずお氣づかひ遊ばされまするな。實は、今しがた、お廊下口まで參りかゝり、ふとお言葉を洩れ聞きましたるゆゑ、萬一にも四邊を徘徊いたしをる者などあつてはと存じ、只今までとつくと見張いたしをりましたが、只一人の出入もござりませねば、御安心遊ばされませ。

公曉　（尚ほ油斷せざる思入にて）さうして、おのしは、何しに來たんぢや？

深見　はゝ。實は（ト思入あつて）主人義時の吩咐を受けまして、一日もお早くお落飾の儀を強ひてもお勸め申さうとて、參上いたしましたのでござりまするが、測らず

も、只今の御述懷を承はり、御尤もとも、お道理とも、申し上ぐべき言葉もなく、そゞろに前將軍家御在世の折の事共を思ひいだし、不覺の淚に暮れをりましてござりまする。

ト落淚のこなし。これにて村橘も泣きながら

村橘　兄上、お察しなされて下され、世が世なら、當然將軍家の……現に一旦はお猶子でもあつたことゆゑ……お跡目ともならせらるゝ筈の和子さまの、此うるはしいお飾りを、むざ〳〵おろさせまゐらするのは、尼公さまはもとより、たれしも、痛はしうて〳〵ならぬのぢやけれど、……又御無念も、お道理ぢやけれど……どうもならぬ時世。……何とかいうて、お慰め申してあげてくだされ。

深見　御發明の和子さまに、御異見などゝ申しては、嗚呼がましうござりますが、さすがにまだお若年ゆゑ、憚りながら、只眼前の事のみ御念頭に置かせられ、最も大切な儀にお心が附かせられぬかと存ぜられまする。

公曉　なに？　最も大切な儀とは何のこつちや？

深見　萬一にも、當將軍家が、不慮に御他界あらせられましたならば、其の跡目は如何なりませうぞ？

ト公曉默つてゐる。

深見　御臺所をお迎へ遊ばされてより、もはや十二年にも相成りまするぞ。今以て御出產の、氣ぶらひもござりませぬ。お胤が無うて薨去れさせられましたなら、何人がお世繼になられませうぞ？

ト公曉なほ默つてゐる。

村橘　成る程、さういへば、天にも地にも、源家御正嫡のお血すぢというては、此和子の外には……

トいひかけるを深見目まぜにて制し、三人顏を見合せてよろしく思入。

深見　此儀を申し上げおきまするは、只一へに和子さまの御自重をお願ひ申さんためばかり。もとより當將軍家のお身の上の御不祥なぞを希願うての儀ではござりませぬ。併しながら、（ト四邊へこなしありて）こゝに今一つ、內々聞え上げておかねばならぬ一大事がござりまする。（ト膝を進め、聲をひそめて）和子は、此たび、將軍家が宋國へお渡り遊ばす爲、前代未聞の唐船を御建造遊ばされ、旣に不日お船おろしのお催しあることをば、御承知でござりませうな？

公曉　うん、唐人の陳和卿とやらの言葉を信じて、前世の宿緣のある唐の何とやらいふ山へ參詣に行かれるとか聞いた。

深見　陳和卿は、將軍家の御前生は、宋國醫王山の長老ぢやと相しました。將軍家自身にも、先年右同樣の儀を、

不思議にもお夢の裡にて御感得遊ばされたとのお沙汰ではござりますれど、何共以て奇怪千萬なる事共。和子は、此儀をば、何とおぼしめされまする？

公曉　俺も奇怪ぢやとは思うたが、あの柔弱な、公家臭いことや唐臭いことや佛臭いことの好きな叔父貴ぢやによつて、そんな夢を見たかも知れんわい、どちらにせい、たわいもないことぢや。

深見　いや／＼。たわいがある段ぢやござりませぬぞ。

　トきつと言ふ。これにて公曉も村橋も不審の思入。村橋は膝を進めて

村橋　と、おつしやる仔細は？

　トこれにて深見又四邊へこなしあつて

深見　將軍家を、只御柔弱とばかりおぼしめされたら、大きなお目ちがひでござりますぞ。外面には似ぬ、中々逞しい御生來。和歌よ、蹴鞠よと、殿上ぶりの風流に、耽らせらるゝと人には見せて、內々京方とのお親しみ。とりわけ、仙洞御所とは、多年の御昵懇。あるひは容易ならぬ御陰謀があらせらるゝやも圖られませぬぞ。和田一黨の先年の謀反とても、內實は將軍家豫てお含みの上の儀ではなかつたかとも疑はれまする。併しながら、仙洞の御底意は、申すまでもなく武家政治の倒滅、決して北條どのばかりを的の、お企ではござりませぬゆゑ、京方との御合體が定ならば、それこそ源家の大禍根、行く／＼如何やうな珍事が出來いたすやも圖られませぬ。

村橋　まア思ひもよらぬお話！　さういへば今年の三月、御臺所のお兄上さま、坊門中納言さまが、仙洞御所のお使ひとして、不意にお下り遊ばしたのも、どうやら仔細がありさうな。

公曉　では、宋國へ渡るといふのも、嘘か？

深見　何か京方と、お打合せあつての、御計略ではあるまいかと、これは私の當推量。何れにもせよ、いつかは斯樣な雜說が原となつて、此儀尼公さまのお耳に達しましたならば、御當家の御安危には易へさせらるべうもござりませねば、將軍家に御隱居又は御落飾をお勸め遊ばさるゝことゝも相成りませう。さすれば、當然何人かに、將軍職をお讓り遊ばされねば相なりませぬ道理でござりまするぞ。

　ト氣味合にていふ。

公曉　むゝ。

　ト思入。村橋もよろしくこなし。

深見　そこにお心が附かせられましたなら、明日にも早速お落飾遊ばされて、御幸運の巡環するまで、ひとへに御殊勝の御振舞をこそ、平に願はしう存じまする。

　トしみ／＼といふ。此時下手より阿闍梨勝圓出で、何

心なげに妻戸に近づいたが、ふと立ちどまり、内の話に耳を立てる。

公曉　（思入あつて）　今の話には、何ぞたしかな證據があるか？

澤見　（懷中を探りて一通の書き物を取り出し）　これは先年内勅によつて、仙洞御所よりお歌合せの一卷とやらを下し賜はりました折に、將軍家が御返辭に詠ませられましたお歌の由。一昨日傳手を求め、ひそかに寫し取らせおきましてござりまする。

トさし出すを公曉受取り、すぐに開いて見て、中音に

公曉　大君の勅をかしこみ……

ト讀みかけるを澤見おさへて

澤見　あ、もし。……お默讀、お默讀。

ト澤見、村橋よろしく四邊へこなし。公曉は紙を繰りひろげつゝ默讀する。妻戸の外にて立聞く阿闍梨もまたよろしく思入。

――幕――

第二場　由比が濱邊

正面（平舞臺）は、すべて由比が濱邊。上手、下手、共に間近な岨の裾で見切られ、正面は大分遠くまで一面の眞砂地にて、木も何もなく、只白波が打寄せてゐるのが見えるばかり。もう夜が深けてゐるので、上手の奥には遠く黒く稻村が崎が見え、中央から上手へ掛けては、巨大な、異樣な唐船の舳の方、およそ二間程だけが、おそろしく大きな怪鳥の尻尾か何ぞのやうに眞黒に、半空を横切つてヌッと突き出てゐる。もう建造は終つたれども、内外の裝飾などはまだこれからゝしく、足場がまだ架けてある。それから下手の岨近くには作事小屋の一端が見えてゐる。時は前の場と同じ日で、五日頃の月が、もう既に稻村が崎の彼方に低くなつてゐる。

北條義時の郎黨、火場の權平太（三十五六）烏帽子、直垂、腰刀にて、船大工甲（五十位）烏帽子、袴と共に後ろ向に立つて、船を見上げてゐる。

權平太　成る程、二十二間か？　大きなものぢやなう。一廻りぐるりつと見廻るばかりでも一寸草臥れるわい。いかさま、これならば、二百人位ゐ乘込んでも大事なからうなう。

大工甲　へい、これをば二枚瓦と申しまする。あの（ト船の下手を指さし爲つゝ）お花表のやうなものが媽公とかいうて、船玉さまを祀るためのものぢやさうにござります。これが沖へ出りや、御所がまるごと浮び出いたやうでもござりませうわい。

權平太　さうもあらう、さうもあらう。

ト此うち船のうしろより、更に一人の北條の郎黨、佐越の次郎(三十位)烏帽子、直垂、腰刀にて、船大工乙(三十五六)烏帽子、袴と話しながら、中央へ廻りいで、前の二人と一しよになる。

次郎　大場どの、そこもとの御檢分も濟みましたかな?

權平太　濟みました。(大工らに向ひ)兩人とも大儀であつた。もう歸つてよいぞ。

大工甲　へい〳〵。さやうなら、お二人さま。

大工乙　これで御免を蒙りまする。御機嫌よういらせられませ。

ト大工甲、乙、めい〳〵作事小屋の一隅から大工道具を取り出して來て、それを持ちて、下手へ入る。殘つた二人は四邊を見廻し、思入あつて、ずつと傍へ寄り

權平太　いかさま、噂の通りでござる。これならば、どんな荒海でも乘切られませう。又、軍兵の二百人位ゐは乘込めませう。左右とも、艫にも、箭眼らしい堅固な格子が設けられ、艫も、船首も、あれ、あの如く、まるで城櫓のやうでござる。兵糧倉かとも存ぜらるゝ構へもござるて。

次郎　いよ〳〵以て、深見どのゝ推量通りでござらう。

權平太　併しながら(ト一段聲をひそめて)世には似寄つた事の出來いたすものでござるなう。前將軍家も、御晩年には、北條家を憎ませられ、比企ノ能員どのと謀じ合せて御謀反のおもくろみ。當將軍家にも此御陰謀、いづれも御主君をけぶつさう思し召されての事でござる。

次郎　(うなづきて)此上は、ともかくも此通りを主君へ申しあげておいて、御沙汰を待ちませう。只今の話では、程なくお船おろしの御模樣。(ト一寸思入あつて)事によつたら、成るたけ手早く……

トこなし。次郎うなづきて、

次郎　今夜にもやりますか?

權平太　お下知次第でござるが、今の内ならば、作事小屋に木の切れ、鉋屑なども夥しうござるゆゑ、不慮の失火らしくもてなし……

ト兩人ともに、あとは無言にて、船を燒いてしまはうといふ密談のこなし。此以前、前の場の狂女、先刻の通り幣の附いたる篠の枝を手に持ち、やはり髮を振亂し、しどけなき姿にて、上手の岨蔭からふら〳〵と出で來り、船の手前の足場を攀ぢて、する〳〵と船首へ登ることおりて、其最も高く聳えたる處に突立ちて、下を見おろし、じつと二人の問答を聞いてをり、此時だしぬけに、陽氣な聲にて

狂女　あはゝゝゝゝ!

と笑ふ。擂平太、次郎の二人はびつくり敗亡して、覺えず下手へ一さんに逃げかけたが、忽ち我に返り、立ちどまり、めい〳〵腰刀に手を掛けて、きつと船の上を見込む。ト狂女は、持つてゐた笹の枝を二人の頭上に拂げおろしながら、一聲高く叫び、身をひるがへして船の下手へと馳けおりて行き、忽ち見えなくなる。

二人は、これを見て拍子拔けのした思入。

次郎　あゝ！　例の氣ちがひか？

擂平太　何の事だ！

ト二人顏を見合せて、苦笑ひをして、

次郎　ともかくもお知らせ申すことにいたさう。

擂平太　さやういたさう。

ト二人は下手へ入る。あと暫くは浪の音ばかり聞えてゐる。

ト唐船のうしろから一人の旅僧、鼠色の服の上に墨染の衣を着て、笠をかぶり、手に錫杖を持ちて、しづかに砂地の中央へと廻り出て、じつと二人の後ろ影を見送りつゝ、錫杖を我肩にもたせかけておいて、笠を脱ぎかける。此以前、同じく船のうしろから、先刻の狂女、そろり〳〵と窺ひいで、旅僧の擧動を不思議さうに見てかり、だん〳〵近づき、すぐ後ろで腹這ひになりて摺り寄り、僧の袖の下から、ちやうど今笠を取らうとする顏を見上げる。

旅僧は年の頃三十位。日に燒けてはゐるが、人品のよき顏だち。これは故和田義盛の二男朝盛入道實阿彌陀佛なのである。實阿彌が笠を取ると、狂女はだしぬけに

狂女　あはゝゝゝゝ！

ト如何にも陽氣に、聲高く笑ふ。さすがに僧も驚いたが、少しも動ぜず、すぐに、逃げかゝる狂女の襟上を取つておさへて、波の上に落ちかゝつてゐる月の光りで顏を見て「あゝ氣ちがひか！」といふ思入。頻りに逃げようとして踠くのをおさへたまゝ、尙ほじつと向うを見て何事か考へてゐる。

風が急に落ちて來て、岩に強く打寄せる浪の音が一きは高く聞える。

——幕——

第二幕

第一場　鎌倉御所寢殿

正面（平舞臺）五間の間は、御所の寢殿。正面は織物の緣附きたる極彩色の畫をかいたる襖。上手、下手共に廣庇（入側）を隔てゝ高欄附の廣緣を折廻したる心に

て、端々には蔀格子、其眞中には翠簾。翠簾は、上下ともに高く捲上げありて、そこより上下の對の屋の方へ通ふ心。

序幕よりは四五日の後。陰曆七月十日頃の午後。

こゝに、上手に臨時の執權代理たる前の大膳太夫大江の廣元入道覺阿（七十歲）褐の長直垂の上に袈裟を掛けて住ひ、下手に村橋の局、下げ髮、小袿にて住ひ、談話なかばの體。

覺阿　いや、其心づかひお察し申す。實は、其以前、一旦御猶子と定まらせられた時分は、まだやつとお六歲であらせられたのぢやが、其折にさへわれらに向はせられて「では、おれは、此次ぎには將軍になるのぢやな」、と念を押させられたには、われらほと〳〵我を折り申した。やがて其儀はお沙汰やみとなり、三井寺へ上らせられて後も、猛しいお振舞は止ませられぬとの御消息を聞くたびに、內々心痛のいたしをつたに、まづ以て滯りなく、此たびのめでたき御落飾、御同前に悅ばしい儀でござる。

村橋　お式が濟みまする間際までは、お飾りをおろさせますのが、物體ないやら、お痛はしいやら、只なさけなく、淚に搔暮れてをりましたが、見かはすばかりお立派な御法體をば見あげまして、きのふの歎きはけふの喜びにござりまする。嘸かし尼公さまにも、御安堵遊ばされたでござりませう。

覺阿　御安堵といへば、更に一つの御心勞は、例の將軍家御渡唐の一條。御母公の御異見も、我々共一同の諫爭も、更にお聽入なく、いよ〳〵一昨日、既にお船おろしとまで運んだる處、百數十人の筋力を以てしても、不思議に船臍を離れず、餘儀なく、其日は其まゝに御中止なされ、今ゞ日改めて人夫を增し、是非とも海上に浮べさせられんず御結構と承はつたが、さて〳〵困つた儀でござるて。

ト此時上手の廊下を渡りて、尼御臺（六十一歲）先きに、公曉禪師、天台宗の僧衣を着し、附いて出で、其後より女童二人、尼公と公曉の褥を携へて從ひ、徐かに寢殿內に入り來る。覺阿、村橋は席を改め、上手と下手とによろしく住へば、尼御臺は眞中やゝ上手に、公曉は其やゝ下手に住ふ。

尼御臺　入道どの、聽いて下され、居は志しを移すとやらいひますが、心持で、同じ居處が變つたやうにも見ゆることのある證據は、和子の法體すがたの尊さに、釣殿から見る我庭の風情、四方の山々の風姿までが、けふは例になう珍らしうも麗しうも見えました。それのみならず、今がた、あの中島の橋の上で、人の世を鱗族に喩へての和子の法談。經文からの引事といひ、譬言といひ、ほんに

一廉世に聞えた知識といふても恥しからぬ程の學問、識見。ほとほと感心しましたわいなう。

公曉　そのやうにおつしやりますと、恥しうてなりませぬ。つい此間までは、どのやうに叱られても、學問をする氣にはなれず、慚つてばかりをりましたが、村橋はじめ一同の者の異見に、搗てゝ加へて師の御坊の御教訓。「鶴が岡八幡の別當といへば、關東では第一の僧職ぢや。權化の活き佛とも崇められ、下萬民の身の掟ともなるべきぢやに、其振舞は何事ぢや？　和子は京師にござつたから、見聞したこともあらう。なさけないことぢやが、今は佛法の末世ぢや。名に高い四大寺の僧徒さへも、ひたすら官位や顯榮にあこがれて、佛の道には遠ざかり、學問はせず、戒行は守らず、慈悲忍辱を第一とせねばならぬ身が、常に衣の下に腹卷して、いざといへば兵仗取つて、佛弟子互ひに血を流す。淺ましいことぢや。こなたは、よくよく物の道理を考へ、我身は下萬民の鑑ぢやと思うて、身を愼めい」とのお諭し。長い間の誤りを、やつと昨日けふ覺りました。

覺阿　義理明白な其お言葉。先頃お目にかゝりました時分とは、大きな相違。入道、感じ入りましてござる。

村橋　まことに、お生れ變り遊ばしたかと存ぜられまする程の御殊勝さ。此中は、日每々々の御讀經、御戒行の其上に、傳聞りますれば、夜分も大概、一番鷄の啼く頃まで、御書見なされてゞござりますげな。

公曉　あゝこれ、要もないことを。祖母上が又お氣つかひ遊ばされる。

尼御臺　ほんに、此やうな嬉しいことはござらぬ。したが、もう程なく未さがり。さぞ阿闍梨が待ちかねてゞあらう。村橋、さ、禪師どのをば。

村橋　はッ。畏りましてござりまする。では、禪師さま、お暇乞を遊ばしまして。

公曉　祖母上さま、それでは今日は、これでお暇仕りまする。

尼御臺　いづれ、明日にも又、逢ひませう。……

　トこれにて公曉會釋して席を立つ。

あ、これ、學問も大切ぢやが、必ず無理をしやるまいぞ。

公曉　ハッ。かしこまりました。

　ト村橋先きに立ちて案内し、公曉と共に下手の廊下を渡りて入る。尼公は其後影をじつと見送つてゐる。此間覺阿入道は、何やら思案の思入。尼公は嬉しげに覺阿を見返りて

尼御臺　入道との、改心しての落飾とは聞きましたが、あれほどまでに柔順に、温厚しうならうとは思ひ設けてゐませなんだ。ほんに、案じるよりもでござるなう。

覺阿　先づ以て御安心。祝着至極に存じまする。

尼御臺　此方は、まづこれで落着きましたが、心がゝりには、あの唐船の一條でござる。きのふも、事にかこつけ、再び村橋をば名越御所へ差遣はし、それとなう樣子を探らせましたが、何等別條もないとの事。さればとて、此たびの渡海をば、彼の「前生を醫王山の長老云々」といふ夢想を信じての事とのみも受取りがたい。時も時、例の結城朝光が補任一條の行違ひこのかた、將軍家と執權義時との間柄面白からずといふ噂の立つた折柄とて、何か將軍家に、不思議の企圖があるやにも言ひ觸らすげに聞き及びました。義時は所務にて、いまだに引籠り中の事でもあり、かた〴〵、ようせぬと、此噂にどんな花實が結ぶまいものでもなく、痛う心にかゝりまする。よもやとは思へども、前將軍賴家をば、あの比企能員が教唆し、謀反を企てさせし前例もあることなれば、油斷はならず。……入道どの、此事に附いての所存をば、どうぞ腹藏なう聞かせて下され。

覺阿　はツ。成る程、御新造の唐船の儀に附きましては、或ひは種々けしからぬ事共を申し觸らす輩もござるやに承はり及びましたなれど、何がさて、將軍家に限り、決してさやうな粗忽の御ン企てなど遊ばされう筈はございませぬ。愚存によりますれば、これは只、例の風雅のお嗜好より、宋國の文物を深くも愛で喜ばせられまする折柄、彼の陳和卿が御前生は醫王山の長老云々と不思議の儀を申し出でましたる爲、いよ〳〵御景慕の念が募り、遂に御渡海をばおぼし立たれましたに過ぎますまいかと存じまする。現に、名越の資御殿に、ことしお建添へ遊ばされた一構へは、いまだ拜觀はいたしませぬが、表がかりから、內のお飾り、お器具、お調度の末までも、專ら唐風を學ばせられたお物數奇とやら承はりをります。それこれ、思ひ合せますれば、これは只異國ぶりを御一覽遊ばしたさのお思ひ立に過ぎないやうに存ぜられまする。とは申せ、御意の如く、折あしく執權相州は引籠り中、かてゝ加へて、梟、和田の殘黨なぞが諸所に潜伏し、隙もあらば乘せんと窺ひ居るやに聞えまする折柄なれば、將軍家の御外遊は、民心動搖のもとゐ、天下の亂端とも存ぜられまする。此儀は、達つてお留めあらせらるゝが宜しうござる。我々が申せばこそたれ、上お口づから改めて御異見あらば、御孝心深き將軍家ゆゑ、必ずおとゞまり遊ばされませう。なれば、此儀には、強ちお懸念にも及びますまいが、それよりも聊か心がゝりに存ぜられまするは、禪師君のお上でござる。

尼御臺　禪師とは公曉の事でござるか?

覺阿　はツ。（ト頭をさげて思入あつて）餘りに手の裏を

返すが如き御殊勝さが、中々に心元なう存ぜられまする。一旦御猶子にならせられた上にての御出家ゆゑ、一段と御未練が深うもござらうに、生得御發明なればこそ、御ン父上はじめ御兄弟お二方までも御横死の事悉く御承知にて、つい此間までは、深く當將軍家をお怨みにおぼしめさるゝやに承はりをりました。最前お見受け申す所、お言葉は御殊勝なれど、何となう殺氣を帶ばせられた御眼中。（トいひて、しばらく間をおき、思入あつて）やはり、あの君は、以前の通り、京師に留めおかせらるゝが、双方のお爲かと存ぜられまする。

ト休み〳〵徐かに、尼公の氣をかねつゝ言ふ。此間尼公は大分不興げの體であつたが、やがて氣を變へて、靜かに、冷かに

尼御臺　それはちと、取越し苦勞ではござるまいかの？あの目のきつさは、爭はれぬ鎭西八郎どのゝ血統のせゐであらう。又齒に衣きせず、たれが憎いの、彼れが怨めしいのと口外するは、幼少からの持前。癇症も、無遠慮も、あの賴家をば生き寫しの我儘。子供心の正直と見るのがお當然。……

トいひかけて暫く言葉をとぎらせ、思入あつて

あれを京師から呼び戻したのを、わらはがお愛着ゆゑとのみ思ふ者もありげなれど、まことは、あゝして京師に手離しておいたなら、いつまたあの一幡や千壽のやうに、野心のともがらに煽てられ、守立てられて、其さきぞへとなり、……どんな淺ましい最期を……

トいひかけて、又少しく言葉をとぎらせ

せめて、あれ一人なりと……

トいひさし、俄に感動したといふ風であつたが、すぐに自ら制して、また落着いた調子に戻つて

どうか滿足に人と爲らせたいと思ふばかりでござる。……したが、只今の心ぞへは、ゆめ〳〵おろそかには聞きませぬ。必ず油斷なう氣を附けませうわいなう。

トいひ了り、やがてさりげなく横を向きて窃かに涙を拭ふらしい、入道もわざとさしうつむきて、目をそらしてゐる。

——幕——

第二場　名越濱御殿

正面は名越の濱御殿の別棟にて、小山の東の端へさしいでゝゐる一構への心にて、上手寄に少し斜に、三間四方（常足）に、法隆寺の夢殿の樣式に更に唐風を加味したる六角形の一堂。鎌倉時代の建物としては、全く破格違例の建造物。堂内は、すべて磚を敷詰めたれど、處々に御座疊并びに圓座の設けあり。四方とも折廻し

て同じく磚を敷詰たる入側、石の高欄附、土臺には石を疊み、正面にも左右の側面にも、同じく石の高欄附きたる石の階段。

上手は、同じく磚を敷詰めたる廊下を渡りて正殿の方へ通ずる心にて、上手の奥に純然たる寢殿造りの一端見え、そこの妻戸を開閉して人物出入することあり。

正面の奥及び下手の奥は、此小山の極端の心にて、枝振面白き磯馴ひよろ松七八本越しに、遙かに由比が濱の白帆を浮べたる地平線と白雲を漂はせたる青空だけが見える。下手のやゝ前寄には濱邊への降り口ありて、こゝより人物屢〻出入する。上手の舞臺端は、山の裾と簇り生えるひよろ松とにて見切られ、下手もほゞ同樣。

前の場と同日。ほゞ同時刻。

こゝに下手の濱邊への降り口より奥の處に、若き侍女甲乙二人、下げ髮・小袿姿にて後ろ向きに立ちて、濱邊の方を見おろしてゐる。堂上、下手のやゝ奥、御座疊近くには實朝の御臺所(二十二三)下げ髮、小袿、茜袴にて、柱によりて立ち、同じく濱の方を見てゐる體。其下手、側面の石の階段の下には局綸の浦(三十位)下げ髮、小袿にて立つてをり、同じく濱の方を見てゐる。遠くで木遣りのやうな大勢の掛け聲が、或ひは高く、或ひは低く、聞える。

綸の浦　これ〳〵、ちつとは動きさうに見えるかいの？

侍女甲　(ふりかへりて) いえ〳〵、まだちつとも動きませぬ。

侍女乙　(向う向きのまゝで) あれ〳〵、少しは動きましたやうでござります。

侍女甲　(乙に) 何の、まだちつとも動きやしませんわいな。

侍女乙　(力なげに、甲に) あれほど大勢の人の力で、どうしてマア動きませんのでござりませうなア。……おゝ、しんど！

ト侍女甲、乙は、草臥れたといふこなしありて松の根がたに休らふ。此以前綸の浦は石の階段を上りて、御臺所のうしろに膝まづき

綸の浦　憚りながら、しばらく御休息遊ばしませ。中々早速には動きさうにもござりませぬ程に。

トこれにて御臺所は徐かに御座疊の上に住ふ。綸の浦は其下手よき處に側座を敷きて住ふ。

御臺所　ほんに、不思議な事もあるものぢやなう。船にもこそよれ、名人陳和卿の手に成つたあの唐船が、どうしてマア浮ばぬのであらうなう。けふは人夫をば二倍にして、上御自身にてお指圖まで遊ばすのに、何の效もないとい

ふのは、不思議なことぢやなう。

ト此うち濱邊の掛け聲斷えなくなる。

綸の浦　はじめから動かずばまだしもでござりますれど、今朝がた御人夫を増させられました間際には、つい二三間も水際へおりたとやら承はりましたに、晝過ぎからは、たんだ二三尺さへも動かぬとは、けぶなことでござりまする。

ト御臺所心配げの思入あつて

御臺所　以前は、何事にも、おほどかであらせられた我夫ぢやに、此春、あの結城朝光を補任のことにて、執權の義時と、つひぞマア例のないお言葉爭ひがあつてこのかた、お氣むづかしうならせられ、政道をも餘所になされて、只奧向にばかり御閑居あそばし、いと痛う御不興げに見えさせられたる折ふし、あの陳和卿が不思議の言上がお氣に叶うて、一旦御機嫌がなほつたものを、又ぞろ此船の事でみけしきわるく、慰め申さうにも取付き穗がなく、心を痛めてをつたところ、先夜、圖らずも久かたぶりにて、つい此間京師表から下つたとて、和田入道の參入、其夜は夜もすがらお物がたり。どうやらマア少しはお心がお慰みなされたやうぢや。

綸の浦　では、あのお方が和田左衛門の尉さまの御二男で、アノ御謀反の時に御出家なされました朝盛さまとやらでござりますか？

御臺所　あい。今は實阿彌陀佛と名乘つて、もう久しう京師ずまひ。幼少から我君のお氣に入り。お文通だけは、つひぞ中絶れたことがないとやら聞きました。

ト此以前、侍女甲、乙は又立上つて頻りに濱の方を見おろしてゐたが、此時戻つて來て

侍女甲　申しあげまする。御休息と見えまして、人夫一同陸の方へ引上げました。

侍女乙　上樣は、侍童達にお太刀をばお持たせ遊ばし、宮阿彌どのと御一しよに、如何にも御不興さうに、濱打際をお歩み遊ばされてござります。

御臺所　まア心がゝりなことぢや。……綸の浦、そなた、御様子をば見て來てたもれ。

綸の浦　かしこまりました。

ト綸の浦は御臺所に會釋して、石の階段をおり、下手の降り口よりおりて行く。侍女甲、乙は石の階段を上りて、下手によろしく住ふ。

此時、上手の廊下を渡りて、老女日の岡（六十以上）下げ髪、小袿にて出で來り、堂内に入りて御臺所に會釋し、よろしく圓座の上に住ふ。

御臺所　おゝ、日の岡か？　此中は不加減なやと聞きましたが、もうおこたりましたかいの？

日の岡　ありがたい御意にござりまする。もはや常に復しましてござりまする。……さて、今ン日は、ちと折入つて申しあげねばなりませぬ儀がござまりして……

　ト言ひかけて侍女へ思入。御臺所察して、侍女らを見返り

御臺所　用があらば呼びませう。そちたちは、暫くあちらへ。

侍女等　ハア。

　ト侍女甲、乙は上手の廊下を渡りて入る。

御臺所　折入つて話といふは？

日の岡　餘の儀でもござりませぬ。やはり此たびの御渡海に……（ト四方へこなしあつて）附きましてゞござりますが、此儀に附きまして、先頃以來、世上にてはいろいろの取沙汰、けしからぬ事を申し觸らす者もござりまする。御前さまには、もはやお聞き及びにござりまするか？

御臺所　けしからぬことゝは？

日の岡　噂によりますれば、上樣には、豫て仙洞御所とお謀じ合せの儀がござりまして、不日事を擧げさせられまする御結構。されば、彼の御渡海云々は、畢竟只一時當の敵の目をくらまし、油斷さするための御計略に過ぎぬなぞと申し傳へをりまする。

御臺所　ま、思ひもよらぬ噂！　して其當の敵といふのは？

日の岡　執權相模守どのをお憎しみ遊ばされてのお企ちやと申しまする。

　トこれにて御臺所思案の思入よろしくありて

御臺所　さういへば、此春このかた、相州は所勞をいひたて、今以て出仕の模樣なく、又我君よりも、つひぞ只一度の御見舞をこへも下されたことが無い。とはいへ、義時は、切つても切れぬ尼御臺のお骨肉ゆゑ、どう考へても、さうしたお企なぞのあり得よう筈はない。

日の岡　さ、たれしもさうは存じまするものゝ、昨夜はからず其風說の種とも證據ともなりましたことを承はりました。これは、御前は、とうにお聞及びの儀かとも存じまする。すなはち（ト聲をひそめて）たしか三年も前のお事とやら、仙洞御所からお歌合せの一卷を下しおかれました折に、其お返しごとに、「大君の勅をかしこみ父母に、心はわくとも人にいはめやも。」また「山は裂け海はあせなん世なりとも、君に二心われあらめやも」云々とよませられて、竊かに彼の方ざまへ獻らせられましたのは、取りも直さず仙洞御所への御誓約、御謀反のお企ちぢやなぞと申し觸らしをりまする。とりわけ、昨今は此浮說かしましく、中には、御新造の唐船は、不意に京方の或方ざまを此鎌倉へ迎へ參らせうための御用意ぢやな

ぞと申しまする。さういふ噂が原か、あらぬか、二三日前の宵夜中過、何者かゞあのお船へ放火せんず手配りをいたしましたを、幸ひ和田入道が早くも聞き知り、此事を言上し、人々仰せを承はり、嚴重に見張をいたしましたゆゑ、事なう濟んだとやら承はりました。……御臺さまには、此事をば、どう御判斷遊ばしまする。

ト御臺所暫く思入あつて

御臺所　成る程、其の歌は覺えがある。したが、仙洞御所のお使ひは、いつも見上中納言どの。其お歌の折とても、同じく見上がお取次。もしそれが果して一大事の御誓約でゝもあるならば、わらはなぞにはお祕しもあるべきおやに、あの折何氣なうお聞かせ遊ばしたのを思ひ出せば、さうしたお歌ぢやとも思はれぬが、とにかく、其樣な浮説の立つたは大きな不祥。どうぞして取鎭めたいものぢやなう。

ト心配の思入。

日の岡　今一つ不審なは、あの唐船の動きませぬこと。これにもどうやら、何か仔細がありさうに存ぜられまする。

御臺所　さ、わらはもそれが心がゝりで……

トいひかける、此時下手降り口より局綸の浦登り來りて、すぐに階段を登りて下手に住ひ、會釋する。

おゝ、待ちかねました。

綸の浦　申し上げまする。上樣には、どう遊ばされましてやら、あれから程もなく、人夫には、お暇賜はり、すぐにも御還御遊ばすげに見えましたる處、ひよんな事が起りました。

日の岡　なに、ひよんな事とは？

綸の浦　いつぞやお聞きに達しましたアノ評判の物狂ひが、ちやうど御還御のお伴先きへ、どこからやら、ひよつこりと出て參り、いつもの通り、踊りますやら、歌ひますやら、わけもなう狂ひまするのを、上樣には甚うお興じ遊ばしまして、いつにない麗しい御機嫌にて、程なうこれへ、狂女をばお伴ひ遊ばしまする。

御臺所　又例のお慈悲心からであらう。いつぞや三浦岬でも、孤兒を御覽じて、御自身で御介抱遊ばしたことがある。

綸の浦　いえ／＼、けふのやうな不思議な麗しいみけしきは、つひぞ近ごろお見上げ申したことがござりませぬ。御自身で狂女をお相手に御問答遊ばすのみか、童たちに仰せつけられ、手拍子やら、小唄やらで、さらぬだに狂ひまする物狂ひを、なほと狂はせてお興じ遊ばしてござりまする。

日の岡　それはマアけぶなことぢや。どう遊ばされての御機嫌やら？

ト此うち、綸の浦は聞き耳を立てゝ

綸の浦　あ、もし、人音が聞えまする。お歸り遊ばしたのでござりませう。

ト此時、下手降り口より、將軍實朝（二十六歳）白綾の小袖、狩衣、指貫、立烏帽子にて、太刀を童犬王（十三四）に持たせ先きに立ち、和田朝盛入道實阿彌陀佛（三十位）鼠の服、墨染の衣、其の後に附きて登り來る。日の局と綸の浦とは急ぎ席を離れて、階下に出迎へ、御臺所もまた席を離れて、階上に立ちて迎へ、實朝はすぐに堂内に入りて、上手の御座疊に着坐し、御臺は元の席に、實阿彌は下手の圓座に、其他それぞれよろしく住ふ。

實朝（機嫌よげに）　なう御臺、けふは珍らしいものを見ましたわい。狂人にも、いろいろの差別があつて「陰氣衰ふる者は癲と爲り、陽氣衰ふる者は狂となる」などゝ、豫て物の本で讀んではゐたが、只今觀た物狂ひのやうに、是非もなく、我れを忘れ、思ひ上つて、樂しげに世を經る者とは思ひも及ばなんだ。聞けば、戀人に死別れた深い悲みが原の亂心ぢやといふに、其死別れの辛さをも、わびしさをも、つゆ聊か知らぬげの浮れごゝろ、已れをさる明神の使はしめと思ひ込み、およそ此世の事、心に任せざるはないと信じ、又其戀人は、只今龍宮の主となつて、珊瑚琥珀の臺に坐し、明月の夜毎に彼女を待つゆゑ、いつにても海へさへ行けば、乙姫どのとは相嫁同士ぢやなぞと、世に類ひもなう嬉しげに狂ひをる。餘人はそれを見て嘲り笑ふが、予はけふとなつて、はじめて人の心の作用の不思議さをば知つたわい。（ト思入れあつて）位は人臣を極め、榮華は身に餘ると見ても、思ひは膏火を以て煎らるゝよりも苦しく、憂ひは閉ぢ込めた扃鐍の奧深いよりも深いことがある。

トいひさして、感慨に堪へぬ思入にて向うを見つめてゐる。

和田　仰せではござりますが、あの狂女とても、さすがに、時々は我れに返つて、笑ひもせず、物も申さず、只打ふさいでのみ居りまするこどもあれば、いかにも悲しさうに泣きいだし、聞くも哀れな鄙唄を歌ふこともありげにござりまする。畢竟、悲喜哀歡は綯交うた繩も同樣、生ある間はまぬがれがたく、亂れ果てた性根にも、忘れかぬるものと相見えまする。……

ト此時、ずつと下手にて狂女の唄を歌ふ聲聞える。

あれあれ、あの悲しげな歌聲をお聞き遊ばされませ。あれがやはり、あの狂女の聲でござりまする。

トこれにて實朝思入あつて

實朝　いかさまなう。最前とは……聲も……調子も……

ト此内、悲しげに歌ふ狂女の聲はだん〳〵間近くなりて、其唄一ぱいに、狂女は、下手の登り口より「ハーレ！ヤーレ！」といふ囃子言葉を、如何にも力なげに歌ひつゝ登り來る。其唄

〽エヽエ、けふの日も、エヽエ、暮れエたアれどオ、エヤノサー、エヽエ、わがアとのはア、ヤアレ、まアだ見えぬ。ハーレ！　ヤーレ！

ト狂女は頭髮の前だけを無雜作に角髪のやうに取上げ、後ろの髪はみだりがはしく背に、肩に垂れ、手製と見ゆる金銀貼り烏帽子を戴き、しどけなく引摺りたる一重衣の上に、古び破れたる水干を被て、脊に大きな幣を負ひ、右手には柄に白き幣の付たる大きな柄杓やうの物——形は柄杓なれど、其兩面には銀紙と金紙とを巴形に貼りて、其中央に穴をあけ、打振れば、そこより紅、白、金、銀の小さき紙片の出づるもの——を持ち、胸には鉦を掛け、左の手には撞木を持つてゐる。狂女の後よりは、童猿王（十四五）と侍士二人——狂女を警衛しつゝ附いて來りし體にて——徐かに登り來る。

狂女は、登り了るや否や、急に泣き顔になつて、あわたゞしく庭上を二三度あちこちと駈け廻つたが、トゞ

狂女　あゝ、昏い！　昏い！　どうすべい！　あんとすべい！　どうしたらよかつぺい！　あゝ、どつちらもこつちらも眞ッ昏くなつちまつたゞア！　眞ッ昏くなつちまつたゞア！

ト身もだえして、地上に泣倒れる。これにて犬王及び侍士が立寄りて介抱しようとする。ト手荒く拂ひのくることありて、身をふるはせて慟哭する。實朝これを見やりて

實朝　あゝ、すてゝおけ、すてゝおけ。（トつく〲見て）いかさま、實阿彌が申す通り、時々は憑物が離るゝと見ゆるわい。あゝ、憫然なことぢや。何とかして慰めてやりたいものぢや。こりや誰れかある？　鼓を持て。鼓でも鳴らいたなら、大かた又、最前のやうに、浮立ちをるであらう。

トこれにて猿王心得て、上手の廊下を渡りて入る。此うち御臺はじめ局らは狂女を見てよろしく思入あり。

御臺所　見れば、顔かたちも醜うはないのに、てもマア笑止な！

日の岡　ほんにマア年ばえも、まだやう〳〵十九か二十。ふびんな者でござりまするなア！

ト此時、和田實阿彌、狂女のもだえ歎くのを見かねる

といふ思入ありて、階段を下りて、徐かに狂女の傍に立寄り

和田　こりや〳〵！　泣くな〳〵！　もうよい、もうよい、もはや夜がくわつと明けたわい。どこもかしかも、龍宮のやうに明るうなつたぞよ。さアさ、いつものやうに、龍宮の唄を歌うたがよい。わしが音頭を取つてやらう。さア〳〵、もうよい、もうよい。

ト小兒をあやすやうに慰める。此うちに狂女は泣き止んだが、尙ほ澁面して、悲しさうに、又怨めしさうに、あちこちを見廻してゐる。此時猿王、上手より鼓を持ち來る。

ト實朝見て

實朝　さ、打て〳〵。……

トこれにて猿王、階下に膝まづきて、鼓調べに掛かる。

あ、音頭といへば、（ト御臺所及び局らを見返り）成る程、實阿彌は、在俗の昔は、和田一黨中はおろか、鎌倉中にも竝ぶ者のなかつた舞の上手であつたなう。朝盛の風流。三郞義秀の大力。……あゝあの頃が思ひ出さるゝわい！

御臺所　わらはが初めて其舞ひ振を見ましたのは、小壺の濱の御遊の折でござりました。義秀が大鮫を手取にいたしたのも、あの折でござりましたなア。

實朝　（うなづきながら、實阿彌に）さアさア、實阿彌、音頭々々。（トわらは犬王を見送りて）そちも歌へ〳〵。

トこれにて、犬王かしこまりて、太刀を局綺の浦に渡して階段の上まで進み出てゝ、よろしく住ふ。此內、猿王次第に鼓を打進む。實阿彌は腰の中啓にて拍子を取りつゝ、歌ひはじめる。よき頃に犬王も一しよになりて歌ふ。其唄

〽佛は常に在せども、現ならぬぞ哀れなる。人の音せぬ曉に、ほのかに夢に見えたまふ。

〽大品(ぼん)般若は春の水、罪障氷と解けぬれば、萬法空寂(くじやく)の波立ちて、眞如の岸にぞ打寄する。

「佛は」の唄の末頃より狂女次第に聞き耳を立て、顏の表情が變つて來る。

實朝　實阿彌。ついでに、舞へ〳〵。

トこれにて實阿彌は「大品般若云々」の唄の中頃より立上りて、犬王の唄、猿王の鼓に合せて、中啓を使ひて、徐かに、品よく、今樣まがひの舞を舞ふ。狂女次第に唆かされたる思入にて起ち上り、實阿彌の後ろに

引添うて、おひ／＼舞ひ振に眞似つゝうろつく。されど例のやうには浮き立たぬ體。これを見て、寳阿彌は、犬王、猿王に、宜しく思入にて心得さすることありて、狂女が胸に掛けたる鉦と手に持てる撞木とを取りて、俄に之を叩きつゝ、下の唄を、初めは自ら歌ひ、後には犬王に歌はせて、次第間早に、空也念佛式に面白く踊り廻る。猿王も之に合せて鼓を打つ。

〽海は萬劫龜遊ぶ、蓬萊山をやいたゞける、仙人わらはを鶴に乘せて、太子を迎へて遊ばゞや。

〽遊びをせんとや生れけむ、戯れせんとや生れけむ。遊ぶ子供の聲聞けば、我身さへこそゆるがるれ、

なまうだ／＼／＼！

〽十七八は二度そろか？　枯木に花が咲きそろかよの！

なまうだ／＼／＼！

「十七八は」より、犬王も唄ひながらも一しよになりて、寳阿彌に絡み、姿をかしく踊り廻る。

ト狂女も、例の如く笑ひ顏になりて浮れ出し、これも一しよになりて踊り狂ふ。トド寳阿彌と犬王とを手荒く突きのけ、追ひ拂ひ、一人となり、次の唄を自ら歌ひつゝ、柄杓を振り、寳阿彌が打鳴らす鉦に合せて、紅、白、金、銀の紙片を八方に散亂せしめつゝ、踊り廻る。此うち犬王は元の席に戻り、猿王も鼓の手を止める。

唄　〽龍宮は近いなア、乙姫御が皷打つのが音に聞ゆる。そのつゞみ何と打ちそろ？　とゞろ／＼と六つに打つ。

ト歌ひ了ると、俄に嚴格に威儀をつくろひて

狂女　さア／＼！　淸めは濟んだぞよ、濟んだぞよ、此福祿自在のお柄杓さまで救うて取らす。さア／＼！　おれにくッついてさへ來れば龍宮へ行かゝる。お告げぢやぞ。疑ふな。疑ふな。

トむづかしい顏をして睨め廻したが。又忽ち晴々した笑ひ顏になつて

唄　〽岩屋では蛸踊りそろ。珊瑚島では龜歌ふ。龍宮の波の間で、十八小姫が黄金撒く。其黄金何と撒く？　日本つゞき

と黄金まく。

ト歌ひつゝ、踊りつゝ、柄杓を振り廻しつゝ、忽ち飛ぶが如くに下手へと駈けおりて行く。實阿彌は侍士らへこなし。侍士二人は猿王と共に狂女の後を追うて下手へ入る。

此以前、狂女が踊り狂ふ間に、實朝は、座右の文臺を引寄せて、硯箱を開き、料紙に歌を書く。

實朝　これを御覽ぜ。

ト渡す。

御臺所　（それを受取りて徐かに讀む）「世の中は、鏡に映る影なれや、あるにもあらず、無きにもあらず。」……「うしと見るも、樂しと見るも、鏡なす、人の心の、わざならぬかは。」（ト中音に讀み了りて、實朝に）これは？

ト不審の思入。

實朝　はて、當座の口ずさみぢや。（ト何氣なくいひながら、實阿彌に）やい、實阿彌、おのしの昨夜の法談が、今やう〳〵少しばかり分りかけたわい。成る程、心妄動を離るれば、一切の境界滅し、心妄起すれば、又忽ちに境界生ず。……あの歌を讀んで見い。

和田　はゝア。

ト實阿彌階下へ進む。實朝こなしにて歌を實阿彌に見せよと指圖する。給の浦、御臺所より歌を受取りて實阿彌に渡す。

和田　（受取りて、中音に讀む）「世の中は鏡に映る影なれや、あるにもあらず、無きにもあらず。」……「うしと見るも、樂しと見るも、鏡なす人の心のわざならぬかは。」……まことに、これぞ六塵の境界、窮竟無念の御觀念。

トいひつゝ實朝の面を見上げ、思入ありて、又口の中にて歌を讀み返す。此間實朝は、只じつと向うを見てあり、全く獨語のやうに

實朝　とはいふものゝ（トいひかけて）……

ト歎息する。其聲の何となう哀しげなのに皆々驚きて

皆　え？

ト覺えず實朝の顏を見る。實朝氣をかへて

實朝　狂女といふものは、をかしいものぢやなう！

トさびしく笑ふ。皆々顏を見合せてよろしく思入。

——幕——

第三幕

第一場　由比が濱邊

正面（平舞臺）は一面の砂地、今の豆腐川以北から遠く相模灘を見やりたる由比が濱邊の景。中央より上手の

奥へかけて、やゝ斜に、極ゆるい勾配の砂の小丘。其小丘の向うは、やゝ急勾配に低くなつてゐるらしく、人物が丘を越えると、程なく姿が見えなくなる。隨つて其丘の向うには、やゝ遠く離れて、大きな、幾本かの松が生えてゐるが、幹も中程から下は見えない。砂の丘の手前は、松の幾本も生えてゐる岨の裾で見切られ、人物はしば／＼此裾と丘との間を往來する。砂のだら／＼低になつた波打際には、上手に二艘、又ずつと前（舞臺の中央寄りに）更に一艘、漁船が引上げてある。其中ずつと前の一艘は、今がた引上げたばかりらしく、漁夫甲、乙、丙、三人で、漁具をかたづけたり、取りおろしたりしてゐる。奥の二艘は、すぐ波打際に在る。

正面は、中央から下手へ、ぐつとしやくつて、所謂長汀曲浦式の波打際の景。其波打際のしやくり込んだ部分は下手（舞臺端近く）の藁葺小屋で隱れて見えぬが、下手の奥に、遠く黒く突き出てゐる飯島が崎は其同じ波打際の一部なのである。

大きな磯馴松の蔭に、やゝ斜に上手へ向いて建てられてある右の茅葺小屋は、漁夫の納屋で、前面は切妻形に葺きおろし、其妻下の三角形の部分と奥の側面とだけを古船板で張り、其他は全くの掘立式、柱も貫も丸太を繩で無雜作に縛つて間に合せた明け放し。入口には竹を横たへて古蓆が掛けてあつたのだが、竹がはづれたので蓆がずり落ち、内部がよく見える。内部には、大きな餌籠が三四箇と夥しい太繩と古びた蓑笠などがみだりがはしく投込んである。人物は此納屋の後ろをも通れば、其前をも往來する。又向う（揚幕）からも來る。納屋の下手の手前は、上手と同じく松の生えた岨の裾で見切られてゐる、

時は陰暦八月十六夜。もう月は出てゐる筈なれど、地平線には、斑らに墨を流したやうな亂雲が漂つてゐるので、あたりは薄暗い。

漁夫甲　なアに、不漁だアからつて、かまふことアねえだよ。今夜は大漁祝ひもおんなじだ。待てば甘露の日和ツちふが、ふんとだア。早く行つて、お祝ひ酒にありつくべい。

漁夫乙　初手は二百五十人かゝつたつて、これツぱつちもいごかなかつたつけが、きんによふ、手が變つたら二百人で以て、する／＼といごきアがつたてのは、不思議ぢやアねえか？

漁夫丙　そこが將軍さまの御威光だんべいよ。あんにしろ、めでたくお船おろしが濟んだてんで、おらつちにまでお酒を下さるてのは、有りがていこんだ。さぞ將軍さまも

嬉しかんべい。

漁夫甲　嬉しかんべい。十幾日といふもの、氣イ揉み抜かつしやつた揚句だア。今夜は、あの船の上で、夜通しお月見だッちふが、どうか降らねばいゝがなア。

漁夫丙　ちつと雨げづいたなア。

漁夫甲　いんにや、晴れべいよ。

漁夫乙下手の奥を見やりて

漁夫乙　もうおッぱじまつたと見えて、どうだ、あの篝火は？

漁夫丙　まるで祭りのやうだなア。

ト三人は喋舌りながら、漁具の始末をしてゐる。こゝへ向う（揚幕）より、序幕に出た狂女の母、人を尋ねる思入にて、あくせくと早足に出て來り、すぐに納屋前へ來て漁夫らを見て

母親　もし、もうし！　若しか此邊を年の若い女が、らッちくもねえ姿イして、あたけ廻つちやア居らなかつたゞかね？……おゝ、にしゃ五郎又どんだね！　おらんところの娘を見なさらなかつたかね？

漁夫甲　やゝ、阿母か？　また娘ッ子に突逃げられたかね？

母親　さよでござりやす。（ト泣き聲になりて）きんによふけふは、とりわき劒呑な日でござりやすだアから、人ォ頼んで、ふん縛つて、納屋ン中さ突込めておきやしたゞが、あんとして繩アぶッ切つたゞか、ちつとの間に飛び出しやして、ばつたり行ぎがたが知れやしねえでござりやす。濱邊さ、たしかにおりてッたちふでござりやすけれど、それから先きア、だアれも見知らねえいはつしやりやす。……（と泣きながら）とう〳〵……口癖の……龍宮べい行ぎをつたかも知れやしねえ。……しょんないことになッちまひやした。

トしやくりあげて泣く。

漁夫甲　そいつア氣の毒なこんたね。けんど、まだ宵のうちだアから、海へ入りさうにすりやア、たれかがゐて、目つけさうなもんだ。まアそんなに氣イおとさねえがいい。どこにかゐるべいよ。

漁夫乙　さうだ〳〵。まア〳〵泣きッさんな、泣きッさんな。氣ちげえてものは、存外小才覺の働くもんだから、容易にや怪我アしねえもんだ。にしに捉まるのがうるせえので、どこかの叢に平伏つて、隱ねてゐるかも知んねえ。

母親　さういやア、此間も、木の梢に突登つてゐて、わしらを馬鹿にした事がござりやす。

漁夫乙　あの三本松あたりにゐるかも知んねえ。どうせ歸り路だ。そけいらを同志に搜して見べい。

漁夫甲　ぢや阿母（おつかア）、どうしに來さつせい。まだうッ死んだときまつたわけぢやねえだよ。泣きッさんな。泣きッさんな。

ト三人棄でぜりふにて母親を慰めつゝ、先きに立ち、漁具を持ちて、丘の上手へと歩む。母親は泣く〳〵、その後に附いて、共に三艘の船の艫を巡りて、丘を登り、向うへ降り、やがて見えずなる。トしばらく空舞臺。浪の音。

上手の奥より、納屋の後ろを通りて、北條義時の郎黨大場の權平太、佐越の次郎、其時代風の一種の覆面を、目ばかり殘して、深くかぶり、其上へ烏帽子をかぶり、黑ずんだ色の直垂、袴を着し、腰刀を佩び、うそ〳〵と出て來り、舞臺の中央へ來ると、あたりへこなしあつて

權平太　まだ見えんやうでござるな。

次郎　されば。もう來られさうなもんぢやに。

權平太　（下手の奥を見て）あゝ、あれだ。めざましい篝火だ。甲板にも船側（ふなばた）にも、夥しい唐燈籠（たうとうろう）を掛けられたとやら聞いたが、成る程、まるで星が降りたやうだ。

ト此時遠く、下手の奥から、嚠喨たる雅樂の音色が聞えはじめる。

ト向う（揚幕）より深見の三郎次郎、同じく覆面に烏帽子、黑ずんだ色の直垂、袴、腰刀にて出で來り、一寸此方を透して見て、うなづき、やゝ足早に進みて、小聲にて

深見　御兩所でござるな。

トこれにて、前の二人も透して見て

權平太　深見どのでござるか？

ト三人よろしく四下へこなしあつて、間近く寄りこぞること。

深見　（小聲にて）何事もござらなんだか？

次郎　いや、何も別に。

深見　さて、何もかも手ちがひと相成つて、ほゞお船おろしも濟んだ上は、もはやべん〳〵としてはをられませんぞ。と申して、迂濶に手を下す時は、忽ちお館のお身の上に係はりまする。それゆゑ、先頃も申した通り……

トいひかけて次郎に「四方へ氣を附けよ」とこなし。これにて次郎は上手、下手をあちこちと歩きつゝ見張をする。納屋の中をも覗きて見ることあり。

これは彼（か）の仁（ひと）の手を借りるに如くことはないと存じ、先夜再び別當院を訪ひ、我々が當推量に聊か輪を掛け、只今のうちに禍ひの根を絶たぬときには、どのやうな一大事に及ぶやも圖られぬと、さながら其一大事が既に鼻の先に相迫つてをるかのやうに申して、教唆（たつぷ）し、さて、其

禍ひの根を除いた手は、取りも直さず、一天下の覇權を掌握する手ぢやと、上手に暗示かしておいたれば、勇を恃み、血氣に逸る禪師の事ゆゑ、おそらくは、今夜のお船遊びなぞを好い機會に……

トいひかけて、更に聲をひそめ、耳元に口を寄せて、何事かをさゝやく。此以前、次郎も、見張を了りて、傍近く來てをり、此密話を聞くこと。

次郎　では……

權平太　我々兩人は……

深見（尙ほ小聲にて）仕儀によつては、助太刀をなさい。しかし其身姿では、だれが、どうして、目ざとく認めまいものでもないによつて、……

トいひかけて思案の思入。此時次郎は納屋の方を見返り

次郎　丁度あれに好いものがござる。

ト納屋の方へ進みて、內より蓑笠を二人分取出して來て

幸ひと今宵は雨もよひのやうでもござれば、夜船の漁夫らしく見せかけ……

深見（うなづきて）至極の思ひ附。……が、結城朝光が同伴のことゆゑ、うつかり手は下されませんぞ。（ト更に小聲にて）助太刀とは申せ、成るべくならば、彼の人もろとも……

トいひかけて、あとは耳打。

な。……でござるによつて、彼の人が手を下さぬうちは、決して……御無用でござるぞ。

トあとは思入とこなしにて呑込ませる。

次郎／權平太　心得ましてござる。

ト深見は納屋の前を下手へ、二人は砂の丘を登りて上手の奧へ、蓑笠を手に持ちつゝ、入る。又暫く空舞臺。浪の音。此間、雅樂は、斷えたり續いたりしてゐる。雲がだん／＼動きはじめて、いつの間にか大分高く昇つてゐる月が、時々顏を見せる。

ト納屋の中の大きな餌籠が一個、おのづと轉々と前の方へ轉げ出した。

ト見るうちに、其中から例の狂女が、例の通りの嬉しさうな笑ひ顏をして、そろ／＼蟹が這ひ出すやうにして這ひ出す。けふは角髪風に取りあげた額ひ髮も悉く解けてしまひ、金紙烏帽子や脊中の御幣や水干やは、何處へか落して來たらしく、又柄杓も鉦も持つてはをらぬ。狂女は、這ひ出してしまふと、まるで跳ね上るやうに突立つて、にやりと齒を露出して、前後左右を頻りにきよろ／＼と見廻しながら、忽ち飛ぶやうに、

間近の漁船の傍へ駈け寄り、つと舷に手を掛けて、ひらり船の中へ躍り込んで、すぐに舳先まで駈けおり、そこに突立つて、じつと海の方をながめた。かと思ふ間もなく、例の陽氣な聲て、左の田舍唄を歌ひはじめる。

〽あらになア逢ひたくば、由比が濱邊の小砂利まじりの荒砂もつて來て……

ト此以前、狂女が丁度舷へ手を掛けた時分に、上手の岨の裾に添つて、壺裝束に被衣をかぶつた一人の年若らしい上﨟が、人目を忍ぶ風情て出て來て、最初は下手の奥と向う（揚幕）の方とへばかり目を注いて、トド下手奥の方へ行きかけたが、今狂女が歌ひ出したので、忽ち振返り、被衣をかゝげあげて狂女を見た。これは、女に假裝した公曉なのである。懷ろに忍ばせた小さ刀の欛がちらり見える。ト狂女は、急に身を翻して、舳先から飛びおり

〽春戸の小窓にばら〳〵投げやれ……

ト歌ひながら、其向うの漁船に飛び移り

〽小雨ふるかと……

ト歌ふうちに、ひらり第三の船の舳先をくゞつて、忽ち砂山の裾を巡り

〽出て逢ほぞえ。

ト歌ひつゝ、やがて見えなくなつたが、同時に例のとんきよな笑ひ聲の餘韻だけが、だん〳〵遠くなつて聞える。此以前、公曉は、一度は狂女に氣を取られてゐたが、「春戸の小窓」にと歌ひ出した頃には、もう目を又も下手へ轉じて、あちこち見やりながら、再びそろそろと奥の方へ行きかけた。其途端に、狂女の歌ふ聲が遠くなつたので、ふつと見返り、狂女の姿が忽ち見えなくなつたので、一寸驚いた思入。懸念げに、歩み戻り、三艘の船の艫を足早に巡つて、砂山を駈け登り、向うを見おろし、やがて何物かを見附けたらしく、其まゝそこを駈けおりて、これも姿が見えなくなる。

ト向う（揚幕）より、侍士二人松明を持ちて先きに立ち、實朝は陳和卿（宋人の服裝）及び結城上總の介朝光（四十七歳）とを隨へ、尙ほ後ろには童犬王、猿王附添ひ、出て來り、次ぎの白をいひ〳〵徐かに本舞臺へ來り、一寸立ちどまり、沖の方を詠むること。

陳和卿　折角のお催しでござるのに、折わるい亂雲で、明月が曇りました。殘り多いことでござる。

實朝　いや〳〵、仲秋の無月もまた一興ぢや、しかし風が

出て來たによつて、今に吹き拂ふであらう。

ト下手の奥を見やりて思入ありて

わざ／＼造らせたあの船を、徒らに沙上に朽ち果てさせねばならぬかと、殘念に思うたに、ともかくも、水際まではおりたが、いよ／＼浮ぶか、浮ばぬかは明日にならねば分らぬ。あゝ、船さへも世に有りふれた物の方が、心安いなう！

朝光　今日の模樣では、明日は滯りなく、浮びませう。御安心遊ばされませ。

實朝　どうかさうしたいものぢや。あゝ、面白い景色ぢや。（トいつて、更に沖を詠めてゐたが、急に思ひ出したやうに）御臺はじめ實阿彌らが待ちわびてゐるであらう。

ト松明を持てる侍士へこなし。侍士歩みはじめる。皆皆つゞく。やがて主從は納屋の後ろへと進み入つてしまふ。

少し間をおいて、公曉、倘ほかつぎをかぶつたまゝで、再び砂山の頂きへ姿を現はす。半身びしよぬれになつてゐて頻りに逃げようと踠く狂女をば、其左の小脇に掻い込むやうにして引立てながら、丁度今砂山の上まで登つたのであつたが、ふと實朝主從の後ろ影を認めたらしく、きつと思入。忽ち抱へてゐた狂女を突離し、一さんに砂山を平地へと走りおりた。けれども、實朝主從は、もう大分遠くへ行つてしまつたらしい。

公曉は「あゝ殘念なことをした！」と思入。しばらく躊躇してゐたが、又忽ち決心して、懷ろの小さ刀の目くぎを濕し、再び實朝主從の後を追はんとするかの如く、三四歩、下手の奥を目がけて行きかける。

此以前、狂女は再び砂山のかなたへ駈けおりていつてしまふ。

此時、深見三郎次郎が、又も下手の納屋の前から出て來る。

公曉はちらとそれを見て、急ぎ被衣を深くし、何氣なき振をしても最も手前の漁船の舳先の方へ歩み戻り、月を眺めてゐるかのやうに裝ふ。

ト深見も、同時に公曉に目を附けて、そろ／＼同じ方角へと進む。

公曉は、餘儀なく、第二の船の方へ波打際を傳つて行く。途端に砂山の向うへ先刻の權平太と次郎とが、蓑笠姿にて半身を現はす。此時、公曉は、第二の船の舷に添うて、其艫の方へ廻りかけてゐたが、之を見ると、急に身を飜して、元來し艫蔭へ一さんに走り入つて、忽ちのうちに姿を隱す。

此時、雲が散り盡して月が冴え渡る。

樸平太と次郎とは、つか／＼と砂山をおりて、深見の傍近く走り寄りて、何事か言はうとする。深見は手早く之を制して、尙ほも公曉の後ろ影を見送つてゐる。浪の音、暫く絶えてゐた嚠喨たる雅樂の音色が、又も高々と聞えはじめる。

第二場　唐船の甲板

正面（平舞臺上手寄り五間の間）は、唐船の甲板約三分の一以上、卽ち艫寄りの部分だけを見たる心、手前（舞臺端）も、ずつと奥も左右の舷の心にて、一面に堅固な大格子造りの欄干を取り附けあり。ずつと上手には、方形の櫃飾門とも、異風の花表とも見ゆる巨大なる一種の屛障構の物――所謂媽公――を取附けありて、其附近には笹龍膽の定紋附きたる幕を張り渡し、ずつと上手（約三間の間）には、平甲板より約四尺程高くなりをれる一間半の艫甲板ありて、これにも大格子の欄干を取り附けあり、平甲板よりは左右二ヶ所の階子を攀ぢて登るやうになりをり、更に其艫甲板より第二の階子が架けられありて、更に又約五尺ほども登りたる處に巨大なる艫櫓の聳えをれる體。此艫櫓の平たき、方形の頂きには、胸壁めいた欄干が一面に取附けてある。平甲板より艫甲板に登る左右二ヶ所の階子に挾まれて、巨大なる艫帆柱の腰だけが見え、其頂き近くより吊りおろしてあるらしき夥しき綱具には、種々の色彩の唐風の旗に笹龍膽の紋を染め出したものを幾つとなく結び附けてあり。其附近には上手同樣笹龍膽の紋附きたる幕を張りて、處々引絞りてあり。艫帆柱から約一間程上手には、左右（前と奥）の舷に添うて、よき處に、太き圓柱二本、其二本の間にもやゝ細き圓柱二本、それより上手媽公近くまでの間にも、正面の手前に二本、又奥の方に二本、同じく太き圓柱を立て、唐風に和樣を折衷したる大屋根を設け、蔀格子を釣り、翠簾を捲き上げ、軒下、舷、其他便宜の處々に幾つともなく、唐風の美しき金燈籠を吊してあり。人物は、すべて上手媽公の下に張り渡したる幕をくゞり、媽公の中央を出入する。媽公の向うは、又一段低くなりをれる心にて人物は、いつも、幕をくゞると共に半身だけを現はすことになる。階下を上下するのである。

正面の奥は、遙かに相模灘を見やりたる由比が濱邊の景色なのだが、沖の地平線ばかりが見えて、陸は少しも見えず。勿論、波打際などは見えない。十六夜の月は、旣に高く昇り、散り雲もないのだが、正面は西の方に當る故、海波が蒼茫と月夜らしく煙つてゐるばかりで、月其物は見えない。星があちこちに燦々してゐ

て、所謂星月夜の風情がいちじろしい。嚠喨たる雅樂は、わざと極低調に奏でられ、時々休むこともある。

こゝに平甲板の中央よき處に御座疊が据ゑてあつて、そこに實朝すまひ、其うしろに犬王、猿王、又其少し上手前寄りに又一つ御座疊、そこに御臺所、其うしろに局日の岡、同じく綸の浦。實朝の下手、やゝ奥にさがりて實阿彌、其少し下手、前の方に結城朝光、又ずつと前、――實朝と實阿彌との眞中邊に――陳和卿。右一同の下手、圓柱外に侍士二人、侍女甲乙丙三人は、盃盤の間に周旋して、今正に宴闌なる體。侍女らは、ずつと前、御臺所よりは上手に當る所にすまふ。實朝の座右にも、陳和卿の座右にも文臺が据ゑており、懐紙、色紙、硯箱等が載せてある。

朝光は、手に色紙を持ちて、陳和卿が作りたる詩を讀み居り、御臺所も、色紙を手に取りて、實朝の作りたる歌を、今丁度讀まんとしてゐる體。

時刻は、前の場のやゝ一時間ほど後の心。

御臺所 （色紙をながめつゝ）うつゝとも、夢とも知らぬ世にしあれば、有りとて有りと頼むべきかは。」

ト中音に讀み了りて、局らと顔を見合せ、懸念の思入あつて

まアこれは！ こよひの明月を御賞美のお歌かと存じましたに。……往ぬる日のお歌といひ、此お歌といひ……

トいひかけて、日の岡へ色紙を渡すこと。朝光、それを取做すやうに

朝光 いや、其お歌は和卿が最前申上げし舊時の作とやらの意をば酌ませられての、當座のおすさみかと存せられまする。和卿のは、五十六言、お歌は、只僅かに三十一文字に過ぎませねど、歸する所の趣旨は同じく、結句、文學に疎き私共に取りましては、和歌の方が解し易く、其お歌を承はりて、はじめて詩の眞意をも會得いたしますることにござりまする。

實朝 いや／＼。行き着く處は一つであつても、詩と歌とでは、其道中に、いはゞ數里の隔てがある。三十一文字では、迚も絶句ほどの感慨さへも叙べられぬわい。予も久しう此道を嗜好んで見たが、所詮、和歌は、女子か、隱遁者か、大宮人かの假初の玩びや。大丈夫の心を慰むる料にはならん。（ト歎息しつゝ）それはさうと、和卿が最前の作を讀むにつけて、思ひ出すは……「平生生と死と夢と。三者劣優無し」といふ蘇東坡の句ぢや。いかさま、天地をば只一軒の家ぢやとも思うたら、東西南北もなく、故郷も、他國もなく、生くるも、死ぬるも、夢を見るも、すべて同じいとも思はれて、悲しいも嬉し

いもないであらう。

陳和卿　お言葉ではござるが、畢竟、詩は志しをいふに過ぎませぬゆゑ、常に悟り盡したやうなことを歌うてをりましたが蘇軾とても、おそらく中年までは、やはり讒誣の恨みや遷謫の悲みを忘れかねて、ともすれば酒盃の力を借り、憂ひをば掃うてゐたらしうござる。所詮、彼れのやうな不羈の大才は他力に寄り縋ることをも厭ひますれば、又自ら欺くにも忍びかねまするゆゑ、身心悉く脱落して全くの超絶境に達しまするまでは、彼れとても彼の樂天同樣、とかく酒盃に親んで「醉うて陶々たり」を歌うてゐたでがなござりませう。

實朝　あゝ、併しながら、醉ふことの出來た彼れは幸福であつたわい！　予は曾そまだ醉うといふことの味を知らぬ。

ト憮然としたる思入にて、獨語のやうにいふ。局らは顏を見合せて、氣の毒げの思入。

日の局　御前の酒を召しあがりませぬのは、御生得でいらせられまする。結句、お身體の爲には重疊の御ヾ儀かと存じまする。

實朝　いや、酒ばかりの事ではない。世上には、けふ見たアノ狂女のやうに、喜びに醉うて我れを忘れ、是非を忘れ、浮れ興じて、此世を送る者もあるのぢや。或ひは又、小兒の戲れ同然の遊びにさへ醉うて、樂しう、面白う暮らしをる者もあるのぢや。

とこれも獨語のやうにいふ。

和田　成る程、さう仰せられますれば、京師人などの月、雪、花に浮れ、或ひは管絃、舞樂、或ひは猿樂、田樂、今樣、白拍子、其他、世の藝能の有る限りを興じ玩びまする有樣は、一かどの醉態とも相見えまする。

朝光　生來武骨なるそれがしの如きは、もとより風雅の道なんどに醉うた覺えとてござりませねども、其以前、戰場に臨みましては、屢〻敵身方の腥き血汐の臭ひに、恰も醉うたやうな心持に相成つたことがござりまする。あれらは、合戰に醉うたと申さうか？　殺伐に醉うたと申さうか？　げに、上の仰せの如く、醉ふは酒ばかりではござりませぬわい。

實朝　何にでも、醉ふことの出來る者は幸福ぢや。

陳和卿　所謂三昧に入ると申すのは、物の醉ひの至極した境ひでござる。

ト何氣なげにいふ。

實朝　いや、話がついむづかしうなつたわい。御臺は嘸退屈なされたであらう。宵とはちがひ、雲が散つて、松間の明月は、また一しほの風情であらう。われらにはおかまひなく、あまり深けぬうちに濱邊の景色を詠めながら、

局らを伴うて、お歸りあれ。われらは、此人々を相手に、今暫らくの間、このまゝ、和漢、今昔の物語がしてゐたい。……和卿も老年のことぢや。遠慮には及ばぬ。心任せに退席しやれ。

トこれにて御臺所は局らへ思入ありて、實朝に向ひ

御臺所　さやうなれば、おゆるされませ。お先きへ退ッ出まする。

日の岡　では、私共一同の者も……

江の浦　御臺所さまのお伴を仕りまして……

實朝　おゝ、往け〳〵。（ト侍士に向ひて）そちたちは警護いたせ。

侍士等　はゝア。

ト陳和卿も形を改めて

陳和卿　しからば手前も、これにて御免を蒙りまする。

實朝　大儀であつた。明日また會はうぞ。

トこれにて、御臺、局、侍女らは上手の幕をかゝげて、媽公の彼方へ降りてゆく。つゞいて陳和卿も入る。侍士二人もつゞいて降りてゆく。

ト實朝は更に少しく寛ぎたる體にて

實朝　血汐に醉ふと申した朝光の今の一言は、深ふ予の心に沁みたわい。さういへば、彼の唐土周末の戰亂、漢楚、呉魏蜀の爭覇、南北兩朝の紛爭、近くば隋唐の興亡、いづれも皆人間の血に醉うた餘りの狂暴沙汰ぢや。いかさま、醉へばこそ親子骨肉の見さかひもない。恩愛も、尊卑も、道理不道理もない。我國の保元、平治の昔、近くば平家滅亡の跡を思ふにつけても、血に醉うた人間の怖しさ、淺ましさが想ひやらるゝ！　あゝ、いつの世となつたら、此狂亂めいた亂醉が醒め果つることであらう？　なう、實阿彌、諸佛の靈妙な教へも、此亂醉を醒ますことは出來ぬか？　八萬何千とやらの有難い經文も、此亂醉を醒ます呪文とはならぬか？　あゝ、人間は、いつまでも血に醉はうとするのぢや！

和田　殺生を五戒の第一とも立てられました大慈悲の佛門に身を置き、上下萬人の師とも、鑑とも見做されまするアノ南都北嶺の法師らさへ、修羅鬪諍を專らといたしまする今ッ日でござります。彼の栂の尾の老上人は、若し今時の佛法が、まことの佛道であるならば、世に佛法ほどあしい教へはないと申されたとやら承はりましたが、まことに其通りでござりまする。さらぬだに今の世の凡夫は、其機根日に衰へ、六根常に粗動して、精進觀法に得堪へませねば、迚もむね〳〵しいアノ天台の教旨なぞでは、世を救ふことは思ひも寄りませぬ。彼の黒谷の上人が、空也上人の顰みに倣うて、他力易行の念佛宗を唱へはじめられたには、深い仔細のあることゝ存じまする。

實朝　あゝ、せめておのしが信仰する其念佛宗とやらでも、そのまゝ受け納れることが出來たならばなア！　さなくば、祖父や叔父たちや父、兄のやうに、血に醉ふことでも出來たならば……

　トいひかけて、じつと向うを見て、獨語のやうに

あゝ、幾たびも機會はあつたに！……

　ト過去を追懐するらしく、歎息して

今とてもまだ機會はあるが……

　トこれにて、朝光、實阿彌思はず實朝の顏を見る。實朝忽ち氣を變へて

其機會はたび／＼あるが、……いまだ道に入る機縁が熟せぬと見えて、出家しようといふ氣にもなれぬ。……ああ、つい話が滅入つてしまつた。これからはまた朝光の昔話でも聞かう。父上二位どのゝ御行實について、此間聞いたアノ殘りを聞かしてくれ。

　ト此時、上手より侍士一人出で來り

侍士　申し上げます。只今尼御臺さまよりのお使者でござりまして、上總の介さまを御急用でお召しにござりまする。

朝光　なに、手前を急にお召しにござるとな？

侍士　はツ、さやうにござりまする。

朝光　心得申した。只今すぐさま參上と御ン申し下され。……御前、憚りながら、お聞かせ遊ばされたやうの儀にござりますれば。

實朝　何事かは知らぬが、お待ちかねであらう。早う參つたがよい。

朝光　御免下されませう。

　ト朝光、侍士と共に去る。

實朝、猿王へこなしにて「盃盤を撤せしめよ」と命ずる。猿王上手へ入る。やがて侍士二人、猿王と共に入來り、杯盤を撤しつゝ、共に再び上手へ入る。席には實朝、實阿彌、犬王三人だけ殘る。

實朝　なう、實阿彌、おのしの父や兄が死んでしまうてからは、おれが、ほゞ胸襟を開いて語ることの出來る者は、此鎌倉の營中では、あの朝光の外にはないわい。莊司重忠の爲人は、おれの幼少であつたゆゑ、善うは覺えてはをらんが、恐らく朝光は、其武勇と正直とに於ては、彼れに匹敵し、思慮に於ては、彼れに優り、先考の殊恩を忘れぬ誠忠に至つては、決しておのしの亡父にも劣らぬ者ぢやに、先年の輕擧合期せずして、あの朝光までも敵にしたのは、義盛が一世の不覺であつたなう。返す／＼殘念なことをしたなう。二つには、あの三浦の義村の如き、煮え切らぬ不覺人を一味としたのが手ぬかりであつた。……が、それも、これも、先刻いうた通り、血に醉ふこ

との出來ぬおれの心の罪かも知れぬ。……と思うても、やつぱり其氣にはなれぬわい。

ト歎息の思入。實阿彌は、此述懷の間に、覺えずも落涙して、平伏してゐたが、此時顏をあげて

和田　かたじけない其お言葉を、草葉の蔭で承りましたなら、亡き父、兄どもが、さぞかし感涙にむせびまするでござりませう。（といひつゝ涙を拭ひつゝ）成るべくは、刃に衂らず、無辜を傷けず、公明正大なる手段を以て、撥亂反正の大功を成ぜさせられたい御本心を、豫て承はりをりながら、私の意趣を忍びかねて、粗忽に事を起し、お膝元を騷がし、忽ち滅亡を招きましたは、父、兄共の自業自得でござりまするのに、彼等死して後は、共に語るに足る者、上總の介どの只一人と迄仰せ下されまする御高恩、有りがた涙に掻暮れまするばかりでござりまする。……しかしながら、昨夜も、愚意を申し述べました通り、御出船に先きだち、一應は御內意を假の執權陸奧守にお洩し遊ばされては如何にござりませう？　二位さま御在世の頃より御三代の今ゝ日に亙り、功勞群を拔き、忠勤一日も怠ることなく、思慮深く、識見高く、學問に於ては、京師にも比類少き程の仁にござりますれば、お爲にならぬと存ぜば、毛頭おとゞめは申すまじく、又無論他言などは仕りますまい。朝光をもお召連れと御內定遊ばしましたからは、いよ／＼何人かに後事をお託し遊ばさるゝが、當然の御ゝ儀かと存じまする。

實朝　はて、昨夜もいうた通り、おれは世を捨てるといはぬまでも、ともかくも此鎌倉をば捨てようといふのぢや。捨てた土地に、言ひ殘す後事も何も有りはせぬわい。……（ト冷然として）あゝ、廣元か！　先刻、おれは醉ふことが出來ぬというたが、あの仁はまた、初めから、醉ふまい／＼と用心して、絕えず酒毒を解する藥を離さぬ男ぢや。譬へを造營に取らば、あゝした仁は、既に地形が出來、棟上げも濟み、いよ／＼間每の造作、飾り附けにかゝつたとなると、無うては叶はぬが、御料の神木をも斫り倒し、千古の靈場をも取毀つて、新規の土木を起さうといふには、役に立つ男ではない。敵にも身方にもならぬ男ぢや。鎌倉草創の諸功臣のうち、彼れの始終恙ないのを見ても、大槪は分りさうなものぢや。

ト此時、猿王又上手より入來り

猿王　はッ。只今、尼御臺さま、お潛行にて、こなたへお渡り遊ばされまするとの、內々のお知らせにござります。

實朝　なに、母上が？（ト思入あつて）內々のお知らせとあつて見れば（ト實阿彌に向ひ）一同へ申し渡し、とくと心得させ、暫らく席を避けさせておくりやれ。

和田　かしこまりました。

朝實　（犬王に）そちも退れ。……（猿王に）お入りあらば、御案內申せ。
犬王／猿王　かしこまりました。
　ト皆々上手へ入る。
　實朝只一人殘りて、默然と思入。例の雅樂が、又も喨々として聞え、浪の音が高い。やがて實朝は、徐かに御座疊を離れて、奥の舷へと步み、欄干により、無言にて正面の沖を見てゐる。
　ト正面の奥が、颯と電光の射したやうに輝いたと見る間もなく、小さい月かと思ふ程の一つの星が、半空を横切つて、矢の走るやうに、下手から上手へ斜に墜落する。實朝それを見送つて、口の中にて
實朝　あゝ、流星か！
　ト此うち、尼御臺、古代紫の脩衣を着し、淺黃の裹頭、手に水晶の珠數を掛け、女童を隨へ、猿王に案內せられて上手より登り來る。實朝之を見て、急ぎ席に戾り、うや／＼しく尼公を上手の御座疊に請じつゝ、兩手をつきて
　これは／＼、思ひがけませぬお渡り。略儀御免下されませう
尼御臺　此中は、聊か風邪氣のやうにも聞きましたが、それは早速に本復し、心づくしと聞いた此船の船おろしも、どうやら一わたりは濟んださうで、わらはも蔭ながら喜ばしう思うてをりました。
實朝　かたじけなう存じまする。
　トこれにて、尼公は女童へ「退れ」とこなし、實朝も猿王へ思入。猿王も女童も、共に會釋して、上手へ入る。
尼御臺　（思入あつて）さて、率爾に訪問れまして、何事かと不審せられましつらうが、餘の儀ではござらぬ。船おろしもほど滯りなう濟んだゆゑに、豫て思し立たれたる通り、結城朝光に奉行させ、六十餘輩を召し連れ、日ならず渡唐せらるゝやに聞き及びましたが、全くの事でござるか！
實朝　船だに進みますれば、月の中にもと存じまする。此儀は、明日にも改めて御意得まする心得にござりましたに、夜中といひ、わざ／＼の御光臨、恐れ入りましてござりまする。
尼御臺　さすれば、あれ程くり返し、とゞめましたをも承引めされずや？
實朝　御意に戾りまするは、憚り多うござりますれど、醫王山參詣の儀は、此身一つの爲ではなく、ひとへに源家永代の結緣の爲にござりますれば、まげて御許容下され

たうござる。

尼御臺　いや、身一つの爲とならば格別。源家一統の爲にとあらば、名代を差遣はされても濟みさうなもの。(ト少し間を置きて)今、天下泰平のやうなれども、まだ／＼野心を抱くともがら、諸國に少からずして、隙(ひま)だにあれば、それに乘じて事を擧げんとする當節柄に、輕々しい渡唐沙汰は、わらはつや／＼其意を得ませぬ。これには何か、深い仔細のあることゝ察しまする。其仔細によつては止(と)めはしませぬ。どうぞそれを聞かせて下され。

實朝　母上のお言葉なれども、此たびの思ひ立は、全く信仰の外ござりませぬ。

尼御臺　いやなう、此母にお包みあるには及ばぬ。まことの事をいうて下され。

實朝　はて、何をおかくし申しませうぞ?

尼御臺　(思入あつて)さうおしやれば言ひませうが、(ト少し膝を進めて)こんどの渡唐については、世上一般に、けしからぬ風說をば申し觸らしをりまするぞよ。日頃は思慮分別あるやからさへも、今は半信半疑の有樣。おことは、其事をば、お知りやつてゞござるか?

實朝　(うなづきて)さ、ほのかには聞き及びましたが、もとより根も葉もなく、たわいもないこと。よもや、母上には、それをば信(まこと)とは遊ばしますまい。

尼御臺　さ、わらはゝ信(まこと)とは思ひませぬ。なれども、此春の行きがゝりこのかた、おことゝ義時との仲たがひは、たが目にも明白。さらぬだに、和田一族の事あつてからは、相州一家は、將軍家と折あひあしと、世上一般に噂の折から、思ひよらぬこんだの催し。人々いよ／＼不審を抱く處へ、かてゝ加へて(ト聲をひそめて)彼の三百の歌を證據に、京方(きやうがた)と諜(しめ)し合せて、北條一家を討滅せんず陰謀がおはすなんどゝ……

トいひかける。これにて、實朝何事かいはんとする。尼公はそれを止めて

はて、わらはゝ信じませぬぞ。……わらはゝ信ぜねども……專らの風說。……證據が證據ゆゑ、上手(じやうず)に事を捌かぬときは、一大事となりまするぞ。(ト形を改めて)これ、故二位どのは、なにゆゑに屢ゝ任官を辭しめされたか?……何ゆゑに禁裡とは遠ざかり、攝關のともがらに虛位を擁かせ、名を棄てゝ實を取り、天下一統の基ゐを此鎌倉にて開かれましたぞ? いふまでもなく、公家政治の賴みがたいのを、とうにお見拔きあつたればこそでござる。これは今までも、幾たびとなう話した事ぢや。よもや、京方の煽動(おだて)に乘つて、今さら逆戻りの公武合體なぞを思ひ立ちめされうとは思ひませぬ。……なれども……(トいひかけて、思入あつて)どこにか火がなうて

は、立たぬ煙とも見ゆるアノ三首の歌……

ト いひかけるを止めて

實朝 母上、しばらく。……成る程、あの三首の歌は、仙洞御所への私のお返事には相違なけれど、それは今よりは三年も前、只かたじけなき御内勅に對し奉つて、二心なき由を誓ひ申したまでの事。若し公武の兵を合せて、事を擧げん下心などがありましたなら、和田一族が謀叛の折に、なんで手を束ねて見てをりませうぞ？ 其お疑ひはお晴らし下さりませ。

尼御臺 いや、わらはゝ疑ひませぬが。……が、既にかうした浮說が立ち、人皆疑ひ危ぶむからは、其危ぶみが原となつて、如何なる珍事が起るやも圖りがたく、或ひは又、其珍事をば機會にして、諸國にも謀叛起り、かてゝ加へて、日頃さうした騷動をば待ちに待つ京方から、不意に大軍が攻め下りでもしようものなら、故二位どのが、五十年の間、……血の涙、血の汗を絞られたる大業も、水の泡同然となつて……

ト いひさして、少しく聲をうるませ

源氏も……北條も……滅亡は目前でござるぞ。……よしさうまでにはならずとも、内輪の騷動はまぬかれがたく、わらはの心勞は限り知られませぬ。……

ト 暫らく言葉を繼ぎかねてゐたが、やがて

わらはの賴みでござる。こんどの渡唐は思ひとまつて下され。

實朝 母上の仰せながら、それがしに異心があらば兎も角も、氣もない上は、其御心勞には及ばぬ筈。かりに、此浮說の爲に、何事か起るにせい、根なし事であるからは、立地に鎭まりませう。なほ御懸念とあらば、明日義時に會うて委曲を諭し、疑惑の根を絕たせませう。何卒渡唐の儀は御許容下されませ。

尼御臺 さア、切なる望みぢやといふことを、察しませぬではないけれど……

ト いひさして默つてゐる。實朝やゝ氣色ばみて

實朝 すりや母上には、異心のないのを御承知あつても、尚ほおゆるし下されませぬか？

ト 怨めしげにやゝ手強くいふ。

尼御臺 (しづかに) 只今は許されませぬ。せめて世繼の出來るまでは。

實朝 「せめて世繼の」……と仰せあるは、船たびの危さなどをおぼしめされての御懸念でござりますか？ 若し然らんには、萬一の場合には、丁度京都よりお召し戻しのアノ公曉をば、跡目に直されても、相濟みませう。……母上、なにとぞ此望みたけは、お許し下され。

ト 實朝思ひ入つたる體にて、頭をさげ、兩手をつきて

網む。尼公俯向いて默つてゐる。實朝は覺えず向うを見つめ、獨語のやうに

六十餘州の總追捕使といふのも名ばかり！　天下の將軍といふのも名ばかり！　たま〳〵思ひ立つた渡宋の望みさへ遂げられぬか！

ト慨然たる思入。尼公は尙ほ默然としてをり、やがて初めは俯し目がちに極靜かに

尼御臺　其述懷は尤も至極ぢや。おことの心中は、よう察してをりまする。賴家が自棄自棄のアノ晚年を思ふにつけて、おことの此頃の心の中を推量せぬではないけれども、一天下の重きを以て任せねばならぬ身は……匹夫匹婦の夢にも知らぬ……辛さやわびしさを忍ばねばなりませぬ。

トいひつゝ徐かに膝を進めて

これ、打明けておしやらずとも、母でござる。……

トいひかけたが、忽ち落淚の體にて

何の、察せいでをりませうぞい？　これ、おことは、此世をあぢきなう思ふ餘り、家をも母をも、皇國をも振捨てゝ、唐土に身を置いて、餘生をば送る所存であらうが？……

ト淚聲にていふ。實朝はじつと俯向いたまゝ默つてゐる。

將軍の名はあれど、政道の大方は執權の手心任せ、いはば飾り物に過ぎぬ境涯、濶達な心から、日頃それをあぢきなう思うてをらるゝとは、とうに見拔いてはをるものの、こゝが今いうた一天下の重きを任ずる身の勤めでござる。わらはの、今改めていふ事をば、どうぞ、善う聞き分けて下され。

トこれにて實朝も愁然としたる思入。

成る程、あの義時の振舞が、折々目に餘つたこともあらう。身贔屓をして此母が、庇ふとのみ思ひめされたこともあらう。が、こゝが政道の是非ない處でござる。一代の英雄たる父御のお薨れなされてからは、名をも實をも兼ね具へて、將軍となるべき者の、又とあらう筈がないゆゑ、權力はいつとなく執權職の手に移つたるが……中頃わらはが思うたには、……いつまでも父御の志しを繼ぎ、源氏の血統で此國を治めうとならば、將軍と執權とは、長く此姿で竝へ存じ、朝野、內外の怨みの的となる事は、すべて執權に掌らせ、爲損じあるとも、將軍には累ひの及ばぬやうにと思案を定めて、わざと義時が專斷をも大目に見た其仔細は（ト膝を進めて）油斷のならぬ京方の底企を、見拔いたからのことでござる。なれば、義時が我意我儘とお見やることも、畢竟は家、國の爲であり、又おことの爲でもある。ぢやによつて、こゝの道

理をば善うわきまへ、どうぞ淺慮をば思ひとまつて下さ
れ。
トしみ〴〵といふ。實朝思入あつて
實朝　名と實とを能う兼ねぬ不肖の身がくちをしうござり
まする！
トいつたきりで、暫く無言でゐたが、やがて
母上、源家の血統を絶やすまいといふ御懸念ならば、ア
ノ公曉を私の代りになされて、どうぞ、それがしには、
曲げてお暇(いとま)を下されませ。
トはつきりといふ。これにて頭を垂れてゐた尼御臺は
顏を上げ、やゝ氣色ばみて
尼御臺　これは異なことをいはるゝ。公曉は旣に出家まで
させたものでござる。今更何しに還俗をばさせませう。
……
トいひかけて、じつと思入あつて
あれを先頃呼び戻いたのをば、只管わらはの愛着ゆゑぢ
やとでも思うてかは知りませぬが、これには深い仔細の
あることでござる。京師に手離しておく時は、いつ、何
者に教唆(きやうさ)されて、其手先に使はるゝやも知れぬゆゑでご
ざる。はて、これとてもまた家の爲ぢや。二つには、お
ことの爲をば思うての事でござる。
トいひさして、又思入あつて

あの義時を只一圖に快からずおぼすのも、畢竟は、胸の
底に、さうした僻み心があつて、爲を思うての沙汰をも、
身贔屓、依怙贔屓とばかりおぼすからぢや。……これ、
これほど事を分けていうても、聞き入れては賜はりませ
ぬか？　思ひとゞまられませぬか？　家よりも、國より
も、一身が大事でござるか？
ト實朝、尙ほ俯向いたまゝで、默つてゐる。尼御臺は、
之を見てむつとしたる思入。屹(きつ)然となりて
此上は是非に及びませぬ。家、國の安危、政道の大義に
は易へられませぬ。わらはにも思案がござる。
ト手強く、きつぱりと言つて、實朝の返辭を俟つ。ト
實朝も、――蒼白な――面をあげて、きつと尼御臺の
顏を見る。しばらくは、双方沈痛に、目を見合ひたる
まゝにて、無言でゐる。
浪の音が高く聞える。上手では又雅樂な――低く淋し
く――奏しはじめた。
ト尼御臺は、忽ち頻りに落涙の體で、袖を以て面を掩
ひ、やゝしばらくは歔欷してゐたが、やがて漸く自ら
制して
如何に天下の爲ぢやとはいへ、……いつまで此苦をば受
けてゐませう？　わらはゝ覺悟を定めました。……賴家、
大姫にも死に別れ、一幡や千壽の淺ましい死に目をも見

て、つく／＼此世をばあぢきなう思うてをつたに、今又おことにまで見棄てられ、生別れの辛さばかりか、いやましに亂れゆく世を見るかと思へば、此末いつまで、何を賴みに、浮世まじらひをしませうぞ？　命永ければ恥多く、悔い多し。……あまり永う生き過ぎました！……もう何もいひませぬ。心任せにしめさるがよい、さらばでござる。……南無……彌陀佛！　彌陀佛！

ト涙を拭ひつゝ靜かに珠數をつまぐり、席を立ち、すぐに上手媽公近くまで行く。

實朝　（微かに苦悶の影を浮べた顏を擧げて）　あゝ、もし、暫く……母上、暫くお待ち下され。

尼御臺　お止めあるは……

ト立ちながら徐かに振返りて、言葉靜かに

今いうた事を承引あつてか？

實朝　それほどに仰せある上は、是非に及びませぬ。……思ひとゞまりませう。

トこれにて尼公は徐かに元の席に戻りて、更に言葉靜かに

尼御臺　それを聞いて安堵しました。善う聞き分けて下された。嬉しうござる。禮をいひまする。……

トいつて、俯向いてゐる實朝の顏をじつと見おろして

とはいへ、常日頃、唐土の風俗をお好きあつて、かりそめの器具調度をさへ彼方のを用ひめさるゝ程、それほどになづかしがつてゐめされたものを、家、國の爲とはいへ、その只一つの望みをすら遂げさせぬかと思へば、此胸が痛なうござる。

ト涙をぬぐふこなし。

實朝　（冷靜に）　そのお氣づかひは御無用でござります。何事にもさしたる執着のない我身は、かういふ折には心安うござります。

尼御臺　したが、一旦表向きに觸れいだされ、旣に船おろしの祝ひまでも濟んだものを、只このまゝにもされまいが、その始末はどうしたもの？

實朝　いや、それも御懸念には及びませぬ。幸ひまだ波打際まで下りたばかり、十分には浮ばぬ船。何としても深みへは出ぬと言ひ觸らし、このまゝ、いつまでも濱邊に棄ておいて、朽ちさせませう。

トこれにて、尼御臺はうなづき

尼御臺　では、それも安心ぢや。……（ト思入あつて）　すれば、明日又改めて會ひませう。

ト席を立ちかけたが、悄然としてゐる實朝の姿を見て立ちかねて

あゝ、しかし、どうやらおことをば、生埋にでもするやうな心地がして……

トいひさして、又しばらく落涙の體。實朝は只默然としてゐる。やがて、實朝は座右の驛路を取つて振鳴らす。

ト上手より猿王出て來る。これにて、尼御臺は涙を押拭ひつゝ立つ。

實朝　御案内。

ト小聲にていふ。猿王心得て先きに立ち、上手の幕をかゝげ上げる。尼御臺は改めて實朝へ目禮して、徐かに上手へと進む。實朝は席を離れ、幕ぎはまで送り、頭をさげ、手を突き、敬禮しつゝ見送る。尼御臺は幕の内へ入る。猿王も從いて入る。

只ひとり殘りたる實朝は、やがて徐かに顔をあげ、立ちあがり、元の席近くへ戻つたが、坐りもせず、立つたまゝで沖の方を詠めてをり、やゝあつて、徐かに下手へと進み、手前の階子を攀ぢて艫甲板に登り、艫帆柱の奥の舷の欄干に身を凭せて、何處を宛ともなしに沖の方を詠めてゐる。

ト上手の幕をかゝげて、和田實阿彌しづかに出て來り、此體を見て、懸念の思入。やがて階子の下まで進みつつ上を見上げて、中音に

和田　御前。……御前。

ト二度呼ぶ。これにて、實朝は欄干に凭れたまゝ、振返りて、しづかに

實朝　實阿彌か？……あゝ、ちやうどよかつた。今呼ばうと思うてゐたところぢや。月はよし、和ぎはよし、聊かの波さへ立たず、遙かの沖までが湖水のやうに見ゆる。四年以前、おのしたちと釣舟を浮べつゝ、月を賞したのも、丁度こんな晩であつたなう。こよひも小壺近くまで漕ぎ廻つて見たい。小艇をば下させておくりやれ。

和田　はツ。かしこまりました。

實朝　しかし、水夫には及ばぬぞ。おのしとおれと只二人きりで乘るのぢや。

和田　はツ。心得ました。

ト一寸不審げの思入あつて、座を立ち、上手へ行かうとする。

實朝　こりや／＼。

和田　はツ。

ト又すまふ。

實朝　伶人どもに吩咐けて、萬秋樂を奏させい。

和田　はツ。かしこまりました。

ト實朝は、同じ立身のまゝにて、又沖の方を詠めてゐる。實阿彌は不審の思入にて、徐かに上手へと行きかける。

第三場　小壺の沖中

見渡す限り、前の方一面（平舞臺全部）は小壺の沖中の心。正面に見ゆる陸地（背景）は、小壺の沖中より遙かに由比が濱べを見やりたる體にて、上手のずッと前寄りには、磯馴れひよろ松を幾株となく戴きたる飯島が崎が、間近く黑々と突き出でゝかり、其の奧、今の豆腐川あたりの處には、多くの漁家が朧げに見え、篝火處々に燃え、そこに、前の場の唐船の輪郭が――二本の帆柱には夥しく唐風の旗を飾し、無數の唐燈籠を吊したれど――距離遠ければ、黑々と見え、それより更に奧の方は、正面の中央へかけて、鎌倉材木座附近の港口の體にて、「數百艘の舟ども大津の浦の如くに集ひ」又それよりも奧の方には「千萬宇の宅、軒を竝べて、大淀のわたりに異ならざる樣」其家々の燈火と月の光りとにて、おぼろげながら見え、それより更に下手へかけては、人家は次第に疎らであるらしく見ゆれど、砂濱の廣々としたる體夜目にもいちじるしく、滑川・稻瀨川などの川口も、冴えたる月光にて銀色に光つて見え、尙ほ其下手には稻村が崎が臥したる牛などのやうに突き出で、又其奧には江の島も見え、それより下手には、夜色蒼茫たる相模灘。風は悉く和ぎ盡して、海面はまるで靑疊を敷き連れたるやう。冴えに冴えたる月は、もう大分西の方へ移り今はずッと下手の空にて照つてゐる。飯島が崎の岩々には、銀波が靜かに打寄せてゐるのが見える。引汐らしい靜かな浪の音に遠く唐船の上にて奏しつゞくる慈眞萬秋樂の限りもなく哀愁を帯んだ音色が冠さつて聞える。

時刻は、前の場よりも約一時間も經つた後。

こゝに沖中に、實朝と實阿彌と只二人きりを載せたる小艇が漂つてゐる。更に風がなく、浪が無いので、櫓をも櫂をも抛ちて、自然に漂ふまゝにしてゐたものらしい。が其小艇が、前記の景中に現はれいでた途端は、あはや實朝が舳先きに立つて、海中に躍り入らんとした刹那である。實阿彌は駭きあわてゝ、今しも後ろから抱きとめてゐる。

和田　こりや何となされまするぞ？　あゝ、もし……御前！御前！　どうなされましたぞ？

ト實阿彌は、尙ほも振拂はうとする實朝をやう〳〵のことで抱きとめ、やつと船中に引きすゑて、尙ほ後ろから抱きながら、顏を覗き込みて

もし、お心が狂はせられましたか？　但しは御本性でござりますか？　或ひを世をはかなませられての御生害か？

トまでは一氣に言つたが、忽ちこらへかれて、はら〳〵

と落涙し

御尤もでござります！　御無理とは思ひませぬ。お言葉次第で、わたくしも直にお伴をいたしまする。強ちお止め申すのではござりませぬ。只、お覺悟遊ばすに先きだち、只一言、お別れのお言葉をば、下しおかれませ。もし！　もし！

ト泣きながらいふ。此間、實朝は悄然として默つてゐたが、此時我れに返りたる體にて、しづかに實阿彌を制し

實朝　もうよい、もうよい。……大事ない〱。手を離せ。

トこれにて實阿彌は、尙ほ不安さうな思入にて、抱いてゐた手を離し、泣きながらも油斷せず、實朝の樣子を見守つてゐる。實朝は十分冷靜の態度に戻つて

あゝ、ゆるしてくれ。我れながらおぞましい振舞をした。もう決して懸念には及ばん。

靜かに座を改め、とり亂した姿を取りつくろひなどして歎息しつゝ

船に乘るまでも、乘つてからも、決してこんな氣はなかつたのぢやが、今がたの述懷で、われとわが述懷に感動して、はじめて心の醉ひを覺え、つい女々しうなつてゐた處へ、冴え渡るアノ月の光り！　あの靜かな奧深い浪の色！　あゝ、月めがおれを誘ひをつたのぢや。魂ひがふとあこがれ出ようとしたのぢや。……さぞ驚いたであらう。堪忍してくれい。……

トこれにて實阿彌はやゝ安心の思入。されど尙ほ愁然として頭を垂れてゐる。

これを思ふと、いつぞやのアノ狂女が、月の佳い晩となると、龍宮へ往くというて、ともすれば、浪間へ入らうとするとやら聞いたが、成る程、無理もないわい！

トこれにて實阿彌は、感慨に堪へかねたる思入にて

和田　御述懷の餘りとは申しながら、狂女によそへさせられてのお言葉は、餘り物體なうござります。源家正嫡の將軍家、日本六十餘州の兵馬の頭領とはお名義ばかり、御政道の大事となつては、何一つお心の儘にはならず。若しまた强ひて御意通りに遊ばさるれば、いつ、どこから、どんな毒手が下るやも圖られぬ御身の上であるのみか、御母公さまへの御孝心から、たつた一つの御今生のお望みをさへも捨てさせられまする。此世をばあぢきなうおぼしめします筈。しかしながら、狂女は愚痴無智の極み、何一つ辨へがなければこそ、自他をも顚倒し、前後をも忘じまする。御前は聰明叡智にましまし、自他を知らせらるゝことが深いゆゑに、それゆゑお身をも捨て、世をも捨てようと遊ばされまする。彼女と御前とが、どうして一つになりませうぞ？

ト涙を呑みつゝいふ。

實朝　（しづかに、冷かに）いや／＼、生中の智慧があつて自他を知るといふことこそ、人間が身の不幸ぢや。よきにつけ、あしきにつけ、其裏や巣が見えすいて、何事にも、身や心が打込まれぬ。おれなぞは、今の世の不具者ぢや。父祖の志しを繼ぐことも出來ねば、西行の跡も追へず、蓮生が眞似も出來ぬ。酒色に慰まうとすれば、風雅が否み、和歌蹴鞠に忘れようと思うても、大望めが嘲りをる。血に醉ふことの出來ぬ胸には、不仁を敢てする勇氣もなく、生中の分別が邪魔となつては、佛の道に入ることも叶はぬ。せめても、まだ見ぬ大世界の大自然の中に身を置いて、と天下の周遊を思ひ立つたも、今思へば、これも又一時の氣休め。大といふも、小といふも、つまりは人間の思ひなしぢや。斯うして小舟にちゞこまつて、濱近う見る月も、あの唐船を千萬里の波濤に浮べて、大海原で見る月も、本來の光りには變りのあらう筈もない。もうとうに死んでゐるのぢやと悟つたなら、自ら殺さうとするにも及ばず、未練らしう、さもしらしう味ひ殘した行樂を漁らうとするにも及ばぬ。今のおれのおぞましい振舞は、全くの出來心ぢや。もう決して二度とすることではないわい。

ト おちついたる調子にていふ。此以前より艇は、波のまに／＼ゆるやかに漂うてゐる。此間、實阿彌は始終頭を垂れ、折々涙を拭うてゐる。

和田　（なほ泣きながら）御自身のお爲ではなく、天下萬民の爲をおぼしめされて、一旦はお心を寄せられましたなれど、其仙洞御所とても、賴もしからず、さなくも、御母公樣との御血緣は、切つても切れず、後ろ楯と遊ばさるゝ賴もし人は、一人もないゆゑ、不世出の御器量わ、御大望も、行はせられう便宜もなく、只一時の、物體もない置き物、飾り物となつて、空しう老い朽ちさせられますかと思へば、無念至極でござりまする。せめても、親や兄どもが、輕卒に事を誤らなんだらば、と思ひ出さぬ日とてはござりませぬわい！

ト泣く。實朝は、いよ／＼落ち着きたる體にて

實朝　はて、もう歎くには及ばぬ。只今の發作によつて、おれは却つて此胸が輕うなつた。もう死なうとも思はねば、生きてゐるのを辛いとも、死ぬるを怖ろしいとも思はぬ。しかしながら、此不思議な心境に入つたも、畢竟はおのしといふ心の友があればこそぢや。生前にさへ、おれの心を知る者はおのしの外にはないからは、死んだ後に、おれを正しう傳へてくれる者は、尙ほさら、おのしの外にはあるまい。おのしとおれとは（トいひかけて、一寸涙聲になつて）身は二つぢやが、心は一つぢや。

トいひつゝ、實阿彌の手を握りしめる。實阿彌は、何もえいはず、聲を放つて泣く。
此間、艇は、尙ほ浪のまに〳〵漂うてゐる。
萬秋樂の哀音はつゞいてゐる。
長谷寺邊のらしい梵鐘の音が、陸の方から聞えて來る。
ト下手より、二人が乘つてゐる小艇の前へ、一人の女の溺死體が流れて來る。これは、例の狂女の死骸なのである。衣類は以前のまゝにて、仰向けになり、笑ひ顏をしたまゝで、ゆるく靜かに漂うて來る。
實朝は、此間、どこを詠めるともなく、海面を見てゐたが、忽ち之に目をとゞめ、やがて口早に

實朝　實阿彌！　實阿彌！

ト呼ぶ。泣き伏してゐた實阿彌は、急ぎ涙を押拭ひながら

和田　はツ。

ト顏をあげる。此時死骸は、すぐ舷の傍を、上手へと流れる。

實朝　あれを見い。あれは、たしかに、此間の物狂ひぢや。衣類に見覺えがある。水死しをつたものと見ゆる。……止めい。早う止めい。

トこれにて實阿彌は、急ぎ櫂を取つて艇を進め、旣に一間餘も流れ過ぎたる死骸に追ひつきて、櫂にて之れをおさへ、忽ち舷へ引寄せる。

和田　成る程、仰せの如く、あの狂女めにござりまする。衣類もあの時のまゝでござります。ともかくも引上げまして、水を吐かせませう。

ト旣に死骸に手をかけようとする。實朝止めて

實朝　いや〳〵、まて〳〵。（じつと死骸を見て）とうに事切れたと見ゆるのに、あゝ、さも嬉しさうな此笑み顏。龍宮へ到り着いたとでも思うてゐるのか？（ト暫く詠めてゐて）あゝ迚も助かりさうにもないわい。

和田　ではござりまするが、このまゝに押流しますのも、酷いやうに存ぜられます。

實朝　いや〳〵。我れに返らせたら、酷いわい。……流してやれ、流してやれ。

トこれで實阿彌、櫂の手をゆるめる。死骸は波のまにまに上手へと流れつゝ、やがて見えずなる。實朝立ち身にて、じつと其行くへを見送る。實阿彌も宜しく思入あつて、徐かに櫂を取り直す。
淋しく悲しき萬秋樂は尙ほつゞいてゐる。
月はます〳〵冴え渡つてゐる。
唐船の燈籠や篝火は、今は殆んど殘り少なに消えて、船の大きな、眞黑な輪郭が、更に物すごく際だち、さながら一種の巨大な怪鳥か何かのやうに見えてゐ

ろ。

――幕――

第四幕

第一場　鎌倉御所中門廊

正面、中央より上手へかけて四間の間（常足の三重）は御所中門脇内侍ひの體にて、上手の奥よりやゝ斜に鍵の手に前へ折れてをり、一間毎に柱を立てたる總板敷、其内面の周邊には上げ疊。折廻して廣緣附、蔀（上げ格子）は悉く引上げてあり、廣緣前、中央よき處に沓脫の低き臺あり。鍵の手に前へ折れたる部分は、悉く蔀をおろしある故、内部見えず。此内侍ひと直それに接する幅一間の築地との間には、目かくしの袖板塀あり。其下手、直線に二間の中門。其下手は、見える限り、築地。其前の方（下手の舞臺端）は別の附近の築地の一端。ずつと上手の前の方（舞臺端）は廐の建物にて見切られあり。其廐の軒に近く一本の紅梅の老木、今既に三分の花を着けたり。時は陰暦正月廿七日。酉の刻（六時）近き頃。

築地の屋根にも、廊の屋根にも、庭にも、梅の枝にも、雪既に多く積り、今尙ほちら〳〵と降りてをり。庭上には上手と下手とに庭篝。二重には燈臺一基。こゝに二重下手、上げ疊よき處に、關の左衞門の尉政綱、又同じ疊のやゝ上手には狩野の七郎光廣、共に烏帽子、直垂にて宜しく住ひ、又廣緣のやゝ上手には武田の五郎信光、鎧姿にて腰を掛け、下手中門際には隨兵二人、左右に分れて地上に胡座し、雜式四人は、おの〳〵箒を持ちて、中門の中外より正門へかけて、道筋（花道）の雪掃除をしてゐる。

武田　折も折、わるい物が降つてまゐつたと存じてをつたが、それでもどうやら晴りさうでござる。御覽なされ、いつの間にやら、もう二尺ほども積りました。

關　成る程。しかし、雪は豐年の瑞兆ぢやと申すからは、これも御祝儀の一つでござらう。

狩野　時に、御拜賀の御劍のお役は、右京兆義時どのと承はつたに、いまだに御參入がござりませぬな。

關　されば。先刻御家來の深見なにがしが參つたのは、多分其儀についてゞござらう。

武田　何にせい、思ひの外に、お手間が取れまするな。

關　何か、大江の入道どのが、折入つて言上しめさることがあるげにござる。最前、例になく、あたふたと參入せられたには、何か仔細がなうては叶ひませせぬ。

狩野　さういへば、先年も、お上が中納言から左近衞の中將、つゞいて左近衞の大將、それから內大臣と間斷もなく御昇進遊ばされた折も、かやうな違例の御昇進は、故將軍の御遺志にも悖り、又御當家長久のお爲でもないと、御諫爭に及ばれたかと承はる。いよ〳〵右大臣とならせられた今日の御拜賀についても、又何かむづかしいことを申し上げらるゝかも知れませぬ。

關　當今、上の面を冒して、御異見申さるゝ御仁はといへば、右京兆か、あの入道どのか、結城朝光どの位ゐのものでござらう。其結城どのも、けふは如何にも力なげに、後れて參入せられました。

狩野　其筈でござる。聊かの忌の爲に、御拜賀のお伴に洩れられ、定めし殘念でござらうよ。

卜このうち上手奧より若狹の兵衞の尉忠季、烏帽子、直垂にて出て來り、二重上手の上げ疊に住ふ。

關　まだ御出門には間がありますかな？

若狹　いや、もはや程もござるまい。

狩野　なんでお手間が取れまするな。

若狹　さればでござる。只今、大江の入道どのが不思議の御諫言を申し上げられた爲でござる。

關　して、それはどんなことを？

若狹　先刻、御前へ罷り出でらるゝや否や、先づ頻りに落淚のせられて、さて申さるゝには、「覺阿成人の後は、いまだ曾て淚を流したる覺え御座なきに、只今尊顏を拜するとやがて、かやうに落淚仕りまするは、只事とは存ぜられませぬ。何卒こよひの御拜賀は、お止まりあらせられたし」と申され、それより、上とも、仲章どのとも、押し問答數回に及び、「せめても、お束帶の下に腹卷なりとも召させられて」と申されましたが、それとても、仲章どのが、「古例に背く」とて拒みめされ、入道は、如何にも、本意なげに、口をつぐまれました。

狩野　さて〳〵、それは不思議なことでござる。如何さま、あの入道の泣かれたといふことは、つひぞまだ聞いたことがござらぬわい。

若狹　不思議はそればかりではござらぬ。（卜聲をひそめて）折も折、物も物、こよひのお儀式用のお太刀が、何としてか、お欄元からポキリと折れました。早速取り換へて差上げられましたものゝ、忌はしい限りでござる。

卜苦々しげにいふ。皆々眉をひそめる。

若狹　いや、まだござる。今朝、秦の公氏どのがお髮あげに參られたところ、上にはお鬢の毛を一筋拔かせられ、「これは形見ぢや」と御意あつて、賜はりましたげな。これは公氏どの自身、眉をひそめての話でござる。

關　さて〳〵それは、重ね〴〵……

ト三人顏を見合せ、

いまはしい儀でござるなう!

トこの時、中門内にて「御出御でござりますぞ!」と呼ぶ。

これにて二重の面々、皆庭上におり立ち、よろしく膝まづきて、出御を俟つ。武田の五郎は、ずつと下手へ廻り、門際の隨兵を後ろに從へて、地上に膝まづきて控へる。雜色四人は、ずつと上手へ廻り、闕、狩野、若狹の背後にうづくまる。

ト中門の奥より雜色二人松明を持ちて出る。其の後より民部の大輔廣綱、長尾の新六定景、太夫の判官景廉、境の兵衞の尉常季の四人、烏帽子、直垂にて續いて出て、正門への道(花道附際)に宜しく居並ぶ。次に又雜色二人松明を捧げて先きに立ち、續いて老懸の冠りに闕腋の袍を着し胡籙を負うたる隨身二人、弓を携へて出て、其後より右大臣實朝(二十八歲)束帶にて、更に二人の隨身を從へ、伊豫の少將實雅(衣冠)に裾を捧げしめつゝ出る。其後より文章の博士仲章(衣冠)御劍を捧げ、右馬の權の頭賴茂(同上)、伯耆の守師憲(同上)つゞき、又其後より大江の廣元入道覺阿、直垂の上へ袈裟を掛け、結城左衞門の尉朝光、烏帽子、直垂にてつゞく。更に其後より秋田城の介景盛、伊豆の左衞門賴定、共に鎧姿にて、隨兵二人を隨へて出て來る。實朝は、中門を出ると、ふと上手の紅梅の花に目を留めたる思入にて立ちどまり、隨身の一人を顧みて、「あの梅を一枝手折らせよ」と聞えぬ程の小聲にて吩咐ける。これにて隨身の一人上手へと進み、そこにゐる雜色に小聲にて命ずることあり。雜色の一人立ち上りて、梅の小枝を折取りて渡す。隨身それを受取りて、立戾り、膝まづきて實朝に献る。此以前、實朝の立ちどまると共に、陪從者はおの〳〵よろしく居並ぶことあり。廣元入道と朝光とは上手へ廻り、闕、狩野の膝まづきてゐる處より、少し下手寄りに膝まづきて、出門を見送る心にて、控へてゐる。

ト實朝は、梅の枝を受取りて、暫くそれを詠めてゐたが、朝光の方を見て

實朝　朝光。朝光。

ト呼ぶ。これにて朝光膝を進める。

朝光　はッ。

實朝　先刻もいつた通り、公家の古例がむづかしいので、伴れて行きたうても、伴れて行かれぬ。おことも殘念であらうが、予も何となう殘りをしいわい。何か其代りに、と最前から思うてゐたが、ふと今、此梅を見て一首浮ん

だ。これをおことに取らすぞ。
朝光　はゝッ。ありがたく存じ奉りまする。
　ト雜色の方を顧みて
たそござる？　お硯箱を。
　トいふをとゞめて
實朝　いや／＼。筆には及ばぬ。これを。
　ト梅の枝を渡す。朝光受け戴き
朝光　はッ。
實朝　（中音に）いでゝいなば、主なき宿となりぬとも、
軒端の梅よ、春を忘るな。
朝光　（同じく中音に）いでゝいなば、主なき宿となりぬ
とも、軒端の梅よ、春を忘るな。
　ト繰返し了りて、覺えず傍らの廣元入道と顏を見合せ
て眉をひそめたが、やがて
かたじけなく頂戴仕りまする。
　ト平伏する。これにて實朝は、一寸左右へ思入あつて、
しづ／＼と正門（花道）の方へと進む。やはり以前の順
序通りに、眞先に雜色二人、松明を持ちて進み、其次
に民部の大輔、長尾の新六、太夫の判官、境の兵衞の
尉四人、つゞいて又雜色二人、松明を捧げ、隨身二人、
其次に實朝及び隨身、實雅、仲章、其他の衣冠連、其
次に鎧姿の將全部――此中に武田の五郎も加はる、―
―隨兵四人、雜色四人――其の中二人は松明を持つ、
――其後につゞきて、關、狩野、若狹の三人、廣元入
道と朝光とに會釋して、附いて入る。
　廣元入道と朝光とだけ殘る。
　ト入道は、徐かに立ち上り、やがて朝光に目禮して、
すぐに正門（花道）の方へ行きかける。朝光も同時に立
ち上りて
朝光　あいや、暫く。……聊か御意得たいことがござる。
覺阿　なに、われらに？
朝光　いかにも（ト四下を見て）なにとぞ暫時。……あれ
へ。
　ト二重へこなし。これにて二人とも二重へ上り、朝光
は入道を上手へ請ずる。
入道には、只今のお歌を、何とお聽取りなされましたぞ？
覺阿　（やゝ間を置いて、しづかに）禁忌のお歌とこそ承
はりました。
　ト憮然としてゐる。
朝光　（思入あつて）先刻承つた公氏へのお形見といひ、
それがしへの只今のお歌といひ、頻りに胸騷ぎがせられ
まする。それにつき、折入つて承りたい儀がござります
るが、何と、お洩し下されませうか？
覺阿　何事かは存せぬが、御遠慮なう御ゝ申し下されい。

朝光　餘の儀でもござらぬ。最前、上へ御諫言の折、頻りに御落涙なされたには、何か深い仔細のあることゝ存ぜられる。正八幡、決して他言は仕らぬ。其の仔細、ひそかにお打明け下さるまいか？

覺阿　あゝ、其儀でござるか？　いや、あれは（ト一寸間を置いて）先刻御前にて申した通り、只何となう裏悲しう覺え申したまでの事で、これと申す何等深い仔細あつての事ではござらぬ。さもなくば、强ひてもお抑留申し上ぐべきでござつたが、畢竟は老いの思ひ過し、取越し苦勞と愧ぢ入り、もだしましてござる。

朝光　押し返してお訊ね申すも異なものでござるが、近頃何か（ト思入あつて）お聞き込みの事はござらぬかな？　ほのかに承る所によれば、二月ばかり前の或夜半、御所內に女姿の怪しき者忍び入り、御寢所間近を徘徊したるを、宿直の者見出し、引捕へんとせし處、飛鳥の如くに逃げ去つたとやら承りましたが、右は眞でござりませうかな？　右につき、何かお思ひ當りの儀はござりませぬかな？

覺阿　いや、只今承るのがはじめて、一向に心當りとてもござらぬが……（ト思入あつて）あゝ、それにつけても、こよひの御拜賀、どうか何事もなう、早う相濟めばよいが、心懸りの事でござる。

ト これにて朝光は手持無沙汰の體。暫くは、双方共に無言。此時上手奥より猿王出で來り

猿王　左衛門の尉さま。御臺所のお召しにござりまする。

朝光　心得申した。

ト覺阿に向ひて

お召しでござれば、御免下されい。

ト會釋し、猿王に案內せられて、上手へ入る。覺阿一人殘りて、やゝあつて徐かに席を立たうとする。此時、朝光と入りちがへに、老女日の岡いで來る。

日の岡　入道さま、憚りながら、暫時おとゞまり下されませ。

覺阿　おゝ、お局でござつたか？　何か御用でござるかな？

トいひながら、又住ふ。日の岡は下手に住ふ。

日の岡　承りたい儀がござりまする。（ト一寸あたりへこなしあつて）おめでたいお出ましの折も折、かね／＼忌はしい事共がござりましたゆゑ、御臺所さまには、いといたう御心勞遊ばされてでござります。結城どのを召させられたも、其儀をお問ひ合せの爲でござりませう。附きまして、私が、折入つて、あなた樣に、承りたいことがござりますが、お聽入れ下されませうか？

覺阿　と申さるゝは？

日の岡　外でもござりませぬ。最前のお落涙の、御本心が承りたうござりまする。

覺阿　（一寸間を置いて）折角のお訊ねなれども、先刻申したことの外には。

　トいひさして、默つてゐる。

日の岡　すりや、御仔細とては、あらせられませぬとな？

覺阿　全く不覺の落涙でござつたのぢや。不思議なこともあるものでござる。

　ト不審げの思入。局は附き穂なげに暫く默つてゐたが、ふと何か思ひ出したる思入にて

日の岡　附かぬことを伺ひますが、最前右京兆の御名代として參入せられました深見三郎次郎とか申す仁は、もとは故二品禪師さまのお傍仕へであつたとやら承りましたが、御存じでござりますか？

覺阿　たしかそのやうにも承りをる。

日の岡　その深見と申す仁が、頻つて公曉禪師さまの御昵近申すやうにも承り及びましたが、それについて、何事か、お思ひ當りの事などはござりませぬか？

覺阿　成る程、さやうな噂も、ほのかに承りをつたが、別にこれぞといふ……（トいひしぶつて）何故それをお訊ねでござるな？

日の岡　なにゆゑと申すこともござりませねど……

　トこんどは局の方が答へを言ひしぶつてゐる。此時、正門（揚幕）の方より廣元入道の若黨一人急ぎ足にて出で來り、すぐ中門廊の前へ來て、膝まづき

若黨　はッ。申し上げます。お吩咐に隨ひまして……

　トいひかけるのを入道かぶせて

覺阿　いや、只今退出いたさうと存じてをつたところぢや。何か御用か？

若黨　いえ、御用ではござりませぬが、右京兆さまには、神宮寺前にて上樣をお迎へなされましてござりますが、又忽ちお急病とござつて、やはり御劍のお役は、文章の博士さまへお讓りなされましてござりまする。それより上樣は、隨身衆をば悉く御門外にお殘し遊ばされて、只今既に御參拜中にござります。

　トこれはと覺阿も、局も、共にぎつくり胸にこたへたことがあるらしかつたが、覺阿はやがて氣を鎭へて、さりげなく

覺阿　では、もはや程もなく、御下向遊ばされるであらう。せめて途中までお出迎へ。

　と獨語のやうに言ひて、局を見送り

御免下され。

　ト靜かに言つて、席を立つ。局は無言にて會釋する。二人おもひ〳〵の思入よろしく。

第二場　備中の阿闍梨の坊

正面の中央、いつもより前へ寄せて、少し斜に、阿闍梨の坊の一室（間口三間、奥行二間の常足の二重）。一間毎に柱を立て、軒先には釣半蔀、すべて軒下へは折廻して濡椽式の板椽。其前面よき處に沓脱臺。上手の側面一面だけは妻戸――但し閉ぢてあり――殘り一間は蔀。內部は總板敷、其一部に上げ疊。奥は襖。下手の側面は、表門よりほゞ眞正面に當つてゐる心にて、其中央一間は妻戸の前に沓脫石。妻戸の奥、下手へかけて、鍵の手に折れて板椽附の別室――まゐら戸閉め切りあり――其下手の行き當りにも妻戸。

ずつと上手の前（舞臺端）には太き立木數株、同じく其奥は庭つゞきの竹藪、家屋に接近した部分は、低き生垣に柴折戸。其奥は小山の裾、杉の立木の幹など間近く見ゆる。ずつと下手（花道附際近く）には、藁屋根の附きたる一間の表門、二枚戸の竹編戸――開け放しあり――左右は建仁寺まがひの竹垣。垣の內、すぐ門の脇に山椿一二輪紅き花を雪間に見せ、御坊庇にも、門の屋根にも、竹垣にも、木の枝にも、地上にも雪深く積りたる體。

前の場と同日、戌の刻（午後八時）頃。二重よき處に燈臺一基。

こゝに、二重上手、上げ疊の上に、備中の阿闍梨將圓、下手板敷に彌源太兵衛すまひ、談話なかばの體。

彌源太　いや〳〵、その御懸念には及びますまい。御本坊へ移らせられましてから、もう二年にもなりまするが、只の一度も荒々しいお振舞なぞをなされたことはござりませぬ。夜は、大抵夜半近くまでも、源家永代の爲の御祈念とござりまして、お人拂ひにて、御持佛に籠らせられまする。こよひも初夜頃からお籠りでござりました。

阿闍梨　其夜每の御祈念といふことが、われら聊か心懸りに存じをることでござる。それに、穩密の事ながら、外ならぬ其許ゆゑ、念の爲に申しておく。

　トあたりへこなしあつて、小聲にて

二月ほど前の、星月夜の丑三つ頃、さる人、急用あつて、御本坊の裏手にさしかゝつたる處、忽ち向うより、何やら薄黒いものゝ、ふら〳〵と進み來るのが見えたので、盜賊などにもやと大いに怖れ、木蔭にちゞこまり、窺ひをると、件の物は近づく。見れば、被衣をかぶり、正しく女。眞夜中に不思議と見るうち、ひらり生垣を躍り越えて、坊の境內に消え失せたとやら。それはちやうど彼の御所內へ怪しい女姿の者が忍び入つたといふ噂のあつた同じ夜の事。萬々あるまじい儀とは存じながら、二ケ

年以前のお振舞を存じをるだけに、ともすれば、取越し苦勞がせらるゝでござる。

彌源太　思ひがけぬお話でござりまする。成る程、さうおつしやりますれば、よもやと存じまするものゝ、少々心懸りは、あの淺見三郎次郎とのゝ、絶えず參入せらるゝことでござります。あまつさへ、參らるゝたびに、何事やら、お人拂ひでの御密談。御存じの如く、あの仁は、御先代二品さまのお傍仕へであらつしやつただけに、どうやら氣がゝりでござりまする。

阿闍梨　われらも、あの仁をば、かねがね心がゝりに存じてをつた。……あゝ、折あしい此夜陰、雪中の御拜賀。どうか何事もなければよいが。

ト此途端、向う(揚幕)の方にて物音、けたゝましい大勢の人聲。二人は驚く思入。

や、えらう物騷がしいやうぢや！　何事か起つたのではござるまいかな？

彌源太　なるほど。(ト聞き耳を立てゝ)お宮の方角でござります。見てまゐりませうか？

阿闍梨　ちよつと往つて、見て來て下され。

彌源太　心得ました。

ト彌源太兵衛、身支度して、立ち出でんとする。此時向うより、序幕に出た所化、淨念、專念、一さんに走つて出て來り、すぐに門から庭へ駈け入りながら

淨念　大變でござります！　大變でござります！

專念　將軍家が、不意におかくれなされました！

阿闍梨
彌源太　えツ！

淨念　何者かに殺されておしまひなされました！

阿闍梨　なに、將軍家が！

淨念　御參拜をおすましなされまして、丁度石段の下までお下向遊ばされますと、不意に大銀杏の蔭から、眞白な薄衣をかついた女姿の者とやらが飛び出して來て、氷のやうな刃で、たつた一打にお首を切り落いて、すぐさま何處かへ逃げ失せましたげな。

阿闍梨　はれやれ！　取越し苦勞が實となつたか！

專念　神宮寺の界隈は、人やら、馬やらが、あつちこつちと馳せちがうて、まるで軍場のやうでござります。

彌源太　あの大勢の隨身がたや隨兵たちも、何のお役に立たなんだか！　ほい！

淨念　隨兵たちは、みんな御門外に控へさせられてをりましたし、隨身たちも、其折には、お傍にはたつた二人、それもうろたへて何の役にも立たず、御劍役の仲章さまも、御一しよに切り殺されておしまひなされたとか申します。

阿闍梨　御劍役は、右京光どのゝお役ぢやと聞いたに。
淨念　北條さまは、俄の御不例とかで、途中から仲章さまが代つてお勤めなされたとやら聞きました。
阿闍梨　なに、俄の御不例？……（ト不審げの思入にて言ひかけたが）何にせい、かうしてをる場合でない。ともかくも御所へ參つて、とくと御模樣を承らう。……淨念は支度して伴をせい。
トいひつゝ奥へ入る。淨念もついて入る。
彌源太　あゝ、どうかさうでなければよいが！
ト心配の思入。此途端、向うより、公曉、白の素絹の下に腹巻をして太刀を佩び、すべて甲斐々々しく打扮ち、袈裟を以て頭部を包み、尙ほ其上に白き被衣をかぶり、右手には血刀を、左手には血の滴る實朝の首をひつさげ、一さんに駈け出で來り、すぐに門内に走り入りて板緣の上へドッカと掛ける。これにて彌源太兵衞と寡念とは大いに驚くこと。
彌源太　やゝ！　禪師さまには！
トあとを言ひつぎかねてゐる。
公曉　わけは後で言ふ。おそろしく腹が減つた。（寡念に）早う飯を持つて來い、早う！……えゝ、早う持つて來いといふに！
トこれにて寡念あわてゝ立ち上り、下手奥の妻戸口へ入る。
彌源太　では、いよ〳〵あなた樣が、將軍家をば！
公曉　（得意げに）喜んでくれ。多年の宿望をやつと遂げたわ。けふからは、天下はおれのもんぢや。叔父貴ばかりでなく、怨み重なるアノ義時をも、返す刀で、やッつけてくれた。喜んでくれ。
彌源太　とゝとんでもないことをなされましたなア！
トばかり後をいひかねて泣く。
公曉　阿呆！　何を泣く？　何をうろたへる？　萬事は深見が心得てをるによつて、氣遣ふことはない。今に爰へ三浦ノ義村の迎ひの者が來る筈ぢや。併し、それまでは、油斷がならん。前後を見張つてゐてくれ。門を閉めておけ。はて、今に日頃の忠勤に報うてやるわい。
ト此うち寡念、飯櫃を持ち來り、椀に強飯を盛らうとしたが、杓子がないので更に立つて奥へ行かうとする。公曉待ちかねたる思入にて、土足のまゝ板敷へ上り片膝つき、寡念を押しのけて櫃を引寄せ、手をさし入れて强飯を掴みつゝ食ふ。
ト彌源太兵衞は泣きながら
彌源太　とんでもないことをなされました！　あの深見なぞが、どうしておたよりになりませうぞ？　あの男は北條どのゝ無二の御家來。決してお心をお許し遊ばすなと、

くれぐ〳〵申し上げておいたものを! それに、只今承れば、右京兆どのをも返す刀でお討取とおつしやりましたが、先刻同宿たちの知らせによれば、北條どのには、途中から俄の退出、御剣の役は、急に仲章どのと振變つたとやら申しますぞよ。

公曉　なに、仲章と?……(ト思入)さういへばアノ後ろ姿が……

ト何か思ひ當ることがあるらしく、さては人違ひであつたかと、殘念がる思入。

此時、僧中の阿闍梨、緋の僧衣に金襴の袈裟を懸けて、淨念をつれ、しづかに正面の襖を開きて出で來り、よろしく思入あつて、公曉の下手にすまひ

阿闍梨　過ぎ去つたる事は今さら申せばとて、せんない儀でござる。所詮は、何事も御宿業でござる。とは申せ、只今あれにて承れば、程なくこれへ三浦の義村どのゝお迎ひが參る、云々との仰せでござるが、たりや、こんどのお企圖は、かねて義村どのと、お打合せあつての儀でござるか? 彼の人は、しかと御同心申してござるか?

公曉　(猶ほ強飯を食ひながら)いや、義村とは、まだ曾て直接には打合せたことはないが、かね〴〵駒若の縁故もあるによつて、深見ノ三郎次郎が懇ろな肝煎り。義村がおれに心を傾けをることは明白ぢや。かやうに本望を遂げた上は、もはや源家の正嫡たるべき者は、おれの外にあらう筈はないによつて、必ず迎へに來るに相違ない。……(淨念に)白湯を持て。

淨念急ぎ下手の奥へ入る。

阿闍梨　いや、それならば、決して御安心には成りませぬぞ。底意の圖りがたいアノ深見ノ三郎次郎。御父上二品さまの御舊臣といふを口實に、無二のお身方らしうもてなし申せど、もと〳〵右京兆の腹心。うかと御信用あらば危うござる。但し三浦の義村どのは、御幼時のお傅でもあり、駒若どのゝ父御なれば――深見が申すやうでないまでも――よもお爲あしうは計らひますまい。併し、かう申すうちにも心元ない。ま、ともかく此山越えに、彼の人の邸までお越しなされ。さなきときは、お身の上が危うござる。さゝ、お支度めされ、お支度めされ。

ト此言葉のまだ終らぬうちに、向うより駒若、髮を亂し、幾らか怪我をした體にて、一さんに驅け來り、すぐ門内に入りて膝まづき

駒若　只今、御本坊へ、先日深見の代人として參候致しました佐越の次郎と申す者、手の者大勢ひきつれ、物の具に身を固め、手々に得物をたづさへて亂入いたしましたゆゑ、何事かと訊ねますると、眞直にお行くへをば白狀せよと申し、無二無三に奥へ踏込み、支へようとする私

共をばさん〴〵に打擲いたし、天井をも床板をも引破り、打毀し、御緣の下までも探しまはり、狼藉を極めをりまする。程なくこちらへも參るかも知れませぬ。早う父が方へお逃げなされませ。

公曉　なに、アノ佐越の次郎が？

ト案外だといふ思入。

彌源太　さてこそ、阿闍梨さまのお先見にちがひませぬ。こゝにござりましてはお心元なうござりまする。ともかくも裏山越しに、三浦どのゝお邸まで、さ、早うお落ちなされませ。

阿闍梨　駒若どのを先達にして（ト淨念と專念とに向ひ）おのしら二人も、途中のお警護をせい。それ、早うお支度めされ。

トこれに公曉思入あつて

公曉　あれほど誓言をした三郎次郎が、今更變がへをしようとも思はれんが、只今の話のやうでは安心は出來ん。ともかくも、義村方まで立退くことにしよう。……あゝ、それにつけても、義時めを討洩いたのが無念なやわい。……阿闍梨、おさらばでござる。

トいひもあへず、實朝の首をひつさげて、忽ち地上におり立ち、一寸駒若らへこなしあつて、つか〳〵と裏手生垣の方へ進む。駒若及び專念、淨念つゞく。やがて柴折戸を押開き、三人は代る〴〵伏してゐる雪折竹を押分け〳〵忽ち見えずなる。これを見送つて彌源太は、やつと胸を撫でおろし、やゝ安心の思入。阿闍梨も嘆息して

阿闍梨　あゝあ、つい近ごろ、天台座主が、今の世の有様をば批判せられて「何を思ひ企つるにも、道理といふものを、つや〳〵知らぬげの世の中」と申されたとやら傳へ聞いたが、あゝあ、さても〳〵淺ましい人ごゝろではあるわい！……ちつとでも遠くお逃し申したい。彌源太どの、それ、表の門の戸を。

トこれにて彌源太兵衞急ぎ門口へと進みて、扉を閉めようとする。此の途端、向うより深見三郎次郎、鎧姿、長卷を携へ、同じく鎧姿の大將の權平太と共に、松明持つたる兵二人を先導させ、大勢の兵をひき隨へて、早足に出て來り、今丁度門を閉めようとする處へ駈け付け、彌源太兵衞を突きのけて、會釋もなく門內へ込み入る。

彌源太　あ、これ、もうし！　理不盡な！　こりや何となされまする？……や！　こなたは深見どのではござりませぬか？

ト止めようとするを深見長卷の柄にて押しのけながら

深見　公曉禪師はいづこに御座ある？……えゝ、のかつせ

い。妨げめさるな。（ト備中の阿闍梨に向ひ）速かに禪師にお會はせ下され。

阿闍梨　いや、禪師には、爰許には見えさせられぬ。おそらく雲の下の御本坊に……

　いはせも果てず

深見　おかくしあるは御無用でござる。餘人の手に掛け申すまいため、それがし急ぎ罷り向うてござる。生中にお隱しあつてはお爲にならぬ。……ふゝ。あちらこちらに、血汐の滴り！　裏手へかけて夥しい足跡！　察するところ、山越しに三浦どの方へ落ち行かれたかも知れませぬぞ。大場どの、こゝは身共が引受け申す。其許は裏手へお廻りなされ。

大場　心得ました。

　ト大場は兵の半以上をつれて、すぐに裏手へ驅け向はうとする。彌源太兵衛あわてゝ我れ知らず立塞がらうとするを、大場主從は突きのけ、突き倒して、忽ち裏手藪蔭へ出てゝ姿を消す。彌源太兵衛は、こけつ轉びつ其あとを追うて入る。

　此うちに深見は、殘兵三人ほどひきゐて二重へあがらうとする。阿闍梨之を止めて

阿闍梨　あいや、公曉禪師に、如何樣のお科がござらうとも、富社別當の後見たるわれらが坊へ、土足のまゝにて亂入せらるゝは、無禮でござらう。

深見　はてさて、恐れ多くも將軍家を弑し奉つたる大逆罪の公曉禪師、生中にお庇ひあるに於ては、同罪はまぬかれませぬぞ。それがしはお爲を存じて罷り向うたのでござる。そこをお退きなされ。何事もそれがしにお任せあれ。はて、お退きなされといふに。

　ト深見は手荒く阿闍梨を押しのけて、兵と共に奧に踏入る。

　此途端、裏手藪蔭より以前の淨念、額際に創を負ひ、法衣も處々は破られ、息を切つて驅け出で來り、緣端近く走り入り

淨念　阿闍梨さま！　阿闍梨さま！　無念でござります！くちをしうござりまする！

　トそのまゝそこに突伏して泣く。

阿闍梨　えツ！　今の追手の爲に、捕はれとならせられたか？

淨念　そこどころぢやござりませぬ。お社の裏山つゞきを八九町ほども行かせられますると、ばつたり出逢ひました三浦どのゝ郎黨衆、長尾の新六、雜賀の次郎ら、二十餘人。さてはお迎ひか、やれ、先づよかつたと思ひの外、矢庭に禪師さまをおつ取り圍んで、無二無三に切つてかかりました。禪師さまは、必死とお働きでござりました

し、私共も一生懸命に支へましたが、無念や、とう〱禪師さまには、雜賀と長尾とに組伏せられなされて、御落命にござりまする！

　ト泣く。

阿闍梨　なに、御落命！　はゝはア！

　ト驚き歎く。此内、彌源太兵衛も、裏手より、力なげに泣く〱、よろめき〱戻り來り、脊戸のかなたに膝まづきて泣いてゐる。

　此以前、深見三郎次郎、兵と共に下手奥の妻戸より出で、板緣を傳うて戻り來り、此知らせを聞きつゝ、しづかに阿闍梨の上手へ廻り、

深見　あゝ、せめても、お命ほどはお助け申したいと存じてをつたに、はてさて、殘念なことをいたしたわい！……阿闍梨はじめ人々のお歎きなさるゝも、ことわりではござるが、かやうに成り行くも、畢竟は、前將軍家の御ゝ時以來、多年わだかまつたる御宿業の致す所で、餘儀もないことでござる。

阿闍梨　（頻りに歎息して、獨語のやうに）あゝ、何事も、今の世は、おのが心の牽く方へおしあてゝの判斷。まことに、慈圓大僧正の申された通り、今は道理といふものの無い世の中か！　あゝ、是非もないことぢや！

　ト歎息の思入。

彌源太　（泣きながら）將軍家にお世繼のお子さまのないばかりか、前の二品さまのお血統まで、此やうに絶え果てゝしまうた上は、（ト歎息して）源氏のお行末は、どうなることやら―　御三代引續いて繁昌した鎌倉も、これからは、どうなる事やら！

深見　あいや、たとひ源氏の御血統は絶ゆるとも、北條の御座ある限りは、鎌倉の幕府は大磐石の礎石同然。心安うお思ひなされ。

　ト此時、裏手より、大場の權平太、以前の兵と共に、どや〱と戻り來り

大場　深見どの、公曉禪師は……

　トいひかけるをおさへて

深見　委細は既に承つた。此上は早速引上げ、此事を御主君へ言上いたさう。……先づお越しなされ。

　ト大場へこなし、これにて權平太は會釋して、兵と共に下手へと進む、深見は人々へ一寸こなしあつてしづかに、兵と共に壇上へおり立つ。

阿闍梨は二重に、彌源太兵衛と所化とは、僧には壇上（平舞臺）に居附のまゝにて愁ひのこなし。

――幕――

義時の最後（三幕十一場）

第一幕

第一場 葛西ヶ谷北條家御別第中門前
第二場 同別第內奥の一室
第三場 伊賀の方の居間

第二幕

第一場 北條家別第の奥庭
第二場 奥庭谷間座禪堂
第三場 座禪堂の背後
第四場 以前の堂内

第三幕

第一場 義時の寢所
第二場 夢の裡の幻景
第三場 再び義時の寢所
第四場 伊賀の方の居間

第一幕

第一場 葛西ヶ谷北條別第中門前

時は貞應三年八月初旬、處は鎌倉葛西ヶ谷附近、屏風山の麓の、北條家の別第である。此第は貞應二年の秋――ちやうど彼の承久の大亂の鎭まつた翌年――の新築で、大倉郷の本第とは、滑川一筋を隔てゝ、さしわたし僅かに一町餘り、奥庭つゞきで自由に往來が出來るやうになつてゐる。

此別第の奥庭には、ゆたかに小富士山や屏風山の裾が取入れてあるので、其一部はさながらの深山幽谷であつて、そこには主人公の好みに成つた和唐折衷の、質素な座禪堂などがある。

主人公の北條右京の權の太夫義時は、ことしはもう六十二歳である。彼れは、去る貞應二年の夏、重い傷寒を病んで以來、それはやがて治つたが、病後の衰弱が甚しく、とかく、健康が勝れないので、侍醫の行蓮法師の勸めによつて、修禪をはじめ、專ら此別第に住み、一時は七分快復の體であつたが、昨年の秋以來、またわるくなり、とかく褥に親みがちなので、勿論出仕などはえせず、庭内の逍遙さへも極めてたまさかで、

起きたり臥たりといふ日が多かつた。
先妻の「吳羽の方」と呼んだのは、十九年前に沒して、現在の夫人は、彼の承久の亂のはじめに京都の守護職を勤めてゐて、官方の不意討に遭つて、勇ましい戰死を遂げた故伊賀の判官光季の妹で、名は榮子、「伊賀の方」と呼ばれてゐた。其腹に出來た長女は一條宰相の中將藤原の實雅に嫁し、次の男子は義時の第五男で、三浦駿河守義村を烏帽子親として、「四郎政村と呼ばれ、ことしはまだ十六歲で、やつと元服したばかりであつた。

義時が、靜養の爲に、別第に移つてからも、伊賀の方は本邸に留まつてゐたから、義時が朝夕の看護は主として二老女と一少年の手に委ねられてゐた。老女の一人は義時が江間の小四郎時代からの附人、故亘理平六兵衞尉の後家で、ことしは七十五歲、「亘理の婆」といふのが其通り名であつた。又、一人は、先妻吳羽の方の姪で、齡は四十五六、故岳島右近の妻であつたが、これも、とうに——姉の在世中に——夫に死別れ、それ以來「右近」といふ通り名で、北條家の侍女頭を勤めて、現在に及んでゐるので、二人とも一族間には——奥方の關係者以外に對しては——中々威權が有り、殊に別第一切の事は、此二人が切盛してゐた。

一少年といふのは、名を深見の小三郎といふまだ十八歲の侍童あがりの美少年で、十三四の時分から主人公の傍去らずである。これは、つい四年前に頓死したまでは「執權職の執權」とさへ唱はれて、威を振つてゐた義時が無二の腹心、深見ノ三郎次郎致興の倅である。父三郎次郎は、其頓死後に、種々の罪跡が俄に露見し、領地は悉く沒收せられ、遺族までも嚴罰を蒙つたが、ひとり小三郎だけは、特別の沙汰で赦され、今も尙ほ仕へてゐたのである。十八歲ではあるが、まだ元服は濟まさないでゐた。

當時、義時の長男、武藏守泰時（四十一歲）は、京都守護の爲に、彼地に赴任してをり、義時の姉の、例の政子の尼御臺は、ことしはもう六十八歲であつたが、尙ほ矍鑠たるもので、年少の將軍藤原の賴經の後見をして、「隱然鎌倉幕府の政柄を握つてゐるとも見えてゐた。そのころ、北條一家の外で、重きを置かれてゐた故老はといふと、第一に大江の廣元入道覺阿、次は三浦駿河守義村などであつたが、伊賀の方との關係上、一部の瞻望の的となつてゐたのは、其兄の伊賀の式部の丞光宗と其婿の宰相中將藤原の實雅であつた。
以上は、「此序幕第一場當時の歷史的背景の概略である。
ところが、貞應三年六月七日の午後四時頃の事である。

主人公義時は、此十日ばかりに、とかく病褥に親しんでゐたのであつたが、其日は聊か快いので、奥庭の座禅堂あたりまで漫歩するといひ出し、老女らの止めるのも聽かず、庭内へ出たところが、病ひが俄に發作して卒倒し、暫くは正氣に戻らなかつたので第内は上を下への騒ぎ。折から奥方伊賀の方も、此十餘日餘り、持病の爲に、床に就いてをり、長子の泰時は滯京中で不在なので、一層の狼狽。が、幸ひにして侍醫の行蓮法師が程なく驅け付けて手當に及んだので、發作は難なく收まつた。けれども、一時は此珍事を傳へ聞いて、八方より馳せ付ける夥しい見舞客の爲に、別第の門前は市をなしたが、戌の刻(午後八時)も過ぎて、七日の月がもう既に傾く頃となつては、おひ／＼に引取り、今は、伊賀の方の實兄、式部の丞光宗、同實子四郎政村、同女婿、宰相中將藤原の實雅、侍醫の行蓮法師などが居殘つてゐるのみである。

中央よりはやゝ下手寄りに中門があつて、其上、下は築地、中門内の上手には第の一部の屋根が見え、それから下手へかけては庭續きの、間近の松杉の繁茂した山々が重疊して見えてゐる。上手の前寄りには、左右へ大きな根を張つた三抱へもあらうといふ樟の大きな幹だけが見えてをり、それから上手の奥へかけては大小の雑木の立木。それから、中門のずつと下手の奥には、袖垣を隔てゝ、侍ひ所の建物が見える。其前の方にも大小の立木。

中門の少し上手に――築地ぎはに――椎か何かの立木の幹が二本。其二本の立木に馬が二頭繋いである。一頭は實雅の乘馬で、一頭は光宗のである。それから樟の根がたには、二人の從者が凭れかゝつて熟睡してゐる。一人は實雅の從者の甲で、一人は光宗の從者、川西の小丹次(二十五六)である。

中央には、其他の伴侍の從者、乙、丙、丁の三人が下手へ向いて不規則に立並び、當別第の老僕、加持の藤内(六十五六)と小童の砂王(十二三)とが、ちやうど中門の前の處に、彼等と向ひあつて立つてゐる。藤内は篠を、砂王は馬柄杓を容れた手桶を提げてゐる。

藤内　はい／＼。いかにも、もはや戌の刻は過ぎましてござるが、御主人がたのお立ちまでには、まだ中々お手間が取れませうず程に、いづれもさぞ空腹でござらう。あの侍ひ所に附いて右へお廻りなされると、お臺所の簀こなたに大溜りがござる。あれにて夕餐をおしたゝめなされ。これはお老女がたのお心入れでござる。……さアさア、ござりませ、ござりませ。

從者乙　それは千萬かたじけなうござる。……(丙、丁を見

返り）では、いづれも、お振舞にあづかりませうか？

従者丙　いかにも、さやういたさう。……（丁、乙に）さ、ござれ〳〵。

ト乙、丙、丁揃つて下手へ入る。

藤内　（三人を見送つて）まづ、これで人間の始末だけは附いた。さて、これからが（ト馬に向つて）おぬしたちだ。なんぼ畜生でも、明るいうちから食はず飲まずの立ちん坊ぢやア可哀さうだ。……砂王どん、こいつらをも早うお厩へ連れて行つて、何か振舞つてやらつしやい。

トこれにて砂王、繋いである一疋の馬の端綱を解き、それを引立てつゝ、手桶を片手に提げて、上手へ入る。其間に藤内は他の一疋の綱を解きながら、四下を見廻して

どうだ！　この、汚い物を取散らしたことは！　何にしろ、俄かの騒ぎで、入りかはり立ちかはり、お大名衆が駈け附けさつしやつたので、御門前も、御門内も、まるで軍場のやうだつたが、やつと是れでかたづいた。……ちよつくら此邊だけでも掃いておかうか？

ト箒を取り直す。此内、上手の奥にて、砂王の聲にて

唄〽方も方にさふらふよ。
　時も時にさふらふよ。
　たんだ一字ちがうた！
　まアさとまアさ、まアさとまアさ。
　まざ〳〵ッと物の怪！
　たんだ一字ちがうた！
　物の怪や物の怪ッ！
　たんだ一字ちがうた！

ト歌ふ聲が聞える。此唄の節は、ざつと狂言小唄のそれに似てゐる。中にも囃子言葉の「たんだ一字ちがうた！」の拍子は、狂言の「でんでんむゥしむし！」のそれである。

藤内　（忌々しげに）えゝ、また始めやがつた！（ト上手の奥に向つて）これ〳〵！　その唄は止めだ、止めだ！

トこのうち砂王、空手で上手から戻つて来て、ふつと樟の根がたに眠つてゐる二人を見附ける。

砂王　やア！　まだ爰に二人だけ殘つてゐらア、御家來衆が！……（ト傍へ往つて見て）あゝ、よく眠込んでゐらア！

トこれにて藤内も目を附け

藤内　お、いかさま！……起さつしやいよ。

ト砂王ずつと近寄つて呼ぶ。

砂王　もし〳〵！　もし〳〵！……（ト一寸ゆすぶつて見て、）中々起きないや。

藤内　ヲヤ、よし〳〵。……ぬしは、此馬をば引張つてゆかつしやい。

ト馬を渡す。砂王それを牽いて、又上手へ入る。藤内は眠つてゐる二人の侍へ往き、ゆすぶつて

おい〳〵！……これさ〳〵！

トこれにて小丹次と甲と一しよに目を覺まし、共に大欠伸をする。

小丹次　あゝ！　ついぐつすりとやつたと見える。あゝ、ねぶたい〳〵！

從者甲　（改めて欠伸をしながら）あゝ〳〵！　わしも同じくでござります。何にせい、昨夜の〳〵夜びやア程になア。

ト藤内二人の顔を見て

藤内　おゝ、だれかと思つたら、中將さまの御家來衆と甥の小丹次か？　若いだけに寄まどひだなう。あはゝゝゝ！

ト小丹次は目をこすりながら

小丹次　だつて、叔父貴、けふで三晩ぶッつゞきの夜深しのお倡だ。ゆうべなんかは夜が明けッちまつた。

藤内　何？　三晩ぶッつゞきの夜深しだ？　それぢやア眠たいのも道理だ。あはゝゝ！　おい！　もうとうに戌を過ぎたぞよ。無腹が空つたらう。さ、早うお溜りへ往つて、お振舞にありつかつしやい。

從者甲　それはや、かたじけなうござります……（ト正面を見て）はてなア！　お乘馬は何處へ往つたかッ？

藤内　なアに！　畜生だつて可哀さうだからなう、今あつちへ引張つて往つて、飼ひ葉を振舞つてゐるところだ。

從者甲　いやも、それはかさね〴〵かたじけなうござります。……（ト小丹次を見返り）それでは一しよにお振舞にあづかりましよかいな？

小丹次　いや、どうか、おれに介意はないで。おれは昨夜で懲りたから、けふは十ヶ詰め込んで來た。まだ何も欲しかアない。

從者甲　さうか？　では、わしは御厄介になつて來ませう。

ト甲は下手へ入る。此間藤内は、上下を箒で掃いてゐる。小丹次は又一つ欠伸をしながら

小丹次　叔父貴、今夜はほんたうに寢耳に水の大騷ぎだつたなう。それでもまア、思つたよりアお輕〳〵ッて濟んで、ようござつたなう。

藤内　うん。おれもなう（ト箒は掃きながら）一時は如何なることかと氣を揉んだが、御典藥の行蓮どのお早速に駈け附けてござつたので、お手當がよう屆いて、まづ大事にもならなんだが、何分一昨年の御大病以來、よかつたり、わるかつたり、二年ごしのお煩ひだ。お締も既う

六十二だ。御自分ぢやもう大概諦つた氣でござらつしやるさうなが、心が弱り切つてござるといふから心配だ。
小丹次　それに、あの、奥さまの御病氣も、此二三日は滅切おわるいと見えて、俺のところの大將や宰相さまは、昨日も、一昨日も、宵からお本第へ詰めッ切りだ。昨夜なんざア夜明しだ。
藤内　はてな！（ト箒を止めて）此間うち、大分御不加減だとは聞いてゐたが、それほどだとは知らなんだがなう。……（ト頭を一つ二つ振つて）あゝ、どうも少べい善くないことが續き過ぎる。（ト獨り言のやうに言つて）それに附けても氣にかゝるのは、あの子供らの歌やアがる唄だ。
小丹次　え？　唄？　あの「まざ〳〵ッと物の怪！　たんだ一字ちがうた！」といふ唄か？
藤内　さうよ。（ト掃き殘しを掃き寄せながら）何となく氣味のわるい唄だ。さうでなくつても、老公さまの今度の妙なお煩ひは、禁廷さまをお三方までも流し物にさつしやつた罰だの、祟りだのと、世間で言ひ觸らしてゐる處だからなう。
小丹次　さう言やア、老公さまは、（ト一寸聲をひそめて）隨分若い時から沒義道な事をなすつた人だといふから、何かの報いかも知れないや。とにかく妙なお煩ひだなう。あんな偉い、膽ッ玉の据わつたお人が、今ぢやア半時とおちついて能う眠らつしやらんばかりでなく、怖ろしく邪推深くならつしやつて、夜はあの二人の御老女と小三郎どのゝ外は、だアれもお傍へは寄せさつしやらんと言ふぢやアないか？
　ト藤内は、それには答へず、少し間をおいて
藤内　とにかく、氣むづかしくならしやつゝには相違ない。何にしろ、困つたもんだ。
　ト言ひ〳〵掃きじまふ。
小丹次　それに、あの、御別居以來、奥方とのお間柄も、一段と不味いらしいなう。一町半とは隔たつちや居ないお別第だのに、奥方がお見舞なされるのア、月に一度か二度だと言ふぢやアないか？
藤内　さア、（ト樟の根がたへ、小丹次と並んで、腰をおろしながら）大きな聲ぢやア言はれんが、つい半月ばかり前に、久しぶりで奥方がござつた時にも、何だかいざこざがあつたやうだし……（トいひかけて）あゝ！　あの奥のお庭に、お座禪堂が出來た當座は、大分お加減も、お機嫌もよかつたがなア！
　ト獨り言のやうに言ふ。
小丹次　若しこゝで、老公さまに萬一の事でもあつたら、跡は如何なるだらう？

藤内　さア、それが心配だ。第一、執權職のお跡目からが、あのお總領の、武藏守泰時さまと、きまつてゐるやうでもあれば、ゐぬやうでもあるからなう。

小丹次　なるほど。

藤内　ところで、その泰時さまと奥方の伊賀の方さまとは生さぬ仲だ。

小丹次　なるほど。

藤内　だから、泰時さまの世になりやア、御當人はもとより、實のお子の、あの四郎政村さまも、お婿の宰相實雅さまも、おのしのところの大將も、おのづと今ほどにア幅の利かないことになるからなう。

小丹次　なるほど。

藤内　ゆうべも一昨日も（トいひかけて一寸考へ）お三人で夜深しの相談といふなア、事によると……

　トいひかけたが、急に口を噤む。

小丹次　え？

藤内　いや、考へて見りやア、お跡目の事や何やかや、お氣が揉めてならない筈だ。言はゞ、あの牧の方さまと、ちやうど同じやうな廻り合せだ。

小丹次　牧の方さまといふのは、御先代時政公の、二度目の奥方のことだらう。たしか謀反か何かたくらんで、それが露れて、自害をさつしやつた人だらう？

藤内　その方だ。（ト昔を偲ぶやうに）あの時の一味は、お婿の平賀右衞門の佐朝雅さま。實のお子の名が政範さま。其時分、相模守さまといつたのが、なさぬ仲の今の老公さまだ。……（トいつて、口の内で）方も方、時も時。……まさとまさ。……全くたつた一字ちがひだ！

小丹次　え？

　ト此途端、向う（花道）より醫師紀河の矩秀（四十歳位）旅裝束にて、急がしげに出で來り、すぐに中門へ入らうとして、忽ち藤内を見附け、立ちどまる。

矩秀　や！　これは〳〵、藤内どの！　先づ以て御同樣に大慶至極の儀でござりましたなア！　實はなア、われら、藥草採り集めのため、今ン日箱根路へと志し、既になア、あの大礒近うまで參つたる處、宿元からの早飛脚によつて、老公さまの御容體俄に御變動と承つたのでびつくり仰天、すぐさま取つて返しましたことでござるが、先づ以て速かなる御囘春には、大慶千萬でござる！　や、さてさて、御高運な儀で、いやもう、重疊々々！　御同前に、祝著至極の儀でござつた。……お！　どなたかと存じたら、伊賀さまのお館の、小丹次どのか？……お見舞のお使でござるな。ではまだ御主君には、御當邸に御座なされますな？

小丹次　はい。さやうでござる。

矩秀　いや、それは重疊！　多分さうあらうと存じてまゐつた。上首尾々々！　どれ、早速お目にかゝつて參らう。御免下され。

ト矩秀そは〳〵と急いで中門へ入る。

小丹次　相かはらず氣ぜはしい男だ。

藤内　肉親の兄弟ちふものは爭はれんものだ。おぬしは記えちやアゐまいが、あの男の兄は紀河の宗近といつて、よう似たあわて者の醫者であつたが、慾をかいて故の方さまの御謀反に一味して、とう〳〵命を玉なしにしてしまつた。

小丹次　さういや、あの男も、この二三年こつち、頻つて俺のところや伊賀の方さまに取入るやうだが、つまり御典藥にでもならうといふ慾張りからだらう。

藤内　いづれ、そんなこつたらう。……（歎息して）あゝ、なぜ人は身の分限を守らんで又しても又しても慾をかはくか！……な、下々の者が慾で身を誤るのも道理かい。上の上の禁廷さまさへ――じつとしてござれア何の事もないのに――一昨年のあの御謀反。その結局が、あゝしたお氣の毒な、物證もないお身の果だ。唐にも天竺にも例のない空おそろしい事だ！　禁廷さまを、しかもお三方まで島流し！……あゝ、どうかこれッきりで、何事もなければよいが。……（トいつて、半分口のうちで）まさとまさ。時と時。……全くたつた一字ちがひだ！

小丹次　え！（ト藤内の顏を見返つて）どう？　何か？

ト此途端、上手の奥にて、又砂王の聲にて

唄〽まアさとまアさ、まアさとまアさ。
　まざ〳〵ッと物の怪！
　　たんだ一字ちがうた！
　物の怪や物の怪ッ！
　　たんだ一字ちがうた！

藤内　えゝ、いま〳〵しい奴だ！　又あの唄を歌やアがる。……（ト上手に向ひて）これ〳〵！　止め。止め、止め！その唄はやめだ〳〵！

ト大きな聲にて叫ぶ。唄止む。藤内は溜息をして

あゝ、氣にかゝることだ！

ト此うち上手より砂王、馬柄杓で空の手桶を叩き、拍子を取りつゝ、又歌ひつゝ出て來る。

砂王唄〽方も方にさふらふよ。
　時も時にさふらふよ。
　　たんだ一字ちがうた！
まアさとまアさ、まアさとまアさ。

まざ／＼ッと物の怪！
たんだ一字ちが……

藤内　えゝ、また歎ァがるか？　その唄は止めたちふに……

ト飛びかゝつて砂王の襟上を捕へてこづく。

砂王　(泣面になりて)　あゝ、痛い／＼……勘忍してくんな……勘忍してくんな……

小丹次　これさ、叔父貴……そんな手荒なことを。

ト小丹次中へ入り、よろしく止める。藤内とゞ砂王を突き放す。砂王つんのめつて膝を突き、膝頭をすりむいたらしく、ワーッと泣き出す。

第二場　同別第内奥の一室

正面の上手寄り五間の間の中央一間は妻戸。其上下二間宛は壁。折り曲つて上手一帯は蔀格子を下して在り、又、下手へ折り曲つたる奥寄りの二間程は正面と同様の壁、前寄りの二間程は帳(壁代)を垂れ、人物は屢々それを褰げて往來する。

此帳の下手に廊下口。正面の二間程は蔀格子を下し、ずつと下手の見切は妻戸。こゝからも折々人物が出入する。

爰に、正面奥の妻戸前に、深見小三郎(十八歳)まだ元服せざる童形の扮へにて、妻戸の掩ひになるやうな態度にて此方向きに端坐し、今奥へ行かうとしてゐる紀河の矩秀を留めてゐる。矩秀は、やゝ斜に後ろ向きに立ち身、二人とも既う大分激昂してゐる體である。時刻は前の場のすぐ次ぎ。よき處に燈臺一脚。他には何等の調度も見えない。

矩秀　はて、お退きなさい。お通しなさい。光宗さまに是非ともお目にかゝらねばならん急用がござるのだ。お通しなされ。

小三郎　いゝや、老公さま御容體お大切の折柄でござりまする。お取次ぎさへ承りをる手前に只一應の御挨拶もなく、御病間へ推參めさるは不躾でござる。お控へなされ！

矩秀　はて、餘人ならば存ぜんことだが、自分は奥方伊賀の方さまのお引き立てを蒙りをるお抱への醫師でござる。御容體伺ひの爲には、隨分御病間へも推參いたす。はて、お通しなされと申すに！

小三郎　いゝや、通されません。其伊賀の御ン方さへも、御遠慮遊ばされて、お取次ぎなしには、御病間へはお通りなされません。殊に、只今、お傍には天下無双の名醫御典藥の行蓮どのが附添ひをられまする。かた／＼以てお手前などが推參めさるには及びません。御無用でござ

ろ！

矩秀　何だと？……（ト閉き直つて）これは異なことを申される。……成ろ程、行蓮どのは天下無双の名醫でもござらう。が、それを何の爲に持出すのだ？……ちよこ才な！

小三郎　（くわつとなつて）ちよこ才とは！　何がちよこ才でござる？

矩秀　はて、それがちよこ才だ。……これ、なんぼ御寵愛を蒙つて、大寺の兒衆並に幅が利けばとて、あんまり増長しめさると、父御三郎次郎どの同様、はじめの榮華は末の零落、みじめな身の果となりますぞよ。

小三郎　（眞蒼になつて）やア！　大寺の兒衆並に御寵愛を蒙つたとは、聞き棄てにくい。何が兒衆並でござる？

矩秀　はて、兒衆並でなからうか？　お手前ことし幾つだ？　元服もう十八よりやア少くはあるまい。それに何だ？　元服もせず。……えゝ！　その生ツ白い面附きを見るたびに胸氣がわるくなる。奥方とのお仲たがひも、つまりは、おぬしらから起つたことだ。……ちよこ才な！

トいひすてゝ、つッと通りぬけて、奥へ行かうとする。途端に入れ代つて、小三郎は矩秀の袖を控へる。

小三郎　いゝや、お待ちなさい！……奥方とのお仲たがひも、手前らから起つたことゝは？　さ！　其譯を承りませう。

ト涙聲になつて、せき込んで、身をふるはせてゐる。

矩秀　えゝ！　おはなしなさい。

小三郎　其わけを承らんうちは離しません。

矩秀　しつこい！　何のかのと、御用がおくれる。離さつせい。……えゝ、離さつせいといふに！

ト立廻りになる。とゞ、矩秀は手荒く小三郎を突離し、すぐに妻戸を開けて、奥へ行かうとする。途端に、義時の侍醫、行蓮法師（五十七八）小坊主（十二三）一人を從へ、老女右近（四十五六　垂髪、小袿、に送られて出る、出逢ひがしら。

行蓮　ほい！　これは紀河どのか！

矩秀　や！……これは行蓮どの！　これは〳〵、粗忽千萬！　御免下され。

ト右近は、矩秀へ追ひ縋らうとした小三郎を押し隔てつゝ

右近　（しづかに）小三郎どの、……此體は？

ト小三郎が何か言はうとするうちに

矩秀　いや、なに、これは物でござる。つい、その、いささか取急ぎましたので……いや、心ぜきにござれば、眞ッ平御免下され。

ト矩秀はそこ〳〵に會釋して、奥へ入る。行蓮と右近と

は、それを見返つて、不審の思入。右近はやがて小三郎を見返り

右近　小三郎どの、御典藥どのへ、いつもの通り、お茶を。

トわざと席をはずさせる。

小三郎　心得ました。

ト下手へ入る。右近會釋して行蓮を上座に着かせ

右近　改めて伺ひまするが、老公さまの御容體はいかゞにわたらせられまする？　もはや甚うお氣づかひ申し上ぐる程でもござりますまいか？

行蓮　されば、何分にも、近ごろ不思議のお病痾でござるゆゑ、かんまへて御油斷は相成りませぬが、あゝした御卒倒、御氣絶は、御疲勞の餘りとて、間ゝあること。さしあたつての處、強ち御懸念にも及びますまい。したが、先頃も聊か申しおいたる通り、病邪およそ六種のうち、とりわけ座禪不調、鬼病、業病の此三つは、醫師の力、藥餌の力ばかりでは覺束なうござる。座禪の不調は專ら座禪によつて治すべく、鬼病は神咒法力を恃むべく、さて又業病には、何よりも先づ奇特の御懺悔こそ肝要でござる。われら、一昨年以來、頻つて禪機の御修行をお勸め申したは、畢竟そこを存じてゞござつた。お加持、お祈禱の儀は、もとより御如在のあらう筈なし。只心がゝりは第三種のお業病でござる。前世に餘んの善業あれば扁鵲も能く重患を治し、前世に餘んの惡業あれば、如何なる靈藥の力を以ても、かりそめの少病だに、之ゝ治することは甚だ難しとござる。

右近　では御當症は、あの、お業病ぢやといふお按檢でござりますよな？

行蓮　されば、かの不思議なお譫語といひ、いよ／＼募らせらるゝ御不眠といひ……

ト此時、小三郎天目に抹茶を盛り、臺に載せ、捧げて、出る。

小三郎　お茶めしあがられませう。

行蓮　これはかたじけなうござる。……（ト受取りて半分ほど飲み）時に、過日も申しおいたれば、よもや御病人にお茶を參らせらるゝやうの儀はござるまいな？

小三郎　はい。其後は、いかやうに仰せられましても、決してさし上げませぬ。

行蓮　（うなづきつゝ飲み了りて）まことに、此物は、命を養ふの仙藥、齡を延ぶるの妙術。山谷これを生ずれば、其地神靈たり、人倫これを採れば、其人長命なりとさへござれども、御不眠などの爲には大の敵藥。かんまへて御無用でござるぞ。

小三郎　其お言葉に附きまして、甚だ卒爾ながら、手前が聊か承りたい儀がござりますが……

ト言ひさして躊躇する。

行蓮　何事でござるの？

小三郎　あの、日頃深く酒を嗜みまする者が、茶の毒に中り、頓死いたすなどゝ申すことがござりますか？

行蓮　（言下に）さやうな儀はふつに存ぜん。既に前將軍家實朝公御不例の折、先師榮西禪師が、これは只御宿醒の餘りと按檢しまゐらせ、濃茶一椀を獻じめされたる處、忽ちに御平癒の先例がござる。すなはち茶は寧ろ酒の毒を解する妙藥。……なにゆゑ然樣の儀をたづねめさる？

小三郎　さア、強て其儀をば承りをりましたものと相見え、亡父三郞次郞事も、生前、大酒の後には、必ずのやうに茶を服用いたしをりましたが、ある朝――即ち臨終の前の事でござりましたさうな――例の通り、一椀の茶を服すると間もなく、身心激しく惱亂いたし、わづらふこと僅に半時ほどで相果てました。全く茶毒の爲す所と、其際紀河の新秀どのは申されたとやら承りましたが、何とも以て不審に存じまして……

ト いひかける。

行蓮　あゝいや、いかな濃茶の妙用も、多年累積の激しい酒毒に對してはな……

ト いひかけたが、俄かに思ひ出したといふ風に

おゝ！　すぐさま尼公さま御許へ參上仕るべきお約束であつた。では、御免下され。

ト急に席を起つ。右近も小三郎も席を離れて見送らうとする。

あ、そのまゝ〱。

トとゞめて、行蓮は、小坊主を從へて、下手へ入る。小三郎は一旦起ちかけて又坐り、じつと思案に沈んでゐる。

右近は立つたまゝ、思入あつて

右近　小三郎どの、これへ。

ト上手へ戻りて、座に着き、四下へこなしあつて

ちやうどよい折柄ゆゑ――只今こなたの申されたことを聞くに附けて――ちと折入つて知らせておきたいことがござる。……もそつと近う。

ト小三郎膝を進める。右近思入あつて

これ、こなたも、父御致眞どのゝ最期をば、定業でないと疑うておやるの？　いゝや、隱すには及びませぬ。疑ふのは道理千萬！

ト更に膝を進めて、更に聲をひそめて

さうして、若し定業でないと定り、下手人が分つたら、父御の敵が討ちたいか？

ト小三郎は、俯向いたまゝ、身を顫はせつゝ默つて泣いてゐる。

おゝ、無念なは道理！　其筈、其筈。で、其下手人に、大抵目星が附いてござるか？

トこれにて小三郎、尚ほ俯向いたまゝ、小聲にて

小三郎　只、あの紀河の兼秀の振舞を、如何にも不審なと存じまするばかり。……

トいひさして、涙を拭ふ。

右近　はて、あの男なんぞは木偶も同然。どこにどんな木偶つかひが……

トいひさして「あゝ、ついうつかり言つた」といふ思入あつて、口を噤む。小三郎よろしく思入。

右近は歎息して

あゝあ！　一時は老公さまの御名代とまで時めき、懐ろ刀とも噂され、世人に怖れられなされた、あの、三郎次郎どのゝ嫡男と生れなされたそなたが、ほんにまア夢のやうな落ちぶれやう！　父御の頓死にかてゝ加へて、思ひがけないお咎め、一族を挙り、殘らずお處刑。たつた一人殘つたそなただけが、不思議の幸運。老公さまの御寵愛受け、けふまでは人々にも羨まれてござつたが、このよひのやうな御重儀が續くとすると、以後は用心せにやなりますまいぞよ。

トしみ〴〵と言ふ。此間も小三郎は、俯向いて泣いてゐたが、此時顔を擧げて

小三郎　と、おつしやるわけは？

右近　（又あたりへこなしあつて）　卿は、父御三郎次郎どのは、なにゆゑにお咎めをお受けなされたか、其仔細をお知りやつてゞござるか？

ト小三郎漸く涙を収めて

小三郎　くはしい事は存じませぬが、攝津の國の地頭代とかを承りました前後から、次第に私曲の振舞募り、お館を笠に被て、暴威を振ひ、下の者を虐げ、身分不相應の驕りに乘じ、剰へ、長江、倉橋二ケ庄の事について、御鳥羽の院さまの御寵姫龜菊とか申す白拍子をさん〴〵に侮り辱め、それが原にて本院さまの御逆鱗甚だしく、遂に去る承久二年の、あの御大亂にも及びましたとやら。それやこれや重ね〴〵の、公け私しの曲事が、咎めの本のやうに承りをりまする。

ト語り了りて又涙に暮れる。

右近　いや〳〵。まだ其外に謂れがある。

トこれにて小三郎きつと顔を擧げる。右近じつと其顔をながめて

こなたの心根がいぢらしい。打明けて話しませう。……其頃、京都の守護職であつた伊賀の左衛門の尉光季どの、また其弟御の式部の丞光宗どのと卿の父御とは、久しい以前から、犬と猿との仲らひ。随つて意趣遺恨もかさね

がさね。兄御贔屓の、あの伊賀の御ゝ方が、何かにつけて、老公さまへ、父御をば讒訴三昧。つまりは、御ゝ方がお腰入れ前からの御功臣であるだけに、伊賀家一族の爲には、目の上の瘤、それに、先の奥方呉羽の前――わらはの伯母――の氣に入りであつたといふも彼の人達には――わらはも同様――不興の種。なればこそ、まだ何のお咎めもなかつたうちに、父御の、あの奇怪な死方は、たれが目にも非業の最期――毒殺――としか思はれぬ。のみならず、死後には、思ひがけぬ寢耳に水の御成敗。所領地悉く召し上げられ、妻子眷族までも嚴しいお刑罰。それさへあるに、其召し上げられた所領地を、そのまゝ殘らず、伊賀家一族へ下されたといふも、不審の至り。

　ト此間、小三郎よろしくこなし。次第に激昂する思入よろしく

小三郎　では、父致輿の御勘氣は、あの伊賀の方御兄妹の……

　トせき込んで問ひかける。

右近　（上手を見て）あゝ、これ！……

　ト此時、上手妻戸口より一條宰相の中將藤原の實雅（二十七八歳）立烏帽子、狩衣、先きに、四郎政村（十六歳）烏帽子、直垂、つゞき、小童蜂王（十三四歳）紙燭を持ち、案内して出る。

右近、小三郎はこれを見て席を退りて迎へる。右近うやくしく手を突きて

これはく！　もはや御退出でござりまするか？

　ト蜂王は小三郎に向ひて

蜂王　小三郎どの、只今老公さまお目ざめにて、其許をお召しにござりまする。

小三郎　はッ。心得申した。……（ト人々に向ひ）御免下されませう。

　ト小三郎は蜂王と共に會釋して、上手の妻戸口へ入る。最前の天目は、臺のまゝ、一隅に殘してあること。

右近　（實雅に向つて）其後の御容體は、いかゞにいらせられましたか？

實雅　されば、お目ざめ後の御氣色いかゞにやと、ひそかにお案じ申してをつたが、一向に變はらせられた御模様もない。此上は、ひたすら、御疲勞の募らせられぬやう、心して御介抱めさるゝが肝要でござらうぞ。

政村　あの亘理の婆は、まだ御所から退つてはまゐらぬか？

右近　はい。まだでござりますが、もうやがて罷り歸るでござりませう。嘸かし尼御臺さまにも、早速の御平癒を聞し召しまして、御安心遊はしたでござりませう。

實雅　安心と申せば、伊賀の御ゝ方にも、折から、お引き籠

り中の事とて、御自身にてお見舞の出來ぬだけに、ひとしほお心づかひばしなされておはさうず。いざさらばすぐさま、お本舘へ罷り越して、くはしい御模樣をばお知らせ申すことゝいたさう。… 政村どの、そのもとは？

政村　では、それがしも、兄上と御一しよに。

ト二人起ちかける。此時、右近下手を見て

右近　あゝ、もし！　ちやうど、亘理どのが退つて見えられました。

ト下手より老女亘理（七十五歲）出る。齡には似ず矍鑠としてゐる。

政村　おゝ、お婆！　今噂をしてをつた處ぢや。尼御臺さまも、定めし御安堵遊ばしたであらうなう。

亘理は下手に着席して、よろしく會釋する。

亘理　はい〳〵。殊の外のおよろこびにて、尙ほ此上とも油斷なう、折角御看護申し上げますやうとの御ン仰せつけにござりました。……つきましては、ちやうどお二方さまお集りの好い折柄――尼公さまの別してのお傳言をば只今申し上げまする。お聽き下されませう。……（ト聲をひそめて）尼公さま內々の御ン仰せに、執權夫婦の仲らひ、近來とかく睦じからぬやうに聞き及ぶ。別第とはいへ、滑川たゞ一筋を隔てわづか一町あまりにも足らぬ處に住ひながら、二年ごし病褥に惱む夫を、此中は絶えて看護をだにせぬといふは事實歟？　まことならば、けしからぬ事ぢや。さやうの事より、ともすれば、種々の流言の起る習ひ。汝立歸らば、泰子をはじめ實雅、政村へも篤と此旨を申し傳へて、かんまへて不祥の噂ども立てさせぬやうに心させい。承久の大亂このかた、天下は靜謐などゝ思はゞ、油斷大敵。血族の者內輪にて爭ふときには、忽ち外々の侮りを招くといふ格言がある。北條一家の安危存亡は、取りも直さず、日本全國の安危存亡ぢやといふことを忘るゝな。と此尼が言うたと一同へ申し聞かせい、との、くれ〴〵の御ン仰せ附けでござりました。

ト此間、實雅と右近とは、頭を垂れて、只默然として聽いてゐる。政村は深く感じたる思入。

政村　おゝ！　おつしやりつけの趣き。きつと承つた。ちやうど今、兄上と御一しよに、母上の御ン許へ參らうと思うてゐた處ぢや。……兄上、では、直に參りませう。

實雅　（うなづきて）　いかさま。さやういたさう。

ト二人席を起つ。

右近　では、お見送りを。

ト右近は亘理へこなしあつて、共に起つ。

實雅　あゝ、それには及ばん。

右近　いえ〳〵、せめてお廊下先きまで。

ト二人附いて、四人ともに下手へ入る。暫く空舞臺。

天目は尚ほ殘されたまゝになつてゐる。

やがて、上手妻戸口より伊賀の式部の丞光宗（四十五六）、烏帽子、直垂、先きに、紀河の矩秀、片手に硯箱を捧げ持ちて、うそ〳〵と從いて出る。

光宗　（四下を見て）むゝ！　だれも居らん。……ちやうど幸ひ。その、料紙、硯を。

ト席に着く。矩秀もよろしく上下へこなしあつて、座に着き、硯箱を光宗の傍らへさしおく、光宗はすぐに硯箱を開きて、墨を磨りかけながら

矩秀、おのしはあの容體をどう思ふ？

矩秀　お脈體を伺ひませんゆゑ、しかとしたことは申しあげかねまするが、お顏色といひ、お息づかひといひ、所謂死相がもう既に現れてをりまする。迚も此末十五日とはお持ちこたへはむづかしからうかと存じまする。

光宗　（磨つてゐた墨の手元を一寸とゞめて）先きがさう見え透いてをるとすると、早急にやらねばならんかな。……（ト又墨を磨りかけて考へ）おれはこれから本第へ往つて――多分宰相も、もう參つてをるであらうから――何かと打合せをしておく積りだが、おのしは此――今おきに認めるから――一通を、急いで弟の朝行と光重へ屆けてくれ、さうしてそれが濟み次第に……（トいひさして）とはいへ、もう何時だらうの？

矩秀　まだ亥の刻が、やつと迴つたぐらゐでござりませう。

光宗　では、それが濟み次第に、おのしも本第の己方の居間へ來てくれ、まだいろ〳〵頼みたい事があるから。

矩秀　委細承知仕りました。

ト光宗は筆を執りあげ、二三行書きかけて、又暫く考へ、半分獨り言のやうに、とぎれ〳〵に

光宗　あの泰時めは……強ち恐るゝにも足らんが……いざとなつて、最も荷厄介なのは、あの尼どのだ。……ことに、手管のまだ整はんうちに、あの遠さまに出しやばられたが最期、何もかも水の泡どころでなく、轉くツて流し物、重ければ、一同が命の種なし！……といつて、荒療治をした日にやア、たとひ事は成つても、第一に、身内、外樣、諸大名の思はく。……何にしろ、故二位どの以來、源氏三代の動かぬ礎ゑと、此何十年間、築きあげて來た――女に附き物の――あの不思議な人望と勢力とが怖ろしい！

ト半分は矩秀へ、半分は獨り言のやうに言ひ〳〵、時時筆を走らせ、書面を書いてゐる。

此以前、小三郎、奥より戻り來り、すぐに妻戸を開け、つツと入らうとして、急に身を退り、そつと妻戸を閉め、たゞ細目に少し開け殘して、内の樣子を窺ふ。之より先き紀河の矩秀は、光宗の獨り言の中頃に、片隅

に在る天目に目を附ける。さうして、最初は、何氣なくそれを手に取つて弄つてゐたが、とゞ偶と思ひ附いたといふ風に、膝を進めて、光宗に向ひ、小聲にて

矩秀　もし！　もし！　式部の丞さま。

光宗　（なほ筆を走らせながら）　何だ？

矩秀　もし！（ト天目を見せて）これをお用ひになりましては、いかゞにござりませうな。

ト此時、下手より直理の襖と右近とが連立つて戻り來り、これもすぐに內へ入りかけて、急に身を退り、互ひにこなしあつて、壁代の蔭から、竊かに內の樣子を窺ふ。光宗は、筆を止めて、天目を見て

光宗　といふのは？

ト矩秀よろしくこなしあつて、小聲で

矩秀　あの深見めをやりましたのと、同じ匙劑か、一ち手輕さうに存せられますかなア。

ト光宗思入あつて

光宗　あの婆アさまをか？

矩秀　さやうで。

光宗　どうして飲ませる？

矩秀　やつぱりお茶に限りませうかな？

トあとは手眞似にて飲む眞似などいろ〳〵。三方、三人、同時に、さま〴〵の思入、こなし。

第三場　伊賀の方の居間

上手には、斜に上段の間。これは伊賀の方の寢所。其前一面に簾が垂れてある。正面奧、中央三間の間は壁代、其うしろには總板敷の、廣々とした入側。壁代の上下には柱、上手の柱から寢所までの間一間餘は壁、其壁際には二階厨子。それから少し下手へ離れて古風なる鎧櫃。壁代の下手の柱から更に下手へ一間餘は壁、それから斜に折り曲げて、一間半程の間も壁。此壁に添うて三段に設置いたる白木の神棚。式の如く、新薦を敷き垂れ、最上段には白幣と明鏡とを安置し、供物、燈明など、いづれも式の如く、据ゑてある。よき處に、神酒の瓶子二箇、其一には紅色の紙を、其二には藤紫色の紙を、末廣に卷き立て栓の代りに挿してある。神棚の下手の壁の見切柱からは、更に直角に下手へ折れて、一帶に蔀格子の下りたる次の間。其下手の突當り（見切）は襖戸。

こゝに、上手、上段の間の前に、伊賀の方（四十二三）垂髮、小袿、假病にて引籠りなる體。假病ではあるが、仔細あつて、つい二三日前まで殆ど斷食ともいふべき難行をつゞけてゐたゆゑ、顏色憔悴して實の病人のやう。髮附などもみだりがはしうなつてゐる。其下手、

や丶奥へさがつて實雅、や丶前寄りのよき處に政村住ひ、談話なかばの體。時刻は前の場のすぐ後、(午後十一時ごろ)。よき處に燈臺一脚。

政村　もう其通り、尼御臺のお耳にさへ入つた程にござりますゆゑ、母上と父上とのお仲たがひの事は、今はもう誰れ一人知らぬ者はござりませぬ。それのみならず其お仲たがひの原因は、當北條家の跡目相續の事について、父上と母上との御意見が合はぬゆゑぢやなぞと、下々まで、頻つて噂いたしをりますげな。それもこれも、所詮は、母上が父上と御別居なされて、こよひのやうな折にさへ、お見舞もなされませぬゆゑでござります。北條家の安危は、天下の安危ぢやと、おつしやりました尼御臺のお言葉もござりますゆゑ、明日は、どうぞ、曲げても父上をお見舞なされて下されませ。

ト政村思ひ入つて言ふ。少し間を置いて

伊賀　(しづかに)世上の取沙汰や尼御前の申さるゝことなぞを、さう氣にするには及びませぬ。尼御前も、昔は女將軍とまで唱はれた男優りでもあつたのぢやが、取る齡には勝たれぬと見えて、めつきりと目に立つ此二三年このかたの老耄れやう！　畢竟、例の泰時が可愛さの依怙贔屓からのお世話燒きぢや。一々取上げるには及びませぬ。……政村、實は、今日までは言ひませなんだが、そなたも既う十六歳――幸ひ、實雅どのも同席ゆゑ――こよひは、改めて、萬一の時の覺悟をば申し聞けておきまする。よう聽いておきめされ。……尼御前の言葉までもなく、當北條家の盛衰が、取りも直さず、日本全國の治亂盛衰の基ゐでもあればこそ、わしが此二年ごしの心づくし。いかにも、噂の通り、わしは、あの泰時を跡目といふことが大の不承知でござるのぢや。……こゝをよう合點しておきや。……これが太平無事の世でもあらば、あの泰時のやうな、意地のない、似而非賢人に、家、國の大事を任せてもおかれようけれど、例の先年の、あの禁廷の御謀叛だけは、幸運と、難なく治まつても、兵馬の頭領たる肝腎の將軍家は、あの通りの木偶人同然。それを操る執權職の父御義時どのまでが、以前とは打つて變つたあの容體。さなきだに、武家にも、領家にも、野心を弓のやうに引き絞つて、隙もあらばと覘うてゐる者の多い折から、今若し再度の御謀叛でも起らうものなら、此鎌倉は直にも滅亡。ほんに、今こそは、當北條家の安危存亡の分れ目でござる。生中に、あの、世に後れ、智慧絶れのした尼御なぞの差出口がなく、又あの泰時のに義立なぞがなくば、三上皇さまをさへ幽謫めまゐらせた當家の威勢を以て、天が下を一みじきに靡かすのも強ちむづかしいことではなけれど、心がゝりは、父御が萬一

の礎に、是非とも建直さにやならぬ其新館の造營の最中に、内輪同志の氣込が揃はず、剰へ、肝腎の大黒柱があの脆弱とみなぞであつたならば、どうして、四方内外から崩れかゝる大津浪のやうな、天下の動亂が防がれませうぞ？　泰時なぞの眞似をして似而非仁義立をする時節ではない。父、兄に成り代つて、きつとした覺悟をせにやならぬ時でござるぞ。

トよろしく思入あつて言ふ。政村は始終うつむいたまゝ、じつと默つて聽いてゐる。

實雅（政村へ思入あつて）まことに、母上の仰せらるゝ通り、今の世に人の頭たらんとする者は、先づ威が無うては叶ひませぬ。將は大を誅するを以て威となし、小を賞するを以て明となすとござる。されば一人を殺して三軍震るべくば之を殺し、一人を賞して萬人悦ぶべくば之を賞す。殺は大を貴び、賞は小を貴ぶの道理。彼の先年の大亂の砌りなども、老公が先蹤なき英斷を施しめされたればこそ、非月ならずして天下靜謐。又、故源二位どのゝ如きも、常に、克く忍びがたきをば忍び克く斷ずべきをば斷ぜられたればこそ、威武忽ちに一天下に光被し、ともかくも前後三代に亙る榮華をば閲せられた。即ち、公の覇業は、其人德と機運とに因るとは申せ、かたはらまた、克く忍び、克く斷ぜられたが爲でもござる。

……政村どの、母上の只今のお言葉は、つまり、此道理をば仰せらるゝのであらう。人を殺すも、人を安んずるが爲ならば可なり、とは古人の金言。慈悲、仁義、溫順は、いづれも有りがたき德行ではござるが、時と場合とを辨へねば、却つて身を誤り家國をも誤る基ゐでござるぞ。

トわざと遠廻しに說諭する。政村は尙にも俯向いたまゝ、默つてゐる。

伊賀（政村へ思入あつて）政村、あれを見やれ。（ト正面下手の神棚へこなしあつて）あれなる正八幡大菩薩は、鶴ケ岡のを移したのぢや、と他人には言うてゐれど、實は故鄕佐伯の鄕の氏神。そなたの爲には、祖父上、伊賀の守朝光どのゝ信仰なされたをば緣起に、二年このかた此居間の裡に勸請しまゐらせて、日夜心願を籠むるには、深い理由のあること。……あの神前の瓶子の紙の、紅ゐは平、藤紫は藤原。いふまでもなく、我が家即ち佐伯氏の姓は藤原。此實雅どのも同じ姓。又、北條は平なれば、そなたは紅ゐ。其紅ゐと藤紫の、色濃かに、末長かれと、とりわけ、此十日あまり四日の間は我が身を責めて、精進潔齋、腥きを絶ち、穀類をも十が一に減じ、毎夜、人の寢しづまる夜半を俟つて、ひそかに庭井戸の水を浴び、一心不亂となつて祈つたところ、ほんに、信あ

れば驗ありとか、不思議や、きのふけふは、いづこともなく聲あつて、何くれとなう、未來の事共をば告げさせらるゝ。其中にも、「もはや源氏の世は亡び果てたり、行く末は、ひとへに藤原と北條平の世の中なるぞ！」と紛ふ方もない、まざ／＼とした神のお告げ！

ト さながら今現に其聲を聞いてゞもゐるかのやうに、じつと目を瞑ぎ、ちよつと語を絶ちて暫く瞑想に耽るかとも見えた。が、やがて又目を開きて

伊賀　……そなたの身の務めは、返す／＼も、重うござるぞ。父御の身には、いつ、どのやうなことがあらうかも知れぬ。今から、覺悟してゐねばなりませぬぞ。

ト じつと思入あつて言ふ。

政村　御教訓は、一々よう會得いたしましてござります。かんまへて忘れぬやうにいたしまする。……（ト いつたが、暫くもぢ／＼して）しかしながら、母上さま、わたくしは、まだどうも、先刻聞いたことが氣にかゝつてなりませぬ、御病氣のせゐで、父上には、とりわけ此頃中は、何事につけても怖ろしうお僻みなされまするげな。父上に由ない御疑心を起させ、不快な思ひをおさせ申さぬ樣ばかりになりと、母上、どうぞ、明日は、お見舞ひなされて下されませ。

ト 思ひ入つて言ふ。これにて伊賀の方漸くうなづき

伊賀　よし／＼。それほどにいやるならば、其中に見舞ひもしませう。氣づかふには及びませぬ。……

ト 此時、九つ（十二時）を知らせる鐘の音が聞える。

しかし、いつの間にか、いかう夜が深けました。もう、あれは、九つでもあらう。そなたはもはや寢間へ往んで、お寢みなされ。

政村　では、お先きへ寢みまする。御機嫌よろしう！……兄上、御免下されませ。

ト 政村會釋して、下手妻戸口より出て行く。

ト すぐに正面の壁代を褰げて式部の丞光宗出る。伊賀の方見て

伊賀　おゝ、兄上か！

實雅　これは！（ト席を讓りて）いつの間に？

光宗　とうに參つたが、話なかばの體ゆゑ、わざと差控へてをつた。（ト席に着きて）老公の容體は、思つたよりもわるうござるぞ。藥師は、此末、長うて十五日とは持つまいやうに申してをる。いづれ、あの行蓮坊からも、委細の容體を京都の泰時方へ申し遣すであらうから、多分、夜を日に繼ぎ、晩くも十數日以内には、彼仁立歸り參るに相違ない。さすれば、たゞちに跡目相續の披露沙汰ともなるであらう。此上は、もはや便々としてはをられませんぞ。

實雅　して、御邊の御分別は？
光宗　されば。……昨夜も申した通り、京都表は、亡兄光季の縁故によつて、既に十二分の手配りが致しあれば、たとひ泰時にどのやうな不慮の準備がござつたとした處で、前後內外からの挾擊によつて、難なく取挫ぐ所存でござるが、さしあたつての一つの難儀は、あの尼御前。眞先に、しやにむに兵力を以て幽閉めるといふ荒療治が上策歟？　或は例の天目へ抹茶と何との等分の調合役を、あの短秀めへ再び申し附けたものであらうか？　そこはまだ、いづれとも、決しかねてをる。
　ト　このうち實雅思入あつて
實雅　いや。其藥をお用ひの儀は御無用になされ。大義には親をも滅するの喩へなれば——つい只今も、あの政村どのへ、それにつき、何かと意見を申し試みたことでござるが——すなはち家國の爲に、撥亂反正を望むときには、隨分共に思ひ切つたる殘忍でも餘儀なく忍ばねばならぬ習ひではござれども、苟も利世濟民を口に唱へて、天下の主たらんと志す程の者は、たとひ誤つて殘忍不仁の惡名をば蒙るとも、卑怯臆病の誹りを受けて、人君たるの德をきずつけ、下萬民をして歸服に迷はしむるやうなことを致しては相成らん。民をして懼れ憚らしむるとも、憎み、危み、又は賤蔑ましむるやうなことを致してはなりません。即ち、時機と手段とは、毎に心して擇ばねば相成らん。毒害に至つては、所詮世を怕れ人を憚る所謂賊子奸臣らの隱慝。卑怯な、淺ましい所爲でござる。その儀はかまへて御無用になされ。
　ト　きつぱりといふ。伊賀の方思入あつて、靜かに
伊賀　實雅どのゝ其見識も道理ぢやが、それよりも、すべて、事は、見事に手際ようとこそ心掛けるが第一でござる。手際さへ見事なれば、五逆罪とても、現世では强ち罪とはなりませぬ。氣味のよい程に大膽な、目覺ましい惡人は、却つて世の人に崇められまする。……兄上、鳥さへも起つ跡は濁さぬ譬へ。後へ累ひを遺す樣な小細工は不手際。あの深見一條以來、ちと內證事に立入らせ過ぎたあの粗忽者の短秀を、又ぞろ斯うした一大事に使ふのは考へ物。……（トいひさして）それはさうと兄上、夫義時の餘命、もう十五日限りとは、あの短秀の按檢ばかりではなく、行蓮坊もまた、しかとさやう申しましたか？
光宗　いや、行蓮坊の按檢は、例の如く、只重體とばかり。卒倒氣絕は間々あることゆゑ、それは强ち懸念に及ばぬといひ、別段日限なぞは申さなんだ。
伊賀　（うなづきつゝ）さもございませう。（ト靜かに言つて）宵に此知らせを聞きました折、例の一心の祈念に

よつて、夫の此容體の變動はさしたる事でないと察してゐました。兄上、若し其十五日を過ぎて、夫がなほ存命であつて、あくまで頑なに、泰時を跡目にと言ひ張つたならば、何となさるゝ？　病みほうけてゐる父を、恩義はあつても何の科もない舅を、政村なり、實雅どのなりが、理不盡に幽閉めては、何ぼう家國の爲とはいへ、順逆の道理が立ちますまいがな？　尼御前よりも此始末をばいかゞなさるゝ？　あの矩秀なんぞの淺はかな按擬が、何の當になりませうぞ？

ト冷かに言ふ。二人ぐつと詰まる。

光宗　いかさま！　こりや聊か不覺であつたわい。只管事を擧ぐる手配りにのみ心を奪はれ、既に先刻矩秀に申しつけて、弟どもへ密意を傳へさせ、すなはち、一昨夜の打合せの如く、豫て墨打だけは致しおいたるあの三浦の義村に、いよ／＼一味の臍を固めさする魂膽までも講ぜさせ申したが、例の氣短か、先き走り過ぎて、つい其肝腎の事には思ひ及ばなんだ。……(ト一寸眉を顰めたが)なれども、事こゝに及んでは、もはや順逆なぞを論じてをる所でない。臨終を俟つにも及ばん。速かに事を擧げうぞ。

伊賀　いや、暫く。(トしづかに止めて)あながち然う急かずとも事でござる。夫が直に落命せばいざ知らず、尙は存命である限りは、成るべく事を穩便に取計らふのが此方の得。やつぱり、此間中の申し合せの通り、も一度わらはから、改めて乾度談じて、天下晴れた讓り狀を政村へ宛てゝ、夫に書かすのが最も上策。尼御前を幽閉めたり、泰時の下向を妨げたりする事は、其上での手筈なり、軍略なりでござりませうぞ。

トこれにて實雅思入あつて

實雅　母上の其御案は、至極妙策とは存ずれども、既に先頃の御對面さへも、空しくお言葉爭ひに終つたとやうに承る。こよひの御變動あつて後の御容體では、ます／＼老公のお心は僻みませう。隨つて、御執念もます／＼深く、迚も其お話しは纒りますまい。

伊賀　いや、なう、先日は、夫の心を引いて見るため、わざとあの泰時をば譏り、また、前將軍家時代からの內證事のいろ／＼、――あの淺見とわらはとの外には、知る者のない密事――をば言ひ立て、わざと手强う正面からばかり談じて見たのでござつたが……今思へば、柔よく剛を制すの譬へ、淚こそは女の第一の武器であつたを、下手に出なんだのはわらはの誤り。……が、それはまアともかくも。……其折の夫の樣子やら、口吻やらから、ふつと思ひ附いたことがあつて、此頃中の蟄居で瘦せ衰へてゐるのを幸ひ、其身支度のための此假病。

ト靜かに意味ありげに言ふ。

光宗　ふむ！……われらはまた、言ひ爭ひをした不機嫌ゆゑの、機嫌とばかり存じてをつたが。……して、其思ひ附といふは？

伊賀　（冷靜に）此二三日このかた、しきりに子供らの歌ひあるく奇怪な謠かござりますか、お二人は御存じか？

光宗　さういへば、「何とやらして物の怪」とか、……

實雅　「たんだ一字ちがうた」とか、……

光宗　歌ひあるくのをば、いかさま、聞いたことがある。

伊賀　「方も方、時も時、……まさとまさ、まさとまさ、……まざ／＼と物の怪、……たんだ一字ちがうた」といふあの謠の心を、こなたは何とお讀みなされましたぞ？

光宗　いや、一向に心附かん。

ト伊賀の方少し容を改めて、心しづかに、おちついて

伊賀　先日、政村へ跡目讓りの事を、立入つて夫に談ずるうち、例の深見の事に及び、やがて其因みであの牧の方周子、其婿右衞門ノ佐朝雅、稻毛の入道、畠山父子なぞを、又、それよりも先きに、二代將軍賴家どの、比企、仁田の一族なぞを、うま／＼計略を以て陷しいれられたのを手はじめに、あはよく和田の一族をも亡し又前將軍家右大臣どのをも、あの公曉どのをも、同じ手で、上手にかたづけてしまはれた其內證事の一々を、わざと數へ立てゝ見たところ、顏の色が次第に變つて、如何にも堪へがたさうな苦悶の樣子。なれども、それは、事の露顯を怖るゝよりも、ある不思議な心の鬼に責められてをらるゝ苦みと、見て取つてのわらはの案じ。……それゆゑ、一昨日、內々にて、既に取寄せておいたものがござる。

ト徐かに席を起ちて

もし！　此方へ。

ト燈臺を携へて、先に立ち、正面の壁代を上手へ褰げ排けて、廣い入側とも見るべき總板敷の次の間へ出る。光宗と實雅とは不審げの思入あつて從いて行く。此板敷の向うには一間の妻戶があつて、其上下には蔀格子。尙其蔀格子の外には式の如き簀の濡緣があつて、一面に欄干を取附け、又妻戶の直前には三段の階子があつて其庭から庭へ下りるやうになつてゐる。板敷へ出ると、伊賀の方は、燈臺をよき處に据ゑておいて、膝まづき、光宗と實雅とを見返り

伊賀　上手に藏し隱してをられたゆゑ、わらはさへ、はじめの程は、一向心附きませなんだ、夫が、生れ附いて忌み嫌ふ此一品、……其一品を種に。

ト いひつゝ、板敷の一部の板を擧げ、床下から一個の瓶を取り出し、板敷の上へあげ其蓋を取る。

ト光宗は、すぐに瓶の中を覗いて見て

光宗　これは！

ト此途端、實雅聞耳を立てゝ

實雅　暫く。……何か、床下にて怪しげな物音がいたす！

光宗　なに、床下で？

ト實雅は急に燈臺を引寄せて床下を覗く。同時に光宗は正面の妻戸を開く。これにて庭の一部が見渡される。けれども七日の月は既う疾うに落ちてしまつた後ゆゑ、向うは只植込が黑ずんで見えるばかりである。

ト光宗は、きつと庭上を透しながめて、何物をか見附けたらしく

光宗　曲者ッ！

ト聲大きく呼ぶと共に、忽ち階子を躍り下りて、姿を消す。其曲者を追つかけたのらしい。實雅は妻戸口から庭の方へと燈臺をさし出した。伊賀の方は、これより先、瓶の蓋を元の通りにして、起ち上り、實雅の後ろに立ちて庭の方を見やる。二人とも暫くは後ろ向のまゝで、同じ姿勢を保つてゐる。

――幕――

第二幕

第一場　北條家別第の奥庭

小山の裾を天然の姿のまゝに取入れて、わざとらしからぬやうに設置つたる奥庭の一部分で、正面は一段小高くなつてをり、さうして其やゝ下手には、二度ほどなだらかに折れ曲つた緩勾配坂がある。上手にも下手にも、前の方には、小山のだらしない裾が崩れ出したやうに出つ張つてをつて、そこには大小雜多の立木。それから又、ずつと上手寄の松や杉の立木の間には、其奥の谷間への降り口、これも餘り急な勾配にはなつてをらぬらしい。すべて其邊には、雜草にまじる萩、すゝき、その他の秋草。それより下手へかけての一帶は、すぐに深い、廣い凹地に臨んでゐるのらしく、向うに松杉の繁茂した山々が間近く見え、更に間近には同じく松其他の木の梢だけが見える。

上手の、谷間への降り口の傍には、枝振の面白い大きな松が一本、其根元に茅葺の四阿風の休息所。其あたり一面に、野生の萩や秋草が、今を盛りと咲き亂れてゐる。

前の幕の四日後で、陰暦八月十一日である。時刻は今

の午後二時過。やゝ薄曇りの空模様。
老女亘理が指圖をして、侍女甲、乙、丙、めい／＼箒を持ち、四阿の界隈を掃除してゐる。甲と乙とは今丁度上手の降り口から掃除しつゝ上つて來るところである。

亘理　（杖であちこちの叢を叩き廻りながら）やれ／＼！やれ／＼！　これでもうようござらう。……お大儀お大儀！　これほど念入に掃除しておいたなら、よもや出をることではあるまい。あゝあ！　しかしながら、御病氣の故とはいへ、何かとまア、お嫌ひなさるものが殖えたことぢや。……（ト甲、乙に向ひて）そつちの方は、もう大事ござらぬかな？

侍女甲　はい。もう大丈夫でござります。

侍女乙　たつた一疋、ほんの蚯蚓ッ子のやうなものがをりましたが、すぐに彼方の谷の方へ追ひおとしてしまひました。

亘理　だれも長蟲を好く者はないとはいへ、どうしてまア、昨日けふのやうに、お厭がりなされることやら？（トつぶやきながら、下手へこなしあつて）もう程なくお越しでもあらう。さ、ぬしたちは、揃うてお迎ひに往つてござれ。

三人　はい／＼。かしこまりました。

ト侍女甲、乙、丙は揃つて下手へ入る。亘理は草臥れたといふこなしあつて、四阿の緣端に腰をかける此時、上手の降り口から、加持の藤内と砂王とが登つて來る。藤内は箒を提げて先に立ち、砂王は朱塗りの曲彔を脊負つて上つて來る。

亘理　（見て）おゝお！　藤内どの！　お大儀でござつたなう。又ざふらふ、例の、俄のお思ひ立で、さつきふなお庭のお掃除やら、お堂のお掃除やら。さぞ骨が折れましつらうなう。

藤内　何の、何の！……（とつぶやきつゝ、砂王と共に四阿の下手へ廻つて）めつきりとお心よいやうには承つてをりましたが、それにしても、お堂でお座禪をなさるほどの、もうそんなお元氣でござりますか？

亘理　いや／＼。お心よいとはいへ、まだ／＼お重體でもあり、つい此間、あゝした御變事のあつた間際でもあり、とりわけ昨日けふは、御典藥の他行中でもあれば、萬一の時、取り返しが附かぬゆゑ一同が強つてお止め申したれど、先だつて行蓮どのが、座禪不調とやらがお煩ひの原ぢやと申されたとかで、此頃のお氣むづかしさ、一旦斯うとお言ひ出しなされては、いつかなお聽入れなさらばこそ、けふは今から夕かたまで、あの谷のお堂内で、お座禪を遊ばす筈。

藤內　はれやれ！　先度にも懲りさつしやらず。……とにかく、けふは、たんとお歩かせ申してはなりませぬ。そんな事かとも存じましたゆゑ、お堂の曲彔を持つて參じました。あれへお乘せ申して、お堂まで、みんなで舁いで行くことにいたしませう。（トいひつゝ砂王の持つて來た曲彔を見返り）はい！　つい、お茵を持つて來るのを忘れた。……砂王どん、もう一度お堂へ往つて、あれを取つて來て下されい。

　トこれにて砂王うなづきつゝ、すぐに上手の降り口から降りて行く。亘理は此間何か思ひ出して、ひそかに泣いてゐたが、とう／＼こらへかねたらしく

亘理　なう、藤內どの！　あゝあ！　長命はすまじいものでござる。老公さまの御容體、此頃の內外の御模樣、世上の有樣、何やかを見るにつけて、思ひ出さるゝは、三十もう九年のむかし。驕る平家はあの西海の波濤に沈んで、前の右大將さま御武運めでたく、六十餘州なびかぬ隈もなく、此鎌倉表に御座所をお定めの折のめざましさ！　譬へば、大あらしの其後で――散り殘つた斑々雲なんぞは何のその――大空一ぱいに檜扇のやうに金色の後光をおッぴろげて、あの和ぎわたる海づらに、ぐん／＼と昇らつしやる大日輪さまのやうなとはあのこと！　夫平六兵衞どのは、其頃まだお血氣盛りの、若殿小四郎さま、今の老公さまのお傅役。其緣につながる冥利で、伊豆の片田舍から、此鎌倉のお館へ、一足飛びの御奉公。それからはとん／＼拍子。月毎に、年毎に、びつくりしつゞけの御當家の御繁榮。まア、どこまで伸びて行く御威勢やらと、喜んだのはむかし！　花の眞盛りは、どうやら既う見てしまうたやうに思はれて、あゝあ！　此浮世があぢきなうござる。

　ト泣く。藤內もこれを聞き、萎れてゐたが、同感して

藤內　あゝあ！　御道理なお述懷でござります。今のお言葉を聞くうちに、わしが眼にも遠い昔の有樣が、まざまざと、湧いて出ますわい！　石橋山の御初陣には、わしも三つ鱗のお旗下に加はつて、お傍に立ち、又壇の浦の合戰では、ともかくも手柄の眞似こと、はじめて大殿さまのお言葉をいたゞいた時の其うれしさ！……あゝ！　二十臺のあの時分でさへ、その親御さま優り、萬人優り、智慧者よ、勇者よ、どこまで膽ッ玉が太いか、底の知れぬ軍師よ、と評判のお館さまが、御老病の故とはいへ、つい此間、半年ぶりでお見上げ申した其のお後ろ姿のみすぼらしさ！　いや、お姿ばかりぢやない。承れば、夜は時々、女子供のやうに、おびえたり、うなされたりさつしやるとやら。又、物もあらうに、蛇なんぞを怖がら

つしやるとは、あゝ、それほどまでに衰へさつしやつたか？（トいひつゝ、鼻汁をすゝつてゐたが、やがて）こりやいよ／＼只事ぢやアない。（ト獨り言のやうにいつて）あゝそれにつけても氣にかゝるは……（ト一寸四下へこなしあつて、聲をひそめて）わしは、此お第の内で遠からぬうちに、何事か起りさうに思はれてなりませぬ。……

亘理　え？

藤内　めんえうなは、あのお本第で、此間ぢう、三晩も續けて、何やら夜ふかしの御密談。……

亘理　といふのは（ト覺えず乘り出して）あの奥方のお居間に於て？

藤内　はい。光宗さまと宰相さまと、いつも定つてお三方。……

亘理　（ずつと聲をひそめて）　何ぞ聞き出いたこともござるか？

藤内　さア、御騷動のござりました、あの夜さりの子の刻過ぎ、どうも氣にかゝつて眠られぬゆゑ、お裏門から、ついふら／＼、橋を渡つてお庭つゞきを、行くともなしにお本第の、あの奥庭の枝折戸口、見ると、掛金が脱してある。けぶだな、と思ひながら、つい我知らず、二足ほど踏込む途端に奥方のお居間の方で、「曲者ッ！」と呼ばつたけたゝましい一聲！　疵持つ足！　うぬが事かとおッたまげて逃出さうとする其脊骨へ、昏闇を駈けて來て、ぶッつかつた一人の曲者！　はッとけしとんで此方は平伏る。そいつめは、てつきり此お別第へ、走り込んだに相違ないのが、又一つの不審……

亘理　して、その、曲者の年輩は……

トいひかける途端に、砂王、手に唐錦の大きな茵を捧げながら、上手の降り口から駈け上りつゝ、下手をはやつて

砂王　あゝ／＼！　もう老公さまがお越しでござりますぞ！

ト呼ぶ。これにて二人は話を止め、起ち上り、出迎への準備をする。藤内は砂王の持つて來た茵を曲彔へ敷く。

此時。下手より右京の權の太夫義時（六十二歳）、長わづらひの上、つい四日以前の一騷動のため、又一しほ衰弱したる體にて、半月ほど前に剃つたまゝらしい坊主頭の髮の胡麻鹽も鬚の方がずつと多く、髭は殊に白く、共にぢゝ汚く延びたまゝの蒼白な顏色。長直垂の上に五條の袈裟を掛けて、右手には杖を携へ、左は小三郎の肩にかゝり、右からは老女右近に腰を支へさせ、一足引きのやうにして、徐かに出て來る。つゞいて小

童蜂王、義時が戒刀を捧げて附添ひ、侍女の甲は薬湯を盛つたる天目を臺に載せて持ち、同じく乙、丙もその後に從ふ。

下手のだら／＼坂近く來ると、義時は息切れがしたらしく、術なげに

義時　まて！　まて／＼！

ト喘ぎながら言ふ。

小三郎　はッ。

トこれにて一同歩みを止める。

義時　ちよつと休む！　ちよつと！

ト尙ほ喘いでゐる。

右近　はい／＼、かしこまりましてござる。

ト此時、坂の少し上手に膝まづいて迎へてゐた亘理は藤內を見返り

亘理　藤內どの、あのお曲彔。

藤內　はい／＼。心得ました。

ト藤內は急ぎだら／＼坂を登つて、四阿の前の曲彔を持つて來て小三郎に渡す。小三郎これを坂下のよき處へ据ゑる。右近、亘理ら介抱して義時をそれへ掛けさせる。

ト義時は、尙ほ幾らか喘ぎながら、あちこちを見渡しつゝ、やがて心地よげに。

義時　閉ぢ籠つてばかりゐては、むすぼうれてならぬ心も、斯う蒼う廣々とした空の姿、遮るもなう見渡さるゝ山々谷々の景色をば詠むると、さながら洗ひ去られたやうに心地よい！……あゝ！　まことに、音聲寂爾たり、消息宛然たり。一味蕭條として趣向すべきなし。……あゝ！　つい先刻までは、水の涸れ盡きかけた泥池の水際で、喘いでゐる鮒か鯉かなぞのやうな氣持であつたが、此けしきを見、此松風の音を聞くと、大瀛へでも出たやうに、暢び暢びするわい！　はゝゝゝ！

ト淋しく、併しながら心地よげに笑ふ。

亘理　久かたぶりのお步行ゆゑ、いかゞにやと、一同お案じ申してをりましたが、一向にお疲れも見えさせられませぬ其御容體。その御樣子ならば、程なく御本復遊ばすことゝ、ほんに、ほんに、お嬉しう存じまする。

義時　（機嫌よげにうなづきつゝ）時が來て、病魔が漸く離るゝ歟、或は行蓮の調劑が不思議の效をば見する歟、きのふをとゝひの二夜さは、此二年ごし曾て覺えぬ快眠！　ぐつすりと我れを忘れ、夢も安らかに、全く生き返り、生れ變つたるやうな心持ぢや。壯年血氣の昔より、幾たびと知らず、生死の間を出入し、備に艱難辛苦を嘗め、功名手柄の悦び、計略の合期した氣持よさ、或は富貴、榮華の歡樂、皆ほど／＼には得い遂げても來たが、

未だ曾て此病來の、眠られぬ苦しさに優る辛さは知らず、又きのふけふの此心地よさに優る嬉しさは覺えなんだ。あゝ！　時あつて三日食はず、破れ薦に冱寒を忍ぶ、穴の中、橋の下の、あのあさましい乞食非人さへも、しばしば連夜の熟眠をば貪るといふに、一月の中只一夜も、二時と續けては、うたされぬ夢をば結び得ぬ其苦しさ！……

ト いふ間にも、いかにも堪へがたげな苦悶の色が面上に浮ぶ。さうして其不快な追懐に心を奪はれたかのやうに、暫く言葉を斷絶させたが、やがて又我れに返つて

あゝしかしながら、けふばかりは、それをば拭ひ去つたやうな心地よさぢや！……天外の青山も其色寡く、耳畔の鳴泉も其響空し、とは、斯うした氣持でもあらうかい？　はゝゝゝゝ！

ト又淋しく笑ふ。此間、藤内は、下手に膝まづいて、頻りに落涙を拭つてゐる。義時はきつとそれに目を付け、不興げに眉を顰めて

やい、藤内！　なぜ泣く？……きさまはなぜ泣くのだ？

トこれにて藤内は涙を收め、じつと義時の顏を見上げて

藤内　お殿さま！　ちやうど半年お見上げ申さなんだうちに、思つたよりは、いかうお窶れなされましたなア！　あの、豐後の國のお野立では、敵方の夜討の怖ろしさに、其一晩だけは、只の一人だつて寢た者はございませなんだに、こなたさまばかりは高いびき！　又、あの和田合戰の晩だつても、若殿さまをはじめ、まんじりともさつしやらなんださうなに、たつた一人平氣で眠つてござつたとかいふお前さまが、長のお煩ひの故とはいへ、只今のお言葉！　あゝあ！　いかくお弱りなされましたなア！　此の上は御養生が專一でござります。……なアもし！　そのお體で、お座禪なんぞは、とんでもないことでござります。慮外ながら、まアま、お見合せなされたがようございませうぞ。

ト苦々しげに言ふ。此間に義時の機嫌よげな表情はだん／＼消え、中ごろ憤々としたらしかつたが、さすがにじつとそれを制へて、わざと冷かに

義時　むやくしい事を申す奴だ！　ずつと快いから出て來たのだ。行蓮といふ醫師が附いてをるわ！……たはけめ！

ト此「たはけめ！」は、半分口の内で言つた積りであつたらしいが、大分手強く言ひ放つたので、耳の近くない藤内にも徹へたらしく、少々むつとしたといふ思入て

藤内　もし、殿さま！……成る程、手前は痴人でもござりませう。が、手前は大痴人でも濟みまする。日本六十餘州の總元締めをさつしやりますお方は、何かの手ぬかりや間ちがひがあつた時分には、只「たはけ」では濟みますまいぞよ。つい此間も、あんなお間ちがひ！　生身の、しかも煩うてござるお體であるからには、いつ、どんな事があるかも知れたもんぢやござりませんのに、それだのに……

ト いひかける。義時はこらへかねて、しかし靜かに

義時　何だと？　では、きさまは主の身に、何か不祥な事が起るのを望むか？

藤内　何の、お前さま、とんでもない！　望みなんかはいたしません。けれども、うつかり輕はずみな事をなされて、何事か起つたら、どうなされます？

義時　（冷笑して）起つたら起つた時だ。

藤内　いや、事が起つてしまつてからでは……

ト 藤内は段々興奮して來る。右近と顔を見合せてゐた亘理が口を挿む。

亘理　あ、これ、藤内どの！

藤内　いや、起つてからでは、何にもなりませぬ。何事もないうちの御用心が肝腎でござります。もし！　何よりも先きに……

亘理　藤内どの！

藤内　お家の跡目を、ちやんと定めて置かせられませ。さうでないと……

右近　藤内どの！

ト 大きく呼ぶ。これにて藤内口を噤む。此間義時は、だん／＼癇が高ぶつたらしく、全身を神經的に顫はせてゐたが、やつとそれを制して、せゝら笑つて

義時　きさまらの指圖を俟つおれか！……たわけめ！

ト 口だけは冷かに言つたが、顔も身もぶる／＼と顫へてゐる。けれど飽迄も平氣を裝つて、正面を切つてゐる。

ト 藤内は、じつと義時の樣子を見つめて、情けなげな愁ひ聲で

藤内　成る程、天下の智慧者と敵方にさへ褒められなされたこなたさまでござります。手前なぞが、かれこれ申すがものはござりますまい。なれども、あれほど安心して、御自分の手足のやうに思つて、お使ひなされた、あの、深見の三郎次郎どのでさへ、だん／＼と增長して、ついあゝした不心得を……

ト 言ひかけたが、ふつと小三郎のゐるのに氣が付いて、口ごもり

いや、なに、あゝした仁は格別としても、結句、あんま

り御自分の智慧袋ばかりを恃みにさつしやらん方がようござりませうぞよ。とにかく……

亘理　藤内どの／＼！

藤内　とにかく、お體をも、お家をも、折角お厭ひなされたが、ようござります。

亘理　これさ、藤内どの！

ト きつと言ふ。これにて藤内一寸亘理を見返り

藤内　いや／＼、かういふ時にでも申し上げんければア、お目にかゝる折がござりません。……もし、殿さま！……

ト又何か言ひかける。義時は、それにかまはず、つと曲彔から起たうとしてよろめく。右近、小三郎あわてて抱きとめ

右近　あゝ、もし！　おあぶなうござります。

義時　大分寛いだ。……座、々、座禪堂へ。

ト歩み出さうとする。亘理それを止めて

亘理　あゝ、もし！　お歩行では、ちと御無理でござりませう。まゝ、そのまゝでいらせられませ。わたくしども一同で、そのお曲彔もろとも、お舁き上げ申しませう。そのまゝお膝を組ませられませ。……これ、小三郎どの、こなたは、お前へ廻つて、後ろ手でお曲彔を、……藤内どの、こなたはお背後から。女中がたは、それ、右と左りを。

ト これにて義時は、曲彔の上で胡座をかく。小三郎は前から後ろ向きに、藤内は背から、砂王をはじめ侍女、甲、乙、丙は左右よりそれを助けて舁き上げる。戒刀持の蜂王は其後に附添ふ。一同だら／＼坂を登りて四阿の前を過ぎ、降り口へ向ふ。右近、亘理も從いて坂を登り

亘理　ようござるかの？……しづかに／＼！

右近　すぐ後から參じまする。

亘理　御機嫌よろしう！

ト會釋する。一同降り口を降りて行く。ト亘理は右近を四阿へ請じつゝ

亘理　それでもまア、案じたよりは、お元氣なので、やつと安堵致しました。それはさうと、（ト聲をひそめて）昨夜は折わるう人目に妨げられ、承りかけて、つい其まゝになつたあのお話、氣にかゝつてなりませぬ。幸ひに人もなし。あの後をおつしやつて下され。

右近　いづれ、あの小三郎どのからも、直接に御密訴申さるゝでもござりませうが、今ン日となつては、もはや猶豫のならぬ鼻の先きの一大事。實は、あの變動のあつた晩、お互ひに瞥と見たあの二人の怪し素振。なれども、言葉が確とは聞えませなんだゆゑに、證據がなく、氣がかりながら、お互ひに、言はず語らず。然るところ、

一昨夜、夜ふけて後、小三郎がひそかに參り、駭き入つたる密告。……（ト四下へこなしあつて）もし！　その仔細は……

ト亘理の耳に口。暫くさゝやく。

亘理　（驚いて）えゝ！　ではあの夜さり、小三郎どのが、あのお床下に忍び込んで……

右近　あ、もし！　間遠なので、ようは聞えなんだれども……

ト又耳こすり

亘理　すりや、あの、やつぱり……毒藥を……

トいひかけるのを右近は手で制して、又暫く耳こすり。亘理はうなづきつゝ聽き了り

亘理　まア！　おそろしい！……此上は一刻も猶豫はならん。何より先に、京都にござる武藏守さまへ、早飛脚を以て、此事をお知らせせにやなるまい。いや〳〵、先づそれよりも先に、尼公さまへ此事をば……さうぢや。……それは、わしが此足で、これから直に。……したが、後の事も、あの小三郎どのばかりでは心元ない。藤内どのゝ律儀が祟つて、大分御機嫌を損じた折から、あんまり驚かし申してはなりませぬ。そこはこなたからよい鹽梅に。かういふうちも心がゝり。ともかくも、まア、早うお傍へ往つてゐて下され。

右近　はい〳〵。合點でござります。

ト右近は急ぎ上手の降り口から降りて行く。

亘理　あゝ、心が急く！　泰時さまへの早飛脚は誰れに吩咐けたものであらうか？……いや〳〵、それもこれも、尼公さまへ申し上げた上でのお指圖。……さうぢや。

ト身づくろひして、杖を忘れ、だら〳〵坂を走りおりようとして心附き、取つて返し杖を取り、再び駈けおりようとする。此途端、上手の降り口より藤内をはじめ、侍女甲、乙、丙及び蜂王、砂王（小三郎だけを除き）皆々戻つて來る。

藤内　あ、もし〳〵！　亘理どの〳〵！

ト呼ぶ。

亘理　おゝ！　もうお行がはじまりましたかいの？

藤内　いえ、まだでござりますが、お召になるまでは、小三郎どのゝ外は、退つてをれといふお吩咐でござりました。

亘理　さやうか？　では、こゝで休息めされ。お大儀でござつた。わしはちつと急ぎの御用が出來たによつて……

トいひさして、そのまゝ行かうとする。此時藤内は下手を見て

藤内　おゝ、おめづらしいことだ！　あれへ奧方さまがお越しでござりますぞ。

ト亘理も下手を見て

亘理　おゝ、成る程。……でも、折のわるい！

ト口の中で言つて、餘儀なげに立ちどまる。

藤内　（下手を見やりながら）　またお氣色がわるいかして、成る程、お顏色もめつきりとわるく、お窶れなされて、お運びも甚うお大儀さうだ。

トつぶやきつゝ、皆と共に、だら〳〵坂を降りて、出迎への心がまへをする。

ト下手より奥方伊賀の方、下げ髮、小袿、被衣をかぶり、病後の體よろしく、二人の侍女、小柴（二十五六）田毎（十七八）に左右から介抱をさせ、尚ほ一人の女の童に錦の茵を持たせて、伴れて、徐かに出て來る。

亘理　（うや〳〵しく會釋して）　これは〳〵！　まだ御不加減のやうにも承りをりましたに、癒らせられましてか、思ひがけないお渡り。お祝ひ申し上げまする。……さ、まづ〳〵、あれへお越し遊ばされませ。

ト亘理は又先に立ちて坂を登りて、四阿へ伊賀の方を請ずる。藤内と甲、乙、丙の三侍女及び雛玉、砂玉は坂下に殘り、他はすべて四阿に集ふ。

伊賀　（四阿の前に立ちどまりて、靜かに、おほやうに）　館にも、けふは別してお心よいとあつて、久しぶりに御修禪ぢやと聞いたゆゑに、見舞かたがた、氣保養に來ましたが、館には、もはや御上堂なされたかいの？

亘理　はい。今暫くは、お人拂ひといふお吩咐でござりまする。

伊賀　おゝ、それは！……では、暫くの間、この四阿で待ちませうか？……

トこれにて侍女、女の童心得て、四阿の緣に持參の茵を敷く。伊賀の方はそれに腰をおろしながら

亘理には、其後は久しう逢はなんだが、いつも健勝で、めでたいなう。

亘理　おかたじけなうござります。お庇をもちまして。

伊賀　幾歲になりやつたかなう？

亘理　七十五歲にござります。

伊賀　夫の平六兵衞が存命ぢやと、ことしは幾つであつたかなう？

亘理　ちやうど八十……四歲になりませう歟？

ト答へつゝも、氣のせく思入よろしくあつて

さて、えゝ、まことに、甚だお慮外ではござりますが……

トいひかける。伊賀の方は、其以前から、とうに亘理のそは〳〵した樣子に目を附けてゐたが、わざと氣の附かぬげに、悠長に

伊賀　それも其筈歟！　あの平六兵衞は、夫義時どのゝ附人、……まだ江間の小四郎でござつた頃からの無二の腹

心、かたへ離さずの郎黨。十年一日のやうなといふ古語はあるが、これは五十何年間、ふつに變らぬ奉公振！……
トいひつゞける。亘理はいよ／＼氣の揉める思入よろしくあつて

亘理　えゝ、まことにお慮外ではござりまするが、わたくしは、あの、いさゝか、取急ぎまする御用向がござりますゆゑ……

トいひかける、これより先、伊賀の方の足元から、二尺あまりの一疋の蛇が這ひ出し、やがて土手から低い地面の方へ、する／＼と滑りおり、だん／＼下手へと這つて行き、丁度此時、甲、乙、丙、三侍女の足元へ近づく。

甲　（はじめて氣附いて）あれい！

トけたゝましく叫んで飛び退く。乙、丙も同時に

乙、丙　あれい！

ト叫んで逃げる。砂王、蜂王も

砂王　蜂王　｝あゝ、蛇だ／＼！

ト騷ぐ。皆々驚く。藤内は持つてゐる箒で蛇を逐ふ。此途端、又一疋、伊賀の方の足元から這ひ出す。女の童目早く見附けて

女童　あれ！　こゝにも！

トこれにて小柴、田毎、

小柴　田毎　｝おゝ！（トいひつゝ）しッ／＼！

ト逐ふ。皆々驚いて、又そちらを見る。此以前、伊賀の方ぎッくりして懐をおさへる。藤内と亘理と三侍女とは、互ひに顏を見合せて「まアどうして蛇が出て來たらうか？」と不審の思入れ、こなし。

第二場　奧庭谷間座禪堂

天然のまゝでは、淺い、平凡な峽たるに過ぎぬ處を、多少の人工を施して、何さま一かどの深山幽谷らしく設置ひ、兼ねて往來、登降の便宜をもよくしたる凹地。上手、下手、正面とも、見える限りの處は、概して松杉の生ひ茂つてゐる山の腰や山の裾の景色。ずつと下手に、此凹地への降り口が、岩組の間に見え、又正面奧の上手寄には一筋の絲のやうな瀧が見える。

此凹地の中央に一棟の座禪堂。唐、宋いづれとも附かぬ支那風、和風折衷の白木造り、茅葺。三間四方。正面の三間は、眞中に九尺四枚の疊み扉、これは悉く明け放し、殘る左右の四尺五寸づゝは火燈口式の格子窓を取り附けたる板目。側面も、背面も、同じ式。内部は一面の甃。堂の周邊にも、甃。二段の低い石段。

此石段も內面一樣に取附けてある。

前面の軒下には喚び鐘。

堂內の中央、やゝ奥の方に文殊大士を奉安したる龕。

其前に、燈明及び供へ物をするための大小二脚の卓子。

其脇に香爐臺。更にそれよりも前の方、よき處に、二疊敷ほどの禮盤。小さい方の卓子の上には、侍女と蜂王とが持參した品々——天目の藥湯と戒刀——が載せてある。又、禮盤よりも上手、やゝ前寄には、前の場の曲彔、茵を敷いたまゝ。其すぐ傍に義時。義時は、つい今がたまで曲彔に掛けてゐたらしいが、此瞬間には高く激昂した顏色で、やゝ斜に下手へ向いて、突立ち、右手に高く杖を振上げてゐる。其すぐ下手、義時と姫との間に膝まづいて、頻りにそれを止めてゐるのは、老女の右近である。小三郎は、更に其下手の前寄に、卽ち扉の外の甃の上に平伏して、しきりに詫びてゐる體である。

右近　如何やうな不埒な儀を、小三郎が申し上げましたかは存じませぬが、ま、暫く、暫くお待ち下されませ！　どうぞまア！　暫くお待ち下されませ！

義時　えゝ、とめるな。邪魔するな。……どけ〳〵！……無禮至極な奴だ。ぶちのめしてくれる。……えゝい、どけといふに！

右近　あゝ、もし！　お慮外ではございますが、ともかくも其仔細を、どうかまアわたくしに、一應仰せられて下さりませ。承りました其上では、決してお止めは致しませぬ。……まア〳〵！

トこれにて義時は漸く振上げてゐた杖をおろし、しきりに喘ぎながら

義時　此數ケ月以來、曾て覺えなんだ快眠によつて、めづらしくも爽然たる惱み、心の安靜をば得たるゆゑ、久しぶりにて座禪を試み、けふこそは無念無想の別境に神を遊ばせうと、限りなく樂みにしてをつたものを！……あの藤內めが、おのれ！……恩に狎れをつて私意を挿み、……（ト小三郎を睨み）讒訴三昧をいたしをる！　おのれ、主に似た小才覺な、不所存な、無禮な……

ト疊みかけて言はうとしたが、あんまり激昂したゝめ、息を切らせて、頻りに苦しげに喘ぐので、右近はさまざまに介抱し、やつと和めて曲彔に腰をおろさせる。

此うち小三郎は泣きながら

小三郎　讒訴三昧とはお情けないお言葉でございます。只今も申し上げました通り、其折、其場に行き合はせましたは、わたくしばかりではございませぬ。右近どのも、又あの亘理どのも、たしかに見たと申されます。其言葉の一々は、間遠ゆゑに聞えませなんだが、あの紀河の矩

秀が、お天目をば手に取りあげ、それを飲む眞似をいたしまして、「あの深見めをかたづけたと同じ手段で云々」と申しましたことだけは、決して相違はござりませぬ。

義時　やい！　病みほうけて、此義時の目が昏んだとでも思ひをるか？「深見を云々」といふ、其一言ばかり拘泥りをるので、汝の心の底が見え透くわい！　察するところ、父の所領地を奪られたのが無念さに、伊賀家一族をば敵と怨み、それで讒訴を構へをるのであらうが？

小三郎　存じもよりませぬことを仰せられまする！　どうしてわたくしが、假にも其のやうなことを……

義時　いゝや、言ふな。かねぐ\父三郎次郎の頓死に疑念を抱き、隨つて種々の臆測を試み、或は、奥はじめ光宗らが、豫め謀つて陷れたことのやうに、邪推しをりはせぬかと、實は、とうから疑つてゐたが、……さやうな根性では、或は予をさへも怨みかねまい！　此恩知らずめが！

小三郎　（きつと興奮した顔を擧げて）　それはあんまりなお言葉でござります！　御無體なお言葉でござります。お怨みに思ひまする程ならば、とうにお怨みを申しまする。なれども（トいひかけて、泣きながら）十四歳以來の御高恩を思ひまするゆゑ……

トあとをいひかれて歔欷をする。

義時　（更に目を險しくして）　何だと？　とうに怨む？………其譯を言へ。……

ト小三郎なほ默つて泣いてゐる。

いや、其わけを言へ。

ト小三郎泣きながら、少しく顏を擧げて、怨めしげに

小三郎　父一人のお咎めは、是非がないとも存じまするが、所領地悉く召し上げられました其上に、隨分お館のお爲には、父三郎次郎は、長い年月の間、粉骨砕身して、御奉公仕つたと承りをりまするに、何にも存ぜない妻子眷族の末までも御誅戮……

トいひかける。右近氣を揉み

右近　あ、これ、小三郎どの！　小三郎どの！

トきつと叱るやうに言ふ。これにて小三郎默る。此間、義時はじつと小三郎を見詰めてゐる。右近は更に形を改めて義時に向ひ

小三郎が只今の、麁爾千萬な失言は、何とぞお聞き棄て下されませう。小三郎に限りましては、お讒言を申すとか、お怨みに思ひまするとか、さやうな不所存が、かッふつ、ござりませうとも存じませぬ。又、あの矩秀の申しましたる儀を、どう不行届に言上いたしましたかは存じませぬが、矩秀があの夜さりの振舞には、何かと不審の事共のござりました事だけは、亘理も、わたくしも、

たしかに認めましたのでござります。……（トいつて、小三郎を見返り）これ、小三郎どの、あのお本第での其折の顛末をも、もう委しくお申し上げなされたか？

小三郎　いえ、まだ中々そこまでは、申し上げませぬのでござります。

右近　あれを申し上げいでは、お疑ひ遊ばすが御道理。先夜わしに知らせなされた通り、有りのまゝをお申し上げなされたがようござらう。……御前、お聽き下されませ。あの夜さり、矩秀が手眞似や耳打にて、光宗さまへ密々の話の模樣、何とも以て合點參らず、頁理も、わたくしも心元なう存じましたゆゑ、實は、わたくし一存にて、此小三郎に、內々にて申し含め、萬一の用心のため、御庭內を竊かに見廻らせましてござりまする。……さ、その後はこなたから。

トー小三郎へこなし。これにて小三郎は改めて義時を拜して

小三郎　御庭內を見廻りますうち、ふと小耳に挾みましたは其夜のお本第の會合のことが、何となく心に掛り、我知らず、お庭を離れ、つい、あの橋を渡り、お本第の裏門口から奧庭づたひ、やがて奧方のお居間に近づき、……もしお咎めを蒙らば、一命棄つるまでと覺悟を定め……竊にお床下に忍び入れば、ちやうどお密談の眞最中。間遠ながら、とぎれ〳〵に、漏れて聞えまする奧方のお聲、實雅さま、光宗さまのお言葉。たしかに近々に、容易ならざるおくはだて。……尙ほもくはしく聽取りませうと存ずる折から、俄の物音。上から颯と射す火影に、見咎められては一大事と、あわてゝお庭へ飛んでいで、一さんに逃出しまする其背後に「曲者ッ！」といふ光宗さまのお聲！　あぶない處を暗に紛れ、立歸つてござりまするが、……其折洩れ聞きました斷片的の、毒害云々といふお言葉によつて、容易ならぬ御ッ大事と心得まして、かやうにお訴訟に及びましたのでござります。

ト此間に義時の表情いろ〳〵に變り、だん〳〵耳を傾ける。けれど尙ほ半信半疑の體で、默つてゐる。

右近　つまり、小三郎の曲事は、わたくしの由ない心添へから起りましたことでござりますれば、何とぞお咎めはわたくしに課せ附けられまして、彼れが申し上げまする事共をば、尙ほとくとお聽取り遊ばしますやう……

トいひかけるを義時は不快げに手にて制して

義時　措け〳〵！……えゝ、措けといふに！

トきつといふ。

右近　はゝ。

義時　おれは座禪をする。二人とも、呼ぶまでは、退つてをれ。……（ト險しい聲で言つたが、やがて聲を和げて、）

今聴きかけた事は後に又訊ねる。……退れ！

ト静かに言ふ。

右近
小三郎 はッ。

ト義時は曲彔を離れ、香爐臺の方へ歩み寄らうとしてよろめく。右近急ぎ立寄りて介抱する。義時は、後ろ向のまゝ、手でそれを制しつゝ

義時 よし／＼！……構ふな。（トいつたが、急に見返つて）暫くはだれも來ることならんぞ。

右近 はゝ。

ト曲彔に敷いてある茵を取つて禮盤の上に敷き、軒先の喚び鐘の撞木を取りおろして來て其傍に置き、やがて

では、御免下されませう。こゝにお撞木をばおきまする。御用の折にはお喚び鐘をお打ち下されませう。

ト會釋して扉の外へ出て、なほ此時までも俯向いてゐた小三郎を促して先に立ち、石段を降り、ちやうど此時香を焚きつゝある堂内の義時へ思入よろしくあつて、徐かに下手へと進み、やがて坂道を登りて、二人ともに姿を消す。

此うちに義時は香を焚き了りて、見返り、一寸堂の外へ思入あつて、やがて禮盤へ上らうとして、既に一足を踏み掛けたが、半分目の内で

義時 不埒な奴だ！ 無禮千萬な奴だ！ 主に對して指圖がましく……下郎の癖に！

ト險しい目附をして、きつと下手を見やつたが、忽ち目を瞑り、しづかに禮盤に上り、茵を二つに折つて尻に敷き、式の如く結跏趺坐することよろしく、手を結んで膝下に安んじ、二三度深呼吸をしてゐたが、程なく不動不言となる。

ト見るうちに、そろ／＼顔面神經が働きはじめる
すると目を瞑つたまゝ、小聲で

光宗とあの實雅とが……（トいひかけて暫く間を置き）いや、讒言とばかりは思はれん。現に右近があゝ言ふ。……（ト又暫く無言）……繼子の泰時の世となつては、何事も儘にならん。……だから、政村に跡を繼がせて……（これまでは小聲でつぶやいてゐたが、急に思ひ當つたことがあるらしく、少しく聲を高めて）さういへば、現に此間、彼女がおれに對つて……

ト俄にぎよつとした思入で、目を開き、急に左右前後を見返り

何時！……

トいひかけると共に膝を崩し、急に起上つて、後ろの小卓子の上の戒刀を窃と取つて引附け

決して油斷はならん！

ト小聲で口早に言ひ足したが、やがて又坐に着いて

お親に似て、中々執念ぶかい、僻んだ根性もある奴。……うつかりとは信ぜられん。……氣取つたかも知れん。……（ト手を組んで考へ）まさか俺がさせたとは思ふまいが……

ト言つて、俄に愕然として、我に返つたといふ思入。

あゝ！　雜念！　雜念！

ト急に目をふさぎ、膝を組み直し、又二三度深呼吸をして、半分口のうちにて

諸法皆是因緣生、因緣生故無自性、無自性故無去來、無去來故無所得、無所得故畢竟空、畢竟空故是名般若波羅密、南無一切三寶、無量廣大、發阿耨多羅三藐三菩提、納莫薄伽伐帝・鉢刺壤波羅弭多曳、恒弭他、室姪曳、室曬曳、室曬曳、室曬汚……

ト唱へつゞける。

第三場　座禪堂の背後

堂の背面の扉は閉ぢたまゝになつてゐる。こゝにも、前面のと同様の低い石段が取附けてある。

正面にも、上手にも、下手にも、ほゞ前の場の背景と似たりよつたりの、松杉の生ひ茂つた山の腰や山の裾が見渡され、ずつと上手奥の險阻な岩組の間には、わざと險しく設置つたらしい降り口が、大きな木立越しに見えてゐる。此降り口を降り切つた處に、そこに自然石をころがしたまゝの石橋、其下は細い石清水の流れ。それから、ずつと前寄のやゝ上手にも岩組、そこに自然のまゝの泉があつて、淺い井戸の形をなしてゐる。此の泉の末も、前の流れへ落ちて行くらしい。

伊賀の方は、侍女の小柴と田毎とに介抱せられて、上手の險しい降り口を降りて來る。田毎は伊賀の方の被衣を持つてゐる。やがて石橋を渡り了ると

伊賀　病後に、久しぶりで歩いたせゐか、ちつとばかりの此坂路が、けふは、ことの外、大儀なやうに思はれた。

小柴　そのお筈でござりませうとも。こちらのお道路は、あちらの御本路とは異ひまして、わざと深山とやらのやうに、險しうおしつらひ遊ばしたのでござりますもの。御病後の事ゆゑ、嘸お疲れでござりませう。ちつとまアお休息遊ばしませ。お館さまには、まだ／＼お座禪の最中でもござりませうほどに。

田毎　ほんに、さう遊ばしませ。おからだに障りましては、おわるうござります。

伊賀　いや／＼、それには及ばん。すぐに行きませう。……

したが、お氣むづかしい折から、そなたゝちが附いてゐてはわるい。用があらば呼びませう。今の、あの二本松の邊に控へてゐや。

二人　はい〳〵。かしこまりました。

ト伊賀の方、田毎へ「かつぎをこちらへ」とこなし、これにて田毎は被衣を伊賀の方へ渡し、小柴と共に會釋して、元來た坂路を登りて、姿を消す。

ト伊賀の方は徐かに左右を見廻し、やがて懐ろへ手を入れて、何物かを探る思入。

ト其襟元から大小三疋の蛇がによろ〳〵と鎌首を出す。それを見て一寸思入。すぐに指の先で輕く其頭を叩いて引込ませ、同時に下手前の泉に目を附けて、徐かにそれへ立寄り、おのが顔、姿を水鏡に映して見ることありて、うなづき、やがてもう大分斜になりかけた午後の日光を厭ふらしく、かつぎを被りつゝ、そろそろ堂に近づき、石段を上り、堂の側面に出で、火燈口式の窓口から、そつと内部の樣子を窺ふ。

第四場　以前の堂内

前の場の通り、義時は、瞑目して、禮盤の上に結跏趺坐してゐる。が、顔面神經は絶間なくぶる〳〵と顫動してゐて、心の中は落ちついてゐないらしい。その顫動も、はじめは顔面だけであつたが、見てゐるうちに、それが全身に及ぶ。次の獨語は、或部分は只の自問自答であるが、或部分は辯疏のやうでもあり、叱咤のやうでもあり、或部分は疑惑の歎息でもあり、或部分は懊悩の呻きでもあり、或部分は夢の裡でうなされてゐるが如くである。恐怖、悔恨、猜疑、憂悶、心の苦み、肉の疼み、種々雜多の感情が混淆になつて其心中に渦湧し、往來し、衝突してゐるらしいのが、じつと瞑目はしてゐるが、其顔面表情に、歴々と見えてゐる。で、其言葉の調子も、はじめは低くもあり、ねごとのやうでもあるが、やがて、それが高くもなり、急にもなる。

義時　それは是非に及ばなんだのだ。……天下は天下の天下だ。天下の安危には易へられんわい！……馬鹿ッ！……けれども、あの折、××みづから出陣せられなかつたのが、此方の幸福だつた。怖しいのは、人心の微妙な作用だ。……決して侮れん。……だから、泰時が――餘計な事に！――途中から引返して來て、「若し御親征に逢つたら、如何しよう？」と聽きに來た時……其時、おれがさう言つた。「まさか鸞輿に向つて弓を引くわけにはいかん、……けれども……」

ト、いひかけたが、俄に愕然と我に返つて

あゝ？

トいふと共に、急に崩れかけてゐた形を直して、半分口のうちで

內空外空、內外空、空々、大空、勝義空、有爲空、無爲空、畢竟空、散空、無變異空、本性空、自想空、一切法空、不可得空……

ト唱へ〳〵、次第に沈默し、二三分間は不動不言でゐたが、やがて又我知らず、半眼に目を開いて、苦悶の表情をして、情けなげな聲で

あゝ！　あゝ！　隱岐の小島！……××このかた××として××××つゞいて來た……天子だ！

ト思はず此末の一語を大きく手強く言つた自分の聲に駭いて、我知らず目も口もくわつと開けて、正面を切り、いはゞ物におびえたやうな表情をしたが、やがて又我に返つて、怖い貌をして

何を馬鹿な！……××なぞは有らう筈はない。同じく人間だ！　おれでなくて、どうして此亂世が治まる？……馬鹿なッ！

ト言つて、居丈高になりかけたが、やがて其怒らせた肩をおろして、又じつと目を瞑つた。が、一分と經たぬうちに

が必ずそれを口實に、弔ひ合戰なんぞと言ひたて……

ト又暫く間をおいて、目を瞑つたまゝで

今こそ勢ひに怕れて蟄してはゐるが……いや、たしかに恨んでゐる。……まさか、あの一族だけは……大丈夫だらう。……あいつをあれだけ手なづけておいたから。……よもや？

トまでは小聲で穩かにつぶやいてゐたが、やがて堪へがたげな苦悶の表情をして、頭をぶる〳〵と顫はせたかと思ふと、又目をもくわつと開いて

あゝ！　あゝ！　此四十年來、心血を絞り、骨々を碎きみじいてまで、やつと築きあげて來た北條の地盤も、おれが目を瞑ると一しよに、忽ちぐわら〳〵と崩れてしまふのか？……あゝ千仭の功も！……あゝ！

ト額に手を加へて暫くは無言で、苦悶してゐたが、やがて如何にも草臥れたらしく、歎息して

あゝ！　疲れた！……あゝ、あゝ、おれも疲れた！……あゝ、あゝ果しもない心づかひ！　それだのに、一人として役に立つ奴はない！　一人として此苦みを知つて、片腕となつてくれる奴がない！　あゝ！　あの深見……三郎次郎！

トふと言ひかけたが、忽ち苦い顏をして口を噤み、やがて又太い溜息をして

あの泰時は……あゝ！　あれはまたあんまり！……

トいひさして又力なげに歎息して

あゝ！　疲れた！　疲れた！

ト如何にも意氣地なく、ぐたりとなり、やがて暫く術なげに喘いでゐたが、漸くにして

いや〳〵、いや〳〵！（といふと共にきつとなつて）何をいつてゐるのだ！　何を考へてゐたのだ！　あゝ！又しても怠隙！　妄念！（ト目を瞑つて）生死苦樂！……大無常！……大無常！

ト いひ〳〵、取り亂してゐた形を改め、後ろの龕の方へ向き直る。さうして恭しく合掌禮拜して、極小聲で

南無文殊大菩薩！　南無文殊大菩薩！　わが此昏蒙何の時にか醒めん！　願はくば、あゝ、大慈悲を垂れ、大般若を頒ち下したまひて、わが此昏蒙の苦を拔かせたまへ！　救はせたまへ！　南無文殊大菩薩！　南無文殊大菩薩！

トだん〳〵聲を低め、とゞ無言になつて祈り、やがて向き直り、更に結跏趺坐し、瞑目したが、二三分すると、こんどはこくり〳〵と居眠をはじめ、幾度も禮盤から轉げ落ちさうにしては驚き醒め、又何事か口の内で唱へ〳〵してじつとなる。かと見るうちに、又もこくり〳〵、やがて又驚き醒めて、唱へ言を繰返す。そのうちに又もや顏面神經が顫へ出して來る。すると、小聲で、斷續的に

賴家の死んだのは、いふまでもなく……實朝も……公曉も……（ト暫く間を置き）うま〳〵繼母をおとしいれた上に、現在の實父をも幽めたなんぞと……

トいひかけて又暫く默つてゐたが、急に何か不安を感じたらしく

いや〳〵、義村とても――手なづけてはおいたが――油斷はならん。……それにあの……實雅！　家柄が家柄だけに……（トきつと何か思ひ當つたことがあるらしく）どうも本當らしい！　光宗と彼れと……紀河の短秀……紀河の……（トいひさして溜息を吐く）さうだ！　あの時、圖らずも、あの宗近めの毒藥を奪ひ取つたのを幸ひに……牧の方の陰謀の裏を掻くため……（トいひかけたが）可哀さうだつたのは弟……政範！

トいふと同時に、一種名狀しがたい苦悶の表情をして、目を開き、情けなげに

あゝ！　政範！

トいつて、悲しげに首をうなだれ、暫くの間無言でゐたが、又急に何か思ひ出したらしく、眉をひそめて

此間、あの蜂王めが、庭を歌つて歩いてゐた奇怪な唄！……それから、此頃中一度まで續けて見た、あの厭な夢！……まざ〳〵と！……雅と雅、政と政！……方！……時！……全くたつた一字ちがひだ！……まざ〳〵と物の

怪！……あゝ物の怪！……祟り……死靈！

ト忽ち悚然とした思入。

ト義時の膝は、もうとうに崩れてしまつてゐる。

これより先き義時が頻りに「南無文珠菩薩！」を繰返してゐた時分に、堂の背面の扉が音もなく開けられて、伊賀の方が、脱いだ被衣を小脇に抱へて、そろ／＼と堂の下手へと廻り出でゝ、じつと義時の樣子を窺つてゐたが、此時しづかに前の方へ歩み出る。

時刻はまだ午後の四時過なのだが、こゝは樹木が繁茂してゐる上に谷間であるから、傾きかゝつた日光は、もう殆ど直接には映してゐない。隨つて、堂内の如きは、もう大分うす暗い。で、一週間以上の難行で、今だに衰へてゐる伊賀の方の相貌は、如何にも重病人らしく、蒼白くも見られる。

さて、義時は、我知らず後ろが見られるやうに感じたらしく、先づ竊と上手の奧を見やり、やがて背後を窺ひ、次第に下手へと其目を轉じた。ちやうど其途端に、伊賀の方が、下手の奧から廻り出でたので、義時の臆病げな其目は、はたと伊賀の方の顏と出逢つた。義時は眼球が飛出すかと思ふほどに目を瞠つて、覺えず禮盤の上に突立つたが、忽ちよろめいて踏みはづし、よろ／＼と二足三足、上手の前寄へとたぢろぎ、そのまのめるかと見るうちに、ちやうど手に觸る曲彔を力杖にして、やつと踏み止まつた。さうして進みもせず、退きもせず、石の像のやうになつて、じつと伊賀の方の顏を見詰めてゐる。

ト伊賀の方は、如何にも病んで疲れてゐるらしい力ない聲で、しづかに、とぎれ／＼に

伊賀　わが夫、御免下されませ。……もうお行は果てましたか？

トいひつゝ、禮盤の下手へ進み出で、一寸膝まづいて

思うたより早いお快氣……ほんに悦ばしう存じまする。

ト此間に、義時は、だん／＼我に返り、もう旣に恐怖の表情だけは跡もなくなつたが、なほ頻りに焦々するらしい心を、じつと自ら制して、辛うじて落ちつき、曲彔に腰をおろし、むづかしい顏をして、不興げに默つてゐる。

ト暫く間をおいて、伊賀の方は又言葉を繼ぐ、やつぱり力なげな聲で、時々術なげに息を吐いて、とぎれ／＼に言ふ。

お行の妨げをせまいため、わざと案内をば乞はせませいで、卒爾にお見舞申しました。若し御機嫌に叶はなんだら、どうぞ慮外をばおゆるされませい。……わらはも、あの翌る日から、持病が起つて、此間中は、枕に就いてばか

りをりましたが……けふは、餘儀なく申さねばならぬ事があつて……御見舞かたがた參りました。

ト義時は心が落ちついたらしいが、尙むづかしい顏をしたまゝで

義時　ふむ！　餘儀ない大事？　といふのは？

伊賀　餘の儀でもござりません。我家の跡目相續の事について……

トいひかける。義時はぎつくりして、また忽ち沈着が破れかけて

義時　えゝ？　又あの、此間の相談か？

トいひつゝ不興げに顏を背ける。

伊賀　（苦しげに、靜かに）いかにも、あの事に就きまして、家國の爲には、申しにくい事も申さねばなりませぬ。……幸ひ一旦は御平癒あつたとは言へ、もはやお年の上の、かうした御容體であるからには、現に四五日前のやうな不慮の事もあつて見れば、――かんまへて安心はなりませぬ。家のため、また天が下のためをおぼしめすなら、今の間にこそ後々の事をも、とくと指圖しておかせらるべきでござります。これはもう既に先日も、一わたりは申し上げましたことなれども、けふは取りわけ、曲げても申さねばならぬ仔細あつて――

ト息苦しげにいひかける。これより先、義時の面上には、次第に猜疑、憎惡、憤怒などゝも解釋せられる表情が交代したり、混淆したりして現れ、其都度、義時は目をけはしくして伊賀の方の顏をきつと見詰めてゐたが、此時もう堪へかねたらしく、はらだゝしげに

義時　それで、……どう指圖しろといふのだ？

ト聲の調子は低いが、手強く、口早に、むしろ反撥けるやうに言ふ。けれども伊賀の方は、やつぱり前と同じ調子で

伊賀　さア、先日も申した通り、和田の一族が亡びて後は、由緒なり、權勢なりの、直に我家に次ぐものは、先づあの三浦の一黨ばかり。彼等を巧妙に用ふれば、末長う無二の身方、我家國の柱石ともなるべきなれども、若し野心を起かせたら、我夫亡き後には片時も安心はなりませぬ。強て我夫にも其處に御用心あつたればこそ、あの義村をば政村の烏帽子親とはなされたのでござりませう。わらはが世の思はくをも顧みず、政村を是非お跡目にと望みまするも、畢竟は、あの義村の心をば籠らんため。これぞすなはち我北條家安泰長久の大計にござります。或は、わが實の子可愛さの女心、身勝手ともおぼしめすまいものでもなけれど……

トいひかける。

義時　（皮肉に）では、さうでないといふのか？

伊賀　はて、おほせまでもないこと！

義時　（手強く）虚言(うそ)を吐け！

伊賀　え？

義時　剛慾をかはきをるな！

伊賀　え！　我夫(わがつま)？　何といはせられます？

義時　（向き直つて）おれを欺すことが出來ると思ふか？

伊賀　え！

義時　（睨みつけて）やい！　おれが目を瞑るのを俟つて、あの實雅を將軍とし、政村をば表に立て、兄の光宗に執權の實を握らせ、自分は尼御臺の役をしようといふ陰謀であらうが！

トきつと言つて、ふつと手に觸る戒刀を、半無意識に左手に掴んで、禮盤の上に居丈高になる。

伊賀　まア、思ひがけない！　疑ひにも事を缺いて、てもまア！　あんまりな、あさましい、その……

トいひさして、後は言へないといふ風に、泣く。

義時　（トそれをじつと睨みつめて）いゝや、それに相違ない。此四十年來、おれの……（ト喘ぎながら）密事を悉く知つた者と言つては、あの深見三郎次郎たつた一人その外にはなかつたが、その深見めがあの公曉の事からして、おれの手にも負へぬ程に増長しをつて……

トいひかけると、むら／＼と過去の事を思ひ出されて來たらしく、じつと向うを見詰めながら

すてゝおけば、何を爲(し)いだしをるか圖られんので、手早く彼奴をかたづけるために……（いつたが太い息を吐いて）あゝ！　女と小人！……つい何もかも知らせてしまつたのが俺の誤りであつた！……

ト急に伊賀の方を見返つて

そこへ附け込んで、強(こは)もてゞ跡目を取らうといふのだな！

トきつといふ。

伊賀　何といふ……情けない……そのわるずゐ！

トいひさして、わざと取亂して泣く。之より先き、義時「どう指圖しろといふのだ？」と叫んだ頃に下手の降り口へ深見小三郎がそろ／＼と降りて來る。さうして伊賀の方の「先日も申した通り、云々」の白の間に、堂の下手側面の石段を上つてよろしく思入。そこの火燈口式の窓に寄りそつて、内の樣子を窺つて居り、此時、義時の此言葉を聞いて、大いに驚く思入あり。なほ息を殺して聽いて居る。

義時　いゝや、さうだ。きつとさうだ。やい！　それを俺が怖れると思ふか？　おのれ！　俺の密事の有りつたけを、えい、何處(どこ)へなりと、だれになりと、披露しをれ！　吹聽しをれ！　うぬ！……一×××××をも物ともせぬ

義時だ！　三××をも島流しにした義時だぞ！　天上天下、此義時に刃向ふ者があるか？　うじむしめが！

ト戒刀を左手に摑んだまゝ、まるで病苦などは忘れてしまつたやうに、猛然として禮盤の上に立つ。此間伊賀の方は、如何にも弱々しく力なげに、甃の上に突伏して、泣きながら

伊賀　（ます〳〵苦しげな息づかひで）あさましい其疑ひを晴らすため、……所詮、いはいでは叶はぬことゆゑ、……今いうた表立つた仔細の外の、餘儀ない理由を言ひませう。……（ト喘ぎながら）政村をば跡目にと願ふのは……ゆめさら生さぬ仲の子を疎み、生みの子を世に立てたいなんぞといふ、さうしたさもしい慾心でない證據は……

ト苦しげに息を繼ぎながら

此間からのわらはのわづらひ。……その原は……さる怖ろしい……死靈の祟り！

義時　え！

トこれにて義時はぎつくりしたる思入。

トいふと共に、突立つてゐる威嚴のある姿勢が、又淺ましく崩れかける。伊賀の方はきつとそれに目を附けたが、又忽ち病苦を裝ひ、なやましげに喘ぎつゝ

伊賀　これ、御覧なされ、わらはの此五體の衰へを！　わらはも我が夫と同じ様に、とりわけ此十日このかたは、夜毎のやうに、其死靈に祟らるゝ、身の惱み、心の惱みに、眠られねばこそ此衰へ！……（ト苦しげに息を繼ぎて）政村を跡目にと願うたは、ひたすら其死靈をば和めうため！……なれども、はじめは、心の迷ひかとも疑ひ、中頃は父や兄の名に恥ぢて、有りのまゝには言ひ出しかね、今も今とてわざとこしらへて申したゆゑ、御不興の上にその疑ひ！……

ト又泣く。義時はまだ突立つたまゝてあるが、前の居丈高の擬勢は脱けて

義時　死靈とは？……死靈とは、何の死靈？……

ト半信半疑の體で、伊賀の方をきつと見下しつゝ言ふ。

ト伊賀の方は、なほ俯向いたまゝ、はじめは泣聲で、低く、とぎれ〳〵に物を言ふ。其中に、それが、だんだんと調子高になり、モノトナスな、しやがれた、物すごい聲に變つて行く。

伊賀　淺ましや！　悲しや！　怨めしや！　かけし年ごろの大望の、人の爲に謀られて、うたかたの、跡もなく消えしだにも怨めしいに……何の科もない可愛し子をば、あの花のやうなわく子をば、人手にかけて、非業に失うたる其怨み！　いつの世にかは忘らるべき！　魂魄永く此土に留まり……

トだん／＼言ふことが物すごくなると共に、伊賀の方の表情もそれにつれて變化し、とゞ、すつくと起つ。これにて義時慄然とした思入。思はずたぢ／＼となる。
ト伊賀の方へ、又忽ちばたりと倒れ、如何にも苦しげに身を悶え、我手で胸元をおさへながら、聲だけはやはり物すごい幽靈聲にて

只一字のみ異なつたる、同じ呼び名の緣に牽かれ、無慚に破れし前生の、その妄執を晴らさんため……

トこゝまではしやがれたモノトナスな聲で言つたが、又急に持前の伊賀の方の泣き聲に戻つて、苦しげに喘ぎながら

夜毎にわらはの夢枕に、あさましい姿を現し、政村と生れ換つた政範に……此家の跡目を讓らばよし、若しそれをさへ拒むならば……

ト苦しげに喘ぎつゝ言ひさして、又頻りに身悶えし、忽ち又前のしやがれ聲に戻つて

もしそれをだに拒むならば、見よ／＼今に、おのれ、怨めしい極重惡人！

ト伊賀の方又すつくと立ち、義時をきつと睨みて

今に其報いを見せてくれん！　まづおのれが後添ひの……此女めを！　此女めを！　これを見よ！

ト伊賀の方又ばたりと倒れ、はげしく身悶えし、甃の上を轉げ廻つて苦む。義時我知らず其そばへ寄らうとする。此うち伊賀の方の小袿は脱げ落ちる。夏衣裳の肌薄なので、轉げ廻るうちに、袖口、襟元のみだりがはしくなるにつれて、腕、胸元など折々あらはになる。
ト一疋の蛇が二つの腕に巻き附いてゐるのが見える。さうしてそれが、突然鎌首を立てゝ義時に向ふ。義時はびつくりして、小聲で

義時　あゝ！

ト叫んで後へ退る。これと同時に、伊賀の方の頸にも一疋蛇が纏ひ附いてゐるのが目に附く。途端に、伊賀の方の裾からも、又小さい奴が一疋這ひ出し、義時の足元へ近寄る。で、義時はうろたへて避ける拍子に、それを踏む。トすぐに其足首に巻附く。これにて義時は、身悶えして、とゞ、そこへ卒倒する。
ト蛇は悉くいづこへか逃げてしまふ。此間、伊賀の方は、氣絶したやうにもてなして、じつとしてをり、脱げた小袿の蔭から、そつと頭だけ擡げて、義時の樣子を窺つて、よろしく思入。
此以前、小三郎は、窓の外には、始終の模樣を見てをり、驚く思入よろしく、此時さすがに捨てておきかれたといふよりも寧ろ本能的にといつたやうな風に、傍の扉を開けて走り入り、先づ義時を抱き起し、よろしく

こなしあつて、ふつと直後ろの卓子の上の薬湯に目を附け、それを取り、やがて義時に飲ませ、介抱することよろしく、小聲にて

小三郎　御前！　御前！

と呼ぶ。義時やう〳〵息を吹返す。けれども一寸目を開いて見て又閉ぎ、徐なげに喘いでゐる。

此うち小三郎は、卓子の擲木に目を附け、手早くそれを取り、軒先へ走り出でゝ、喚び鐘を打鳴らす。伊賀の方は、尚ほもとの通り、突伏したまゝである。程なく、堂の背後から、小柴と田毎、又下手の降り口からは右近が、共に急ぎ足で駈けて來る。

――幕――

第三幕

第一場　義時の寢所

正面の上手寄五間程の間は上段の間風に設置つたる義時の寢所。(こちらから見ると、舞臺面全體がやゝ漏斗狀に見渡さるゝ裝置。)其奥の見切、四間の間には一面の壁代を垂れ、其壁代の兩端の柱から上手へかけて、ずつと斜に三間程の間は、同じく壁代。又下手へ斜に、同じ間數の間は壁。

上段の間の直前は、一帶に落ち間。上段の間と此落ち間との間には簾が降るやうになつてゐる。(漏斗狀の裝置ゆゑ、此落ち間は、上段の間の框の邊では五間程だが、舞臺端では、六七間になつてゐる。)

此落ち間の上手には、上段の間の壁代と準へに、斜に簾が降されてある。其の簾の上手に板敷の長廊下の一端が見える。其長廊下の正面は板羽目。

又、落ち間の下手には、上段の間の壁と準へに斜に降されてある簾を隔てゝ、奥へ細長くなつてゐる次の間。其奥の突き當りには妻戸。それから下手の奥寄の方の見切は板羽目、前寄りの半分は蔀格子。

上段の間の中央に、義時、蓬被が重ねて敷きたる敷蒲團の上に畳み上げたる寢具に靠れて、苦しげに肩で息をしてゐる。右近、其下手に坐りて薬湯の準備をしてゐる。

よき處に屏風、脇息、厨子、薬餌の調度、燈臺など。

落ち間のやゝ下手に、加持の醫師、斜に義時の方へ向いて、膝に兩手を置き、頭を垂れたまゝ、思案に暮れてゐる體。それよりも更に下手の前寄りに、小三郎、これも頭を垂れ兩手を膝に突いて、泣面を作つてゐる。

此落ち間にも一脚の燈臺。

次の間には、蜂王と砂王とが、双六盤を間に置いて、

双六なしてなり、侍女の甲、乙、丙が其周圍に坐つて、それを觀てゐる。いづれも夜伽の體なのである。こゝにも一脚の燈臺。時刻は前の幕と同日の午後九時頃。

義時　（窶れて、俯向いたまゝで、力の無い聲で）　右近！　右近！

右近　はッ！

ト傍へ進む。

義時　（同じ態度のまゝで）　まだ、婆は、歸つて來んか？

右近　はい。……まだ、退つて參りません。

義時　御所へ往つたにしては、手間が取れる。どうしたのだらう？

右近　ほんに、どういたしましたことやら！　しかし、もう程なく、立歸りますでござりませう。……お白湯でもさし上げませうか？

義時　不要！　不要！

トいひつゝ呻く。右近は摺り寄つて介抱する。此うち、落ち間にじつと控へてゐた藤內、少しく頭を擧げて、義時を仰ぎ見て、一寸思入あつて、聊か膝を進めて

藤內　押し返して、お願ひを申し上げまするは、お慮外ではござりますが、どうかその、せめてお次の間で、お夜詰をいたしまするとだけなりと、許してお遣し下されませ。何がまア御機嫌にさはりましたやら存じませんが、十四の年から十八の今年まで、人幾倍の御寵愛を受けてをられた仁だけに餘の御勘當が、一段といぢらしうござります。どうかまア、お次でお夜詰をいたしますることだけは……

トいひかける。これより先、義時は煩げに、頭をぶるぶるさせて、小聲で「默れ！　默れ！」と俯向いたままで、二度ばかり命令したが、耳の近くない藤內には聞えぬかして、尚ほも喋舌りつゞけるので、きつと頭を擧げて

義時　えゝ、うるさい！……默れ！

ト一喝した義時の顏の色は、前の場のそれよりもずつとわるい。殆ど血の氣のないやうにも見える。藤內は口を噤む。同時に、義時は下手にゐる小三郎に目を附けて、不快げに

あゝ！　まだ！（トこはい顏をして右近に）なぜ小三郎めを退げん？……目通りは叶はん。……退げッちまへ！

ト焦立たしげにいふ。

右近　はッ。……これ、藤內どの、かうしたお不加減の折に、しつこうお願ひ申すのは、な、却つて不爲になりまする。いづれ、機を見て、わたしらからも。まゝ、ともかくも、小三郎どのを。（トいつて特に小三郎にも）な、

小三郎どの！
ト呑み込ませる。これにて藤内は思入あつて、小三郎はよろしくこなし。小三郎は、無言にて、義時はじめ右近、藤内へ會釋して起ち、徐かに次の間へ出で、何か沈思しつゝ、突當りの妻戸を開けて出て行く。後に藤内は、手を組み、頭を垂れ、考へ込んでゐる。これより先、義時は、まだ寢具に靠れ、首を垂れてゐたが

義時　小三郎めは退つたか？
ト俯向いたまゝでいふ。

右近　はい。退出いたしてござります。

義時　(同じ態度のまゝで)　藤内はをるか？

右近　はい。あれに控へてをります。

義時　(少しく顔を擧げて、下手を見て)　藤内！

藤内　へい〳〵！　(ト膝を進めて)　何か御用でござりますか？

義時　若黨共によく吩咐けて　(ト嚴格な聲で)　あの小三郎めの振舞に氣を附けさせろ。

藤内　へい〳〵。かしこまりましてござります。
ト義時は、此命令をした爲に、息を切らせて喘ぐ。右近は介抱しながら

右近　どうやら甚うお衛なさうな。やつぱりお褥のはうがようしうはござりませぬか？
ト義時無言にてうなづく。右近かひぞへして、仰向に臥かし、寢具を被せかける。

義時　(仰向けになつてゐて)　右近、與は、あれから、どうした？

右近　はい。あの……あれからあの、何でござりました。全くお正氣があらせられませんやうでござりましたので、早速紀河の矩秀を呼びに遣はしまして……

義時　(不快さうに)　あゝ、矩秀！

右近　種々と御介抱申し上げましたところ……次第にお心確かにならせられまして……

義時　あゝ、もうよし！　もうよし！……措け〳〵！……今は……聞きたうない！　聞きたうない！
ト口早にいつて顔を背ける。これにて右近口を噤む。一同暫く無言。次の間では尙ほ双六の勝負を續けてゐる。
ト義時又苦しげに呻く。右近は急ぎ介抱しようとすると、義時は喘ぎながら

義時　妻は、まだ、歸つて來んか？

右近　はい。まだ……退つて參りません。
ト義時は本意なさゝうに

義時　あゝ！……

ト太い溜息をしたが、又暫く無言。やゝあつて又

右近！

右近　はい〳〵。

義時　暫時眠りたい。簾をおろしてくれ！　そこの簾を！

右近　かしこまりました。

ト徐かに上段から落ち間へおりて、次の間の方へ向いて、小聲で

侍女たち！　侍女たち！

ト呼ぶ。これにて侍女、甲、乙、丙

侍女　はア。

ト小聲で答へて、落ち間へ入り來る。

右近　しばらく御寢なるほどにの。……

ト宜しくこなし。これにて甲、乙、丙は徐かに上段の間にあがり、右近の指圖に從つて、調度をかたづくることありて、とゞ正面の簾をおろし、右近と共に落ち間へおりる。右近は

では、御機嫌よろしうお寢み遊ばされませ。

ト會釋して起つ。侍女らは元の次の間へ退る。

此間、藤内は、手を組んだまゝ、何か心許げに考へこんでゐたが、右近が落ち間の上手に住ふと同時に膝を進める。

藤内　でもまア、こんなことで濟んで、ようござりましたなア。つい此間の今夜といひ、肝腎の力綱の行違とのは他行中といひ、ま、どうなることかと案じ拔きましたが。……

トいつて、あたりへこなしあつて、聲をひそめて

一體まア、けふは、どうなされたのでござりませう？あの通り甚いお元氣でござらつしやつたのに。何かまた奥さまと、爭論でもさつしやつたのでござりませうかな？

右近　さア、眞先きに其場へ馳け附けたあの小三郎どのさへ……何にも知らぬ……といふのが不審。

藤内　されば、……（ト考へて）思ひ餘つて、つい、とんだお慮外を申しあげて、御機嫌を損ねたは此藤内。それだのに、其藤内にはお咎めがなくッて、あのお氣に入りの小三郎どのを、御勘氣（ト又考へて）といふのも不審。

右近　小三郎どのゝ目の色が例になく……（ト考へて）血走つてゐるのも……一つの不審。

藤内　掃除のよう屆いた筈の、あのお庭の、しかも四阿の中から……（ト考へて）蛇が這ひ出して來たのも不審。

右近　それに、あの小三郎の御密訴のやうにもなく、何氣なげに取りすました、あの奥方の、いつにないお見舞ぶりも不審の一つ。

トいつたが、きつと向うを見て

それにつけても、あの直理どのは、なぜ遅いか？　一刻も早く御所のお模様が聞きたいのぢやに。……あゝ、何かと気の揉めることばかり！……

ト いつたが、藤内の方へ向き直つて

藤内どの、とにかく、こよひは、油断がなりませぬぞ。さしづめ、若党衆に吩咐けて、四方の御門をば固めさせて下され。

藤内　心得ました。手前もさう思つてをつた所でござります。では、早速に手配りをいたしませう。御免下されませ。

ト藤内は、右近に会釈して、次の間へ出て、妻戸口から出て行く。やがて右近も起ち上つて、上段の御簾際に立寄り、内を窺ふ思入あつて、うなづき、すぐに次の間へ出て、侍女らに

右近　どうやら御安眠遊ばしたやうぢや。急にはお目ざめにもなるまい。わしは、ちよと表へ往つて来ます。その間、暫時（しばし）、そなたたちに頼みましたぞや。

皆々　はい／＼。かしこまりましてござります。

ト右近は妻戸口から出て行く。侍女らはよろしくこなしあつて、又双六をはじめる。こんどは、砂王、蜂王は観る方へ廻り、甲と乙とが双六盤に相対する。

四つ（午後十時）の鐘が鳴り渡る。

燈籠の火形が、――三ヶ所とも、――段々暗くなりはじめ、上段の間のが真先に、次の御座間のが、其次に次の間のが消える。

第二場　夢の裡の幻景

燈火が暗くなりはじめると同時に、四方から暗澹と迫つて来て、遂に真ツ暗闇となる。

其うちに、奥の方にて、遠く陣貝、陣太鼓の音が聞え、閧の声が聞え、それが次第に近くなるにつれて、正面の簾の中が夜が明けてゆく時のやうに、だん／＼明るくなり、とゞ月夜ほどの明るさになる。

トそれと同時に、以前の簾のうち、と思はれるあたり一ぱいに、一つの幻景が展開される。それは、京都の法皇の御所の正門前の景であるらしい。

中央よりはやゝ下手寄りの、ずつと奥に、遙かに院の御所の檜皮葺きの正門が、たかゞ五尺ぐらゐの高さになつて見えてゐる。其上手、下手は、式（かた）の如き築地なのだが、こちらから見ると、それが正門を頂點（アペックス）にして漏斗状に左右へ、ぐつと斜に開いてゐるので、前面に大きな空間（スペース）が出来てゐる。其廣々とした空地にもまた築地の内外にも、樹木などは、只の一本も見えてゐない。

此景が、まるで幻燈畫のやうに眞ッ正面に現れると同時に、上手で、男女老若の哭き叫ぶ聲々が、陣鉦、矢叫び、鬨の聲なぞと混淆になつて聞える。

ト上手から大勢の男女老若が、こけつまろびつして、逃げて來る。(これは、以前落ち間のあつたあたりで、上段の間の直前が、いつの間にか、都大路に變つてゐるのらしい。)其老若の多くは殿上人である。衣冠のものもあれば、束帶姿の者もある。緋の僧衣の老僧もあれば、五つ衣の官女もあり、立烏帽子、風折もあり、尼もあり、童もある。地下も、雜式もゐる。

これらが、こけつまろびつして逃げて來る後からは、夥しい鎧武者が、武器々々を揮り翳して追つかけて來る。

で、一同は、右往左往に逃げ惑ふ。ころぶ、突倒される、踏みにじられる。切殺される者も尠くない。見る見る、其多數は血みどろになる。早い話が、土佐、住吉の古い軍繪卷中の内裡攻めか何かの一枚に魂が入つて、活きて働くのかと思ふやうな、慘ましい活畫である。

暫くして群衆も、鎧武者も、追ひつ追はれつして、左右に散つてしまふ。

ト遠くの御所の門内から、一群の鎧武者が練り出して來る。馬上の立烏帽子の武者は其大將らしい。遠いから、いづれも二三尺ぐらゐの身長に見える。

つゞいて四方の坂輿――例の屋形をはづしたの――を雜式が舁いで出る。其脇には、殿上人らしいのが二人、僧が一人附添つてゐる。其後からは、又も鎧武者の一群。此行列は、門からずつと斜に、上手の前へと徐々と練つて行き、やがて見えなくなる。

トだん／＼四下が昏くなりはじめ、遂にはまた眞ッ昏になる。

ト思ふうちに、又だん／＼明るくなりはじめる。

見ると、いつの間にか、すぐ前の處――以前落ち間のあつた邊は――杉並木の景に變つてしまつた。さうして其杉並木は、大抵梢が見えない程に丈が高く、隨つて幹も――上手寄のなぞは――中々太いのであるが、それが、中央から上手へかけては段々密接して立ちならび、下手の方は、ずつと疎らに生えてゐるので、奥の方が透いて見える。で、御所の正門や上下の築地が、尚ほ先刻のまゝ、殘つてゐるのが見える。

ト男女の悲しげに泣く聲が下手の方で聞えて、やがて女御らしい貴婦人と女房一人、女童一人、立烏帽子の公家一人、品のよい尼一人、都合五人が、泣く／＼下

手から出て來る。さうして、上手を見て、急ぎ並木の蔭へ隠れ、共に上手を指さしなどして泣いてゐる。

ト上手の奥で、いかにも哀しげな雅樂の音色が聞え、それにつれて、立烏帽子や風折をかぶつた鎧武者共が、多くは長卷を携へて、列を正して練り出して來る。其うち、馬に乗つてゐるのは大將分らしい。其後から雜式が四方の坂輿を舁いて來る。殿上人らしい二人と一人の僧とが、泣く／＼附き添つて出る。さうして其後には、第二の鎧武者の群が續く。

ト前の五人づれが、こらへかねたといふ風に、並木の蔭から駈け出して來て、輿へ縋る。武者らが驚き怒り、こはい目附をして、これを逐ふ。

此騒ぎの末ごろ、輿はもう下手へ入つてしまひ、第二群の、殿の武者共も既う殆ど下手へ消えかけるといふ時分に、又も向うの御門内から第二の同じやうな行列が練り出して來るのが、並木ごしに見える。さうして、それもまた、前のと同樣に、斜に上手の方へと練つて行つてやがて見えなくなつてしまふ。

ト又も並木の上手で、前と同じやうな哀しげな雅樂が聞えて、そこから前のとそつくり同じといつてよい一群の行列が練り出して來る。眞先が四五人の鎧武者、其中の一人は騎馬、そのあとから四方の坂輿。又そのあとからも鎧武者の群。

輿が並木の中央まで來ると、下手から、又も最前の五人が駈け出して來て、前と同じやうに輿に取縋らうとする。又無慚にも逐ひ散らされる。

ト又も奥の正面の御所から、第三の、同種、同形式の行列が練り出して來る。やがて前景に於ても、前々のと全く同一樣の現象が展開される。それが又、同一樣の手續で、無慚に逐ひ散らされる。

ト見るうちに、又も眼界が少しづゝ昏くなりはじめる。遠景の御所の門や築地が模糊となつてしまふ。

トどゝゝゝゝ、どうッ／＼と凄じく打寄せる高浪の音が聞えて來て、並木の奥に、遙かに一の離れ島を浮べた荒海の景が現れ、並木のすぐ後ろの荒磯から先刻の坂輿らしいのを三臺までも載せた船が、今ちやうど漕ぎ出でつゝ、其島の方へと進んで行かうとしてゐる。

ト次第に濤の音は薄れて行つて、絶えて、古風の神樂の鳴り物が聞える。見ると、いつの間にか下手寄りの杉並木は跡形もなく消えてしまつて、そこに小山の裾らしい小高い芝生が見え、又中央から上手へかけての並木も、最も太い三四本の幹だけを殘して、其他はなくなり、その代りに、大きな、高い、幅廣な石段の裾の三分の一ばかりが見えてゐる。

ト下手の小山の蔭から二人の鎧武者がうそ／＼と出て來て、何か囁き合つて、あたりを見廻し、人待ち貌である。すると、太い幹の間から、烏帽子、直垂の、四十年輩の、一癖ありげな武士が、前後に氣を配りながら出て來て、何か前の二人へ合圖らしいことをする。ト二人は忽ち見返り、すぐに其傍へ行く。武士は二人へ何か言ひ含める。二人はすぐ上手へ入る。武士は一人殘つて、手を組み、何か考へてゐる。

ト上手の石段の上からだれやら降りて來る。はじめは、沓を穿いた足と奴袴(さしぬき)だけが、妙に目立つて見える。實際、一二分間は、其足が石段の上の方に生え附いたやうになつてゐる。其うちに徐り(そろり)／＼動き出す。降りて來るにつれて、それは衣冠姿の立派な殿上人だといふことが分る。いよ／＼地上に降り立つのを見るとそれは八九年前の――即ち全盛時代の――義時なのである。右手には儀式用の、黄金造りの御劍を捧げてゐる。前の武士は、義時を見ると、すぐに驅け寄つて、何事をか報告するらしい。義時は大やうにうなづいて捧げてゐた劍を、竹片でも棄てるやうに、路傍に抛げすてる。

ト此途端に、ちら／＼と雪が降り出して、見る／＼大ぶりになる。其間に、いつの間にか、下手へ大きな石の鳥居が出來る。

ト上手の奥から又も神樂の音色が聞えて來る。すると、義時は、きつと上手へ思入あつて、武士へ何事をか耳打して、やがて二人とも鳥居の下手へ身を隱す。

程なく、上手から、石段の前を横切つて、一人の年若い、緋の僧衣を被た端麗な僧が出て來る。やつと十八九でもあらう。それが鳥居近くへ來ると、義時と武士とは急いで出迎へ、武士は如何にも恭しく、義時はにこやかに、敬禮する。僧はそれを喜んでゐるらしい。そのうちに、義時は、何か武士に耳こすりをして、自分は例の幹かげに入つてしまふ。ト武士は居殘つて、僧の袖を引張つて、石段の下まで連れて行き、上の方を指ざし、頻りに何か囁くらしい。ト僧は切歯扼腕して、くやしがる。武士は四下(あたり)を見廻し、義時が棄てゝ行つた先刻の劍を拾つて、それを僧に渡す。僧はそれを受けとり、うなづいて武士と共に、例の太い幹の蔭へ隱れる。

ト雅樂の、何となく悒欝な音色が、上手の奥から聞えて來る。さうして、それにつれて、石段の上から、又たれか降りて來る。義時が降りて來た時と同じく、最初は沓と袴の裾とだけが、暫時固着したやうになつて石段の上の方に見えてゐる。其うちにそれが動き出す。

降りて來るにつれて、それは束帶姿の人と衣冠姿の人であることが分る。よく見ると、それは前將軍實朝と文章博士の仲章なのである。仲章は手に御劍を捧げてゐる。二人が地上に降り立つた其途端に、前の僧が——いつの間にか、白裝束の下に腹卷といふ公曉禪師の打扮になつて躍り出で、只一刀に實朝を斬り斃し、返す刀で仲章をも刺し殺し、すぐに實朝の首を打落し、それを刀の先きに貫いて、高く捧げ擧げ、嬉しげに何か叫ぶらしく、天を仰いで大きく口を開く。

ト最前の武士が、拔足して、其うしろから忍び寄つて、只一刀に其腹を背から前へと貫く。其切先が下腹の前へ三四寸がた突き出たのが、まざ〳〵と見える。公曉はすぐ斃れてしまふ。

此間、雪はます〳〵降りしきつてゐる。

武士は、公曉の斃れたのを見て、につたりと思入して、つか〳〵と下手へ行かうとしたが、どうしたか俄に苦み出して、雪の中へ倒れ、七顚八倒するうちに、口から夥しく韓紅ゐの血を吐く。

此うちに雪は全く降り止み、あたりがだん〳〵昏くなりはじめる。ト何處ともなく、平家琵琶の撥音が聞えて來る。

やがて四方がまた次第々々に明るくなる。三本の太い幹だけは元の通りに殘つてゐるが、鳥居はいつの間にか無くなり、其代りに、そこに池の水際らしいものが現はれて、其邊一ぱいに眞菰だか菖蒲だかゞ生えてゐる。

悶え苦む武士と公曉のらしい死骸とだけは、元の處に殘つてゐるが、他には人の影もない。勿論、雪の跡形もない。

それから、上手の石段がなくなつてしまつて、そこには池に臨んでゐる釣殿めいた建物が見え、燈火があかあかとしてゐるので、そこの簾越しに、琵琶法師の影が透いて見える。

「平家」の撥音は尙ほ續いてゐる。明月が中天に冴えてゐる。

ト太い幹の蔭から、義時が——立烏帽子に水干、附け太刀といふ打扮で——出て來る。此時、血を吐いてゐる武士は苦しさに堪へぬらしく、水でも飮まうとするのか、這つて池の方へ行く。義時は徐かに其後に附いて行く。ト武士は、苦みながら、ふとそれを見附けて、怨めしげに見上げる。義時は、すぐに片脚を擧げて、武士を池の中へ蹴込んでしまふ。ぱつと水煙が立つ。途端に撥音が止んで、ボーンといふ梵鐘の音が聞える。

義時は又徐かに上手へ歩み戻つて、公曉の死骸らしいものを抱き起す。見ると、それは公曉ではない。直垂を被た十四五歳の美少年の死骸なのであるが、これも口元から襟へかけて、韓紅ゐの血が夥しく流れてゐる。毒でも飲んだのらしい。じつとそれを見詰める義時の貌には、一種の苦悶の色が浮んでゐる。やがて抱いてゐる手を離し、死骸を元の通りに倒しておいて、そのまゝ下手へ行きかけたが、さすがに忍びかねるといふ風に、又戻つて來て、再び死骸を抱き起す。

釣殿の燈火は之れより先きに消えてしまつてゐたが、此時その眞暗な釣殿の中で、悲しげにワーッと哭く女の聲が聞える。義時はそれを聞くと、ぎよつとした思入て、急いで例の幹の蔭へかくれる。

ト上手から四十六七とも見える一人の女房が、被たる衣裳もみだりがはしく、黑髪を振りみだし、全く狂氣の體で駈けて來て、少年の死骸を見るとそのまゝ、ひしと抱きついて、天を仰ぎ、地に伏しまろびて、慟哭するらしい。不思議に其聲は聞えない。或は頬摺をしたり、抱きあげたり、或は抱いたまゝ駈け廻つたり、暫くは前後不覺の有様であつたが、やゞ奮然として突立ち上り、懐劍を抜き放つて逆手に持ち、目をいからせて、あちこちを見廻すは、わが子の敵を搜すのであるらしい。其うちに、此狂女の目が、幹の蔭に隱れて、じつと樣子を窺つてゐる義時の目と、ぴたり出逢ふ。ト狂女はすぐに懐劍を振り閃めかして、まるで夜叉のやうな勢ひで、其幹蔭へと突進する。義時は駭きあわてゝ、三本の幹の周邊を、幾たびも廻つて逃げる。狂女は其後を追ひ廻る。

此うちに、空には黑雲がはびこつて來て、月は隱れ、あたりが又昏くなる。やがてピカリ／＼と電光がして、雷が段々近く鳴り渡る。

どこへ隱れたか、義時の姿は見えない。狂女はますます猛り立つて、物凄い形相をしてあつちこつちと搜し廻つてゐる。見ると、狂女の相貌は、いつの間にか、正眞正銘の、怖ろしい夜叉のそれに變つて、其振亂した黑髪は、毛が數十本づゝもつれ固まつて、太い針金のやうに波を打ちつゝ逆立つてゐる。よく見るとそれがいづれも蛇となつて鎌首を擡げ、紅ゐの舌を吐いてゐるのである。のみならず、今は懐劍を持つてゐない左右の手の、其十本の指も、それも悉く長々と延びて、蛇のやうに、うね／＼と波を打つて、さうして其先きの方は、やはり鎌首を擡げて、赤い舌を閃めかしてゐる。

上手の釣殿も、いつの間にか、薄昏い山蔭の、物凄い

卵塔場に變つてしまつた。樟だか欅だかの大きな枝々が掩ひかぶさり、小篠や雑草や蔓物やが彌が上に生ひ茂つてゐる中に、幾つも／＼五輪が立並んでゐるが、中にも一際目立つ中央のは、高さが五尺程もある。尙ほよく見ると、此卵塔場は怖ろしく廣く、例の三本幹の背後の方までも續いてゐる。そのあたりずつと一面に同じ陰森な山かげで、さうして小篠や茅が生ひ茂つてゐる中に、殆ど無數と言つてよい程の多數の五輪が、其頭だけを見せてゐる。さて鬼女は、義時を搜しあぐんで、又も三本幹の背後へと廻り入つたが、そのまゝ姿が隱れて、暫くは出て來ない。ト上手の卵塔場の最も大きな五輪のうしろへ、義時が突然その姿を現す。顏色が俄に甚しく憔悴して、急に六つ七つも齡を取つたらしく見える。もう酷く疲れ果てゝ、足元がよろよろしてゐる。大きな五輪につかまつてやつと其前へ廻つて出る。トもう息が切れて堪へられぬらしく、そこらに在る竹の花筒を拔いて、其水を飮まうとする。ト其花筒から、だしぬけに青い火がひら／＼と燃上る。驚いてそれを投げ出すと大五輪が音もなく壞れ倒れて、そこに白衣、亂髮の、一個の、氣高い、併しながら何ともいへぬ怖ろしい顏色をした貴人の姿が髣髴として立現れ、きつと義時を睨みつけた。其十本の指はやつぱり紅く蛇と化して鎌首を擡げ、くれなゐの舌を閃かし、駭いて逃げかける義時の首筋元を目がけて飛びかゝるのである。

義時は、こけつまろびつして、三本幹のうしろへ逃げようとすると、無數の五輪の頂點が、いつの間にか、紅く髑髏に變つてをり、さうして其の中で最も大きい三つ四つは、その空洞の目の穴や鼻の穴から、ひらひらひら／＼と青い鬼火を吹き出してゐる。全體の數は實に無數で、見渡す限り、みんな髑髏で、實際どこまで續いてゐるのか分らない程である。

で、義時は、又取つて返し、こんどは下手の池の方へと逃げたが、やがて息が切れて、いよ／＼一歩もあるかれぬらしく、やつとの事で池の端へ這ひ寄り、眞菰がくれの水を辛うじて手で掬つて飮まうとする。

ト池の中からも青い火が陰々と燃え出し、義時が愕いて逃げ退かうとすると、其鼻の先きへ、同じく池の眞菰の中から、凡そ十疋ほどの蛇が同時に鎌首を振立てつゝ飛びかゝる。ト見るうちに白衣亂髮の怖ろしい顏色の男が、眞菰の中から、半身を現す。前の蛇は其男の指の先きなのであり、また其男は、先刻血を吐いて死んだ武士なのである。

これと同時に、例の三本幹の間からは、鬼女が姿を又

あらはす。數十疋の蛇に化して蒼く黒髮を逆立てつゝ、また左右の手を高く擧げて働かせて、十疋の蛇を躍らせつゝ、耳際までも裂けてゐる紅ゐの口を開き、今にも此方へ驅けて來さう。

上手の卵塔場の方からも、先刻の貴人の怨靈らしいのが追つ掛けて來る。

義時は、怖れ戰いて、一生懸命に逃げようとするらしいが、どうしても腰が立たぬらしく、只いたづらに身悶えして、踠き苦しむ。

此途端、風とも雷とも地震ともつかぬ一種のおどろおどろしい物音がして、忽ちに見ろ限りの處が眞昏になてしまふ。其昏闇の中で物すごい呻き聲が聞える。

第三場　元の義時の寢所

其昏闇が又だん〳〵明るくなると、元の寢所なのである。

簾は依然として下されてあつて、落ち間のやゝ上手には、老女の亘理が、侍女の甲を敵手に、つい今がたまで双六をしてゐたらしく、甲は双六盤の脇に突伏して眠つてをり、亘理も盤に片肱を突いて、こくり〳〵居眠つてゐる。次ぎの間には人影が無い。

上段の間の中で、義時がうなされて呻く聲が聞える。

其聲に驚いて、亘理ははつと目を覺す。トすぐに侍女の甲をもゆり起しておいて、自分は急ぎ簾を褰げて內に入り、義時を介抱する。侍女の甲も續いて上段の間に近寄り、先づ恭く簾を捲き上げる。

亘理　もし！　もし！　お夢でござります。お夢でござります。お目をお覺しなされませ。

ト起す。義時は尙ほ夢中の體で、跳ね起き、四肢(てあし)を踠き、玉體をふるはせて悶える。亘理はそれを背(うしろ)からじつと抱き止めて

亘理　お夢でござります。お氣をたしかになされませ。もし〳〵！　お夢ぢや！　お夢ぢや！

ト子供を諭すやうにいふ。義時はやつと目を開き、亘理の顏をじつと見て、情けない聲で

義時　おゝ！　婆か！……婆！　あゝ！

ト子供に還つたやうな聲で言つたが、やがて太い地聲に戻つて、喘ぎ〳〵呻いてゐる。

亘理　おゝ！　では又、お怖ないお夢をば御らうじましたか？

トいひ〳〵、脇息によりかゝらせて脊を擦りつゝ、「それ、お藥湯を！」と侍女の甲へこなし。心得て、甲は傍らの厨子に備へてある藥瓶より藥湯を天目へ注ぎ、それを亘理へ渡す。

さ、お薬湯をば、さ、お一口めしあがりませ。

ト義時に飲ませる。これにて義時やつとおちつき、目を開き、あたりを見廻し、やがて侍女を見て、亘理を見返り「彼女を彼方へ！」とこなし。亘理心得て、その通り、甲へこなし。甲はすぐに落ち間へ降り、次ぎの間へ出て、やがて突當りの妻戸口より出て行く。此間、亘理は始終義時の脊を擦つてゐる。

義時 （脇息に俯伏したまゝて） まだ誰れかをるか？

亘理 いゝえ、もうだアれもをりません。

トこれにて義時は溜息をして、太い聲で

義時 あゝ！……くるしかつた……！（ト喘ぎながら）此二年このかた…… 随分たび／＼厭アな夢も見たが……。

トいひかけたが、だしぬけに

あ！

ト叫んで、抱いてゐる亘理の手を振拂つて、居ながら二尺ほども跳び退つた。で、亘理は瞻を潰して

亘理 ま！ どうなされましたぞ？……もし！

ト追ひすがつて義時の貌を覗く、ト少し落ちついて

義時 そゝ、それは何だ？

ト氣味わるげに下手を指さす。亘理はそれを見て、ずつと下手へ膝を進め、やがて簾の紐の切れて落ちてゐるのを見附けて取りあげ

亘理 これでござりますか？……（ト義時うなづく）これは、お簾の紐の切れて落ちたのでござります。

トいつたが、一寸思入あつて、やがてこれを懐中へをさめる。

此間に、義時は自身で脇息を引寄せて、萎れる。ト亘理は寝具を其脊へ被せ掛ける。

亘理 これでよろしうござりますか？……（ト座に着きて）最前に、よつぽどお惱なさうにござりましたが、どんなお夢をごらうじましたのでござります？

トこれにて義時は、萎れて俯伏したまゝ、溜息をして

義時 此間も、同じ夢を、二度見た。……それと、不思議にも、八九分がたまでは同じであつたが、……只此間と異つてゐるのは……（ト一つ喘いで）今夜は、予の大嫌ひの、蛇めが出て來をつた！……髪の毛も、指の先きも、何もかも蛇になつて……さうして死んだ奴らが出て來て……

亘理 えゝ？

ト義時は溜息をして、亘理を見返り、靜かに、ときれときれに

義時 伊豆の北條にをつた時分……あれはたしか、予の六歳の時だ。……蛭が小島で蛇に身を卷かれた！ あれから予は、蛇が嫌ひになつた！……おのしは、女に似合は

ず、氣丈で、その蛇を鎌で切つて離してくれた。……あゝ！　あの時分は！……

ト遠い昔をなつかしむらしく、低く靜かに語る其聲は、何になく、一種のやさしみを帶んで聞えた。

亘理　ほんに、あの時分は、まだもう、ねつから、おいたいけでいらせられましたつけが……

トまでは言つたが、つい一度に、いろ〳〵の記憶が込みあげて來て、胸が一ぱいになつたらしく、亘理は急に口を噤み、顏を背け、澁面を作つて、無言で、しきりに義時の脊中ばかり擦つてゐる。

トやゝ暫くして

義時　婆！

亘理は、やつと淚を隱して

亘理　はい〳〵！

ト義時は默つて喘いでゐる。

もし！　何か御用でござりますか？

義時　婆！　物の報いとか、祟りとかいふことは……あるものかなう！

亘理　え！

ト我知らずぎよつとした體で、すぐには答へかねたが、やつと氣を鎭め、分別して、物しづかに

さア、隨分あるものでござりませうけれど、それはその、御身分柄にもよりまする。何の！　夢は五臟のお疲れがやとやら申します。お氣になされるには及びませぬ。…ちと又お脊中を擦りませう。

ト義時のうしろへ廻り、又脊中を擦る。二人とも暫く無言。

此時、落ち間の上手の簾の彼方――長廊下口――へ深見の小三郎が姿をあらはす。目に殺氣を帶んで、腰に小さ刀を佩び、拔足して近づき、簾際にひたと身を寄せて、內の樣子を窺つてゐる。

義時は、尙ほ喘息に俯伏したまゝで

義時　婆！

亘理　はい〳〵！

義時　おれが死んだ後は、……どうなるだらう？……此鎌倉は、どうなるだらう？

トいひ了ると、息苦しげに微かに呻く。

亘理　まア！　何をおつしやられます！　そんな滅相なことがござりまして、どうなりませうぞいな！　よしんば、萬々一の事がござりましたにせい、泰時さまがいらせられます。尼公さまがお息災でいらせられます。何のお氣づかひなさることがござりませうぞいな！

義時　いや〳〵！……姉も最う六十八だ。先達て見舞に來てくれた時に、さう思つた。あゝ、姉も衰へたと！……

ひどく涙脆くなつて、さうして愚癡つぽくもなつた。……もう長くはあるまい！……

トいつて、苦しげに二つ三つ喘いだが、急にびくりとして、顏を擧げ、不安らしく口早に、太い聲で

婆！　あの小三郎めの事を、藤内によく吩咐けたか？

亘理　はい。右近から確と申し附けおきましたげにござります。……（トいつたが、不審さうに）が、どうしてまアあのお氣に入りの小三郎が、俄に御勘氣を蒙りましたことやら！　どうかまア、かうした御不加減の折も折、お手不足でもございます、――日頃の忠勤にめんぜさせられまして、――明日にもなりましたら、どうかまア御勘當をば……。

トいひかけるを目貌で遮つて

義時　（やゝ性急げに）　おのしまでが、そんな迂濶な！……（トまでは口早にいつて、一つ喘ぎ、太い溜息をして、しづかに）あいつは油斷がならん。決して油斷がならん。…　深見三郎次郎の倅だ！

ト呻くやうに言ふ。

亘理　（不審さうに）　でござりますればこそ、あれは、常不斷のやうに、父子二代御恩をば受けましたに、父三郎次郎があゝしたお咎を蒙るやうな不埒を働き、まことに濟まぬことゝと申してをりまする。

義時　婆！　おのしは知らんでもあらうが、（トきつと亘理の顏を見て）その三郎次郎は、……實は、おれが殺させた。

亘理　えツ！

ト驚く。小三郎も、きつとこなし、覺えず小さ刀の欛に手をかける。

ト義時は、いはゞ、以心傳心的に、それを感じたかの如くに

義時　や！

トいつて、體をびくりと躍らせる。

亘理　（驚いて）　もし！　どうなされました？

義時　（きよと／＼して）　だれか、そこらへ、來たやうだ。怪しい物音がした。

亘理　（こなしあつて）　はて、だアれも……何事も……ござりませんが……

義時　いや／＼。……どうも何か來たやうだ。……見て來てくれ。

亘理　はい／＼。かしこまりました。

ト亘理落ち間へおりる。小三郎あわてゝ姿を隱す。亘理は、上手の簾の蔭をも、次ぎの間をも、とくと見廻つて、戻つて來て

なアんにも、仔細ございません。……御安心なされませ。

トうしろへ廻りて脊を撫る。これにて義時安心の思入。うと／＼と眠る體。二人とも暫く無言。

ト義時は又忽ち苦しげに呻き、譫語のやうに

義時　あゝ！　あゝ！　重い！……あゝ！　苦しい！　あゝ、重い／＼！

ト呻きつゞける。

亘理　何がさう重うござります？

義時　何だか、おそろしく重いものが、脊中や胸の上に載つてゐるやうで……術ない！　術なうてならん！　あゝ、重い／＼！

トやつぱり譫語のやうに呻きながら言ふ。

亘理　その重い物をば、みイんな、おろしておしまひなされませ。婆が戴きますほどに。（トやさしくいつて）さア／＼、おろしておしまひなされませ。

トうしろからじつと抱きかゝへて、子供をあやすやうに言ふ。

義時　（力の無い聲で）婆！

亘理　はい／＼。何でござります？

義時　今になつて考へると……（と微かに喘ぎながら）あんまり酷いことをした。……おれはあんまり……酷いことをした！

トこれにて亘理はじつと思入あつて、返事を躊躇したが、やゝあつて

亘理　なアんの！　お前さま！　そりやみイんな、お家のため、御政道のために、なされましたことでござりますもの！　何の、そんなこと、お前さま！

ト慰めつゝ脊中を撫る。

義時　もうちやうど……五十六年になる。一日もかはらず、同じやうに、眞實を盡して奉公してくれるのは、おのしばかりだ！　婆！　全くおのしばかりだ！

亘理　ま、お冥加もないお言葉でござります！　物體なうござります！……

トばかり言つて、涙聲になる。途端に義時は又急にびくりとして、きつと身を起しかけて

義時　や！　だれか來たやうだ！

トきよとつくのを、亘理は和めて、しづかに

亘理　いえ／＼。だアれも參りはいたしません。だアれも。……また些とお横になりなされませ。お横に。

トやがて義時を臥かす。二人とも又暫く無言。

ト義時は又うと／＼と眠るらしい。亘理は、其寢貌をつく／＼と見おろしてゐたが、とゞ、こらへかねて泣く。途端に、義時は、一寸目を開いたらしかつたが、すぐに臥返して、ぐつと顏を背けてしまふ。

ト亘理は、もう居たゝまらなくなつたか、少し下手へ

退り、袖を口にくはへて、聲を忍びつゝ泣く。
暫くすると、義時は、又急に半身を起しかけて

義時　婆！　婆！

ト事ありげに呼ぶ。

亘理　はい〳〵。

ト急ぎ涙を隠し、あわてゝ傍へ行く。

義時　(しやがれた聲で、やゝ口早に)　右近も、藤内も、こゝへ呼んでおいてくれ。

亘理　はい〳〵。かしこまりました。

義時　(力ない聲で)　女でも、右近は、力がある。……武藝にも長けてゐる。……早く呼んで來てくれ。

亘理　はい〳〵。

ト起つて、すぐに落ち間へ降りる。

義時　まて〳〵！

亘理　はい〳〵。

ト落ち間でかしこまる。

義時　すぐ戻つて來てくれ。(ト心細げな聲で言つて)　それまでは、あの女共を、爰へ呼んでおいてくれ。

亘理　はい〳〵。

ト亘理は次ぎの間へ出て、妻戸口より出て行く。すぐに入り代りて、侍女乙、丙出で來り

乙　お殿さま、お簾をおろしませうか？

義時　(仰向に臥たまゝで)　擧げとけ！　擧げとけ！

乙　はい〳〵。

ト乙、丙は落ち間の下手よき處に住ひ、やがて双六盤を引寄せて、對ひ向ひ、双六をはじめる。
九つ(午後十二時)の鐘が聞える。
双六をしつゝ乙、丙は居眠る。

ト上手の廊下口――簾の彼方――へ、小三郎が、前と同じ態度で、再び窺ひ出で、侍女らの眠つてゐるのを見すまして、そつと落ち間へ踏込む。やがて先づ、すぐそこに在る燈臺の火を吹き消し、拔足して上段の間の方へと進み、じつと義時の寢息を窺ふ。やがて、小さ刀の鞘を拂つて、上段の間の框へ右の足を踏みかける。

第四場　伊賀の方の居間

すべて第三場の通り。時は前の場とほゞ同刻。
中央のやゝ上手寄に宰相實雅。其下手に式部丞光宗。更に其下手の前寄に紀河の矩秀。伊賀の方は、下手の奥の神棚の前に、脊を此方へ向けて坐り、身動きもせず、じつと默禱してゐる。

實雅　(矩秀に)　では、政村は、再度義村どの方へ罷り越したに相違ないと申すのか？

短秀　で、ござりませうかと心得まする。お別第をお出ましになりましたのは、まだ暮れ果てません頃とやら承りました。それからすぐさま、尼公さま御ン許へ御參入と承りましたゆゑ、早速御所へ參上仕りまして、伺ひましたところ、とうに御退出にて、三浦さまお第へとの仰せでござりましたので、すぐさま三浦さまお第へ驅け附けますると、再度御所へとの答へ。又ぞろ御所へ取つて返しますると、ちやうど只今退出めされた、多分お別第か、さもなくば、再度三浦さま方へとのお言葉に附きまして、そのまゝ又お別第へ伺ひましたところ、お見えになりませぬ。さすれば、一定、三浦さまお第に、とは存じましたが、あまりお知らせが遲なはりましてはと、一先づ立歸りましてござります。

光宗　はて、合點のゆかんことだ。何故さうあツちこツちを廻り歩いてをるか？　察するところ、右京兆の容態を心痛のあまり、例の尼御前の取越苦勞から、世話燒が嵩じての奔走沙汰でもあらうかい！　しかし、義村方と居どころが定れば、もはや尋ねるには及ばん。身共自身これから參る。……實雅どの、此上は寸刻の猶豫も無用でござる。既に妹にたても、異議は無いと申す。短兵急に事を發し、眞先に御所を圍んで、こよひのうちに、しやにむに尼公と將軍家とを人質に取つてしまふのが肝要でござる。身共は、これより直様、義村方へ罷り越し、否應なしに出陣の致さする。貴殿にも、時を移さず、御出陣下され。さしづめ、あの廣元入道の第をばお取卷き下され。

實雅　げに、機會は逸すべからず。しからば立歸つて、すみやかに其手配りを致すでござらう。しかしながら、御渠只ひとり、不用意にて、義村方へ御出向あらんことといかゞあるべき？　先日以來、ほゞ同意らしい返答でもござつたれば、よもやとは存じ申すものゝ、從來も、後仁の去就に就いては、やゝもすれば、いかゞはしい噂もござつた。彼の同族たる和田一族の謀反の際にも、又彼の公曉どのゝ一條に就いても、——よしそれは、變心、裏切ではないにもせよ、——言はゞ、二股、鼠色、どちら附かずの疑ひもあつたる仁。しかれば、うかと單身にてお出向あらんは……。

　トいひかけるを光宗とゞめて

光宗　いや、その懸念ならば御無用。實は先刻、此短秀から、かの奧庭にての一部始終を聞くとそのまゝ、多分かやうな段取にもたらうかと存じて、屈竟の家の子供——いづれも場數の剛の者——十餘人に、內々申含め、直垂の下に物の具して、後より窃に、當本第ゝ裏手の社まで參り居るやう申し附けおいてござる。多分、もはや參着

しをらうと存ずる。彼等を引連れて参る上は、大丈夫でござる。何よりも、時がおくれては事の破れ。すぐさま御用意なされ。

實雅　さほどのお手配りがござらば、……ではそれがしは、これよりすぐさま。

ト起ちかける。此時、伊賀の方默禱を了り、坐つたままにて、此方に向ひ

伊賀　あ、もし！　暫く。……かりそめならぬ大事の出陣。幸ひの此神酒。

トいひつゝ、例の紅ゐと藤紫の巻紙を挿した瓶子二箇を、白木の三寳に載せたるまゝ、神棚より取りおろしつゝ

さらぬだに、武門の守り本尊であらせらるゝ正八幡大菩薩は、とりわけ、我家の氏神にておはしませば、其御冥護を祈りまゐらせて、互ひに濯盃を取りかはし、こよひの門出をば祝ひませう。

光宗　おゝ、それは、時に取つてのよい思ひ附だ！　それ、早く〳〵！

トこれにて伊賀の方、神前の供物の中より洗米を盛りたる土器を取りて、其洗米を他の器へ移し、それを別の白木の三寳に載せ、前の瓶子のそれと共に、左右の手に捧げ持ちて、徐かに實雅の上手へ廻りて、前寄の自分の例の席に着きて

伊賀　さ、めでたう祝うて、實雅どのから。

トこれより實雅を主座として、光宗、伊賀の方、三人の間に土器を取交すること。伊賀の方、紅ゐの巻紙を挿したる瓶子を取りあげて、酌をする。三人の間の取交せが濟むと、伊賀の方は、下手を離れて控へてゐる矩秀へ思入あつて、光宗に向ひ

兄上、あの矩秀は、例の深見の一條以來、引きつゞき、何かと骨折。いはゞ、家の子も同様のもの。ちやうど此席に居合せましたのを冥利に、あれへも其神酒のお流れをば。

ト光宗うなづき

光宗　やい、矩秀！　進め。濯盃をくれる。

矩秀　はッ。はッ。……これは恐れ入ります。……ありがたく頂戴つかまつります。

ト席を進む。伊賀の方、藤紫の巻紙を挿したる瓶子を取りて、矩秀が受けたる土器へ神酒を注ぐ。矩秀それを飲むこと。それが濟むと、伊賀の方は光宗に向ひ

伊賀　兄上、大切の御出陣に、そのお姿のまゝでは、どうやら御不覺のやうでもある。幸ひ、あそこに父上のお形見の、あの腹巻。

ト上手の壁際の鎧櫃へこなし。

光宗　おゝ！　いかさま。——ウム、シツ篤實になり、病んだ
お許しなさらう。……矩秀あれな。

矩秀　はツ。はツ。心得ました。

ト矩秀、鏡臺を光宗の傍へ運ぶ。光宗すぐに蓋を開け、
鏡をとりいだし、暫時顔を眺め、着用の支度に
かゝる。矩秀手傳ふ。やうやう實雅は

實雅　では。それがしは、一足先きへ。——御免下され。

ト會釋して席を起ち、下手へ廻る。

伊賀　實雅どの！

ト呼ぶ。

實雅　（立ちどまりて）　は。何か御用でござりますか？

伊賀　めでたい御倖を——（といひかけて、じつと實雅の
顔を見て）待ちますぞ。

トしんみりといふ。實雅は、目に力強く

實雅　それで得なく。——御免下され。

トすぐに下手の妻戸口を開けて出て行く。伊賀の方は、
そのまゝ其後ろ影を見送つてゐる。
此うちに、光宗は顔を着し了り、其上へ先の如く直
垂を被て、太刀を佩くことなどあつて、伊賀の方に

光宗　なう、おことも……大事ぢや。政村は、義村が娘にと
は作りんが、萬一にも行違ひで立騒がば、聞くところ
見苦しい。又、知行はござらぬが、早速鎌倉に紛れ付け
て、實朝は、もろともに、きつと鎌倉に御留めなされ。
……では、われらは、これよりすぐに義村がたへ。

トつかつかと下手へ行きかける。伊賀の方留めて

伊賀　あ、もし！　日没なれば、御門からは人目の憚り。
殊に、裏の手すぢは義村館にとの今のお話。すぐ此庭は
から。

ト庭園の奥へ去らし。

光宗　むゝ。

トうなづきて戻る。

伊賀　矩秀、それ、御案内。

矩秀　はツ。

トいつたが、彼れは、どうしたか、最前少し前から、頻
りに胸苦しげにしてゐたのであつたが、暫時それに立ち堪
んで、辛うじて耐へてゐたらしい。忽ちたじたじとよろめ
く。けれども辛くも踏みこたへて、正面の壁代をかきへ
擦げ擦げ、前後の次の間へ出て、真向うの妻戸に手を
掛け、それを左右へ開かうとしたが、もういよいよ堪
へられなくなつたらしく、其手を離し、たぢたぢとよろ
しろへよろめき、ばつたりと壁代の傍へ倒れて息を吐き、
苦み悶えてゐたが、それはほんの暫時で、やがておと
なしくなつてしまふ。息が絶えたのらしい。
先より先き。光宗は、すぐ矩秀の後に續いて、壁代の

傍まで進んだのであつたが、此體を見て驚き、覺えず駈け寄つて介抱しようとした。が、伊賀の方が急に手を擧げて之を制め、意味ありげに目まぜをしたので、何か仔細のあることゝ呑み込み、息が絶えてしまつたまでは、たゞじつと突立つて、見おろしてゐた。伊賀の方も、同じく立つて、斜に見おろしてゐた。短秀が全く動かなくなつてしまふと

光宗 (伊賀の方を見返りて) これは?

ト説明を求める貌に言ふ。けれども伊賀の方は其問ひには答へないで、しづかに

伊賀 兄上、事は……(トいひかけて、じつと光宗の顏を見つめて) 成就するとおぼしめすか?

光宗 (いよ／＼いぶかしげに) え? 事とは?……今夜の、この、旗擧げの事か?

伊賀 (しづかに) いかにも。……おそらく、事は破れましたぞ。

光宗 え……とは又なにゆゑ?

伊賀 さア……

トいひながら、徐かに元の席へと歩み戻る。光宗も餘儀なく、共に、二三歩歩み戻つたが、やがて立ちどまつて、伊賀の方の座に着いたのを、けゞんな貌をして見おろしてゐる。伊賀の方は坐(すわ)つたまゝ、それを見あげて

實は、此事の成否の心元なさに、最前も、いつもの通りに、一心不亂となつて、大菩薩に祈念を籠めましたるところ、例の如く、夢現(ゆめうつゝ)に、夫(つま)義時は餘命數日をも保たず、また、此企は今宵の中に露顯し、敗るゝ、と何處(いづこ)ともなく微かな御聲(みこゑ)には疑ひもなく神のお告げ!……兄上、此上は、潔くお覺悟なされて、事いよ／＼破れたらば、父上のお名に恥ぢぬやうに、──我家の名折れにならぬやうに、──見事な、お手際な御最期をなされませ。どの道、固いお覺悟が肝腎でござりますぞ。(トいつて、じつと思入あつて) 今の短秀の言葉で察すれば、政村は、もうとうに、敵方の人質となつたに相違ない。

ト靜かに、しかし凛然(りんぜん)と獨り言のやうに言つて目を塞ぐ。光宗は、此間、其貌を、不審さうに見詰めてゐたが、此時

光宗 さては、……政村の行くへをば氣に病んで、……心配の餘り……

トいひかけて、覺えず歎息して

あゝ! 日頃の男まさりも、大膽な肝魂ひも、……あゝ、さすがは女氣! 一大事の際(きは)に臨んで、こりや、妹!……どうかしめされたな?

ト伊賀の方は倘ほ默つて瞑目してゐる。で、光宗は、

又も矩秀の死骸の傍へ歩み戻り

それにつけても、合點のゆかぬは、……この矩秀の爲體(ていたらく)！

ト又きつと伊賀の方を見返りて

若しやおことが……

ト探るやうに言ふ。

ト伊賀の方は目を開きて

伊賀　さア、……

トいひながら徐かに席を離れ

内證事を知り過ぎた其うつけ者。

トいひつゝ徐かに光宗の居る方へ歩み進みて

事が成就しても、行く〳〵は邪魔物。破れたら尚ほの事。たれ憚らず、有る事、無い事に尾鰭をつけて、あしざまに言ひ觸らしあるくは必定ゆゑ……

トいひさして、矩秀の死骸に指さし

ま、ごらんなされ、ほんにまア、不思議な、この藥の效(きゝ)態(め)！　十九年のむかし、左馬ノ介政範が飲んだのは、すなはち此藥ぢやと夫(をつと)の話。只少しの苦(くるし)みにて汚(きたな)くるしい血も吐かず、すや〳〵と眠るが如き此死に樣(さま)！

トじつと矩秀の死貌を、會心げに、見つめてゐる。で、いよ〳〵光宗は、これは氣が狂つたのかと思つたらしく、太い溜息を吐いて、情けなげに

光宗　妹！

ト一語言つたが、あとは言ひかねて悵然としてゐる。これにて伊賀の方は振返り、光宗の情けなげな貌を見ると、これも

伊賀　兄上！

ト只一語、沈痛な聲で呼んだつきり、互に一二分間じつと無言で、貌を見合せてゐる。やがて、光宗は手早く厨子の上の驛鈴を取つて激しく振鳴らす。

ト程なく侍女の田毎が、急ぎ足に、下手から入つて來る。

光宗　（それを見るや否や）それ！　奥方を介抱せい！　身共は心が急く。後を頼むぞ！

トいふや否や、妻戸を押開いて、庭上へ躍り降りる。扉が左右へ開くと、十一日の、落ち方の月の冴え渡つてゐる庭の面の一部が見える。但し光宗の姿は、すぐに見えなくなる。

ト伊賀の方は、騒いでけゞん貌をしてかしこまる田毎を、しづかに制して

伊賀　はて、わしが如何(どう)したのでもない。急病で、矩秀が頓死したのぢや。……あの死骸をあちらへ。

ト壁代かげの死骸へこなし。

田毎　はゝ。

ト起ちかける。

伊賀　あ、これ！……まだ其外に、大切な用事がある。……こゝへ。

ト傍近く呼び寄せて、小聲て

別第の事が氣にかゝる。人目にかゝらぬやうにして、そつと、あの裏庭づたひに。……な。……

ト正面の奥へこなしあつて、何事をか、更に聞えぬ程の小聲にて吩咐ける。

円每　はい／＼。……はい／＼。……はい。心得ましてござります。

ト呑込み

では、御免遊ばしませ。

トいふや否や、急ぎ甲斐々々しく身支度して起ち、先づ手早く矩旁の死骸を板敷の下手へ運び了り、すぐに戻つて來て、開けはなしてあつた妻戸口より庭へ降り、これも忽ち姿を消す。

此以前、伊賀の方は、二階厨子の傍らに座して、錠の下りてゐる部分を開けて、何やら書類を幾通りか取り出すことあつて、此時、それを一纏めにして手にし、起ちあがる。

途端に、やゝ遠くにて、頻りに陣貝を吹鳴らす音が聞えはじめる。伊賀の方、きつと聞き耳を立てる。其陣貝の音がだん／＼殺氣を帶んで來る。ト何處ともなく鬨の聲のやうな夥しい人聲が――これもやゝ遠くにて――聞える。其中に陣太鼓の音も聞えて來る。

ト下手の方俄に騒がしく、侍女の小柴が、血相を變へて、妻戸を開きもあへず、駈け入り、膝まづいて

小柴　申し上げます。大變でござりまする。

伊賀　（おちついて、しづかに）何事ぢや？

小柴　式部の丞さまには、先刻お庭口からお立歸り遊ばします處を、豫て、あのお裏門口に待ち受けをられました御所がたのお討手のために、ちやうどあの杜の傍で、激しいお働きの後、お囚人におなりなされましたさうにござります。つい只今がた承りますれば、豫てあそこには、御家來衆がお待ち受けの筈でござりましたげなが、其人達は、其前に、途中でお召捕になつたとやら申します。そればかりではござりませぬ。御謀叛露顯とござりまして、中將さまにも、最前こなたよりお歸りのお途中、大江さまのお手にて、やつぱりお召捕になりましたさうにござります。

ト息つぎあへず語る。

伊賀　（やはり靜かに、しかし緊張した調子で）政村は？

小柴　四郎さまには、將軍さまや尼公さまと御一しよに、亥の刻頃に、大江の入道さまお第へ、窃かにお移り遊ばし、其後、三浦さまをはじめ大名がた御一同、おひ／＼

御陣立をなされて、かなたへお詰め切のやうに承りをりまする。

　ト伊賀の方これを聞き了りて、しづかにうなづき

伊賀　よし／＼。……小柴、わしは少し頭が重うてならぬによつて、ちつとの間寢みたい。大儀ながら寢床をしつらうてたもれ。

小柴　はい／＼。……かしこまりました。

　ト言つたものゝ、合點がゆかぬといふ思入。やがて起つて、上手の簾の内――上段の間――へ入る。

　此間に、伊賀の方は、上手の神棚の前に座を占めて、先刻の書類を燈明の火にて燒くこと。燒きじまふと、起つて厨子の方へ行きかける。途端に、此時まで明けはなしてあつた正面奥の妻戸口へ、侍女の田毎が半身を現したのが、なほ冴えてゐる月の光て見える。ト見るうちに、もう板敷へ駈け上つて

田毎　御ン方さま！　御ン方さま！　大變でござります！　大變でござります！

　トけたゝましく呼びながら、駈入つて來て、今ちやうど厨子の前に立ちどまつた伊賀の方の前に膝まづいたが、二の句を繼ぎかねる程に息を切らせてゐる。

　伊賀の方は、きつとそれを見おろして

伊賀　（しづかに、低く、併し緊張した調子で）御臨終か？

田毎　（なほ喘ぎながら）はい。……（といつたが、又一つ息を呑んで）今ン日、御勘當の上、お目通りをお遠ざけになりましたあの深見の小三郎が、どうして、いつの間に、御寢所へ忍び入りましたやら、お寢息を窺うて、短刀にてお胸元を刺し貫き、すぐに御落命でござりました。

　トこれにて伊賀の方も、さすがにびつくりした思入にて、思はず坐り

伊賀　して、その小三郎は？

田毎　たつた一足おくれて立戻られました亘理どの、右近どのが、それと見るより走り入つて、すぐさま其場にお取押へに相成り、御誅戮なされましてござります。

伊賀　では、わが夫をば、父三郎次郎の仇敵と怨んでの所業ぢやな？

田毎　はい、御意の通り、最初はさやう申し立てましたげにござりますが、御老女がたが、「科あつて御成敗になつた親の爲に、大恩ある御主君を仇敵と怨むとは道理知らず」とお叱りになりましたところ、「朝廷の爲に、天に代つて、逆臣を誅するのぢや」とやら、最期に申し立て、絶息れましたさうにござります。

　ト此間、伊賀の方は、じつと瞑目して聽いてゐたが、やがて

伊賀　硯箱を。

トこれにて田毎は起ちて、上手の厨子の方へ行く。其間に、伊賀の方は、しづかに、併しながら、手早く、傍らの三寶に載せてある瓶子——藤紫の巻紙を挿した る方のと土器とを取りあげて、神酒を注ぎ、すぐに飲乾して、元の通り三寶に載せて遠くへ押し遣ること。此うちに田毎は厨子から硯箱を取りおろして、持つて來る。

之より先き、小柴は上段の間の簾を悉く捲き上げる。寢具其他よろしくしつらひあること。

此時、小柴は、田毎と並びて、伊賀の方の下手にかしこまり

小柴　お寢床(とこ)をしつらひましてござります。

ト此間に、伊賀の方は、ほんの七八行宛らしい書面をさら／＼と二通認め了り

伊賀　おゝ！　大儀であつた。……(書面を巻きて、結び封にして)ほんの暫時寢(やす)みたい。半時も經つて醒めなんだら、遠慮なう起してたもれ。……

トいひつゝ徐かに起ち、すぐに上段の間へ上る。田毎と小柴とは顔を見合せて、不審と不安とを混交(こうちや)にしたといふ思入。

小柴！　この簾を。

トこれにて、二人とも起ちあがりて、簾をおろすこと。

やがて二人は、ずつと下手へ來て、顔を見合はせ、殆ど同時に

小柴　田毎どの！

田毎　小柴どの！

ト小聲で言つたが、上段の間へ思入あつて、ずつと寄り、互ひに聞えぬ程の聲にて何か語り合ひ、そのたびに驚く思入よろしく、更に上段の間へ思入、こなし。とゞ、うなづきあひ、再び上段の間の方へ行かうとする。

途端に、下手の方又俄に騒がしく、やがて四郎政村を先きに、老女亘理、急ぎ足にて妻戸を開きつゝ駈け入る。

政村　(急いだる調子で)　これ、母上は何處(どこ)においでぢや？

ト小柴、田毎は、あわてゝ膝まづき、敬禮して

小柴　これは／＼！　いらせられませ。只今あの、一寸御寢(ぎよしん)なつてゞござります。

政村　なに？　此一大事の折からに、御寢なつて？……

亘理　では、まだ何事も御存じないのでござりますか？

小柴　いえ／＼。何もかもようごぞんじでござりまする。

亘理　あの、ようごぞんじで？　(トいつたが一寸聲をひそめ)あの、老公さま御他界——御變死——の御ゝ事をも？

田毎　はい。つい只今、申し上げましたばかりでござりまする。

亘理　えゝ！　それでは若しや？……（トあわてゝ）四郎さま、それ！　ともかくもお寝間の御樣子を！

トこれにて政村、血相を變へて、簾を搴げ、上段の間へ駈け上る。亘理もつゞく。トすぐに簾のうちにて

政村　母上！　母上！……や！　母上には！

亘理　やゝ、こりやもうとうに！…　これ、おもとたち！　おもとたち！　お簾を！　お簾を！

トこれにて小柴、田毎、急ぎ上段の間に駈け寄りて、簾を捲きあげること。

ト伊賀の方は、寢具の上に、仰向に、安らかに、横になりて、さながら眠つてゐるやうにして、死んでゐる。少しも悶え苦しんだ跡はなく、聊かも取亂した體もない。枕元に、先刻の結び文が二通置いてある。

政村　（泣きながら）尼御臺にお縋り申した效あつて、母上のお命乞ひが叶うたゆゑ、取るものも取りあへず、駈け附けて參りましたに、母上！……母上さま！　早まつたことをなされましたなア！

ト泣く。亘理も泣きながら

亘理　お髪の毛の、たゞの一筋でも亂れてはをりませぬ。まるでまア、すや／＼と、お眠り遊ばされていらせられるやうな此お貌附！……おゝ！　こゝに何やらお書置きらしいものがござります。

ト二通の遺書を取りあげて

もし！

トいひつゝ政村に渡す。政村は、泣く／＼、先づ一通の結びを解いて、讀むことありて

政村　たつた十行にも足らぬ此短いお書置きのうちに、殘る隈もないお言ひ殘し！……何もかも、御自分ひとりでお引受けなされての此お覺悟！

トいつて、片手で目をおさへて、又暫く泣いてゐたが、やがて別の一通の結びをも解いて、一寸讀んで見て

おもと、これはそちらへ。

ト亘理に渡す。亘理はすぐにそれを讀んで見て

亘理　おゝこれは侍女たちへの……

トいひさして、すぐ上段の框の下で泣いてゐる小柴、田毎へ渡しながら

年ごろの御奉公をお褒めなされての、お慈悲のお言葉。

ト此時、政村は、前の書置をも亘理へ渡し、又死骸に縋りて泣く。此うち小柴、田毎は、渡された一通を、互ひに取り交しつゝ讀んで、泣きながら

小柴　數なりませんわたくしどもにまで……

田毎　このやうなお情けぶかいお言葉！

小柴　お遺物（かたみ）のことまでも……

トあとをいひかねて、聲を合せて泣く。此間に、亘理は涙を拭き／＼、書置きを讀み了りて

亘理　あゝあ！　お立派な、お手際な、お見事な御臨終！

トいひ終つて又涙を拭ふ。

――幕――

役の行者（三幕六場）

第一幕
第一場　山村路
第二場　山麓の一軒家
第二幕
第一場　大峰林中
第二場　西谷の魔所
第三幕
第一場　大峰の山中
第二場　山上ケ嶽の岩窟

第一幕

第一場　山村路

大和國吉野郡大峰の麓、今の洞川村邊から餘り遠くない處。見渡す向う一帶に樹木の繁茂した山や阜が、遠く近く波打つてゐる。細い川が流れてゐる。大天井、小天井などいふ峻しい峰々も見える。阜の間々に三四軒の千木を高く聳えさせた杉皮葺きが見え、又所々に稻田がある。今ちやうど太陰暦の八月下旬なので、早稻は已に刈り取り、田は刈り跡になつてゐる。

時代は文武天皇の朝、時刻は今の午前十時過。

右手（上手）から旅の者らしき主從の男女が出て來て、下の問答をしながら、左へと通り拔ける。女は賤しからぬ服裝で、齡は八十歳位、品よき容姿。盲目で、腰は殆ど二重になりかけてゐるが、それでも杖を突いて、徒歩してゐる。男は三十年輩で、實體さう、一劍を腰に佩び、布で包んで革で卷いた旅荷物らしい物を脊負ひ、片手には笠を持ち、片手では老女の手を牽いてゐる。此從者の名は青蟲。

青蟲　だん／＼爪先上りになりまする程に、さぞお草臥れなされたでござりませう、手前の肩にお掛かりなされませ。ちとお負ひ申しませう。

老女　いや／＼、まだそれには及ばぬ。したが、近くに人家はないかなう？　ちつとの間休息したい。

青蟲　へい／＼。（左手を見やりて）彼處に一軒家が見えまする。たかゞ八九町程でござりませう。

老女　では其處へ案内してくりやれ。

青蟲　かしこまりました。斯うおいでなさりませ。

主従が通り抜けてしまふと、殻竿の音が頻りに聞えて、次ぎの女聲の稲打ち唄が洩れて來る。間々にエーイエイと女の聲で掛聲をする。

唄 〽おォらが脊戸の柿の木に、エーイエイ、
　今年や柿の實がようなつた。なつたと
　も〳〵。

エーイエイ……

唄の半ばに局面が一轉する。

第二場　山麓の一軒家

同じく大峰の麓、今の洞の辻附近らしい。間近く左手に寄つて、一軒の古風な農家がある。間口はやつと二間半ぐらゐ、見えてゐる奥行は二間、家根は千木を聳えさせた杉皮葺き。左手は軒降して小さな物置兼帶の脊戸への通路が附いてなり、其入口には菰が垂れてある。母屋の奥も幾枚かの菰で見切り、其他は開け放し。中央に爐、原始的な自在に釜のやうなものが掛けてある。物置の後ろには竹藪があり、母屋の右手の奥には一本の柿の木、實が赤く熟してゐる。つい其傍に筧、水が溜から外へ清らかに流れ出して小川へ落ち込む。實は、此筧に面した二間間口が此家の入口なのである。右手は山の裾で見切られ、見渡す正面は遠近の山々、いづれも樹木が繁茂して居り、間近き阜の此方には、刈り跡の稲田が少し見え、其稲田の手前には清らかな小川が流れてなり、無雑作に丸太を二三本並べた橋が、洞の辻への往還に架つてゐる。此小川に沿うて田圃へ通ふ路が一筋右手へと走り、間近の山の裾で隠れてしまつてゐる。

農家の上り口――幹を皮附のまゝ輪切りにしたやつ――に近く、主人らしい六十五六の爺が、古風な原始的の竹の稲扱機械で、稲を扱いてゐる。それよりも右手、殆ど往還を占領して、二人の若い娘が殻竿を揮つて、唄を歌ひながら稲を打つてゐる。これは姉妹で、姉は十八九、妹は十五六、二人とも標致よしで、日に焼けてはゐるが、本來は色白である。姉の名はヒツボ、妹の名はエブリ。稲打ち唄が續く。

唄 〽九つ小枝に皆實つた。エーイエイ。色づ
　いた。たァれに食はしよと色づいた。

ヨイ〳〵ヨイトナ。

唄が切れると共に、二人とも殻竿を下して、息を吐き、頭に結へてゐた布片を取つて、汗を拭ふ。爺も手を休

めて

爺　さア／＼、きつかつた／＼。……まア／＼一休みせい
と言ふところぢやが、けふは朝の間から變な空模樣で、
今にもぽつり／＼降ちて來さうぢや。午前にしまはぬと
事ぢや程に、姉は、早うお母さの處へ往て、刈りためた
だけを取つて來いやい。早うせい、早うせい。

姉　あい／＼。

と姉娘は、とつかは丸太橋を渡つて、田圃道を右手へ
と姿を消す。妹は鎌を物置から持出して來て、打ち溜
めた稗を掻集めにかゝる。と突然に大ドロ／＼。妹娘
はびッくりして鎌を落す。

妹　あれ、地震だや！

爺　いや／＼、地震ではない。（ドロ／＼尚ほつゞく。）こ
れがソレゆうべ話した、あの大峰さまの山鳴りぢやがや。

妹　え、では、あの山の主さんの祟とやらかえ？

爺　（うなづきながら）どうか甚いことにならねばえいが
なう。

爺が框に腰を掛けると、娘も鎌を抛出しておいて、同
じく傍へ來て腰を掛ける。

妹　お父さ、わしや、あの昨夜の話は、役のお行者さまが、
葛城山の何處やらから餘所のお山の何處やらへ、磐橋と
やらを架けさつしやる處までは聞いてゐたが、だん／＼
怖らしうなつたゆゑ、指で耳に栓を支うて、つい知らん
間に眠てしまうた。したが、晝間なら怖うはない。もう
一遍話して下され。

爺　いや／＼、聽かいでおけ、又夜中に魘されうぞい。……
どうやら、山鳴りは止んだらしい。（と言ひながら、二三
歩外へ出て空を見て）いよ／＼一雨來さうぢやわい。

此途端に、田圃道づたひに、六十近くの婆、姉娘と一
しよに、刈りためた稻を脊負ひつゝ、急ぎ足に戻つて
來る。

婆　（丸太を渡りながら）きつい山鳴りぢやつたなう。ち
やうど十五年ぶりぢや。

爺　（むづかしい貌をして）此間ぢうの遠鳴りといひ、今
のどえらい鳴りやうといひ、こりや何か西谷あたりで、
事があつたに相違ない。

婆　何にせい、役の行者さまはおるす、前鬼さん、後鬼さ
んまでござらつしやらんといふから、きつと、あの山の
神さんが荒れ始めさつしやつたに違ひない。

妹　（先刻からいよ／＼目を圓くしてゐたが）十五年前に
どんな事があつたえ、え、お母さ？

婆　山籠りをしてゐた若い行者衆が、二人までも、瀧川の
川上から、死骸になつて流れて來た。ちやうどそれが、
今のやうな山鳴りの翌日で、其時にもお行者さまはお留

守ぢやつた。

姉　（心配さうに）若い行者さんと言や、あの都の若行者さんに、怪我でもなければえいがなア。

妹　姉さ、都の行者さん言ふは、あの去年山籠りさつしやつた、あの色の白い、目の涼しい、優しい人かえ？

姉　うん。親御衆と仲たがひして發心したといはつしやつた、あの品の可い若いお人。（と、ぢつと考へ込み）あゝあゝ、わしや昨夜話を聞いてから、あの人の事が氣になつて、風が甚う吹いて來てさへも、怖うてならぬ。

此問答の間、爺と婆とは何か小聲で話してゐたが、

爺　こりやいよ〳〵雨らしいによつて、もう今日は、何もかもしまうた、しもうた。

婆　もうかれこれ晝ぢや。姉や、おのしは米磨いで、午飯の支度してくりや。

姉　あい〳〵。

姉娘は小桶を奥から取出して來て、筧の傍で米をかしぎ、次ぎの話の間に飯を焚く支度よろしくある。爺と婆とは稻を脊戸へ運んだり、稻扱機械其他を方附けたり、何かと忙しい。妹娘は、それを手傳つて方附けながら

妹　お父さ、山の鳴るわけを話してくだされ。山の主さんたらいふは何ぢやえ？

爺　怖い程に聞かいでおけ。

妹　いえ〳〵、わしや聞きたうてならん。……お母さ、お前聞かしておくれいな。

婆　（方附け物をしながら）ぢや聞かさう程にの、早うそれを方附けてしまや。

妹　あい〳〵。

爺は奥へ入り、婆は、やつと椎に腰をおろす。

婆　あゝ、辛度や〳〵。

妹　（同じく腰をかけて）さ、話しとくれ。

婆　おのし達はなア、晩う生れたによつて仕合せぢや。おら共の若い頃までは、こゝいらは、それは〳〵怖い恐ろしい處ぢやつたぞよ。此界隈十里四方といふものは、山で無い處も深藪のやうに草や木が繁つて、田畑もなく、人家らしいものは、只の一軒もなかつた。狼が晝日中うろつく。蟒蛇がのたくり廻る。そればかりでない。山猫ぢやの、狒々ぢやの、荒熊ぢやの、猪ぢやのいふ猛獸が、野にも山にも、のそ〳〵と歩いてをつて、そつとでも人間の臭ひがすりや、直に跳び出して來て、取つて食うたものぢや。それを思ふと、今の此安らかさは、みんな〳〵お行者さまのお庇ぢや。これで若しあの葛城山の岩橋さへ出來上つてゐるものなら、どのやうに人間の仕合せが殖えたか知れんに、惜しいことであつた。

妹　岩橋の事よりも、わしや山の主さんの話が聞きたい。
爺　せはしない。これからがその話ぢや。

此間答の間に、爺奥から出て來て、胡坐をかき、湯か何かを飲んで話を聞いて居り、折々口を出す。

其山の主さんといふは、名を一言主さんというて、今から三四十年前までは此界隈きつての荒神さんでなう、それがまた毎日毎晩何遍となう、猛しい獣類の生き膽を食はつしやらんでは神通力が弱る神さまぢややげなで、それで其都合で、わざとこゝいら一圓に、猛しい獣類を蕃殖してをかつしやつたものぢや。

爺　人間の爲には、それがどのくらゐ迷惑になつたか知れん。月に二三人ぐらゐは、きつと獣類の餌食になつて、非業の最期を遂げたものぢや。役の行者さんがござらつしやらなんだら、この大和一圓、人種が盡きたかも知れん。

婆　それから、其一言主さんのお袋さんに、葛城の神さんといふ、我強い、執念深い、怖ろしい女神さんがあつてなう、其女神さんがまた業通が自在なので、此界隈のどこの山の主さんも、又森や河や池や沼の精靈さんたちも、此親子の神さんには抵抗くことが出來ず、言ふなり次第になつてござつたので、親子の神はいよ／＼増長して…

妹　お母さ、お前、一言主さんを見たことがあるかえ?

婆　何の！　今生きてゐる者で、見た者は一人もない。昔からの言ひ傳へでは、丈が一丈もあつて、顔や手や胴は人間ぢやが、胴から下は牛のやうでもあれば、熊のやうでもあると言ふことぢや。

爺　あの活神樣の行者樣のお行力でなければ、迚もあの親子神をば斬り伏せることが出來んのぢやつた。行者さんでさへ八十一晝夜かゝつて斬り伏せさつしやつたげな。

婆　それは／＼、えらい荒行をさつしやつたげな。

爺　それからは行者さんは、母子の神を御眷族同樣にさつしやつて、人助けの爲にとて、先づ手を著けなされたのが、あの岩橋ぢや。

妹　今、半端のまゝで殘つてゐるとやらいふのがそれかえ?

爺　さうぢや。葛城山から金剛山への道は、迚も／＼並の者では通ふことの出來ん嶮岨ぢやが、それを年に十五六遍も往來するやうにならんうちは、一ぱしの行人とは言はれんことになつてゐたので、昔からそれをせうとして、命を落いた者が、何百人あつたか知れん。

婆　お行者さまが、それを不びんに思はつしやつて、一言主さんに吩咐けて「おのし改心の證しに、おのしの眷屬は勿論、此界隈の山の主たちを殘らず使うて、とつとゝ

磐橋を架けい」と言はつしやつたげな。さ、それからといふもの、夜も晝も、人間の目にこそ見えなんだれ、神だちが神通力で、小山のやうな大岩を幾つも〳〵運はつしやる、積まつしやる、疊まつしやる、見る〳〵谷と谷との間に連絡が附いて、不思議な岩の橋が出來かけたげな。

爺　ところが、十日經ち、廿日經つても、仕事がねつから捗らんので、行者さんは腹を立てゝ、一言主さんを呼出いて、何遍も〳〵叱らつしやつたげなが、埒が開かん。これには何か仔細があらうと、他の神さん達を呼んで、だん〳〵査べさつしやると、やつと知れた、磐橋の出來んのは、一言主さんの横着であつたのぢや。

妹　といふのはえ？

婆　人間のお行者さまに使はれるのが悔しうてならんのぢやげな。それにお袋の葛城さんが傍から煽り立て、磐橋の邪魔ばかりではなく、折を見てお行者さまを殺いてしまはうと企んでござるのが知れたので、そこでお行者さまが、呪縛いふことを行はつしやつたげな。

妹　呪縛いふはどうすることぢやえ？

爺　されば、お行力で、西谷の奥の大樟の木の股へ、山の主さんを挾み込んでしまはつしやつたのぢや。それから又行者さんは、西谷の四方七町の間を結界して、並の者は勿論、樵夫でも狩人でも、行人でも、それから奥へは決して一足でも踏込むことはならん、覗いて見ることもならんと掟さつしやつた。それからといふものは、惡い獸もゐず、荒神さんも鎭まり、此界隈がだん〳〵開けて、畑の物も出來りや稻も出來て、こんな住みよい處になつた。

婆　それは今から三四十年も前のことぢや。

爺　が、とかく怖い物は見たいもの、爲なといふことは爲たいもので、其當座には、大抵五年目に一人位ゐづゝ掟を犯いて、そつと西谷へ覗きに往つては、二つとない命を落いたものぢや。それがだん〳〵に少なうなつて、西谷の噂をする者もなく、此十五年の間は……

此話の間に又もドロ〳〵が聞えて來る。次ぎの問答の間、それが激しくなつたり、微かになつたりして續く。

婆　や、又山鳴りぢや！　此樣子では十五年前よりも甚い事になるかも知れん。

第一場の旅の主從が右手（上手）から出で來り、農家の前へ來て立停る。

青蟲　ちと御無心がござる。主人のお方が、いかう草臥れさつしやれてござる。どうぞ暫時の間休息させてあげて下され。

爺　心易いことぢや。さア〳〵、こちへ掛けさつしやれ。

折わるい空模様ぢやに、どちらへござらつしやります？

これからは爪先上りで、お年寄りには難儀な路ぢやに。

　主從框に腰を掛ける。

青蟲　大峰の奥まで參るのでござるが、して麦許からはもう何程でござろな？

爺　めつさうなことをいはつしやります！　お山へは女人に禁制。さうでなうても、いつかないかな、女子の身では年若でも行かるゝ處ではない。それにアレ、あれを聞かつしやれ。きのふけふは、あの怖ろしい山鳴りぢや。血氣壯んの者でも、もうけふからは、木を伐りにも行かれますまいわい。

老女　いや、其輪軸は、豫て聞いて、覺悟の前でござる。女人禁制の事も心得たれど、役の行者どのには深い由緣もとより、心願あつて、はるばるの處より、盲目同然の身で、尋ねて來た者。たとひ今日は登られずとも、明日は剛力衆を雇うてなと、お山登りをせねばならぬ。氣の毒ながら、こよひ一夜、此家に泊めてはおくりやるまいか？

爺　どうした心願や由緣がござらつしやるか知らんが、それは迚も叶はんこつちや。肝腎の御本尊さまがお留守ぢや。

青蟲　えッ！　役の行者さまは？

婆　とうから遠いとほい處へ往かつしやつてよござります。

老女　なに、行者どのは、今は山にをられぬとや？

婆　お行者さまがござらぬばかりでなく、お使はしめの前鬼どの、後鬼どのもござらつしやりませぬ。それなればこそあの山鳴りぢや。

　旅の主從は顏を見合せて、溜息を吐く。山鳴りは薄くなつたが尙ほ續いてゐる。

青蟲　前鬼どの、後鬼どのとやらは、豫て噂に聞いた、お行者のお傍仕への人達ぢやな？

爺　いやいや、人ではない。成程、もとは人間であつたのぢやが、大事の我兒五人まで非業に亡ひ、それから氣が狂うて、最ち才が死んだ時、其死骸を食うてしまうて、夫婦とも生き身のまゝで鬼になつたのが、前鬼どの、後鬼どのぢや。

婆　お行者さまのお功力で善心に立歸らしやらなんだなら、一生、猪々や狼同樣に、人間を食うて果さつしやつたであらうのに、今は無二のお使はしめぢやげな。せめてあのお二人がござらつしやりや、よもや山鳴りなぞは始まりやすまいに。

青蟲　他に、お行者のお弟子とてはござらぬか？

婆　たつた一人をられます。五人六人とお傍にござつたこともあつたが、何にせい荒行ゆゑ、辛抱が出來ず、みんな途中で下山してしまはつしやりました。

老女　（頻りに聞き耳立てゝゐたが）あの鳴り音は、何でござるの？

爺　されば、あれがソノ……と言ひかけた途端に、樵夫らしき三十年輩の男、名はウシマリ、左の山手から急ぎ足で降りて來て、橋を渡るや否や、大きな聲で

ウシマ　事ぢや〳〵！　若いお行者どのが川へ陷らしやつた。

姉　えッ！　若いお行者さんが？！

ウシマ　今朝もなア、例の通り、アカズネやケヅラと一しよに、おれも仕事爲に出掛けては見たがの、山鳴りで膽を潰し、七曲りから引返して、洞の辻まで來ると、上の瀬に、何やら白い物が岩の間に挾まつてだぶついてゐるのが見えた。どうやらそれが人らしいので、おりて行つて見たところ、案の定、人ぢや。人も人、去年山籠りした、あの都の若行者ぢや。

姉　えッ！　あの都の若行者さん！

妹　あの色の白い、目の涼しい……

ウシマ　さうぢや。あの生優しらしい若い男ぢや。

爺・婆　はれ、まア！

爺　いよ〳〵主さんが荒れだしたのぢや。

姉　そしてもう助からんかいな？

ウシマ　いや、まだ助かるかも知れん。少しは胸の處に溫みがある。今アカズネとケヅラが裸體にして水吐せてをる。が、息が出たからというて、こゝまで步ばせることは覺束ない。戸板でも一枚借してくつさい。もし生き返つたら、そつと臥して吊つて來う程にの。

婆　それならば、あの雨戸がえいわ。エブリや、はよ脫して持たせてあげいやい。

姉も妹も一しよに起ち上つて、寛側の戸袋から雨戸を脫しにかゝる。山鳴り全く止む。

爺　どうか助かればえいがなう。

老女　其都の行者とやらは、名は何といふ人でござるの？

爺　たしか何の廣足さんたらいうた。何でも都のお歴々の息子さんぢやげなが、色戀の事で親御達と甚い爭論をして、それが元で發心さつしやつたとやらいふ噂ぢや。

此中に、娘らは雨戸を樵夫に渡す。

ウシマ　では一寸の間借りて行きますぞや。生き返つたら、ともかくも、こゝへ連れて來う程に、休ませて下され。

姉、何やら妹に耳こすりをする。

妹　お母さ、わしらは往つて見て來るぞえ？

婆　はよ戻つて來いよ。

嫗ら樵夫に從いて橋を渡り、左手、家の背ろへ消える。翁婆も思はず起ち上つて嫗らの後ろ影を見送る。

老女（青蟲に向ひ）定、其方行者といふのは、あの韓國の連どのゝ小角子に相違ない。親の心をば子は知らず、限りない心づくしの恩を仇に、五年以前家をば脱出して、けふまでも何の便りもせず。母御はそれが爲に泣き死。さては此山に籠つてゐたのぢやなう。

翁（席に戻りて）お袋さまは、その廣足さんの身寄りででもござらつしやるかな？

老女　いや〳〵、今は何を包みませう？　わしは役の行者小角の母でござる。

翁／婆　えッ！　お前さまがや!?

老女　思ひ出せば、今からは六十二年以前、わしが十八の時の事、癸の巳の三月、天から獨股杵が降つて來て口中に入ると夢を見て、懐姙し、生み落したのがあの行者どのでござる。

翁／婆　はれ、まア！

老女　名を小角と附けしところ、赤子の時から、凡人とは面ばせぬ智慧を具うて、十三の頃からは、誰に學ぶともなく、佛の教へを知り、十七歳で河内の國金剛山に登つたのが修行の始めで、三十八の年には、亡き所天どのゝ許しを得て、あの葛城の峯に分け入り、數々の苦行功積んで、嶮山魔所をも踏み開き、業通無礙の身となり、活き神と崇められ、諸人を濟度し、世間を利益すると、傳へ聞くは嬉しけれど、夫には早く別れ、頼る方もない老いの身は、我子戀しくなつかしく、憧れ泣かぬ日はござらぬので、いつしかに目を泣きつぶし……

と堪へかねて泣き入るを、青蟲いろ〳〵介抱する。翁と婆は呆れて聽いてゐたが

翁　やれ〳〵、活き神さまのお袋さまぢやとは氣が附かなんだ。あ、物體ない、物體ない、物體ない！

婆　物體ない、物體ない！　まア〳〵、こちへ上らつしやりませ。まア〳〵。

青蟲　あのやうに申しまする。ま、ともかくもお上りなされませ。

翁婆介抱して老女を席に着かせる。

老女　もう餘命も永うはあるまい。せめて只一目、只一聲、我子に逢うて最期の言葉を言ひ交して死にたいと、はるばると來て見れば、此山には居らぬといふ。よく〳〵親子今生の淺いえにし。此上は、迚も土とならば、同じくば此山の土とならうずる。やい、青蟲よ、今ちやうど此

山に妖變があるこそ幸ひ、おれを此山の奧へ負うて行き、いづこになりと棄て置いて去んでくれ。熊、狼の餌食ともなつて果てようわいなう！

　と泣きくづれる。

青蟲　それは餘りの御短慮と申すものでござります。何の、いつまでもお歸りなされぬこともござりますまい。此家の主人に頼み殘し、行者御歸山あらば、やがて知らすやう計らひませう程に、まア／＼お心をお取直しなされませ。

婆　さうぢや／＼。天眼通のお行者さまぢや。きつとお前さまのござつた事も、山の主さんの荒れ出した事も、今に知つて歸らつしやりませう。今日程は、なアお父さ。

爺　さうぢや／＼。けふ程は堪へて歸らつしやりませ。泊めてもあげましたいが、此通りのあばら屋、夜の物も餘分にない。蓑笠だけは借して進ぜる程に、雨にならぬうちに、里へ下らつしやれ。なう、わるいことはいはぬ。さうさつしやれ、さうさつしやれ。

老女　いや／＼、おれは歸らぬ。どうしても此山の土になるのぢや。

青蟲　其御決心でござりますれば、必ずお歸りとは申しませぬ。したが、此家では泊めぬと申す。お山へは登られず、雨は今にも降つて來さう。ま、ともかくも最前の村までお戻りなされませ。其上でならば、屈強の者を雇うて、お伴いたさすことも出來ませうず。ともかくも一先づお歸りなされませ。

爺　さうなされ、さうなされ。

　老女尙ほかぶりを振りつゝ泣いてゐる。

婆　やれ／＼、憂いことやの、憂いことやの。

爺　（物置から蓑笠を取出して來て）さゝ、これを被てござらつしやれ。

青蟲　（それを受取りて）かたじけない。いかい世話になりましたわい。……

　尙ほいろ／＼棄てぜりふにて、三人かはる／＼老女を慰める。老女餘儀なく、泣く／＼起き上る。

さらば。

爺婆　御無事でござらつしやれ！

　主從元の路へ歸り去る。爺婆五六歩送つて行つて、なほ立つて見送つてゐる。

　と、そこへ娘二人「おとさ！　おかさ！」と姿を見せぬうちに嬉しげな聲だけ先きへ聞かせて、ばら／＼と駈け戻つて來る。

姉、妹　おとさ！　おかさ！

姉　若行者さんが助かつたわいな。あゝ、うれしや／＼！

此中に、すぐ其後から、先刻の樵夫ウシマリが先きに立ち、同じ仲間のケツラとアカズネが、雨戸の上へ一人の若い男を臥して、吊り臺を運ぶやうにして運んで來る。やがて橋を渡つて筧の此方まで來ると

爺　それ〳〵、そこからすぐ床へ上げるがえい。……さうぢや〳〵。

一同手傳つて、雨戸の上の男を筧の此方の框から這ひ上らせる。若い男、韓國の足廣は、齢は二十七八、久しい荒行で、都人の昔の面影は無い程に、日にも燒け、やつれ果ててはゐるが、容姿は優美で、何さま貴紳の果かとも見える。白い行衣は、焚火などで乾かしたらしく見えるが、處々おそろしく裂け破れてゐる。豐かな頭髮のまだ幾らか水に濡れてゐるのを、細繩で端を結んで背に垂れてゐる。

ウシマ　えいかな！

赤　あぶないぞな。

廣足　かたじけなうござる。もう大丈夫でござる。もうようござる。

爺　さア〳〵、こゝへ臥さつしやれ、臥さつしやれ。

廣足　いや〳〵、もう大丈夫でござる。かたじけなうござる。かたじけなうござる。

爐の傍に坐る。家の者はみな席に着き、樵夫三人は框に腰を掛ける。

妹　なア、おかさ、あの人はなア、西谷をば覗かしやつて、それで怖い目に逢はつしやつたのぢやげた。

婆　きつとそんな事であらうと思うた。（廣足に向ひて）十五年前の話を知らつしやらんでも無かッつらうに、ま、ひよんな事をさつしやつたなう。

廣足　（面目なげに）自分ながらわるいことをしました。

爺は此間に何やら藥艸を湯に浸して持つて來る。

爺　さ、えい藥ぢや。ま、これでも飲んで、氣を落着けさつしやれ。

ウシマ　わしらの心得になるこつちや。氣が落附いたら、詳しい話をして下され。

アカズ　さうぢや、心得になるこつちや。噂にはたび〳〵聞いてゐたが、どこいら邊が魔所やら、おれにはまだ見當も附かぬ。

婆　どうして覗く氣にならつしやつたのぢや？　わしらでさへ知つてゐるお行者さまのお禁斷所ぢやござらんかいの？

廣足　さア、つい五六日前までは、夢にもこんな氣はなかつたのぢや。師匠の行者どのは、先々月陸奥へ往かれる前にも、取りわけて予に戒めおかれた。「おれが留守になると、あの西谷の方で山鳴りがするかも知れん。併しど

んな事があつても、西谷へは入るな。萬止むを得んことがあつても、前鬼と後鬼とが歸るまでは俟て。」と斯う言ひおいて師匠は出て行かれた。で、わしは、無論それに背かうなぞとは思うてをらなんだのぢや。ところが、此五日このかた、あの山鳴りが日增しに激しうなるにつれて、わしが思うたには、如何に師匠の吩咐にもせよ、あのやうな不思議を正體も見屆けんでおくといふは不覺ぢや。あゝして棄てゝおいたら、どういふ間違ひにならうも知れぬ。それに、前鬼や後鬼には、始終往來を許しておかつしやる。して見ると、わしをば修行のまだしい者と見貶してござらつしやるのに相違ない。くちをしいことぢや。遠國へござつた留守中の代役をする程のわしに、それほどの事が出來んとはあさましい！　村々の衆に聞かれても返答がならんやうでは面目ない。日頃の修行は何の爲ぢや？　かういふ妖變を祈り伏せる爲ではないか？　どんな難事でも、命懸けでするなれば、遂げられん筈はない、と思うて……

婆　あゝ！　それでつい覗かつしやつたのぢやな？

廣足　全くわしの心得ちがひであつた。が、今の先きまでは、さう思はず、けさの起きがけにも、其事をば考へ〳〵、いつもの通り、東の行場へ降りようとすると、例の山鳴りがいつもよりは激しう聞えて來たばかりでなく、氣のせゐか獸の唸るやうな聲が聞えたので、どうしても心が抑へきれず、ついふら〳〵となつて、西へ〳〵と降りて行くと、空が急に曇つて來て、あたりには深霧が降り、とんとまア歩きつゝ夢を見てゐるやうな心持。と、いつの間にやら、繁つた大きな木が蔽ひかぶさつてゐて、晝とは思へんやうな、昏い、物凄い溪間へ出てゐた。はつと思ふと、すぐ目の前に、大きな、十抱もあらうといふ上下八股の樟の木が横倒しのやうに生えてゐて、其股に何とも言へん怖ろしい――獸類だか、鬼だか、神だか分らん――者が横ねぢれに挾まつてゐて、のたうつては呻き、呻いてはのたうつ。のたうつ度に、木も岩も地震のやうに震動する。其呻く聲は冬の暴風のやう。……

と言ひかける途端に、又も不思議な山鳴りが聞えて來る。

や！……

と廣足は話を中止する。一同の顏色が變る。やゝあつて廣足は話を續ける。

其怪物を一目見ると、忽ち慄然と摑み立てられるやうで、恥かしいことながら、日頃の修行も何もあつたものでなく、體ぢうがわな〳〵と震へ出し、舌はこはゞる、目は眩む、こゝがへと兩手で頭をおさへ〳〵ぐら〳〵と破れさ

うになつて、――さりとて手や脚は痲痺れてしまうて、どうすることも出來ん。そのうちに、そいつが予にむかうて、怖ろしいことを言ひかけをつた。初めはそれを、只もう怖ろしいとばかり思うて聽いてゐたが、其うちに、どうしても斯うしても其奴の言ふ通りにせねばならんやうな氣持になり、つい半夢中で、取返しのならん返辭をしたやうな氣もするので、さア怖ろしうなつて、死物狂ひで迯出さうとすると、其後ろから予の耳へ、そいつが三度浴びせかけをつた怖ろしい呪ひ語！　あゝ、思ひ出しても身が慄へる！　けれどもこつちも一生懸命、右とも左とも方角知らずに、岩をも木の根をも飛び越え、跳ね越えて、何町ほど駈けたことやら！　溪河の深みへ轉げ落ちて氣を失うたのも、自身では一切知らなんだのぢや。（身を慄はして）あんな怖ろしい目に逢うたことはない。

一同　（同感して）あゝ！

婆　（娘らを見返り）な、それが一言主さんぢやがな。（皆皆にむかひ）いよ〳〵お縛が弛んだのぢや。けふからは油斷がならんぞな。

山鳴りが次第に激しくなる。空が暗くなる。折々遠くて雷光がする。娘らは老人の傍へ寄りこぞる。

爺　（廣足に向ひて）では、何か其山の主さんと約束をさつしやつたのぢやな？……

廣足うつむいたまゝ默つてゐる。爺は婆と顔を見合せる。

心得ちがひをさつしやるなや。主さんが如何にあばれ出いても、つまりは行者さんには敵はん。行者さんの方が正道ぢや程になう。

婆　ま、それでも命を拾はしやつてよかつた。

姉　ほんになア！

廣足　全く皆の衆のお庇で命拾ひをしました。くれ〴〵もかたじけなうござつた。（空を見上げて）や、おそろしう空が暗うなつた。どれ、もうお暇をしませう。

ウシマ　お暇いうて、どこへ往かつしやるのぢや？

廣足　山へ歸るのでござる。

婆　めつさうな！　その弱つた體で、どうしてお山へ歸らるゝものかな。それにもうやがて晝過ぢや。ま、飯でもくひなされ。

ウシマ　さうぢや〳〵。嘸ひもじからう。よばれさつしやるがえい。

アカズ　さうぢや〳〵。折角ぢや、よばれさつしやるがえい。

廣足　いや〳〵、さうしてゐては、尙ほと師匠に濟まんに

よつて……

　此中にさつと颪す風と共に、雨が激しく降り出す。電光(いなびかり)かして、雷が鳴りはじめる。

爺　やア！　とう／＼來たわい！

婆　さ、濡れる／＼。みんなこつちへ入(はひ)らつしやれ、入(はひ)らつしやれ。（廣足に）こりや汝も歸らるゝこッちやござらぬぞな。……姉よ、それ／＼降り込む。その雨戸を、それ、そこへ！……脊戸の方(はう)はえいかや？　エブリは脊戸を見て來いやい！……さ、さ、みんな上らつしやれ、上らつしやれ。

　雨風ます／＼はげしく、雷鳴ます／＼近くなる。

第二幕

第一場　大峰林中

向う一帶の蓊鬱たる密林。風、雨、電光、雷鳴。太陰暦九月十一日頃の初夜（六時）前後。

右手（上手）からだしぬけに、河童の腰に毛が生えたのかと思ふやうな身長三尺ばかりの怪物と金太郎に翼が生えてゐるのかと思ふやうな、肌の黄色い化物が、こけつ轉びつして駈け出して來て、やがて左手（下手）へ逃げ込む。つゞいて同じく右手から一個の大きな怪物が、左右の手で二疋の奇異(ふしぎ)な妖怪を引立て「おどれ、うしやアがれ」と怒鳴りつゞけながら出て來る。

此の大きな怪物は、よく見ると、慥かに人間で、男性であるらしく、齢は五十以上、頭髮は赤黑く、まるで棕櫚の毛のやう。おそろしく顴骨が立つて、目の光が鋭く、乾固つたやうな醜怪な顏色だが、兇暴には見えない。すべてが枯木のやうになつてゐるらしい。ほとんど裸體だが、粗布(あらぬの)の犢鼻褌を締めて、腰のあたりは何か獸の皮らしい物を纏つて、脊には岩疊な笈を負ひ、繩の帶には柄の長い古風な斧を挾んでゐる。これが、第一幕で噂されてゐた役の行者の使はしめの前鬼なのである。引立てられてゐる妖怪は、いづれも身長は四尺位で、胴から上は、一疋は男、一疋は女、只の人間とさしたる相異もないやうに見えるが、よく見ると、男の方は面附(つらつき)がやゝ猿に近く、女は目が際だつて大きく、目と目との間が人間より隔だつてゐる。臍の邊から下は、二疋ともに明かに野獸である。蹄の形なぞから見ると、雌の方は鹿かとも思はれ、さうして色が飽迄も白いが、頭髮は全くの赤毛に近い。雄の方は足の格構が猿に近い。以下、折檻される間、二疋とも物は言はないが、折々堪へかねると、まるで獸のやうな、

又は唖が叫ぶやうな聲を發して逃げようと跪く。

前鬼　おどれ、たつた二月の間ござらつしやらんばかりぢやのに、もう御禁制を破りをる。どうしてくれるか、見なれ、此横道めら！……

男女の妖怪は首ねっこを掴まれて、きやア／＼と叫びながら、頻りに手を合せて前鬼を拜む。

やい、行者さまがまだござらつしやらなんだ頃の、此山の事を忘れをつたか？　あの親子の魔神めらが、こゝいらぢう一圓を横領して、あばれ廻つてゐた頃には、やい、おどれらは如何な目に逢うてゐた？　夜も晝も、――二六時中、年が年中、――あの親子に虐使はれて、只の半時も休むことが出來なんだばかりでなく、それ、その體ぢうに、折檻の生創が絶えたことはなかつたぞよ。（妖怪共をこづき廻すと、二疋とも悲鳴をあげて又頻りに拜む）其怖ろしい苦みを誰れのお庇で助かつたと思ふ、此罰當りめ！　行者さまの大恩を忘れをつたか、うぬ！……

手強く二疋を右と左へ突放すと、二疋とも一二間けしとんでへたばり、暗雲に米搗ばつたの眞似をしたり拜んだりしてゐる。

が、今夜はもう一遍だけ堪忍してくれる。又と斯んな眞似をしくさると、何もかも行者さまに申しあげて、五十六億七千萬年の間決して解くことの出來んお呪縛を受けさせるから、さう思へ、ろくでなしめ！……失せう！

赦免が出たので、二疋の妖怪は、一さんに上手へ逃げて入る。電光も雷鳴も止み、雨も止んで、あたりが寂となつた。前鬼は暫く其後ろ影を睨んでゐたが

前鬼　お吩咐で、中を飛んで驅け戻つて見ると、案の定、これぢや。魔神の葛城めが、お結界を破りをつて、いつの間にか入り込み、何か食はせをつたと見えて、一言主めはあばれはじめる、妖精共は怠ける、廣足めはあのざま。今夜にも魔神めが又來をるかも知れん。こりや大事になつて來たわい。……（といひながら空を仰いで）やつと夕立が晴つたさうな。……

此途端に、左手（下手）から更に一個の怪物が飛び込んで來た。大體に於て、前鬼に似てゐるが、これは明かに女性らしく、やゝ長い棕櫚の毛を根元で束ねて、其末を結び垂れ、腰、股のあたりは前鬼同樣だが、さすがに粗布の袖なしやうのもので裸體を半掩うてをり、手には古風な大きな鉾を持つてゐる。前鬼は之を見返つて

おゝ後鬼か？　どうした？

後鬼　何もかも行者さまが言はつしやつた通りぢや。何さま、あの廣足にや魔神めが魅入つたらしいぞや。あいつ、命を助かつて、あの一軒家へ泊り込みをつた其晩げから

甚い熱病、やんがて其煩ひは治つたなれど、それからといふもの、だん〳〵と人柄が生れ變つたやうにたつて、今では西谷を覗いたのを悪い事をしたと悔むどころか、まるで新しい悟りでも開いたかのやうに慢心し、毎日々々あの界隈の者を集めて、說教をするやら、萬病平癒の祈禱をするやら。まぐれ當りでもあらう、二三遍驗があつた。すると物知らず共が有難がり、とりわけ若い女子供は、あの生白い顏に迷うて、やれ、役の行者樣のお名代ぢやの、活き佛さまぢやのと崇め立て大騷ぎをするので、あいつ彌〻えい氣になり、行者さまを蔑しろの增上慢。外道とはあのことぢや。あの儘にしておいたら、行者道のどんな迷惑にならうも知れん。早うどうかせにゃなるまいぞよ。

前鬼（しきりに首肯いて聽いてゐたが）おれも今さう思うてゐたところぢや。……よもや今夜ぢうに、西谷へ、魔神めが入り込むやうなこともあるまい。おれは中を飛んで驅けていつて、此事を行者さまに知らせて來う程に、おのしはもう一遍麓へ下り、もそつと樣子を見屆けて來い。……

後鬼うなづきて、すぐに元來た方へ行きかける。

おれの留守の間、西谷口の見張りも油斷すなよ。

左右へ別れ、急ぎ足で入る、と局面が一變する。

第二場　西谷の魔所

大峰の一部、今の西の覗附近の深谷でもあらう。但し地勢は後に大變化があつたゝめに、著しく後世のとは異つてゐる。

第一場と同日の夜半。

谷底から見上げると、右手も左手も側つたやうな千仞の絕壁である。右手の手前なぞは、其絕壁の頂きに樹木が繁茂してゐるため、實際空を遮つてしまつて、高さの知れぬ六枚折を不揃に開きかけて立てたやうに、其巉々たる岩角が出つ入りつ重なりあひ、聳え立つてゐる。ずつと離れた左手の絕壁の一部（卽ち下手の前）は、餘り久しからぬ以前に激しい山崩れがあつたらしく、あちこちに大小の岩石が、樹木を壓し折つて轉げ落ちたまゝ、重なりあつて、斜地を形成つてゐる。此斜地の頂きから溪へ臨んで、掩ひ掛かるやうになつてゐる樟の大木、幹は根元では十抱へもあらう。それが根から二尺ばかり上で四つ股になつてなり、更に三四尺上の處で又四つ股に分れて、東西南北へ會釋もなく、其長い、逞しい大枝を張出して、其一枝一枝がまた幾條にも分れ分れて當面の溪の上殆ど一ぱいに掩ひかぶさつてゐる。それから其手前や後ろにも、端にはまだ

間のある時候だけに、種々の木草が尙ほ繁つてゐて、曇天や雨天には、晝間でさへ夜のやうに暗い。まして眞夜中の陰森さと言つたら無い。それが月夜だと崇高の氣が加はつて、一段と物凄い。

此崩れた斷崖の彼方、大樟の幹の背後に當る處に、溪へ覗き込んでゐるやうな岩山が突出してゐて、其裾は中へ刳つたやうな懸崖を成してゐるが、其岩山の邊に一道の山蹊が通じてゐるらしく、其頂きから右手の奥の、同じく溪の上へ突き出てゐる一大懸崖の頂きへ掛けて、天然自然の苔蒸した岩の橋が出來てゐる。此橋の左の袂は、大樟の梢や其他の樹木に遮られてよくは見えない。

前に言つた左手の覗き込んだやうな岩山の附近は、杉や檜の老木が矗々と竝び立つて空を摩してゐるが、其木の間越しに此岩山に連亙してゐる同形式の岩山が、一段高く一段物すごく聳えてゐるのが見える。其斷崖の裾を巡つて、一道の溪流が、白練を躍らすやうに、不規則にちらばつてゐる怪岩奇石の間を縫つて、うねり〳〵、緩くなつたり、急になつたり、細くなつたり太くなつたりして、六枚折に比した右手の絕壁に添うて流れて來て、遂に右手々前の崖下へ流れ入つてしまふ。此日は宵に夕立があつたので、雨雲の餘波が尙ほだらしなく迷つてゐて、青空はほんの其破間々々に覗いてゐるぐらゐ。

遠くで草臥れたやうに稻光りがする。と稍々暫らくして、思ひ出したやうに、居眠りしながら廻つてゐる石臼のやうな雷が聞える。樹梢からは雨の雫がまだぼたぼたと落ちてゐる。

樟の大枝の間からは十一日頃の落ちかたの月が――餘程前から居殘りの雨雲と煮切らぬ生存競爭をしてゐたが――此の時やつと顏を出した。どこかで不思議な鳥の聲がする、それは妖怪國の笛の音ではないかと思ふほど、聞きやうによつては凄いといふよりもをかしいとも感ぜられる一種奇妙な拍子を取つて啼くのである。

夜は次第に更ける。風はまるつきり死んでしまつた。谷中が闃寂としてゐる。

と、溪の奥、斜地の向う、大樟の後ろに當つて、人間界では誰も聞いたことの有りさうにない奇異な、大勢の笑ひ聲が聞えたと思ふと、斜地の裾を廻り、伸し下つてゐる大樟の枝下を潜つてばら〳〵ばら〳〵と、其同じ奇異な聲で笑ひさゞめきながら手と手とを繫ぎあつて驅け出して來た者がある。見ると、何れも奇怪不思議な、鳥に似て鳥でなく、獸に似て獸でなく、無論

人間とは思はれない、裸體の妖怪なのである。その中には前の場の四頭も加はつてゐるが、別に三尺に足らぬ白髮頭の怪物と黑い長髮を脊に垂れた女の化物とがある。白頭の怪物は恐しく頭が大きく、鼻は僧正坊の如く、總てが老人のやうで、身長は二尺ばかり、長い、鼠のやうな尻尾を垂れて、よち〳〵してゐる。それから女怪は肩から腰へかけて、一ぱいに雉そつくりの羽毛が生えてをり、翼や尻尾はないが、脛や足は全くの鳥、相貌(かほつき)は存外に醜怪でない。皆如何にも嬉しさうである。

總體で六頭。浮れ出すと、僧正坊以外は、どれも鼷鼠のやうに矯捷に跳ね廻り飛び廻るので、時としては目にもとまらぬ。

此妖怪群は、手に手を取つて、奇怪な笑ひ聲を發して、嬉しげに駈け出して來たが、やがて人間のよりは禽獸のに近い音節で口をきゝ出した。白髮頭の僧正坊だけは口をきかない。さて手を繫ぎ合せて、緩く輪形に廻りながら、調子づいた聲で

妖の一　はつてつた！
妖の二　はつてつた！
妖の三　はつてつた！
妖の四　はつてつた！
妖の五　はつてつた！
妖の一　ぴいかぴいか、はつてつた！
妖の二　があらがあら、はつてつた！
妖の三　びつしよびつしよ、はつてつた！
妖の四　ぴいかぴいか、はつてつた！
妖の五　があらがあら、はつてつた！
一同　（聲を揃へて）　びいしよびいしよ、はつてつた！
はつてつた！　はつてつた！

不思議な拍子を取つて啼く先刻の鳥が、此間ちよつと鳴き止んでゐたが、又頻りに鳴き始めた。妖怪共は、待つてゐましたといふ風に、滑稽な拍子に合せて、一種奇妙な輪形舞踏(わおどり)を、天井のやうに伸(の)しかゝつてゐる樟の大枝の下で、はじめた。おまけに妙な節で歌めいたものを囀りはじめた。雲がやつと散じたので、月の光りが冴えて來た。

のうこんだ、くうろんも！
ちんれんれ、ちれろ！
あつぱつぱ、きらゝ！
はつぱつぱ、きらゝ！
きらゝ！

手を繫ぎ合せ、脚で拍子を取つて踊り跳るのだが、歌が切れると、怖しく早足に廻りはじめて

一同　（同音に）ぐる／＼せつこう！　ぐる／＼せつこう！　せつこう／＼／＼！

走り止ると、又同じ厭な囀りはじめる。此輪形をどりが三度ばかり濟んだ途端に、全く出しぬけに、大樟の幹の近くて、一際高く——手負ひ虎なぞの吼えるやうな聲で——物凄い呻き聲がすると同時に、殆ど溪一ぱいの大樟がゆさ／＼がさ／＼と搖れはじめ、續いて同じ呻き聲が第二聲、第三聲、第四聲と次第に高く、次第に物すごく連續して、其たびに大樟の枝は勿論、其邊の樹木岩石までが動搖するので、自然とそれが界隈の山嶽にも影響して、大げさに言ふと、山鳴り谷應へ、小さい地震のやう。これが爲に散際になつてゐる病葉や枯れ枝はいふまでもなく常磐木の葉さへも挑りかれて、小雨のやうに、ばら／＼と散りかゝる。軋轢つて折れるので、小枝ぐるみ落ちるのもある。最も激しくゆれてゐる正面の樟の一枝が、急にめり／＼と音がして幹の接續際から壓折れると共に、呻き聲の本體が露はになつた。大樟の第二の四つ股が其眞中で眞ッ二つに裂かれてあつて、其間に、横捻れに身長八九尺もあらうといふ一個の怪物が、無論裸體で、挿まれてゐるのである。面は——長い赭黒い頭髪を獅子の鬣のやうに振亂し、それが鼻といはず、目といはず亂れかゝつてゐるので——よくは見えぬが、何でも怖ろしく醜怪な、併しながら偉大と感ぜられる類ひの相貌であるらしい。太い、藤の幹のやうな右の腕では、つい今壓折つた一枝のすぐ傍の大枝を引ッ抱へ、なほ其面の上の大枝を摑まうとするかの如くに、頻りに右の手を働かしてゐる。胴は幹に挿まれて見えない。上半身は人間と異なつてゐるとも見えぬが、銀色の蹄を月の光りに反射させて四下の小枝を蹶散らしてゐる太い毛むくじやらの其片脚は、野牛か野猪かの脚に似てゐる。これは三十年前までは此界隈の主であつた一言主といふ獸神なのである。

最初は只呻くのかと思つたのが、次第に意味を傳へる音節となつて來る。はじめて唸り聲が一聲聞えた時に、踊り廻つてゐた妖怪共は、猫の一聲に活動を中止する鼠のやうに愕いてぴたりと立止まつたが、二聲目を聞くや否や、一齊にけたゝましい叫び聲を發して、忽ちばら／＼と四方へ逃げ散つた。獸に似た、やゝ大きな二頭だけは、大枝が折れて落ちた時までも遠くへは逃げようともせず、頭を抱へて、手近の岩かげに蹲踞つてゐる。

一言主　うゝん！　うゝん！……阿母よう！　阿母よう！　歸つて來う！　速う歸つて來う！……血がほしいわい！

ひもじいわい！ くるしいわい！……うゝん！ うゝん！ 蹲踞つてゐた妖怪が岩かげから這ひ出して來て顏を見合せ、首をすくめ肩をそびやかしてゐたが、急に前へ[illegible]出して來た。

妖の一　いひゝゝゝひ！

妖の二　いひゝゝゝひ！

妖の一　ほッえれえい！ ほッえれえい！ いひゝゝゝひ！ 意ッ地なしい！ ざッまァ見れ！ いひゝゝひ！

妖の二　ほッえれえい！ ほッえれえい！ いひゝゝひ！ 力なッしい！ ざッまァ見れ！ いひゝゝゝひ！

一言主の挾まれてゐる直下を、齒をむき出して見上げながら走り廻ろ。それを見おろして、睨みつけて

一言主　やかましいわい！……

雷霆の如く一喝すると、妖怪は吹き飛ばされたやうに一間ほどもけし飛んだが、次ぎの長い呪ひの間に、又そろ〳〵這ひ出して來る。前に逃去つた他の妖怪らも、幾ら叱られても平氣な頑童といふ見えて、あちこちの岩かげ又は叢から首を出入させて、齒をむき出し、折々奇異な叫び聲を發して、兄分の妖怪に聲援をするが、「やかましいわい！」の一喝に會ふと、急にまた姿を沒する。

うじ蟲めら！ 薪入りのうぬらまでが見下げやがつて、おれを病みほうけた獅子か虎のやうに扱やがる。今に見ろ、自在力を取返しやァ思ひ知らしてくれるぞ！ 三十年前なら、うぬらが覗くことも出來ん山だぞ、こゝは！……うゝん！ うゝん！……行者が何だ、行者が？ たかが老いさらばつた人間だ。其老いぼれに縛られた此態は何だ？ 此ざまは！ あゝ、此五體に充ち滿ちて、はちきれるやうになつてゐた強い力は何處へ去つた？ おれの若い強い力は？ どんな岩山の肋骨でも、肩骨でも、おれがうんと息張つて踏む力足には、おッぴしげて、みじやけて、菌の笠のやうにおッぴらいたものだ！……ああ、あの彌が上に生ひ茂り生ひ延びる草や木の若い夏は何處へ去つた？ あゝ、若い臭ひで噎せ返る青葉の夏——あゝ、強い、逞しい、生々した、燃え熾る夏はどこへ去つた？ 雷はきさまのをめく聲だ。稻妻は汝の眼の光りだ。きさまは岩石をも煮爛らし、大地をも燒き割る。きさまは永劫の熱、永劫の力、永劫の若さだ。それがきさまだ。きさまはおれだ。あゝ、其若い、逞しい、あぶらぎつた夏は、もう往ッちまつたか！ あれからもう三十たび目の夏が往ッちまつた！……うゝん！ うゝん！ うんにゃ〳〵、おれは今でも夏だ、今でも夏だ、それだのに、それだのに、たかゞ老いぼれの人間めが、忌忌しい符呪を工夫しやァがつて、おれの此強い力を縛り、

おれの此若い命を壓し殺いて、晝三度、夜三度の猛獸の生き膽をさへ食はせやがらん！　なぜおれを苦めやがるんだ？　なぜおれを？……うゝん！　うゝん！……おれがどういふ惡い事をした？　おれに土鼠にも劣つたあさましい仕事を吩咐けやがつた。それをせなんだのが、何がわるい？　おれが何をした？　何がわるい？

　妖怪共がまた枝の下を走り廻る。

妖の一　飮ッむなッてッた獸類の生血飮んだわー　いひゝゝゝひ！

妖の二　食ふなッてッた獸類の汚穢ッ物食つたわ！　いひゝひゝゝ！

妖の一　阿母を牝にしてまッぐわつたわ!!　いひゝゝゝひ!!

群妖　（一齊に）　まッぐわつた!!　まッぐわつた!!　まッぐわつた!!　いひゝゝゝひ!!

一言主　やかましいわい!!……

　妖怪共又飛び退く。或者は叢へ逃げ込む。

食はんでをられるか？　飮まんでをられるか？　まッぐはつたが、何がわるい？　それは獸神の持前だ、堪へられんことだ、せにゃならんことだ。……うゝん！……うゝん！……飮むと食ふとは命を燃す薪だ！　まぐはへばこそ俺が二倍にもなる。大きくなる。高うもなる。十倍にもなる。百倍にもなる。千萬倍にもなる！　うゝん！阿母とまぐはつたが何がわるい？　阿母と妻とを別にするのは人間の猿智慧だ。おれは神だ。神仲間には牝牡はあるが、阿母も妻も姉も妹もない。主もない、家來もない。きのふの他の物が、けふはおれの物だ。たれかれの差別は無い。無いのが自然だ。それが天然の掟だわい、蛆蟲めら！　うぬらは精靈に生れやがつた癖に、意氣地もなく行者めに虐使はれて、前鬼や後鬼にすら虐使はれて、食ひたい肉も能う食はんで、枯れ蔓のやうにしなびやがつて、時々の盜みまぐはひで、やつと乾枯びた子種を蒔く。意氣地なしめ！　木や草に墮ちッちまへ。石や土になッちまへ、うじ蟲めら！　かりにも神にならうとするなら、おれをまねろ俺を、うじ蟲めら！

妖の一　力なッしい！　意ッ地なしい！　それッほどえッばるおッのしが、あんでんに負ッけッた人間に？　あんでんに負ッけッた人間に？

妖の二　さやァ！さやァ！あんでんに負ッけッた？

群妖　（一齊に）　さやァ!!　さやァ!!　あんでんに？　あんでんに？　いひゝゝゝひ!!　いひゝゝひゝ!!

一言主　やかましいわい!!……

　と叱咜つたが、覺えず火でも吐き出すのかと思ふやうな苦しげな大息をついて

おれは生り出でん前の定命で、晝三度、夜三度、猛獸の

生き膽を食つた上に、年に二度三度、月の輪が圓うなりはじめて全圓になるまでの中一旬の間に、必ず一度彼の猛獸の、七つ子の、其中央の牡の子を、孕み子のうちに生きながら取り出いて生き血を吸はねば、持前の通力が枯れてしまふのだ。……うゝん！……それを見拔きやがつたあのおいぼれめ、此山へ移る前に、先づ四方七十里の間を、行力で結界し、剰へおれには大切な彼の猛獸を海の彼方へ逐ッ拂やがつたので、おれの通力の根が凍えて、あらがふことが出來なんだのだわい！……うゝん！……阿母の葛城も危かつたのを、業通でやつと逃れて、行者めが此山を離れる時があると、前鬼や後鬼の目を盜んで、七十里の彼方から、時々猛獸の生き膽を持て來てくれる。餌食さへあれば、元氣が十倍する。けふこれだけの力が出るのは此間の阿母の賜だ！……あゝ！　飲みたい、飲みたい、あの獸の七つ子の牡の生き血が！　中の孕み子の生き血が！　もう十五年の間飲まん！　阿母の業通でも、海の彼方から、あの得がたい七つ子の中央の孕み子を、生しては持つて能う來ん。……あゝ、おれの力は、もう枯れ萎れてしまつた！　もう此一枝さへ壓折ることが出來んか！　うゝん！　うゝん！

　樟の一枝に手を掛けて壓折らうとしてゆすぶるが、中々折れさうにもないので、頻りに呻く。

妖の一　自儘ィッた罰ちだ、まがもんめ！　とッとゝわッぴッれい、とッとゝ！　とッとゝ！

妖の二　さやァ！　さやァ！　行者に！　わッぴッれい！　わッぴッれい！　とッとゝ！

群妖（一齊に）　さやァ!!　さやァ!!　わッぴッれい!!　わッぴッれい!!

一言主　えい！　人間なんぞにわびるものかい！　どんな責苦をしやァがらうと、晝千度、夜千度、おれの此五臟六腑を熱鐵の嘴を有つた鷲や角鷹に啄かせやがらうと、おれの骨々節々を、一つ一つに截ち割つて、晝千度、夜千度、永劫に冷めん煮え鉛を注ぎ込みやがらうと、何の人間なんぞに詫びるものかい！　今に見やがれ、あの老いぼれ！　おれが今に、あの孕み子の生き血をば飲むが最期、おのれ八つ裂きにしてくれるわ！

　枝を摑んでゐる手に滿身の力を籠めると、それがびしびしと音を立てゝ折れかける。妖怪共は、一齊に頭を抱へて逃げ出す。途端に一言主は辛うじて折取つた一枝を横抛げに抛げおろす。又も木の葉の雨。妖怪共はわつといつて、左右前後へ逃げ込む。暫くは山鳴りが止まない。

一言主　うゝん！　うゝん！

此必死の努力の爲に、さすがの獸神も、精力が全く竭きたと見えて、ぐたりと疲れ弱つて、手も脚も死人のやうにだらりとなり、今は唯力無げに呻くばかり、其聲さへも段々に弱つて行く。月がいつの間にかずつと異つた方角で照つてゐる。拍子を取つて啼く怪禽の聲は全く聞えなくなつた。

と、向うの岩橋の右の袂へ、突然一の怪しい黒い影が躍り出てた。遠くからは二尺ほどに見えるから猿かとも思ふが、人らしくもある――長い長い頭髪をおどろと振亂した――裸形の怪物、右の手に何物かを提げて、橋上に突立ち、暫く此方を窺つてゐたが、忽ち左手の岩山へと飛ぶが如くに横切つた。と、一陣の怪風が滿山の樹梢に渡つて、又一しきり山鳴りがすると同時に、左手の斜地の上、大樟の根がたの處へ突如として一の妖怪が現れた。面も、太い、逞しい腕も、大きな、はちきれさうな、引締つた乳房を突出させた胸元も、悉く黄ばみを帶んだ――此時は月に照らされて蒼白く見える――裸體の、但し胴から下はまるで赭熊のやうな黒赤い、粗い毛で包まれ、其太い、逞しい兩脚までが全く熊としか思はれんやうな一妖怪。赭黒い丈程の頭髮を地に引摺る位ゐに振亂してゐる。僅かに女性である。眼はすさまじく大きく、口も若し一ぱいに開いたなら耳元近くまでも遠かうといふ、併しながら強ち醜怪とばかりは評しにくい、どことなく一種崇嚴な聯想をも起させる一妖怪。右の手には人間のか獸のか不分明の、生れたばかりの赤兒らしいものゝ頸すぢを摑んで提げてゐる。

女怪　かはいゝ／＼あが子のあが夫よう！　嘸な待ッつらうなア！　今宵こそ、今宵こそ、持つて來たわ。これ、こゝへ持つて來たぞよ。さ、はやう飲め、此生き血を。はやう啜れ、此生き血を。

と言つても、獸神は唯力無げに呻くのみである。

どうした？　どうした？……

女怪は頻りに氣を揉むらしく、つる／＼と樟の幹を傳つて一言主の挾まれてゐる四つ股まで攀ぢ登つて、仰向けになつてゐる獸神の上へ掩ひかぶさるやうにして

これやい、どうしたんなア！　どうしたんなア！　あが夫のあが子よう！　かはいゝ／＼あが子よう！　孕み子を持つて來たぞよ。さ、これを啜れ、此生き血を。おのしが助けたいばッかりに、海を渡り、山を越え、西へ百里、北へ百里、往きつ復りつ六百里の其間を、おれは飛ぶがやうに駈け廻つて、捜いて／＼、捜いて／＼、やうやつと手に入れたコレ此、例の獸の七つ子の中の孕み子。

此血を啜りさへすれば、おのしは直に元通りになる。神通力が取返される。さ、はやう、さ。

一言主　うゝん！　うゝん！　はやう飲ませてくれい！はやう！

女怪は孕み子の胴を左の手で掴んで、更に右の手を其上に加へ獸神の仰向いた口の上へ臨ませて、力を籠めて一つ絞ると、下では大きく口を開く。生き血が其中へ注ぎ込まれる。と、どうしたか獸神は忽ち噎せ返り、のたうち、虚空を掴み、呻きをめき、大苦悶を始めたので、女怪は身も世もあられぬといふ風に、狼狽し、持つてゐる孕み子を放り出し、哭きわめきつゝ介抱する。

女怪　おほゝゝゝほ！　おほゝゝゝほ！　どうした！　どうした！

一言主　うゝん！　うゝん！……今飲まいたのは――うゝん！――生き血ではない！　死んだ血だ！　腐つた血だ！……うゝん！……毒がある！　毒がある！　臟腑が煮える！　腸が燃える！　骨々が割れひしげる！……うゝん！　うゝん！

女怪　えッ！　生き血でない!!　腐つてゐる！……

呻く聲が段々弱つて行く。

女怪は身を飜して四つ股から飛び下つた。落ちてゐる孕み子を拾ひ上げて、きつと月光に透して見たが、忽ち失望と憤怒と悔恨とに堪へかねたらしく、切歯して孕み子をはたと抛げ棄て、五つ六つ地鞴を踏んで

無念や〳〵！　無念や！　こよひこそはと、此長い頭髪で、幾重にも〳〵、掩うて庇うて、庇うて掩うて、掩うて庇うて來たんぢやが、一夜は潮風に吹き曝し、二日二晩は山霧、野風に曝いたので、大事の大事の七つ子の中の孕み子が、絶え入つてしまうたか！　死んでしまうたか！　腐つてしまうたか！　通力を取返すことが出來ん計りか、腐つた血がおのしの臟腑へ沁み入つて、おそろしい毒となつたか！　殺しもせず生かしもせん煮え鉛のやうな毒となつたか！　おほゝゝゝほ！　悲しや！　悲しや！　おほゝゝゝほ！……

又も樟の幹の上へ猿のやうに身を飜して跳ね登つて、苦しみ跪く獸神を介抱し、頰摺りするやら、接吻をするやら。

おれが今吹き込む此の息で、もとのやうになつてくれ！……強うなつてくれ！……強う！　強う！　強う！……

をめき叫ぶ聲が次第に嗚咽と衰へて行く。其悲しげな號泣に山も谷も森も流れも反響して、何とも言へない凄い寂しい山鳴りがする。木の葉の雨が又降りかゝる。

地平線から又黒い雲が沸き出して來て、いつの間にやら岩橋の遙か下に落ちかゝつてゐる月影が暗くなる。

物を言へい！　物を！　おほゝゝゝほ！　おほゝゝゝほ！

此の時獸神は、力なく垂下げてゐた手足を、又少しく働かせて呻き出した。

一言主　うゝん！　うゝん！　あゝ、あれから夏はもう三十たびも往つたり來りしたのに、おれの此身體は自由にならん！　此苦しみは止まん！……もう何十たび、何百たび、斯うして夏が往つたり來りするか分らん！　いつそ此息の根が止つてほしいわい！　いつそ此の息の根が！……なぜおれは死なれん！　なぜ死なれん！　うゝん！……あゝ、人間が羨しいわい、人間が！　人間には何一つの長所もないが、われとわが手で死なれるのが、羨しいわい！　死なうとしても死なれんやうに生り出でた神の身が怨めしいわい！　命を絶つことの出來ん生を享けたのが怨めしいわい！……どうしたら故の身に戻られるか？　いつになりや此苦しみがなくなるか？　あゝ、せめては自由であつた昔を思ひ出さずにゐたいわい！　思ひ出す力が怨めしいわい！……うゝん！　臟腑が煮える！　腸が燃える！　骨々が割れひしげる！……うゝん！……自由になりたい！……自由がほしい！……阿母ようどうかしてくれい！　助けてくれい！　阿母よう！

……うゝん！　うゝん！

又も聲が次第に弱つて行く。

女怪は狂氣のやうになつて、又も斜地へ駈け下りた、再び谿の上へ躍りおりた。さうして身もだえして走り廻り、先刻抛げ棄てた孕み子を拾ひ上げて、又も月光に翳して見たが、悔しげに切齒し、身をふるはせ、それを右の手に掴んだまゝ、遙かに岩橋の左の岩山を睨み上げて、空洞な物凄い聲で咀ひはじめた。月はいつの間にか落ちてしまつた。だしぬけに電光が閃く。暫くして雷が鳴る。

女怪　おれの通力で絞り寄せられる此山、彼山の土の毒、沼の毒、木の毒、水の毒、彼奴めに、あの行者めに取ッ着いてくれ！　業が盡きて死にかゝつて、とぐろを巻いたまゝで腐つて行く蟒蛇の毒、蝎の毒、蝦蟇の毒、ありとある疫の毒、只た一滴し沁み込めば肺の臟をも心の臟をも腸をも腐らせ爛らせる毒の液、あの行者めが一つ一つの毛穴から五臟六腑に沁み入つてくれい！　骨を割いて髓を抉つて、彼奴の壽命の續く限り、晝千度、夜千度、死なせもせず、生かしもせんで、渦を巻くやうにのたうたせてくれい！　苦ませてくれい！　憎や！　憎や！　憎や！　憎や！……あの葛城の金剛山、此大峯の金峯山、

大天井、小天井、此界隈の峯といふ峯、谷といふ谷、森といふ森、河といふ河、泉といふ泉に住む精靈共に、神代このかた總主と崇められて、日本八百萬神の隨一と拜まれてゐた親子ぢやのに、それぢやのに、あんな老いぼれの人間めに呪縛はれて、（一言主呻き苦しむ）あのざまは何ぢや！　あのざまは?!……神と生り出でたおれが、人間に敵たふことが何故出來んか?!　なぜ出來んか?!

　女怪は苦しげに一聲叫んで、抛げ出すやうに臥し倒れ、地を掻きむしり掻きむしり、石といはず、土といはず、摑んでは抛げ、摑んでは抛げ、轉げ廻つて悶え歎いてゐたが、又すつくと立上つた。

おゝ、おろかや！　おろかや！　おろかや！　迷うてゐた！　迷うてゐた！……此世界に生きとし生ける者で、うぬが身を大切にせない者があるか？　わが命より他の命を大切に思ふ者があるか？　いや〳〵、生きる力のある限りは、おのれを立て、おのれを張るのが自然の定めぢや。何ぢや？　おのれを捨てゝ他を救へ。おのれが片腿を切り殺いで他の飢ゑを救うてやれ？　え、それが直しいことぢや……え、それが正しいことぢや？　せにゃならんことぢや？……あの老いぼれの行者めが衆生濟度といふことを口實にしてをるのに釣り込まれて、おれも同じに、此下界の皮膚に生いた蟲けらの人間めらを利益するのを、此上もない事と思うてゐた……おゝ、だまされたわ？　だまされたわ？　何の〳〵、それがせにゃならぬこと？　みんな臆病な人間めが、強い者を防ぐ爲、おのが身を庇ふために、猿智慧で工夫し出した自儘の掟ぢや。おゝ、だまされたわ？　だまされたわ？　おろかにも、善い神、正しい神、直しい神と、取るにも足らん人間に拜まれたいといふ未練氣があつたりゃこそ、憎い憎いと思うても、思ひ切つたことを能うせなんだ。嫉しいと思うても卑怯いことや殘酷いことを能うせなんだ。おゝ、おろかや！　おろかや！　迷うてゐた！　迷うてゐた！……善や慈悲は、自分の都合で人間めが築きをつた狹い〳〵、脆い〳〵淺橋ぢやに！　廣大無邊な、暗の夜の沙漠のやうな魔界には、道もない、涯もない。あゝ、なぜおれは魔王にならうとは思はなんだぞ？　天上天下、我れ以上に何物も無い魔王になれば……

　怖ろしい表情をして岩山の方を睨みつめた。一言主がまた苦しげに呻く。

あの行者めが生きてをる間は、人間めが我意を操ひをる間は、かはいゝ〳〵我子のあが夫が、あのやうな苦しみをする！　おゝ！　あのやうな苦しみをする!!（又覺えず泣き倒れんとしたが、忽ち奮然と躍り上つて）むゝ！

今から直に越の地獄谷の火焔の泉に身を浸いて――煮え返り沸き返り、七色に燃える火焔の淵に――けふから七七日の間、夜千度、晝千度、身を黒焦げにくすぶらいて、生き身のまゝに死に返り死に返つて、神變自在の魔王とならう！　むゝ！　まづあいつらを血祭りにして、人間の子種を絶つてくれう！

だしぬけに電光が閃く。一言主また呻く。女怪は覺えず其方へ駈け行かうとしたが、先刻拋げ出した孕み子を蹴付け、立ちどまり、きつと見て拾ひ上げる。又電光。女怪は無念げに孕み子を見つめてゐたが、左右の手で其兩脚を摑み、きつと引き裂く。血が滴る。又電光。一言主また呻く。暫くして雷鳴がする。

第三幕

第一場　大峯の山中

こゝは山上が嶽に近い大峯の山中なので、向う一面は山に間近な山林。こゝに樵夫ウシマリとアカズネとが、斧を持ち、山仕事の合間らしく、岩角に腰を下して休息してゐる。時は陰暦の十月下旬である。

ウシマ　ほんまに、あらたかなもんぢやなう、あれほどの山鳴りが、まるで嘘のやうに鎭まつてしまうたわい。

アカズ　魔でも何でも、行者さまのお行力にゃ敵やせんわい。早いもんぢや。お歸りなされてから、もうかれこれ二十日ぐらゐになるなう。

ウシマ　さうぢや。けふでちやうど三七日ぢや。行者さまは、つい彼日から、あの絶巓の岩穴の中で、お行をしてござるんぢやげな。

アカズ　それにお使はしめの前鬼さんや後鬼さんも歸らしやつたといふから、もうこれからは安心ぢや。鬼に鐵棒ではなうて、活き神さまに鬼ぢや。

ウシマ　同じお弟子でもなう、あの生行者のやうな奴もあるから、油斷がならんわい。

アカズ　廣足の和郎か？（ウシマリうなづく）。あの生白い面附が、初手から氣にくはんかつたが、案の定、とうとうあの一軒家の姉娘をまじくなひをつたといふわい。

ウシマ　いま／＼しい和郎ぢや！　何にせい、ちよつと見たところが佛々してゐるによつて、十人が九人までは瞞着られるわい。あの畦主のお嚊も背められたといふが定かや？

アカズ　かも知れん。あんまり評判がわるいので、彼奴も尻こそばゆなつたと見えて、けさがた急にお山へ歸りを

つたげな。活き神の行者さまぢや、よもやあないな奴、お弟子にしておかつしやらう筈はない。やんがて叉麓へ追ひおろされて來やがらう。したら思ふさま叩きこらいてくれう。

ウシマ　それがえい、それがえい。つい長休みしてしまうた。お互ひに倍増しの稼ぎをせにや、此間ぢうの埋合せがつかんわい。さア、出掛けうかい。

　二人が立上る途端に、下手から都の武官、從卒數名を引連れて出て來る。其時代の警察官なのである。

武官　まて〳〵。

ウシマ／アカズ　へい〳〵。

武官　汝らは洞川村の樵夫か？

アカズ　さやうにござります。

武官　最前から汝らの行くへを尋ねてをつた。役の行者が行をいたしてをるとか申す山上の窟へ案内をせい。

ウシマ／アカズ　へい〳〵。

武官　早くいたせ。

　とは言つたが、もぢ〳〵してゐる。

アカズ　（おそる〳〵）恐れながら、仰せ附けではござりますが、行者さまのお行場へは、出入は御禁斷でござりまするによつて……

ウシマ　へい〳〵、竝の者は參られません！

武官　默れ！……竝の者は參られんでも、予は、恐れ多くも、飛鳥の朝廷の勅命を承はつて、妖僧役の行者を召捕りの爲に相向つた討手の頭人ぢや！

ウシマ／アカズ　ひえッ！

武官　役の小角師弟、多年邪法を修し、頻りに愚民を惑はし、財物を貪り取る由、豫てより朝廷に相聞えをつたが、近年に及び、彼れ惡心增長なし、日本國を魔界となさん手始めに、恐れ多くも、帝を調伏し奉るといふ事、訴人の者日を追うて頻りなれば、勅命を承り、實否を糺しに參つたのぢや。彼奴邪法を自在にし、妖魔鬼神をも驅り使ふとか申せども、何程の事があらう？　普天の下、率土の濱、王土にあらざる處なければ、萬が一にも取逃さぬ。已に八方に組み子を配置り、通路を悉く斷ち切つたわい。……速かに案内せい。

ウシマ／アカズ　へい〳〵。

　武官は樵夫二人に案内させて上手へ通り拔ける。

第二場　山上ヶ嶽の岩窟

見下すと、忽ち目くるめきさうな、何百丈とも深さの知れぬ深い壑に向つて、天然自然の半懸空式（柱なし崖造り）の城郭ともいふべき如くに、今にも落ち掛りさうに、峨々たる岩山の一部が、ぬつと突出てゐる。處は山上ヶ嶽の一角。見渡す右と左には、目近く萬仭の絶壁が、崔嵬として天空に冲つて聳え立ち、正面のやゝ上手寄りには、極めて奇怪な形　の、滅法巨大な、殆ど小山ともいふべき大岩が、所謂崖造り柱無し城郭の天守臺ともいふべき見得で、是れまた今にも倒れかゝるかと思はれる格構をして斷崖に臨んで嶄然と屹立してゐる。さて、其大岩の裾は、突兀嶙峋と、不規則な、いかつい波形を成して、手前　方（舞臺の前面）へと蜿蜒し、其一部は六疊敷程　窟を形成つてゐる。窟の上手寄りは、一旦登つて又向うへ降るやうになつてゐる。半ば天然、半ば人工の加はつた石磴があり、又大岩の向うの裾に沿うて左手（下手）へは、天然の岩々胸壁や岩の襞が更に突兀と竝び聳えて、其胸壁の盡くる處に、何百年間風雪に窘められてちゞこまりひねくれた脊の低い老松が高く低く二木深谷に向つて生えてゐて、其のすぐ手前に麓への通路がある。それは、見るから如何にも嶮岨さうな危なさうな降口で松の根がたに太い藤かづらが結び附けてある。これは昇り降りの便宜にとて、人が加工したものらしい。一體に樹木は甚だ少ない。ひねくれた脊低の老松と少しばかりの灌木があちこちに生えてゐるばかりである。

窟は其地盤が平地よりはやゝ高く、總高さ一丈位ゐ、入口の高さは、やつと五尺ぐらゐ、間口は不規則にだらしなく擴つてゐて二間餘り、奥行は一間半ぐらゐ。奥へ入ると天井が低くなつてゐる。

千仭の斷崖の向う、溪谷を隔てた眞正面には、大天井、小天井の二峯がによつきりと屹立し、尙ほ其左手には、他のやゝ遠い山々が見えてゐる。窟の內部、やゝ奥に、淨衣を被て、角帽子をいたゞき、手に金剛杵を握つて、殆ど石の像かと思ふほどに、寂然と瞑目して、結跏趺坐してゐるのは役の行者である。齡は六十位ゐだが、頭巾の底から見える頭髪や長々と延びてゐる鬚髯は雪のやうに白い。が、身心共に剛健であるらしく、骨格は逞しく、筋肉は引締り、見るから如何にも矍鑠として日にやけた顏の色は壯者の如く赤らみを帶んでゐる。

行者の背後の岩壁は、ちやうど肩の處で、龕の樣に穿ち凹められ、そこに二尺ばかりもあらうと思はれる彌

勒菩薩の青銅の像が安置してある。それから行者の膝の前には小さい鐵の香爐があつて、香の煙が細々と立昇つてゐる。窟の一隅には行者の錫杖が立て掛けてあり、其脇には鐵齒の木履が方寄せてある。

窟の上り口の取附近く（平舞臺）に、斜に行者の方へ向いて手を膝下に結び、頭を垂れ、端坐してゐる若い男がある。韓國の廣足なのである。水に溺れた時とは異つて、肉附もよく、色艶もよくなり、頭髪は梳つて都風に結び、冠り物をいただき、一劍を佩び、都紳士らしい服装をしてゐる。既に久しく、端坐してゐたらしい。時は十月下旬で、時刻は午後三時過である。森閑として鳥の聲さへも聞えない。廣足は、ちやうど此時首を擧げて晷を見、さて行者の方をも見たが、やがて、膝を進めて、恭しく平伏し、徐かに口を開いた。

廣足　お聖行中を驚し申しましては、相濟みません儀にござりますが、先刻も申しました通り、都へ出立の時刻が、已に相逼つてをりまする故、失禮を顧ず、このたび上洛と決心いたしました仔細を、只今申しあげます。何とぞお聞届け下されませ。……其以前に、謹んでお詫びを申さねばならぬことがござります。先だつて、陸奥への御不在中、お留守居を承りをりまして、きつとお吩咐を相守るべき筈でござりましたのに、一旦の心得ちがひから、うか〳〵と御禁斷の西谷へ足踏みをいたし、それが爲に、あはや一命をも失はうといたしました不覺の段は、幾重にもお詫びを申しあげまする。何とぞお宥し下されませ。……しかし、聊か申しわけの一端とも存じますることがござります。水死を免かれました其當晩、さる百姓家に一泊いたしました處、忽ち大熱を發し、枕を能擧げませぬ十餘日間の身神惱亂中に、圖らずも一大妙光に接しまして、心眼頓に開け、はじめて尊師の御ン教へに體達すべき自得の一路をば發明いたしました。すなはち、其日より、界隈の者を集め、教化を試みまする傍ら、加持祈禱をもいたし遣しました處、效驗いちじるしく、僅か一月ほどの間に、難病平癒、懺悔改心の者數を知らず。畢竟これは、尊師の御餘光ではござりますれど、何卒これを一つの功に、前過をお赦し下されますやう、ひとへに願ひあげまする。さて、それにつき、更にお願ひがござりまする。うけたまはりますれば、今や都の風俗は、上下共に甚しく亂れ荒び、之を教へ誨むべき導師とてもなく、剩へ、近來惡疫流行し、病める者已に百人千人に及びますれども、之を癒す妙藥なく、加持祈禱、祓、大祓も何の驗なく、斃るゝ者日に加はり、物體なくも飛鳥の帝まで同じ御惱に罹らせられ、すなはち全國に勅令して、洽く治癒の靈法を求めさせらるゝと承り及びまする。つ

きましては、わたくし未熟にはござりますれど、尊師のお名代として上洛いたし、第一には主上の御惱を平癒させまゐらせ、第二には下萬民の身心二つの大患をば相救ひたいと存じまする。何とぞ暫時のお暇を下しおかれませ。……

斯ういつて更に、恭しく平伏したが、何の答へもないので、暫くして又額を擧げる。

まだお行が果てぬと見える。……

と獨り語を言つて、考へてゐたが、又一揖して更に語を繼ぐ。

又二つには、先年仲たがひをして相別れました父親、今は齢も老い、我も折れ、頻りに面會を求めをります由。今は父一人、子一人のわたくし、彼れをも慰め遣したく、かた〴〵上洛を思ひ立ちましたのでござります。……

と言ひ終つて又一度辭儀をしたが、何の返事もない。

あゝ、まだお行が果てぬらしい。(又空を仰いで、傾きかけたる晷を見てゐたが、いよ〳〵是非に及ばぬと思ひ定めたらしく、改めて一揖して)甚だ失禮ではござりますが、おひ〳〵日も傾きまする故、是非なくお暇いたしまする。いづれ程なく歸山致し、又お目にかゝりまする。おさらばでござります。御機嫌よういらせられませ。

廣足起上りて下手へ歩みつゝ、已に降り口に足を踏みかける。此時、行者は徐ろに眼を開き、印を解き、端坐したまゝで

行者　まて〳〵。

と靜かに呼ぶ。廣足直ちに見返り、「ハ、!」と言ひつつ、急いで元の處まで歸つて來て手を突き、平伏し

廣足　お行濟みにござりますか?

行者　(靜かに)主上の御惱を平癒させまゐらす爲に、都へ歸ると言ふか?

廣足　さやうにござりまする。

行者　第二には、下萬民が身心二つの大患を救ひたいが爲に、都へ歸ると言ふか?

廣足　さやうにござります。

行者　又三つには、親を慰めたい爲にと言ふか?

廣足　さやうにござります。

行者　ふゝむ! 近頃奇特なことぢや。……(暫らくの間默然としてゐたが)先刻聞いてゐれば、大發熱の最中に、一大妙光に接し、はじめて何事かを自得したといふたが、それは何ぢや?

廣足　さればでござります。お山を下りまする以前までは、尊師のお教へをば、只高い、偉きい、尊い、嚴しいとばかり、駭き仰ぎ、如何にして其絶頂に攀ぢ登り果すべきかと、手頼なさに苦み、已れ自身さへも疲れ弱り、當惑

し、かくては他人の教化なぞは、思ひも寄らぬことゝ失望いたしをりましたる處、圖らずも右熱病の發作中に、いづこともなく神の御ン聲聞え、「治く下根の衆生をして師道に追隨せしめんとならば、別に一易行道を開け」といふ尊いお告げに接しました。

行者　ふゝむ！　して其易行道とは！

廣足　師は常に、萬人一樣に、「人は飽くまでも直ちに活き神とならんことこそ願へ。二六時中、寸時も金剛藏王の忿怒の御像を眼中から離すな。本來空の利劍を眞ッ向に揮り翳して、我執貪著の妄想を斫拂ひ／＼、あらゆる苦行荒行に肉體を微塵と摧き、一心不亂、勇猛に、只驀地に精進せい」と教へさせられます。悲しい哉、末世下根の衆生は、餘りに神に遠くして、獸に近く、隨つて御ン教へをば或ひは怖れ、或ひは忌み、ます／＼向上の緣に遠ざかりまする。是に於て之を救ふの方便として、わたくしは、先づ神獸は一如と說き、必ずしも人の獸に似たることを咎めませず、むしろ獸の天性を礎に其處に神の靈德を築き成す、是れ行者道の第一門と、斯樣に教へましてござりまする。

行者　ふゝむ！　半神半獸の何方つかずぢやの。……獸類の天性を、生れるや否や仁義道德といふ檻に收れて飼ひ馴らし、だん／＼に矯め直さうとするのが唐人共の所謂中和の道ぢや。それさへも、たかゞ「人間」を作るの道で、「神」となる道ではない。汝は、獸類の天性のまゝを礎にして、其處に神の德を築かうとする。それは馴らしもせず、鎖にも繫がずして、虎、狼を飼はうとするやうなもの。汝の分際で、その考へを持すれば、つまりは獸類らの餌食と成り了はるまでぢや。「神獸一如」なぞとは虎を暴にする力量ある者の言ひ得べきこと。汝なぞには叶はんことぢやわい！

此時上手の奧、深溪の方に當つて、例の山鳴りがはじまり、次ぎの問答の間にだん／＼激しくなる。行者ちよつと聞き耳を立てる。

廣足　（少しく激した體で）　師のお言葉ではござりまするが、師の平生のお教への如く、強ひて性を矯め、情を殺し、ひたすら肉を滅盡する「力」をのみ養はせまするは、とても今の凡俗の堪へ得ることではござりませぬ。よし「力」だけは得まするとも、それは只、冷い、酷い……

と言ひかけると、行者は靜かに併し手強く遮つて

行者　默れ！　末世の迷妄を根本から打ち毀さねばならん時には、先づ「力」ほど大切なものはないわ。「力」の伴はんものは、皆無用ぢや。力の伴はん慈悲、力の伴はん深切、力の伴はん諫爭、力の伴はん勤行、皆無用ぢや。

汝の如きは、何の自力も無い癖に、あちこちの力をば借り集め、或ひは盗み集め、綴くり合せ、我力の如く見せびらかし、或ひは之を以て其不所行ゝ分疏となして非を偽る。堕落の捷徑に過ぎぬ二岐路をば、予が教への易行道なぞとは、……こゝな僭上者めが！……

突然の一喝に、今までは得意さうにしてゐた廣足は、覺えず「ハッ！」と平伏する。行者は徐ろに立ち上り、錫杖を取り、鐵齒の屐を穿きて窟から歩み出てながら

小智慧の働く凡俗は、とかく小理窟に長じ、目前の利害に敏く、足下鼻先が見え過ぎて臆病になる。まして汝は、氣位ゐの高い割に根性は柔弱ゆゑ、おのづと言行に表裏矛盾が生ずる。それを又名聞が手傳うて、強ひて正當らしう取繕はうとするによつて、いよ／＼自悶自欺に墮する。笑止千萬な奴ぢや！　はじめから予とは緣のない奴とは思うてゐた。もうよい、歸れ。呼び返したのは、都へ歸るのを止めようが爲ではない。かりにも弟子にした奴ゆゑ、これだけを餞に與らしたのぢや。

斯う言ひすてゝ、行者は窟の右手の半天然の石磴の方へ行かうとする。廣足は急に之を止めて

廣足　これはまた御無體なおつしやりやうでござります。言葉に表裏があるとは、あんまりなお叱り！　最前お詫び申しました事の外には、何一つ御戒律を破つた覺えはござりません。殊に、諸方から借り物の教へを以て非を飾り、ふしだらの言ひわけにいたすなぞとは、覺えのないことでござります。聊か自得の卑見を加へて、御ン教へを和げましたは、一へに道の爲、君の爲、世の爲にござりまする。

行者　默れ！　何一つ戒律を破つた覺えはない？　破る勇氣があればまだしも、破りたうても能う破らず、何がな破る口實をと臆病な小智慧ばかりを働かす、それをば外道中の外道といふわい！　やい、汝があの西谷で、獸神の呪ひを聽き、其の顛倒の邪見に惑うて心を動かし、かくて次第々々に外道に蹈み入つたことを、おれが看破らんでゐると思ふか？……

廣足　えゝ！

窮處を突かれたらしく、忽ちはつと頭を下げる。

行者　神獸一如なぞと、口がしこう說きをるが、畢竟は、あの獸神につい誓約をしをつた爲、拔き差しならず、また二つには、おのれめが憍慢と名聞との爲さする業ぢや。……何一つ戒律を破つた覺えはない？　如何さま、汝は、里に留まつてゐた間は、外形の上では、悉く五戒を保つた、鎖で繫がれた飢ゑ犬が、鼻の先きの腥さ物を能う食はなんだやうに。これ、已に心を動かした位ゐな

ら、なぜいつそ思ひ切つて獸神に從かぬ？　生溫かい女の手で撫で擦らるゝをなつかしみ、熱病に罹つたを、內々は心に喜び、しかも口先きでは聖行を說く、其いぢけた根性が淺ましいわい。笑止な奴ぢや！……

うつむいてゐる廣足の姿をつく／＼眺めて

其服裝を見い。行者が都へ登るに、何の爲の其の晴れ衣裳？……心に問うて、恥かしいとは思はぬか？……

廣足はじつと頭を垂れてゐる。山鳴りおひ／＼激しくなる。行者は二足ばかり行きかけたが、また立停り

末世の惰慢な、剛情な衆生を敎化するに、生溫い中和の道なぞは役に立たん。殊に訌はしいは汝の唱へるやうな似而非中和ぢや。神となるを誓願とする行者道は「力」を本體とする。獸でも「力」を極めれば、神に近づく。汝は、初めから神には緣なく、眞人間でもなく、全くの獸にもなれん奴ぢや。早く都へ歸り、正しい中和の道でも蹈んで、せめても眞人間になれ。……笑止な奴ぢや！

言ひすてゝ行者は石磴を登らうとする。廣足はあわてて追ひ縋り、其の袖をひかへて

廣足　あゝもし、どうぞ暫くお待ちなされて下さりませ。恐れ入りましてござりまする。只今の御嚴訓で、何もかも、夢と醒め、恥ぢ入りましてござります。成程、わたくしは臆病者でござります。名聞の餓鬼でござります。何もかもわたくしの思ひあがつた惰慢な心からの過ちでござります。都へ歸るのは思ひとゞまり、以後は全く別人と生れ變り、一心不亂に修行いたしまする。改めてお弟子になされて下さりませ。どうぞ此のたびだけは……

とだん／＼涙聲になる。山鳴り少しくしづまる。

行者　離せ。

廣足　こんどだけは、何とぞ！　もう決して二心は抱きません。お腹立ちは如何にも御尤もでござりますが……

行者　離せ。……腹を立つだけの緣はないわ。……離せ。

袖を拂つて行かうとする。又追ひすがつて袖を捉らへる。行者獨鈷杵を擧げて、輕く一喝する。と廣足は、忽ち袖を離し、うんと言つたぎり仰向けに倒れる。行者は悠然として見返りもせず、石磴を登らうとする。途端に、其の岩坂道の向うの降口（卽ち大岩の上手の裾、窟の背後）へ、前鬼が忽然として上半身を現した。さうして

前鬼　大變でござります！　大變でござります！

と叫んで躍り上り、やがて忽ち、立停つた行者の前へ駈けおりて來て蹲踞つた。

行者　（靜かに）　葛城めが山へ入り込んだか？

前鬼　（息を切つて）　さよでござります！　葛城の女主めが、今までとはちがつた凄まじい勢ひで、つい今がたお

山へ入り込みました。

行者　（靜かに）よし／＼。

前鬼　（なほ喘ぎながら）越の地獄谷の硫黄淵で、四十九日四十九夜、惡魔王になる行をしをつて、業通が自在になりをりまして、日の光りをも怖らず、さゝへる精靈らを追ひ散らして、もう西谷の御封鎖をも破りましたぞや。もう西谷の間近まで來てをります。迚もわしらの行力では防がれません。早うござつて、親子とも御呪縛して下され。一言めも、けふは元氣づいて、えらい力を出しをります。つい今も大きな枝を壓折りました。……

又激しく山鳴りがする。

あれ／＼！　また荒れ出しをつた！　あれ／＼！

行者　騷ぐな。大丈夫ぢや。見廻るから、從いて來い。

行者は徐かに先きに立つて、石磴を登り了り、降り口へ姿を消す。前鬼も從つて登り、やがて同じく見えずなる。

山鳴りは次第に薄くなりながら、次ぎの獨白の間も續いてゐる。倒れてゐた廣足がやつと身を起す。顏色蒼然として、半分死んだ者のやうである。横くねりになつて、意氣地なく首をうなだれたまゝで、長い溜息をして

廣足　「憍慢な癖に柔弱な根性！」……「何の自力もない癖に、あちらこちらから、いろ／＼な力を借り集め、盜み集め、綴くり合せ！……」……あゝ、何といふ淺ましい人間ぢやおれは！……成程、おれは眞人間にさへも成れん。中和といふことが恰ど眞ン中の道といふことなら、其の道もおれには行かれん。思ひ切つて險しい行者道に、師匠に見棄てられた上は、もう迚も及びもないことぢやが、程よい、眞ン中を辿るといふことは、なほ以ておれには出來ん。と言うてまるきり獸類になり下つてしまひたうもない。あゝ、どうしたらよからう！……

此獨白の中頃に、正面大巖の左の裾に突如として、前幕の女怪――葛城の神――が其裸形の上半身を現す。例の赤黑い丈程の頭髮を獅子の鬣の如く額に肩に振り亂して、巨きな口を開き齒を露して、にやりと物凄く笑つたと見る間に、忽ち巖蔭へ姿を隱す。

五年以前、怨めしさと恥づかしさと悔しさとの餘りに、思ひ切つて發心してくれうと思うた其の間際には、古への勝者たちにも、何の、決して劣るまいと思ひあがつてゐたのに、どうしてこんな意氣地なしになり下つてしまうたか？　行者のいはれる通り、本來が名聞氣からであつたのか？　世の爲、人の爲と思うたのは、其の時も、先刻までも、自分で自分を欺いてゐたのであつたか？……「戒律を破る勇氣があればまだしも！」……「生溫かい

女の手で撫で擦らるゝをなつかしみ！」……あゝ！……

急に兩方の手で頭を抱へて、忽ち其處に臥し轉びて、暫らくは苦悶に堪へかねた體であつたが、やつと又顏を擧げて

あゝ、自分をすら欺さうとするとは、何といふ淺ましい！あゝ何といふ淺ましい！……

斯ういつて、しきりに頭を掻き毟つてゐたが、暫くして

あゝ、どちらが本當の自分だか、分らんやうになつてしまうた！　あゝ、どちらが本當の自分だか！……

ふと自分の服裝に目を附け、更に身邊をつく／″＼見て、師の行者の口吻で

行者が都へ上るに、何の爲の其晴れ衣裳！　心に問うて、恥かしいとは思はぬか?!

又急に苦悶の表情をして、うつむき、暫くは無言でゐたが、やゝあつてもう煩悶する氣力さへもなくなつたがやうに、悄然となつて

今さら都へ歸られもせず、……此上は死ぬより外に爲樣がない。……とはいふものゝ、何か知らず、目に見えん不思議な絆で、後ろ髪を引き止められてゐるやうな氣持がして、どうかしてもつと生きてゐたい。……死にたうない。……生きてゐたい。

此獨白の切れる途端に、瀧への降り口の手前の、通路のありさうにもない絶壁の間から、忽然として一人の村娘が走つて出た。

第一幕に見えた一軒家の姉娘のヒツヂである。肌の色も、あの時よりはずつと白く美しくなり、服裝も晴れ着らしく華美である。それにも拘らず、籠を脊負ひ、手に小鎌を持つてゐるのを見ると、山仕事の途中であるらしく、無雜作に束ねた頭髪の根元には、燃えるやうに紅葉した楓の小枝を挿してゐる。で、先日よりは、ずつと妖艶に見える。娘は廣足の傍へつか／″＼と駈け寄つた。

娘　あゝ、嬉しや／″＼！　もし逢へなんだら、どうせうかと思うたに、あゝ嬉しや、嬉しや！

取り縋つて、もう嬉し泣きに泣いてゐる。山鳴りが止む。

廣足　や、おぬしは！　どうしてまアこんなところへ?（娘の顏を見、又四下を見廻し、夢ではないかと思ふ樣子で）どうして此――女人禁制の――おそろしい處へ?

娘　（すゝり泣をしながら）どのやうに待つても／″＼、瀧へは降りてござらつしやらぬゆゑ、さては久しいこと里に逗留してござつたので、行者さまが腹を立てなされて、それできつと怖ろしい折檻を受けてがなござらつしやる

のであらうといふ皆の噂。わしや悲しうて〳〵、身も世もあられず、それで家の者へは、つい山へ仕事に行く言うておいて、怖いものを忘れ、木の根や藤蔓を傳うて、やつと登つて來ましたのぢや。……ま、その顏の色は！　きつい折檻に逢ひなされたのぢやな。え、大事ないかえ、大事ないかえ？

　おろ〳〵して肩や脊を撫て擦るを廣足は止めて

廣足　大事ない〳〵。もうどうもない。折檻されもせん。併し……俺やもう穢れ者になつてしまうた。悟りを開いたと思うたも、みんな迷ひ。自分で愛想の盡きた此身、行者殿には勘當受け、此山にはをられず、今さら都へは歸られず、どう考へても、もう生きてゐられやうがないによつて、俺やもう死ぬより外に爲樣がない。

　如何にも力無げに萎れてゐる。

娘　ま、めつさうな！　行者さまに勘當されたからいうて死ぬには及ばぬ。世間は廣い。都へ歸らずとも、山に居ずとも、他に生きてゐやうは幾らもあるぞな。

廣足　いや〳〵、他に生きてゐやうはない。

娘　あるがな〳〵。ま、わしの家へござらつしやれ。お父さは村で指折の人ぢや。田地も澤山あるによつて、お前が一生泊つてござらつしやつたとて、苦にやせぬぞな。

廣足　たゞ生きてゐるだけでは生き甲斐がない。眞人間にもなれず、獸類にもなれず、神にもなれず……

娘　（俄に男のやうな調子で笑ひ出し）はゝゝゝゝ！　人が神さまになれんのは知れたことぢや！（徐かに身を退いて立上りながら）眞人間にもなれんたら言ひなさるけれどなア、斯うしてお互ひのやうにして交際うてゐるのが眞人間ぢやないかえ？　何もわざとらしう獸類にならいでもえい。なア、神さまにならうといふ迷ひさへなけりや、いつでも人は眞人間ぢや。（立ちながら俯向いてゐる廣足を見おろし、傲然と）お前は神といふ名前に迷うてゐるのぢや。

廣足　（俯向いたまゝで）あゝ、名前に！……行者もさう言はれた。あゝ、おれは名聞の餓鬼ぢや！

娘　（小鎌を玩具にして、あちこちと歩きながら）えらい人間と言はれうが、神さまと言はれうが、そんな名前が何にならう？　とりわけ、こんな豆粒のやうな小さな島國に殘す名前が何にならう？　惡い事をしても、口を拭うてゐれば、浮き名も立たず、控へ目にしてゐれば、村の頑童までが泥礫を抛げつけをる。善い名も一時、惡い名も一時ぢや。名前が何にならう！　臆面せいで面拭うて出歩いてゐりや世間の方で忘れをる。世間は案外に寛大なものぢや。（屈んで、後ろから廣足の肩を抱いて覗く

やうにして）なア、思ふ存分に生きてこそ、生き甲斐があるといふものぢや。世間を憚るには及ばんがな。お前は意地が足らん。意地をば張りなされ意地を。他が右へ行きゃ、左へ、前へ行きゃ後ろへ、とりわけ名の聞えた行者のやうな奴の逆に〳〵と行きゃ、それが取りも直さず、名を揚げる元にもなるがな。

廣足　いや〳〵、邪は正に勝たれん定りぢや。行者どのは、世を救ふため、衆生を濟度する爲にせられるのぢや。それぢやのに、おれが若し私慾の爲に――二年ごし師匠と崇めて、いろ〳〵教へを受け、恩になつてゐたのに……

娘　（いかにも輕蔑したやうに）世を救ふ爲ぢや！　何のあれが世を救ふ爲であらう！　酷い、我強い、高慢面が、自分勝手の遊び仕事！　出來そこねたあの岩橋が何になる？　自力で難所を越せばこそ修行ともなれ、他力で架けた橋は大きな外道ぢや。まして半出來の橋が何にならう？　彼奴、我を通したいばッかりに、衆生濟度を言ひ立てに、愚民を惑はし、道にも理にも合はん酷い、苛い訓け方をしをるによつて、一人として隨いて行き得た者はない。あれは心をも身をも殺す教へぢや。あのやうな邪教が何にならう？　あいつは十七で山入りをしたといふが、それが眞實なら、浮き世の味の酸い甘いを知る暇がなうての悟り三昧ぢやによつて、思ひやりが無い筈、酷い筈、邪怪な筈ぢや。

廣足　（首を垂れたまゝで）とはいへ一旦師匠として恩を受けたあの行者に……

娘　恩を言や相身互ひぢやがな。お前は、つい先頃までは、彼奴の爲に水を汲んでやつたり、薪を拾うてやつたりさつしゃれたであらう？　なりゃ此方からも恩を掛けたのぢやがな。（頬が摺れ〳〵になるほど顔を寄せて）お前は氣が弱いによつて、今の自分を責め、過去の自分を責め、濟まん〳〵とばかり思うてぢやが、穴ぐり立てをすりゃ世間に疵のない人間は、只の一人もありゃせぬぞな。悟り顔のあの行者とても、若い時分には、何をしをつたか知れたものぢやない。今ぢやとて、保つてゐるのは、たかゞ五戒ぢや。が、まだ枯れ木のやうに朽ち果てゝしまうた齡でもないによつて、其の五戒さへも（と言ひかけて窟の方を見返り）試して見んうちは當にはなりゃせん。

娘が幾ら勵まして見ても、廣足は萎れ果てゝ、更に勇氣を出しさうにもない。

廣足　いや〳〵、おれゃどう考へても、本當の人間にもなれず、神にもなれず、獸類にもなれず、都へも歸られず、生きて行く便宜もないによつて、死ぬより外に爲様はない。

娘の表情や態度が、又元の村娘に戻つて

娘　眞の人間、眞の人間と言ひなさるけれどなア、眞の人間ぢゃて、僞の人間ぢゃて、百までとは生きらりゃせんぞな。生きるのは何もむづかしうはない。食うてゆかるれば生きてゆかるゝ。夫婦親子が仲よう暮すことが出來りや、一生面白うも樂しうも過せるぞな、もし。わしの家へござらつしやれ、なア、わしの家へ。わしゃお前の爲なら、死んでもかまやせんぞな、もし。なア、もし。……なア。……

娘は廣足に寄り添うて、優しい、柔かい小さい聲で、頰を摺り寄せ耳こすりするやうにして口說く。廣足は次第に夢を見てゐるやうな心持になる。娘は立上つて麓への降り口まで行き、振返つて、手招きする。と廣足は、目を閉いだまゝ、ふら／＼と立つて、娘の方へ行く。娘は降り口を降りながら、又招く。娘の頭が見えなくなる。廣足は尙ほ目をふさいだまゝで、これも降り口を降り、見えなくなる。

又山鳴りが聞えはじめる。

窟の後ろの石礎の登り口へ、ちらり行者の角帽だけが見える。が、行者は直ちには登つて來ない。やゝあつて全身を現したのを見ると、先刻のやうに元氣ではなく、氣分でもわるいか、錫杖を力に、徐ろに降りて來て、窟に近づき、暫く其入り口に身をもたせかけて、立停つた。顏の色が著しく變つて、蒼白く見える。やがて太い溜息をして

行者　千里の外を透觀し、百年の末をも察り知る我が此心眼が、何として今日ばかりは暗んだるぞ？　愛惜の絆を絕ちかね、已に先頃も我が不在中に、一たびこゝへ尋ねて來て、空しく立歸られた我が老母が、けふ又最期の病ひを押して、はる／＼尋ねて來られようとは、今が今までも氣が附かなんだ！（と徐ろに立直り、やがて印を結び、暫く瞑目してゐたが）むゝ！　はや山腹まで辿り着かれた。……いたましい老いの姿！……目は盲ひ、腰は弓と曲つて、明日までとは持たぬ病體！（と言つて目を開いて）恩愛の血は枯木の液と乾き果てゝ六十をも越えたる俺を、まだ故の通りいたいけな乳呑み兒でゝもあるかのやうに思うて、川を渉り、山を越え、病苦をも打忘れ……（又暫らく目を閉ぢ）あれ、あのやうに、瑞齒ぐむまで老いさらぼひ、定命旦夕に逼つた身で……

と言ひかけて、覺えず目をしばたゝき、兩眼からはらはらと落淚し、遂に堪へかね、右の手で半面を掩うて、聲は出されど、しばらくは嗚咽してゐるらしかつた。が、やがて愕然として心附いた體で、兩眼をくわつと見開き

や！　どうして此の心に隙間があつたぞ?!　一切の塵緣を斷滅し、あらゆる恩愛を棄て、悉く無爲に入つて、金剛不壞の大誓願に住するおれが！　山の主をも魑魅をも自由自在に驅り使ふおれの心が、なぜけふばかりは動搖き騷ぐぞ？……あゝ母！……あゝ、母といふ假りの相に！

行者は、又よろ〳〵とよろめいたが、やつと踏みこたへて、窟の前の岩角に腰を掛け、なほ額に手を加へたまゝ、俯向いてゐる。山鳴りなほ低くなりながら續く。と、麓への降り口の、老松の根がたへ、突然一個の目の覺めるやうな美女が、藤蔓にすがつて徐ら其の半身を現はした。やがて杖と藤蔓とを力に辛うじて岩路を登り了つて一休みして、なほ微かに喘ぎながら此方へと進み來る。天女かと思ふ程に艷麗な、氣高い都美人で、飛鳥の都の朝廷などに仕へてゐる采女でゝもあらうかと思はれる。其服裝は所謂天平式の格外に出でたけば〳〵しさではあるが、極めて品よく、襟のあたりや腕首には、金銀珠玉の目も文な飾りまでも附けてゐる。齡は十八九。窟近くへ來ると、やゝ早足に進んで、忽ちはたと膝まづいて、行者に向つて恭しく禮拜した。心附かずに居たらしい行者は 此時はじめて 頭を擧げて、きつと凝視したが、やがて少しく姿勢を正し、無言のまゝ半眼に見おろしてゐる。女は哀れな涙の聲で

美女　お助け下さりませ！　お助け下さりませ！

と言つたきりで暫く泣いてゐる。

行者は次第に寂然となつて、いつの間にか瞑目してしまふ。山鳴りもいつしか止んで、天地ともに闃となる。

女は又口を開く。

行者さま、どうぞ妾をお助け下さりませ！　人間の榮華や恩寵はほんたうに春の花の一時よりもはかないものぢやといふことを、身にしみ〴〵と思ひ知つた者でござります。此の黑髮を根元から切り拂うてしまうて、全く男となりまして、如何な捨身の難行苦行をも積んで、活き神の行者さまに一生お仕へ申す覺悟をして參つた者でござります。活き神さま！　活き神さま！　罪障の深い女人の中でも、とりわけて罪障の深い妾でござります！　お慈悲でござります。どうぞ〳〵、お助け下さりませ！　どうぞ、どうぞ！……

折々嗚咽するので言ふことがよくは分らない。行者はやつぱり瞑目してゐる。美女はだん〳〵行者の傍へ摺り寄つて來て、泣きながら、とぎれとぎれに言ふ。

十六の秋から今年へ掛けまして、まる三年の間……帝の御寵愛を受けまして……玉敷きの大宮きつて、並ぶ者もない榮華の身の上となりましたのが因果となり、それは

それは口にも言葉にも言ひやうのない、辛い／＼苦患を受けました。……それが爲に、今さら悔んでも歸らん罪業をも犯しました。怖ろしい他の妬みの焔ほが、晝となく、夜となく、此の身を焚き、讒言の鋭い刃が此の胸を抉り、……寃の罪に、たつた一人の……たつた一人の母をも殺され……我が身の危かつたことも、幾たびか、……其の怨みやら、身の爲やらで、つい悪い心が起り、此の手をこそ汚され、怖ろしい企みごとに大勢の血を流させました。……わるいことをいたしました。……未來が怖ろしうござります、ゐても立つてもをられません。……罪障の深い身を、どうぞ御不便におぼしめし……お弟子になされて下さりませ。……此の苦患をお助けなされて下さりませ！

　女は又泣伏してしまつた。此の時例の麓への降り口の下て、けたゝましい鈴の音がすると同時に、「行者さま！　行者さま！」とけたゝましく呼ぶ聲が聞え、程なく一個の怪物が半身を現す。これは後鬼なのである。手には鐸を持つてゐる。

後鬼　行者さま／＼！　ひよんな事になりました！　早う來て下さりませ。お吩咐通り、早速お傍へ參りまして、お侶の剛力に憑つていろ／＼とおだまし申し、お袋さまを麓へお連れ申さうといたしますうちに、何にせい病みほゝけてござらつしやるゆゑ、旅疲れやらお歎きやらで、だしぬけに氣絶してしまはつしやりました！　早う來て下さりませ。早う！　早う！

　かう言ひすてゝ、また忽ち姿を沒した。端然としてゐた行者の體がゆれはじめた。其面上には苦痛の影が浮んだ。泣き伏してゐた美女はそつと顔をあげて、行者の顔の色を窺つた。

美女　なアもし行者さま！　活き神さま！　母御樣とても女ぢや。なアもし、母御さまをいとしうお思ひなさるゝお慈悲があるなら、同じ女の性を受けた妾でござります。不便がつて下さりませ。せめて今日だけなりと、お傍において下さりませ。……もし／＼。……

　行者の膝に恐る／＼手をかけてゆすぶる。行者の顔に苦悶の色が見える。

母御さまも女なりゃ、わたしも女ぢや。同じやうに、假りに此の世に生を受けた女ぢや。何が違ふ？　どう違ふ？　つれなうなさるのは不道理ぢや。もぎだうぢや。理が通らん。無理ぢや。無理ぢや。無理ぢや！　無理ぢや！……

　又つゝ伏してヒステリー的に泣き出す。行者の顔の苦悶の色は、やうやく消えて、次第に端厳の相が加はる。たゞ顔の色だけは平生とは異つて眞蒼になつてゐる。

女をば不淨な者ぢや、汚らはしい者ぢやと言ひふらしな

された釋迦牟尼佛さまが怨めしい！　何が不淨ぢや？　男と如何ちがふ？　如何劣る？　男には己れ一代を作り變へる力はあつても、新しい代を作る力はない。世の中に女が無かつたら、新しい世は生れん。人を生むも育てるも導くも、みんな〳〵女の力ぢや。それなりやこそ慈悲を司る菩薩たちは、どれも〳〵女相ぢや。なア、もし、こなたがまだ幼稚けなお兒さんであつた頃は、雪霜の降る冬の夜半も、わが身を忘れて抱きかゝへて、いとしがり、ぬくめたは、（と言ひながら襟元をくつろげて）これ此滑滑な、柔輭な肌ぢや。なア、――これがこなたの懷かしがつてお吸ひやつた乳ぢや、――此ふくよかな、ぬくい、柔い乳は、取りも直さず母御さまのおやさしい面影ぢや。世の中にこれほどなつかしいものが又とあらうか？　女人の肌を男子が慕ふのに何の不思議がある？　幼い頃の最ち懷かしい思ひ出はこれぢや。命にも易へる浮世の最上の歡びはこれぢや。（今までの氣高さがいつの間にやら消えて、目にも口附にも姿態にも、人を蕩かす妖艶の氣のみが溢れてゐる）榮華も權勢も名譽も富も健康も、此歡びがなかつたら、何の生きてゐる甲斐があらう？　幼い時か、春を知る頃か、浮世の艱みに疲れた頃か、いつか一度一生中に、女人の情けの有り難さを思ひ知らん男があらうか？　なア、悟るに四季は無い。正覺成道は七十八十になつてからでも晩うはない。此の歡びには季がある。其の季を逃いたら、もう二度とは來ん！……此の歡びを知り盡いて、さうして捨てゝこそ本當の悟りぢや。……の！　こなたは存外に弱いお方ぢやなア！　これ、此肌を見ては悟られぬかいな。此手に觸つては氣が散るかいな。……なアもし。……なア。……

又行者の膝に手を掛けて狎れ〳〵しくゆすぶる。行者は寂然として、まるで石の像のやうである。

えゝ胴慾ぢや！　これほど事をわけていふものを聽いてくれん！　何たる酷い人ぢや！　あゝ、悲しや！　悲しや！（狂人のやうになつて）あゝ！　わしゃもう氣がちがひさうぢや！……あゝ！……あゝ、わしゃ氣がちがふ！　氣がちがふ！……

だしぬけに躍り起きて、そこらを走り廻る。其うちに黑髮は自然と解けて、亂れた絲のやうになる。我れと我が被てゐる物を引きちぎつては拋つので、腕や胸や脛の邊は半ば露はになる。やがて又行者の傍へ走り寄つて、その前後左右に顚倒し輾轉して、或ひは媚び、或ひは戯れ、或ひはしなだれ、狂態の限りを盡くす。

えゝ、此憎い〳〵活き神さまめが！　怨めしい、もぎだうな活き神さまめ！　なア、これ、せめてもわしの冥加の爲ぢや。さ、活き神さまの手で此の手をば握つて下さ

れ。さ、ちよつと握つて下され。あゝ、せめて其の蒼い、尊さうな頬へ觸りたい。(兩手を行者の肩へ掛けて)さ。おゝ、石佛のやうかと思うたら、あゝ嬉しや！　やツぱり温い血が通うてゐる！　さ、冥加の爲ぢや、活き神さまの息を此の口へ吹き込んで下され。さ、此の口へ！

　此時までは寂然と石の像のやうになつてゐた行者が、今脣をさしつけた妖婦の體へ、其の手を觸れたかと見る間もなく、女は二三間此方へ忽ちころ／＼と拋げ出された。が、すぐに猫のやうに、ひらり中返りして起き上つて、猛然として飛びかゝらうとする。と、行者はすつくと立上つて、大きな聲で

行者　喝!!……邪神めが！

　妖婦は、くる／＼と居どこで三度ばかり獨樂のやうに廻つたが、廻り止まると身を飜し、飛ぶやうに例の崗壁際まで逃げ、岩櫓の上に突立つて髪を逆立て、口を開き、眼を瞋らし、肘を張り、身がまへして行者の方を見返る。行者は言葉鋭く

あざとい己れなぞの業通で惑はされる行者と思ふか？たつた一疋の白蟻を這ひ込ます穴からも雲に冲る喬木が朽ち倒れる。たつた一筋斷ち殘いた「母」といふ執着の目に見えん鐵線にからみつかれて(大息をつきて)五十年を一日のおれの行の息の根が、すんでの事に縊られうとした惱亂の隙に乘じ、おのれ、大膽にも邪婬を勸めて、堕さうとしをつたな。おれの顏色に苦痛の見えたを、おのれが誘惑のきいた故と思ひをつたか、おろか者め！ありや大正覺、大成道の最後の産苦ぢや！　たつた一重殘つてゐた最後の執着の生き皮を、此の魂ひから剝がるる苦悶ぢや！　喝!!

　女怪は只一聲岩を突裂くやうな苦叫を發して、忽ち千尋の谷間を目がけ、身を飜して躍り入つてしまつた。

　行者は更に大息をつきて

天上天下只一つの大いなる「我れ」あるのみぢや！　不滅不增、絕待常住の「我れ」あるのみぢや！　彼れ我れと別つ我れはない。人間も無ければ、禽獸もなく、鬼神もない。母もなければ子もなく、男もなければ女もない。善もない、惡もない、生もない、死もない。たゞ有る者は大いなる「我れ」の力ばかりぢや。(ふと窟の方を見て)むゝ、あれぢや！　あれが俺の魂ひの息の根を縊らうとしたのであつたわ！

　つか／＼と、窟の中に入り、内に安置してある彌勒菩薩の青銅像を持つて出る、如何にも輕々と。

　日が暮れかける。

末世憍慢の衆生は、ひとへに顚倒の邪見に着して、相批議し、相誹謗して止まんのを、智慧で化度せうとするの

は、底無しの井戸の溺死人を我れもそこに躍り込んで救ひ上げようとするやうなものぢや。……況んやこんな柔和な御相では、我慢剛情で乾固つた濁世の人間を濟度することは思ひもよらん。智慧と慈悲とに於ては無能勝と崇められなされる彌勒菩薩どの！　お前さんを俺の本尊佛と心の奧の龕の内に祀つておいたのが、たつた一つ拂ひ殘いた魂ひの埃であつたのぢや！　廣足めの小才覺を叱咤した其の口の下から、生中の慈悲の爲に、智慧の爲に、あぶなく自分を欺くところであつた！　あゝ、もう慈悲もない、無慈悲もない。たゞ有るものは大いなる「我れ」の力ばかりぢや。……

手に持つた彌勒佛を捨てるやうに地上に抛つ。又山鳴りがはじまる。

麓に當つて角を吹鳴らす音がだん／＼高く聞える。此の時麓への降り口から韓國の廣足が再び登つて來る。服裝は先刻と異ることもないが、心の作用に何か變化があつたらしく、蒼かつた顏色も常に復し、得意さうでもないが、不安らしい體も見えぬ。行者の前まで來ると、恭しく跪きて敬禮する。

行者は立つたまゝで徐ろに見返り

行者　おれにはもう緣のない奴、何しに來た？

廣足　御勘當のお詫びに參つたのではござりませぬ。……幾たびも迷ひに迷ひましたる末、先刻再び妖魔の爲に、あはや誑惑せられようといたしましたが、きびしい御敎訓を受けました餘德によつて、辛うじてそれを脫れ、いよ／＼眞人間になることを目的に、都に歸らうと決心いたしました。それゆゑ改めて、お暇乞ひにあがりましたのでござります。……一つは又、聊か御恩返しがいたしたい爲でござります。

行者　何ぢや？　恩返しぢや？

行者は徐ろに傍らの岩に腰を掛ける。廣足は跪いたまゝでゐる。

廣足　先刻さる妖しき女に誘はれ、夢心地にて麓へ下りまする途すがら、師のお身の上に、思ひがけない御災厄が逼り居りますることを傳聞りました。何者の讒訴にや、師が此お山に籠らせられたは、畢竟日本國を魔界となさん逆心あつて帝を調伏の爲なり、云々との讒言。二つには多年邪法を修し、愚民を誑惑するの罪とござりまする。程なくこれへ討手の者が押寄せ參りませう程に、片時も早くお立退きなされませ。

行者　それを知らせるのを、恩返しぢやといふか？

廣足　いや、それればかりではござりませぬ。只今あらためて登山いたしまする途中、圖らずも師の母御樣にお目にかゝりました。堪へがたい御愛惜の餘り、甚だしう病み

疲れさせられた御老體におはしながら、剛力に扶けられ、已に麓から殆んど三里ほども登らせられましたるところ、險岨に悩み、御病氣募り、九死一生の御ン有樣。ちやうどわたくし參り合せ、御介抱申しあげ、取りあへず但有る樵夫の假り小舍へ一先づ御休息おさせ申しては參りましたものゝ、最も心懸りに存じまする事は、はや其の近邊まで討手の近づきをりますることでござります。萬一にも母御さまをば彼等見附けませうならば、御ン大事にござります。必ずや母御樣を人質となし、否應なしに師を捕へようと致すに相違ござりません。前鬼、後鬼にお命じあつて、御猶豫なく、南口から母御さまをお落しなされ、なほ尊師にも早速御下山なされますやう、ひたすらお勸め申しまする。討手は已に四方八方を隙間なく取圍んでをりまするゆゑ、師御自身の御法力で御擁護遊ばさねば叶ひますまい。

　廣足は言葉せはしく述べ立てたが、行者は自若として、更に色をも動かさない。

行者　大誓願を立てゝ此の山に登つた俺ぢや。其の本願の成就せんうちは、どんな事があつても下山はせん。

廣足　では、母御さまの御一命にかゝはりましても？

行者　（儼然として）　おれには母は無い。有るものは大いなる「我れ」の力ばかりぢや。

　暫くは雙方無言。角の聲が殺氣を帶んで聞える。

廣足　成程、行者道からは、さやうに仰せられまするのも、御尤もでござりませう。では、是非に及びませぬ、これにてお暇をいたしまする。（と立ちあがり、行きかけたが）が、御安心なされませ、幸ひ都へ歸りまする廣足、御恩返しの爲に、竊に母御さまを御介抱いたしまして、討手の兵士らの目を眩まし、何とかしてお落し申しませう。おさらばでござります。

　廣足行きかける。

行者　（手強く）　待て！……無禮者めが！

　廣足立ちどまる。

汝なぞの力を借りる行者と思ふか？……やい、若しおれが私情に着して、母を救はうと思ふならば、平生鬼神をも精靈をも自由自在に驅り使ふ神通力のおれぢや、他力を借りるには及ばんわい！　行者道に取つては、他力は魔障ぢや。

廣足　では、見す／＼お斷よられた實の母御さまをすらも？

行者　くどい！　おれは「力」ぢや。「力」には母はないわい！

　廣足は再び何か言はうとしたが、思ひ返したらしく口をつぐみ、默つて一揖して起ち上り、降り口の方へ五

六歩行きて、見返ると、行者は窟の方へ歩みて、先刻棄てた彌勒菩薩の像に目を注いでゐる。

廣足　（獨白）神の道は、果してそれほどに嶮しい、酷い、冷いものであらうか？　並の人間に歸らうと思ひ立つて見れば、いよ／＼おれは神の道には縁はないわい！

愁へに沈んだ體で、徐かに麓へと降りて行く。日が暮れる。角の聲が近づく。

行者　（彌勒の像を見下してゐた目をあげて、空を見上げながら）かりにも他力を恃んだのは、俺の掬ひ殘してゐた惑ひの一つぢや。あの獸者を呪縛した禁厭の力さへも、今思へば一種の他力であつたわ！　もうこれからは、何物をも恃まん。わが信念の外に何物をも恃まん。信念は「力」ぢや。「力」は信念ぢや。（また脚下の像に目を附け）只一時を緩うする痲醉藥のやうな柔軟佛、おのしのやうなものが何にならう？　元の土塊へ戻つてしまへ！

像を提げて、胸壁の方へ歩み、やがて谷の方へ抛つ。山鳴りまた激しくなる。と石磴の登り口から、前鬼が又あわたゞしく駈け降りて來る。

前鬼　行者さま！　行者さま！　とう／＼葛城の神めが西谷へ入込みましたぞや、早う來て下さりませ。わしらの行力ではどうすることも出來ません。一言めがどえらい力を出しをります。今にも幹を引き裂いて、樺から脱け出さうも知れません！　行者さま！　行者さま！

行者の前に跪いて、急きたて、又登り口へ駈け登つて、後方を見おろし、又駈け降りて來て行者の袖を引き、早く取り抑へに行けと種々と手眞似をする。行者はそれには關はず

行者　（獨語に）おれの定業盡きた後まで、「力」の敎へだけは傳へておかう。……

前鬼　今にも脱け出しをるかも知れません。早う來て下さりませ。……

行者　「力」の像を殘しておけば、たとひ此後……

前鬼　行者さま！　もし！　もし！

山鳴ります／＼激しく、角の聲はだん／＼近づく。四方はだん／＼暗くなつたが、討手は炬火をともし連れて來ると見えて下手の空が薄赤い。前鬼は堆へかれたらしく、身を隱し、飛ぶが如く石磴を駈け登り、忽ち見えずなる。

行者　おれが此世にをらずなつても……むゝ！

此途端、思ひがけぬ岩櫓の右手を攀ぢて後鬼が跳り登つた。

後鬼　大變でござります！　大變でござります！

と息を切つて行者の前へ駈け寄り、轉ぶやうに突伏したが、二の句を繼ぎ得ないで、泣いてゐる。

行者　（靜かに）　お袋が討手の者に捕まつたか？

後鬼　（嗚咽しながら）　さようぢや！　さようぢや！　どうしませうぞい！　どうしませうぞい！　隱れさつしやらう聲も無かつたのぢや。（行者は自若として立つたまゝ瞑目してゐる）　討手の者は好い人質ぢやと言うて荒けなく、お袋さまを引立てをりまする！　若しこなたさまが素直に囚人にならつしやらねば、お袋さまを直刺し殺すと言うてをりまする。どうしませうぞい！　どうしませうぞい！

降り口の後方が炬火でおひ／＼明るくなり、多勢の聲が聞える。

あれ／＼！　もうそこへ來をりました！　行者さま！　行者さま！

後鬼は、あちこち走りまはりて騷ぐ。

之より先き、行者は、それには關はず、石磴を登り、ちやうど巖の頂きに當る處に立つて、大岩をきつと見あげて、獨り語に

行者　おれの五十年の勤行に驗があるなら、三十餘年棲み慣れた此の窟の大巖よ、我が念力と行力とによつて、在りかたのまゝ立ちどころに、左手に三股杵を握り、右手を開き腹を堅へて降魔の相を成し、兩脚を上下にして天地經緯の相を示させられる金剛藏王の像と現ぜよ。大忿怒、大勇猛の像と現ぜよ。

行者は徐ら合掌し、道場觀を念じて、孔雀經を誦しはじめる。

壇上有金色孔雀王、其上有白色蓮花、
蓮花上有庾字、變成孔雀尾、尾變成孔
雀明王、住慈悲相具四臂、……

どつと鬨の聲が起る。後鬼はいよ／＼狼狽して又降り口まで驅け行きて下を見おろす。と、下から明晃々たる矛の鋒が一本ぬつと出る。後鬼驚いて飛び退く。此の間行者は誦經を續ける。

右邊第一手執開敷蓮花、第二手持具緣
果、左第一手當心持吉祥果、第二手執
三五莖孔雀尾、七佛慈氏、四辟支佛、
四大聲聞、八方天王廿九部、夜叉大將、
諸鬼神衆、幷諸宿曜十二宮神等、前後
圍繞。

此誦經中に降り口へ討手の頭人の武官が半身を現す。

武官　やい／＼、其方が役の小角か？　上意ぢや。きつと承れ。其方年來邪法を修し、愚民を惑はし、剩へ恐れ多

くも天朝に對し奉つて、大逆を企つるの由訴人あつて明白なれば、朝命を承り、召捕りの爲に相向うた。……

行者は關はず誦經を續ける。後鬼は頻りに氣を揉む。

速かに下山せい。早速下山すれば、御仁政とあつて、罪科幾等を減ぜさせられる。萬一手向ひ致す時は、こゝに召連れをる其方の老母を、立ち所に於て誅戮に及ぶぞ。……さ、どうぢや？　速かに下山するか？　どうぢや？

口では手強くいふが、行者を怖ろしく思ふと見えて、登つては來ない。「さ、どうぢや？」といふ頭人の言葉の切れ目に部下の者が鬨の聲を擧げる。

これより先き行者は經を誦し了つて、更に聲聞印を結んで、眞言を唱へはじめる。

行者　南麼、三曼多、勃馱喃、計都、鉢羅底也耶、微蘗怛、迦羅磨、儞社多許。

此の眞言を唱ふること數遍に及ぶ。そのうちに頭人は降りて行つた。後鬼は前に女怪が駈け登つた岩櫓の上へ走り上りて下手を見おろしてゐたが、忽ちけたゝましく

後鬼　あれ／＼！　凄じい劍を拔きをりまする！　あれあれ、お袋さまをば引ッ立てをりまする！

後鬼は行者の方を見て叫ぶ。途端に、頭人の武官が再び出て來た。

武官　やい、小角！　尋常に下山するか？　老母の喉笛を搔き切らうか？　さ、どうぢや？（又鬨の聲。）たゞいま角を三度吹鳴らす。其の間に返答せんと、老母の命は無いぞ。

と言ひすてゝ、また姿を消す。

此うち行者は第一の眞言を唱へ了つて、更に七佛の印明すはなち普印を結んで一切心眞言を唱へはじめる。

行者　南麼、三曼多、勃馱喃、薩婆、勃多菩提・薩怛縛、干栗馱耶、惹吠奢儞、南麼薩婆、尾帝沙訶。

此の時石磴の彼方から後鬼が、けたゝましく

前鬼　行者さま！　行者さま！……

と叫びつゝ石磴の頂きへ駈け登り、やがて此方へ駈け降りながら

もう迚も防ぎ切れません！　卑怯な魍魎の精靈等は、どいつもこいつも變心しをつて、獸神めの眷屬になりをりましたぞや！　今にも樟から脫け出しをりまする！　葛城めが焰ほの息を吹きかけ吹きかけして、樟をば燒き切らうとしてをります。早う來て下さりませ。……行者さま！　行者さま！……

行者の傍へ駈け寄つて、其の袖を引き動かす。此の時第一回の角を吹き鳴す。後鬼はまた岩櫓へ駈け登つて下を見て

後鬼　あれ／＼、お袋さまの胸元を！　胸元を！……

山鳴りすさじくなる。

前鬼　行者さま！　行者さま！……

行者更に悉氏印を結ぶ。第二回の角を吹鳴す。

行者　南麼、三曼多、勃駄喃、阿爾南闍耶、薩婆薩怛嚩、著耶弩蘗帝、莎訶。

後鬼　あれ／＼！　あれ／＼！

山鳴ります／＼激しくなる。前鬼も行者から離れて、岩櫓へ駈け上つて後鬼と共に氣を揉む。行者更に縁覺印を結ぶ。第三回の角を吹き鳴らす。

行者　南麼、三曼多、勃駄喃、嚩。

前鬼、後鬼苦悶を發して岩の上からころげ落ち、其まま行者の立つてゐる岩頭を見上げて身もだえし

前鬼「とう／＼お袋さまを……！
後鬼」お袋さまを……！

と突伏して泣く。降り口の下で悶の聲を擧げる。行者はそれに關はず、更に根本印を結んで、次ぎの眞言を繰返し／＼一心不亂に祈り立てる。

行者　唵摩庾羅、訖蘭帝、娑嚩訶。

山鳴ります／＼凄まじく、窟がゆら／＼と震動する。其の頂き其の他の岩石のあちこちが、すさまじい響きと共に、がら／＼がら／＼と碎け落ちる。破片が雨と飛ぶ。行者が祈つてゐる身邊へも大小の岩石が亂れ落ちる。土煙が朦々と起つ。討手の方へも、胸壁の一部が崩れ落ちたらしく、「わあ！」と多勢の叫ぶ聲がして、麓の方へ逃げ走る足音が聞える。炬火の光りが薄くなり、やがて下手が眞暗になつてしまふ。

前鬼と後鬼とは、狼狽へながらも行者の身を氣遣つて、石礫を駈け上り、岩頭から離れさせようとするらしいが、落ち來る岩石に恐れをなして、行者の傍へ近づき得ない。

行者　南無や此の大巖よ、たちどころに金剛藏王の像と現ぜよ！　喝!!

此の一喝と同時に、窟の頂きに近く突出してゐた最大の奇岩がすさまじい大音響と共に墜落したらしい。と又一しきり擲け落ちる岩石の雨。

四方は夜の闇と土煙とで、忽ち朦朧となつてしまつた。前鬼と後鬼とは、此大音響で、わつと叫んで、尻居に倒れた。

やがて次第に闇は薄れて來たが、行者の姿も、前鬼、後鬼の姿も見えない。鳴動は忽然として止んでしまつた。天地闃寂として死に果てたやうである。

巨巖は依然として、眞黒に空を摩して嶄然として屹立してゐる。

と見ると、其の形が前とは全く異つてしまつた。嗚呼是れ眞の天工！　雲際に聳え立つ金剛藏王の大忿怒の立像！

空はいつの間にやら紺碧のやうに晴れ渡つて、大天井が嶽の彼方に、物すごく燦めく北斗七星。其の此方に、ふは／＼と流れて行くのかとも見える綿毛のやうな白雲が一片！

前鬼と後鬼とが、又どこからか出て來た。行者を搜すらしく、いかにも懸念さうに、あちこちと驅け廻つたが、前鬼はふと顏をあげて、北方に漂ふ綿毛のやうな白雲に目を附け、急に後鬼の袖を引き、崖際まで連れていつて、白雲を指さし示す。暫く何か囁きあひ、指さしつゝうなづきあつてゐたが、遂に二人とも膝まづいて、恭しく合掌し、白雲の漂ふ方を拜む。

遠くで角の聲が聞える。

法　難（五幕八場）

第一幕

蓮華寺門前

時は文永元年（西暦紀元一二六四年）の十月中旬午後二時頃で、處は安房の國、長狹郡（今の安房郡）西條の郷「花房の蓮華寺といふ眞言宗の一梵刹の門前である。

舞臺面を一枚の繪だと假定すると、向つてやゝ上手寄りに、舞臺中心に、自然石を大小よろしく取合せて、築き上げた石の階段があり、其左右に同じ式で築いた高石垣がある。共に、多年の風雨に曝されて、處々崩れかけ、苔蒸してゐる。石段を上り切ると、そこからが寺の境内で、そこに茅葺の四脚門があつて、正面に「蓮華藏」と大師流で書いた額が掛けられてあり、ちやうど紅葉した一本の楓があり、同じく茅葺の坊らしい建物の一端が見えてゐる。

寺の下手は小山の裾で、上手にも丘がある、上手の手前には木立越しに、農家の屋根が見え、間近く生垣が廻つてゐる。下手には竹藪。そこに藪と藪との間に小逕がある。藪ぎはに三本の年を經た銀杏が相接近して、今を盛りの黄金色の葉の誇りを見せてゐる。其根元に、刈つた稻の束が二つ三つ立てかけてある。尙ほ、石段を降り切つた處に古風な立札、それに、當十月十七日、日蓮阿闍梨法談、當山、と書いてある。（時の鐘の音で幕があく）。

石段附近（舞臺の中央）に、遠近の村の者らしい男女老若が多勢、種々の職業を暗示する思ひ〳〵の服裝で、其多くは手に珠數を持ち、五十歳ぐらゐの病上りらしい漁夫と眼病者らしい十五六歳の村の娘と其母親らしい四十歳ぐらゐの農婦とを取卷いてがや〳〵言つてゐる。主に物をいふのは、其中の第壹人と第貳人と第參人と第四人とであるが、第一人は其中での口利きらしい。小聲で折々。題目を唱へてゐる者もある。

第壹人　（病上りに向つて）そッでやァ一人で歩んで來やしッたかね？

病上り　（得意さうに）こんなだよ。（と歩いて見せながら）もうはァ髭ィ剃つても大丈夫だァ言つたゞけども、ま、待たッしやァといふから、やめたァよ。が、見てくれッさい、こ、こんなだに。

と又歩き廻る。

第貳人　（村の娘に）　われも杖棒持たねえで來たな。目ィ見えるかなア？

村娘　あゝ、俺だつて、一人で歩べるだッけども　（と突然摑まへて居る母親の手を振離して、歩き出しながら）阿母がおッかなかつてくッちゆいて來たどァよ。

母　此女がなう、見える〳〵とさうッて、嬉しがつてね、どこへでも駈けィ廻るだから、おッかなくつてなア。

娘　聲ィ聞かねッでも、だッだか悉皆ようわかるだよ。あてて見べいか？

二三人　ぢや、あてゝ見さつしやア。（と二人だけ前へ出る）

娘　（透して見て）　にしやア、……政えもんどんだね。……ほうら、にしやア……久たろどんだね。

皆々驚歎の聲を揚げる。女連は題目を唱へる。

第參人　ばッちやア！　爭はれねえむんだア！　おッかねえむんだなア！

第四人　ぶッたまげたなア！　お題目さまの御利生はえれいむんだなア！

第壹人　だからさ、俺が夙くにそッたぢやアねえか？　信心せへしれば必然癒るべいッて。息ィ引取らしつたお生母さまをせへ、たつだ一晩の御祈禱で生返ァらせやしッた生き佛のお上人さまだア。

母　お生母さまッてばなア、俺ァ、あン時、ちやうど、手傳ひに往つてたどがなア、あの親孝行のお上人さまが、やつとの思ひで、九年ぶりで歸つて來やしつた時も時ィ、その日があの騷ぎだァよ、俺はア、何て情けねえこッたッペい思つたよ。あゝなると、生き佛さまだつても、俺ッ方だつても、ふとつだよ。わづらはつしやらねばいゝがと思ふほどに、泣かつしやつてなア。

第貳人　そッれでも、生返ァらしッたから、よかつたなア。

病上り　つまり、お二人さまの中ァぶッさばいて、九年も逢はれねえやうにして、お生母さまをあんなにしやしッたのは、みんなあのお地頭の東條どんの所爲た。

第貳人　さうだ。宗門がたきだから、お上人さまがにッきいのだ。

第參人　あゝに、そッばかりぢやねえ。お地頭はなア、あの淸澄山のこッて、お上人さまに訴訟ごとに負けさッしつたゞから、其返報しッだ。

第壹人　さうだ〳〵。全くだ。お上人さまが長いこと伊豆へ流されてゐさしッたのも、一つはそれが原だア。

第貳人　淸澄山の訴訟ごとてのは何だつけかなア？

第參人　にッしャそろォ知られんか？　一體あのお地頭はなア……（と言ひかける）。

第壹人　あ、待たッしえいよ。あッこい來さしッたのァお地頭どんの甥ッ子ぢやァねえかな？

母　あゝさうだよ。あの我武者らの小旦那だよ。

病上り　ひよつと聞かれでもしると、おつかねえよ。

第參人　どうして、目附かつたゞけでも、うるせいよ。さ、早うお堂へ往くべい。もう直に御法談が始まるべい。

第壹人　あゝ、いぐべい。（と先きに立つて）さ、みんな。來ねえか／＼？

皆々　あ、いぐべい／＼。

皆々（上手と下手とに）男二人づゝを殘しておいて、門内へ入る。上手の甲、乙二人は旅人らしく、さてまた下手の丙、丁は遠方の村の者らしく服裝してゐるが、實は、いづれも地頭東條左衛門の尉景信の家人共である。

甲　（皆を見送つて）いま／＼しい奴らだ。寄ると觸ると、お館の惡口ばかりいやァがる。

乙　（考へこんで）併しどうも不思議だ。たしかに二人とも癒ッちまつた。

丙　おれは何だか氣味がわるくなつた。いよ／＼魔法か何か使ふんだらう。さうでなけりや、死人が生返つたり、難病が癒つたり、跛足が起つたり、底翳が見えたりする筈はない。

丁　（門内をのぞいて）どうだ、ま、けふの此人出は！　何でも十何里も先きの下總くんだりからさへやつて來てるてィこッたぜ。

乙　（尙ほ考へこんで）かう人氣の立つてのは、只ぢやアない。やッぱり魔法の所爲かも知れない。

甲　なァに、信者ばかり來てるんぢやない。先刻入つたあの多勢の者なんかは、ありやみんな念佛信者だ。

丙　それが、法談を聽いてるうちに、大抵奴の信者になッちまふからおつかないや。何にしろ、あの辯舌だからなア。

丙　呑空和尙さまが來なすつたつて、迚も議論ぢや勝たれまいぞ。

甲　だから、今日はお吩咐通りにするんだ。手ッ取早く、腕づくでやッつけッちまはう。

丁　あ、あそこへ彌八郎さまや呑空さまが見えた。

と甲、乙、丙、丁は門前の一隅へ寄りこぞる。

と向うより念佛僧呑空坊（六十歲位）、式の如き念佛宗の僧衣に立派な袈裟を掛けて、珠數をつまぐり、つゞいて隨信坊（三十歲位）同じ服裝、其後よりは地頭東條景信の甥同苗彌八郎景房（二十五六歲）、家人戊と己と

を伴れて出る。

彌八郎（歩きながら）は、承知しました。

呑空坊　ようござるかな？　ともかくもわれ〳〵兩人にお任せおき下さい。大丈夫、二度とは口を叩かせんやうに言ひ込めますわい。恥入つて、われから退去いたさんけりやならんやうにして御覽に入れる。決して御心配なさるにや及ばん。

といふうちに一同舞臺へ來る。甲、乙、丙、丁出迎へて、無言で彌八郎に會釋する。

彌八郎（甲、乙、丙、丁を見て）見違へる程だぞ。よく似合つた。はゝゝゝ！……どんな樣子だ？

甲　いま〳〵しくッてなりません。とかくあの坊主が惡智慧を吹込むと見えまして、愚民共までがお館の事をさんざんに申します。

丙　さうして信者が殖えるばかりでございます。

彌八郎　よし〳〵。けふこそァ思ひ知らせてくれる。日蓮坊主め、性懲りもなく、此東條領の鼻ッ先きへ來て、これ見よがしに邪宗門を弘めやがる。太い奴だ。……汝らは一足先きへ紛れ込んでろ。いゝか？　合圖をしたら、吩咐けておいた通りにしろ。

甲、丁
丙、乙｝かしこまりました。

と四人は會釋して門内へ入る。

彌八郎（呑空、隨信の兩僧に向ひて）いよ〳〵以て奴の肚は、叔父左衛門のいはれた通り、先づ手初めに房總一圓を物にしておいて、それから更に手を廣げようといふ目論見であるらしいのです。先年領家の肩を持つて、叔父に楯を突き、近郷一圓の者を煽て上げて、とう〳〵此方に負け公事の恥を掻せやがつたのも、つまり、其準備のための人氣取りの策であつたに相違ないです。

呑空坊　それはおつしやるまでもないことだ。彼れの名望が、あれ以來、怖ろしく高くなつて、生き如來扱ひにされるやうになりました。愚民共に何かと利をくらはせて、だまくらかし、邪法を弘めますさへあるに、我念佛宗を無間地獄の宗門だなぞとさん〴〵に惡口しますさうな。あいつこそ墮地獄の賣僧でござる。

隨信坊　彼れが口を極めて罵りますのは、我念佛宗や禪宗ばかりぢやございません。近頃は、律宗をも國賊だと罵倒し、眞言宗をも亡國の數へだと惡口するさうでございます。それに附けても、奇怪千萬なのは此蓮華寺の住持でございます。宗敵たる彼れを平氣で同宿させてをるばかりでなく、おほッぴらに傍若無人の邪法談をさせるといふのは、實に佛門總體の恥辱でございます。

呑空坊　さやう。けしからんことだ。日蓮めを說破した上

で、住持の圓淨坊をも面責して、仕儀によつては、此寺に居たゝまれんやうに恥ぢしめてくれませう。

彌八郎　（うなづいて）萬一あなたがたの手におへんやうであつたら、只今申した通りにやりませう。

呑空坊　いや、大丈夫、それには及びません。あの日蓮坊ぐらゐ。

彌八郎　（此うち向うを見ることありて二人に向ひ）ぢや、どうか一足お先きへ。すぐお後から參りますから。

呑空、隨信一寸會釋して石段を上り、門内へ入る。と彌八郎は家人戊、己に何事をかさゝやいて、下手の木かげへ隱れる。

と向うから東條家の老僕左藤次（六十歳以上）海草を十文字からげにして、ぶらさげて持ち、よち／＼として出る。と少しおくれて其むすめ小草（十七歳）息を切つて追つて出て、（花道七三邊で）けつまづく。て、左藤次が一寸驚いて、ふりかへると、其袖をとらへる。吃りの少女である。

小草　お、お、お……（と口ばかりもぐつかせる）

左藤次　これ、離せよ。なぜ止めるんだ？

小草　（尙ほせき込んで）ま、ま、ま、まつとくれまつとくれ！　いゝ、いつちやいけない。いけないいッけない！

と頻りに首を振る。

左藤次　なぜ止めるんだ、離せ／＼。

小草　いゝ、いゝえ、は、離さない／＼。……おッまへが……に、にッちれんさまを信仰してお出でだてことは、こ、こ、此間から、あの、や、彌八郎さまに……か、かッかん附かれて、……

といひそゝくれて、袖をつかまへたまゝ、頻りに身を揉んで悶える。

左藤次　あゝ、せくな／＼。ぢや、おのしのいふ通りになるから、ま、おちつけ／＼。うんにや、往きゃせない。往きゃせない。せくな／＼。だが、こゝぢゃしやうがない。ま、御門前まで往け。よ、あそこまで往け。

と無理に小草を引立てゝ門前まで行く。娘は苦しさうに喘ぐ。左藤次其脊中を擦る。娘それを止めて、父の手を引張りつゝ、地上へ指で字を書いて見せる。

左藤次　（こゞんで、それを見て）え、なに？「おまへが、にちれん、しようにんさまを、しんこして、おいでだ。てことは、もうやはちろさまが、かんづいてゐなさる、から、いまに、おやかたさまの、みゝへも、はいるに、ちがいないから、どんなめに、おあいか、しれない、おつかない。……それに、けうは、さつき、やはちろさまが、おぜいのしゆと、一しよに、なにやらんぼなさる、てはずをしてもうこゝへ、きてゐなさるから、めつかる

と、おつかない。……けうは、ぜひ、かへつてください。」……（と書き終つて、小草は手を合せて、頻りに左藤次を拜む）……馬鹿を言へ。（といつて立ち上つて）おれは何もお館へ極祕かくしにして、けふ、日蓮さまの御法談を聽きに來たんぢやァない。目附かつたたつて介意ふもんかい？……（又袖を捉へるのを制して）なァに、まだ往きゃせない。……咎められたなら、それを好い機に、うんとお館さまに諫言をする積りだ。……なァ、おのしもよう聽いとけ、去年の大飢饉も、ことしの天災も、人氣が怖しくわる〳〵なつて、親不孝や人殺しが殖えたのも、つまり、悉皆わるい宗旨が蔓延つてるのと政府のお政道のよくない所爲だと、お上人さまは言はつしやる。此儘で打棄ッとくと、今に他國侵逼難とかいつて、外國の夷どもが日本へまで攻込んで來て、此お國が如何なッちまふか分らんぞといはつしやる。……きッとそんな事が起るだらう。世の中が如是亂脈で濟んで行く筈がない。おつかないこッた。（と言ひながら、しやがんで）それにゃ先づ人間の心を入れ換へさせにゃならん。口はばッたいが、法華經さまの有りがたさが分つたからは、俺もお上人さまのお手傳ひをして、一人でも餘計御信徒を殖す料簡だ。だれかれといふよりも、お地頭さまを改心させるのが早手廻しだ。……な、おのしもけふから改宗しろ。さ、一心になつて、お題目を唱へろ。南無妙法蓮華經と言つて見ろ。俺の中氣が忽ちに癒ッちまつたやうに、其吃りなんか、きッと直なほッちまふ。さ、言つて見ろ〳〵。

小草　（頻りに首を振つてゐたが）わ、わたしのことよりも、……おッまへの事が氣になる。そ、そんな大それたことを目論んで、と、と、殿さまに、おこられたら、お前、ど、ど、どうする積りだい？

左藤次　えい！　俺の事なんか氣にするな。（と起ち上つて）今も言つた通り、俺は内しよで來たんぢやァない。もう一度御法談を聽聞して、うんとそれを呑込んで歸つていつて、左衛門さまの不心得を諫言しようといふんだ。だから、心配するな。いゝから、歸れ〳〵。

と行かうとする。

小草　（あわてゝ止めて）いゝ、いけない〳〵。お、おこつたりといふと、せ、せ、先達てのやうな……むッごいことをもなさる御主人さまだから、……おッまへが（と泣き聲で）ど、ど、どんな目にお、お、お……

としやくり上げて煩悶するのをいたはりつゝ

左藤次　だからよ、さういふ不心得な人だから諫言しようといふンだ。それがお念佛宗がわるい宗門だといふ現の證據だ。（と目を瞋らして）南無阿彌陀佛といふ口の下

から、(と切齒をして) 此間のやうな、無理非道を働きやアがるんだから……(と言ひかけると、小草が又袖を引いて、字を書く) なに? 「あゝいうひどな、むほなひとたちだから、とても、いけんなんか、きゝやしない。きつと、おまへか、ひどいめに、あう。」……酷い目に逢ふぐらゐが何だ? 生き佛さまのお上人さまさへ、伊豆の伊東へ流されて、すッでの事に土左衞門になッちまはッしやるとこだつた。蟲けらの此方らが命がけは當り前だ。……

と言ひもあへず行きかける。小草あわてゝ又其袖をつかまへる。此途端に、寺の門内の奥の方で太鼓が鳴り出す。

おゝ、もう始まるらしい。離せ。えゝ、離せッ! 離せッていふに!

と手荒く振切る。小草其はずみを食つてよろめき倒れる。左藤次は入る。小草もすぐ追つて入る。

此樣子を木蔭で窺つてゐた彌八郎は家人戊、己、に何か囁く。戊、己は心得て石段を上り、門内へ入る。

と小草は、兩手で顏を掩つて、泣きつゝ門から出て石段を降りて下手へと行く。彌八郎は其上手へ廻り

彌八郎　おい、小草! どうした?……

と肩へ手を掛ける。小草びッくりして、見返り、不快な顏をして急に身を退き、無言で尙ほ下手へ行きかけるのを彌八郎は追ひすがつて

おい／＼、ちよと待て。そんなに無愛にする奴があるものか?……(と手を捉へて) そら、どうだ? 俺が此間言つた通りだらう? 爺ア、あの日蓮坊主に、もう全然ごちゃまかされッちまつてるんだから、今の間に俺のいふ通りにしないと、どんな事になるか分らんぞ。今はまだ、誰れも外に氣附いてゐる者は無いらしい。おのしが可哀想だ。俺は知らん振をしてゐてやる。なア、今の内に、(と聲をひそめて) 此間言つたやうに (といひかける。と小草は頭を振つて捉まへられてゐた手を振拂ふ) なぜ、首を振るんだ?……(小草は蔑んだ表情で口をもぐつかせてゐたが、とゞ地上へ字を書く) なに? 「だつて、そういうあなただて、おぢとさまを、だますのだ、だから、あなたも、おねぶつしゆの、むほんにんだ。」……馬鹿を云へ。謀反も絲瓜もあるもんか? 俺はてんで宗旨なんかどうでもいゝんだ。たゞなア (と又小草の手をとつて) おのしが可哀さうだからよ。

と顏を寄せる。小草は赫となつて、だしぬけに平手で彌八郎の横面を打つ。彌八郎「あ痛た!」と手を離す。小草は何か言ひたさうに睨んだが、興奮し過ぎて、言へないらしく、其儘つか／＼と上手へ戻りかける。彌八郎は目に嘲笑を浮べてそれを見送つてゐたが、尙ほ

と惡戲つて見たくなつたらしく、面白半分に追ッかける。小草は眞氣になつてあちこちと逃げ廻る。とゞ石段の下で追ひつめて、羽がひじめにする。

と小草は驚き怒つて、抱きしめてゐる彌八郎の手を嚙む。彌八郎手を離す。小草石段を五六段驅け上る。彌八郎追ひすがる。小草手強く突く。彌八郎は四五段上りかけてゐてよろめき、たぢ〳〵として見事に轉ぶ。

小草は「いゝ氣味」といふ表情をして門内へ逃げ入る。彌八郎すぐ起きて石段を上り、追掛けて入る。

此時、向う（揚幕）から天津の城主工藤左近ノ丞吉隆の室白妙（二十五六）旅裝束、笠をかぶり、杖を突き、藁沓を穿き、懷姙九ヶ月のことゝて、一里の徒步旅行にも隨分くたびれたらしく、息苦しさうにして出る。つゞいて侍女刈藻（二十三四歲）同じく旅出立、手に笠を持ち、つゞいて家人北浦忠內（二十七八歲）烏帽子、小素襖、一本ざし、一寸した古風な挾み箱のやうなものを擔つて附いて出る。

刈藻　（步きながら、心配さうに）もし、奧さま、こゝいらで少々お休み遊ばしてはいかゞでございます。

白妙　（ちよつと立止まつて、一息して）それには及びません。もうあれに見えてゐますもの。（と又步み出す）

忠內　でも、お身重でいらつしやいますから、（と步きながら）御無理を遊ばしちやいけません。

白妙　いゝえ、（と同じく步きながら）心配おしでない。大丈夫ぢや。

と門前へ來る。白妙又一息して立ちどまる。刈藻、忠內も立ちどまる。

忠內　御信心ゆゑとは申しますものゝ、ようまァ此お遠いところを、お乘物にも召しませんで、お步ひ遊ばしました。嘸、おくたびれでございませう。

刈藻　お體に障りませんければよいがと、どんなにお案じ申し上げましたらう？　何事もあらせられませんで、おめでたうございました。

白妙　何の、おまへ、此位ゐの事が。（と息をついて）身重でさへなかつたら、徒跣足で日參をもしたいと思うてゐます。九死一生の夫の重病が持直して、あれほどになつたのは、いふまでもなく、法華經の御利益で、みんなみんなお上人さまのお庇ぢや。（と珠數をつまぐつて）南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！

此途端、石段の上の門內俄かに騷がしく、彌八郎の聲で「えい、とにかく來い！　えい來いといふに！」などと怒鳴るのが聞える。これを聞いた白妙主從は、互ひに思入あつて、下手藪際の銀杏の蔭へ隱れる。と門內より彌八郎、家來佗、己と共に左様次を引立て

て出で、石段をおりる。小草それを支へつゝ從いておりる。すぐ其後から日蓮上人の弟子僧鏡忍坊（三十歳以上）が從いて出て、石段の上の門の柱蔭で、樣子を見てゐる。石段をおり切ると、彌八郎は左藤次を突きとばす。

左藤次 （地上にすわつて）はい、成程、日蓮さまの御法談を聽きに來ました。宗旨替へもいたしました。さ、そのわけは、……いづれ、お邸へ歸つてから、お殿さまの前で言ひます。貴下には言ひません。

彌八郎 なに、俺には言はん？ 無禮な奴だ。いけづうづうしい奴だ。（と戊、己に）おい、何でもいいから、……面倒だ！……爺を邸へ引摺ッてけ！

戊、己立ちかゝる。左藤次それを支へて

左藤次 何でもよかァありません。理か非か分らねえうちは、一足だつて歩きゃしませんぞ。

彌八郎 なに？ えいッ、かまはず引立てろ！

三人の立廻りになる。小草は父を助けようとする。彌八郎は押隔てる。此うち左藤次は又手ひどく突飛ばされて、のめり、塞石で膝頭を打ち、血が出る。小草驚き、駈け寄つて介抱する。それを三人は又立ちかゝつて引立てようとする。これより先き、石段をおりてゐた鏡忍坊は見かねて割つて入る。

鏡忍坊 ま、お待ちなさい！ お待ちなさい！

彌八郎 （はじめて見返つて）えい！ 何を邪魔するんだ？

鏡忍坊 （しづかに）邪魔はしやしません。女性や老人をあんまり手荒くなさるから、ちよつと止めたまでゝす。

彌八郎 關係のないお前なんかゞ、止める必要はない。一體、だれだお前は？

鏡忍坊 關係大有りです。わたしは日蓮御坊の弟子で、鏡忍といふものです。慈悲救濟はわれ／＼佛弟子の第一の本務です。「一の厄難の人を救ふは餘の一切を施すに勝る」とも見えてゐます。「若し世人の畜生を殺すを見ば、應に方便を以て其苦難を救ふべし」とも仰せられてあります。畜生をさへ救ふのです。況んや法談を聽きに來た信徒たちはわたしどもに取つては最も大切なお客さんです。庇ふのは當り前です。

彌八郎 えい、師匠の坊主の口眞似なんかして、出鱈目の團子理窟をこねるな。

鏡忍坊 出鱈目ぢやありません、經文に有る通りをいふのです。一體あなたは何人です？ もう直に法談が始まらうといふ道場へ來て、大きな聲なんか出して騷いぢや困るぢやありませんか？

彌八郎 勝手なことを言ふな。俺は當鄕の地頭東條左衞門の尉景信どのゝ嚴命を承つて來た東條彌八郎景房だぞ。

無禮なことを吐すと叩ッ切ッちまふぞ。

鏡忍坊　（笑つて）いかに泣く子と地頭だつて、そんな無法がやれるもんなら、やつて御覽なさい。鎌倉殿から立派に御赦免狀を頂戴して、歸省された師の御坊です。いつ、どこから、法談をするな、聽くなといふ嚴命が下りました？　況んや、無法、無慈悲を働く男を止めに出た坊主の首を叩ッ切れといふお觸れ書きが、いつ出ました？

彌八郎　（口をもぐ／＼させたが）えいッ、問答は無益だ。それ、撲り附けッちまへ。

　これにて、家人戊、己の二人、鏡忍に掛かる。鏡忍、二人を二三度やりちがはせて、忽ちに返し、とゞ家投げにする。彌八郎耐へかねて、一寸かゝり、やがて太刀を拔かうとする。

　此以前、白妙主從はたび／＼止めに出ようとすることある。此時、忠内は鏡忍の加勢に飛び出さうとする、白妙はそれを制して、自ら進み出る。

白妙　あ、もし／＼、お二人とも、まア／＼お待ち遊ばせ。

彌八郎　え？（と見返つて）おゝ、あなたはたしか、天津の……

白妙　はい、工藤吉隆の妻でございます。（と徐かに近寄つて、會釋して）其後は久しく打絕えまして。……鏡忍坊さまにも、御機嫌よろしう。

鏡忍坊　これは、奧方でございましたか？……あなたさまにも。（と丁寧に會釋する）

白妙　さて、早速ながら、只今ちやうど參り合せをりまして、お行違ひのあらましは、承りますともなく、承りをりましたが、つまり、お行違ひの事の起りは、あの（と左藤次へ思入あつて）年寄親子の衆が、東條さまお邸へ歸る歸らんに在るのかと存じます。差出がましうはございますが、あの親子の衆は、わたくしがお引受けして、きッと歸らせます。どうか、お二人のお間の事は、わたくしにお免じ遊ばして、水に流していたゞきたうございますが、いかゞでございませう？

彌八郎　御挨拶痛み入ります。爺さへ邸へ歸れば文句はありません。

白妙　さう承つて安心いたしました。（と左藤次の傍へ寄つて）ま、氣の毒な、大分の怪我をおしのやうぢやなう。……刈藻、その巾着を。……

　刈藻、腰に附けてゐた巾着を脫して、白妙に渡す。白妙その中より膏藥を取出す。

今聞いておいでの通りの譯ゆゑ、此藥を塗けて、ともかくも早くお邸へお歸り。え、わかりましたか？

左藤次　へい／＼、分りました。ありがとございます。へ

い／＼、いたゞきます、いたゞきます。

と菅薬を受取つて戴く。小草は、深く感動した體で、只默つて拜んでゐる。此以前忠内は挾み箱を開けて白き布を取出し、よきほどにそれを裂いて、小草に渡す。小草喜び、押いたゞいて、これて父の疵口を巻いてやる。やがて左藤次の起ちかけてよろめくを見て

白妙　忠内、手を持つておやり。

忠内と小草と左右より助けて立たせる。

左藤次　へい／＼、もう大丈夫でございます。どうぞもうおかまひ下さいますな。

と辭退しつゝ小草に介抱されて下手へ入る。

彌八郎（それを見送つて、不承々々に）では奥方、手前はこれで御免を蒙ります。

と鏡忍を尻目に掛けながら、白妙へ會釋して門内へ入る。

此時、下手藪の間の小逕から、遠方の身分ある人々らしい老弱男女六七人、かつぎをかぶつた上品な婦人なぞも交つて、どや／＼と出て來り、白妙らを珍らしさうに眺めて、何か囁きつゝ、石段を登り、門内へ入る。

鏡忍坊（改めて會釋して）えゝ、師の御坊への先達ての御書面の趣きでは、左近丞さまの御容體は、大分お宜しいやうに承りましたが、其後いかゞにあらせられます？

嘸御心配でございませう。

白妙　お疵を持ちまして、どうやら一命だけは、取止めましたやうに存ぜられまして、いかう喜びをります。是れと申すも、偏に先年伊豆の伊東に於きまして、父二郎行光と共に、圖らず御結縁をいたゞきましたゆゑ、當國に立歸りまして以來、不束ながら、お教化のあらましを私から夫に傳へまして、段々と信心を起させますやうにいたしました其御利益に外ならんのでございます。

鏡忍坊　では、左近丞さまには、いよ／＼御改宗遊ばしましたのでございますか？

白妙　はい、さやうにございます。只此上は、一度お上人さまにお目もじの機を得させまして、親しうお教化を蒙らせましたならと存じまするけれども、何分にも只今の容體では、乘物にさへもむづかしうございますので……

鏡忍坊　御道理でございます。師の御坊に於きましても、お懐かしがつてをられまして、是非一度お見舞ひしたいとは申されてをりますが……

といひかける。此途端に又も下手の藪の逕から近郷の村の者らしい男女多勢どや／＼出て來る。それは大抵病人か不具者で、脊蟲の瘤だの、中風患者だの、ゐざり車に乘つてゐる者だの、いろ／＼である。これも、じろ／＼と白妙主從を見やり、何か噂をしあひつゝ、

石段を上る。ゐざりや脊蟲を介抱して石段を上るので、一騒ぎてある。彼等が門内へ入るのを見送って、鏡忍は又言葉を續ぐ。

鏡忍坊　御覧の通りの體で、遠近の氣の毒な人達が、毎日引ッ切りなく詰めかけて參りますので、不本意ながら、けふまでは、伺ひかねてをられました。

白妙　それはようお察し申してをります。それゆゑ、せめて御執筆のお題目なりといたゞきたい と存じまして、二つには、御法談も拜聽いたしたく、それこれ、夫の代理として、今ン日參上いたしたのでございます。

鏡忍坊　それはお奇特なことでございます。……

此途端、門内の奥にて俄かに鬨の聲のやうに多勢の聲聲が聞える。

おや、何を始めたか？……

と門内より日蓮の弟子僧の長英坊（二十五六）急ぎ足で出で來り、石段の上から

長英坊　鏡忍どの〳〵！（と高聲に呼びかけたが、白妙主從の居るのを見て、一寸白妙らへ會釋して、聲を落して、改めて）鏡忍どの、ちよいと。

と呼ぶ。これにて鏡忍は白妙を離れて、二三步上手へ寄りて

鏡忍坊　何事か起つたんですか？

長英坊　今、乘觀坊が、御法談の披露をするとて、ほんの一寸念佛宗の事を言つたら、もう今のやうな騒ぎです。ついぞ見たことのない念佛僧の顔が見えてゐるばかりでなく、たしかに念佛信者らしい者が何十人となく入込んでゐます。それに東條の家人らしい者も多勢紛れ込んでゐるやうですから、決して油斷は出來ませんぞ。

鏡忍坊　（うなづいて）そりゃ承知してゐます。よろしい。すぐに行きませう。

白妙　（一二步進んで）何事か起りまして？

と懸念さうに尋ねる。鏡忍見返って

鏡忍坊　なアに、御心配にゃ及びません。ま、ともかくも本堂へいらつしやいまし。御案内いたします。

白妙主從はおの〳〵懸念のこなしあつて、鏡忍に案内せられて門内へ入る。

暫く多勢の喧騒の聲。と、やがて寂となる。

――幕――

第二幕

同本堂内

わア〳〵といふ喧騒の聲々。そのがや〳〵のまだ全く鎭まり切らぬうちに幕が開く。「小一」から、やつと壹

間半程を隔てた正面中央六間の間は蓮華寺の本堂の心で、よき程に間を置いて、半丸物の圓柱を都合四本立て、其前「小一」までの處一帶は本堂の廣緣の心にて、板の合せ目を書いたる地飛白を敷詰め、軒には擧げ蔀を釣り、欄間には古びた幔幕を絞つて張り渡してゐる。

本堂內、正面の奧は、一面に、定式の如き佛壇、佛像、佛器、装飾等よろしく、其前よきところに、法談の高座（約壹間四方）を設け、其上に古風なる模樣を織出したる布を掛け、尙ほ其上に經机と經卷とが載せてある。

廣緣は廻廊の形をなして本堂の上手下手奧深く折廻され、上手は、其廻廊を挾んで前の方は庫裡へ通ふらしく、下手は、遙かに近山を見渡し、海も間近く見え、尙ほ前の方は、廣緣と連續してゐる渡り廊下として、ずつと下手へ通つてゐるらしい。

正面の高座には日蓮上人（四十三歲）鼠の僧衣、木蘭色の五條の袈裟、手首に珠數を掛け、目を瞑り、端然として坐してゐる。高座の下、左右には蓮華寺其他、上人に好意を有する寺々の僧侶及びそれらの主な檀越らしき身分よき在家が居流れてゐる。

高座の前の上手、「小一」の附近及び其下手には多勢の聽衆、僧侶、貴賤、各職業、男女、老弱ごちやまぜではあるが、概して上手にゐる者は歸依者らしく、下手にゐるは多少の反感を抱いてゐるものらしい。が、今は、何事か爭論が始まつたらしく、双方が入り亂れ、只少數を除くの外は、いづれも（見物席を背にして）立ちかゝり、口々に何事か罵りわめき、中には肩肱を怒らして太刀に手を掛けてゐるものもある。立ち上らず居る者のうちに、前の揚の白妙、刈藻、其他の女性と若干の老人連や僧形の男女がある。

やゝ下手に突立つて高座の方を向いて、口を尖らせ、目を瞋らして居るのは、前の場の念佛僧の呑空と隨化であり、其後ろに肩を怒らして並び立つて、聲援を與へてゐるのは東條の家人ら甲、乙、丙、丁らであり、さうしてそれを制止しつゝ立身で何事か言つてゐるのは日蓮上人の弟子僧の乘觀坊（二十七八歲）と長英坊である。又、上手に突立ち、白妙に制せられてゐるのは北浦忠內であり、中央に突立つて罵り騷ぐ日蓮派の信者らを制止してゐるのは鏡忍坊である。尙ほ、上手にも下手にも、反日蓮組らしい聽衆が立ちまじつて喧騷してゐるのだが、彌八郎主從の姿だけは見えてゐない。

幕が開くと、乘觀坊、長英坊、鏡忍坊らの「まア〳〵靜かになさい」、「お立ちなすつては外の人々の迷惑になります。まア〳〵お鎭まりなさい」、「どなたもお席にお着きなさい。お靜かになさい」なぞと制止する聲

聲の中に、めい／＼次第に（見物席を背にして）座に着く、念佛僧二人と乘觀、長英だけは側に立つてゐる。

乘觀坊　いや、どんな御異議であらうと、御異論であらうと、師の坊は喜んで聽かれます。無論答辯もせられます。只さう騷がしくおつしやつては、聽衆たちの迷惑になります。どうか靜かに、お一人づゝでおつしやるやうに願ひたい。

呑空坊　よろしい。では、先づ、わしが問ふことにしよう。乘觀、と隨信へ心得させる。これにて隨信は下にゐる。長英は、高座の脇、よき處へ戻つて佇ふ。一座寂となる。と呑空は形を正して

では、改めて、日蓮御坊にお問ねしまするぞ。御坊は只今、口を極めて、我念佛宗を譏謗しめされたるのみならず、宗祖法然上人をば、末代の愚人の爲に墮地獄の法門を開いた邪智の不正師だと惡口し、近年、都鄙に、災厄並び起つて、下萬民が惱むのは、ひとへにそれが爲だ、すなはち念佛は無間地獄の業因、法華經は成佛得脫の直路だといはれたが、そんな證文が何處にござる？　勿體なくも、忝なくも、我念佛の法門といつぱ、其因つて來る所最も遠く、最も尊く、既に彼の曇鸞法師は、ひとへに之が爲に、四論の御講說を抛ちめされた。まつた彼の道綽禪師は、之が爲に、涅槃の講業をば措てさせられた。善導和尙も之を專修なされ、惠心僧都も專ら一行を宗としめされた。就中、勢至菩薩の化身とまで崇め奉る宗祖法然上人に於かせられては、德は諸ろの先師に越え、智は日月に等しくあらせられた。其上人が遍く觀、悉く鑑み、深く思ひ、遠く慮らせられた末に、遂に諸經を抛つて專修選ばされた我宗門に、假りにも卵の毛ほどの瑕瑾があつて堪るものかい？　然るに、我念佛宗の故に、天變地妖が起るなぞとは、前代未聞、言語道斷の惡口だ。無間地獄に墮すべき罪人とは御坊のことだ！　さ、念佛宗が何故邪法だ？　さ、其謂れを承らう。見ゞ事其證據を擧げて見なさい。

日蓮　（徐かに目を開き、初めは穩かに、併し段々話勢を強めつゝ）蓼を食ふ者は辛きを思はず、魚を商ふ者は腥きを忘る。一たび邪教に惑溺したりといふと、たま／＼正しき師の敎へを聽いて、却つて之を異端と罵る。あゝ、迷ひと罪と、双つながら深いのに氣が附かんとは、氣の毒なことぢや。……先刻、辯じかけた通り、世尊の說法は一代五時、いづれも世尊の說かせられた說教には相違ないが、其間に、おのづから大小、權實、前後、淺深、勝劣、難易の別がある。而うして法華經が無上甚深の御敎說であることは、「十方佛土のうち唯一乘の法のみあ

り、無二亦無三」と仰せおかれたのに明白ぢや。また「四十餘年未顯眞實」とも、「正直に方便を捨てゝ、たゞ無上道を說くぞ」とも仰せられた。法華經が一代五時の肝腎たること昭々として火を視るが如しぢや。然るに、曇鸞、道綽、善導らは、權に就いて實を忘れ、只佛敎の淺瀨のみを渡つて、其深き淵を涉ることを怠つた。法然坊の如きは、最も其易きを貪つて、難きを避け、剩へ、たま〱難きに就かうとする殊勝な者共の有らうとする場合に、私曲の言說を述べて、劣れる敎へを揚げ、勝れる敎へを仰へ、「大乘經」六百三十七部、二千八百八十三卷、幷びに一切の諸佛、諸菩薩及び諸ろの世天等を「捨」、「閉」、「閣」、「拋」の四文字を置いて、ほしいまゝに遮斷し、以て一切衆生の心を惑亂し、就中「若し人此經を信ぜずして毀謗せんには、一切世間の佛種立地に斷滅せん、乃至其人命終つて阿鼻地獄に入らん」とまで仰せられた其大切な法華經を蔑ろにし、敢て顧みざるに至つては、是れ全く世尊の御本懷に違背し奉る振舞ぢや。妄語の至り、言語道斷とは此事ぢや。佛道の謀叛人ぢや！……

と念佛僧を始め、反日蓮組がや／＼と騷ぎかける。長英、乘觀、鏡忍ら漸くそれを制止する。日蓮はすぐに語を繼ぎ

然るに、凡そ世間普通の善惡は、當面眼前の黑白と同樣に、愚者も、無學者も、女わらべも、あらまし之を辨へ得る。なれども、日に見えん敎法の正邪善惡、其導師たる者の聖凡曲直に至つては、證り切つた阿羅漢さへも、容易くは見分けかねる習ひぢやによつて、上下、貴賤、賢愚、老弱、擧つて法然が妄語を信じ、淨土の三經のみを崇めて他の諸經を拋ち、只彼の阿彌陀佛ばかりを仰ぐことを知つて、他に諸ろの尊い佛たちの在しますことを忘れ奉るに至つた。すなはち念佛宗は……（といひかけると）

呑空坊（こらへかねて突立ち立つて）ま、ま、お待ちなさい。……

日蓮（かまはず）取りも直さず、諸佛、諸經の怨敵……

呑空坊　まゝ！……

日蓮　……聖凡、賢愚、一切人間の怨敵ではないか？　かるが故に、今世にはびこる邪宗門多しと雖も、先づ第一に罪すべきは……

呑空坊　まゝまゝ！　まアお待ちなさい、いゝや、先づお待ちなさい。……御坊の只今の言說こそ、却つて明かに、大世尊の眞實意には遠いわい！　世尊は常に、あらゆる衆生の機に隨順して、隨宜の敎法を說かせられた。衆生の機根調熟のためには、屢〻御方便をお用ひあつた。そも

そも末法の今日は、罪障殊の外重うして、人々たゞ其境に細かにして、心は麁く、識は揚り、神は飛ぶ。迚も迚も、靜かに觀らしむることなどは叶はざるによつて、法然上人、それを憫然におぼしめされ、他力本願の易行門を開いて、「只一向專念に彌陀佛の御名を唱へよ、然らば必ず救はるべきぞ」と大慈悲の御教をば垂れさせられた。すなはち念佛往生の本願は、有智、无智、持戒、破戒、多聞、小見を簡ばず、在家、出家を問はず、一切の有心の者は、皆ながら容易く唱へ得るが故に、譬へば、天の一月の萬水に浮んで、水の淺深を嫌ふことなきが如く、また太陽の世界を照して、地の高低を選ばざるが如く然り。かやうにあつてこそ世尊の本懷に叶ふといふものだ。是れぞ所謂大慈大悲の御方便だ。然るに何ぞや？　我宗祖上人を惡口し奉つて、佛道の誅叛人だなんぞとは、實に以て無禮千萬、言語道斷……

日蓮　暫く。ま、お待ちなさい。……其方便論からが先づ大きな間違ひでござるぞ。苟も隨宜說法の世尊の眞意を心得てをると申さるゝ口の下から、我日本國を印度や震旦と同等の劣機の國土と見らるゝは、何といふ非事ぢや？　一閻浮提の間、萬を以て算ふる國土のうち、又と比類のない我日本國には、方便は無用、外道は無用、小乘は無用ぢや。只一向に、まツしぐらに、大乘純圓の眞實教をこそ宣べ廣め、布き行ふべきぢや。其大乘とても、法華經以外に何があらうぞ？　然るに法然坊は、眞實に堪へ得る我が國民に、生才覺の虛僞を設け、即身即佛の直路の行法を、却つて難行ぢや、苦行ぢや、千中無一の險道ぢやなぞと難癖を附け、世の臆病なる徒輩をして徒らに世を厭ひ苦を避けうとする卑屈の根性をのみ長ぜしめた。こゝに於て乎、淺ましい哉、世を擧つて一機一緣の小事を事とし、ひたすら後世の安樂をのみ願ふの餘り、勇猛の氣は日に薄れ、身の安穩ばかりを第一にして、或ひは主を忘れ、或ひは親を忘れ、或ひは家を忘れ、或ひは國をさへも忘るゝに至る者が、洽く上中下に瀰漫するのぢや。畢竟是れ誰れの罪ぢや？　たれのしたことぢや？　さかしら立てして愚者を欺く法然坊が、あの「選擇集」の故ではないか？……

と此以前から隨信は、屢々居丈高になつたり、中腰になつたりして、何か言ひたげにしてゐたが、此時こらへかねて突立ち

隨信坊　いや／＼！　いや／＼！　いゝや／＼！　さういふ御坊こそ愚者を欺くのだ。口がしこう申されるが、さういふ御坊こそ自身で本尊と崇めてをられる其法華經の罪人だといふことにお氣が附かれんか？　法華經に何か

ござろ？「末法の中に於て此經を説かんと思はゞ、決して他人及び他の經典の過を説くこと勿れ。また諸ろの他の法師らを輕しめ慢ること勿れ。他人の好惡長短を説くこと勿れ」とあるではござらんか？　さ、これでも御坊は法華經の行者でござるか？

　反日蓮黨、俄かに色めき立ち、騷ぎかける。鏡忍、長英ら制することある。

日蓮　はて、おろかなことをいふ御坊ぢや。お前さんは法華經の第四を讀んだことが無いのか？「若し惡人あつて、佛の御前にて佛を罵り辱めんか、其罪は尚ほ輕し、若し人只一言たりとも法華經を讀誦する者を罵らんには、其罪極めて重し」と斯うある。すなはち「末代に法華經を弘めようとする者を罵詈するのは、世尊に一劫が間怨せん者の罪にも百千萬億倍ぢやぞ」と説きおかせられた。お前さんは、頭を圓めてをるから、多分佛徒であらうに、修行に、攝受と折伏との別のあることを知らんか？……いや、ま、聽きなさい。……今は如何なる時ぢや？　今日は果して攝受の時機か？　只今も論じた如く、邪宗異端世にはびこつて、而も人皆が其正邪曲直を分ちかねてをる今日は、何事をさしおいても、先づ、邪宗の邪宗たる所以を説破して、責め罵り、摧き滅さねばならん時ぢや。かるが故に……

呑空坊　いや、ま、お待ちなさい！　さほど我宗を惡口讒謗する御坊が、何故我宗祖上人の御先蹤を冒しめされた。いや、なぜ我宗祖の智慧を盜んだ？　南無妙法蓮華經を唱へさするのは、我宗の南無阿彌陀佛の稱名を其まゝ題目に代へたおぬしの小才覺に過ぎんではないか？

　反日蓮黨又色めき、いろ〳〵噪ぜりふにて應援する。

日蓮　小才覺とは何ぢや？　念佛を法然が先蹤とは何を馬鹿な！　元來稱名は二天三仙の名を呼ぶに始まつたことぢや。世尊はじめて佛の御名を念ずることを以て之に代へしめたまうた。なれども、畢竟するに、念佛は假敎の方便にして唱題こそは世尊が實敎の大眼目ぢや。念佛を石瓦に喩へるならば唱題は金銀、如意寶珠ぢや！　そもそも妙法蓮華經といふは、上は梵王、帝釋、文殊、彌勒、ありとある諸ろの御佛の佛性と下は我等一切衆生の佛性とが一體不二にして、人法一如、十界圓具、一念三千の妙理悉くこゝに備はることわりを如實に簡明に表はし盡したる經名なるが故に、一たび妙法蓮華經と唱ふる時んば、一切の佛、一切の法、一切の神祇、修羅、人天、餓鬼、畜生、乃至一切衆生の佛性を只一音にて喚び顯はす。其功德無量無邊ぢや！　彼の極樂の一佛に憐みを乞ふ念佛三昧なぞとは天地の相違ぢや！……さ、これでも

異議がござるか？

　とこれにて呑空言葉つまり、顔色火のやうになつて、只口ばかりもぐつかせる。隨信たまらず突立ち上つて

隨信坊　いや〳〵、それはともかくも、……他宗をさん〴〵に悪口して傍若無人の雑言を申さるゝのみならず、われから己れの事を正しい道師だの、上行菩薩の化身だのと僭越千萬な自負自讃を吐き散らしめさるのは、どうしたことでござる？　取りも直さず、「大論」に所謂非大人の振舞、議賊の振舞ぢやござらんか？　第一、御坊が正しい導師だといふ證據が何處に在る？　上行菩薩の化身だなんぞといふ證據が何處に在る？

　反日蓮黨が又一齊に競ひ立つて「さ、何處に在る？」、「さ、それを言へ。」「それを吐せ！」、「賣僧め！」、「議賊め！」なぞと口々に罵り騷ぐ。鏡忍らが制すると漸く鎭まる。と上人は昂然として今まで罵り騷いでゐた者をきつと指さし

日蓮　まッその如く、お前たちが競ひ立つて、われらを口ぎたなく罵詈雑言するのが、取りも直さず、其證據ぢや。「諸ろの無智の人あつて、正しき導師を罵り辱む」と仰せ遊された御本文がお前らの振舞其まゝであることに心附かんか？……

　と言ひもあへぬに、いづこからともなく、石や瓦の碎片や古わらぢなどがばら〳〵と高座に向つて飛び來る。鏡忍ら早速に身を以て上人を掩ふ。聽衆席色めき立つ。とりわけ脊蟲の娘、眼病者、ゐざり、中風患者なぞが、狼狽して逃げ惑ふので、室内は大混雑である。

（上人は少しも動ぜず）「及び瓦礫を擲ち、杖刀を加ふるものあり、云々」と仰せられたに符節を合はす……（又石一つ上人の袂を掠める）お前らの此振舞が其證據ぢや。……

　又五つ六つ石が飛んで來る。其二三が立惑ふ聽衆の老弱男女に中つて、けたゝましく泣き叫ぶ。それを見て上人は居丈高になつて

やい！　日蓮を憎いと思ふならば、此日蓮をこそ打て。罪無き者に怪我さすな。さ、ずつと前へ進み出でゝ、予を打て。……さ。打て。……

　驚き騷ぐ聽衆が上下へ靡いたので、高座前には鏡忍、長英、素觀の三僧だけ殘る。上人は、高座を下つて三僧を左右へ退かせて、眞中に突立ち

なぜ打たんか？　そちらから出て來んならば、こちらから進んで出る。さ、打て。……（石つぶてが全く止んで、一座寂となると上人は聲を勵まして）……なぜ自負するか？　なぜ自讃するか？　といふのか？……「如來の現在にすら猶は怨嫉多し、況んや滅度の後をや」と誌しお

かせられた其依誓言に此身がひッしと相當するのぢやと思ふ時は、自分こそは其大任を果し奉るべき法華經の大行者であるぞと思ふ時は、……嬉しいとも、有りがたいとも、忝けないとも、到底言舌に言ひ顯はすべきやうもないわい！　（と更に感激の聲を强めて）なぜ自負するか？　なぜ自讃するか？　これが自讃せずにをられるか？　自負せずにをられるか？　さ、此頸を鋸を以て引切らば引切れ！　或ひは此胴を長卷を以て眞ッ二つに斬るならば斬れ。日蓮は、此舌の續く限り、此息の續く限り、日本を救ふために、妙法蓮華經を說かいでおかうか？……今や、五濁盛り熾つて、天變地妖竝び起り、異端邪說國内に充滿す。剰へ、上下の者擧つて其邪說異端に惑溺して、只一人の其非を覺る者なく、其非を正す者がないといふのは、何といふ淺ましいことぢや！　嘗ては孔丘が孝經を編いた其手が、今は其肉親の父母の頭を打つわい。釋尊の妙經を讀誦する其口が、今現に其御眞實意を嘲り罵る。不孝の國とは此日本國ぢや！　不信の國とは此日本國ぢや！　なればこそ昊天は目を瞋らして日本を睨み給ひ、大地も憤激して震動するのぢや！　彼の承久の大不祥は、三天子を流し奉つたる大不祥事は、蓋し之が爲に天の下し給うたる咎めであつたのぢやとは心附かんか？「藥師經」に所謂七難のうち、五難は既に起つて、二難正に起らんとしてをる。中にも最も怖るべきは他國侵逼難といふ大難が今正に目睫の間に逼つてをるのを知りをらんか？　今が我日本國の大事の瀬戸際ぢや。不惜身命の者輩出せずんば此國は極めてあぶないぞよ！　然るにそれを思はずして上は百官有司より、下は農・工、商の萬民に至るまで、擧つて邪敎に誤られて、眼前當面の私慾にのみ汲々んで、或ひは奢侈に耽り、或ひは逸惰に泥み、長へに迷妄の痴夢を貪る。就中今の世の坊主共は、自ら法師と名宣るからには、人を敎へ、世を導かねばならん筈ぢやに、徒らに戲論妄語を事とし、世を欺き、人を惑はす。今の世の坊主共は、いづれも皆法師の名を盜む名盜人ぢや！　法師の皮を着た畜生ぢや！……

と言ひも終らぬうちに、又もばら／＼と礫が飛ぶと同時に、下手からも、緣先きの土間からも、東條の家人甲、乙、丙、丁、戊、己らが、彌八郎と共に、おの／＼手ごろの棒ちぎりを振翳して、一齊に上人目がけて襲ひかゝる。鏡忍、長英、乘觀をはじめ北浦忠内らが躍り出てゝ之を遮り、忽ちごつちやの立廻りが始まる。中にも鏡忍坊は最も目覺しく働き、只一人にて忽ち五六人を取りひしぐ。聽衆の僧俗男女はます／＼狼狽し

て右往左往する。とゞ彌八郎は隙を見て、上人へ躍りかゝる。上人きッとなつて之を睨む。彌八郎は其威に撲たれたらしく、たぢ〳〵となつて立ちすくむ。皆々之を見て、駭き感ずる思入、或ひは怯み怖るゝ思入よろしく、活人畫模様にきまつて

——幕——

第三幕

東條邸の一室

時は前幕の一ヶ月後——十一月十一日の午後三時過——て、處は東條郷一圓の地頭東條左衛門の尉景信の邸である。正面の中央上手寄に、やゝ斜に間口五間、奥行二間の一室(中足の二重)。軒先きに揚げ蔀、軒下は下手奥へ折廻したる濡縁式の縁側。よき處に沓ぬぎ臺。上手は縁側と準へに、ずつと上手の前まで建物つゞきの心(切出し)。又、下手の奥は、遠待及び板塀、(書割)其板塀の盡くる處に中門(出入あり)。中門の下手は板塀、其手前は植込。

室の内部は總板敷。中央よき處に上げ疊一枚。ところどころに圓座。正面は一間半の二枚屏。

沓脱臺の前、上手に立つてゐるのは念佛僧の呑空であり、それと對ひ合つて下手に立つてゐるのは東條の家人四方木の兵太(五十五六歳)である。

呑空坊　はゝア御狩！　お獵にお出掛けなされたのだといたすと、お歸館までには、まだ大分お間がござりませうなア。

四方木　さア、いつもならば、暮れますが、(空を仰いで見て)どうやら時雨さうになつて參りましたから、或ひはもう程なく歸られますかも知れません。館にも、例の日蓮坊の件に就いて、種々御相談申したいことがあるから、是非近々お目にかゝりたいと申してをられました。

呑空坊　手前も實は其事で參上いたしたのでござるて。では、暫時お待ち申して見ませうかな。

四方木　ともかくも、先づあれへお上り下されませ。

と二人とも板敷に上り、呑空はよろしく圓座に住ふ。

四方木　日蓮坊と申せば、昨今はいよ〳〵増長いたして、勝手な暴言を吐き散らし、ます〳〵例の魔法らしいことを行ふげにござります。それをまた遠近の愚民どもが悉く信仰いたし、蓮華寺の界隈は、毎日大雜沓で、まるで法會か祭禮かのやうだと申すことでございます。

呑空坊　飛ぶ鳥をも落す鎌倉殿のお膝元でさへ、辻說法な

そといふ傍若無人の振舞をした圖太い日蓮坊主でござる。況んや一たび弱腰を見せて、奴に勢ひを得させたりといふと、どこまで伸し上るか知れたものぢやござらん。

何にしろ、あゝいふ狂坊主を、一旦罪有つて流し物になされながら、其後これぞといふ規模もないのに、ぐづぐづで御赦免なぞといふ生温い御裁許は、どう考へて見ても、鎌倉表のお手落であつたと申さねばなりません。

此うち下手奥の方に多勢の人聲が聞える。四方木の兵太は下手を見やりて

四方木　あゝ、ちやうどよろしうございました。館が歸られたらしうございます。

といひつゝ兵太は庭へおり立つ。此時下手奥の中門口より地頭東條左衞門の尉景信（五十四五歳）、狩裝束、綾藺笠をかぶり、行縢、其他式の如く、今馬から下りたといふ體にて、鞭を携へ、侍童に星卷の少し上で眞二つに折れた家重代、手馴らしの弓を持たせ、如何にも不興らしく家人天面五郎（二十八九歳）其他多勢を隨へ、どや／＼と中庭へ入つて來る。家人らもおの／＼弓を携へてゐる。其後より脊子多勢鹿、兎等の獲物を荷つて入つて來る。

四方木　（出迎へて）　存外お早い御歸館でございましたな。嘸、御殘念でございましたらう、折あしく時雨さうになつて參りまして。

景信　（濡れ緣にどつかと腰をおろして、如何にも不興げに）そのために歸つて來たんぢやない。あれを見ろ。（と侍童の持つてゐる弓へ顎でこなし）

四方木　（眉をひそめて）　おや／＼！　お弓が！　どうしてあの御重代の御銘弓が折れましたのでございます？（と恐る／＼機嫌を窺ふ）

景信　（綾藺笠を脱ぎながら、苦々しげに）　ちやうど矢頃へ夏毛の大鹿が飛び出して來たから、よッ引いて切つて離す其途端に、あの有樣だ。（といひつゝ、笠を手荒く投げ出す）

四方木　（ます／＼眉をひそめて）　や、それは／＼！

此時郎黨一人進みよりて景信の草鞋の紐を解く。

景信　獲物はともかくもだ。何たか、緣起がわるくつて、すつかり興が醒めッちまつたから歸つて來た。（と緣に上り、附け太刀を解き、行縢なぞを取りながら）　此頃は爲ることなすことが是れだ。忌々しいこッた。

四方木　それは、どうも、とんだことでございましたな。

……

此以前存空は庭へ降りて挨拶をしようとしたが、一寸其機を得かねてゐる。四方木はそれを見て

えゝ、只今ちやうど呑空上人がお見えになりましたところでございます。
景信　うん？　（といひながら初めて呑空を見る）
呑空坊　（しづかに會釋して）　先づ以て御健勝でいらせられまして……
　と丁寧に會釋するので、流石に不興顔を和らげて
景信　お、これは。（と會釋を返して）ようお出で下された。自分も頻りにお目に懸りたいと思つてゐたところだ。さ、まづ、これへ。（といひつゝ家人らを見返つて）汝らは退つて休め。
　と室内へ通る。此以前四方木の兵太は、侍童から折れた弓を受取り、室内の壁際へ取片附ける。やがて、天面五郎をはじめ、侍童、其他一同の者は、おの／＼會釋して、中門口より出て行く。此うち景信は、室内の上げ疊に住ふ。呑空は再び圓座に住ふ。
景信　（少し落着いて）　時に、御坊には、無論、日蓮坊主の一件でお出で下されたのでごわせうな？
呑空坊　さやうでございます。
景信　もう一刻も猶豫しちやアをられませんわい。先月、蓮華寺で、なまじ此方から法戰を挑みかけて、却つて敗れを取つた形となつたのは大失策でごわした。あれ以來、奴らはます／＼氣勢を得て、念佛も、眞言も、地頭も、領主も、まるッきり眼中にないが如き振舞でごわす。此上尙は勝手な眞似をさせておいた日にやア、房總一圓は、程なく日蓮めの信徒檀越となつてしまふでごわせう。
呑空坊　いや、それどころぢやございませんぞ。既に先頃も、聊か聞込んだことがござつて、仄かには申し上げて見たのでござつたが、事を佛法に託して天下の政道を亂さうといふのが彼れの底意だといふことは、いよ／＼紛れのないことでございますぞ。
景信　ぢや、先達ての話の通り、奴が、ともすると「おれは日本國の主」だの、「おれは日本の柱」だの、「大船」だのといふのは、ありや宗旨上の事ばかりではないのでごわすか？
呑空坊　手前も、最初は、狂人めいた增上慢の言はせる宗門上の自負、自讃とばかり思つてゐましたつけが、中々さうではござらん。其腹心の檀越乃至心を許し得る信徒らに對しては、彼奴折々、容易ならん事を口外いたしをりますわい。例へば、「我が國始まつてこのかた大叛逆の者二十六人、其第二十五人目は源の頼朝どの、第二十六人目は故權の太夫（義時）どのである。一天萬乘の君をお三方まで島流しとなし奉るとは前代未聞、所謂下剋上の大逆、其罪萬死に當る。あのやうな不道人の子孫が天下の政道を司り、念佛其他の邪宗門が蔓延りをるからして、

あの如く天變地妖が竝び起る。斯くの如くにして、到底國家が安穩であるべき筈はないから、速かに法華經を奉ぜよ、然らずんば、日本は必ず滅亡に及ぶ」なんぞと怪しからんことを申し立てゝ、一方には人心の惑亂を圖り、それと共に、一味同心を募る底意は、明かに叛逆の志でござる。最早躊躇なさる場合ではござらん。天下、國家の爲に御英斷なさるがよろしい。

四方木　（ぎやうに眉をひそめて）　いや、どうも、驚き入りました。それに、承りますれば、天津の工藤左近の丞どのゝ如きも、最近、貴方の勸めによつて、とう／＼日蓮坊の無二の檀越となられたやうに申し傳へます。天津が敵方となつたとしますと、いよ／＼御油斷は出來ません。

存空坊　いや、それはかりならまだしもだが、あの清澄の老師道善御房さへも大分あぶなかしいといふ噂でござる。師弟の情誼にほだされて、つい此間、面會のため、蓮華寺へ參られたさうだが、何でも其際、彼れの例の辯口で巧く說き惑はされてしまはれたらしい。

景信　さういへば、あの男金實信が、其一子を剃髮させて、彼れの弟子にしたとか聞いたが、事實か？

四方木　はい、全くの事でございます。それから、あの上總の佐久間重貞どの、下總の藤原兼綱どのなぞも、つい近頃、歸依せられたとか承りました。

景信　他領の者はともかくもだ。領内の、恩顧譜代のやつらまで邪宗門に歸依するやうぢやア、忝けなくも伊勢大神宮の御廚として其給人を拜承る我が東條の家の名折れだ。……御坊、此上は……

　と膝を進めて、更に何事か言はうとする其途端「えゝ、來やアがれ！」といふ彌八郎の聲と「はい、參りますよ。參りますとも」なぞといふ左藤次の聲とが混交して聞え、やがて彌八郎、中門口から左藤次を引立てつつ出て來り、沓ぬぎの前まで來て左藤次を突放し、左衞門に會釋して

彌八郎　言語道斷、不埒千萬な奴でございます。速に御成敗を願ひます。

景信　どうしたのだ？

彌八郎　此奴とうからお目を盜んで、内々であの日蓮坊主に歸依してをります。

左藤次　いゝや、お目は盜みません。内々にしたのでもございません。おゝうぬが信仰がまだ固りもせないうちに、御諫爭をしたり、お勸めしたりするわけには行きませんから、それで差控へてをりました。けれども、斯うしてお前へ出ました上は、明白に申します。はい、わたくしは日蓮さまの信者でございます。さうして何故信者にな

りましたかは只今申し上げます。

彌八郎　いけ僞々しい奴だ！　館、此通りです。莊重な御處分をなさらんと、此爺、何をするか分りませんぞ。あの狂坊主の口眞似をして、鎌倉どのへ惡口までいひます。……やい、獅子身中の蟲といふのは汝のこッた。

左藤次　うんにや、獅子身中の蟲でいのは、お釋迦樣の御本懷でない宗旨を、第一等の佛道のやうに言つて、肝腎の法華經さまを惡い宗旨のやうに言ひ觸らす念佛宗信者のこつたと、日蓮さまはおつしやります。

景信　だまれ！

左藤次　その仔細といふのは……

景信　だまれ！

左藤次　一體全體、その……

景信　えいッ、やかましい！　默れといふに！……無智文盲の愚人の癖に、何を、うぬ、生利な！　不埒者めが！……三代相恩の主に向つて、何だと？　念佛信者は獅子身中の蟲だ？　ぢや、予も獅子身中の蟲か？　さ、もう一度言つて見ろ。言ひ方に由つては、其分にや差置かんぞ。

左藤次　（開き直つて）はい、では申し上げます。一體、當お館樣のお家柄は何でございます？　勿體なくも、伊勢大神宮さまのお厨がゝりであらつしやるおやございませんか？　京都の御門さまは、其大神宮さまの何に當らせられますぞ？　其御門さまが島流しになつてお果なさるなんて、まるで草鞋を冠り物にしたやうな逆様沙汰もない間違つた世の中になつてるのに、泣きもせず、怒りもせず、平氣な顏をしてござらつしやるのが、先づそのお宗旨の間違つてゐる證據だ。……一體……

景信　默れ！（と大喝を下して）其一言を聞きゃ澤山だ。……（と眞蒼になるほどに憤激して）事を宗旨に託して、天下を亂さうとする坊主めの底意はいよ／＼明白だ。こんな物知らずまでが其口眞似をする。不埒至極！　政道の爲だ。もう容赦はならん。……（と太刀を取り、突立ち、つか／＼と縁端まで進んで）坊主めを誅戮する血祭りにする。（と太刀をすらり拔き放して）そこへ直れ。

　呑空は急ぎ起ち上り、進み寄つて、止めて

呑空坊　ま、暫く。まゝ、暫く。無智蒙昧の徒か、あの妖僧の邪說に說き惑はされるのは道理なことでござる。かやうな賤人をお手づから御成敗はお太刀の汚れになります。ま、お任せ下され。手前が只一言で改心させます。まゝ。……まゝ。……（景信やうやく怒をおさへて席に戻る。と呑空は左藤次に向ひて）さて／＼、氣の氣なことだ。お前もあの賣僧めに欺瞞されたな。「避くべきを避け

す、就くべきに就かず、邪見に信向すれば、死して地獄に墮つる」といふ御本文をお前は忘れてしまつたか？　やれ〳〵、淺ましい事だ！　が、深く自ら責めて、懺悔すれば、如何な極重惡業も除かるゝ」と仰せ遺されてある。館のお怒りの募らんうちに、さ、早く懺悔するがよい。懺悔は能く煩惱の薪を燒き、懺悔は能く天路に往生す、懺悔は能く四禪の樂みを得、懺悔は能く寶摩尼珠を雨らし、懺悔は能く金剛壽を延ばし、懺悔は能く常樂の宮に入り。……（と次第に經文の音樂的なのに、自分自身恍惚となつたといふ風に、聲に力を入れて）懺悔は能く三界の獄を出で、懺悔は能く菩提の華を開き、懺悔は能く佛の大圓鏡を得、懺悔は能く……（と果しもなくつゞく）

左藤次　（こらへかねて）　えいッ、そんな陳奮漢おいて下さいまし。わしァ何もそんな懺悔するやうな惡いことをした覺えはないのだ。惡いことをしてるのはお前さま達だ。……（と信景に向つて）殿さま、慮外ながら、あんた樣は心得ちがひをしてござらつしやりますぞ。理も非もなく日蓮さまを楯がつて、慈悲忍辱を招牌の坊さままでお先きに立つて、喧嘩ァ吹ッかけて、お念佛いふ口の下から、瞎雲に石瓦ァ投げて、亂暴を働くのが、それが正法でございますか？　日蓮さまのいはつしやるには……

景信　默れ！　無禮者めが！……彌八郎、此弓の折れで、其頬桁を叩きみじいてしまへ！

と弓の折れを投げ遣る。

彌八郎　はッ！

とそれを取上げて、左藤次に立ちかゝる。

呑空坊　（止めて）　ま、お待ちなさい。……おい、早くお詫びをしな。お念佛を申しさへすれば、「南無阿彌陀佛」といつてしまふんだ。手ッ取早く、「五十億劫の生死の罪をも除く」と仰せおかれてある。

四方木もよろしく左藤次へ科あつて

四方木　さ、早くお念佛を申して、お詫びをしッちまへ。お詫びをしッちまへ。

左藤次默つて俯向いてゐる。

彌八郎　えい、剛情な奴だ。此爺め！

と弓の折れにて手强く打つ。骨身に徹へながら、左藤次は齒を喰ひしばつて引ッ耐へて、小聲で南無妙法蓮華經々々々々々々々と唱へつゞけてゐる。

呑空坊　さ、早く南無阿彌陀佛といつてしまひな。

四方木　さ、早くお念佛を申しッちまへ。

彌八郎　さ、どうだ？　南無阿彌陀佛といふか？

左藤次　（じつと目を瞑つたまゝて、だん〳〵大きく）　南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！……（と唱へかける）

彌八郎　(赫となつて)　こん畜生！
　と二つ三つ續けざまに打つ。佐藤次耐へかねて、無言のまゝ倒れる。此途端、中門口から小草が轉がるやうにして駈け入つて來て、身を楯にして父を庇つて
小草　こ、こ、こ、こ、これを見て、か、か、かッ、かんにんして、く、く、下さいまし。……わアッけのあることでございます、わッ……
　と封もせざる一通を呑空に渡しもあへず、倒れてゐる父に抱き附いて、聲を揚げて泣く。呑空は其一通を受取つて、すぐに開いたが、折からの曇り空で、老眼には讀みにくいといふ思入あつて
呑空坊　えゝ、なに「おそしよのこと」。(と縁端に坐つて)「ちゝさ、とじが、おしゆしにそ、むきに、ちれんさまを、しんこしましたは、わるいにはちがいこざいませんけれど、ちゝが、おや、かたを、おうらみするよになつた、には、いろんなわけがございます、そのひとつ、はやは、ちろ、さまが、こないだい、やだといゝますのに、むりむ、たいに、わたし……」
　と讀みにくさうに、折々讀みちがへ、心附いて、讀み直し／＼して讀みつゞける。こゝまで來ると、彌八郎大きにあわてゝ
彌八郎　お、あ、御坊、ま、ちよつとお待ち下さい。……いゝえ、手前が讀みませう。貴下は御老眼でお讀みにくいでせう。
　といふや否や引ッたくる。泣伏してゐる小草は、それと見てびッくりし
小草　あッ！　そ、そ、それは！
　といひもあへず、横合から書附へ手を掛ける。彌八郎が遣るまいとする。咄嗟に一通は二つに裂ける。これを幸ひとして、此遣り取りの間に、彌八郎は故と書附を揉みくちやにしてしまふ。とゞ小草は突飛ばされ、地上に身もだえして打伏して泣き叫ぶ。
彌八郎　えい、やかましい！　だまれ！　こんなに揉みくちやにしてしまやアがつた。こりやもう讀めやしない。こんなものはどうでもいゝんだ。やい、それよりも親爺に勸めて、早く改心させろ。早くうんといはせるんだ。南無阿彌陀佛といはせるんだ。さうすりや、おれが詫びをしてやる。さ、どうだ！
　小草くやしげに何か言ひたさうにして、顏を擧げ、頻りに口を動かすが、興奮し過ぎて、何も言へないらしく、喉を搔きむしりつゝ、とゞ泣き倒れる。此時、左藤次は痛みを耐へて、起き直つて、娘をなだめて
左藤次　えいッ、そんなに氣を揉むな。くやしがるな。俺がうんと言つてやるから。(と小草を押しのける。小草は

あわてゝ、手を振り、「言っちやわるい」といふ科をして止めろ）何かまふもんか？ かまふもんかい！……（と彌八郎に）これ、お前さんのやうな無法非道の人間がうぢよ／＼としてゐる宗門だから、俺は念佛宗が嫌ひになつたんだ。下司でも下郎でも、佛さまのお目からは、同じ人間でなくッちやァならんのに、よくもお前は、主の片われ顏をして、ようもおのれ、（と泣き聲になつて）彼女が不具者であるのを幸ひに、人の大事の娘をば無理無體に……

いひかけるを

彌八郎　うぬ！

といひもあへず、だしぬけに強く打つ。左藤次思はず、「あッ！」と叫んで、又倒れる。彌八郎は又續いて打たうとする。小草身を以て父を庇ふ。

左藤次　（痛みを耐へて、憤激して）かういふ無法も、原をいふと、（と呑空を見上げて）お前さん達が、只お布施ばかりを目あてに、口先きばかりのお說法をさつしやるからだ。（ときつと睨む）

呑空坊　（眞赤になつて）何い？？（と息込む）

彌八郎　えい、退け！

と小草を突き除けて、再び左藤次を打たうとする。と此間、無言て何か考へてゐたらしい景信が、前より落着いた併し嚴格な調子で

景信　彌八郎、ま、ま、待て。……左藤次、彌八郎にどういふ不埒があるか知らんが、それはそれとして、我宗門を無理非道な人間がうぢよ／＼してゐる宗門とは何だ？ 主の片割れ顏とは何だ？ 他の事はさておいて、先づその雜言だけで、笞三四百の科料はある。が、……何だか事情がありさうにも思はれるから、……速に改心して、南無阿彌陀佛と唱へさへすれば、今日だけは赦してやる。兵太、もう一度諭して見ろ。

四方木　はッ。……かしこまりました。

と兵太は地上に降り立つて、左藤次の傍へ寄り

さ、早く／＼、お念佛をいふのだ。さ、早く。

彌八郎　さ、いふか？

此間小草ははら／＼して、何か言はうとするが、言へぬので、只無性に手を合せて景信を拜み、呑空を拜み、四方木を拜み廻つて、憫みを乞ふ。左藤次は、先刻からの苛責の痛みを段々身に覺えて來たらしいが、尙ほ剛情に、目を瞑つて默つてゐる。景信も赫となつて

景信　えいッ、言はなけりや、……兵太、ぶつて／＼ぶちのめしッちまへ！（と弓の折れの殘りを四方木に投げ與へる）

四方木　はゝッ！ ……さ、いふか？

彌八郎　いふか？……

　左藤次猶ほ默つてゐる。

彌八郎　うぬ、言はなけりやァ……

　と彌八郎又一つ打つ。小草憤然として急に割つて入り、手強く彌八郎を突離す。不意を突かれて彌八郎はよろめいたが、すぐ立直つて、小草を引き据ゑる。

小草　こ、こ、こ、こんな無法をはたらく、お前たちは、（と彌八郎を睨み、四方木を睨み）お、おにだ！　あく魔だ！（と憤然と振返つて景信を睨み、緣を叩き立てゝ）人間ぢやない！……おッれも……もう、お前たちを主とはおもはん。……おッれも、けふからは、……に、に、にッ日蓮さまの信者になる。に、に、にッ日蓮さま、……助けて下さいまし！　助けて下さいまし！

　と狂氣のやうに泣き叫ぶ。景信はます／＼怒つて

景信　やかましい、馬鹿女めが！　其女を叩きのけろ！退かなけりや、打て／＼。

四方木　さ、退け！

　と小草を引除ける。

彌八郎　退け／＼、

　と又割つて入る小草を引除ける。

呑空坊　さ、早く改心して、お念佛をいふがいゝ。さ、早く念佛を。

彌八郎　さ、いふか？　いはんか？……えゝ、退けといふに！

　と小草が又割つて入るのを手荒く突飛ばす。と小草は、よろめいて、沓ぬぎ臺の角で激しく右の脇を打つことありて、「あッ！」と叫んで倒れる。此間左藤次はやはり瞑目して、南無妙法蓮華經を唱へつゞける。彌八郎こらへかねて

えッ、剛情な奴だ！

　と又一つ手強く打つ。これにて左藤次うんといつて悶絶する。

　此途端、中門口から天面五郎が大急ぎの體にて、出で來り、庭上に跪いて

天面　申し上げます、強て日蓮が若し遠出するやうであつたならば、早速知らせろといふお吩咐でございましたから、氣を附けてをりましたが、今ン日只今、かねて天津の領主工藤左近の丞どの方より度々招待を受けてをりましたとかで、弟子坊主三人、其信徒七八人の同伴いたして、彼方へ出向きまする體にございます。取りあへず、右御注進に及びまする。

景信　なに？　天津の工藤の邸へ？　ふん。（と考へて）こら、彌八郎、兵太、今急に思ひ立つ事が出來た。其奴らは（と左藤次親子へ科をして）ふん縛つて、裏庭の物置きへでも押込めておいて、すぐ又戻つて來い。……

彌八郎　はッ。

　と二人入る。

景信　御坊には、ま、これ〳〵。……（と呑空もとの圓座へ戻る）五郎、もつと進め。……日蓮の其同伴者の中に、武士がゐるか？

天面　へい、工藤どのから迎ひとして參りました武士が兩三人をります。

景信　それッきりか？

天面　へい、武士はそれッきりでございますが、例の鏡忍と申す十何人力かの弟子坊主が附添つてをります上に、他の坊主共とても、武器を携へてをります。

景信　（聞流して）御坊、此機を逸しちやなりませんわい。實は、御坊の御催促を承はるまでもなく、自分も、先月以來、此事ばかり始終考へてゐましたが、何分、例の五十一ヶ條の式目の表として、鎌倉どのさへ、公然に誅戮すべき程の罪名を附けかねて、さん〴〵持剰しめされたあの坊主の事でごわすから、つまり喧嘩仕掛にするか、暗打か、何かさういふやうな段取でやッつけない以上、あの通り、愚民の渇仰が激しいのだから、其後始末が頗る面倒でごわす。で、據ろなく今日まで蟲を殺してゐました。待てば甘露の此時雨空こそ幸ひだ。今ちやうど出掛けるといふのだから、奴らがあの小松原へ掛る時分は、七つ下りか、假令それより早からうとも、此天氣鹽梅ぢや、大分薄昏くなるだらう。恐らく途々信徒を引接しつつ行くだらうから、とつぷりと暮れるかも知れん。ちやうど狩支度の、あの弓箭や物の具が取揃つてゐるのは好い都合だ。先きへ廻つて待伏せして、有耶無耶でやッつけてしまひませう。それで、それが野武士の所爲だと見られりやア、尙ほ妙といふものだ。

呑空坊　成程、これは當然のお計らひでござる。旣に日蓮みづから章安大師の語を引いて「昔は時平かにかして法弘まる、戒を持すべし、杖を持する勿れ。今は時嶮しくして法隱る、杖を持すべし、戒を持する勿れ」と屢ゝ申すことでござるが、こればかりは道理でござる。彼れ如き妖僧をこそ、刀杖を以て成敗すべきで、其他にはいたしかたがござらん。（と珠數をつまぐりて、しづかに）南無阿彌陀佛！　南無阿彌陀佛！　（と唱へつゞける）

景信　御坊に御異議がないと決れば、五郎、すぐさま一同の者に號令を傳へろ。汝と彌八郎は、おの〳〵五十人宛を引率して眞先に馳せ向へ。おれは殘つてゐる奴らを伴れて、すぐ後から追附かう。早くしろ。

天面　はッ、かしこまりました。

　景信起ち上る。みな〳〵よろしくこなし。

――幕――

第四幕

工藤吉隆邸の一室

時は前の場の結末とほゞ同時刻。處は同じく安房郡に屬する天津の領主工藤左近の丞吉隆の邸の奥の一室である。

正面の中央間口四間、奥行二間の室(中足の二重)は、すべて板庇、軒先きに擧げ蔀、上手は、ずつと深く濡れ緣を折廻して、其行き當りに妻戸の出入ある續き家體、下手は、奥行一間半の庭から直角に、ずつと下手まで渡り廊下の心にて、其奥に別棟の建物、植込等見ゆる。室の正面、上手二間は壁、其續きの側面一間も壁、正面の下手二間は襖、其續きの側面は舞良戸。室內は一面に高麗緣の疊を敷込んである。こゝに、老女磯浪(七十歳位)は、侍女一人(十六七歳、名は渚)を指圖して、今まで室內の掃除をしたり整理をしたりしてゐたらしく、幕あくと、壁際の掛物かけへ日蓮上人自筆の題目曼荼羅を假表裝したのを掛けてなり、侍女渚は、上座へ六枚折の屛風、茵二つ、脇息、白木の臺に載せた烏帽子などを運んでゐる。尙ほ壁際には、弓、矢、太刀等が立て掛けてある。領主左近の丞の居間である。磯浪は腰の殆ど二重に曲つた老女である。

庭上(平舞臺)には、家人北浦忠吾(三十五六歳)——第一幕に出た忠內の兄——が、自分も箒を手にして、一人の僕の庭掃除をさせてゐる。濡れ緣の下手、脊ぬぎ臺に近く、柄杓を添へた手桶が置いてある。

忠吾　(僕が掃除を終つて、改めて水を撒かうとするを止めて)あ、もう水は澤山、澤山。どうやら時雨さうになつて來た。御苦勞、御苦勞。

これにて僕は會釋して、手桶を持つて下手へ入る。此うち室內でも整理が濟む。

磯浪　(侍女渚に)もうよし、もうよし。お大儀、お大儀。……(渚は會釋して、襖をあけて、奥へ入る。と磯浪は緣先きまで出て來て庭を見やりて)おゝお、大そうお淸淨になりました。忠吾どの、さ、ま、お休息なさいませ。(といひつゝ自分も濡れ緣によろしく住ふ)

忠吾　や、お座敷も、(といひつゝ、これも緣端に腰を下しつゝ)久方ぶりで、見るから淸らかになりましたな。何にしろ、一年近くのおわづらひで、名醫の方々さへお見離しなされたのに、奥さまの御信仰の效があつて、忽ちの中に、見かはすやうに、めき／＼とお癒り遊ばしたのは、全く不思議な、おめでたいことでざいましたなァ!

磯浪　全く法華經さまの御利益でございます。日蓮さまの

お力でございます。奥さまがあの（と曼荼羅へ思入あつて）お曼荼羅をお數を遊ばして、花房からお歸りの、其晩からが、目立つて御快氣にならせられました。つい十日ばかりの間に、只今のやうなお元氣におなり遊ばしました。爭はれないものでございます。

と此時奥の襖をあけて、奥方白妙、臨月の體を重たげに運びつゝ、女童に仕立おろしの直垂を、亂れ箱に入れて、持たせて、出で來り

白妙　磯浪、もうお身體淸めもお濟まし遊ばしたのであらう。お召物は、やッぱり此仕立おろしの直垂の方が一段と淸らかでよささうぢや。さう申して召させ換へ申して來ておくれ。

といひつゝ、茵の上に住ふ。

磯浪　はい／＼、かしこまりました。

と女童から亂れ箱を受取りて、濡れ緣づたひに、上手の續き家體へ入る。

白妙　（忠吾に）忠内から、もうそろ／＼、先き觸れがありさうなものぢやなう。

忠吾　へい、さやうでございます。もうかれこれ（と空を見て）申の刻にも程なからうかと存じますのに、弟め、何をしてをりますやら？　花房からは、たかゞ一里の途程でございますのに、どうして斯うお着きが遲いのでございませう？

白妙　お出で遊ばす途々に、きつと多勢の信徒の者がお出迎へ申してゐて、めい／＼お珠數を戴かうとしませうから、お着きの遲いのは當然ぢやが、……（といひかけたが、ふと女童を見返つて）おゝ、刈藻にさういうて、すぐお藥湯を上げることを忘れぬやうに吩咐けておいで。

女童心得て、上手の家體へ入る。

忠吾　返す／＼も、殿さまが、かう忽ちの中に、御囘復遊ばしませうとは、全く思ひがけませんことでございました。殊に今日はお元氣のやうに存せられます。

白妙　御自身では、もう湯浴をも遊ばし、お髮をも剃らせたいやうなお元氣なのぢやが、やう／＼のことで、ま、それだけは止めました。只そつとお體を拭ひ淸めて、お髮に櫛を入れ、召し物を召させ換へるだけにしておきました。あゝ、それに附けても、若しわたしが、あの伊豆の伊東で、不思議の御結緣をいたゞいて、有りがたい御敎化を蒙りませなんだら、夫の身は、今頃、どうなつてゐたか知れません。ほんに有りがたいことであつた。南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！

と小聲で唱へながら、居直りて、曼荼羅を拜むこと。

忠吾も地上に蹲踞して同じく合掌する。

忠吾　これが若し、初めッから殿さまが御信仰でいらつし

やいましたなら、それこそ今時分は、御自身でお迎ひにお出掛けになつたくらゐでございましたらうに。

白妙　さア、父上とは異つて、早くから學問にお心をお停めなされて、和漢儒佛の有りとある書物にお目を曝し、何事も自身で視、自身で聽き、斯うとお思ひ定めなされてからでなければ、假りにも否應をおつしやらぬお氣質。それゆゑ伊東から歸つて以來、隨分、わたしが心を籠めて、手を換へ、品を換へて、愍ろにお勸め申したけれども、あの九死に一生といふ間際までは、どうしてもお題目をお唱へなさらなんだ。もうこれならばと全く安心しましたのは、實は、やつと此十日ばかりの事ぢやわいの。

と此時上手奥の妻戸口より領主工藤左近丞吉隆（三十四五歳）重病後の體にて、髭はばう〳〵と延びて居り、髮もみだりがはしく長くなつてゐるのを、ざつと櫛つて束ねたといふ茶煎髷、烏帽子なし、直垂。まだ獨りでは歩かれぬらしく、侍女刈藻と他の一人（渚、幕あきに出て居た侍女）とに介抱されて出て來る。それを見て、白妙は立上りて迎へながら

白妙　おゝ、嘸よいお心持にお成り遊ばしましでございませう。

吉隆　あゝ、氣分だけは全く爽かになつた。只、まだ息が切れて、四肢が思ふやうに働かんのが殘念ぢや。（此間に刈藻が引立烏帽子を吉隆に冠らせることある）

忠吾　それは其筈でいらせられます。お氣短かに遊ばしちやいけません。

吉隆　（曼荼羅を一拜して、後に茵に住ひて）　まだお見えにならんか？

白妙　只今も其お噂をいたしてをりましたが……もう申の刻に程もあるまいと存じますのに、どうして忠内からの知らせがございませんやら？　（と懸念の思入）

吉隆　もつとも、途中でお手間が取れるでもあらう。あちこちからお出迎ひをするであらうからなう。

白妙　わたくしも多分さやうかと存じますけれど……

吉隆　（歎息して）　あゝ！　これほどまでに貴賤上下が擧つて隨喜渇仰する生き如來同然の大聖人をば、かりそめにも疑ひ奉つたのは、思ひ出すにつけて、實に相濟まんことであつた。物體ないことであつた。「信あつて解なければ無明を增長し、解あつて信なければ邪見を增長す。信と解と圓通して正の行の本となる」と涅槃經に說きおかせられたのを讀んだのは、今からもう十年も昔であつたらうか、……憍慢の心や曲れた心を抱いて讀んでは、どんな貴い金言も、いかな聖語も、身にはならん。燒石を走る水ぢや。生齧りの學問が予の半生を誤つた。同じく涅槃經であつたと思ふが、「正しき法を聽くに因あり、

曰く善き友に近づくなり」と言つてあつたと思ふが、きのふけふになつて、お前さんが、その予の善き友であつたのぢやと、やう／＼氣が附いた。お前さんがなかつたなら、身體こそは利かなかつたれ、根性は、あの平の左衛門や東條の景信なぞと、あんまり隔てのないまゝで、命を終つて、無間の苛責を受けたかも知れん。あゝ、危かつた、危かつた。

と白妙は嬉し涙を拭ひつゝ

白妙　さうおつしやられると、物體なうございますけれど、またと如是嬉しいことはございません。實は、先年、伊豆の國で、お上人さまに初めてお目もじいたしました時、いろ／＼お教へを賜はりました末に、妙莊嚴王品といふお經をばよう讀んで見い。あれは取りわけお前がたの爲に大切なお經ぢや。妻が夫に勸めたことが書いてある。末代とても、女房が夫を勸めて正しい法に入らしめる功德は、あの中に見えてゐる淨德夫人のそれと少しも異ることはないぞ」と仰せられて、くれ／＼もお勵まして下さいました。其お訓へを力に、幾度も御機嫌を損ねてまで、申し上げて見た效があつて、只今のお言葉。生れてこのかた、こんな嬉しいことはございません。

といひ終りて、又暫く涙に暮れる。一座寂となる。刈藻も忠吾も口の中で頻りに題目を唱へてゐる。

此途端風もないのに、曼荼羅がばたりと落ちる。

白妙　おや！……

と立上りて曼荼羅を取上げ、押戴いて再び揭げようとして、紐の切れてゐるのに氣附き、不審の思入。

脫れて落ちたかと思うたに、つい先刻まで、何ともなかつた此新しい紐が切れたのは？……

と紐を結び合せて元の通りに掛ける。刈藻手傳ふ。皆皆不安の思入。

白妙は座に戻りつゝ

忠吾、よもやもう、つい間近までお渡りになつてゞらう。お出迎ひに往つて來ておくれ。

忠吾　かしこまりました。

と會釋して下手へ入る。

吉隆　（不安げに）先日忠内が歸つて來ての噂話によると、東條の一家の者が、此間の暴擧以來、ます／＼大聖人を憎み奉つて、種々惡計を運らし、何かの機會を待つて仇をしようとしてをるといふやうに聞いた。……どうか、今日お出での途中なぞで、何事もなければよいが。

白妙　それをお案じ申しまして、忠内の外に、權次と七郎とをお警護のため遣しておきましたけれど、又お傍には、あの大力の鏡忍どのも居られますけれど……（と懸念さ

うにいふ。吉隆も心配げに）
吉隆　萬一、多勢(たぜい)を以て襲ひ奉るやうなことがあつた時分には……
　と此少し前より下手奥の方で人聲段々かしましくなる。幕あきの僕の聲にて「氣違ひでございませう。叩き出してしまひませう」といふ意味のことを繰返すと、忠吾の聲にて「まア待て。そんな手荒いことをするな。吃りらしい。奥さまに〳〵といつてゐるから、ともかくもお庭まで通してやれ」といふ意味の問答次第に聲高に聞え、とゞ一人の若き女、まるで狂人の如くに髪を振亂し、みだりがはしい姿にて、下手から駈け入る。それは小草である。右の手は、前の場で打挫いたので殆ど働かぬやうになつてゐる。
　つゞいて忠吾も出る。
忠吾　申し上げます。狂人(きちがひ)だか、吃りだか、よくは分りませんが、何だか奥さまへぢき〳〵申し上げたい一大事があるらしうございますから、ともかくも召連れましてございます。
白妙　（見て）おゝ、其娘は、たしか先月蓮華寺の門前で逢つた東條どの方の召し使ひの……
　と言ひかける。
小草　おッくさま！　た、た、たッ、たいへんでございます。に、に、にッちれんさまが、……お、お、お……
　といひかけたが、あとが言へず、只顔を眞赤にして、頻りに向うを指さし、膝を叩き身をもだえ、目を白黒(しろくろ)させて、喉を掻きむしり、悶える。
白妙　え？　なに、日蓮さまが！
吉隆　なに？　日……！……
　と夫婦とも覺えず膝を進める。白妙は緣端(えんはな)まで進みいでゝ
白妙　え、日蓮さまが何と遊ばした？
吉隆　え、何となされた？
白妙　さ、早うお言ひ。……え、どう遊ばしたのぢや？
吉隆　さ、早く言へ。何となされた？
白妙　さ、早く〳〵。
吉隆　さ、早く言へ。
　とせき立てる。小草はいよ〳〵悶える。
忠吾　（主人夫婦を止めて）あ、もし〳〵、吃りらしうございますから、おせかし遊ばしますと、尚ほいけません。……ま、暫く、……どうぞ暫く。……（と小草に向つて）こら、女、ま、落ち着け〳〵。
吉隆　渚、早く水をやれ。水を。
渚　はい〳〵。
　渚、急いで襖の奥へ入る。

吉隆　（つと起き上らうとして、よろめき、餘儀なく又下にゐて、言葉靜かに）こら、女、日蓮大聖人のお身の上に、何事か變事が起つたのか？

白妙　こちらへお出での途中で、何事かあつたのか？

小草　と、と、と、と……とう……

吉隆　なに、とう？

小草　と、と、と、と、とうぢよッ！

皆々　え丶！　東條！

と駭く。此時渚、天目に水を湛へて持つて來て、小草に飲ませようとする。小草待ちかねたやうに、それを急いで左の手で受取つたが、うつかり右へ移さうとして忽ちばたりと落す。渚は天目を拾ひもあへず、急いで又奥へ入る。これにて小草は、いよ／＼焦り、せけばせくほどいよ／＼吃つて、物が言へぬ體にて、又も喉を掻きむしり、さま／＼に身を踠いて、悶え苦しむ。白妙見かねて、ふつと思ひ附いたらしく急ぎ曼荼羅を取りおろし、押戴き、やがてそれを持つて庭上に降り立ち小草の傍へ寄つて

白妙　これ、娘、これをお見、これを。日蓮大聖人さまがお手づからお書き遊ばした世にも有りがたい無作三身のお題目のお曼荼羅ぢや。どんな難病でも、業病でも、このお曼荼羅を戴けば、いつとなく跡形もなう平癒する其證據は、あれ、あの通り、現に我夫が九死の中に一生をお拾ひなされた。いや／＼、そればかりではない、此御本尊の御利益によつて、目盲さへも目が見え、躄さへも腰が立ち、啞さへ物を言うた。わたしが今、一心不亂の祈願を籠めて、此お曼荼羅をいたゞかせるほどに、眞實、お聖人さまのお爲を思ふなら、そなたも、一心不亂になつて、信仰を籠めて、一所懸命に祈つておいで。……よいか？……よいか？

と曼荼羅を見せつ丶言ひ渡す。小草はじつと白妙の顏を見上げて聽いてゐたが、呑込んだ思入、科介よろしくあつて、じつと目を閉いで、合掌しようとして、利かない右の手を左の手で手傳つて胸元へ持つて來て、やつと合掌する。と白妙は、徐かに曼荼羅を卷き收めて、押しいたゞき、目を瞑り、又暫く祈願を籠めることよろしくあつて目を開き、口の中にて

白妙　南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！

と唱へつ丶、先づ小草の背を撫て、口邊を撫て、喉を撫で、兩肩から兩腕へと撫でおろすこと十數回にして娘、今わたしが改めてお題目を五たび唱へる。其五つ目が濟むと一しよに、急がず、せかず、何でも言ひたいことを言つて御覽。必ず言はれる。思ひ通りに屹と言へる。決して疑ふことはなりませんぞよ。……よいか？……

さ！……南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！……

と五回唱へ了る。と此間小草はぶる／＼顫へつゝ瞑目してゐたが、終ると目を開いて

小草　東條の人達が、只今、日蓮樣を殺さうとしてをります。

と一氣に、爽かに言つてのけて、自分でびッくりし、だれか他の者が物を言つたのではないかといふ風に呆れて、思はず、ほッと息を吐く。

皆々　えッ！　日蓮さまを？（と覺えず一同聲を合せる）

小草（もう十分の自信を得て、つか／＼と前へ進んで）つい一時ばかり前の事でございます。けふ此方へ日蓮さまが、お出で遊ばすといふことを、急いで知らせに來た人がございました。すると、邸中俄かに大騷ぎになりまして、弓だの、長卷だのを衆人が持出し、お地頭の殿さまは馬に乘ッかつて、小松原で以て待伏せしてゐて、日蓮さまを殺してしまふといつて、百五十人からの御家來衆が、ついもう出掛ける準備をしてをりました。

吉隆　え、あの小松原で？……若しやそんな事が有りはせんかと案じた通りに……こりや斯うしちゃをられん。（といひも敢ず突と起つて、奧へ行かうとしたが、すぐ轉び、更に起たうとして起てぬ思入）えゝッ！　くちをしい！（と大息をついて）心ばかりは逸つても、體が利かんか！……えゝ、何といふ殘念なこッた！（と又幾たびも起ちかけては倒れて煩悶する。皆々之を見かねて介抱しつゝ氣を揉む。吉隆はくちをしげに）せめて、馬にでも乘られるなら、今から直に小松原へ駈け附けて、御難儀をお救ひ申すものを！（と切齒して）……忠吾、ともかくも馬を牽け！　馬を！　おれの體を鞍壺に縛り附けて連れて行つてくれ！　邸に居る者を皆な呼べ！……皆な呼べ！……

これより先き、渚は再び天目を持つて出て來たが、此樣子に駭き、立つたまゝ、うろ／＼してゐる。吉隆それを見て

刈藻、其太刀をこれへ！　渚、奧へ往つて、早く何を持つて來い！　あの何を！　長卷を！

忠吾は下手へ、渚は大急ぎで奧へ入る。此以前、白妙は小草の流暢に物を言ひ出したのにも駭き、又知らせにも駭き、夫が右の如く煩悶する白の間に、共に「如何しようか？」と煩悶する思入と科介とをしてゐたが、此時、何か急に決心する所あるらしく、急ぎ二重に上り、又も起ち上らうとして臥し轉び、煩悶するうち、頻りに病苦が萠した體にて大息を吐いて苦しむ夫の傍に進み寄つて、介抱しつゝ押しなだめて

白妙　もし、あなた、お氣をお鎭め遊ばせ。そんなに御煩

配遊ばすと、又御病氣が募ります。（此うち、諸長卷を持つて出る）決して御心配遊ばすな。女ではございますが、工藤行光の女でございます。わたくしが、あなたに代つて、今から直に、忠吾其他居合はします者共を召連れまして、小松原へ駈け附け、必ず御上人さまをお救ひ申します。必ずお救ひ申します。決して御心配遊ばしますな。……けれども、斯ういうてをるうちも心がせく。刈藻、早く馬をこゝへ牽けとお言ひ。準備がまだ整はんやうならば、忠吾だけ來ればよい。早く早く！……

刈藻急ぎ庭に降り立ちて、下手へ入る。

と白妙は小草に向つて

娘、そなたは何時彼方を出た？　其時に、多勢はもう出掛けてゐましたか？

小草　いゝえ、まだ其時は、用意最中でございました。わたしら親子は、日蓮さまを御信仰しました咎で、其時物置へ投り込まれてをりましたが、内庭を駈けずり廻る御家來衆の口占で、日蓮さまを途中で待伏せしてゐて、殺す企だといふことが分りました。それで、父が氣を揉みまして、早く此事を天津の殿さまへお知らせしろ、おれは先刻打ちのめされたので、體が痛くて、迚も十町とは歩ばれんから、おのし命がけで、駈けッて往つて、此事をお知らせしろ、早く〳〵、とさう言ひまして、齒で繩を喰ひ切つてくれました。其後で……（といひかけて、さめ〴〵と泣きながら）父は殺されッちまつたかも知れませんけれど、ぐづッかしちゃゐられないから、其儘夢中で突走つて來ました。けれど此手が……（といつたが、痛くないので、驚き、動かして見て、自由に動くのを見て、いよ〳〵驚きながら）其時には、痲痺れッちまつて、ちッとも役にゃ立たなかつたから、字を書くことも出來ないし、只氣ばかりあせつて、赫となつて、尚ほと口が利かれなかつたのに、こんなに自由に物がいへて、……此手まで癒つてしまつた！……あゝ、うれしや〳〵！

と喜ぶ。此うち白妙は、曼荼羅を元の如く掛物かけに揭げおきて、甲斐々々しく身支度する。と小草は、其曼荼羅に目を附け、急に居ずまひを直し、うや〳〵しく合掌して

あゝ、有りがたや〳〵！　あゝ、有りがたや〳〵！

と繰返しつゝ喜び泣に泣く。此時忠吾甲斐々々しく身支度して下手より馬を牽いて出る。刈藻も、腰に刀をさして共に戻つて來る。

忠吾　折あしく、お役に立つ者は只兩三人しかをりません。只今支度いたさせをります。

白妙．刈藻！

刈藻　はッ。
白妙　磯浪には言ひおく暇がない。そなたから様子を傳へて、殿の御介抱を頼みますぞ。……我夫、御免下さいませ。
　と長巻を小脇にして、縁端に進む。小草は之を見て、つか／＼と進みて
小草　奥さま、どうぞ、わたしにも、お太刀を一本借して下さいまし。お助太刀をさせて下さいまし。
白妙　おゝ、けなげな、感心な志しぢやが、そなたが往つたとて、何になりませう？：忠吾馬を。……
　と既に馬に乘らうとする。此間吉隆は、病苦はやゝ收まつたらしいが、尙ほ片手を突いて俯向いたまゝでじつとしてゐる。と上手の妻戸をあけて、老女磯浪が、縁側傳ひに、轉倒ろやうにして駈けて來る。
磯浪　あ、もし、奥さま！　暫く／＼、暫くお待ち遊ばして下さいませ。……暫く暫く！
白妙　あわたゞしい！　何の用ぢや？
　と磯浪は縁端に駈け寄り、恰も馬に乘らうとする白妙の袂をひかへて
磯浪　奥さま、お氣でもお狂ひ遊ばしましたか？　ま、どこへいらつしやるのでございます？
白妙　そなたはまだお知りでない筈ぢやが、日蓮上人さまのお命が、仔細あつて、あぶないのぢや。それゆゑ、今、夫に代つて……かういふうちも氣が氣でない。……お離し、えゝ、お離しといふに。
磯浪　そりや、ま、とんでもないことでございます！　けれども、ま、どうして貴女がお出でになることが出來ませう？……もし、奥さま、貴女は御、御姙娠のお體といふことをお忘れになりましたか？
白妙　え！……（と駭いたが、ひつこたへて）たとひ姙娠中であらうと、何であらうと、お上人さまの御危難をお救ひ申さずにをられますか？　お離し。
磯浪　いゝえ／＼、只の御姙娠ならばともかくでございますけれど、もし、今月只今が……御臨月でございますぞ！
白妙　えゝッ！
　と思はずよろめいて、たぢ／＼と後退りしたと見るうちに、顏色が變つて、覺えず持つてゐた長巻を縁下へ取落し、疊敷の上へ尻居に倒れる。磯浪も刈藻も驚いて、駈け寄り、介抱する。
磯刈　奥さま！　奥さま！
　此時小草は落ちたる長巻を取るより早く一散に下手へ走つて入る。と白妙は、俄かに産氣附きたるらしく、頻りに苦悶する。磯浪らはそれとは心附かぬ體にて、只さま／＼に介抱する。
　此途端、下手より北浦忠内、幾らか手疵をも負うたら

しき體にて、驅け込み來り

忠内　大變でございます！　大變でございます！

といひながら、庭上にうづくまり、息ぜはしく喘いでゐる。

此以前、吉隆は、暫くはじつと俯向いたまゝてゐたが、小草が長卷を拾つて驅け去る時はじめて顔を擧げて、それを見て、深く感激したる思入。急に曼荼羅の方へ向き直り、合掌し、何事か專念に默禱してゐる。忠内の注進を聞いても振向きもしない。白妙は苦しき息の下から

白妙　おゝ、忠内か？……上人様は御無事か？……お落し申したか？

忠内　では、もう、何もかも御承知でいらせられますか？　權次と七郎と鏡忍坊どのが必死となつて防ぎをります間に、手前が一方の血路を切開きまして、お上人さまをお弟子お二人とお伴をして、一旦は首尾よく五六町落延びましたが、忽ち又新手の者に追ひ詰められましたので、今度はお上人さまをお二人にお任せしまして、私は踏止まり、手負ひになられた鏡忍どのに力を合せてともかくも再度追手を追ひ遣けましたが、最期の鏡忍どのを介抱してをりますうちに、とう〳〵お姿を見失つてしまひました。何とも申しわけがございません。或ひは、道が違つて、こなたへもうお着きかとも存じましたゆゑ、お知らせかた〴〵、立歸りましてございます。

と息ぜはしく語る。白妙は之を聽くと、苦痛が一層加はつたらしく悶える。磯浪、刈藻はじめてそれと心附いたらしく、抱きかゝへて、急に席を移し、屏風にて圍ふ。此途端、默禱してゐた吉隆は、遽かに向き直り、突立ち上つて、勇ましき聲にて、今屏風にて圍はれんとする白妙を見返り

吉隆　白妙どのも、忠吾も、忠内も、皆の者も、もう決して心配するな。……（といふや否や突と起つて、傍の弓を取り、仁王立に突立つて）これを見い。妙法蓮華經の無量廣大なる靈驗によつて、吉隆が未練の病魔は、委く身を離れた。無智蒙昧の、不具者同然の少女すらも——女わらべすらも、——六尺の大丈夫を顔色なからしむるは、ひとへに一心不亂、不惜身命の信仰の力ぢや！　平生の迷夢が今日となつて全く覺めた。（といひつゝ甲斐々々しく身支度して、太刀を佩くことなどありて）忠内も忠吾もつゞけ。同じく死ぬにも大聖人のお身代りとなつて、法華經のおんために死ぬほどの大光榮が、又と、いつ、どこにあらう？……これを予の旗印に。

と曼荼羅を脫し、押し戴き、それを弓の末弭に結び附けて流旗の如くにして、手に持ち、緣端に進みいでゝ、

すぐに馬に跨りながら、屛風の方を見返り
白妙どの、必ずお案じなさるゝな。今に吉左右を知らせますぞ。それ！

といふと共に駈けいづる。此途端下手より家來二人身支度して走り出で、忠內、忠吾と共につゞく。

——幕——

第五幕

第一場　小松原の附近

時は前の幕の結末よりも少し前の心。處は小松原附近の林間の路。（道具幕）。こゝへ二人の農民らしき壯夫（第一と第二）が下手から駈けて出て上手へ進むと同時に向う（揚幕）からも二人の村民らしい男、（第三と第四）が駈け出て、先きへ行く第一と第二とを呼び止める。

第三人　こうら、そけへ行ぐは、平十どんでねえんか？
第四人　平十どん／＼！
第一人　（立止まつて）だッだかと思つたら、五作かい？
小松ッぱらで軍が始まつたちふが、聞いたかい？
第三人　あんでもハァ坊さまが五六十人ぶッ殺されたッてさア。
第二人　あにが起つたゞなア？
第四人　あ、向うから多勢がやつて來たゞ。あの者共に聞いたら分るべい。

と上手から第一幕に出てゐた老弱男女の中の者、泣きながら、後ろを見返り／＼逃げて來る。男性の老人が甲乙二人、老女が一人、他國者らしい四十年輩の尼が一人、中年の男、丙丁、別に若い娘が一人、都合七人、老人の一人は手疵を負つてゐる。

第一人　（一同を迎へて）あア、こうれ、小松ッぱらで、あに事か起つたかね？
第三人　軍がおッぱじまつたかね？
甲の爺　（水鼻を涙と一つしよに啜りながら）大變な事が起つたゞよ。（と言つたが、忽ちべたりと下にゐて）生き佛さまが、生き佛さまが／＼！　どうしべい／＼？　南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！
第二人　え、生き佛さまが？
第四人　生き佛さまッちのは、坊さまけい？　それがあじよしたゞ？
尼　（泣きながら）足下たちは、花房にござらつしゃるあの日蓮さまを知らしゃりませんかね？
第二人　あゝ、あの偉いお上人さまか！　知つてる／＼。

其人がおじよしたゞ？
尼　（泣きながら）今日なア、其生き佛さまがなア、天津の御領主さまん許へ御教化に往かつしやらうとてなア、お弟子たちやお迎ひのお侍ひ衆やと一しよに、わしらも皆なお伴をして、花房を出たのは、……まだ八つ下りだつたなう？
甲の爺　さうだ。初手は七つ下りにや天津へ行き着いてる積りだつたけども、途中で手間ア取つたゞから、小松ッ原へかゝつたのが、もう彼れ此れ七つ下りだつた。
尼　で、何の氣もなしに、お題目を唱へ／＼して、あの松原の中ほどまで行くとなア……
丙の男　をかアしげに空が昏アくなつて來て、雨が落ちて來たわなア。
丁の男　ところが、雨かと思つてゐるうちに、箭が霰のやうに飛んで來たゞ。
乙の爺　こうれ、見てくれやッしえい。こゝへそれが、ずぶりッと立つたゞよ。
丙の男　それから、わアッといふ聲が聞えたかと思ふと、其薄昏い中を、ぴかッり／＼、おッそろしい刃物を振廻し／＼して、右ッからも左ッからも多勢の怖い武者が突出て來たゞ。
尼　こはかつたなア！

第一人　一體そらア何んだね？　物取りかね？　野武士かね？
第二人　幾人ぐれゐ居たね？
甲の爺　あんでもハア、二三百人は居たッぺよ。
第三人　ようまア足下たちや助かつたね？
甲の爺　逃げるにも逃げられねえから、みんな松原の蔭へ平伏つて隱んでゐたゞ。
乙の爺　鏡忍坊さんなんかは、初ッぱなに箭を三本も受けさつしやつたつけが、それでも素ッ晴しい働きをさッしつただ。敵の武士の首ッ玉が、十も十五も、ひゆう／＼と、中に飛ぶのを俺目の前に見たゞよ。
第一人　それで、お上人さまは如何うさしつたかね？
丁の男　鏡忍さんとお迎ひのお侍ひが働いてゐるうちに、何でもお弟子が二人附いて、逃げさつしやつたやうだつけが、助からしつたかな？　あじよたかなア？
女　大かた駄目だんべいよ。あんたに多勢で取巻いちまッたゞからなア！
老人連　南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！……
此時奥にて鬨の聲。
第一人　おう、あらア、ついそこらだッぺ。
第二人　こうらまでやつて來たかも知んねえ。

第三人｝
第四人｝往つて見べいか？

第一人　うん、いつて見べい。さ、早や來う！　早や來う！

四人上手へ駈けて入る。他の者共は泣く／＼下手へ入る。

又鬨の聲。其餘響の消え去らぬ間に道具幕を切つて落す。

第二場　小松原の一部

前と同時刻。一面の平舞臺は小松原の心にて、間近く連山見え、低き丘あれど、大體より見て平地ともいふべき名の如き小松原。どこからも通行が出來るゆゑ、道は四通八達といつてもよい。時雨は今は全く霽れ上つて、大分高いところに出てゐる十一日の宵月は、浮雲に屢々遮られて、四下時々薄昏くなる。こゝに、中央に日蓮上人、僧衣に袈裟を掛け、手に珠數を持ち、立身、其の上手に長英坊、乘觀坊の二人が、二人とも幾らか手疵を負つた體にて、長英は戒刀を、乘觀は敵から奪つたらしき白刃を提げてゐる。

長英と乘觀とは膝まづいて上人を諫め止めてゐる體である。

乘觀坊　物體ないことを仰せられます。（といつたが、感極まつてか、あとを續けかねる。と）

長英坊　（が引取つて）どうぞこゝは、私共にお任せ下さいまして、どうぞ是非お落ち遊ばして下さいまし。

日蓮　いや／＼、さうでない。鏡忍を見殺しにした上に、お前らまでどうして見捨てることが出來よう？　はじめから法華經のために獻つた此命を、正に法華經のために失ふといふ、これほどの悦びが又とあらうか？　人間はだれしも一度は死ぬものぢやが、斯ういふ死に方は、一切衆生を生き返らせる死に方で、最も望む所ぢや。お前らも最早手向ひは決して無用ぢや。題目を高う唱へ唱へして命を終らう。

乘觀坊　（泣きながら）鏡忍はじめ私共にまで、それほどの御憐愍をお掛け下さいまするは、有りがたいとも、忝けないとも、申し上げやうはございませんけれど、日本國の只一本の大柱ともお頼まれ遊ばす大聖人が、こんな鼠輩のために大切なお命をお捨て遊ばすべきぢやございません。是非ともお落ち遊ばして下さいまし。

長英坊　もうこゝから天津までは、たかゞ十一二町でございます。あそこへお落ち遊ばすまでは、きつと私共が防ぎます。どうぞお落ち下さいまし。

日蓮　いや／＼、其志しは嬉しいが、此上お前らを見殺しにすることは、どうしても出來ん。お前らと一よしに死

なう。

乘蓮坊　其お慈悲のお言葉は、失禮ながら、大日本國をお忘れ遊ばしたお言葉でございます。國家の爲でございます、是非ともお落ち下さいまし。（泣きながら言ふ）

日蓮　いや〳〵、法難の爲に死ぬのが、それが卽ち國の爲ぢや。

此時又鬨の聲。

長英坊　あゝ！　もうやつて來ました。

長英は、無理に上人の手を取つて、下手へ伴はうとする。上人は行くまいとする。此うち上手より東條の兵共、或ひは腹卷姿、或ひは前幕の狩裝束のまゝにて、手々に長卷其他の武器を振翳し、おひ〳〵に追ひ迫つて來て、競ひかゝる。乘觀坊は太刀を振つて之を逆襲し、忽ち追返し、尙ほ追擊しつゝ上手へ入る。此間に長英坊は無理に上人の手を引張る。上人は、目前逆襲して働いてゐる乘觀の志しを無にもならぬといふ思入で、長英に引かれて下手の奧へ入る。

と乘觀が拔駈けする敵三四人を追駈けて、又上手から出て來る。其中に敵勢は次第に加はる。乘觀危くなる。と長英が下手奧より駈け戾つて來て、それを救ひ、二人にて苦戰し、とゞ乘觀は上手へ、長英は下手（花道の方）へ敵を追ひ靡けつゝ入る。二僧とも、始終「南無妙法蓮華經」を口の中で唱へつゝ戰つてゐる。

舞臺が空になると、上手のやゝ奧の方の丘の蔭より東條左衛門の尉景信、服裝は前の幕の狩裝束のまゝだが、頭は侍烏帽子をいたゞき、馬に跨り、手に白刃を提げて眞先きに駈けて出る。少し後れて、其後から、天面五郞がつゞいて出る。中央まで來ると、景信は馬を止めて、あちこちを見廻すことありて

景信　坊主め、どこへ行きやがつたか？　まだ然う遠くへ行く筈はない、どつかに隱れてゐるに相違ない。逃がしツちまつちや殘念だ。どつちへ行きやがつたらう？　五郞、そこいらの松の蔭を搜して見ろ。

天面　かしこまりました。

と其邊をあちこちと搜し廻る。此うち景信は、下手の奧を透して見て

景信　むゝ、たしかに坊主らしい後ろ影があそこに見えるぞ。五郞、つゞけ！

と馬に一角入れる。途端に、舞臺を薄昏くして、又鬨の聲を聞かせ、よきほどに明るくする。と

第三場　小松原の他の一部

前とほゞ同じ樣な松原。但し前のよりも多少丈の高きひよろ松が簇生して、林の形をなしてゐる部分。月の

在り處も、前の場とは異つてゐる。

こゝに中央のやゝ下手寄に、下手へ向いて日蓮上人、前の場の通りの服裝にて立身、其前に、土下座して、上人を仰ぎ見て、何事か訴へてゐるらしいのは小草である。これも前の幕と同じ風體。少し下手の其脇に長卷が置かれてある。

日蓮　それは殊勝なことぢや。それほどに思うてくれるのは嬉しい。禮をいひますぞ。けれどもわしと一しよに行くのは危ない。途はよう知つてをる。わしはやッぱり獨りで行く。殊にそんな刃物なんかは持つてをらんはうがよい。そこへ棄てゝおいて、早うこゝを離れなさい。

小草　お上人さま、いゝえ〳〵、それはいけません。まだどんな亂暴な者が追つかけて來るかも知れませんから、わたくしがお伴します。さ、早く、すぐお出掛けなさいまし。もう少ゥしいらつしやれば、本海道へ出ます。きつともう天津の殿さまがお迎へに來てゞございます。もうすぐでございます。さ、早くお出かけなさいまし。

此途端、上手にて、東條景信の聲にて

景信　しめた！　たしかに日蓮だ！　五郎、つゞけ！

と叫ぶ聲が聞える。小草覺えず長卷を取つて突立ち、上手へ廻る。上人之を止めようとするうちに、上手より東條景信、前の場の通り、馬を走らせて出で來り

日蓮坊主、そこ動くな！

といひもあへず、太刀を振りかぶつて切りかけようとする。小草、咄嗟に上人を押隔て、我武者羅に長卷を振廻して景信を遮る。景信いらつて

えゝッ、邪魔するな！　どけ〳〵！

と流石に、切り下しもしかねて、二三度長卷を撥退けたが、尙ほうるさく遮るので、大いに怒り

えゝ面倒な！

とむれ打をくらはす。これにて小草は「あッ！」と叫んでよろめき、長卷を取落してばつたり倒れる。これより先き、上人は小草を止めかねて觀念し、傍らの松蔭に佇立みて小草の殊勝な働きを打まもつてゐる。小草が「あッ！」と叫んで倒れると、景信は突と馬を驅け寄せて、切つてかゝる。上人は景信が小草を切り殺したと思ひ、憤激し、今驅け寄る景信をはつたと睨み

日蓮　無道人めが！

と一喝する。と馬は、物におびえたやうに、たぢ〳〵と後退る。此うち小草は又むつくと起き上つて、驅け寄り、馬の尻尾を摑んで手強く引く。馬あばれる。景信もてあます。途端に天面五郎が驅けて來て、此體を見るや否や、小草の肩先きを一刀に切り下げる。これにて小草は尻尾を離して、倒れかけたが、踏みこたへ

て、落ちて居た長巻を拾ふや否や

小草　南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！……

と高聲に唱へながら、無我無中の體で、五郎に切つてかゝる。五郎あしらひかねて花道の中程まで退る。此時景信は再び上人の間近く馬を進めて

景信　邪宗を宣傳して愚民を惑はし、剰へ天下の政道を亂さうとする妖僧日蓮、覺悟しろ！

と言ひもあへず、上人に切つてかゝる。上人は之より先き珠數を操つて徐かに「妙一」の九字を切り了り、早速に珠數の母珠にて景信の恰も切り下した一刀を受ける。と母珠が割れたらしく、太刀先きが上人の額に及ぶ。はずみに珠數を落して、片膝を地に突く。景信二の太刀を打下さうとする。此途端向う（揚幕）で遠く矢聲が聞えて、一箭飛び來つて、景信の馬の平首に立つ。これにて馬が逆立となりて、景信は落馬する。と馬はすぐ上手へ驅け去る。此時、小草は五郎に又一太刀切られて、長巻を落し、倒れる。五郎は景信の落馬を手を負うたと誤解しあわてゝ肩に掛けて、上手へ急ぎ退き去る。上人はしづかに起上り、額の傷を懐中紙を取りいだして拭つてゐる。

と向う（揚幕）より、工藤左近の孫吉隆、前の場の服装にて、題目曼荼羅を結び付けたまゝの重藤の弓を脇ばさみ、騎馬にて、北浦兄弟、外二人を隨へて驅けて出て、月の光りにて松林の方をきつと見て、上人の無事なのを見つけ

吉隆　おゝ。御安泰だ！……

と片手に天地を拜して、家來を顧みて

喜べ！　見ろ、上人は御無事でいらせらるゝぞ！　つゞけ！

と本舞臺へ來り、急ぎ馬より飛びおりて、上人の前へ主從一同平伏する。吉隆は上人を三拜して

いまだ親しくはお結緣を蒙りませんかつたが、手前儀は天津の工藤吉隆でございます。御危難と承はりまして、取るものも取りあへず、驅け附けましてございます。御安泰であらせられまする尊顔を拜しまして、此上の喜びはございません。手前參りました上は、恐れながら、必ず御安心遊ばしませ。

日蓮　左近どのでござるか？　まだお臥床中と承りをつたのに、早速の御來護、かたじけなうござる。

吉隆　（と此時吉隆は上人の手疵にはじめて目をつけて、大いに愕き）や！　上人にはお手疵を負はせられましたか？　それ、忠吾、手おくれにならんうちに。

日蓮　（制して）いや〳〵、決して御心配なさるな。こりゃほんのかすり疵ぢや。……わしよりも弟子の者兩三

人、わしを落さうとて、今またあちらで、多勢の敵と苦戰してをる。或ひはもう落命したかも知れんが、どうか彼れらを救つてやつて下さい。

吉隆　ではあのお弟子がたが！　心得ました。すぐさまお救ひ申しませう。では（と北浦兄弟を見返り）汝らは上人をお警護申して、先づともかくも、あれなる鎭守の森まで御案内申し上げて、早速お手疵のお手あてをしろ。おれはお弟子がたをお救ひ申して、すぐあとから行く。萬一手間取るやうであつたら、先きへ鄕へ御案内申せ。……御免下されませ。（と吉隆馬に乗らうとする）

日蓮　（とめて）いや〱。其鎭守への路は心得てをる。御案内には及ばん。それよりも敵は多勢ぢや。御家來衆は是非悉くお連れなさい。小勢では心元ない。

吉隆　お言葉ではございますが、まだ何處にどういふ伏せ勢がをるやら圖られません。臆病を名代の東條の家の子共なんぞが、何十人參りませうとも、忽ち追ッ返して、お伴を致します。……かやう申す間も心がせきます、どうかともかくお立退き下さいまし。どうぞ是非。……（と促すが、上人は動かない）では、せめて兩人だけ。……それ、忠内早く御介抱して御案内をせい。源次もお伴をしろ。（二人は、上人の傍らに附添ふ）

日蓮　それほどにいはれるなら、一足先きへ行きませうが、介抱には及ばん。わしの介抱の代りに、あの少女を介抱してやつて下さい。あゝ憫然なことぢや！

と上人は瞑目して、口の中にて題目を唱へる。忠内寄つて、半死半生の小草を抱き起し、顔を見て

忠内　お、此娘は！……

と又鬨の聲が聞える、其うち吉隆は手早く曼荼羅を彈から脱して卷き收め、押戴きて懷中し

吉隆　さ、早く〱……御免下されませ。

と又馬に跨る。忠内は他の一人と共に片息になつてゐる小草を介抱して、上人を促して、花道より向う揚幕へ入る。

と上手より東條彌八郎を先きに、四方木の兵太隨ひ、新手の兵の心にて、勢ひ込んで驅け附ける。

彌八郎　工藤どのに物申すぞ。各宗を讒謗し、鎌倉どのゝ政道を非議し、魔法を使つて世を亂す狂坊主の日蓮を庇ひ立てめさるからに、お手前は、明白に鎌倉どのゝ罪人でござる。容赦はいたさんぞ。覺悟めされ。

吉隆　さういふお手前らこそ惡宗門の屑を持つて聖僧を讒誣し、何罪もなき良民を無法に殺戮して悔ゆることなき殘忍無慈悲の無道人ぢや。天に代つて吉隆が誅戮する。覺悟なさい！

と弓を投捨てゝ、太刀を拔く。

彌八郎　何を！

東條の兵ら一齊に競ひかゝる。暫くごつちやの立廻り。とゞ東條方叶はず、上手へ逃げる。吉隆主從それを追ひ討ち、共に上手へ入る。又舞臺を薄暗くする。其薄暗い中で遠く又鬪の聲。其聲の消えてしまふ頃。段々明るくなる。と

第四場　小松原附近の鎭守の杜

中央に、小さき神社。其後ろにも、左右にも、年を經た樹木竝び立ち、よき處に鳥居。上手の一隅に御手洗の古き泉。群樹の透間より間近く、海が透けて見える。こゝに中央に上人切り株に腰掛け、忠內は御手洗を酌んで來て、他の一人と共に上人の顏の疵を洗ひ、繃帶を參らせなどしてゐる。下手には小草の死骸が橫たへてある。

忠內　嘸、お痛み遊ばすでございませう。

日蓮　いや〳〵、もう痛みは薄らいだ。お大儀、お大儀。……左近どのゝ事が心懸りぢや。わしはこゝにかうしてをれば大丈夫ぢや。見て來て下さい。

忠內　かしこまりました。

と忠內は他の一人を殘しておいて急いで向う（揚幕）へ入る。と上人はじつと小草の死骸を見やつて

日蓮　あゝ殊勝なのはあの少女ぢや。（と徐かに立寄つて、暫く合掌默禱して）良藥は、其良藥たることを絕えて知らざらん者と雖も、之を服すれば病は癒ゆる。此一少女、生前は無智蒙昧、其命を終はる數刻の前までは、未だ曾て妙經の一語をだに會得せず。況んや其甚深の義理をや。然るに一旦にして妙法の德に感じ、口に南無妙法蓮華經を唱へつゞけて、勇猛壯烈の武士の如くに、妙法の爲に命を獻じ了んぬること斯くの如し。其志しは古への聖者にも劣るべからず。一心欲見佛、不自惜自命、南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！

此時向うより（花道を經て）痛手を負ひて刀を杖によろめきつゝ歩む吉隆を左右より介抱して、忠吉、忠內、又其後よりは吉隆の家來二人に介抱されて、同じく手負ひの乘觀、長英出で來り、やう〳〵にして木舞臺へ來ると、皆々よろしく上人の前に平伏して、會釋する。中にも吉隆は上人の顏を見上げると同時に、嬉しげに打笑んだが、氣がゆるんだらしく、がつくりと瞑目し、もう物は言はれぬらしく、只合掌するのみてある。上人は、痛ましげに其傍に立寄りて、しづかに

吉隆どの！　吉隆どの！

と二度呼ぶと、吉隆は微かに目をあいたが、又忽ち目を瞑ぎて再び合掌する。上人も暫く無言で落淚の體。

皆々も顔を擧げ得ず、泣いてゐる。歔欷の聲も聞える。

上人はこゞんで、吉隆の手を取つて、耳元に口を寄せて

無上妙法の爲に、一身を獻せられた大功德、あツぱれのお手柄でござつたぞ。姿は俗のまゝだが、見事に不惜身命の大行者たる務めをお果しなされた。今ン日只今、日蓮が上人號をまゐらせて日玉上人と呼び申すぞ。……吉隆どの！　吉隆どの！……

これにて吉隆又かすかに目をひらき、にツこり笑み、又目をふさぐ。其間少しも合掌の姿勢を崩さない。

日蓮も或ひは程なく參るであらう。が、若しお手前のはうが前きであつたら、あの世に往つて、立派に、梵天、帝釋、四大天王、閻魔大王らに名を宣つてお聞かせなさい。日本第一の法華經の行者日蓮坊に隨つて法難に身を捨てたとお名宣りなさい。歡んで、お迎へなされうぞ。……あゝ如來の現在にすら猶ほ怨嫉多し。況んや滅度の後をや。身轉法輪、死身弘法。（と唱へ了りて、更に形を改め）今身より佛身に至るまで能く保ち奉る。……南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！……

と唱へつゞける。吉隆落入る。皆々落涙しつゝ、同じく合掌して同音に

皆々　南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！

此唱題目の續く間に、靜かに

――幕――

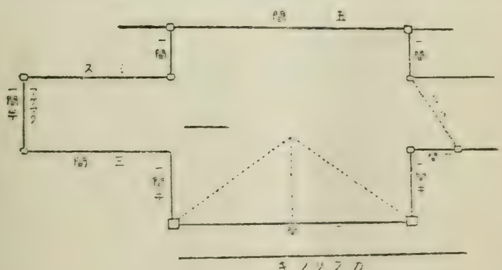
大いに笑ふ淀君（三場）

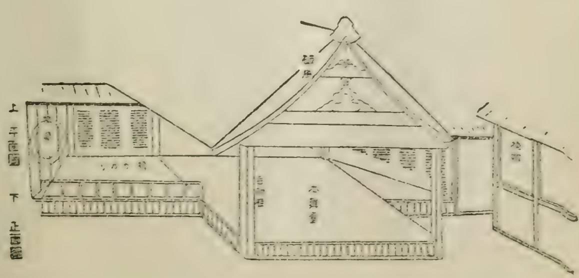
第一場　淀君の御殿
第二場　松の丸殿の居間
第三場　淀君の御殿の庭上、夜の景色

舞臺裝置は延寶頃の歌舞伎舞臺を暗示するを主として、寸尺はほゞ圖面の通り。但し普通の所作用置き舞臺を使つて、それを二重とし、圖面に指定しただけの角柱を取り附け、中央五間の間には、式の如き破風造り。正面奥は、初め二場は、五間の間、桃山式の大襖、高さ八尺餘、幅六尺餘のもの四枚）最後の一場だけは、同じく五間の間に、奥深く所謂漏斗形に御殿の書景。くはしくは尙ほ場ごとに書くことにする。其他はすべて圖面に指定した通り。

第一場　淀君の御殿

幕があくと、橋がゝりから老女右近出る。右近は七十近い大分腰の曲つた老女、隨分の金棒である。少しおくれて茶道野呂利珍阿彌、坊主頭、羽織、着流し、三





「大いに笑ふ淀君」舞臺計略圖

十五六の男、やゝ急ぎ足で出る。

珍阿彌　あ、もし／＼。申し／＼。右近さま。右近のお局さま！（本舞臺まで來て）これはしたり！　もし、右近さま！

と大きく言つて、とんと一つ足踏みをする。

右近　あゝ、びつくりした。おゝ、珍阿彌どのか？　てもま、無作法な。藪から棒に。

珍阿彌　なんの、藪から棒！　さつきから何度呼びかけたか知れやしない。（傍白）困つた聾婆アさんだ。

右近　え？

珍阿彌　いや、困つたことになりましたぞ。殿下のおみ足が遠退いた筈。わるい蟲が附きました。

右近　なに、天からお神輿がお通りになる？　そりゃまたどうして？

珍阿彌　これはいかなこと！（ずつと耳の傍へ口を寄せて、大聲で、切り口上で）此中、殿下が、淀さま御ゝ許へ、ひたと、御疎遠に、お成りなされました、謂はれ、因緣が解りました。

右近（やつと呑込んで）ふん、その謂はれが解りましたか？

珍阿彌　いかにも。お察しの通りでございました。增す花がお出來なされました。

右近　え？

珍阿彌　增す花がお出來なされました。（右近うなづく）しかもそれは、近頃名高い、歌舞伎踊りの名物女、出雲のお國といふ、したゝか者でござりますから、決して御油斷は出來ませんぞ。

右近　なに、あの歌舞伎踊りの、出雲のお國とやらを？

珍阿彌　されば、そのお國を、松の丸さまの御殿へ、毎日のやうにお招き、點火頃からは、チリカラタッポの大陽氣で、さま／＼の踊りを御上覽、剰へ、御自身、念佛踊りとやらを、お習ひ遊ばさうとあつて、毎晩おそうまで、お國自身、お手を取つてのお稽古でござります。

右近（呆れて）ではもう、そのお國めが、毎晩アノ、お手かけ同樣……

珍阿彌　これはしたり！　そこまでは、手前、まだ穿鑿が屆きかねましたて。はゝゝゝ！

右近（獨り言のやうに）あゝ、そんなことにならねばよいがと思うてゐた。お拾ひさまがお出來してからは、北の政所さまもそこのけの此方の淀さまの御威勢。淀さまのお望みとあれば、どんな御無理もわが儘も通るので、だん／＼とお氣隨が募り、果は此間のやうな大ふしだら。なんぼ和子さまに目の無い殿下さまでも、お愛想をお盡かしなさる筈。あゝ、困つたことになつたわ。

珍阿彌　いかさま、あの折は、さすがの殿下さまも、血相を變へて、お立歸りになりました。もう十幾日にもなりませうが、そよとのお便りも遊ばされませぬ。な、もし、隨分と悪性な殿下さま。こりゃあのお國めへ、いよ〳〵お心が移つたのでござりませうぞ。

右近　（獨り言のやうに）去年のお産以來、いかうお氣短かにならせられ、ともすると姫御前のあられもないお拗ちが始まるのに、今此事を申したなら、氣ちがひのやうにお騒ぎなされう。というて、申さいでおいて、あとで知れたら、尚ほ騒動……（と果しなく獨り言をいつてゐる）

珍阿彌　では、わたくしは、これでお暇いたしまする。

と會釋して起ちかける。

右近　あ、これ〳〵。どこへ〳〵。

珍阿彌　手前はもう退りまする。

右近　あ、これ〳〵。今の事を申し上げて下され。

珍阿彌　いや、それはあなたさまから。

右近　いや、わしは今……わしはソノ……あいたゝゝゝた！　持病の癪が起りました。

と胸、肚をおさへて苦しむ。

珍阿彌　これはまた折のわるい。

右近　わしに代つて申しあげて下され。

珍阿彌　これはまた迷惑な。

右近　えい、早う申し上げて下され。

珍阿彌　（傍白）これはえらい目に逢ふものぢや。

右近　これ、まだ往かしゃらぬか？

珍阿彌　只今參るとこでござります。……あゝ、桑原々々！

と珍阿彌は上手の簾内へ入る。右近それを見送つて、けろりとなり

右近　あゝ、ちと藥が利き過ぎると思うてゐた。日本はおろか、朝鮮までも、難なくお從への御大將さまも、こちの淀殿とは太刀打ちが出來ず、いつも兜の脱ぎ通し。といふのは、あのお拾ひさまといふお八幡さまが附いてござるゆゑ、淀さまのおッしゃることは、どんな御無理も御尤も、あゝ、よし〳〵、諾、よし〳〵。とりわけ、和子にはたわいもなく、夜かな、晝かな、お頬摺りやら、お接吻やら、ほんに嘗めるやうにして、目も鼻もおはさなんだのぢやが、さすがに此中のあの騒ぎには、お愛相が盡きたと見える。あゝ、困つたことになつてしまうた。とはいへ、和子といふお後ろ楯があるからには、よもやこれぎりにはなるまいなれど、相手がそれ者のお國ぢやと聞いては、中々安心してはをられぬ。はて何としたものであらう？　あゝ、困つたことぢや。はて、何としたものであらう？

此以前、上手の簾内にて物音。器物の物に當つて毀れる響き。「おのれ無禮者！」といふ若い女の、けたゝましい罵り聲が聞える。けれども右近には聞えぬと見えて「はて、何としたものであらう？」と獨語いてゐる。

と

珍阿彌　おゆるされませ〳〵。

と上手から逃げて出る。すぐ、淀君、齢は二十七八、延寶、貞享式の舞臺姿、前髪を大きく取つた下げ髮、三尺ほどの銀の長ぎせるを振上げて、追つて出る。お乳の人お高（三十以上）まだ當歳の拾ひ君を抱いたまま、淀君をとりさへつゝ、從いて出る。腰元、甲、乙、丙も從いて出る。

お高　あゝ、もし、御前さま！　まア〳〵、御勘辨遊ばして遣はされませ。

甲　あれ、御前さま！

乙、丙　もし〳〵！

皆々　もし〳〵！

淀君　おのれ、憎い奴め！　それへ直れ、それへ直れ。

淀君、平伏してゐる珍阿彌の襟上を取つて引据ゑる。此途端、右近心附いて割つて入り、とりさへる。

右近　あゝ、もし！　これはまたお手荒い。まア〳〵お待ち遊ばしませ。

淀君　放せ〳〵。放さぬと、そちたちも同罪ぢやぞ。

これにて皆々餘儀なく控へる。と淀君は長ぎせるで、珍阿彌の口の端を突いて

おのれ、此口で今のやうに言ひをつたか？　やい、何がお國が名物女ぢや？　何が舞ひに堪能ぢや？　あの河原者をあッぱれ名譽者のやうに褒めをる己れは、あゝ聞えた、賄賂など貰うて、それであの河原者の襟元に附くのぢやな。いゝえ、さうぢや。きつとさうぢや。やい、おのれ、恩知らずめ！　あの曾呂新左衞門の出頭を羨みをるのが不便さに、おれが殿下に推擧し、曾呂利になぞらへ、野呂利珍阿彌といふ名まで貰うてやり、此年月、二なく目を掛けて遣つたを、忝いとも思ひをらないで、今の物いひさまはどうぢや？　おれをば蔑ろにしをつて、一にもお國、二にもお國と……

珍阿彌　これはまた御無體な！　それは手前が申すのではござりませぬ。前の半分は世間の評判、後の半分は殿下がさう仰せられました、と只有りのまゝを申し上げたばかりでござります。

淀君　えい、おのれ、まだいふか？　世間も殿下も、みんなおれを蔑ろにするといふか？　もう堪忍せぬ。（と銀ぎせるにて珍阿彌の頭を手ひどく打つ。珍阿彌「あッ！」といつて、兩手で頭を抱へる。皆々驚き、とりさへる）お

のれ！　おのれ！

右近　あゝ、もし、どういふ大不埒を働きましたかは存じませぬが、まア／＼、御勘辨遊ばしませ。……珍阿彌どの、それ、ま、平に、おわび／＼。

珍阿彌　恐れ入りましてござります。以後を愼みまする。眞ッ平御勘辨下されませ。御勘辨下されませ。

淀君　（きせるを投げ出して、泣き出して）今さらあんな河原者なんぞに見替へられて、おれの面目がどこで立たう？　えい、くやしいわい。くちをしいわい。此仕返しをどうしてくれう？　何ぞよい智慧はないか？　くちをしいわい！　くやしいわい！

と身もだえして泣く。

お高　まア、そのやうにお氣をお揉み遊ばしますな。こちには和子さまといふお守り本尊がござります。なんの、お見替へなさるゝことがござりませう？　殿下のお惡性は、只もうほんのお一時でござりませう。……なア、右近さま、あのお國には、山三とかいふ伊達男の夫もあるとやら申しまするゆゑ、御寵愛というても、なア、只もうほんの、藝の上の事でござりませうぢやまで。

右近　なるほど、あのお國めは、さんざ伊達を仕盡いた女ぢやといふからには、したゝか者でもありませうによつて、決して御油斷はなりませぬぞや。

お高　あゝ、これ、これ、そんな事を……

淀君　さア、それぢやによつて、どうせうというてをるのぢや。さる者は日に疎しといふによつて、手おくれになれば、こつちの引け目ぢや。今のうちに、何ぞよい分別はないかいの？　えゝ、大勢ゐても役に立たずばッかり。智慧なしめ！　祿つぶしめ！

と又泣く。皆々暫く無言。淀君のすゝり泣きの聲ばかりが耳に立つ。

此少し先き、橋がゝりより曾呂利新左衞門、肩衣、袴、一刀ざし、齡は四十ぐらゐ、うそ／＼と出て、衝立のかげにて樣子を窺ひをり、此時衝立を離れ、橋がゝりの眞中邊まで戻りて、獨語。

曾呂利　はゝゝゝ！　さればこそ、案の定、主從ともに大もだえの體でござる。大抵これほど苦しませたら、もう助け船を出してもよさゝうでござる。どれ、返り忠に取りかゝりませうか？

と又衝立へ近附く。此うち

珍阿彌　（おそる／＼膝を進めて、わざとお高に向ひて）な、もし、お乳さま、手前、内々察しまするに、事によると、こりゃあの曾呂利めが、例のほて田樂から、殿下に惡智慧をお附け申したのかも知れませぬぞ。なんぼ殿下がお物ずきでも、斯う早急にお國などを召しまする共

上に、歌舞伎踊りまでお稽古遊ばすといふは、あの仁のわるさでゝもなくば、あるまじいことでござりまする。

とまだ言ひも終らぬうちに、衝立のかげにて

曾呂利　いや、其通り、圖星々々！　さすがは淀さまのお軍師（といひながら、つゝと出て）恐れ入つてござる。恐れ入つてござる。

と下手よきところに平伏する。

珍阿彌　やゝ、これは……

お高　思ひがけない……

腰甲　こなたは……

同乙　曾呂利……

皆々　新左衛門どの！

と皆々氣色ばむ。

曾呂利　恐れながら、淀の御ン方さまに申し上げまする。お取次ぎをも願ひもせず、慮外千萬の推參、何が、戰場の習ひと、御宥免下しおかれませう。手前、只今までは御ン敵軍に御奉公いたしをりましたなれど、仔細あつて、一念發起、こなたさまへ返り忠。其忠義はじめに、早速獻じましたい一つの計略がござりまする。その計略をお用ひあらば、お國如きは只ひとみじき。殿下をも生け捕りとなし奉り、御威勢、御寵愛、以前に倍せんこと案のうち。なんと、御採用下されますまいか？

と深切さうにいふ。けれども淀君は猶ほ心をゆるさず、險しい目をなして曾呂利を睨みながら

淀君　では、あのお國を、おのれが取持つたといふのは假の事かやな。

曾呂利　は、御意の如く、滿は損を招くとやら申しまするによつて、初手は、こなた御威勢の些と過ぎさせらるゝをお爲になるまいとお案じ申し、あちこち入れ合せ、程よう仕らうと存じまして、せめて當分の間、お息抜きに、お國の踊りなと、ちと御覽あるやうにと、殿下にお勸め申したはわたくし。然るところ、例の殿下のお癖、新しい物にお目が移り、お氣が移り、やゝお注し藥が利き過ぎ、お毒となりかけたと今更後悔。その懺悔やら、お詫びやらに、殿下の御勘當は覺悟の前にて、大切な計略を獻上いたしたく、推參仕つてござりまする。

淀君　して其計略とは？　ともかくも言うて見やれ。

曾呂利　いや、殿下の御勘當を覺悟の前にて、命がけでいたしまする返り忠、御褒美のお約束がござりませいでは。

淀君　其計略が氣に入らば、どのやうな物でもとらす。所望を言や。

珍阿彌　あ、もし、御前さま、うかとお約束遊ばしますな。また例の二つの紙袋にお米一ぱいづゝの稱で、おん倉を二戸前も數かうといふ魂膽かも知れませぬ。とくとお聞

きたゞした上、お約束遊ばしませ。

このうちお高は、手眞似まじりにて、右近に此問答のあらましを話すことあり。とゞ右近も事情の要點を呑込んだ思入れよろしくある。

曾呂利　いや〳〵、さやうな御難題は申しませぬ。只わたくしが望みますろ時分に、只暫時和子さまをお借し下さるればよいのでございます。但しどのやうに抱きませうと、其暫時が程だけは、お騒ぎなされては成りませぬぞ。たとひ逆さに抱きませうと、和子がどのやうにおむづかりませうと。

お高　これはまた異な御所望なア。

と一同顔を見合せる。暫く無言。

淀君　やい、右近、聞いたか？　あの曾呂利が返り忠をする代り、和子を逆さに抱きたいといふが、諾といふたものであらうか？　否といはうか？

右近　なに、雑魚を肴にして、一つ飲みたいと申しますか？

淀君　いゝや　雑魚ではない、和子を。

右近　めつさうな、和子を肴にして……

淀君　（焦れて）　えゝ、ま、もどかしい！　もう訊かぬ。……やい、曾呂利、和子に毛ほどの怪我もさゝぬとなら、そちの望みは聞き屆けたゝして其計略といふは？

曾呂利　計略は隱密が第一。もつとも他聞を憚りまする。たゞ御ゝ方さまのお耳だけに。

淀君　苦しうない。進め。

曾呂利　はッ。御免。

とずつと摺り寄つて、淀君の耳に口。

な、もし。……な。……といたしまする。……で、ござりませう。……と、いたしましたなら……で、ござりませう。

淀君　む。……む。なるほど。なるほど。……すりや、あの名古屋山三とやらを……

曾呂利　あ、もし。……な。……さやういたさば……な。

淀君　む。……む。……では、珍阿彌にいひつけて……

曾呂利　あ、もし。……御隱密々々。

淀君にッこりと笑む。途端に拾ひ君泣き出す。皆々合點のゆかぬといふ思入れ。

曾呂利　では、わたくしは、これにてお暇を賜はりまする。

淀君　おゝ、大儀であつた。（拾ひ君しきりに泣く）お高、和子をこゝへ。（と乳母の手から急に拾ひ君を抱きとりつゝ）おゝ、たがよ〳〵。（とあやしながら、つと立ちあがつて）さ、皆も來や。……おゝ、たがよ、たがよ。

と淀君は打つて變つた上機嫌で、上手の簾の内へ入る。皆々つゞく。

曾呂利は下手橋がゝりより揚幕へ入る。あとは空舞臺。

第二場　松の丸殿の居間

正面の襖がぶッ返ると、同じく襖ではあるが、別の繪襖になり、此處一體松の丸の居間の心。橋がゝり附け際の衝立も、ぶッ返つて前の湯のとは別のになる。上手の襖は元のまゝ。

橋がゝりより太閤、齢五十八九、服裝は故實と歌舞伎式との折衷、顏の拵へは伊達侯爵所藏の肖像畫などを參酌して、成るべく其人らしく、頭は極細卷の棒茶煎、小さ刀を腰に、太刀を一侍童(萬彌)に持たせ、尙ほ別に他の侍童(千彌)を從へて出る。本舞臺の中央まで來ると、立ちどまりて

太閤　(傍白) さて〳〵、女といふものは厄介な者ぢや。甘やかせば附け上り、叱れば拗ねる。手きびしうすれば泣きわめいて、果は刃物三昧をもいたす。とんと氣ちがひも同然ぢや。(少し歩いて) なんぼでも、もう詫びて來さうなものぢやに。さて〳〵我強い奴の。手こづらせをるわい。……やい、千彌。

千彌　はッ。

太閤　新左めはまだ來んか？

千彌　は、まだ參りませぬ。

太閤　淀のはうから、まだ誰れも使ひの者は來んか？

千彌　いえ、まだどなたも入らせられませぬ。

太閤　はて、我強い奴の。もう降參しをりさうなものぢやに。……(又傍白) あの淀の者は故右府どのゝ血すぢでもあり、お拾ひめの母でもあるによつて、とりわけ可愛く思うて、目を掛けたるところ、附け上りのいたし、近頃は傍若無人に振舞ひをる。このまゝに致いておいたら、どこまで伸しをるか圖りがたいによつて、新左めが異見を納れ、懲らしめのため、此十五日餘り、わざと腹を立て、ふッつと無沙汰いたして見たことぢやが、あゝあ、此方がもう堪へがたうなつた。(あちこちと歩きながら) いたいけなお拾ひめの顏が目の先きに散らついて、なつかしうて、なつかしうて、あの若のやうな口元が吸ひたうて、吸ひたうて、どうもならぬ。いや、どうもならぬ。(又歩きながら) やい〳〵、千彌。

千彌　はッ。

太閤　奥へ往て、お方にさういうて、いつもの通り、酒宴の支度せいといへ。

千彌　はッ、畏りました。

と千彌上手の簾内へ入る。

太閤　やい、萬彌。

萬太　はッ。

太閤　もうお國めは參つてをるか？

萬彌　はッ、とうに參上いたしまして、お溜りに差控へ、お沙汰を待つてをります。

太閤　すぐ呼んで參れ。地方一同にも參れといへ。

萬彌　はッ。

と萬彌橋がゝりより入る。

太閤　いや／＼、こちらから降參してはならぬ。（と歩きながら）此方に弱身があると、さて／＼女といふ者は大敵ぢや。小田原を平らげるよりも手強い。朝鮮征伐よりも氣骨が折れるわ。（猶ほ歩きながら）しよことがない。またお國めを相手に、踊りなと踊つて、紛らかさう。（猶ほ歩きながら、にやりとして）いや、まんざらでない。さすが一藝に秀でゝをるだけに、どことなう捨てかたい器のある奴ぢや。……

と此うち松の丸、（齡は三十以上）を先きに、腰元大勢、銚子、盃、取り肴などを持つて出る。千彌も歸つて來る。

松の丸　それ／＼、殿下のお茵を。お脇息を。

と腰元ども、よき處へ茵を敷き、脇息を据ゑる。太閤それに住ふ。松の丸も茵に住ふ。

松の丸　麗しいお日和にござります。さ、まづ一つきこしめしませ。（とこれにて腰元太閤へ酌をする）。今ン日はお上げざらひと承りましたゆゑ、皆の者も御祝儀を申し上げようと存じてをります。

太閤　（機嫌よげに）いかにも、けふは、あの念佛踊りの上げざらひぢや。こよひは、とりわけ鮮かな手振を見せうぞ。はゝゝゝゝ！

松の丸　さぞかしお見事でござりませう。

と此うちに萬彌案内して、お國及び地方の男ども一同橋がゝりより出て、下手によろしく平伏する。お國は齡廿四五、例の念佛踊りの都合で、黒髮をやつと肩まで程に切つてゐるのなれど、平素はそれを體よく取上げて、入れ毛をして下げ髮にしてゐる。地方は悉く男、大小の鼓、笛、太鼓、蛇皮線樣の樂器なども携へてゐる。いづれも「歌舞伎の草子」に見えてゐるやうな肩衣、袴のいでたち。

太閤　（盃を手に持ちながら）やい、お國、けふは約束の日ぢやぞ。是非とも彼の容姿の舞ひとやらを見せい。

お國　はゝ、外ならぬ御前さまの御所望ゆゑ、一年に一度の外は、ならぬ筈の、大切な舞ひではござりますれど、格を破り、御覽に入れまするでござりませう。さりながら、そも／＼是れは、大師直傳と申し傳へましたる眞言祕密のたふとい舞ひにござりますれば、舞ひまする其間、なにとぞお盃をば、お控へ遊ばされますやう。

太閤　やれ、むづかしいわ。（と一寸眉を八の字にしたが、

すぐうなづいて）よし〳〵。心得た。さ、支度せい支度せい。（とお國會釋して席を立つ）。……やい、千彌。

千彌　はッ。

太閤　また曾呂利めは出仕せんか、表へ往て見て來い。

千彌　はッ、かしこまりました。

と千彌橋がゝりより入る。

このうちお國は衝立のかげへ退り、支度にかゝる。地方は、ずつと正面の奧へさがりて、前後二列に住ひ、すぐに樂器しらべにかゝる。

太閤　やい、其大きな盃をよこせ。さ、注げ〳〵。舞ひにかゝりをらぬうちに、飮みおきをしよう。はゝゝゝゝ！

と腰元になみ〳〵と注がせて、大盃を傾ける。

松の丸　御前、先頃金剛にお申し附け遊ばしましたお作の節附けは、もはや御出來になりましたでござりますか？

太閤　（酒飮む口をとゞめて）あゝ、あの謠ひか？「柴田」だけは出來たわい。一つ謠うて聞かさうか？　なか〳〵味よう出來たぞ。

松の丸　それはまアおめでたうござります。（と衝立のはうへ思入あつて）あの勝家が小田井の方に向うて、此城を落ちよと申すあたりは、取りわけあはれにいたはしう出來ましたでござりませうなア。

太閤　されば、聞かせどこはあそこぢや。さ、も一つ注げ。

またうろ覺えながら、……かうつと……、と謠ふ。

唄〽さてわが妻を近づけて、運命旣に盡き果てゝ、此曉を限りなり、よしよし御ン身には、なに罪科もあらばこそ、敵のゆかりを賴みつゝ、夜半にまぎれて落ちたまひ、暫く此世に存へて、亡き跡とひてたびたまへ、對のお方は聞きたまひ、一樹の蔭の宿りさへ、他生の緣と聞くものを、況んや諸共に、比目の枕、翡翠の衾、重ねし夜々のさゝめごと、盡きせじとこそ契りしに、思ひもよらぬ只今の、言葉の末を怨みつゝ、同じ心に自害せし憂き身の果ぞあはれなる。

此うちお國ら支度なすまして、徐かに中央へ進み出る。

松の丸　ありがたうござりました。（左右を見返つて）なんと、皆の者、面白いことであつたなう。

皆々　ありがたうござりました。面白いことでござりまし

た。

と一同お辭儀をする。

松の丸（お國らを見て）おゝ、もう支度が出來たさうな。これにて太閤は腰元らに「盃盤を撤せよ」と頤で命ずる。

お國は中央のよきところに住ふ。髪は髻に取りあげて、日蔭の葛に擬して五色の組み絲で製した花飾を左右二列に髪にも肩にも結び垂れ、裾を長く引いた若流しの上へ美しい水干を着て、腰には水晶の曲玉を飾りに附けた黄金造りの古風な劍を佩き、手には白幣を附けた榊の枝を持ち、それを額に押當てたまゝ、端坐して俯向き、瞑目する。

地方は主として大小の鼓と太鼓と笛。只稀れに歌ふ。劈頭の唄の切れるをキッカケにお國立ちあがりて舞ひはじめる。此舞ひは約五六分間なれども、其間に四五段の變化あるを要する。誂へあり。

唄　〽ちはやぶる神代のむかしかしこし。

とお國立つ。いろ〳〵ありて

同　〽や、あめなるうきばし……や、ぬぼこのしたゝり。

又いろ〳〵ありて

同　〽やしほをりをよや、やかどによ、やはらに。

とお國佩劍を拔く。これより舞ひ働き模樣になり、やがて又しづかになりて

同　〽いやくもたちぬ、やへがき。……なうまくさつたるまふんだりきやそだらん。

と舞ひ納めて、ずつと下手へ引きさがりて、太閤へ拜をする。

太閤　おゝ、大儀々々！　近ごろ目新しう見物したぞよ。さ、休息せい〳〵。やがて上げざらひをしようぞ。

此時千彌橋がゝりへ出る。

千彌　申し上げまする。曾呂利新左衞門は、いまだ參上いたしてをりませぬ。

太閤　はてな、どうしをつたか？

此うちお國は再び衝立のかげへさがる。と松の丸は腰元どもに命じて念佛踊りの裝束を太閤の前へ運ばせ

松の丸　殿下、お召替へ遊ばしませ。

と太閤うなづきて立つ。松の丸自身も手傳ひて太閤の上被をぬがせ、裝束を附けさせる。塗り笠、僧衣、鉦、

撞木等、すべてお國の念佛踊りの書面通り。此間にお國も髻をほぐして、切下げ髪になり、太閤と同じ裝束にて中央へ出る。

太閤　さ、はじめい〳〵。

すぐ囃子にかゝる。此たびは三味線なども使ふ。太閤はお國と並んで中央に立つ。地方が歌ひはじめると、それにつれて、いろ〳〵ある。

唄〽くうみやう遍照十方世界、念佛しゆじやう、せつしゆ不捨。南無あみだ佛、なむあみだ。

はかなしや、人間わづか五十年、榮え衰へ夢の間よ、かざに掛けては何かせん、心に掛けよ彌陀の御名。南無あみだ佛、なむあみだ。

非情有情の別ちなく、草木だにも佛になれば、まして況んや人間の、などかは佛とならざらん。佛もむかしは凡夫なり、われらも遂には佛なり。三身佛性具する身ぞ。南無あみだ佛、なむあみだ。

一たび發心するときは、來世も過去もあらばこそ、歌ふも舞ふも法の聲。歌へや舞へや、なむあみだ。南無あみだ佛、なむあみだ、南無あみだ佛、なむあみだ。……

此以前「非情有情の別ちなく」の時分に、曾呂利新左衛門、揚げ幕より橋がゝりへ出て、衝立のかげへ來て、内の樣子を窺ひをり、とど待ち遠いといふ思入れ、こなしありて、つゝと入り、下手へ廻り、わざと目に附くやうに太閤の舞ひ踊るすぐ鼻の先きへ來て平伏する。けれども太閤は踊りに身が入つて氣が附かぬらしく、上手へ踊つて行く。曾呂利も上手へ廻つて、又辭儀をする。それでもまだ氣の附かぬ體。のみならず、最後の「南無あみだ佛、なむあみだ」は興に乘じて果しなく續きさうなので、曾呂利は堪へかねて聲を掛ける。

曾呂利　もし〳〵、殿下。もし〳〵。申し上げまする〳〵。

とこれにて太閤漸く心附き、踊りやめて、一寸お國へ

こなし。とお國も地方も同時に止める。

太閤　おゝ、待ちかねたわ。様子はどうぢや？……お拾ひめは無事か？　何も變りはないか？

曾呂利　まる／＼とお肥え遊ばして、いよ／＼おすこやかでござりました。

太閤　（嬉しげに）さうか／＼？（と新左のはうへ進みて）して淀の者は？（小聲で）さぞ泣きわめいてゐたであらうな。

曾呂利　いや、どう仕りまして。案に相違の御様子。それゆゑ取急いで御注進に參りました。

太閤　案に相違とは？　また例の氣ちがひのやうになつて、刃物三昧でもいたしをるか？

曾呂利　いや、どういたしまして。大違ひでござります。

太閤　すれば、どういたいた？

曾呂利　御免。

とずつと進んで、太閤の耳に口、むにゃ／＼／＼。

太閤　（驚いて）え？　何ぢやと？（といひかけたが、急に一同を見返りて）やい、おのしらはみんな退れ。用があつたら呼ぶ。（お國に）おのしも大儀であつた。退れ。

とこれにて一同會釋して、松の丸らは上手簾内へ、お國らは橋がゝりより入る。

太閤　（席へ戻つて）やい、新左、今のをもう一度くはしういへ。

曾呂利　只今も申し上げました通り、初手は、只ほんの當座のお氣晴らしかとも存じましたるところ、なにが、あのお國の夫名古屋山三と申す伊達男を、昨夜も、今ン日もお招き、剰へ「富士をどり」とやら申す踊りを、連れ舞ひのやうにしてお習ひなされまする。これは、申すまでもなく、殿下がお國を召されまするを聞き傳へての、お面あてと存じまする。

太閤　（眉をひそめて）また始めをつたか？　あいつ、先頃も、男體した者を近づけてはならぬと申し附けておいたに、生若い近侍めを、おれに沙汰なしに抱へをつたによつて、手きびしうたしなめたところ、いや、これは苦しうない者とあらがひをる。段々吟味したら、いかさま、苦しうない筈、そやつは物のない和郎であつた。おのしにあやからせたいとねだつたので、野呂利珍阿彌といふ名までくれたが、かぶき者のあの山三なぞを、自儘に招き寄せ、剰へ踊りを習ふとは。……して其踊りは、どんな踊りぢや？

曾呂利　たゞちょと垣間見ましたばかりゆゑ、ようは心得ませんが、きつうなまめかしい踊りでござります。

太閤　（眉を八の字にして）なに、なまめかしい踊り？それをあれが連れ舞ひで習ふといふのか？

曾呂利　いや、お氣に掛けさせられまするな。ほんの御酒興の餘りらしく、只もうよろ〳〵と、ま、かやうな風に（と醉うた女の介をして、なまめかしく太閤に寄り添ふ。太閤苦い顏をして身を引く）眞似事をなされるに過ぎませぬ。

太閤（傍白）女は、日頃つゝましやかにしてをるだけに、酒に醉ふと、とかくみだりがはしい振舞ひをするものぢや。とりわけ、淀めに其癖がある。それに、山三めは聞ゆる女たらしぢや。

曾呂利（傍白）さればこそ氣を揉まるゝ。うふゝゝゝふ！

太閤　捨ておいては餘の者の示しにならん。……やい、新左、おれが自身で往て樣子を見う。さ、案内せい。（と橋がゝりへ歩きながら）さて〳〵餘りの附け上りぢや。

曾呂利（同じく歩きながら）いかにも、御意の通りでござります。……（太閤何か囁く）はゝ、かしこまつてござります。……心得てござります。

二人ともに揚げ幕へ入つてしまふ。

と正面の襖を左右へ引いて取る。其奥五間の間は漏斗形に奥深く御殿の書景。これは淀君の御殿の遠見の心。上手の簾の前には幅壹間半の段だら幕が張り渡される。同時に下手の衝立が幅壹間の同じ段だら幕に變へられる。それから破風造りの下の一文字から櫻の釣枝が下る。

第三場　淀君の御殿の庭上、夜の景色

上手の幕のかげから腰元、甲、乙、丙が出る。甲は左右の手に銀燭臺を一基づゝ、乙は右の手に同じ燭臺を一基、又左の脇には卷いたる緋毛氈を抱へ、丙は酒宴の道具を持つて出て、次ぎのセリフをいひながら、まづ、あちこちよき處へ燭臺を配置する。

甲　ても、綺麗ぢやなア！　こよひは氣を變へて、此お庭內を芳野山とも醍醐ともおぼしめして、夜もすがらお花を見させられうとの御趣向。ほんにお庭へ出て見れば、また格別。

乙　空に知られぬ雪ぞふりけると歌にある通り、あれ、白い花がちら〳〵と散るわいなア。

丙　それに、あのうつくしいお月さま。

甲　ほんになア、照りもせず、曇りもはてぬ春の夜の……

乙　朧月夜に……

丙　おつと、しくものはこゝにあるぞえ。（と毛氈をひろげる）

甲　ま、うまい口合ひやなア！

三人（顏を見合せて）はゝゝゝゝ！

と三人で酒宴の道具を置きならべ、淀君の前を据ゑなどする。此うち橋がゝりの彼方（揚げ幕内）にて大勢の女の笑ひ聲が聞える。

甲　あれ、もうお渡りさうな。さ、先づ、お燗の用意をせう。

乙　ほんに、お方さまのお酒の強いには我折れ、宵から飲りつゞけて、まだ其上にも飲るぢやまで。

丙　さア、お強いはお酒ばかりぢやない。お氣も強いが、お燗も強い、お我も強いが、わが儘もお強い。

甲　ぢやによつて、殿下さまも我折れ。

此時上手幕の内にて赤子のけたゝましく哭く聲。

乙　したが、その強いお方さまより、尚ほお強いは和子さま。

丙　ほんに、泣く子と地頭とやらいふが……

乙　和子さまがおむづかると……

丙　日本一の殿下さまも、殿下さまよりも強いお方さまも、奧もお表も大騒ぎぢや。

乙　して見ると、和子さまが日本一の強者いなア。

此時また上手にて赤子の更に激しく泣く聲。

甲　そりやこそ、日本一の強者さまが、おむづかるわ〳〵。

三人　ほゝゝゝゝゝ！

と乳母お高、泣き叫ぶ拾ひ君をあやしつゝ出る。

お高　おゝ、たがよ〳〵〳〵。

甲　どうなされましたえ？

乙、丙　どうなされました〳〵？

お高　さいな、きのふ、けふは、お方さまがとんとお構ひなされぬゆゑ、日がな一日おむづかつて、どうもからもならぬわいの。おそばへ連れ申さうとすると、「えい、わしが傍へは無用。和子にどのやうな事があらうと、捨てておきや、わしが目まぜしたら、どのやうな事があらうと騒ぐな」と嚴重なお言ひつけ。

甲　さういへば、わたしらへも、こよひはどのやうな事があつても、おれが目まぜしたら、決して立騒ぐな、手出しすな、といふおつしやりつけ。

と此うち拾ひ君泣き止む。

お高　わしやどうも合點がゆかぬ。もしや日頃の御不加減に、お酒が過ぎたので、もしや、ほんまに、どうか遊ばしたのではあるまいかいなう？

此時揚げ幕にて大勢の女の聲々「おあぶなうござります〳〵。」

甲、乙｝それ、もうこちらへ、お越しぢや〳〵。
丙

と皆々よろしく控へる。

揚げ幕にて淀君の醉うた聲「かまやんな〳〵。え、

放しやといふに。なんの、あぶないことがあらう？……」といひ〳〵、纏ひの體にて、よろめきつゝ、橋がゝりへ出る。片手を一人の腰元の肩へあづけ、片手で名古屋山三の手を取つてゐる。いろ〳〵の樂器を携へた腰元や女のわらはが、はら〳〵して、そつと後ろから淀君に手を添へて、介抱しつゝ從いて出る。山三は齢三十以上、頭髪を例の如く、美しく結ひあげたる立てがみ、すべて優雅なる拵へ、花やかなる小袖、肩衣、袴、無腰。

淀君（本舞臺の中央まで來ると）さア〳〵。「蔦の葉」から、もう一度、やり直しぢや〳〵。

と腰元どもは正面の奥へゐならび、それ〴〵樂器を控へて、彈奏におよぶ。（但しこれはすべて眞似ごと。本奏樂は蔭おはやしの囃子方でする。）唄になると、山三立ちて踊りはじめる。この間淀君はしどけなく（師宣式に足を投出して）一人の腰元の膝にもたれて見てゐる。次ぎの唄から、よろめきつゝ立ちあがりて、山三に絡むやうに離れるやうにして、即いたり離れたりして、似たり寄つたりの手振で、共に踊る。此踊りの間にも唄へます。

唄 〽たゞわごりよは蔦の葉よ、たゞあれを
巻きこれを巻きめさるゝ、さても、さ、
さて、そなたは、踊つたり、はねたり、
うき身をなやいて、富士のけぶりと身
は浮き焦るとゆてたもれ、思うつ思は
れつの身でもないもの、おいとまたも
れ、歸らうに、もどれやれ、しやなら
しやんならと。

とよろしくある。

淀君 さア〳〵、こんどは前へ戻つて、わしのすきな「蛇か百足か」を舞うてたもれ。わしもやがて起たうほどに。さア〳〵早う！

と此次ぎの唄におよぶと、淀君立ちあがる。

唄 〽山の白きを雪かとて、見れば卯の花、
しむれば細いそ方さま、あてきの髪は
や、髪は蛇か百足か蛇身かよな、うご
めくは、さるほどにさげまひのびんま
きあげたとな、なよ、しんじち。たゞ
わごりよは兵庫小つゞみ、しめよせて、

しと〳〵と叩いた、さても、さ、さて、そなたは、をどつたり、はねたり、うき身をなやいて、富士のけぶりと身は浮き焦るとゆてたもれ、たゞわごりょは野中の清水よ、獨り心をすまいた、さても、さ、さて、そなたは、踊つたり、はねたり、うき身をなやいて、富士のけぶりと……

淀君は卽いたり離れたりして、絡み縺れて踊つてゐるうちに、腰もよろ〳〵として、倒れかゝる。山三それを抱きとめる。その都度なまめかしいこなし。乳母はじめ一同見づらいといふ思入れにて顏をそむける。此途端拾ひ君が泣き出す。乳母のお高はそれを機會に突と進んで、抱いてゐる拾ひ君を淀君の鼻の先きへ差し出す。と淀君は險しい顏をして睨み附ける。で、乳母は拾ひ君を抱いたまゝ、餘儀なく退る。拾ひ君はけたたましく泣く。地方の彈奏は、それに構はず、つゞく。淀君山三は舞ひつゞける。

此以前、揚げ幕より曾呂利、太閤の太刀を捧げ、先きに立ちて太閤を案内し、忍び足の體にて、橋がゝりへ出で、下手の幕かげまで來て、曾呂利先づ內を窺ひ、やがて太閤へこなし。太閤代りて內を窺ひ、驚き、呆れ、腹の立つ思入れ。とゞこらへかねた體で、つと曾呂利の捧げてゐる太刀を引ッたくつて幕をかゝげ、づか〳〵と前へ進む。乳母及び腰元の一部は斯くと見て、驚き騷ぐ。それを踊りながら目早く見た淀君が、一つ廻る拍子にわざと強く足踏みをして腰元らを屹と睨む。で、騷ぎかけた乳母、腰元らも、又、同じく驚いて唄や囃子を止めかけた地方も、餘儀なく鎭まつて、地方は又歌ひつゞけ、囃しつゞける。と淀君は、おどおどする山三をたしなめつゝ踊りつゞける。太閤は一寸拍子ぬけがしたらしかつたが、きつと地方を睨んで

太閤　えい！　やめい〳〵！

と大聲で叱り附ける。これにて地方はたまりかねて鳴り物をはたと止めて、平伏する。山三も同じく淀君の手を無理に振離して、上手の前の方へ飛びすさり、平蜘のやうになつて平伏する。と太閤は左の手に太刀を鐺あがりに持つて、肩、肱を怒らせ、目を怒らせて、づか〳〵と其方へ進む。と淀君はわざとらしくよろめきつゝ、割つて入り、よろ〳〵としどけなく山三の上へ轉けかゝつて掩ひになり、にッたりと笑ひつゝ太閤の顏を見上げる。太閤はいよ〳〵拍子ぬけがしたらし

いが、倘ほこはい顏を持續しつゝ、いかつい聲で

太閤　やい、淀、そりや何といふざまぢや？　其有り樣は！

淀君　（山三にもたれたまゝで）え！　ざまとは？　はて、どのやうな有り樣ぢやえ？

太閤　女の癖に酒をくらひ、剩へ其醉ひじれたざまは、どうぢや！

淀君　ほゝゝゝ！　女ぢやとて酒に醉はぬものか？　わらはによう飮め〳〵とこそおしやつたれ、飮むなといふお掟は、まだつひぞ聞かなんだによつて、憂さ晴らしに、ほんの少し飮みました。（と酒おくびを一つして）飮んだからには醉ふのは當然。ほゝゝゝゝ！

太閤　默れ！……先づ其者をこゝへ出せ、其うへにて其方の罪を糺す。まづそやつから成敗いたす。……のけ〳〵。

淀君　あ、これ〳〵。此者は、此中、きつう贔屓に遊ばすとやら聞いたお國の夫山三郎。片手落ちの御贔屓が氣の毒さに、わらはがあなたに代つて、ほんの些ばかり引き立てゝやつたまでぢやによつて……

太閤　何を！

と立ちかゝるを輕くとゞめて

淀君　ま、おゆるし〳〵。

とたわいもなく、ぐた〳〵となる。

太閤　やア、あくまでも予をないがしろにした其一言。もう容赦はならん。

と太刀を拔きかける。乳母、腰元ども騷ぐ。淀君睨む。けれども乳母はそれに構はず、割つて入り、抱いてゐる拾ひ君を太閤の目の前へさしつける。太閤おぼえずたじろぐ。

お高　まゝ、しばらく〳〵！

太閤　えい、のけ〳〵！

とやつと乳母を引きのけて、刀を拔く。此間曾呂利は平氣で下手に坐つたまゝ、笑つて見てゐる。

淀君　（よろめきながら、立ちあがつて、太閤をとゞめて）あゝ、これ、しばらく。ま、しばらくお待ち（と又酒おくびをして）それほどに此奴がお氣に障るならば、お手おろさるゝに及ばぬ。わらはが成敗します。（と懷刀を取り出して鞘を拂ふ。これにて太閤、刀を控へる）やい、山三。（又よろ〳〵）是非に及ばぬ。……そ、それへ直れ。（と淀君懷刀を振上げ、よろめきながら立ち寄る。山三端坐し、瞑目して合掌する。）

淀君　覺悟はよいか？……な、な、南無あみだ佛！

と懷刀を振りおろす拍子に、又よろ〳〵として懷刀を取りおとして、山三の肩へ手を掛けたかと見るうちに、山三の髷を摑み、そのまゝすッぽりと假髮を引き拔く。と山三と見えたのは坊主あたまの珍阿彌　太閤は呆れ

て苦り返る。曾呂利は腹をかゝへて笑ひながら

曾呂利　「評判のかぶき男に似せかづら、脱げば珍阿彌、これは珍案。」はゝゝゝゝ！　これはは や近ごろの珍案！　はゝゝゝゝ！　いや、珍案！　いや、珍阿彌！　はゝゝはゝ！

太閤　何を！（と赤くなつて、拔刀を持つたまゝ、曾呂利を見返つて睨む）。

淀君　（笑ひながら）はて、こりや笑ふ筈ぢや。これがをかしゅなうてならうか？　ほゝゝゝゝ！　ほゝゝゝゝ！

太閤　おのれ！

と氣色んで、おどかしに拔刀を振りあげて淀君のはうへ進む。淀君ちやつと乳母の抱いてゐる拾ひ君を引ッたくつて、兩手で太閤の鼻の先きへ差しかざす。太閤たじ〳〵と退る。

淀君　ほゝゝゝゝ！　ほゝゝゝゝ！

曾呂利はます〳〵をかしがり

曾呂利　「海山に敵なし顏の大閤も、淀の川瀬ぢや腰がふらふら。」はゝゝゝゝ！　はゝゝゝゝ！

とこれにて太閤きつと見返り「さては」といふ思入れ。

太閤　むゝ、さては、こりゃみんなおのれめが爲業ぢやな。裏切りをしをつたのぢやな。

と氣込んで、同じく刀を振りあげて、曾呂利のはうへ進む。此うち淀君は笑ひながら、拾ひ君を乳母へ戻す。

曾呂利　（坐つたまゝ、兩手を擧げて太閤をとゞめながら）はゝゝゝゝ！　まッぴら御容赦下されませ。はゝゝゝは！　何事もお家のため、はゝゝゝゝ！

太閤　なにがお家のため！　おのれ、不埓者めが！

曾呂利　まッぴらゆるさせられませ。はゝゝゝゝ！　お家のため。はゝゝゝゝ！　平に〳〵！　はゝゝゝゝ！

太閤刀を揮つて追ひ迫る。曾呂利すばしこく乳母のうしろへ逃げる。太閤追ッかける。一つ廻る拍子に拾ひ君を乳母の手から引ッたくる。

お高　あれ！

乳母が驚いて取り返さうとする。腰元らも騷ぐ。淀君睨む。皆々手を出しかねる。其うちに太閤追ひ迫る。曾呂利拾ひ君を逆さに抱く。拾ひ君けたゝましく泣き出す。太閤たじろぎ、氣を揉む。

太閤　それ、だれか早く和子を取らんか？　早く〳〵！　それ、早く和子を！

乳母、腰元ら立たうとする。淀君又睨む。皆々餘儀なく控へる。拾ひ君いよ〳〵泣く。太閤ます〳〵氣を揉む。此うちに曾呂利は橋がゝりへ逃げる。太閤追つて行く。曾呂利は振返り、又拾ひ君を差しかざして楯としながら

曾呂利　お家のため。はゝゝゝゝゝ！　おゆるされませおゆるされませ〳〵！

といひ〳〵揚げ幕へと逃げて入る。と太閤は太刀を振上げたまゝ無言て、言はず、惰力的に追つて行くといふ風に、のろ〳〵と追つて入る。

と乳母は拾ひ君を案じるといふ思入れにて、同じく橋がゝりより從いて入る。

と淀君は突と立ちあがり、妙に眞面目くさつて、二足三足橋がゝりへと步きかけて見送り、次第に笑ひ顏になり、はじめは聞えぬほどの小聲で、おひ〳〵大きく笑ひ出し、腰元らが驚いて介抱しかける程に、腹をかかへて笑ひ、とゞヒステリー患者らしく、さも術なさうに止めどもなく激しく笑ひつゞけ、こらへかねて仆けかゝり、果は哭くのかと思ふやうな聲になるので、腰元や珍阿彌がしきりに氣を揉む。

——幕——

（大正十一年二月十七日稿）

霊驗（三幕三場）

登場人物

盲乞食　又さ
同　お酒子
鍛冶屋の忠さん
桶屋の左古
傘屋の彌太
飛雲上人
唐沼の小鹽ッ子
和　栗
松　江
其他村の老若男女

第一幕

寺の門前の往還

時代は織豊頃、處は武藏邊の古寺の門前。門は茅葺屋根の四脚門で——臺舞中央よりやゝ下手奥に、斜に——地境の上に立ち、それに準へて三段の石の登階。門柱から上下へ、同じく斜に、茅葺屋根の附いた土塀が兩袖のやうに同じ長さに附け添へられてある。下手の分は纔かに一間ばかりしか見えてゐないが、上手の分は、斜に門と準へに上手奥へ走ること一間餘にして畫心に前へ折れて、更に上手へ畫心に折れ、以前の線と並行に、門と準へに走つてゐるが、其行方は視界中には無い。寺はもう殆ど荒廢に瀕してゐるらしく、殊に塀は處々甚しく壞れて、潜ることも跨ぐことも出來るやうになつてゐる。門前の道は此界隈の往還らしく、あたりは廣々としてゐる。門の上手の塀の前——中央よき處に——大きな捨て石が二つ、少し離れて、よき處に、大木の切り株が一つ。あちこちに雜草にまじつて、野菊がちらりほらり。其他には立木が、塀の內外に、ほんの二三本見えてゐるばかり。空模樣は、どんよりと曇つた秋の中ばの午後。

下手の塀に添つて乞食の夫婦が出る。男女とも盲、女は折々片目を開けて、白眼を見せる。男は四十位、でつぶり肥つた、澁紙色に日にやけた醜男、右の手には杖、左には製了つた草鞋二三足と製りかけの一足とを提げて、先に立つ。女は五つ六つ年上らしい、これも

甚しい醜婦、しかし如何にも健康らしく、殊に頭髪は赤髪ながら豊富あつて、歩きぶりも若々しくしてゐる、杖は持つてはゐるが故と突かず、左の脇に古蓆と藁束を抱へてゐる。男は古びた烏帽子形の頭巾をかぶり、女は髷巻をしてゐる、二人とも跣足。早い話が、「福富の草紙」などから脱け出して來たかといふ風體。男は又さ、女はおしやッこといふのが通り名である。

おしや　もう來たゞんべ。法濟寺の門前だんべ。

又さ　駄目だ！　それ、どうだ？　人ッ子一人通らねえ。言はねえことけえ、もうとうに通ッちまつたゞ。汝が髪べいいつまでも玩弄してるだから、後れてしまつたゞ。

おしや　どうせ往にゃくれねえだよ。還つて來るのを待つてゝ強請けばいゝだ。死んだ子の齢さ算へねえで、草鞋でも造らつせいよ。

又さ　けさ早くに、こゝさ來て眠張つてれば、草鞋十足造るよりももつと大い貰ひがあるたに、汝が躊躇してるだから、損しッちまつたゞ。

おしや　また愚痴さおッぱじめたゞね。一言いへば解つてるだ。饒舌蟲たれ爾は、男の癖に！

これより先き、女は古蓆を地上に敷く。又さ其上に坐して造りかけの草鞋を編みはじめる。女もぶつくさ言ひながら、藁を選り分けてゐる。

又さ　おれがしやべらねえちふと、汝がしやべるだ。おれ汝の聲聞くが可厭だからしやべるだ。爾ア面がまちは綺麗だちふが、聲アあんちふ可厭な聲だ？

おしや　毎日々々、朝げから晩げまで、雨や風に曝されてるだから、どねえな美い聲だつて悪くなるだよ。だけんど、不思議なことに、肌ア荒れねえと見えて、みんながわしの肌ア雪のやうに眞白けだてつて羨ましがるだ。

又さ　おれそれが呑み込めねえだ。おれ五つまでは目ェ見えたんだからちくとべいおぼえてるだが、顔の綺麗な者は大げい聲も綺麗なもんだに、爾ア……

おしや　見えもしねえ癖に、あに言ふだ？　立派な目眼持つてる鍛冶屋の忠さんや桶屋の左古さんや傘屋の彌太さんや大勢の衆が、わしの顔さ見るたんびに「百にや物臨ねえ美い女だ」ッていふでねえけい？

又さ　だつて、廣沼の小鹽ッ子が言つたゞ、にしの顔ア、夜々中に見ると、化け物のやうでおつかないつて。

おしや　嫉妬んでゐるだよ。あの娘子。なぜつてね、鍛冶屋の忠さんがおらの頭髪を賞めたゞから。あの娘子、內內忠さんに戀慕れてるだ。

又さ　やつかんでるのかな？

おしや　さうだとも。やつかんでるだよ。よしんばさうでねえにもしろ、あゝいふ若い衆は、目かいの見えねえ者を嘲弄いて遊ぼうと爲るだ、きりやうの好い者をさうでねえやうに思はせようとするだ。

女は大得意で顔を撫てる。男は太い溜息をして

又さ　あゝ！　夜の長い時なんざ、おれよく考へるだ、たつた半時でも可い、一二三ちふだけの間でもいゝから、互ッこに顔さ見合つて、あゝおらつちは此郡内八十八箇村ちうで、一といつて二とは下んねえ縹緻好だちふことを、自分で眞定かに合點することが出來たらば、どんねえにか素晴しかんべいこんだかと思ふだ。（愁然として）さうだれば、ろくでなし共が言ふことアみんな噓だちふことが分るだから、あに言はれたつて安心して居られるだ。

おしや　あいらの言ふことア氣にしねえこんだ。目開きはみんな惡黨だによ。あいらア常ふだん素晴しい者さ見てエるだに、見ねえ振べいして噓吐くだ、あの廣沼の小鹽ツ子のやうに。

又さ　小鹽ツ子の言ふことは噓かも知んねえが、あの聲は美い聲だねア！　聞いてると好い氣持だ、鷄呼ばる時の聲でも、牛呼ばる時の聲でも。田植歌や絲取唄ア歌つてる時のあの聲さ聞くと（じつと考へて）おれさう思ふだ、嫵べい手も足も柔ッこくて、眞ッ白けで、ぽちやぽちやして……

おしや　（侮辱されたやうに感じて）　ぽちや／＼してゐようと硬々してみようと、ぶつちやつといたがいゝだ。あの蓮ッ葉阿魔め！　誰かゐねえ時分に、大い聲さ出して、笑つたり叫つたりしてゐるのが聞かせてえだ。

又さ　（溜息をして）　でつけい聲で笑ふのも好いもんだ、若い娘子だら。

おしや　いゝもんだ？　あんな破鐘聲で笑ふのがけい？　さういやあの娘子、男引張り寄せることうめいだ。忠さんなんざ、鍛冶場で仕事さ爲てる時でも、あの娘子來るとそは／＼爲るだ、息づけひまで荒く爲るだ。

又さ　忠さんは、にしが來ると小鹽ツ子なんざ、お月さまの前のお燈明だちふけんど、だアれも、にしが傍さ來たつても、息づけひ荒くしねえだ。

おしや　わしは彼等とは違ふだ。男の面べい見守つて媚嫵と道中さぬめくりありく娘子とは違ふだ。……目あきには好い加減の噓べい吐いて、ぬめくりありくのを本當にしてる奴があるだから、用心しねえと馬鹿見るだ。

又さ　さうかも知んねえが、若い鹽目の娘子が、美い着物

べい被飾つて、道中さぬめくりありいてるのは、素晴しい見物だんべい思ふだ。
おしや　あに、そねえなことがあるもんだ！　にしだつて目眼がありア長所ッこは無えだ。わし最初にや二十人も三十人も、嫁ッ子に貰ひていいつた者があつたゞけんど、みんな斷ッちまつたゞ。目エ見えるちふことア詰んねえこんだ。
　暫時二人とも默つてゐる。
又さ　（急に聞耳立てゝ）誰れか來るだ？
おしや　草鞋の出來てるのを隱さつせいよ。見られると、物持だなんて嘲弄つて、錢さくれねえだから。
　又さ出來た草鞋を尻の下へ隱す。又さお酒子地上に平伏する。
　鍛冶屋の忠さん、三十五六、瘦ぎすな小男、これも鳥帽子のやうな頭巾を冠つて、膝頭近くまで脚を出した短い袴を穿き、上手奥から急ぎ足で出て來る。
又さ　（乞食聲で）お通りがゝりのお旦那さまア、難澁な盲でおざります、目かいの見えねえ又さでおざります。どうぞやお冥加に十五文くれさつしやりませ、お功德でおざります。十文でもようおざります。お冥加でおざります。
忠さん　（立停りて）足音ォ聞けば、すぐ分ると高言つたでねえけえ？　口ほどでもねえ。汝の耳危なもんだ。
おしや　（獨語のやうに）あゝ鍛冶屋の忠さんだ！
又さ　（平生の聲で）あの魔沼の小鹽ッ子が、前か後ろかにありいてる時だら分るだが、けふのやうな歩きかたは、つひぞ聞いたことねえだからね。……あにか大變事でも發けだゝかね？
忠さん　おや、おッかな！　好い耳だ。（切り株へ腰を下しながら）ほんの事、いかく不思議な事がおッ始まつたゞから、おれ大急ぎでやつて來たゞ。
又さ　（又草鞋を編み出しながら、輕蔑の調子で）不思議な事ッて……よく聞くことだけんど、大げいは詰んねえこんだ。だけんど、けふは餘程不思議な事があるのかも知んねえ、小鹽ッ子さアがまだ歸んねえだに、にし一人歸つてござつたゞから。
忠さん　（少々侮辱された氣味で）百十五になる西太郎爺の權十どんせえ聞いたことのねえやうな大い事が持上りかゝつてるだが、（又さ思はず草鞋造る手を止める）われ物識りで、あんでも知つてるだから、聞きたか無かつぺい。
又さ　（半信半疑で）此村でけえ？
忠さん　此村どころで無え、此辻で、此法濟寺の門前で發

けるだ。
おしや　此門前で發けた大い事てば、三年前に牛糞村の惣右衞門さまが追ひ剝ぎに殺されさツしツた外にやなかんべいがねア。
忠さん　解るめえよ。第一、にしらの甚い幸福になるこんだがねア。
又さ　新河へ土橋でも架かるだかね？
おしや　それだら、あしたからは、脛濡らさねえでも野末村へ行かれるだ。
忠さん　うんにや。そんなことでねえ。
おしや　だれか又畑の物竊盗いて、曝されるだかね？　すツ裸で、褌一つで、ふん縛られてる態ア見るのア面白いちふこんだけんど、目のねえわしらに、あんでそれが幸福だね？
忠さん　今どこに曝し物あるでもねえだが、活き佛さまのお庇で、にしらア生きてるうちに、曝し物いけいこと見ること出來べいだ。
おしや　何言はつしやるだ！　あんでわしらいけいこと曝し物見ることあるもんだね！　わしら生來の劣盲人だのに。
忠さん　にしら知んねえかね？　明王が獄の奥の方の溪間とかに、自然天然に噴涌く不思議なお靈水さまがあつて、その水で洗ふちふと、盲だれ聾たれ跛足だれ、立ツ處に平癒するちふこんだけんど、つい此間までは、だアれも其在りかさ目附けたもの無かつたゞ。
おしや　さういやわし聞いたことがあつたゞ。むかし役の行者さまだらが錫杖で以て衝突かしやつた其岩から出た水でねえけえ？
忠さん　うん、さうだよ。ところが、此界隈の者が、或年、横道さ働いたもんだから、行者さま憤怒さつしやつて、以來は此水さ封じ込めるだが、若し此界隈の者が改心して、業因が消滅しれば、うらの代になるやうな活き佛どんが何處からともなく來てエ、二度目に水噴涌せるだとお遺言ぶたしやつたちふこんだが、爭はれねえもんだ、きのふからそれが噴涌出したゞ。
又さ　嘘だんべい。
忠さん　盲の癖に慮外ぶつめえ。嘘ちふだら俺もう話すめえよ。

忠さん不平さうに切り株から立ちかける。

おしや　おや眞かね？　な、又さ、おら誰れか頼んで、早く一瓢べい汲んで來て貰ふべい。酒手さくれたら、次郎九が往つて來てくれべい。……にし否なら止さつし、お

れ擠栗出すだ。

忠さん　駄目だ。酒の香ひ嗅いで涎べい垂したり娘子の顔べい眺め廻いてるやうな者が往つたつて駄目なんだ。心の汚れで、其お水さま只の水になッちまふちふだ。

又さ　（失望して不平げに）あゝ、そんな事だんべい思つたゞ。出來ねえ相談だ。酒の香ひ嗅いで涎垂さん者があるけえ？　おれだつて目開いてだら、娘子の顔さ見たかんべい。にしア出來ねえ相談ぶつて、わしら盲人を弄り物にするだね？

忠さん　（腹を立つて、立上り）おらもう往くべい。こんな唐變木に物言ふがものはねえだ。

　二足三足行きかけるのをお酒子あわてゝ止めて

おしや　忠さん〳〵、あの人なんか構はねえが可い。（探りよりて袖を控へて）わしさ怒つてござらつしやるめえ。委細に話してくれつさい眞の事を。……にしさアが其お水さま取つて來たゞかね？

忠さん　あアに、さうでねえだ。

おしや　ぢやどうして目附かつたゞね？　だれが取つて來るだね？

忠さん　（機嫌を直して）お有りがてい活き佛さまが持つて來さつしやるだ。

又さ／おしや　活き佛さま？

忠さん　役の行者さまの、お再來ちふこんだ。飛雲上人さまちうて、齡はあんでもはア二百ぐれゐだんべい。五十日や百日斷食したつて、おッ死ぬことなんか無えだッちふおつかねえ不思議な活き佛さまだ。日ッ本中の有りがていお山ちふお山で、主が踏査けさつしやらねえ處は、一ケ所も無えちふだ。末ッ世の人助けに、此間中あのお山で、お加持さ獻げさしッたら、爭はれねえもんだ、行者さまのお水が、座禪組んでござる其尻の下から噴涌出したちふだ。其のお水を一滴しべい飲むだり數くだり爲れば、死人も生きるだ、腰ぬけも歩くだ、盲も眼玉くわつと開いて、蟻や蠅の睾丸まで見えるだ。

又さ　（急に杖を探り取りながら）そのお上人さま何處にゐるだね？　これからすぐ往つて來べい。

忠さん　いごかねえでゐれ。こゝさ來るだ今に。寺のある處て言へば、一度べい必ず立寄つて、お經文あげさつしやる定例だアから、大丈夫、此法濟寺へも寄らつしやるだんべ。

　又さは如何にも嬉しげにおしやこを見返り

又さ　ぢや今日は、此目眼が開いて、にしの顔さ見られる

だよ。

おしや　にしのがも見られるだ。

又さ　ありがてえ〳〵！　南無阿彌陀佛々々々々々。……が、忠さん、眞かね？　欺騙すでねえかね？

　忠怫然として横を向き、知らぬ貌してゐる。

おしや　まだ間があるだら、おれちよつくら往つて、取置の蠶卷さ取つて來べい、あれ被ると縹致が上ると言はつしやるだから。

又さ　しッ〳〵！　下の方から大勢の足音が聞えるだ。

忠さん　（上手を見て）あれアさつきからお上人さまに接着廻つた娘子らの群れだ。……あゝ、あんだか、いかく光る物持つて來るだ。

又さ　（聞耳立てゝ）最先に來るのは、廣沼の小鹽ッ子だね。

　眞ッ先きに廣沼の小鹽ッ子、村の娘、齢は十七八、群中の尤物、花模樣のある長手巾で風がはりな蠶卷をなして、一番目立つ華美づくりをしてゐる。つゞいて和栗といふ娘、これも十八九、三番目は松江、十四位。松江だけは蠶卷無し。いづれも特に著飾つて隣村の祭禮などへ往つて來たといふ風體。小鹽は手に舶來物らしい銀の小さい注子を大事さうに捧げ持ち、和栗は寶鐸を、松江はまだ新しい法衣と袈裟との疊んだのを恭しく捧げてゐる。

小鹽　（口まめに）又さ、恙ねえだかね？　喜ばつせいよ、にしらの目眼も、今にわしらがのと同じに見えるやうになるだ。飛雲上人さまちふ活き佛さまが……

忠さん　（とめて）もうそれ知つてるだよ。活き佛さま何處へ往つたゞね？（注子に目をつけて）あんで其大切なお水さ、にしらに任せさつしやつたゞか？

小鹽　此山の奧の院さもう一度お參りして來るだから、邪魔ッけなもの持つてつてくんろ、若い娘さ一番清淨な、きれいなもんだから、これさ預けると言はしつたゞ。

おしや　（獨り笑ひして小聲で）活き佛さまも大概なもんだ。あにが清淨だんべ！

又さ　（前へ出て、手を伸すやうにして）そのお水さ些とべいおれに拜ましてくれつさい。

小鹽　さ、此器物さ手に持つただけでも、少とべい見えるやうになるかも知んねえ。

　注子を又さに渡す。又さ受取つて振つて見て

又さ　これが器物けえ？　たつた是れんばかしけえ？　はてね、是れんばかしのお水で、目眼が開いて、日の目や娘子の鹽の目や、世の中の種々な立派なもんが見えるだ

かね？　はれ、おツたまげたこんだね！
　おしやこに渡す。おしやこも振つて見る。此うち和栗寶鐸を鳴らす。
又さ　ありや何だね？
和栗　活き佛さまのお鐸だよ、お經あげさつしやる時に振らつしやるだ。
又さ　（探りよりて鐸を受取り、鳴らして見て）　好い音がするだね！
　此うち小鹽ッ子、松江の手から法衣と袈裟を取りて
小鹽　又さ、にしに活き佛さまの光る着物被せべいか？　どんなだんべ、にしに被せだら？
又さ　光る着物ちふのは袈裟だらいふもんかね？　活き佛さまはどんな人だね？　立派な人かね？
　此うち小鹽と松江とは、何か捨てぜりふをいひ〳〵笑ひながら法衣を被せ、袈裟を掛ける。鍛冶屋の忠さんはそれを不安げに見てゐたが、終に堪へかねたらしく
忠さん　よしねえよ。物體ねえ事爲るもんでねえだ。お法衣さま弄り物にしてるとこ活き佛さまに目附かつたらどう爲るだ？
小鹽　（平氣で）　あに目附かるもんだね、山の奥にべいゐるだに。（又さをぐる〳〵引き廻して）　忠さん、立派だんべ、活き佛さま宛然だんべ。（松江や和栗と顔見合せて馬鹿笑ひをして）　おしやこさ、儘になるだら、にしに一目見せてえだ、いかく立派な好男子が出來たゞ。見えたら、にし如何ねえに自慢すべいか？　天狗さんのやうに高ぶつてえばるだんべい。
おしや　（さもさうずといふ風に澄して、男の傍へ來て探つて見て）　けふ、もう暫時で、えばれるやうになれるだ。
　又さも得意で鐸を鳴らしてゐる。皆々笑ふ。
小鹽　又さ、いつその事、さうして鐸さ鳴らして、けふから活き佛さまと同志に、山入りしたほうが可かッぺいでねえけえ？
おしや　（急に口をはさんで）　それ出來ましねえ。わしちふ妻女があるだからね。
又さ　その通りだよ。おれ活き佛さまの直弟子になるよりか、馬反吐村の標致よしの盲女と、斯うして結婚つてる方が幸福だ思ふだからね。
小鹽　（さげすんだ口吻で）　さう思つてせえゐりや幸福なこんだわよ。（又さの傍へ往つて）　にしアまるツきし彼女の面がまち知んねえだね？
又さ　だから俺、けふ目エ開くのを樂しみにして待つてるだ。
忠さん　（氣の毒げに）　盲人ちふもんは勘が好いから、て

いげい搔ッ探つて見たつても分るべいだにねア。

又さ　（被てゐる袈裟、法衣を手でさぐりながら）　それアさうだがね、わし女の顔も着る物も、あんまり搔ッ探つて見たことねえだよ。（悲しげに）　娘子は、一人殘さず恥かしがつて、わしの傍さ寄らねえだからね、好い男子だ〳〵と口でべい言つてもね。

おしや　へん！　若い娘子が傍さ來ると、今でも猫撫で聲僞るだからをかしいだ、此郡内八十八ヶ村で一と言つて二と下んねえ美女と夫婦になつてるだに。

と大眞面目でいふ。娘連笑ふ。忠さん氣の毒さうに

忠さん　好女に好男だ。眞のこんだ。にしらアけふこそ顔見合つて、嘸びつくらすべい。

又さ　嘸びつくらすべい思ふだ、ふだん聞いてるだからね、……あれの髮さ雨に濡れた鳥羽のやうだつてね。それから肌ア雪のやうに眞ッ白けで、目は見えねえだけんど、折々開くと、鈴ウ張つたやうで、可愛くつて鳩ッ子の目のやうだつてね。

小鹽　（笑ひながら）　さうだよ。梟や木兎だつて叶やしねえだよ、ぽつちりしてるだから。

皆々笑ふ。

和栗　しッ！　はれ、あすこへお上人さまがござらしやつたど！……早く其お法衣さま脱がさつせいよ、目附かると事だに。

大騷ぎをして法衣を脱がせ、簑を取戻し、捨てぜりふにて、あわてる盲人夫婦を制する。

又さ　これえな汚い形姿してゝも可かッぺいかね？

小鹽　かまふもんかね。活き佛さまの眼にや清淨も不潔も無えちふだ。

上手奥より飛雲上人出て來る。役の行者そつくりといふ扮裝、齡は八十以上、瘦せてはゐるが、まだ〳〵矍鑠たる骨格、顔色も赤みを帶んでゐる。雪の如き髭、頤髭は長さ一尺五寸餘、頭巾を被り、錫杖を突き、鐵の齒の下駄を穿き、左の腕首には珠數を掛けてゐる。桶屋の左古、傘屋の彌太をはじめ老若男女大勢隨いて出る。忠及び娘共出迎へて敬禮する。上人は盲夫婦に目を附けて立ちどまる。と桶屋の左古前へ進み出る。

上人　此二人か？

左古　（ぺこ〳〵と叩頭をして）　へア、さやうでござります、あいらでござりますだ。あいらは毎日のやうに、朝げから晩げまで、大概此門前さ出ッ張りまして、情けねえ聲べい出して物貰ひしまするだが、面白い、眞性で無え暢氣者でござりますだから、戲謔る者があるだと、物

貰ひの癖に、いつでも一緒になつて戯けますだ。

上人　（つく〴〵見て）　さて〳〵氣の毒な手合ぢや。（獨語のやうに）目を閉づれば見、目を開けば失ふ。なまなか眼といふものがあるによつて、心の淨眼に眩翳を生じて、とかく色法に染着して、眞如の實相に遠ざかるやうになるのでもあるのぢやが、併しながら、また假に汝等の心持になつて見ると、この有りがたい日輪の御光をさへも能う拜まんで、一生の間、二六時中、如法の闇に迷うてをるといふのは、笑止千萬なことぢや。人と生れいでた身の、此上もない不幸ぢや。見我身者發菩提心、聞我名者斷惑修善ともおほせられた。目は菩提の魔障でもあるのぢやが、またその所縁でもあるのぢや。（小聲）吽多羅吒干滿！（注子を和栗から受取りながら）あゝ！見るから淺ましい——世間の富豪なンぞには——人でなしのやうに汚がられ穢がられて、たかゞ五文か十文の端錢を惠んで貰ふか乃至食ひあましを分けて貰ふに過ぎん不幸な不具者の乞丐人……

又さ　（半分口の内にて）　つひぞまだ穢がられたことはありましねえ。此郡内八十八ヶ村で、一といつて二とは下んねえ……

忠さん　シッ！　默つてるだ！　シッ！

上人　併しながら、よしやおのしらが、なんぼう醜からうとも、なんぼう不潔しからうとも、大慈大悲の佛菩薩達は、世間の豪家なンぞとは異うて、かつてそれを厭はしいとも汚いとも思し召されるやうなことはないのぢや。こりやい、わしが今加持をしてやる。それから此有り難い靈泉をいたゞかせてやる。すれば、其目が忽ち見えるやうになる。

又さ　（頭巾を脱ぎて乞食藍て）　ヘア。どうぞや其お水さ戴かしてくれさつしやりませ。お冥加でおざります。お願ひでおざります。

上人　まづおのしから治いてやろ。此寺の本堂へ參れ。（お酒子に）よう心根を淨らかにして、そこに待つてをれ、おのしは後で治いてやる。

上人が、門内へ入らうとすると、群衆が騷ぎ立つ。

彌太　さあ、みんな來さい〳〵！

和栗　さあ往つて見べい、松江さ！　小鹽ッ子さ！　忠さんも來さつしやいよ！

大勢捨てぜりふにてどや〳〵と入りかける。

上人　（制して）　大勢來てはならん。待つてをれ〳〵。そこに待つてをれ。そも〳〵盲人といふものが、此世の中に出來たのは、所詮互ひの罪業の所生ぢやと思うて、一心に懺悔の祈願をしてをるがよい。

群衆退く。上人又さを伴ひて門内に入る。おしやこは門口へ探り寄りて、閾口に跪きて本堂の方を見詰め折折拜んでゐる。群衆は門前よき處に集り、本堂の方を見やりながら喋舌る。此うち奥にて上人の般若心經を誦するのが聞える。

上人　佛説摩訶般若波羅蜜多心經、觀自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄、舍利子、色不異空、空不異色、色卽是空、空卽是色、受想行識、亦復如是、舍利子、是諸法空相、不生、不滅、不垢、不淨、不增、不減、是故空中、無色、無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色聲香味觸法、無眼界、乃至、無意識界、無々明、亦無々明盡、乃至、無老死亦無老死盡、無苦集滅道、無智亦無得、以無所得故、菩提薩埵、依般若波羅蜜多故、心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、遠離一切顚倒夢想、究竟涅槃、三世諸佛、依般若波羅蜜多、故得阿耨多羅三藐三菩提、故知般若波羅蜜多、是大神呪、是大明呪、是無上呪、是無等々呪、能除一切苦、眞實不虛、故說般若波羅蜜多呪、卽說呪曰、揭諦、揭諦、波羅揭諦、波羅僧揭諦、菩提薩婆訶、般若心經。

此讀經は次の人物の問答の間、或は高くなり、或は低くなつて聞える。

忠さん　眞ッ白けな、立派な、長い鬚でねえけえ！　一尺八寸もあるべい。

小鹽　あねえな齒の屐で、よくまア山路がありけるだね。

左古　（經に聞耳立てゝ）若者も叶はねえやうな凜々と鳴る好い聲だねア！

和果　あれ見さつせい、又さがぶる／＼顫へてるだ。蟇蛙のやうに平つくばつて。

彌太　目が開いたゞかな？……（左古に）出て來てお鳩の顏見たら、奴どうすべいだか？

忠さん　（少し鬱いて）あゝ、おれ惡いことしたゞ。あの鳩を美女だ／＼ちうて、平生だまくらかして置いたゞが、鼻はあの通りの柘榴鼻で、口は西南の方へ引曲つて、頰邊には引釣があつて、肌てば澁ッ紙色で、頭髮てば、てんで玉蜀黍のやうだからねア。

左古　あにも不平いふことは無かんべいだ。目の見えねえ間、嬉しがらせてやつたゞけが功德ちふもんだ。

彌太　さうだよ。眞だと思つてた間だけが、奴の儲だ。

此間に小鹽ッ子は先刻お酒子が掛けてゐた捨て石に腰を下して髮をつくろひ、鬟卷を仕直してゐる。

小鹽　目の開いた當座こさおッ吃驚べいけんど、他の種々なものが目に附くだから、すぐハアまぎれべいよ。だれだつてさうだんべ、妻女の顏さ珍らしがつて見てるのは、

結婚つた當座、たかゞ二十日か三十日だんべい。

彌太　その通りだよ。爲ると、あの婆アを十年方も美女だと思つて、仲よく一緒に棲んでた又さの方が幸福だねア、にしの亭主なんかになつて、將來二十年も三十年も、毎日毎晩睨競して暮すよりゃねア。

小鹽　よしてくんな。にしを亭主にはしねえだからね。

忠さん　しッ！　大い聲爲るでねえ、今お加持してござるだ。

上人般若心經を誦し了る。

和栗　しッ！　しッ！……目が開いたげだ。

又さ　(門内にて叫ぶ)　はアれー！……はアれ！

上人　(門内にて)　曩莫、誐々曩、縛羅、落吃叉噜、迦噜拏摩野、怛他蘖多、作吃芻、莎訶。

此陀羅尼と混和的に又さの聲。

又さ　(門内にて)　はれま！　はれま！　あゝ、ありがていこんだ！　ありがていこんだ！　目が見える！　目が見える！　おゝ、あれが塔だんべ！　おゝ、あれが塀だんべ！……あれがお堂だ！　あれが門だ！　おゝ、活き佛さま、あなたのお顔が見えますするだ！　廣い／＼青い空が見えますするだ！

嬉しさに狂氣のやうになつて門口へ駈け出る拍子に、門口に跪いてゐたおしやこにぶつゝかる、おしやこ不意を食つて仰向けにひつくりかへる。又さは、それには構はず、門外へ走り出る。

忠さん　あれ、氣が附かねえだよ、嫁が居るだに！

上人もつゞいて出で來り、漸く起上つたおしやこをいたはつて門内へ連れて入る。又さは群衆の前へ來り、男連と娘連の間に立ち、杖でおのが位置をたしかめ、嬉しげに叫ぶ。

又さ　あれが鍛冶屋の忠さんだ、頭巾の格構と藪ッ蚊の脛のやうな細ッこい脛で分るだ。……あれが左古さんだんべ、鼻の格構で察しるだ。(小鹽ッ子がおしやこの掛けてゐた石にゐるのを見て、すつかり聲を變へて)　あれ！　衆人の言はしつたこと嘘でねえだね！　おしやッ子、おれ命あつて、一日でもにしの顔さ見たのは有りがていこんだ。有りがてい／＼、お水さまのお庇だ、お水をくれさつした活き佛さまのお庇だ。はれま、あんちふ立派な頭髪だね！　(小鹽ッ子少々きまりがわるくなつて俯く)　あんてま柔つこい肌だ！　あんてま美麗な目眼だね！　汝エ折々目隠くだから、底翳のやうで、見かけは健眼と變んぬえと聞いたゞが、これだら、成る程オ、うつくしいだ！　粂の仙人なんか、こんな眼玉見べいもんなら、白い股ッ子なんか見ねえたつて、すぐと雲さ踏拔くべい。

（惚々と傍へ寄りて）頭あげれ、おしやッ子、おれお大名になつたよりも嬉しいだ。これ、頭あげれてんば、今に汝も俺を見るだ、俺も中々好男子だちふだ。

小鹽ッ子の肩へ手を掛ける、と手荒く振拂ふ。

小鹽　ええ、觸つてくれつさるな、穢えわよ！

皆々笑ふ。又さ吃驚して

又さ　あれ、どうしたゞ！　小鹽ッ子の聲でねえけえ！

小鹽　おらがおらの聲出すのに、あにが如何したゞね？　おら啞で無えだよ！

又さ　（どぎまぎして）　此中のどれが彼女だね？（和栗に近づきて）にしかねお洒ッ子は？　にしア餘程似てるだ。髮さ澤山あろし、それに冠つてる鬘巻か……

と和栗の頭へ手をやらうとする、和栗其手を厭といふ程叩きつけて

和栗　にしの妻女ぢやねえだよ！

皆々笑ふ。又さ彌うろたへて、松江に

又さ　にしかね？　にしアあんまり綺麗でねえだが……

松江　厭だ！　綺麗でねえだからつて餘計なお節介だ。おら盲女でねえだよ、目あきはにしのやうな者の妻女にやなんねえだよ、ぴッ！

くるりと向うへ向く。皆々笑ふ。

彌太　もう一度やつて見れ、もう一度。さう爲る中にや當るだ。

左古　さうだよ。もう一度やつて見るだ。

皆々笑ふ。又さ泣き聲になりて

又さ　何處へ隱つてしまつたゞ？　何處へ！　うらに取つちや此上もねえ目出てい日だに、あんで爾たちや予を如是に嘲弄いて、てうさいぼうに爲るだね？　嫉むだね爾らは？　横道人だ爾らは！

又さ地上に坐つて泣く。皆々笑ふ。此中おしやこ目が開いて、にや〳〵笑ひながら門内から駈け出して來る。

おしや　又さはどの人だね？

又さ　（顏を上げ振返りて）　ありやおしやッ子の聲だ！

互ひに凝と見合つて暫く茫然としてゐる。

小鹽　さあ、早う傍さ往つて、聲色つくろつて、可愛いとか何とか言つてやらねえけえ？

又さ　（怨めしげに忠と小鹽ッ子とを見やりて）　あんとか言ふ段になりや、爾たち二人にや十分言ふことがあるだ。

小鹽　（聞流して）　おしやッ子、爾何にも言はねえだね？　どう思ふだねあの人を？　肥ッちやうの、赤ッ鼻の、ど

んぐり眼の……（と笑ふ）

しおや　わし初めて知つたゞ、目あきちふ者は悲慘な者だと。あねえな見ッともねえ人が予がのかね？　わし目あけてくれさつした活き佛さまが怨めしいだ！

又さ　うぬが面ア眞先に見せさつしやらねえのが、活き佛さまのお慈悲だと思へ！　あぜつて、うぬが面ア一日見りや、大概の者ア吃驚げて氣イ狂れて、肥料溜におッこちておッ死んぢまふまでア、郡内八十八ヶ村を驅け摺り廻るべい。

おしや　噂ほどに好い女でねえかも知んねえか（と髪をいろひながら）こんねえに頭髪も澤山あるし、肌は白かねえけんど、目は今だつて鈴ウ張つて……

又さ　頭髪た！……鈴ウ張つた！　むく犬の毛だつて汝がのよりは美しいだ。赤とんぼの目だつて汝の眼玉ほどにや飛び出して居なかんべい！

おしや　（泣き聲になりて）あんだつて！　むく犬だ！　赤とんぼだ！　目エ開くと嘘吐くだか？

又さ　嘘吐いたのは汝だ。此十年の間ちふもの、朝げに晩げによう予を騙したゞ。目エ開いたからにや、もう金輪際騙されるこんでねえ、此見つともねえ化け物婆め！　うらが子を生ますこんでねえぞ。

おしや　だれが汝のやうな死にそこねえの子を捻出すもんけえ？　汝より綺麗な男に結婚つてゐてせえ、子の無えはうを有り難がるのが女の定りだ。汝に似た子供が五六人も出來りや、五十年も經たねえうちに、郡内八十八ヶ村は化け物の巣になッちまふだ。

又さ　化け物ちふのは汝のこんだ。早く山奥へでも引ッ込まねえと、今に郡内八十八ヶ村の兄達の竹法螺騒ぎになるだ。

おしや　（杖を揮りて）一つ酷烈く打撲つてくれべい、爲れば汝の目が又つぶれるかも知んねえ。

又さ　あんだと？

又さも杖を揮り上げる。二人打ちあはうとする。先刻から面白がつてくす／＼笑ひながら傍観してゐた男女さすがに見かねて立ちかゝり止める。

上人　（門内にて）曩莫、悉底哩也、地尾迦南、薩縛怛他蘗跢南、晤尾蘗爾々々々、摩訶斫迦羅縛曰哩娑吵々々、娑羅帝、娑羅帝、怛羅以、怛羅以、尾駄麼𩕳、三畔惹𩕳、怛羅麼底悉馱、儗哩耶怛覽、娑縛賀。

左古　恥イ知んねえか？　夫婦いさけひ犬も食はねえちふわ。見い、今又活き佛さまお經あげてござるとこだに、物體ねえ。

又さ（身をもがきて）あねえな糞坊主かまふもんけえ！……あの女、一つ撲らしてくれつさい。お願ひだに、お冥加だに！　さう爲りや俺おッ死んでも心殘り無えだから！

忠さん　えゝま！　こつちさ來るだ。

男共立ちかゝりて、やつと二人を引き分ける。女連はおいおい泣きわめくおしやッ子をなだめる。上人門外へ出て來る。

上人　どうしたのぢや？　嬉しさの餘りに氣でも狂うたのか？

左古　いんね、さやうではござりましねえ。目エ開いて見ると、互ひッこの顔があんまり見ッともねえちらうて、夫婦いさけひさ押發けたでござります。へア。

上人（二人の間に入りて）さてさて汝等は、不所存なものぢや。よう分別をせい、目といふものは、おのしらの共業因の深い穢はしい肉身を見せようがために賜つたものではないのぢや。廣大無邊の、一切處に遍い妙光明が、萬有に、一切衆生に、山に溪に、川に海に宿つて照り輝いてゐるのを知らしめられうための御方便の下されものぢや。二六時中、かやうに念じてさへをるなれば、互ひの面持が如何やうであらうとも、かつて目にも入らず苦にもならんで、心根はおのづと淸らかにも安らけくもなつて、さながらの佛菩薩とてならるゝのぢや。（忠に）離せ、大事ない、もうおちついてをるわ。（忠、又さを放す）それから（おしやこに）おのしもぢや。今わしが言うた事をよう記えておいて、眞ッ暗な夜々毎によう思案して見るがよい。佛は常に慈眼を垂れさせられて憐れな、色心何れかの糧に飢ゑて、死にかゝつてゐる衆生をば憫ませられる。（と言ひつゝ娘らから法衣、袈裟を受取り、鐸を腰に附け、片手には錫杖、片手には注子を取りながら）さらばぢや。わしは明日は向う山へ往かんければならん。あそこには哀れな聾女がをるげな。それから十ケ莊へも寄るのぢや。あそこには正氣を失うた者が二人。それから雉子村へも往くのぢや。あそこには啞子がをるさうな。……今宵は、樟が谷のあの岩窟に籠つて、先づ明王に供養申して、あまねく衆生の冥福を祈る積りぢや。

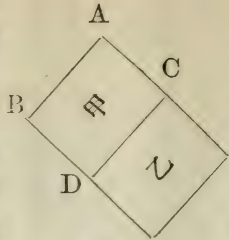
徐かに下手へ行く。皆々見送りて合掌し禮拜する。又さとおしやッ子とは別々になつて顔をおさへてうつむいてゐる。

―― 幕 ――

第二幕

鍛冶屋の店前

時候は初冬の早朝。村の棒端。上手へ寄せて斜に草葺き屋根の鍛冶屋の店。總間口二間半、甲の鍛冶場は間口も奥行も一間半で、ACの間一間だけが半壁で、殘り三尺が出入口、そこに上り框がある。ABの間は半窓、そこは竹藪に接してをり、風に戰ぐ竹越しに田圃が見渡される。CDの間は下地窓の附いた壁、乙は薪部屋兼帶の脊戸への通路で、其軒は隣家の竹垣に接し、其すぐ前に大きな椎の木がある。鍛冶場には簡略ながら鞴其他時代相應の營業設備がしてあり、鍛冶道具をはじめ製作品や修繕中の鐵物類が半窓の下の壁一面に吊してある。店の前は往還。中央よりもやゝ下手、店に向ひ合つてゐる心で古井戸、式の如き井桁の上に繩附の釣瓶が載せてあり、其邊ざつと流し元の設備。井戸に近く柳の老木、もう葉は殆どなくなつてしまつてゐる。其奥下手は竹藪。正面一帶は田圃の遠見、下手に雪の積つた遠山が見えてゐる。往還は其遠景のこつちにあつて、下手へ一うねり大きくうねつて遂に見えなくなつてゐる。



鍛冶屋の忠さんは、けふは頭巾は無しで、前幕のとは別の袴を穿いて、此冬空に汗を拭き／＼一人でテンカン／＼をやつてゐる。下地窓の壁で遮られて、前からは姿がよくは見えない。目あきになつた又さは、着物も以前とは違つて、小ざつぱりとしたのを着て、薪部屋に胡坐をかいて、そこへ雜然と持ち込んである大きな木の古根ッ子を手斧でこなさうとして持扱ひ、溜息ばかりして手を休めてゐる。

忠さん　何してるだね爾ア？　急いでやつてくんろ。……（テンカン／＼を續けながら）けふは晝前に、まだ澤山火イ要るだからね。汝が昨日割つたゞけぢや半分がたにも足りねえだ。

又さ　人間の根ちふものにや限りがあるだ。寒い時分に、ろくそつぱう物さ食はねえで働くだから、脂肪アぬけて、手足ア凍えるだし、下ッ腹ぺこついて、こてえきれねえだよ。爾來て自分で打割つて見るがいゝだ、こんねえな古根ッ子オ五日と續けて割らされるだら、大概の人間は

焼てしまふべい。

忠さん鐵槌を持つたまゝ鍛冶場から出て來る。汗の顔に煤が附いて眞ッ黒になつてゐる。

忠さん　汝また法濟寺の門前へ出ッ張りてえのけえ？　食はして、眠らして、小使ひ錢せえくれてやつてるだに、どの口でそんねえなこと吐かすだ？　若しか他が聞いてでもゐれア、おらが平生打擲りでも爲るか、でなくば汝の錢子がふんだくりでも爲たゞかに聞えるだ。

又さ　おれに錢があれアふんだくりかねゝえだ。

忠さんは鐵槌を投り出し、已に割つてあるだけの薪を鍛冶場へ投げ込みながら

忠さん　餘計な心配だ。錢に緣のある面けえ？　此なまけものが！

又さ　此家にゐるだから錢が入らねえだ。盲で法濟寺の門前にゐた時分にや儲かつたゞ。あすこにゐるはうがましだ。こねえな處にゐて、口がな一日辛い仕事オして、おッ死ぬやうな思ひするよりやア！

忠さん（呆れて）おッ死ぬやうな仕事だ？（傍へ寄りて）ようし！　辛い仕事さしてくれべい。さ、その上ッ張りひんむくつて、こゝさ來て、一生懸命に仕事爲るだ。爲れば、手足イ凍えるどころか汗イ出るだ。早く爲れ。あにを躊躇してるだ？

又さ（怖れて悲しげに）おれを殺すだかね？

忠さん　なんだと？　その上ッ張りひんむくれちふに。早くしねえと、頭はたきみじくぞウ！

又さ（悲しげに）やれ〳〵！（上着をぬぎて處々綻びてゐる古襦袢一つになりて）爾ア先の女房裸にして叩き出したつてね。それから家鴨の毛エむしつて、雨ふりに赤肌で驅けずり廻らしたつてね。おら種々な事聞いてただが、今日になつて分つたゞ、みんな眞のこんだね！

忠さん（薪部屋から根ッ子の最も大きい奴を往還へ引摺り出して）こいつを打割るだ。

又さ　おや、おッかねえ！　何てま巨大い根ッ子だ！（力無げに）それに霜がかゝつてるだから、氷のやうに滑々してるだから、……あ、冷い！

忠さん　冷いのは時候の故だ。不思議はねえだ。

忠さんは又鍛冶場へ戻りて火加減をなほしてゐる。

又さ（氣のなさゝうに手斧を取上げながら）なるほど不思議はねえだ！（空を見て）あゝいふ空模樣になれア寒い筈だ。……あゝ、目エ見えねえ時分は暢氣だつたがねア！　目エあいてると、毎日のやうに、あねえな可厭な寒さうな雪雲さ見えるだし、人間はみんな〳〵鍛冶場の方

を見て）爾のやうに、鼻べい赤アくして、水ッ鼻汁垂いて、涙ぐんでるのが見えるだから、情けねえだ。あ、おれ、目あかねえけりやよかつた。

忠さん　あれ！　目イあいたのを怨んでるだか？　罰當りが！

又さ　（力無げに手斧を振上げながら）なまなか目エあいて、爾らの面ア見て、生きてるのは辛いだ。（根ッ子の一角を割る）おらあんな娼もつてるだかと思ふと、辛いだ。（又一角を割る）天道さま嘸辛かんべ！　爾らのやうな無能漢が、此世ン中にはゞかつて、まるで肥料溜の中さぬめずり込んだやうに、うじよ〳〵這ひ廻つてるのが天眼通で以て常住見通されべいからねア。

忠さん　（又店先きへ出て來て）負け惜みで、以前ォ羨んでるもよかつぺい。不心得な者は、一度はお庇さまで目エあいたつて、又罰で元へ戻るちふから。おしやッ子の目は、もう餘程翳んで來たちふだ。罰當りが！　今にどう盲人に戻るだ！

又さ　爾のいふことなんか眞にしねえだよ。おらが盲でゐた時分に、爾言つたこと悉皆空ッぺいだつたゞ。

　此時おしやッ子、これも前幕のとは異つた衣服を着て、例の通り鬘巻をして、籠を背負ひ、熊手を持つて井戸の下手から出て來る。又さ目早く見附けて

あれ！　また歸つて來たゞ。

　と急に女へ背を向けて薪を割りはじめる。おしやッこは、大分目が霞むかして、心附かぬらしく、其まゝ往還を奥へ通りぬけさうにする。

忠さん　あれ見ぞい、おしやッ子！　朝げから晩げまで、あんにもしねえで、むだべい並べてるだ。

おしや　（立ちどまりて）だれの事いつてるだね？

忠さん　（笑つて）あれの事さ。見さい、禰衿が甚く破けてるでねえけ？　夫婦のよしみだによ、つゞくつてやらつせいよ。（又鍛冶場へ入りながら）爾らはもう長いこと、互ひに物語りしねえでねえけえ？

おしや　ぶッちやッといてくれさつし！

　つんとして奥の往還へ通りぬける。

又さ　（手斧をとゞめて）二日とおらの顔見ねえでゐられねえだ。

忠さん　（テンカン〳〵をはじめながら）汝の顔？　つんと引ッ澄して通りぬけた樣子べい見ると、汝に未練氣がありげにもねえだ。

　又さ立上りて奥の方を見てゐる。

駄目だ、破けをつゞくらうちふ心中立てせえもねえだに。

又さ　なアに。こッちが逐ッ拂つてくれたゞ。

忠さん　どッちが逐ッ拂つたッて可いだから、早く仕事してくんろ。ぐづッかしてるだと、もう晝だ。……(又さ下手を見てゐる) 何をぽかアりとして見てるだ？

又さ　(氣拔けのやうに) だれか來るげだからね……小鹽ッ子さアが水を汲みに來るげだからね。

忠さん　小鹽ッ子が來たからつて、汝に何の用もねえだ。……(又店先へ出て來て) 早くしてくんろ！　晝前に方附けッちまはんけりやなんねえちふのに、けふは！

又さ　あんでさう急込むだね？

忠さん　婚禮の支度しねえけりやなんねえだ。

又さ　だれとだね？

忠さん　小鹽ッ子とよ、きまつてるだ。

又さ　(ちつと忠さんの顏を見て) おら嘲けてるだかと思つてゐたゞが、ぢや事實かね？

忠さん　あんでそんな顏爲るだ？　とうから約束してるだ。

又さ　ようしたもんだね！

忠さん　あにがようしたもんだ？

又さ　天道さまは偉いもんだね、うまアく埋め合せ爲るだねえア！

忠さん　えア、埋め合せ爲るとは？

又さ　もしか、爾か爾に似た面がまちの女子と縁組つたゞら、化け物のやうな子べい澤山生れるべいだに、小鹽ッ子と夫婦になりや、二一の天作で以て、どうにか人間並みの餓鬼が出來べい。

忠さん　(怒つて) ひでい面してる化け物アロもひでいこと吐すだ！

又さ　他の面よりか己が面見るが可いだ。惚れてる女に其面見せるかね？　生れ附き見ッともねえ處へ、煤べい附いてるだから、まるで二月も物食はねえでゐた二荒山の荒熊見てえに、眞ッ黒けに痩ッこけて凹み面アしてるだ。あの流しへ行つて、面べい拭つたがよかんべい、女が今に來るだに。

忠さん　(不安氣に下手を見て) 小鹽ッ子はおらの面がどう見えたつて氣に爲ねえだ、二人で間口の三間もある鍛冶場アおッ建てることになつてるだから。……(又鍛冶場へ入りかけて) だが、どうも不思議でなんねえ、汝夫婦が目エあいてからちふものは、此村も、隣り村も、その隣り村の者までも、みんな面のことべい氣に爲るやうになつたゞ。……だが、顏拭いて來べい。

忠さんは上り框から奥へ入る。又さ一人になると、襦袢の袖で顏を拭ふ。下手より小鹽ッ子、これも前の場とは別の常着を着て、手拭で鬘卷をして、洗濯物を入

れた盥を抱へて井戸端へ來る。

又さ（薪を割りながら猫撫聲で）小鹽ッ子さ、こんちは。

小鹽（冷然と）こんち。

又さ　おッかぶさるやうな可厭な日だねア！……

小鹽ッ子返辭もしないで、そろ／＼水汲みにかゝる。

又さ歎息して

あゝ／＼！　目エ見えると辛いだ！　こんねえな可厭な空模樣だつて見ねえけりやなんねえし、氣にくはねえ、穢え面だつて見ねえけりやなんねえし……

小鹽ッ子默つて水を盥へあける。

だがね、たつた一つ有り難いことあるだ。爾のやうな綺麗な、眞ッ白けた、立派な娘子の顏さ見るたんびにね、ああ俺目ィ見えて有り難いこんだと天道さまに禮いつて、お水さまに禮いつて、活き佛さまに禮いふだ。

小鹽　若い娘の顏べい見て、びろつくやうな男は、とても極樂さ往がれねえだつて法濟寺の和尚さま言つたゞよ。

洗濯をはじめる。

又さ　だつてね、俺のやうに、爾がのゝやうな綺麗な聲べい聞いて、顏さ見ること出來ねえでゐたものは無えからね。

小鹽　身の程オ知んねえ何處の馬鹿アな爺さんがねア、路頭に平つくばつて、目ィ閉つて、娘ェ通つても年增通つても、まるッきし見分けること出來ねえでゐた時分のこと思ふと、をかしくつて、わし横ッ腹痛くなるだ。はゝはゝ！

又さ　爾をかしいか知んねえが、おら爾の聲聞くたんびに、無性に嬉しくもなれア、何だかハア偉大くもなるやうに思つたゞ。（しんみりとなつて）なぜッてね、爾の聲聞いてゐると、盲ちふこと忘れて、いろんな事思ひ出したゞから。爾の聲さ聞くと、あんにもハア外の事思はなくなるだ。

小鹽　そんねえな事いはつせると、おれおしやッ子さに言ひつけるだに。（又水を汲みながら）爾聞いたゞんべ、けふは野末の後家さんに傭はれて、向う山さ行つたゞよ。落ち葉掻きに。夫婦いさけひして、爾が酷い目にあはせる處見さしッたゞから、後家さん氣の毒がつて傭ふことにしたゞ。

又さ（激昂して）生きてる人間に邂逅すたんびに、あの婆アの事思ひ出させられるだ。どッ畜生めー

小鹽（皮肉に）おらまた初めて目エあいた大吉日の事さ思ひ出させてくれるだから、さぞ嬉しかんべいと思つてゐたゞに。

又さ　嬉しかんべいッて？（手斧を投り出して、井戸の傍

へ來て、しんみりとした口吻て）大吉日どころけい、大厄日だアあの日は！　錢拾つた夢べい見て、喜んでる最中に、どづかれて、おッ魂消て、目エさましたやうなもんだ。

小鹽　（冷然として洗濯しつゝ）面白いことといふだね爾、けふは。爾が毎晩々々臥つてゐた處は、あの大い肥料溜小屋の軒下だやア無かつたけえ？

又さ　いんにや、さうでねえ、夏だらうは、俺あの土橋下の眞ッ闇黑ン中に寢つてたゞが、あの闇黑ン中に臥つてゐて、爾の足音や笑ひ聲を聞いてる積りで、爾のありくのを見てエる積りで、いろんな勝手なこと思つてた時分の方が、（悲しげに）こんねえな薄暗い處で、忠さんに罵鳴附けられて、辛い仕事爲るよりアずつとましだ！

小鹽　をかしなことといふだね、まア、此爺さんは！

又さ　おれ世間の人がいふほどに、年とつちやゐねえだ。

小鹽　若い娘とそんねえな話爲るには、年取りすぎてるだよ。

又さ　（がつかりした體で）さうかも知んねえ、あゝ俺馬鹿見たゞ！　あの鍛冶屋めにだまくらかされて澤山年月をめちや〳〵にしちまツたゞ！　あねえな小ぎたねえ婆アを若い美女だ思つて、惚れた腫れた言つてたゞ！

小鹽　忠さんを怨まねえが可い。そらほど長くつながつてゐた女房でせえ、目エあいて爾の顏さ見ると、逃げたでねえけえ？

又さ　（一寸しよげながら）おれの顏見たから逃げたでねえ。奴、うぬが起るざまア、頭髮梳くざまア、物食ふざまア、寢臥るざまア毎日のやうに俺に見られたゞから、小ッぱづかしくなつて出て行つたゞ。見られたざまでねえだ毎日見てると。

小鹽　（獨語のやうに）男はみんなさう爲るだね。情が無えだ。

又さ　おらのやうに長いこと盲でゐて、はじめて目エあいて穢え面ア見て、其目で爾のやうな綺麗な娘子の顏見たものは他にはねえだよ。

又さ目を細くして小鹽ッ子の傍へ摺り寄る。

小鹽　接近ねえでよ！

小鹽ッ子遮ける、又摺寄つて、次の語の末に其肩へ手をかける。

又さ　眞のこんだによ。長いこと此世ン中の邪惡事にべい馴れッこになつてるやうな男と結婚はねえが可い、それえな男は本當に爾見る目もつてゐねえだから。

小鹽　（振拂つて）厭だ！　氣が狂れたでねえかね爾は？

又さ　爾に接近いてりや氣も狂れるだ。おらのやうに眞向きに爾見るもんは、又とはあんめえだに。ま暫時、おらと同志に此方さ來さい。（小鹽の手を取る）おれ如何樣にでも大事に爲るだから爾を。

小鹽　厭だよウ！　離してくれつさい！　あれ、厭だツてば！……忠さん！　忠さん！……

　忠さん此けたゝましい聲におどろかされて、鐵鍬を持つたまゝ、奥から駈け出して來て、此體を見て二人を引き分ける。小鹽ツ子ぷん／＼怒つて

目の無え者は臆面もねえだ。（喘ぎながら指さしをして罵る）づう／＼しいツたら無えだ！

忠さん　やい！　氣でも狂れたゞか？……正氣で馬鹿べい爲ると叩き出すぞウ！

小鹽　づう／＼しい大馬鹿だわな、あいつ、べツかりせえすりや俺のやうな好女だつて、しよびいていがれるだ思つてるだ。

　又さ目に兩手をあてゝ、よろ／＼と中央へよろめく。此時おしやツ子、熊手を提げ、籠を脊負つて、奥の往還からそろ／＼歸つて來る。

忠さん（呆れた體で又さを見やりて）盲は横道だちふが眞のこんだね！　汝もう今日かぎり俺が家に置くこんでねえだ。

又さ（尚ほ兩手で頭を抱へながら）あゝ、こりやどうしたゞか！　でツけい雷雨でも來るだか？　天がだん／＼眞ツ暗になつて來たゞ！　世の中が最終になるだか！（よろ／＼とする途端にあぶなくお酒ツ子と衝突らうとして、目を据ゑ、じつと見て、其の手を摑みて）おしやツ子！　おしやツ子！　汝おれ見えるだか！

おしや（手荒く拂ひのけて）見えねえだよ。……うるせえ、離さつしイ！

　小鹽ツ子は面白がつて手を叩き

小鹽　いゝ氣味だ！　もつと小ツぴどく引撲くがいゝだ。おらの手イ取つて引ツ張つて、汝と同志に見ツともねえ乞食女にしべいとしたゞ、その糞爺め！

おしや（怫然として）あんだつてエ？　爾たつておらが年輩になれア、日ツ本中の一番むせい糞婆アになるだ。よく似合ふべい此爺とつながつて歩いたら！

　又さは目をおさへて田圃の方を向いて中央に立つてゐる。

忠さん　小鹽ツ子が汝のやうになる？　いゝ加減の事べい吐せ！

おしや　あねえなぐにやついた、汁氣の多い肉體が、目に

立つて皺くちやになるだ爺イ取ると。あねえな薄ッこい頭髪ア四十にもなると甚アく禿ちよろに脱け上るだ。（行きかけて）標致がいゝからッて、若い間だけ、馬鹿男どもにびろつかれて、五十にもなると化け物扱ひにされるよりか、おらがやうに人並みの面アしてる方がましだ。見んろ今に、子供らが其面見て、おッかながつて突ッ走るやうになるだに。

おしやこ下手へ入る。此間に忠は薪部屋から又さが前の場に着てゐた着物と杖とを取出して來て、又さの立つてゐる前へ投げ出し

忠さん　それ！　汝の元着てゐた着物だ。これ着て、今すぐ出てうせれ！　二度と來ると、此鐵槌で、その頭はたきみじくぞウ！

又さ　あんでそんねえに酷く爲るだね俺を？

忠さん　（小鹽ッ子を指さし）あんでだア？　おらが女房にしべいしてる大事の女を、汝のやうな乞食爺に玩弄物にされてたまるもんけえ！

又さ　彼女が爾を玩弄物にしてるだ、目見える娘子が、あんで爾なんかと本氣で夫婦約束爲るもんだね？（小鹽ッ子に）あれ見さい、あの馬鹿づらア、あんねえな奴ぶッちやッといて、おらと同志に來さいてば。

又さ小鹽ッ子の手を緊と取る。小鹽ッ子振り拂ひかれて

小鹽　忠さん！

忠さん　（手荒く引き分けて、小鹽ッ子をかばひ）ひッぱだかれてえだか？　嬶の尻追つてけ、われ相應の嬶だ。

又さ　（小鹽ッ子に）あんで爾ア其馬鹿者ォがなりつけてやんねえだね？

小鹽　（忠にしなだれつゝ冷然と）汝のその目つきとその聲が厭で／＼たまんねえッて、おら此人に言ひつけてるだ。女房の後ぼつかけて行ぐが可いだ、さうして又ひッぱたかれたら、今度は不具村さ往つて身分相應の相手べい探して見るが可いだ。さう爲る中にアおらがやうな娘ッ子にや如何な口きくべいもんか合點が行ぐだ。（忠の手を取りて）あいつがゐなくなるまで、彼方さ行つてゐべいよ、あんだかあの目つきが怖くなつたゞから。

小鹽ッ子薪部屋から背戸へぬける。忠さん其入口に立ちどまつて

忠さん　二度と來やがると叩きみじくぞ！（腕まくりして）鍛冶屋の忠さんは力が強いぞウ、汝の頭の骨よりかもつと堅い物さ澤山叩きみじいたことがあるだア。

忠さん背戸へぬける。又さ片手で目をおさへて見送

りながら、よろ／＼として

又さ　あれが此目の見をさめだ、酷い女と酷い事爲る男が！　あゝ情けねえ、いくら悔しくたつて、目も見えねえけりや力もねえだから！（もう大分目が霞むらしく、あちこち探るやうに歩きて又立止る）力は無えだつても呪ふことは出來るだ。畜生め！　畜生め！　神さま！　佛さま！　あいつら二人を打殺いてしまつてくれつさい！　おらも同志に打殺いて、地獄へおッこといてくれつさい！　あいつらが劒の山さおッこちやアがつて、逆磔刑になつて、七顚八倒べいして、十日も二十日も三十日も踠き苦んでる處見ること出來だら、どんねえに好い氣味だんべい！　すばらしい見物だんべい！　だからおれ地獄さ往くが樂みだ。……が、こりや內密事だアから、天道さまにや、氣取られねえやうにしなけりやなんねえ。

あちこち探して着物と杖とを拾ひ取りて下手へ行きかける。

――幕――

第三幕

法濟寺の門前

第一幕と同じ門前。あちらこちらに雜草が以前より繁茂し、なり、例の塀の崩れには、人畜の出入に隨分ん爲かのやうに荆棘の枯枝や雜木の枯枝が横たへてある。例の捨て石の邊も以前よりむさくるしく、古むしろ、古わらぢなどが芥まじりに取散らしてある。おしやこ、もとの通りの盲目になりて、杖を突き、上手より出て來り、例の捨て石を探りあてゝ腰をかける。片手に編みかけの草鞋一足と藁を少しばかり提げてゐる。前の幕と同じ時候。七八日頃の宵月。

おしや　（悲しげに）あゝ！　情けねえこんだ！　眞ッ黑闇だつたつても、以前はこんねえぢやなかつただ。あゝ、情けねえこんだ！　一人ッきりで稼いで、どんねえにかして生きてゐねえけりやなんねえだ。……（溜息をして）あゝ！　人通りは少ねえし、風ア冷てえし……（草鞋を編みはじめる）あゝ！　けふからは、短い日も長かんべい！……こゝに如是にして腰イ掛けてゐたつて、あんにも見えねえけりや、あんにも聞えねえだ。心ン中で思ふこんだつて、あの又さの畜生もエ罰イ當つて、おッ死にアや

がれと思ふばかしだ。おれ將來ア常住のやうに、きッとみんなの好い玩弄物に爲られるだ、あの男どけへ往つただかなんて、知つてる癖に、きッと毎日のやうに、わざッとからけひ面に訊くだ。さうして白髮のおン婆アになッちまふまで、俺こゝに斯うやつて……
（と言ひかけて杖を弄り、ふと聞き耳立てゝ）おやア！　變的な足音が爲る……あゝ、やつて來たゞ！

おしやこしづまりかへつてゐる。下手より又さ、もとの通りの盲人になり、（頭巾がないばかりで、服裝も第一幕通り）杖で探り〳〵出て來る。

又さ　美女だなんて嘘オ吐きアがつたおしやッこ婆アめ、時疫わづらつてくたばりやアがれ！　あの活き佛め、目エあかせやアがつたばッかしに、俺こんな情けねえ目に逢ふだ。活き佛の糞坊主め、くたばりやアがれ！……

おしやこのゐるのには氣が附かないで、其隣の切り株に腰をおろす。

あの鍛冶屋め！　ろくすッぽう物も食はせねえで、辛い仕事さ爲せやがつて、おれを半殺しにしやアがつたゞ。鍛冶屋め、くたばッちまやアがれ！　小鹽ッ子め、聞いたこともねえやうなおッそろしい業病にでもとッつかれやアがれ！　畜生！（お酒子うなづく）女て奴アどいつもこいつも惡魔根性有つてるだ。……（杖を石によせかけ、顏に手をあてゝ身體をゆすぶりつゝ）あゝ！　あゝ！　けふからア淋しいこんだ！……生きてる人間にやアろくな奴ア一人だつてゐねえだけんど、それでもオあのお酒ッ子オ、あねえな見ッともねえ汚え婆アだけんど、あいつでもゐりやア一人よりやアましだけんど……あゝ冷てえ〳〵！　こんな冷てえ北ッ風に吹かれてりや俺、おッ死ぬかも知んねえ。……夜にゃなるだし、あゝ〳〵、可厭な聲で、烏ア啼いてるだし…　人ッ子らしいのア一人だつて通らねえだ。……あゝ、犬が吠えてるだ。……風がだん〳〵に酷くなるだ！……（耳を欹てゝ溜息をつき）かうやつて只た一人で打鬱いでゐるちふと、俺氣イ狂るかも知んねえ、常住のやうに己が溜息イ聞いたり、己が足音べい……（と足をばた〳〵させて見て）聞いたりしてるだと……

此時お酒ッ子溜息をする。又さ愕として

おや！（不審げに一寸考へて）石が溜息爲るなんてエことオ思ふやうになるかも知んねえ。（耳を立てゝ四下を窺ひ、急に杖を搜しながら）あんだか氣びがわるくなつたゞ！　餘所へ行くべい。杖を何處へやつたゞか？　ああ氣びがわりい。……

やつと杖をさがし取り、石を離れ、足早に逃出したが、あわてたので方角が分らなくなり、土塀へぶッつかる。

あゝ、どうしべい！　途惑ひしッちまッたゞ！　あゝ神さまア！　佛さまア！　どうぞ助けてくれッさいまし！　どッちさ往つて可いだか、まるッきし見當が附きましねえ。お冥加でおざります、助けて下さいまし！……（地上に平伏して）これからは毎日毎晩、きつと忘れねえで拜みますだ、もう何にもわりい事しますめえだから、娘子の聲さ聞くべいッて、耳ィおッ立てるやうなこと爲ますめえだから！……

おしや　神さまにまで嘘吐くだか？

又さ　おやア……（やつと安心の體で）おしやッ子かね？……これ！……（やさしく）おしやッ子かアいつてるでねえけえ？

おしや　長いこと聞かねえでた餘所行きの聲爲るだね。小鹽ッ子と取ッ違へるでねえけえ？

又さ額の汗を拭き〳〵、おしやこの傍へ進み

又さ　目てエものは變的なもんだ、氣持ち變ッちまふだ。汝なんかア怖がる害ねえだけんど、つい一寸びつくらしたゞ。が、今に元の通りになるだ。

脇の下の冷汗を拭いてゐる。

おしや　元の通りになつたゞら、嘸すばらしかんべいよ。

又さ例の切り株へ腰をおろし、少々羞げて

又さ　弄つたつても駄目だ、汝も俺とおんなじに、目エ見えなくなつたちふだから。

おしや　目エ見えねえだつてね、心ン中に記えてるだ、おら何の因果でか、日ッ本中に一疋とはゐなかんべい馬鹿アな盲蟇蛙と長い事夫婦になつてゐたちふことを。そいつが當り前に溜息してる女の聲さ聞いて、おびえて、泡アくつて、眩暈つたちふことを記えてるだ。

又さ　（冷然と）さうけえ！（鼻で笑つて）すんだらまた、こねえなことも記えてるだんべい、つい此間汝がある鍛冶屋の店の前の井戸ン中覗くと、ちやうど風が無えで、水がよく澄んでゐたから、水ン中へおつりきなものが映つたゞ。その映つたもの記えてるけえ？

おしや　（鼻であしらつて）あゝ、記えてるだ。……成る程オみんなが常不斷言つてた事ア大譃嘘たつたか知んねえけんど、それでも俺アその水ン中に映つたもの見て、たつた一つ嬉しいと思つたことあるだ。

とおのが頭髪へ手をやる。又さそれには氣が附かないで、皮肉に笑ひながら

又さ　みんなして俺を狂人扱ひにしたゞけんど、おらアまさか汝ほどでねえだ。……おしやッ子、汝ア實にイ目ッ

本中に、又とはねえ面アしてるだによ。

おしや　面アどうだつても才、此長い澤山ある頭髪だ、今に年イ取つて、雪のやうに眞ッ白けになつたと思はつせい、どねえに立派だんべい。關東きつて又と俺のやうな立派な婆アさまはなかつぺいだに！

　又さ大きに度膽をぬかれて、覺えず讃歎する。

又さ　なるほどねア！

おしや　（勝ち誇つて）　きれいな白髪ッちふものは素晴らしいもんだに。先のお代官さまの、あの御母堂さまの頭髪、村中の者が賞めたでねえけえ？

又さ　（おのが頭をなでゝ見て）　おらの頭眞ッ白けになるべいかな？

おしや　（ひどく侮蔑んだ口吻で）　爾の頭？　今にイ其凸凹が禿ちよろけになるだと、末生の蕃南瓜そつくらになるだ。

又さ　（落膽して）　ひでいことをいはア！……（歎息して）　おれ情けなく思ふだ、せめて爾とおんなじに、なにか少とべいでも心さ慰めるものあるだと、かうしてゝも生き甲斐があるだけんど！　汝ア眞ッ白けな綺麗な婆アさまになつてるだに、おれ見すぼらしい禿ちよろ頭になるだア思ふと情けなくてなんねえだ。

おしや　爾の面思ひ出すと、おら厭な氣持になるだ。眼玉アぎよろ〳〵してるだし、齒ア亂杭齒だし、面の色ア澁紙色だし、四角ばつてる其顋てばアまるで……

　疊みかけられて、又さ情けなげに我れ知らず頭へ手をやつたが、忽ち嬉しげに聲を張上げて

又さ　汝イ忘れてるものが一つあるだ。

おしや　（鼻で笑つて）　そのどた〳〵した歩きッぷりけえ？　其豚々した尻ッこぶらけえ？　そのしほさい河豚のやうな肥滿腹けえ？

又さ　さうでねえ。（頭をなでながら）　此髯エ延すだ。あの活き佛のがやうな、綺麗な、長い、眞ッ白けな、關東では又とア見られねえやうな髯延すだ。あゝ！　白い髯の爺さまア立派なもんだに！　旦那衆だつて、立ち停つて、活き佛さまがの見るやうにして、おらが顏さ見とれるだんべい。汝幾らえばつたつて、逆さに這ひ廻つたつて、髯エ生えねえだ。

おしや　（少し考へて愉快さうに笑つて）　なるほどねア！　そんだらまだ樂みあるだね？　二人とも立派になれるだ、もう一度べい盛りの時があるだ。

又さ　あゝ、まだ一盛りあるだ。……

　此中、下手にて鐸の音する。

おや！　あれ何の音だか？
おしや　寺ン中でねえだから、あれきッと活き佛さまが鳴らしてるだ。
又さ　活き佛にやア虚々しただ。こッちへ、來さうけえ？　逃げべい。
おしや　どッちさ逃げるだね？
又さ　こゝの裏藪さ拔けて、岡ッ縁のあの狹え路傳つて行ぎやア大丈夫目附かりッこはねえだが、生中ちつとの間目エあいてゐただから、方角がつかなくなつたゞ。
おしや　つかねえこともあんめえ。右端は此處の塀跨ぐだ。あんでも此邊が穴だんべい。
杖てあちこちをつく。
又さ　（おしや子の手を取りて、）こッちさ來う。あんでも此邊だ。おや！　何か入つてるだ。
おしや　跨げねえけりや潛つたらどうけえ？
又さ　（潛らうとして、）あ、痛い！
おしや　どうしたゞ？
又さ　あゝ痛い！　荊棘が入つてるだ。
鐸の音近づく。二人はうろたへる。
おしや　あれ！　もう來たゞよ！　どうしべい！
又さ　どうしていゝだか、おらにも分んねえだ！　あゝ！

おしや　（古むしろを探りあてゝ、）あゝ、好物があつたゞ！　これさ冠つてりや、夜だから目附かりやアしめえ。
二人して、雜草の蔭にしやがんで、古むしろを引張つて冠る。頭だけかくれて腰より下は左右へはみ出してゐる。
楠屋の左古松明を持ち先に立つ。飛雲上人、けふは正式に法衣を被、金襴の袈裟を掛け、片手には鐸、片手には錫杖を持つてゐる。小鹽ッ子例の法子を携へて直後につゞく。鍛冶屋の忠（忠も松明を持つてゐる）余屋の彌太をはじめ村の者大勢つゞく。女は小鹽ッ子の外にはゐない。門前へ近づくと左古上人に向ひて
左古　やッぱし此邊を、今でものたくりありいてゐますだ、へア。どうかもう一度べい、お慈悲ィ垂れて、治してやつてくれさつしやりまし。
上人　よろしい。治いてやりませう。併しけふは急いで、早うせにやならんぞよ。どこにをる？
忠さん　（松明であちこちを照らして見て、ふとおしやこの殘していつた草鞋を見附け）あすこに作りかけの草鞋あるだから、つい此近所にゐるだんべい。
左古松明であちこちを見る。
小鹽　（塀のくづれに指さし）忠さん、あれ見さい！
一同又さを見附ける。

忠さん　あれ！　あねえた處、寢臥つてるだ！（大聲にて）これイ！　つんで來う！　汝イすッでの事に、寢つてて大事の幸福さ突逃すとこだつたよ、又さ！

彌太　あれ！　二人ともゐるだ！

又さ、おしやこ、しぶ〳〵立上る。

又さ　あんだつて、だしぬけに大い聲して、おらッちの膽オつぶさせるだね？

左吉　爾ら幸福たによ、活き佛さまが思ひがけなく戻つてござらつしやつた序でに、目エもう一度治してやるべい言はつしやるだ。早く來て禮いふだ。

又さこれを聞くと、急ぎおしやこの手を取り逃げ出さうとして躓き、倒れる。

彌太　奴見當がつかねえだ。

忠さん　こつちだ〳〵！

彌太　こつちだてば！

大勢立掛りて二人を捕へ、上人の前へ引ッ張つて來る。二人は泣き面になつてゐる。

上人　何も怖がるには當らん。佛は大慈悲ぢや。

又さ　怖かつちやアをりましねえ。

此以前上人小盥ッ子から注子を受取る。

上人　靈泉の奇特も、唯一遍だけでは達かんこともある。幸ひまだ此注子に殘つて居る。今度こそはよう見えるやうに加持してやる。そこへ直れ。そこへ。……

又さ聞きもあへずおしやこを促して去らうとする。

こりや。それへ直れといふに。けふは急ぐで、本堂へは行かん。こゝでよいのぢや。

又さ、おしやこ、うろ〳〵と二三歩門の方へ行きかける。忠は腹を立ち二人を引戻し

忠さん　馬鹿！　こゝでいゝと言はつせるだ。活き佛さまの聲聞えねえだか？　耳までつぶれたゞか、馬鹿！

上人　下にをれ！　下に。

又さ（困つて）ぶッちやッといてくれッさい！　目エあきたかありましねえ。

上人　何も怖がるには當らん。難行をさするでもなし、斷食をさするでもない。只そこへ膝を突けばよいのぢや。

又さ　わしら目エあきたかありましねえだ。ぶッちやッといてくれッさいまし。お前さまアお前さまの勝手に、お祈禱だり斷食だり、何だりとさッしやるが可いだが、わしらア如是にしてゐるはうが勝手だから、此方が好いだから目エあきたかありましねえ。

と身を縮めておど〳〵と隙あらば逃げ出さうとしてゐる。

上人（皆々を見返りて）氣が狂うたのかな？　物を見る

目が欲しうないといふ。(獨語のやうに) 限りない天地の不思議を見たいとも思はんか？

又さ　不思議なものツて、たかゞ知れてるだ。もう澤山見ツちまツたゞ。

上人　いや〳〵、おのしらの謂ふ不思議は不思議ではない。一たび活きた眼を開いて見い、人間はもとより禽獸、草木、有情、非情、天地間一切のもの、物として如來の靈相と拜まれんものはないのぢや。又それを拜むのを有り難いと思はんものもないのぢや。……

又さ　(聲を張上げて、)ありがていかねえあれが！　あねえなのが如來さまの靈相かね？　俺が目エあいた時、最初に目エ入つて今だに忘れられねえのはお前さまの足だ、赤ぎれだらけの。あれが如來さまの靈相かね？　昨日二度目眼エ眩む前に見て、今だに忘れられねえのは、そこいらに居る薄情阿魔の慳貪眼だ、鍛冶屋の嬶になる阿魔ッちよの。あれが如來さまの靈相かね？　北ッ風がぴゆう〳〵吹いて、爐ッ傍に搔ッつくばッてゐてせえ堪んねえ師走の日に、野良さ出て、足の甲霜ッ柱にうづめて、あくせく稼いでる人や馬ア見ると、不便で不便で見られたもんでねえ。あれが如來さまの靈相かね？

上人　おのしは、まだ漸と、淋しい冬ばかりを見たのぢや、温かな若々した春や勇ましい活々した夏を見たことがないのぢや。今に天地の間に春や夏が來ると、目に見る限りのものが蘇つて、さながら淨土の面影も見えれば、有爲生滅の道理も悟られるぢや。

又さ　そんだから俺、目エあると不自由たちふだ。目エ見えねえだつた時分にア、春も冬もなかつたゞ。陽せえ光くなつてりやア、さうして穴ン中かなんけへ潜り込んで寒風にせえ當らねえやうにしてりやア、どれえな雪の日だつて春や夏と違く變つたこともなかつたゞ。そればかりでねえ、心ン中で勝手に種々な面白い事思ふこと出來たゞ、夢うつゝで天へ昇つたこともあつたゞ。

上人　(もてあまして) このやうな愚か者には何をいうても埓があかんわい。……緣無き衆生ぢや。

小鹽　あいつは甚い懶情者でござりまして、仕事爲るが厭だから、あねえた事吐くでござります。此間貴師さまが御法驗さつしやりました前までは、目エあきてえ〳〵いつてをりましただ。

又さ　あの時ア目エあきてえ思つたゞが、もう十分見ッちまつたゞ、おらの嬶の面も、爾の面も、男オ玩弄物に爲る時に、爾等が變妙來な目附き爲るのも、俺十分見ッちまつたゞ。

小鹽　お上人さまア、あねえな奴ぶッちやッとかッしやりませ。わしにもわしの所天になる人にも、あいつ悪口雜言吐くでござります。あねえな腹黒な奴ア目眼も眞ッ暗な方が似合ひますだ。

忠さん　お上人さま、女の方べい治してやつて下せいまし。これ素直な女で、惡態なんか吐きましねえ、夫婦いさかひ爲る時や、娘子にこれくらかされて腹立れた時たけア別たけんど。

上人　（おしやこに）そこへ直れ。すぐに治いてやる。

又さ　（とめて）それ不可ましねえ。そいつ目ヱあくと、おれの顏さ見るたんびに、毎日々々惡態吐くべいだから。

上人　當人が望むならば、おのしが止めるわけはない。（おしやこに）そこへ膝を突け。

おしや　（躊躇して）今のまゝにしといて下せえまし。五文十文づゝ貰つて、何にもしねえで、盲で、暢氣に暮してるはうが、わしら幸福だんべいから。

小鹽　馬鹿いふでねえよ、おしやッ子さ。膝突いて治して貰ひねえよ。又さにやア此處さ出ッ張らせて、勝手に五文十文貰はせるが可いだ。

忠さん　さうだよ。剛情べい張つて、無理から盲になつてるやうだと、將來だアれも最早鐚一文くれめえだよ、わづらつておッ死ぬかつて、茣蓙一枚だつてくれめえだよ。

左古　汝目ヱあけば、又さの手ヱ引くことも出來るだ。着る物綴くること　出來るだ。

彌太　他の娘子の傍さ寄らさねえやうに爲ることも出來るだ。

おしや　（漸く合點して）成る程ォ、それもさうだねア。

皆々　膝突くだ！　早う膝ア突けてんば！　活き佛さまのお言葉だに！

　おしやこ又さの方を不安げに見返つたが、やがて上人に向ひ

おしや　みんなの言はッせるが道理だんべいから、お上人さまア、どうぞ治して下せえまし。

　膝まづく。又さ探りよりておしやこを引き退けようとする。上人制して

上人　こりや／＼！　そつちへ退いてをれ。おのしには用はない。

又さ　餘計な事さ爲てくれッさるな。こいつ目ヱあくだと、おれ如何に苦むか分んねえだ。おいら二人の事ア世介して貰ひますめえ。お前さまにアわしらの心さ分んねえだ。ぶッちやッといてくれつさい。わしらアかうしてこゝにゐるはうが可いだ。

　人々激昂する。上人制して

上人　眼もなければ正氣もない者のいふことぢや。取り上げるには及ばん。（注子を取直して）そつちへ退いてゐい。女だけ治いてやる。……

又さ急に又進んでおしやこの袖を掴み、引立てようとする。上人は左吉らを見返り

袖を離させい。

左吉、忠ら立ちかゝりて二人を引き分け、左吉は又さを下手へ引き立てようとする。

又さ（悲しげに）おれ此處においてくれつさい！　もう邪魔アしねえだから！　娘治してくれさつしても可いだから！

上人（左吉に）手を離せ。すてゝおけ。

左吉が手荒く又さを突き放す。又さ地上にへ、たばりながら

又さ　もう邪魔アしねえだから、こゝにおいてくれッさいまし！（上人の方へゐざりよりて）おれ一人盲でゐるだと、これから娘、毎日のやうに嘘べい吐いて、きつとおれ欺すだから、どうぞ俺も一緒に治してやつてくれつせえまし。お冥加でおざります！　お慈悲でおざります！

と言ひ／＼おしやこよりも前へ出て膝まづき、頻りに耳を立てゝ聞き澄ましてゐる。

忠さん　勝手べい吐かすだ！

彌太　もう不可ねえだ。退くだ。

彌太進み寄りて又さの襟上を掴み、引き立てようとする。上人制して

上人　すてゝおけ！　すてゝおけ！　過ちを悔れば轉た微薄なりとあるわい。後悔さへすれば治いてやる。……あゝ！　宿世の業因深うして、目に黒白をさへも能う見分けん不便なともがら！（徐かに印を結びて）曩莫、三滿哆、沒駄南、勃嚕唵！

注子を取りて、先づ又さの頭上に注がうとする。又さ急に頭を擧げて、上人の手から注子を叩き落す。と注子はころ／＼と轉げて、靈水は流れ出してしまふ。又さ立ち上る。皆々驚き、立ち騒ぐ。されど餘りの意外にしばらくは只わや／＼言ふばかりである。

又さ　業因だらが深くつて、目にア黒白さ見分けられねえか知んねえが、耳さ此郡内で一といつて二とは下んねえだから、どの手で爾が注子イ持つてるだか、どの位ゐ入つてるだか、大概見當が附いてゐたゞから、叩き飛ばしてくれたゞ。お上人さまア、爾ア活き佛さまだちふが、盲人にアまた盲人で、爾の思ひつかねえやうな料簡があるだ。爾アあんまり長いこと山さ入つて、座禪べい組んでござつたゞから、達摩さまだらのやうに、頭べい巨大

くなつて、足元は甚く危なもんだ。……

これより先き上人は險しい目で爾と又さを睨んだが、やがて目を轉じて轉げてゐる酒子の方へ歩み寄り、徐かにそれを拾ひ上げて、やがて小鹽ッ子に渡す。又さお酒子の手を取りて引ッ立てながら

けんど、お前さまア、やッぱし其足で、いつまでも山へ登るだ、又登るが可いだ。お籠りして、齋食して、胡摩だら焚いてお加持爲るのが、お前さま達にア好きなこんでもあれア好いこんでもあるとおんなじに、これえな人達（と忠へ思入）にア朝げから晩げまで、とんてんかんとんてんかんとやりつゞけて、寒中にせえ汗みづく垂らしてるのが、好きなこんでもありア好いこんでもあるだ。それとおんなじに、おいらに取つちやア目エくんねぶつて、路傍に寢飯つて、春先きの柔い葉へ柔い風の當るのやお太陽さまの出さつしやるのを、毎朝毎朝樂みにして暮してるのも好い事だ、空の色や世間の人の面附や活き佛さまの事なんかにやア構はねえでね。

おしやッ子の手を引いて、徐かに例の捨て石の方へ探り行く。皆々呆れて茫然としてゐる。

上人　（無言にて、二三歩上手へ行きかけて立停り、又さを見返りて）愛纒結心闇、貪嫉背知明、雖蒙慧炬照、愚昧猶自盲、所寶常不覺、慧種未開萠。

と言ひ了つて飄然として去る。皆々目にそれを見てゐながら、茫然として止めようともしない。やがて夢の覺めたやうに俄かにわめき出す。

忠さん　あ、お上人さま行つてしまつたゞ！

彌太　あれ！　おらまだお加持して貰ひていと思つてゐただに！

左古　きつと腹ア立つて行つてしまはしやつたゞ。此罰が村ぢうに當るかも知れねえぞウ。

忠さん　こまつたことになつたゞ。（彌太に）爾早くぼッかてけつて、お詫びしてくんろ。

彌太　あゝ、さうしべい。とんでもねえことになつたゞ。

小鹽　早い足だ！　お上人さま、もう見えなくなッちまッたゞよ！

彌太急いで上手へ入る。

左古　（憤激して）つまり、あの野郎のせゐだ。罰當りが！

多勢　さうだ。罰當りだ！

「罰當りだ！」、「はたき出せ！」、「出てうせい！」など口々にわめき、小石など拾ひて又さお酒子の方へ抛げるものもある。又さも喧嘩腰になりて杖を構へて

又さ　がなるなエ！　ゐろッたつて如是な處にアもう半日だつてゐねえだ。おいら二人アこれから山ア越して、南

の莊内へ往ぐだ、あすこにア柔しい醫爲る人澤山ゐるだから。（おしや子の手を取りて上手へ二三歩進みながら）さ、南さ往ぐべい、つひぞ見たことの無え處へ往ぐべい、どういふ面アしてゐだか、本當の事いつてゐだか、どうだか、まるッきし分んねえやうな處へ往ぐべい。

おしや　（力無げに）なるほど、さう爲る方がよかんべい。……だけんど、莊内さ往ぐ道は、長い／＼道で、右ッ手にも左ッ手にも、深い沼だらがあつて、それに後ろッからア北ッ風が、人でも馬でも吹き飛ばすやうに吹き附けるつてねア！

　話し／＼介抱しあつて二人は上手へ入る。

忠さん　深い沼もあれア石イ傳つて渉る瀨の早い山ッ河も深山あるだ。あゝ盲ぢやア危なもんだ。可哀さうに！

左古　（歎息して）自業自得だねア！

　皆々上手を見送る。

――幕――

解說

伊達豐

「新曲浦島」

明治三十七年十一月八日初版。

同三十八年二月二十八日、訂正三版。早稻田大學出版部發行。四六判、自序二、(訂正版序三)。本文一五四。

此年、『新樂劇論』の一篇を公けにされた博士は、將來のわが舞踊の根本的刷新を翹望して止まなかつた。そして、「何事も空論は無駄、論より證據、出來ない相談を世間へ仕掛けたとて聽く人もない道理」といふ考へから、謂はゞ下圖、下案を示さうといふ氣持で、その大要を一箇の實例に體現して論旨を補はうとせられたのが、此「新曲浦島」なのである。だから博士自身も、「國劇改良意見のほんの試み、ほんの瀨ぶみ、ほんの添へ物に過ぎない」と言はれてゐます。舞踊を本位に立てゝ、俗曲を髓腦とされた作です。

その上演記錄は――

明治四十一年十一月　東京　本鄉座　金僊・米齋夫人

文藝協會第二回の演なり。序の幕第一段のみ。

大正三年二月　東京　帝國劇場　菊五郎・芙雀ら

「新曲赫映姬」

狂言座第一回の演なり。中幕のみ。

明治三十八年十一月四日、早稻田大學出版部發行。四六判。序一、本文一〇〇。

博士が所謂「新樂劇の第二の圖案」として試みられたのが、此「新曲赫映姬」である。その序にも言はれてゐる通り、『新樂劇論』以外に出でて試摸し、その不備を補はん」とされたものです。

前著『新曲浦島』が主として振事を地盤として作られてゐる舞踊本位のものであるのに反して、これは能舞的要素を主として移植された作である。從つて「新曲浦島」が浮世繪の手法に倣はれたものであつたのに對して、此「新曲赫映姬」は、狩野派の筆意に依つた作だとも言へるのである。博士としては、「浦島」より會心の作であるらしいが、何分謠曲式、能舞式を俗曲と調和させてといふ註文がむつかしいので、敢て試みようとする者もなく、今日まで曾て上演されたことがない。もつとも或る一二節だけは、一は池内信嘉翁が節附けし、一は某氏が物して、文藝協會の發會の際に謠はれたことがあるさうだ。勿論振はなしであつたといふ。

「鉢かづき姫」
「俄仙人」
明治四十年四月十日、彩雲閣より『鉢かづき姫附俄仙人』と題して發行。菊判。本文四四、附錄一一。
　わが將來の舞踊劇に對する理想と抱負との見本を「新曲浦島」と「新曲赫映姫」の二曲に示された博士は、時機尙ほ早く、到底それらの作意を其儘當時の劇壇に實現することの不可能であることに氣附かれ、止むなく我が舞踊宗の大乘を捨て、やゝ妥協的な態度を取り、ともかくも直ちに實演されさうなものをと志して書かれたものが、「鉢かづき姫」及び「俄仙人」の二曲である。
　が、是等小乘式の、どちらかと言へば大讓歩されて書かれたものでさへも、尙ほ實際には博士の所期通りには現實されなかつたといふことである。
　その上演記錄は――
鉢かづき姫
明治四十一年十一月　京都　祇園歌舞練場　三上政葉・中島つゆ等
　作曲　不　詳。振附　片山春子
明治四十四年九月　東京　文藝協會試演場　坪内くに子・松井須磨子ら
　作曲　吉住小三郎・杵屋六四郎。振附　藤間勘右衞門。
大正三年二月　東京　帝國劇場　福助・龜藏ら
　羽衣會第一回公演なり。作曲、振附共に不詳。
大正十四年十月　大阪　新町演舞場　雀會々員出演
　舞臺監督　坪内士行氏。曲は文藝協會のまゝ、振も大體そのまゝ。
　尙ほ明治四十年に著者邸內にて試演されたことがある。作曲、振附共に文藝協會試演場開きの時のものと同じであつたといふ。
俄仙人
明治四十三年四月　名古屋　大博覽會　西川花子・西川小染ら
　作曲　岸澤仲助。振附　西川石松。
同　四十四年三月　東京　明治座　小團次・文五郎ら
　作曲　岸澤仲助。振附　不　詳
大正十三年十二月　同　市村座　西川花子・西川小染ら
　作曲　岸澤仲助。振附　西川石松
　尙ほこの外西川石松は、名古屋又は大阪にて上演したことがある。

「金毛狐」
「一休禪師」
「お夏狂亂」
「初　夢」
「小袖物狂」

明治四十一年十月十一日、春陽堂發行『金毛狐』中に收錄。菊判。自序二、本文一五九。

共に博士の「過渡期に於ける我が舞踊劇の當用に供せん」として作られたものです。その序にもある通り、「すなはちその固有の形式の採るべきものは、及ぶだけ之れを取り入れて型の保存に資し、その構想、修辭に伴へる諸弱點は、能ふ限り之れを除きて、將來の發展に便せん」と望まれたものである。內「金毛狐」と「初夢」には、西洋樂を內容に伴はせて用ひられてあります。

その上演記錄は——

金毛狐

明治四十四年十一月　東京 帝國劇場　梅幸・幸四郎ら
　作曲　帝國劇場附長唄連中、常磐津連中。振附　藤間勘右衞門。

一休禪師

大正六年二月　大阪 南演舞場　西川嘉義・同嘉幸ら
　作曲　文藝協會用のまゝ。振附　西川嘉義。
同　十年三月　東京 明治座　菊鶴・松蔦ら
　作曲　杵屋佐吉。振附　藤間勘翁
同　十一、二年頃　同 鐵道協會　坪內士行・水谷八重子ら
　作曲、振附共に不詳。

尙ほ大正五、六年の頃、大阪某紳商邸に於て、嘉義が一休禪師にて私演したことがある。

お夏狂亂

大正三年九月　東京 帝國劇場　梅幸・幸四郎ら
同　五年五月　大阪 浪花座　梅幸・壽美藏ら
同　十年十月　東京 帝國劇場　梅幸・幸四郎ら
同　十一年十二月　京都 南座　梅幸・幸四郎ら
同　十三年九月　東京 邦樂座　福助・三津五郎ら
同　十四年十月　同 帝國劇場　梅幸・幸四郎ら
同　十五年二月　同 松竹座　松蔦・小太夫ら
昭和三年三月　同 明治座　松蔦・高助ら

曲は初め博士主宰の文藝協會用のものとして、先代常磐津文字兵衞、振は藤間勘翁の作るところ、公演はしなかつ

たが數ゝ修正して稽古を重ね、大正三年に梅幸に移し、梅幸更に工夫を加へて現在の振としたのである。

初　夢

明治四十二年一月　東京有樂座　勘彌・三津五郎ら

　　作曲　岸澤仲助。振附　藤間勘右衛門。

小袖物狂

上演なし。

「寒山拾得」
「お七吉三」
「歌麿と北齋」

大正四年四月二十日、金港堂書籍株式會社發行『墮天女』中に收錄。四六判。本文一八八。

「舞踊は須からく舞踊の本領を發揮すべし」、「能や狂言の趣致を利用するはよし、題目、材料、組織等は全然別途に求むべきなり」と、以上の主張を明らかにする便宜として博士はこゝに一種の新舞踊劇を創始された。それは即ち「名畫の筆意にもとづく舞踊劇」と註された作品である。

　在來も「鳥羽繪」とか「土佐繪」とか題するもの、又一般に「畫ぬけ」と稱した振事はあつたが、それらは、たゞ畫面を踊に取り入れたといふに過ぎなかつたが、博士の企圖せられた是等新舞踊は、立方のきまり〳〵の位置、姿勢、態度、表情等をも能ふ限り名畫の筆意に擬して演ぜしめようとされたものであつた。從つて背景、服裝及び顏面、四肢の表情、舞臺全體の裝置等まで、すべて特殊の用意を要用としたものである。但し、その實演は到底その理想通りにはなつてゐないらしい。

「寒山拾得」は雪舟又は元信の筆意に依り、「お七吉三」は師宣又は祐信のそれに依り、「歌麿と北齋」は歌麿と北齋のそれに依つたものである。

　その上演記錄は――

寒山拾得

明治四十四年九月　東京文藝協會試演場　坪内大造・藤間いせ子

　　作曲　吉住小三郎・杵屋六四郎。振附　藤間勘右衛門。

明治四十四年十一月　東京帝國劇場　坪内大造・藤間いせ子

　　作曲及び振附　同　前

お七吉三

明治四十四年九月　東京　文藝協會試演場　坪内くに子・吉田幸三郎

作曲　吉住小三郎・杵屋六四郎。振附　藤間勘右衞門。

同　年十一月　同　帝國劇場　坪内くに子・上田洋一（吉田幸三郎假名）

作曲及び振附　同　前。

大正十三年五月　同　本郷座　福助・時藏ら

作曲　杵屋榮藏その他。振附　花柳壽輔。

歌麿と北齋

明治四十五年六月　東京　文藝協會試演場　坪内くに子・坪内大造ら

作曲　先代常磐津文字兵衞。振附　藤間勘右衞門

「和歌の浦」

大正四年四月、金港堂書籍株式會社發行『墮天女』中に收錄。四六判。本文一八八。

わが舞踊劇の特質はいろ／＼あるが、博士は手踊派を特に捨てがたいものとして其新發展を期せられてゐた。此「和歌の浦」にも其用意が窺はれる。

抒情式の民謠や採り謠が多く取り入れられてある。又、池波式ともいふべきを漣波式とし、すべてを大まかに、折返しを盛んに試み、且つ内容に伴はせて西洋音樂を使用されてゐる。雌雄の鶴は日本固有の音樂舞踊の象徴であり、鶏の群は西洋の音樂、舞踊である。今までの上演者は、此寓意を十分理解して演じてゐたとは思はれない。

その上演記錄は――

大正十年五月　大阪　中　座　福助・坪内操ら

舞臺監督　坪内士行氏。作曲　不詳。振附　[illegible]扇性・同陸平

昭和二年三月　東京　歌舞伎座　福助・魁車ら

作曲　歌舞伎座附長唄連中、振附　花柳壽輔。

「墮天女」

大正四年四月二十日、金港堂書籍株式會社發行。四六判。本文一八八。（他に四種の舞踊劇脚本と、七篇の舞踊論とを含む。）

先きに『新曲浦島』を著し、『新曲赫映姫』に筆を取られた博士は、更に日本在來の舞踊を本位に立てゝ、外國音樂を利用し、外國歌劇の組織を學ばれつゝ日本特有の歌劇の創始を望まれた結果、その試みとして、先づ、三段曲の歌劇を立案された。

その材は、白鳥傳說中で最も劇的といへる「比治山の羽衣」に取られ、第一段を「墮天女」の巻、第二段を「狂伶人」の巻第三段を「昇天女」の巻とされた。が、殘念なことには、第一段のみにて中絶されたことである。しかし、彼の希臘劇が三段曲になつてゐながら、一曲々々で味ふことが出來るやうに、「墮天女」も、たゞこれだけでも立派な日本の特色を發揮すべき新式のオペラと言へる。今日まで未だその上演を見ないことは殘念なことだと思ふ。

「常闇」

明治三十九年十月五日、修文館發行。四六倍判。本文二八、曲譜三四。

同年十一月、東京歌舞伎座に於ける文藝協會第一回公演の際の出し物として、特に博士が執筆されたものである。作曲は故東儀鐵笛氏がその任に當り、曲成つて後、公私音樂學校の關係者たる專門諸家の協力を經て上演した。わが國では、その時以前には是程の大物が實演されたことは決してなかつた。出來榮はともかくも、わが國に於ける最初の創作的グランド・オペラであつたといふ點に記念すべき特質のある作品である。

尚ほ博士は、此篇を上の幕とし、後日、下の幕として「豐榮昇り」と題すべき天の岩戸開きの一場を書き續けられる積りであつたが、不幸にも此「常闇」が不成功に終つたために、その作興は頓挫し、そのまゝ中絶するの止むなきに至つたとのことである。

その上演記錄は――

明治三十九年十一月　東京歌舞伎座　大崖・南嶺ら
作曲及び舞臺監督　故東儀鐵笛氏
文藝協會第一回公演である。

「聖德太子と惡魔」

大正十年十一月十五日、國本社發行『わがページェント劇』中に收錄。四六判。

博士がページェント（公共劇）――即ち、民衆のための民衆自身の劇――の創始と興隆とを望まれて、その試作として筆を執られたものゝ中の一つが、此「聖德太子と惡魔」である。

當時博士の主唱に依つて、早稻田大學内に文化事業研究會といふのが發會された。同會は其後、關西地方宣傳を企てたことがある。その際博士は、一つにはその宣傳を兼ね一つには、ちやうど當年が太子の一千年記念だといふので特に筆を執られたものである。

その形式は屋内式の、同時に都會向きの、大規模の、歌

舞劇式のページェントである。で、その構想といひ、修辭といひ、技といひ、規模といひ、頗る注意すべき一力作であると信ずるのだが、今にその上演を見ないことは遺憾である。

「桐一葉」(實演用)

大正六年六月十八日、春陽堂發行。四六判。自序一五、本文二一四。

同年四月、東京帝國劇場に於て「桐一葉」上演の際、博士自ら筆を執つて、讀み本體であつた「桐一葉」を、實演に適するやうにと改修されたもの。從つて同年以後の上演はすべて此臺帳に據つてゐる。

原作――讀み本體の「桐一葉」――は、正史本位、有職故實本位の活歷主義に反動して書かれたものであるから、わざと丸本や草双紙の要素を利用しようと力められた跡がある。

この實演用臺帳では、それらの要素を大分刈り棄てられ、其他諸人物の言動を自然に近づけ、長ゼリフは縮められたその代り、讀み物としては味ひが淡くなつて、遺憾な點もある。

博士が讀み本體の「桐一葉」に筆を染められたのは、明治二十七年十一月で、翌年九月まで『早稻田文學』紙上へ連載されたものである。後、明治二十九年二月六日、春陽堂から單行本として出版せられた。菊判で、自序四、本文二四〇。附錄、「正史上の片桐且元」(著者自評)二四、別に諸家の批評一七。

參考までに、讀み本體の「桐一葉」の上演記錄をも併記しておく。――

明治三十七年三月	東京	東京座	芝翫(後の歌右衞門)・我當(後の仁左衞門)ら
同　年五月	大阪	角座	同前。
同　三十八年十二月	京都	南座	同前。
同　三十九年六月	廣島	壽座	故壬七・我當(後の仁左衞門)ら
同　年十一月	東京	歌舞伎座	故春曙・薇陽ら（文藝協會第一回演藝部大會。且元邸、長局塲の二塲のみ上演。）
同　四十年九月	名古屋	千歳座	故仁左衞門・仁左衞門ら
同　四十三年十月	東京	歌舞伎座	芝翫(後の歌右衞門)・我當(後の仁左衞門)ら
大正六年四月	東京	帝國劇場	梅幸・幸四郎ら
同　八年十月	同	歌舞伎座	歌右衞門・仁左衞

門ら
蜻蛉、銀之丞の件を省く。

同　十年四月　同　明治座　福助・猿之助ら
蜻蛉、銀之丞の件のみ二幕三場に演ず。

同　年十二月　大阪　浪花座　最笑・多見藏ら
蜻蛉、銀之丞の件を省く。

同　十三年十月　東京　本郷座　歌右衛門・仁左衛門ら
吉野山、畜生塚及び蜻蛉、銀之丞の件を省く。

同　十五年六月　大阪　中座　歌右衛門・仁左衛門ら
蜻蛉、銀之丞の件を省く。

昭和二年十月　東京　歌舞伎座　歌右衛門・仁左衛門ら

「沓手鳥孤城落月」

明治三十一年一月一日、春陽堂發行『菊と桐』中に收錄。菊判。

此作は、明治三十年の頃脱稿されたもので、單行本として、「二葉楠」といふ小品と共に發行されたものである。後此作の第一版は久しく絶版になつてゐたが、大正五年十月、東京歌舞伎座で上演後、同書肆から小形改修本として出版されてゐる。

「桐一葉」の後段たる大阪落城の悲劇で、且元の苦衷が前著に比して一層如實に活寫されてゐる悲壯劇である。

此改修本には、以前一度は若干の添削を施され、茶臼山の場、糒庫の場、共に序幕同樣に七五、八六式に綴つてあつたのを、成るべく散文風に書き直されたが、今度序幕との調和上、妙でない部分も生じたとかで、又逆戻りされた箇所もあります。その他、大道具、人物の出入、その位置、その科介、その表情に關する點を、成るべく詳細に記入された。

此作は、「桐一葉」と共に今日尙ほ屢々その上演を見る名脚本で、歌右衛門は此作を上演するに及んで前後空絶の淀君役者といふ名譽を博した。

その上演記錄は——

明治三十八年五月　大阪　角座　我當（後の仁左衛門）・我童ら

同　三十九年二月　東京　紅葉館　薇陽・春曙・鐵笛ら
文藝協會發會式餘興。糒庫の場のみを演ず。

同　三十九年三月　東京　東京座　芝翫（後の歌右衛門）・高麗藏（後の幸四郎）ら

同　四十三年九月　名古屋　御國座　薇陽・素影ら

稽古と楼門前の二場のみ上演。

大正二年十一月　東京　本郷座　歌右衛門・羽左衛門ら

同　五年十月　同　歌舞伎座　歌右衛門・梅幸ら

同　年十二月　同　有楽座　浪子・鐵笛ら

[illegible]泉殿と稽古の二場のみ上演。

同　六年二月　京都　南座　歌右衛門・羽左衛門ら

同　七年三月　横濱　横濱座　歌右衛門・幸四郎ら

稽古の場まで、三幕二場上演。

同　八年四月　東京　歌舞伎座　歌右衛門・羽左衛門ら

同　九年十一月　大阪　中座　歌右衛門・羽左衛門ら

同　十一年五月　東京　新富座　歌右衛門・羽左衛門ら

稽古の場まで二幕二場のみ上演。

同　年十二月　名古屋　末廣座　歌右衛門・羽左衛門ら

同　年同　月　横濱　横濱座　歌右衛門・羽左衛門ら

同　十二年二月　大阪　舞天座　三好榮子・山口俊雄ら

稽古と楼門前の二場のみ上演。

同　十三年二月　東京　明治座　歌右衛門・福助ら

[illegible]泉殿と稽古の二場のみ上演。

同　年四月　同　本郷座　勝太郎・中車・仁左衛門ら

淀君の件を省く。

同　十四年六月　東京　歌舞伎座　歌右衛門・羽左衛門ら

改作「牧の方」

大正六年七月十五日、春陽堂發行。小形本。自序十二、本文一六〇。

同年七月、東京歌舞伎座に於て再演の際、博士自ら短縮改訂されたものである。

原作――「牧の方」第一作――は、餘り長丁場で、迚も實演には適しかねるといふところから、根本の作意には何の變りもないが、（再演の際）序幕と大詰とは殆ど全部を書き改められた。

尚ほ此改作に當つて、政範の年齡を史實通り十六歳に引き直され、實朝は反對に史實よりも一歳多く、即ち十四歳

とされてゐる。

此作は以下解説すべき名作「名殘の星月夜」、「義時の最期」と共に、博士の鎌倉時代に關する三部史劇の第一部を成すべきものである。

大正六年以後の上演は、すべて此改訂本に據つてゐるが、參考までに、その上演記錄を第一作「牧の方」と併記しておく。

明治三十八年五月　東京　東京座　芝翫(後の歌右衛門)・高麗藏(後の幸四郎)ら

同　年七月　大阪　辨天座　芝翫(後の歌右衛門)・鴈治郎ら

大正六年七月　東京　歌舞伎座　歌右衛門・羽左衛門ら

同　十五年四月　同　同座　歌右衛門・羽左衛門ら

腰越旅館中門内の場以下を三幕として上演。

「名殘の星月夜」

大正七年一月一日、春陽堂發行。四六判、本文一六一、附錄一六。

早くも「牧の方」脱稿當時、此作の腹案があつたと言はれてゐます。が、博士に閑暇なく、尙ほ作意が十分には熟しかねたので、だん／＼と遷延されて來たといふことである。此作は、「尼公、實朝、公曉の悲劇と註されてある通り、實朝の渡唐企畫を骨子として、尼公、公曉を中心人物とせる悲劇である。博士の鎌倉時代に關する三部作史劇の第二部を成すもので博士としては、他の作よりも會心の作であるらしいが、その初演は成功でなかつた。

その上演記錄は――

大正九年五月　東京　歌舞伎座　歌右衛門・中車ら

「義時の最期」

大正七年七月二十一日、春陽堂發行。四六判。本文一八三、附錄三六。

「義時の最期」は、博士の鎌倉時代に關する三部作史劇の最終篇をなすものである。

博士が、最初史劇を書かうと思ひ立たれたのは、今からざつと三十何年かも前のことで、其頃は、仔細あつて、特に保元、平治から承久、貞應へかけての史的因緣果報の理に深い感興を覺えて、其時代の人物、事件を題材にして、三部又は五部續きの、所謂循環史劇(サイクリツク・ドラマ)を作つて見たいと思

はれてゐた時であつたといふから、そこで特に其終局として「義時の死」を選ばれたのだといふ。もとより、その時から、此作をなされる時までは、二十幾年といふ隨分長い間隙か挾まつたがため、博士の人生觀や藝術觀の推移するにつれて、同じ史實に對する見解も、作意（腹案）の枝葉（ディテール）も、著しく變改されざるを得なかつたけれども、義時の死を以つて公武――皇室對武家――闘爭史の一大段落としようといふ豫定案だけは動かなかつたと言はれてゐます。

尙ほ博士は義時の死は自然か、人爲か？といふ史實くらべの等閑に附しがたいことを感ぜられて、種々と取しらべられた後、局外者の、作者としての立場から、自由な、勝手な空想の翼を擴げられて、斯く「義時の最期」の一篇を成されたのである。

斯くして作り成された傑作「義時の最期」は、其後どうした理由でか、今に其上演を見ないことは遺憾である。

「役の行者」

大正六年五月五日初版、同十年九月二十日改訂再版、玄文社出版部發行。四六判。自序二、本文一五〇、附二一〇。

大正二年、文藝協會解散當時、博士は主として故東儀鐵笛、土肥春曙らに演ぜしめようとして案を立てゝ脱稿されたものに「行者と女魔」といふ一篇がある。その作は、印刷も既に校了に及んでゐたのであつたが、仔細あつて解版されたといふことである。が、後年更に多少の作意を改められて、一度は雜誌『新演藝』に發表され、後年單行本として公判されたものが即ち此『役の行者』である。博士が、「私には、他の作よりも、內生活には因緣が深い作意である」といはれてゐる通り、博士の心境には此上もない因緣の深いものであると同時に、又博士の諸作中での最傑作の一つであることを疑はない。

その上演記錄は――

大正十五年三月	東京	築地小劇場	青山杉作・汐見洋ら
同　年八月	東京	帝國劇場	青山杉作・汐見洋ら

築地小劇場の帝國劇場出張公演である。

昭和三年九月一日	寶塚	中劇場	森英治郎・古川利隆ら
同　年十二月	大阪	中央公會堂	森英治郎・古川利隆ら

寶塚國民座公演及び出張公演である。

同　四年五月	東京	大隈大講堂	森英治郎・古川利

隆ら

實業國民座東京初の演である。

尙は右のうち、寶塚國民座所演の「役の行者」は、其後此作を實演用として博士自ら改作せられた「行者と女魔」を斯く題して演じたものである。

「法　難」

大正九年三月三日、實業之日本社發行。四六判。自序二、本文一五七、附錄三七。

同年二月末、故東儀鐵笛氏が、最後の藝術運動として、新たに新文藝協會の名の下に一劇團を組織して、その旗上げを東京明治座に行ふといふ事が起つた。同氏に取つては謂はゞ背水の陣ともいふべきで、各方面からの同情と後援とは非常なものであつた。が、その出し物に就いては可成り行き惱んでゐたらしかつた。

で、それを聞かれた博士は、大變氣の毒がられて、殊に明治三十八年ら易風會以來の宿緣の深い同氏のことでもあるので見捨てもならず、特に餞別といふ意味で咄嗟の間に思ひ立つて書かれたのが、此「法難」である。故東儀氏は、「法難」上演中は、入道して素頭で演ぜられたものである。

その上演記錄は——

大正九年三月　東京　明治座　故東儀鐵笛・森英治郎ら

新文藝協會第一回公演である。

同　年五月　大阪　浪花座　故東儀鐵笛・森英治郎ら

同　十一年四月　東京　明治座　左團次・荒次郎ら

此時は「法論」と題して、蓮華寺門前と堂内の二場のみ上演。

同　年六月　大阪　辨天座　故東儀鐵笛・中田正造ら

此時には、蓮華寺門前、堂内、小松原の三幕四場のみ上演。

同　十三年四月　東京　大隈會館　古川利隆・瀧川義民ら

此時には、蓮華寺門前と堂内の二場のみ上演。

同　年五月　東京　邦樂座　古川利隆・瀧川義民ら

「大いに笑ふ淀君」

大正十一年二月稿。同十五年九月二十二日、春陽堂發行『逍遙選集』第一卷中に收錄。菊判。

かつて中村歌右衞門は、自ら淀君役者を以つて任じ、當代各名家に請うて淀君十種を成さうと企てたことがある。博士も其際、同優の懇請を容れて此作を書かれた。併し事

情あつて歌右衛門は、此作を上演するには到らなかつた。
　淀君といへば、誰れしも直ぐに悲劇的人物と解釋する。博士は此作に於ては、全々それら常套的の解釋を一掃せられて、別途の立場から立案されて書かれたものである。
　その上演記錄は――

大正十五年五月　寶塚中劇場　三好榮子・淸水淸ら
同　年十一月　大阪朝日會館　三好榮子・淸水淸ら

以上は寶塚國民座公演及び出張公演である。

（昭和四年五月三十一日記）

編輯校訂責任
吉田甲子太郎
淸水義政
佐藤十三郎

日本戲曲全集・第三十三卷
現代篇第一輯・第十四回配本

著作權者檢印

禁無斷上演

昭和四年六月一日印刷
昭和四年六月五日發行

（非賣品）

著作者 坪內逍遙
發行者 和田利彦
印刷者 島源四郎
製本者 高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目
發行所 春陽堂
電話日本橋 六四一 五一 三七八八
振替東京一六一七

東京市本鄉區眞砂町・日東印刷株式會社印刷



